—滋賀県住宅供給公社による横江住宅団地建設に伴う発掘調査報告書—

横江遺跡発掘調査報告書Ⅰ

1986. 3

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

—滋賀県住宅供給公社による横江住宅団地建設に伴う発掘調査報告書—

横江遺跡発掘調査報告書Ⅰ

1986. 3

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。そうした中で文化財の保存と活用を図る施策のうち、開発に伴う埋蔵文化財の保護も重要な課題となってあります。

先人の遺してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに横江団地造成工事に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役だてていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました、地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年３月

滋賀県教育委員会

教育長　飯田志農夫

例　　言

1．本報告書は、滋賀県守山市横江町横畑及び休身に所在する横江遺跡発掘調査報告書である。

2．本報告書は、滋賀県住宅供給公社による横江団地建設に伴う発掘調査報告書である。

3．本調査は、滋賀県住宅課からの委託により滋賀県教育委員会を調査主体とし財団法人文化財保護協会を調査機関として実施した。

4．発掘調査は昭和58年度より実施し昭和59年度に第Ⅰ期造成工事分（20,000㎡）を終了し第Ⅱ期造成工事分については昭和62年度に終了する予定で現在も継続中である。

5．整理調査は第Ⅰ期造成工事分について第1次として昭和61年度に実施した。

6．調査はすべて滋賀県教育委員会の指導のもと守山市教育委員会の協力を得て派遣された守山市教育委員会主事宮下睦夫と財団法人文化財保護協会埋蔵文化財課調査二係技師木戸雅寿が担当した。

7．本事業の事務局は次のとおりである。

昭和58年度

守山市教育委員会

教育長	津田　剛
教育次長	田中健一
社会教育課長	北村　嗣
文化財係長	中江寿昭
文化財担当	山崎秀二
嘱託職員	宮下睦夫

滋賀県教育委員会

技師	木戸雅寿

昭和59年度

教育委員会

文化財保護課長	市原　浩
課長補佐	松浦光彦
埋蔵文化財係長	丸山竜平
技師	大橋信弥
技師	木戸雅寿
管理係　主事	小谷　清

財団法人　滋賀県文化財保護協会

理事長	南　光雄
事務局長（総務課長兼務）	江波弥太郎
調査課長	林　博通
総務課主事	松本暢広
総務課嘱託	上田笑美子

昭和61年度

教育委員会

文化財保護課長	服部　正
課長補佐	田口宗一郎
埋蔵文化財係長	林　博通
主任技師	用田政晴
管理係主任主事	山本徳樹

財団法人　滋賀県文化財保護協会

理事長	南　光雄
事務局長	中島良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋
調査三係長	大橋信弥
技師	木戸雅寿
総務課長	山下　弘
総務課主任主事	松本暢弘

8．発掘調査及び整理調査にあたっては多くの方々や機関のご教示を賜った。記してここに感謝の意を表わしたい。（敬称略アイウエオ順）

近藤義郎（岡山大学）鈴木重治（同社大学）橋本久和（高槻市立埋蔵文化財センター）水野正好（奈良大学）宮本長二郎（国立奈良文化財研究所）森　隆（野州町教委）住宅供給公社　国立奈良文化財研究所　奈良大学考古学研究室　中世土器研究会

9．本書の執筆分担は次のとうりである。

木戸雅寿（第Ⅰ章、Ⅱ章、Ⅲ章、Ⅳ章第２、３、７、９調査区、Ⅴ章）

宮下睦夫（第Ⅳ章第１、４、５、６、８調査区）

10．遺物写真は寿福　滋氏の手を煩わせた。

11．出土遺物及び図面は滋賀県教育委員会で保管している。

目　　次

序文

例　　言

本　　文

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過 …… 1

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境 …… 2

第Ⅲ章 調査の方法 …… 6

第Ⅳ章 調査の結果 …… 8

第１節 第１調査区 …… 8

第２節 第２調査区 …… 51

第３節 第３調査区 …… 72

第４節 第４調査区 …… 101

第５節 第５調査区 …… 107

第６節 第６調査区 …… 147

第７節 第７調査区 …… 163

第８節 第８調査区 …… 184

第９節 第９調査区 …… 240

第10節 第10調査区 …… 321

第Ⅴ章 横江遺跡の今後のために …… 326

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　調査区設定図
第３図　遺構平面図
第４図　遺構平面図
第５図　ＳＫ－１、２遺物出土状況図
第６図　ＳＤ－２土器出土状況図・断面図
第７図　断面図
第８図　遺構平面図
第９図　ＳＫ－１出土遺物
第10図　ＳＫ－２出土遺物
第11図　ＳＫ－２出土滑石製品
第12図　ＳＫ－３、ＳＤ－２・９、ＳＥ－１柱穴出土遺物
第13図　遺構平面図
第14図　遺構平面図
第15図　遺構平面図
第16図　ＳＥ－１平面図・断面図
第17図　第１調査区平面図
第18図　ＳＥ－２出土遺物
第19図　ＳＥ－２出土遺物
第20図　その他の遺構出土遺物
第21図　ＳＫ－１遺物出土状況・平面図・断面図
第22図　ＳＫ－１③層出土遺物
第23図　ＳＫ－１最下層出土遺物
第24図　ＳＫ－３③層出土竪櫛・土製品
第25図　ＳＫ－１⑪層出土木・石製品
第26図　ＳＢ－１平面図・Ｐ－１断面図
第27図　ＳＢ－２、３平面図
第28図　ＳＢ－４、５平面図
第29図　ＳＫ－２平面図・断面図
第30図　遺構出土遺物
第31図　第２調査区平面図
第32図　古墳時代出土遺物
第33図　ＳＤ－２出土遺物その１
第34図　ＳＤ－２出土遺物その２
第35図　ＳＤ－２出土遺物その３
第36図　ＳＢ－１平面図
第37図　ＳＢ－２、３平面図
第38図　ＳＥ－１断面図
第39図　ＳＤ－４出土遺物
第40図　ＳＤ－５出土遺物
第41図　ＳＤ出土遺物
第42図　ＳＥ出土遺物
第43図　ＳＥ出土木製品
第44図　ＳＫ出土遺物
第45図　ＳＰ出土遺物
第46図　第３調査区平面図
第47図　第４調査区平面図
第48図　第４調査区遺構平面図・断面図
第49図　遺物実測図
第50図　第５調査区旧河道平面図
第51図　旧河道断面図
第52図　旧河道暗灰色粘質土出土土器
第53図　旧河道黒灰色粘質土出土土器
第54図　旧河道黒灰色粘質土出土土器

第55図　旧河道暗灰色粘砂出土土器
〜
第59図　旧河道暗灰色粘砂出土土器
第60図　旧河道暗灰色粘砂出土木製品
〜
第80図　旧河道暗灰色粘砂出土木製品
第81図　旧河道灰色砂出土土器
第82図　第６調査区遺構平面図
第83図　ＳＢ－１、Ｐ－１・２遺物出土状況図
第84図　ＳＥ－１平面図・断面図
第85図　遺構断面図
第86図　整地層礫群出土状況図
第87図　ＳＢ－１、ＳＥ－１、その他柱穴出土遺物
第88図　ＳＫ－１、ＳＫ－２、ＳＤ－１ＳＤ－２出土遺物
第89図　ＳＤ－１出土遺物
第90図　整地層出土遺物
第91図　整地層出土遺物
第92図　ＳＢ－１平面図
第93図　ＳＢ－２～４平面図
第94図　ＳＤ－１断面図
第95図　ＳＫ－１・２平面図・断面図
第96図　第７調査区平面図
第97図　ＳＤ－１②層出土遺物実測図
第98図　ＳＤ－１④層⑤層出土遺物実測図
第99図　ＳＤ－１出土遺物実測図
第100図　ＳＤ－１出土遺物実測図
第101図　ＳＤ－１出土遺物実測図
第102図　ＳＤ－１出土木製品実測図
第103図　ＳＤ、ＳＫ出土遺物実測図
第104図　出土鉄器実測図
第105図　ＳＰ出土遺物実測図
第106図　建物平面図
第107図　ＳＰ－３、ＳＥ－１、２、ＳＫ－遺物出土状況図
第108図　第８調査区遺構平面図
第109図　旧河道断面図、垣状遺構出土状況
第110図　ＳＫ－１出土遺物
第111図　ＳＫ－１出土遺物
第112図　ＳＥ・ＳＨ・ＳＰ出土遺物
第113図　旧河道黒色粘質土出土土器
第114図　旧河道黒色粘質土出土土器
第115図　旧河道黒色粘質土出土土器
第116図　旧河道暗褐色粘質土出土土器
第117図　旧河道出土木製品
第118図　旧河道灰色粘質土出土土器
第119図　旧河道灰色砂出土土器
第120図　旧河道灰色砂、暗灰色粘砂、暗灰色砂出土土器
第121図　旧河道出土土器
〜
第125図　旧河道出土土器
第126図　旧河道出土ガラス玉、ミニチュア土器、瓦
第127図　旧河道出土石製品
第128図　旧河道出土木製品
第129図　旧河道出土木製品

第130図　旧河道出土木製品
〜
第137図　旧河道出土木製品
第138図　建物平面図
第139図　ＳＰ—13、ＳＥ－５、ＳＥ－６
出土状況図
第140図　ＳＥ、ＳＤ、ＳＰ出土遺物
第141図　ＳＢ間取図１
第142図　ＳＢ間取図２
第143図　ＳＤ－１、４断面図
第144図　ＳＤ－４橋推定位置図
第145図　ＳＤ、ＳＫ断面図
第146図　ＳＥ－１、２平面・断面図
第147図　ＳＥ－７、８平面・断面図
第148図　ＳＥ－９、10平面・断面図
第149図　ＳＥ—11、12、13平面・断面図
第150図　第９調査区平面図
第151図　遺構面上出土須恵器
第152図　遺構面上出土中世遺物１
第153図　遺構面上出土中世遺物２
第154図　ＳＥ－２、８、10、11出土遺物
第155図　ＳＥ－７、９出土遺物
第156図　ＳＤ－１、３出土遺物
第157図　ＳＤ－４出土遺物１
〜
第176図　ＳＤ－４出土遺物20
第177図　ＳＤ－５、６、10、18、19、20
出土遺物
第178図　ＳＤ—16出土遺物
第179図　ＳＫ出土遺物
第180図　柱穴出土遺物１
第181図　柱穴出土遺物２
第182図　柱穴出土遺物３
第183図　掘立柱建物平面図
第184図　第10調査区平面図
第185図　第10調査区出土遺物
第186図　出土土器　編年案(1)
第187図　出土土器　編年案(2)
第188図　出土土器　編年案(3)

図　版　目　次

図版 一　第一・第二調査区
〜
図版 二　第一調査区
出土遺物
〜
図版十七　第二調査区
〜
図版二七　第三調査区
出土遺物
図版三六　第四調査区
〜
図版三八　第五調査区
出土遺物
〜
図版五三　第六・七調査区
図版五四　第六調査区
出土遺物
〜
図版六十　第七調査区
出土遺物
〜
図版六七　第八調査区
出土遺物
〜
図版九一　第九調査区
出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

本報告書は昭和58年度と昭和59年度に実施した、住宅供給公社による横江団地（弥生の里）に伴う、埋蔵文化財横江（よこえ）遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

昭和56年12月２日付け滋住供第 253号で守山市教育委員会宛てに住宅供給公社より埋蔵文化財確認調査依頼が提出された。地番は守山市横江町横畑 213番地外64筆で公簿面積は36491 ㎡である。市教育委員会社会教育課ではこの依頼を受けて協議の結果まず、遺跡の規模、性格を知り以後の協議の資料とするために同年12月24・25日の両日に県住宅供給公社の川崎氏、武藤氏の立ち合いのもと試掘調査を社会教育課主事山崎秀二が実施した。宅地造成計画地に26箇所の試掘トレンチをもうけて調査をおこなった結果、ほぼ対象地全域の箇所で溝や柱穴が検出され、当地には古墳時代と中世の大規模な集落跡が存在し、広範囲に遺構・遺物が散布していることが判った。この試掘結果をもって市教育ないで協議をした結果、本来であれば遺跡の現地形を変更することなく開発することが望ましいわけであるが、開発対象地が38000 ㎡という広大な面積に加えて住宅地建設という性格的な側面から現地形を保護した形で開発を行なうことが困難であるため記録保存による発掘調査が不可避の状態であると判断し、よって依頼者である県住宅供給公社には「全域に遺構があること、また造成工事までに発掘調査を実施し遺跡の保存に努められるよう」通知した。一方、この事業が県の団体で進められていることから昭和57年１月５日付け守教委社第４号、滋賀県教育委員会教育長宛てに「全域に遺構が広がること」「本件の調査等の事については県教育委員会で処理されるよう」報告した。この後、幾度かの協議を経て昭和57年度中に次の四点の合意を得た。1.全域の発掘調査の実施。　2.調査は市教育委員会と県教育委員会との二者で実施する。3.第１次の調査については守山市で契約し担当し実施する4.原則として４ケ年の期間が必要である。以上のことをうけて昭和58年３月23日に県公社、県文化財保護課、市教委の三者で最終的な協議を実施し昭和58年度から発掘調査を実施することが決定された。県住宅供給公社では昭和58年３月28日付けで埋蔵文化財発掘調査策定通知を提出され、市教育委員会ではこの通知に基づき同年４月９日付けで文化庁長官宛てに発掘調査通知を提出した。昭和58年４月４日付けで守山市長と県公社理事長名で発掘調査に係わる契約書を締結し現地調査を進めることにより守山市教育委員会では宮下

陸夫主事を担当に、県教育委員会では木戸雅寿技師を担当で開始された。

（山崎）

昭和58年度の調査はまず２期に分けられている工事区間のうちの１期工事分そのなかでも最も奥にあたる部分とそれに続く進入路にあたる10000 ㎡を対象におこなった。昭和59年度は調査主体を本来の姿である県教育委員会に戻し財団法人文化財保護協会に事務局をおき実施した。守山市教育委員会には引き続き嘱託職員の派遣によって協力を得た。調査は前年度に引き続き１期工事分の10000 ㎡について実施した。そして、残りの18000 ㎡については昭和61年度に発掘調査の予定である。

整理調査は昭和59年度末より昭和60年度中にかけての数回の協議の結果、県教育委員会の担当技師がかわった昭和59年度を契機に第１次調査と第２次調査とにわけ二分しておこなうこととして決まりその第１次として、昭和61年３月５日付け滋住供用第15号で滋賀県住宅供給公社より埋蔵文化財（横江遺跡）の整理調査業務についてという依頼があり滋賀県教育委員会が調査主体となり財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関とするかたちで再委託され実施された。守山市教育委員会としては過去の経緯から調査に関わった主事にたいして職員の派遣を要請し協力のもと共同で実施した。

第１次の横江遺跡発掘調査及び整理調査は昭和61年刊行の本報告書をもって事業は終了したことになる。

（木戸）

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡の位置

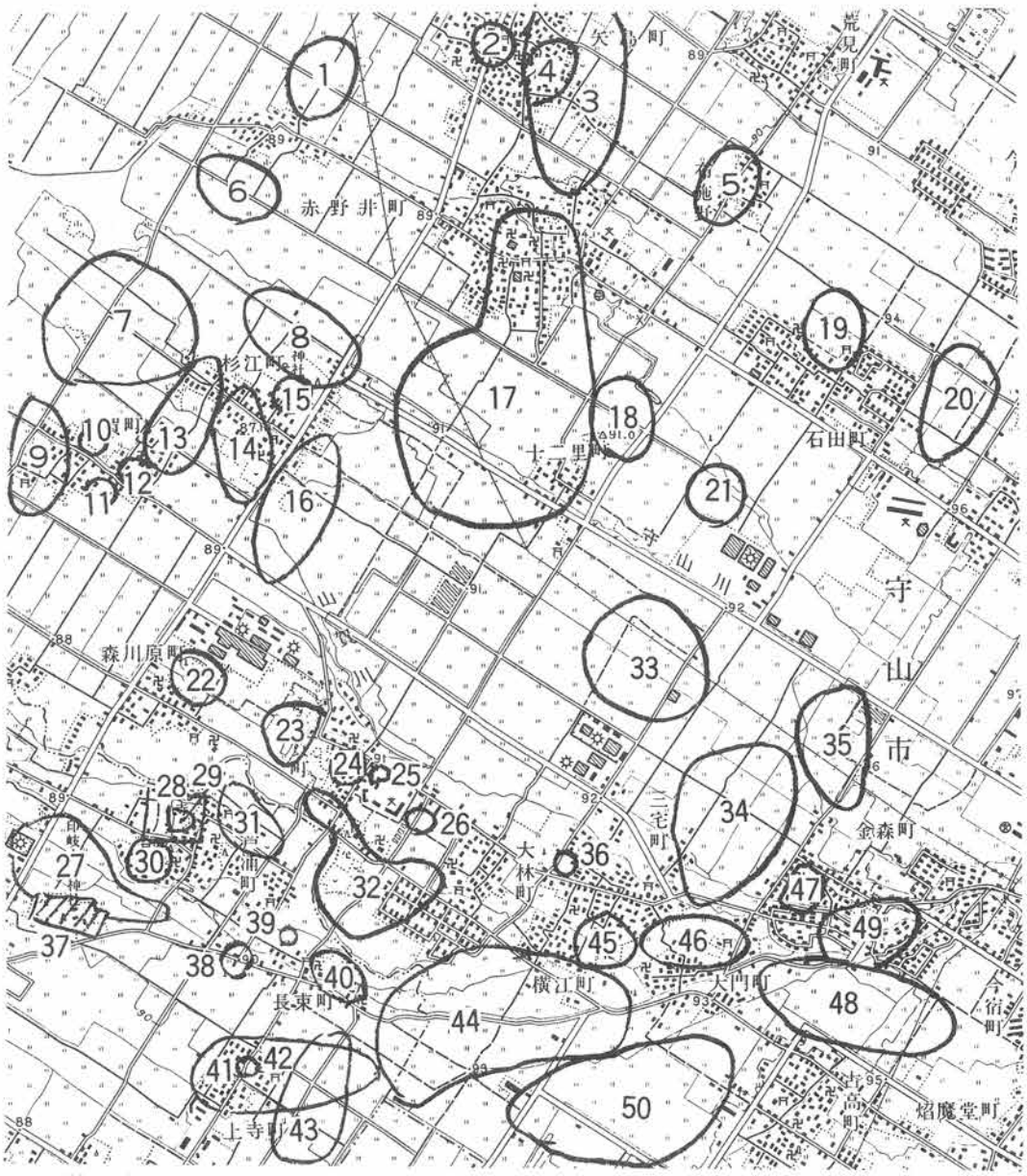
守山市は滋賀県の南西部、その水源を御在所山に端を発する野州川によって運ばれた土砂によって形成された扇状地上に位置する。現在野州川は守山市の北にその北流・南流が流れ、市内全域にはその分流である法竜・石田・守山・山賀・境等の支流が多く流れる。現在の集落の多くはこの様な大小さまざまな河川によって形成された微高地上に形成されている。調査対象となった横江遺跡の所在する守山市横江町もこのような場所のひとつであり、守山市の中心街から西方へ伸び金森・横江をねけて草津市芦浦・下物に至る「境川」の中流部分に位置する。「境川」は現在の行政上の区分である草津市、栗東町の境を流れる川であり、現在では河幅こそ狭いがかっては旧野州郡と栗太郡の自然的境界であったと

いわれており今回でもその古代の川幅が30m以上あったことが確認されている。当該地はその「境川」が北に流れ、東西に走る県道片岡栗東線（古代の支那街道）にそって流れる「海道川」に挟まれた三角州状自然堤防上に位置している。（木戸）

歴史的環境

次に歴史的環境についてみてみたい。現在守山で発見されている遺跡の内で一番古く遡るのは縄文時代である。市内で報告されている遺跡のなかでは服部遺跡が有名であり、おもに山の手を遠く離れた微高地ないしは微高地周辺で晩期末の遺構や遺物が検出されている。近年の調査の成果では中期や早期に遡ると思われる集落が湖岸べりに存在していたことが琵琶湖総合開発関連の調査等で確認されている。また、当遺跡のように内陸地でも中期の縄文式土器が散乱し出土する遺跡も増えているようである。次の弥生時代では前期にあたる土器を出土する集落の跡が服部遺跡、赤野井遺跡、赤野井浜遺跡、寺中遺跡、山賀遺跡、草津市の支那中遺跡といった琵琶湖の旧湖岸べりまでに1kmに満たない低地で多く見つかっている。大規模な集落の湖岸べりへの定着は、畿内の河内内湖周辺の集落からの瀬田川を北上して琵琶湖沿岸ぞいに水上交通を利用して移住定着した弥生人の姿を想定でき大変興味深いところである。中期に入ると集落はその拠点を元の大規模な集落を継続して存続する一族とそこから独立して枝村的に分かれて水系を辿るようにより内陸部に入りこんでいく中規模村落とにわかれるようになる。勿論、これらの集落の移動に対しては海退・海進という自然的な要因が大きく作用していることはいうまでもないが、前者は服部遺跡、寺中遺跡、赤野井遺跡、支那中遺跡があり、後者は金森西遺跡、欲賀南遺跡、益須寺遺跡、小島遺跡、播磨田東遺跡、川中遺跡等がある。また、この時までにすでに守山周辺にも青銅器の文化が入りこんでおり、服部遺跡（新庄出土）に古段階の銅鐸が4鐸ある。いずれも、本来であるならばその終りとともに当時の共通認識に添って山中に埋納されるはずであったが、山の存在する一番近い野州地帯の勢力と相反していたのか、遺跡周辺に山のなかったのか湖南では何れも平野部に埋納された。弥生時代の後期においても基村的性格を持つ服部遺跡は存続するが、大門遺跡、横江遺跡、吉身西遺跡、伊勢遺跡等のように、集落はさらに枝村を増やし生産向上と社会的動揺という背景のもと結合と分散を繰り返しより内陸部へと入る。守山に於いても一番この時代の集落跡の多い段階であり従前より小篠原銅鐸と首長墓を根拠に展開されている野州町を凌ぐ量と規模の物が揃っている。古墳時代に入ってもこの勢いは衰えず守山に於いてはこの時代の早い段階から建物構造に掘建柱建物を採用する集落が多数出現している。やはり、琵琶湖に面しているだけ

内陸地よりも文化の浸透が早い感がある。しかしながら、古墳そのものは少ない。守山市全域が平地によって構成されていること、削平されて現在しているものが少ないとことを加味しても巨大な古墳群の存在する墓域は野州町、栗東町にあることは確実で当時の政治の基盤と相互関係を考えさせられるものがある。大和朝廷の成立も当地周辺にその足跡を遺している。『日本書記』安閑天皇二年（５３５）の条に近江葦浦に屯倉を設置し犬養部をおくことが記されているが、現在これらは当遺跡の近郊の赤野井から三宅を中心とする一帯に残る地名と条里制以前の南北地割りの残存する地帯に比定されている。さらに条里制制定後の国郡里制では守山あたりは野州郡に属しており、記録によれば郡内には三上・服部・邇保・敷智・明見・篠原があるが、このうち服部・敷智・明見が当地周辺に存在していたといわれており服部は服部遺跡周辺に敷智は後の淵庄とのかかわりのなかで式内社である現在の馬路石辺神社辺り迄を明見は赤野井から荒見をおのおの推定されている。そして当然当地はこの明見郷の南端、栗太郡との境に位置しているわけである。奈良時代から平安時代にかけてはこの一帯は早くから法隆寺・大安寺などの墾田が現われ、中世に入っても陽明門院領の中津神崎荘・吉身荘・立入荘や園城寺、日吉社、法華寺領の野州新荘・小浜荘等の荘園とこのあたり一帯には早くから成立している。室町時代にはいるとこのあたりは真宗の拠点となるところであり金森、古高、横江、欲賀、山賀と幹線道路ぞいに等距離に道場がもうけられている。歴史のなかでは寛正６年（1465）３月には三会院領赤野井村が山門によって違乱を加えられそのつど幕府から停止が命ぜられたりしており、山門宗従に大谷を追われた本願寺の蓮如が在覚以来の金森に逃れてきたりした記録が残っている。戦国時代を迎えると織田信長の出現により、またこの地も賑やかさをましてくる。当遺跡周辺にも信長はたびだび訪れているのである。信長は清州から京に向かう途中よく守山で宿をとっている。永禄11年（1568）には矢島郷に出向き足利義昭を擁して上洛するために守山に泊り支那へ出ている。いずれも今宿をとおり金森をねける馬道で矢島にでたり鎌倉道から支那へでていた。そして守山から支那へ至る重要路の岐点には金森がありここで一向宗が栄えていた。元亀元年（1570）には一向宗を擁していた六角承禎を信長の配下柴田勝家、佐久間信盛が笠原で打つている。そして、翌２年には金森、三宅に門徒がここに集結し抵抗している。信長はこれを攻め７月に開場し近江で最初の楽市楽座を開いている。このように当遺跡周辺には大きな歴史の舞台にこそならなかったがある意味での歴史の重要な一翼をになった場所が沢山存在しているわけである。そして、横江遺跡はこのような歴史的な環境におかれて存在しているわけである。（木戸）



1. 弘前遺遺　2. 観音寺遺跡　3. 寺中遺跡　4. 矢島御所遺跡
5. 布施野城遺跡　6. 赤野井浜遺跡　7. 小津浜遺跡　8. 杉江北遺跡
9. 山賀西遺跡　10. 昌寿院遺跡　11. 正楽寺遺跡　12. 仁願寺遺跡
13. 山賀遺跡　14. 杉江遺跡　15. 小津神社遺跡　16. 杉江東遺跡
17. 赤野井遺跡　18. 狐塚遺跡　19. 石田遺跡　20. 播磨田西遺跡
21. 石田三宅遺跡　22. 森川原遺跡　23. 欲賀遺跡　24. 欲賀城跡
25. 欲賀寺遺跡　26. 冬塚古墳　27. 檜皮堂遺跡　28. 観音寺廃寺遺跡
29. 観音寺館遺跡　30. 安国寺遺跡　31. 上東遺跡　32. 欲賀南遺跡
33. 三宅北遺跡　34. 金森西遺跡　35. 中島遺跡　36. 薬師堂遺跡
37. 印岐志呂城跡　38. 長束遺跡　39. 長束三坊遺跡　40. 中堂遺跡
41. 南溝畑遺跡　42. 上寺廃寺遺跡　43. 北太田遺跡　44. 横江遺跡
45. 三宅城跡　46. 大門遺跡　47. 金森城跡　48. 古高遺跡
49. 金森遺跡　50. 下長遺跡

第1図　遺跡位置図

第Ⅲ章　調査の方法

調査にあたっては、調査の対象地域が広大であり且つ調査が数年に渡ることを考慮して調査成果が後々きっちりとつながるように当初に基準を設定することとした。基準点は柱宅供給公社使用の「横江柱宅団地建設事業現況平面図」にある調査地入口付近の道路交差点南角、境川北角に設けられている道路測量用側点（Ｔ－２）を基準とした。まずこの点から磁北にのるように南北に軸をとりその南北軸の10ｍおきに基準点をもうけた。さらにこの軸に90°に交差するように東西軸を設定し同じように10ｍおきに基準点をもうけ、10ｍ×10ｍの方眼をかけた。各グリットの呼称は北よりＡ～Ｚのアルファベットで西より１２、３、……の数字でとり座標方式で、例えばＡ－１、Ａ－２等のように標示した。

これらの基準点は遺構に伴わない遺物のとりあげや実測図の基準点や図面の照合に使用した。

次に調査区の設定であるが、調査区の設定にあたっては工事造成計画と当該年度の調査体制、さらにそれに加え現況の地形を考慮し条件を全てを満たすべく調整し設定した。昭和58年度は第一調査区、第二調査区、第三調査区を昭和59年度は第四調査区、第五調査区第六調査区、第七調査区、第八調査区、第九調査区、第十調査区をそれぞれ実施した。

調査の方法は、まず調査区対象となる地域に調査区設定用の杭を打ち調査区を設定してバックホーの先に鉄板をはかせた調査専用の重機によって水田、畑地の耕作土と床土を除去し遺構面を検出したのち草けずりによって精査し遺構を検出した。これをまず平板実測により略測図を作成しこれをもとに調査区ごとに遺構に番号を附して遺物よりあげ記号と番号（ＳＡ－柵列、ＳＢ－掘立柱建物、ＳＤ－溝、ＳＥ－井戸、ＳＫ－土壙、ＳＰ－柱穴、ＳＸ－その他、）を附した。調査中の記録はそのつど手書きによる断面図（層位）と平面図（遺物出土状況図や井戸）とにより記録し全体の状況は20分の１の手書きの平面図を作成した。また、写真撮影による記録は日々の遺構、遺物の状態を主として中型、小型カメラを併用してモノクロ・リバーサル・カラー（一部）によっておこなった。なお調査区単位で調査の終了後平面写真によって記録保存をはかるため航空写真撮影委託によってバルーン（一部）やヘリコプター、セスナによる写真撮影をあわせて実施した。

（木戸）

第4調査区
第5調査区
第6調査区
第7調査区
第10調査区
第9調査区
第8調査区
第3調査区
第1調査区
第2調査区
A
A'
0
100M

第2図　調査区設定図

第Ⅳ章　調査の結果

第１節　第１調査区

本調査区で検出した遺構は古墳時代と平安時代後期～鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡・井戸跡・土壙・溝跡がある。遺構は耕作土直下で検出され、東側が希薄で西及び南側に集中していた。おおむね古墳時代の遺構は西側に、平安時代後期～鎌倉時代の遺構は南側にみられた。地山は４種類に区分でき東から灰褐色砂質土・灰色礫土・暗褐色土・淡黄青色粘質土・暗褐色土・灰色礫土と著しく変化する。集落形成以前の河川の氾濫によるものと考えられる。

Ⅰ　古墳時代の遺構と遺物

１　遺　構

掘立柱建物（ＳＢ－１～８）

ＳＢ－１（第３図）

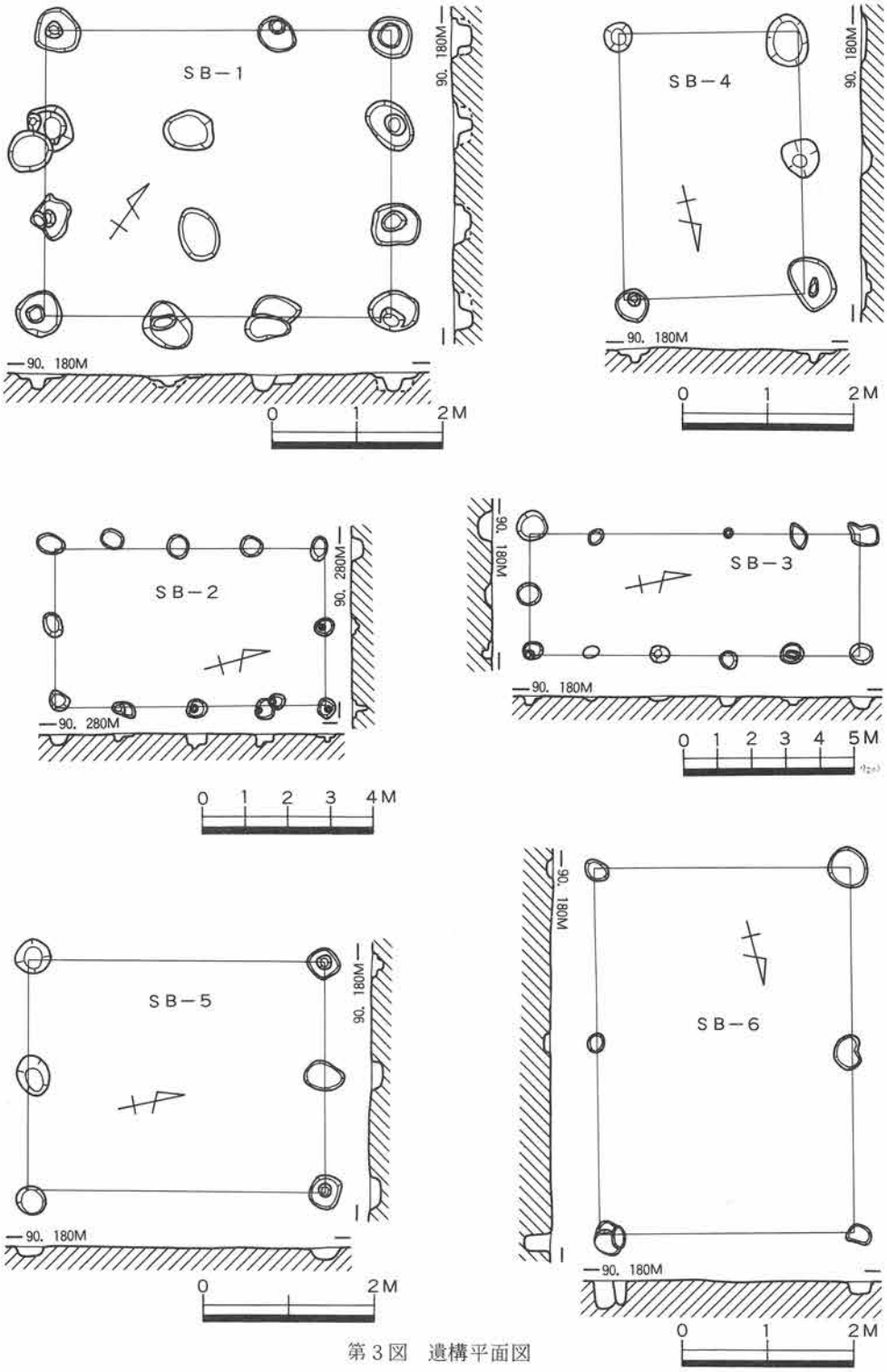
調査地西側で検出した３間×３間の倉庫状建物である。主軸方位はＮ－57°－Ｅを示し、柱間距離は桁行1.4ｍ、梁行1.2ｍを測る。柱穴掘方は長径65cmの楕円、直径50cmの円、一辺50cmの方形と形状上ばらつきがみられるが柱穴は直径20～30cmの円形である。埋土は掘方が地山が混入した暗黄茶色粘質土で、柱穴は黒褐色粘質土である。遺物はＰ－１～４より受口状口縁甕の小片が出土している。時期は布留式併行期とみられる。

ＳＢ－２（第３図）

調査区南西部で検出した４間×２間の南北棟建物である。主軸方位はＮ－17°－Ｅを示し、柱間距離は桁行1.5m、梁行1.8mを測る。柱穴の形状は直径40cmの円もしくは長径40～60cmの楕円形である。埋土はおおむね黒灰色粘質土の単層で、いずれも炭化物を含有している。遺物は若干の柱穴から土師器片が出土している。６Ｃ後半～７Ｃの年代が考えられる。

ＳＢ－３（第３図）

ＳＢ－２の西に位置する５間×２間と南北に細長い大型の建物である。主軸方位はＳＢ－２同様Ｎ－17°－Ｅを示し、柱間距離は桁行1.6m、梁行1.5mを測る。柱穴は規模・形状にややばらつきがみられる。埋土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は柱穴内から土師器、須恵器の小片が出土している。時期は６Ｃ後半～７Ｃ代である。


SB−1
90. 180M
0 1 2M
SB−4
90. 180M
0 1 2M
SB−2
90. 280M
0 1 2 3 4M
SB−3
90. 180M
0 1 2 3 4 5M
SB−5
90. 180M
0 2M
SB−6
90. 180M
0 1 2M

第３図　遺構平面図

ＳＢ－４（第３図）

調査地西端中央で検出した１間×１間の建物であるが西側桁列のみ２間である。主軸方位はＮ－18°－Ｅを示し、柱間距離は桁行３ｍ、梁行４ｍを測る。柱穴埋土はおおむね黒灰色粘質土の単層である。遺物はすべての柱穴から土師器小片が出土している。

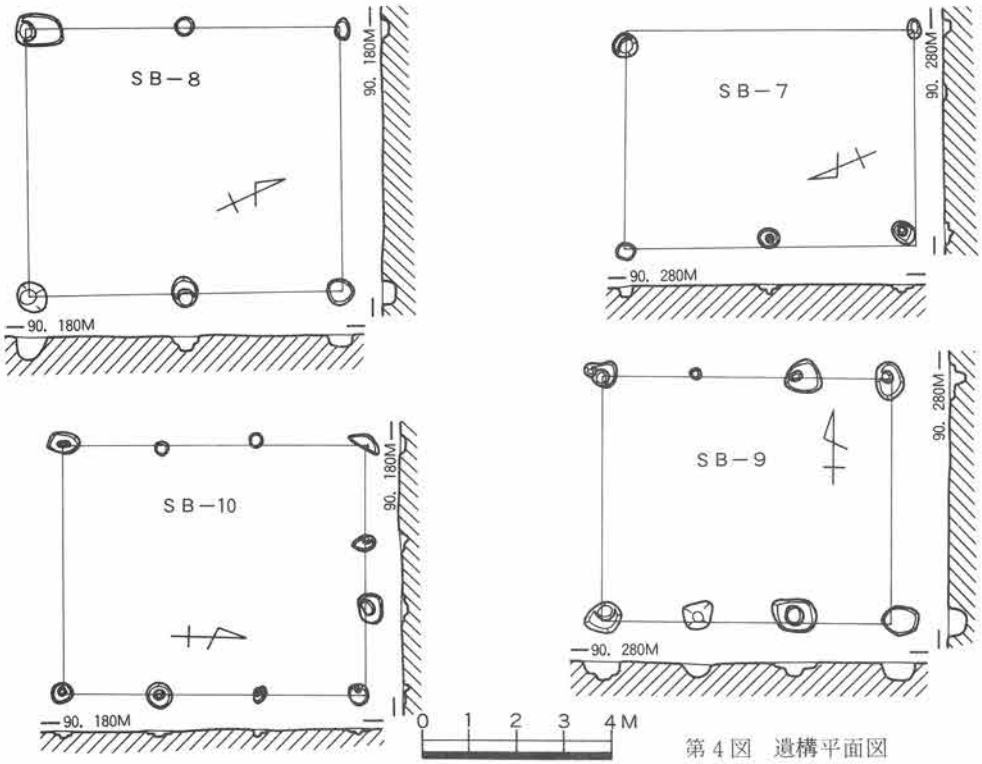
ＳＢ－５（第３図）

ＳＢ－４の南に位置する１間×２間のやや小型の建物である。主軸方位はＮ－14°－Ｅを示し、柱間距離は桁行3.5ｍ、梁行1.5ｍを測る。柱穴掘方は一辺30cmの方形か径35cmの円形、もしくは長径40cmの楕円形である。柱穴埋土は黒灰色粘質土の単層である。遺物は若干の柱穴から土師器片が出土している。

ＳＢ－６（第３図）

ＳＢ－４の東に隣接する２間×１間の南北棟建物であるが、北側梁間のみ２間である。主軸方位はＮ－17°－Ｅを示し、柱間距離は桁行2.2ｍ、梁間1.5ｍを測る。柱穴掘方の規模形状にはかなりのばらつきがみられるが、埋土はおおむね黒灰色粘質土の単層である。遺物は若干の柱穴から土師器小片が出土しているだけである。

ＳＢ－７（第４図）



第４図　遺構平面図

調査地北側で検出した１間×１間の南北棟建物であるが、西側桁行のみ２間である。主軸方位はＮ－16°－Ｅを示し、柱間距離は桁行３ｍ・梁行4.5ｍを測る。柱穴は直径30～50cmの円形もしくは長径40cmの楕円形を呈す。柱穴埋土は黒灰色粘質土の単層である。遺物は若干の柱穴から土師器片が出土している。

ＳＢ－８（第４図）

ＳＢ－７の北に位置する２間×１間のやや小型の建物である。主軸方位はＮ－14°－Ｅを示し、柱間距離は桁行1.7ｍ、梁行３ｍを測る。柱穴は直径30cmの円形もしくは長径20～45cmの楕円形を呈する。柱穴埋土はほぼ黒灰色粘質土の単層である。

ＳＢ－９（第４図）

ＳＢ－２の東に位置する３間×１間の東西棟建物である。主軸方位はほぼ磁北を示し、柱間距離は桁行１ｍ、梁間2.5ｍを測る。柱穴は長径30～50cmの楕円形で、柱穴は直径15～20cm、深さ40cmの円形を呈する。柱穴埋土は黒褐色粘質土をベースに地山ブロックが混じる。いずれも微量ながら炭化物を含有している。遺物はほぼすべての柱穴から土師器が出土している。

ＳＢ－10（第４図）

調査区南辺で検出した３間×３間の南北棟建物である。主軸方位はほぼ磁北にとり、柱間距離は桁行2.1ｍ、梁間1.7ｍを測る。柱穴の規模、形状にはかなりのばらつきがみられるが、柱穴埋土はおおむね黒灰色粘質土の単層である。遺物は柱穴内から土師器、須恵器が出土しているが、いずれも小片のため時期は明確でない。

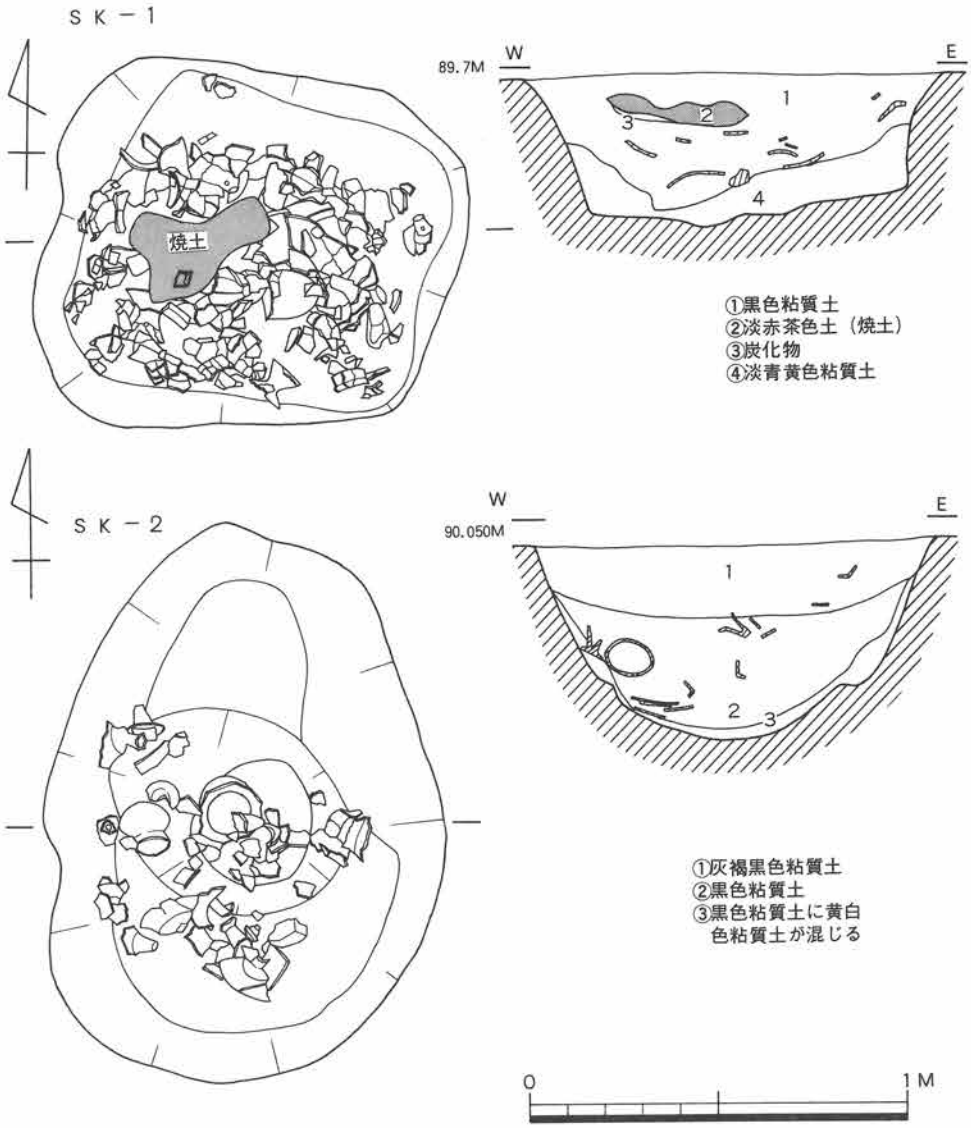
ＳＢ－11

ＳＢ－３の北に位置する。建物の北及び西が調査区外に伸展するため規模は明確ではない。主軸方位はＳＢ－９・ＳＢ－10と同様ほぼ磁北にとる。柱穴掘方は長径60cmの楕円形を呈する。柱穴埋土は黒灰色粘質土の単層である。

井戸

ＳＥ－１（第６図図版）

調査区西側、ＳＢ－２とＳＢ－３の間で検出した素掘りの井戸である。掘方は楕円形状を呈し、長径90cm、短径62cm、深さ65cmを測り、底は勇水点にまで達している。埋土は上から茶灰色粘質土・灰色粘質土・橙白色粘質土・暗灰色粘質土・淡青黄色粘質土が混じった暗灰色粘質土の５層に分層できる。遺物は最下層から６Ｃ後半頃の須恵器有蓋高坏片と木片が出土している。



第５図　ＳＫ－１．ＳＫ－２遺物出土状況図・断面図

土壙（ＳＫ－１～22）

ＳＫ－１（第５図）

調査地南西端の落ち込み状遺構底面、遺構検出面より40cm下で検出した。平面形態は一辺約１ｍの方形である。深さは約40cmを測り、鍋底状に落ち込んだ底面はほぼ平坦である。埋土は２層に分層され、第１層が黒色粘質土、第２層が淡青黄色粘質土である。第１層には焼土ブロックと炭化物の堆積が部分的にみられた。遺物は多量の土師器が第１層から一括投棄の状況で出土している。時期は庄内式併行期とみられる。

ＳＫ－２（第５図）

調査区北西辺で検出した。平面形は楕円形を呈し、中央部が２段掘りの形態を示す。大きさは長径1.4ｍ、短径１ｍ、深さ50cmを測る。埋土は上から灰褐黒色粘質土、炭化物を含有した黒色粘質土、白黄色粘質土がブロック状に混じった黒色粘質土の３層に分層できる。遺物は第２層中から布留式新段階の多量の土師器と滑石製臼玉の製品、未製品が出土している。

ＳＫ－３

調査区南、ＳＢ－11の西で検出した長方形の土壙である。長径1.4ｍ、短径１ｍ、深さ15cmを測る。底面は鍋底状に落込み、ほぼ平担である。埋土は黒褐色粘質土の単層で多量の炭化物が含まれている。遺物は布留式併行の壷と高杯が（第12図①②）が出土している。

ＳＫ－４

調査区西辺、ＳＢ－５の南で検出した長楕円形を呈する土壙で、長径1.5ｍ、短径50cm、深さ20cmを測る。断面形は皿状を呈し、埋土は灰色粘質土の単層である。

ＳＫ－５

ＳＫ－４に隣接して検出した楕円形状を呈する土壙である。長径３ｍ・短径１ｍ・深さ30cmを測る。埋土は褐灰色粘質土・明褐灰色粘質土・褐灰色粘質土混黄灰色粘質土・灰白色粘質土の４層に分層できる。遺物は土師器片が少量出土しているが時期は明確でない。

ＳＫ－６

ＳＫ－５の東側で検出した長楕円形の土壙である。長径2.4ｍ、短径60cm、深さ35cmを測り、断面は皿状を呈する。埋土は上から黄灰色粘質土・褐灰色粘質土・白色粘質土の３層が堆積する。遺物は土師器少片が若干出土しているが詳細な時期は明確でない。

ＳＫ－７

ＳＫ－６の東側、ＳＢ－２の北側に位置する。長径１ｍ、短径35cm、深さ10cmの楕円形を呈する。埋土は褐灰色粘質土の単層である。遺物は少量の土師器片が出土しているが詳細な時期は明確でない。

ＳＫ－８

ＳＫ－５の北側で検出した長径約2.4ｍの不定形な土壙である。深さは10cm程度で、底面はほぼ平担である。埋土は褐灰色粘質土でマンガンを多量に含有する。

ＳＫ－９

ＳＢ－６の北に隣接して検出した楕円形を呈する土壙である。長径2.7ｍ、短径1.2ｍ、

深さ10cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、底面は平担である。埋土は暗褐灰色粘質土の単層である。

ＳＫ－10

ＳＢ－１の東で検出された楕円形を呈する土壙である。長径3.7ｍ、短径1.6ｍ、深さ15cmを測る。断面は浅い皿状を呈するが、底面はやや凹凸がみられる。埋土は黒灰色粘質土・暗茶黄色粘質土の２層に分層される。遺物は土師器・須恵器片が出土している。

ＳＫ－11

ＳＫ－10の南に隣接して検出された楕円形を呈する土壙である。東西に平担面をもち、中央が２段掘りの形態を示す。長径1.8ｍ、短径65cm、深さ20cmを測る。埋土は３層に分層され、上から明黄茶色粘質土・暗褐茶灰色粘質土・黒褐色粘質土が堆積する。

ＳＫ－12

ＳＫ－11の東で検出した不定形の土壙である。長径1.9ｍ、短径90cm、深さ10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、底面は平担である。埋土は暗褐灰色粘質の単層である。

ＳＫ－13

ＳＫ－12の南に隣接して検出した。平面形は直径１ｍの円形を呈する。埋土は黒褐色粘質土の単層である。

ＳＫ－14

ＳＫ－13の南に隣接して検出した楕円形の土壙で、断面形は浅い皿状を呈する。長径７ｍ、短径１ｍ・深さ10cmを測る。埋土は砂礫混りの暗褐灰色粘質土の単層である。

ＳＫ－15

ＳＫ－13の南で検出した不整形の土壙である。長径1.1ｍ、短径90cm、深さ10cmを測る。埋土は暗褐灰色粘質土の単層である。

ＳＫ－16

ＳＢ－10の南で検出した。楕円形を呈すると思われるが西側が大きく攪乱をうけ、全形は明らかでない。埋土は暗灰褐色粘質土の単層である。

ＳＫ－17

ＳＫ－16の東で検出した細長い土壙である。長径2.3ｍ、短径1.1ｍ、深さ40cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土の単層である。遺物は土師器片が少量出土しているが時期は明確ではない。ただし、布留式併行期の溝（ＳＤ－２）の埋土から掘り込まれており、それよりは新しいといえる。

ＳＫ－18

ＳＫ－17の東に隣接して検出した楕円形の土壙で、中央が２段掘りの形態を示す。長径１ｍ・短径80cm・深さ40cmを測る。埋土は灰色粘質土、暗灰色粘質土の上下２層に分層できる。

ＳＫ－19

ＳＫ－18の東で検出した楕円形の土壙である。ＳＫ－16～18同様、ＳＤ－２の埋土から掘り込まれている。長径2.3ｍ、短径1.2ｍ、深さ50cmを測る。埋土は灰色粘質土の単層である。遺物は土師器と須恵器の小片が出土している。

ＳＫ－20

ＳＫ－19の北で検出した不定形の土壙である。長径1.7ｍ、短径60cm、深さ10cmを測る。断面は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は土師器片が少量出土している。

ＳＫ－21

調査区東端で検出した三角形状の土壙である。長径1.3ｍ、深さ20cmを測る。埋土は暗褐灰色細砂土が堆積する。遺物は土師器小片が出土した。

ＳＫ－22

ＳＫ－21の南で検出した楕円形の土壙である。長径２ｍ、短径1.1ｍ、深さ20cmを測る。埋土はＳＫ－21同様暗褐灰色細砂土が堆積する。時期は同じ埋土であるＳＰ－２から６Ｃ後半の土師器杯（第12図28）が出土していることから、６Ｃ後半代と考えられる。

溝（ＳＤ－１～９）

ＳＤ－１

ＳＢ－２の東側で検出した南北溝である。ＳＢ－９の北側桁行西第２柱穴に切られている。長さ7.4ｍ、幅は上端で60cm、下端で30cm、深さは20cmを測る。埋土は３層に分層でき、上から黄白色粘質土が粒状に混じった黒褐色粘質土・黄白色粘質土・暗褐灰色粘質土がほぼ平行に堆積する。遺物は少量の土師器片が出土している。時期は布留式併行期とみられる。

ＳＤ－２

調査区南端で検出された布留式併行期の溝である。西及び南側は中世期の落ち込み状遺構に切られ全体の規模は明確でないが、現状では長さ12ｍ、幅5.5ｍが検出されている。東側の延長線上にあたる第３調査地南辺には同時期の溝が検出されており、本溝がさらに東

へ伸びることがわかる。深さは30cmを測り、底面は礫層まで達しているため、かなりの凹凸が認められる。埋土は北側肩口にやや複雑な堆積が認められるが、中央部は暗褐灰色粘質土と茶灰色砂質土の２層の堆積である。遺物は弥生土器、土師器、砥石が出土している。

ＳＤ－３～７

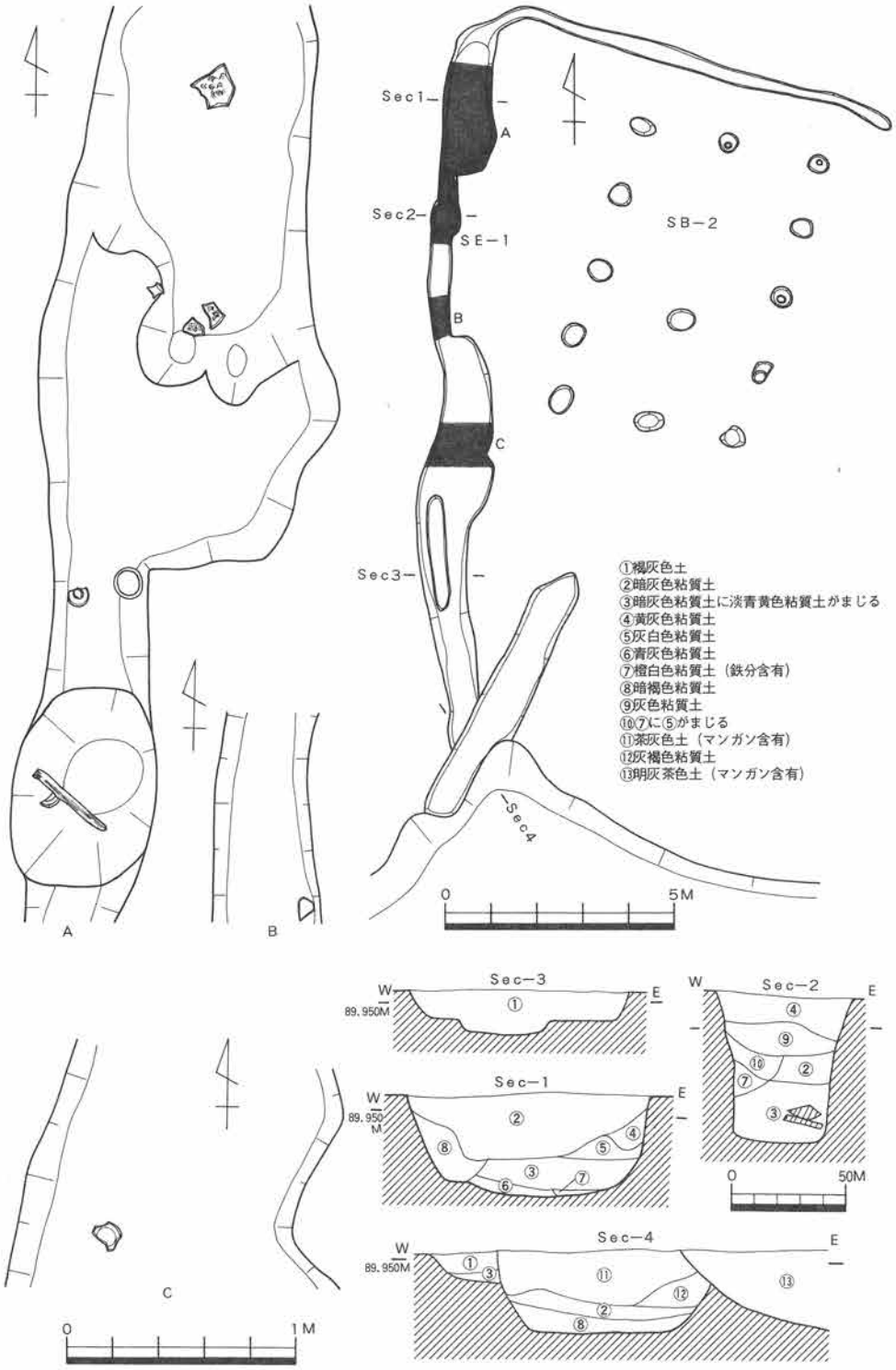
調査区西辺で検出した小溝群である。幅は20～30cm・深さ10cm程度で、埋土はいずれも黒褐色粘質土の単層である。

ＳＤ－８

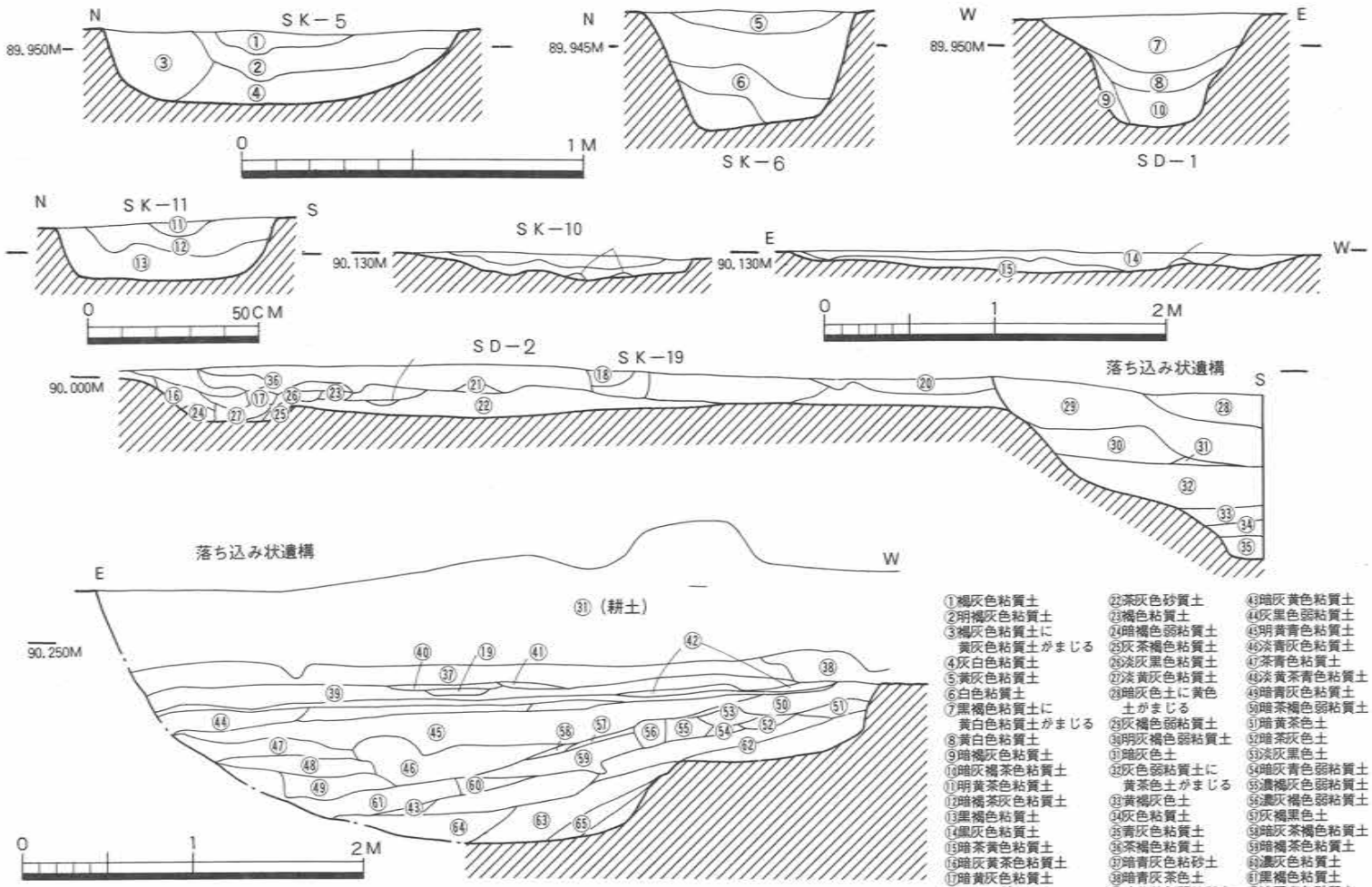
ＳＫ－16の東で検出した。北西端は柱穴に切られているが、現状で長さ35ｍ・幅40cm・深さ13cmを測る。埋土は黒褐色粘質土の単層である。

ＳＤ－９　（第６図）

ＳＢ－２を囲むＬ字形の溝である。西溝は南端が中世の溝（ＳＤ－11）に切られているが現状で長さ15ｍ、幅は最大で3.7ｍ、最小で１ｍ、深さ８－16cmを測る。埋土は８層に分層することができる。北溝は長さ９ｍ、幅30cm、深さ５cmと狭く浅い。埋土は黒灰色粘質土の単層である。遺物は西溝から少量の土師器片と６Ｃ末～７Ｃ初頭の須恵器杯身、蓋、高杯（第12図22～25）、甕が出土した。



第６図　ＳＤ－２土器出土状況図・断面図


SK－5
N
89.950M
0
1M
SK－6
N
89.945M
SD－1
W
E
89.950M
SK－11
N
S
0
50CM
SK－10
90.130M
E
W
90.130M
0
1
2M
SD－2
SK－19
90.000M
落ち込み状遺構
S
落ち込み状遺構
E
W
90.250M
(耕土)
0
1
2M
①褐灰色粘質土
②明褐灰色粘質土
③褐灰色粘質土に黄灰色粘質土がまじる
④灰白色粘質土
⑤黄灰色粘質土
⑥白色粘質土
⑦黒褐色粘質土に黄白色粘質土がまじる
⑧黄白色粘質土
⑨暗褐灰色粘質土
⑩暗灰褐茶色粘質土
⑪明黄茶色粘質土
⑫暗褐茶灰色粘質土
⑬黒褐色粘質土
⑭黒灰色粘質土
⑮暗茶黄色粘質土
⑯暗灰黄茶色粘質土
⑰暗黄灰色粘質土
⑱暗灰褐色粘質土
⑲淡茶灰色粘質土
⑳暗褐色粘質土
㉑灰茶色砂質土
㉒茶灰色砂質土
㉓褐色粘質土
㉔暗褐色弱粘質土
㉕灰茶褐色粘質土
㉖淡灰黒色粘質土
㉗淡黄灰色粘質土
㉘暗灰色土に黄色土がまじる
㉙灰褐色弱粘質土
㉚明灰褐色弱粘質土
㉛暗灰色土
㉜灰色弱粘質土に黄茶色土がまじる
㉝黄褐灰色土
㉞灰色粘質土
㉟青灰色粘質土
㊱茶褐色粘質土
㊲暗青灰色粘砂土
㊳暗青灰茶色土
㊴暗黄茶色弱粘質土
㊵茶灰色弱粘質土
㊶灰茶色弱粘質土
㊷青灰褐色土
㊸暗灰黄色粘質土
㊹灰黒色弱粘質土
㊺明黄青色粘質土
㊻淡青灰色粘質土
㊼茶青色粘質土
㊽淡黄茶青色粘質土
㊾暗青灰色粘質土
㊿暗茶褐色弱粘質土
51暗黄茶色土
52暗茶灰色土
53淡灰黒色土
54暗灰青色弱粘質土
55濃褐灰色弱粘質土
56濃灰褐色弱粘質土
57灰褐黒色土
58暗灰茶褐色粘質土
59暗褐茶色粘質土
60濃灰色粘質土
61黒褐色粘質土
62淡灰青色砂質土
63青灰色粘砂土
64青灰色粘質土
65青灰色砂質土

第7図　SK、SD、断面図

第８図　遺構平面図（古墳時代）

2　遺　物

本調査区で出土した古墳時代の遺物はほぼ古墳時代全般にわたっている。しかし大部分を小破片が占め、実測図示できたものは出土量に対して少ないといえる。ただ中には土壙出土の比較的一括性の高い土器も含まれる。

ＳＫ－１出土遺物（第９図）

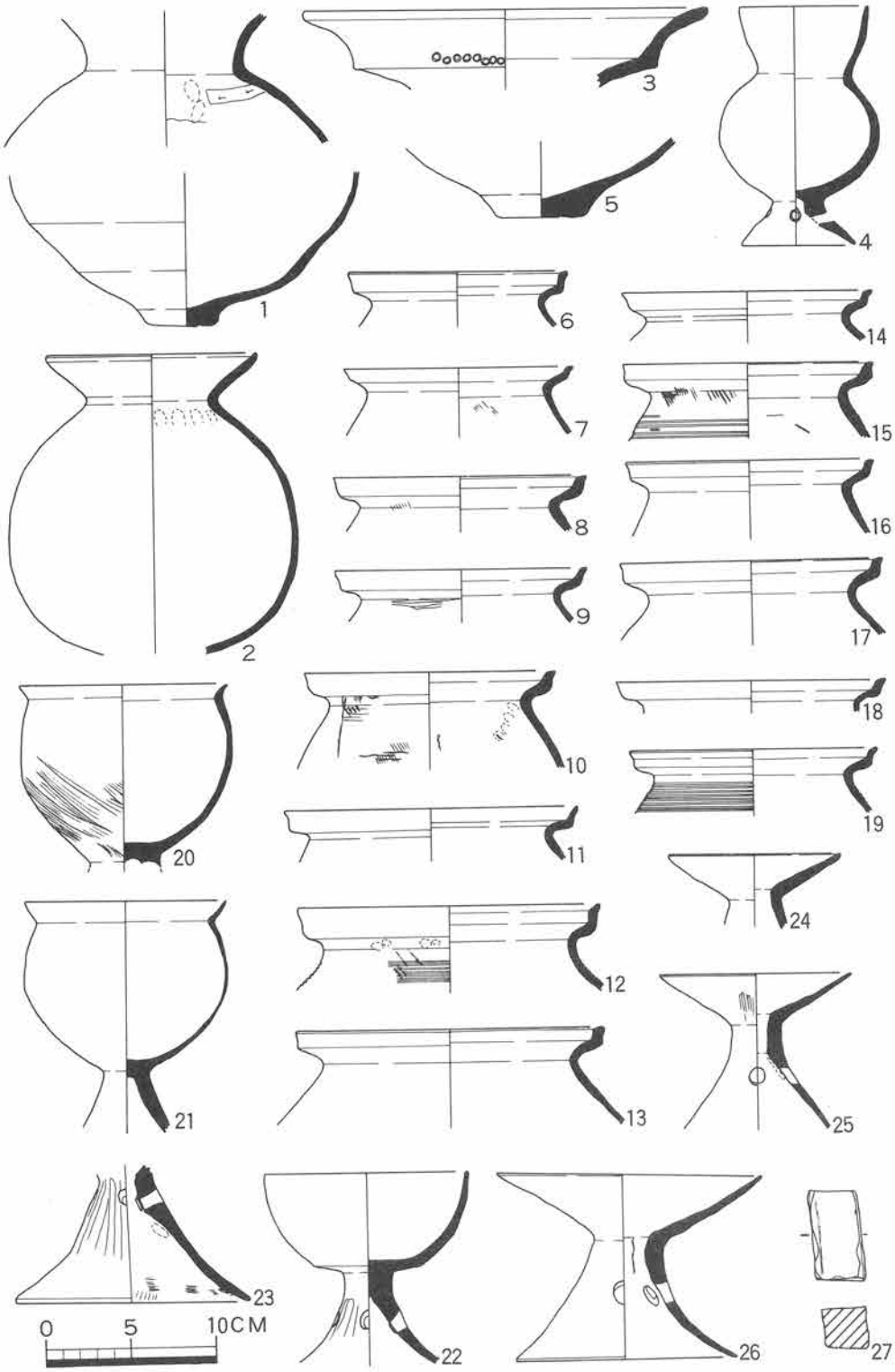
庄内式併行期の一括性の高い土器群である。残存度は極めて悪く、調整等が不明瞭なものが多い。器種は壺・甕・鉢・高坏・器台があるが甕が半数以上を占める。

壺（１～５）

１は口縁部がゆるやかに外反する広口壺である。底部は突出した平底で内彎して胴部へ続く。調整は磨滅のため不明瞭であるが、内面体部にわずかながら指ナデが認められる。２は口縁部が「く」の字状に鋭く屈曲する広口壺で、体部はほぼ球形状を呈する。口縁端部は上方にややつまみ上げられ、丸くおさまる。調整についてはわずかに内面頸部に指頭圧痕が残るのみである。３は屈折部が鋭い稜をなし、口縁部が大きく外反する二重口縁の壺で、口縁部外面下半に連続する竹管文が施されている。４は丸底壺に小さな脚台がついた台付小型壺である。頸部は「く」の字状に屈曲して球状の体部へ続く。脚部は「ハ」の字状に短く開き、４つの円孔を穿つ。

甕（６～21）

受口状口縁甕・「く」の字状口縁甕・台付甕があるが、受口状口縁甕が大多数を占める。受口状口縁甕は口縁端部をわずかに外方へ引き出し、上端を平担におさめるもの（７・８10・12・14・16～19）と丸くおさめるもの（６・９・13・15）がある。いずれも口縁部の顎の稜は純く、大半が無文であるが、肩部に櫛描の沈線を施すものもある（12・15・19。）20と21は小型の甕に脚台の付いた台付甕である。21は口縁部が「く」の字状に屈曲し、丸く内彎した体部に「ハ」の字状に開く脚台が付く。器壁は薄く仕上げられているが、調整は磨滅が著しく不明である。20は21と比較的プロポーションが以通っているが、口縁部は短く外反する。体部外面は粗いハケ目調整が施されている。胎土はいずれも粗い砂粒を多く含有している。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
5
10CM

第9図　ＳＫ－１出土遺物

高坏（22・23）

22は椀形をした小型の高林で、杯部はやや内弯気味に上方へのび、端部は丸くおさめる。口縁部と坏底部は稜により明確に分けられる。脚部はゆるやかに「ハ」の字状に開き、3孔を穿つ。調整は明確ではないが脚部外面にヘラ研磨が施されている。23は脚部のみの残存で、脚柱部が「ハ」の字状に開き、裾部にかけて大きく開く。外面はヘラ研磨、内面はナデ及びハケ目調整が施されている。透し孔は3孔である。

器台（24～26）

24・25はいずれも小型の器台で、受部が直線的にのびる。25は受部と脚部の境が中位より上にあり、脚部は「ハ」の字に開く。透し孔は2孔である。26は受部が内弯気味にのび、脚部が裾部から大きく開く。透し孔は3孔を穿つ。

砥石（27）

長さ2.5cm、幅1.5cmの方形を呈し、4面いずれにも使用痕が認められる。

ＳＫ－13出土遺物（第10図）

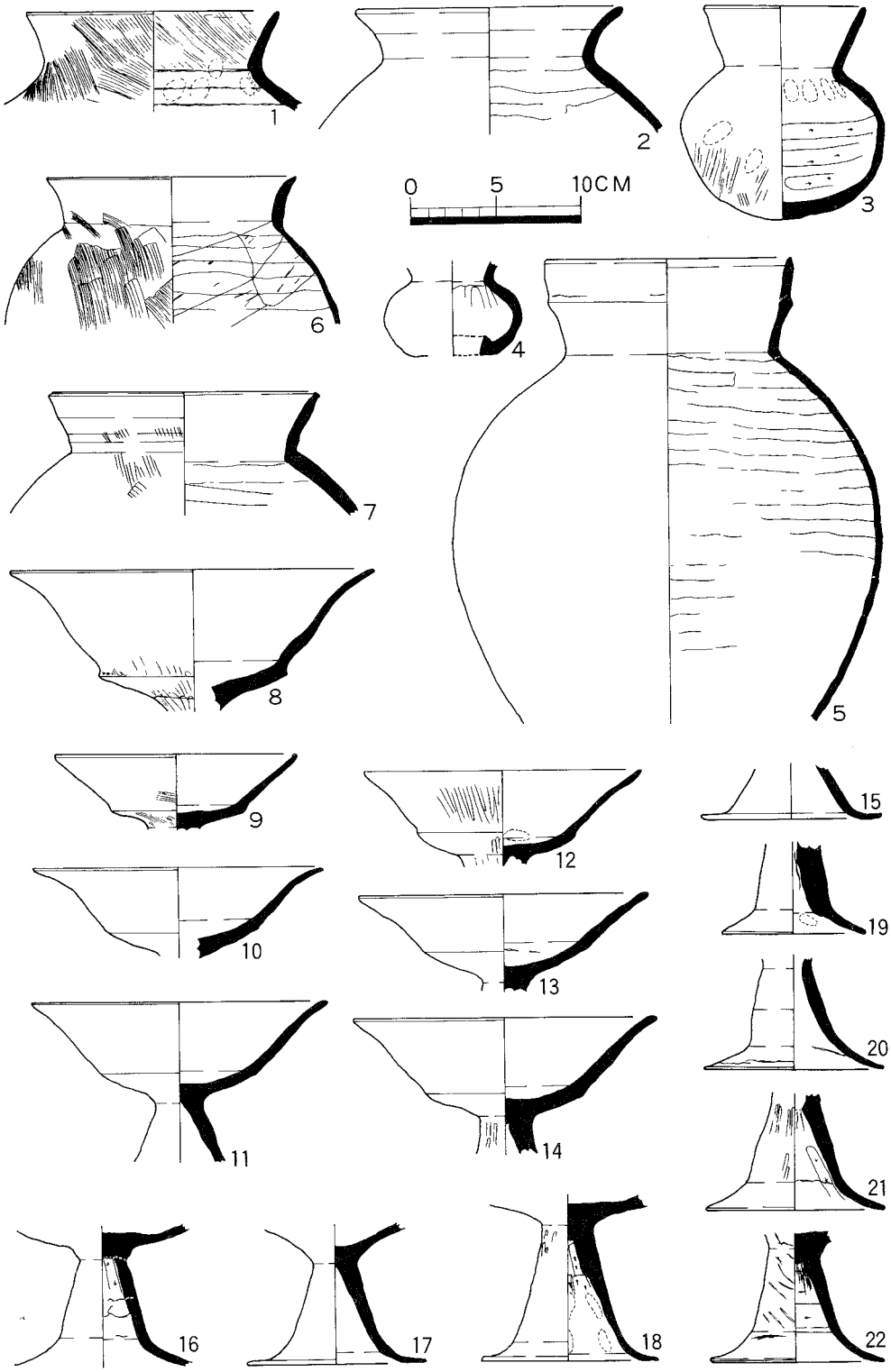
一括投棄の形で出土した布留式併行期の土期である。器種は壺・甕・高坏がある。又埋土中から滑石製臼玉の出土がみられた。

壺（1～5）

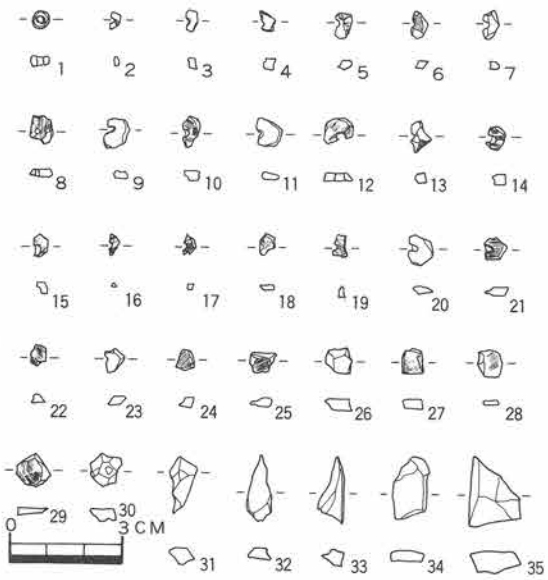
1は口縁部が「く」の字状を呈し、端部は丸くおさまる。調整は口縁部内外面にハケ目・体部内面はナデが施され、指頭圧痕・粘土紐痕が残る。2は口縁部がゆるやかに外反する壺で、端部は丸くおさまる。調整は口縁部内外面及び体部内面はナデが施され、粘土紐痕が明瞭に残る。3は小型の壺で、不安定な丸底をもち、球状の体部には直線的に外上方へのびる口縁部がつく。口縁部内外面及び体部内面はナデ、体部外面はハケ目が施され、二次焼成による煤の付着がみられる。4は体部がやや扁平な球形を呈する小型の壺である。5は有段口縁の壺で丸みのある体部を有す。調整は不明瞭であるが、体部内面にほぼ1cm単位の粘土紐痕が明瞭に残る。

甕（6・7）

6は口縁部が外反気味にのび、端部はやや外方へつまみ出され尖り気味に終る。口縁部外面はナデ、体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施されている。7は口縁部が「く」の字状を呈し、端部外面に平坦面をもつ。口縁部外面はハケ目の後ナデ、体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施されている。その他小片ではあるが、口縁端部内面が肥厚する布留式期通有の甕の口縁部も確認されている。



第10図　ＳＫ－２出土遺物



第11図　ＳＫ－２出土滑石品

高杯（８～22）

本土壙出土土器の7割を占める。坏部はその形状により、大型で坏部が深く、坏底部と口縁部の間の稜が鋭いもの（８）、やや小型で坏部が浅く、口縁部が直線的にのび坏底部と口縁部の境が明瞭な稜によって分けられるもの（９）・坏底部と口縁部の境界をなす稜が純く、口縁部がゆるやかに外反するもの（10～14）の３タイプに分類が可能である。脚部は脚柱部が、「ハ」の字状に開き、裾部にかけて大きく開く（15～22)。

滑石製臼玉（第11図）

いずれも第２層中の出土で、チップを含めると100点を越える。１は唯一製品と呼べるもので、径は５㎜を測り、丸形を呈する。２～７・９～21は欠損品で、約１／２程度欠損している。穿孔のさいに破損したものと思われる。大きさ及び形状にはかなりのばらつきがあり、適当な大きさ（５～８㎜）に加工した段階で穿孔し、形状を整えるという製作工程を読みとることができる。８・22～30は未製品で、欠損品同様大きさや形状にばらつきがみられる。31～35はフレークである。

ＳＫ－２出土遺物（第12図）

埋土中からの出土で、図示できたものは二点である。１は口縁部が「く」の字状を呈する壺で、端部は方形状に終る。②は脚部が短く、裾部が大きく開く高坏である。外面はハケ目、内面はナデにより仕上げる。この他に小片のため図示できなかったが、布留式併行期頃の受口状口縁甕の口縁部も出土している。

ＳＤ－２出土遺物（第12図）

上層の暗褐灰色粘質土より小破片が多く出土したが図化できたのは19点にすぎない。なお下層の茶灰色砂質土出土遺物は小破片のため図示できなかった。

弥生土器（弥生時代後期）

壺（3～5）

口縁部が大きく外反し端部に面をもつタイプの壺である。3は口縁部に2条以上の沈線と円形浮文を施す。4は頸部に突帯がめぐり、体部内面に指頭圧痕が残る。器面の色調は3・4共に茶褐色を呈しており、搬入された土器と考えられる。

甕（6～8）

6は大きく屈曲する頸部から口縁部は丸みを有して内反気味に立ち上がる受口状口縁甕である。口縁部外面に刺突列点文、頸部内外面にハケ目調整を施す。7は外反気味にのびる頸部から口縁部は直立して立ち上がる受口状口縁甕である。端部は内傾して面をもつ。口縁部外面下半に刺突列点文、頸部内面にヘラによる刻み目、頸部外面にハケ目を施す。8は外反した口縁部が短く直立し、受口状を呈する甕である。

高杯（9）

太い脚部で「ハ」の字状にゆるやかに開き、3つの円孔を穿つ。

古式土師器

壺（10）

体部はいびつな球形を呈し、底部はやや扁平な丸底である。

鉢（11）

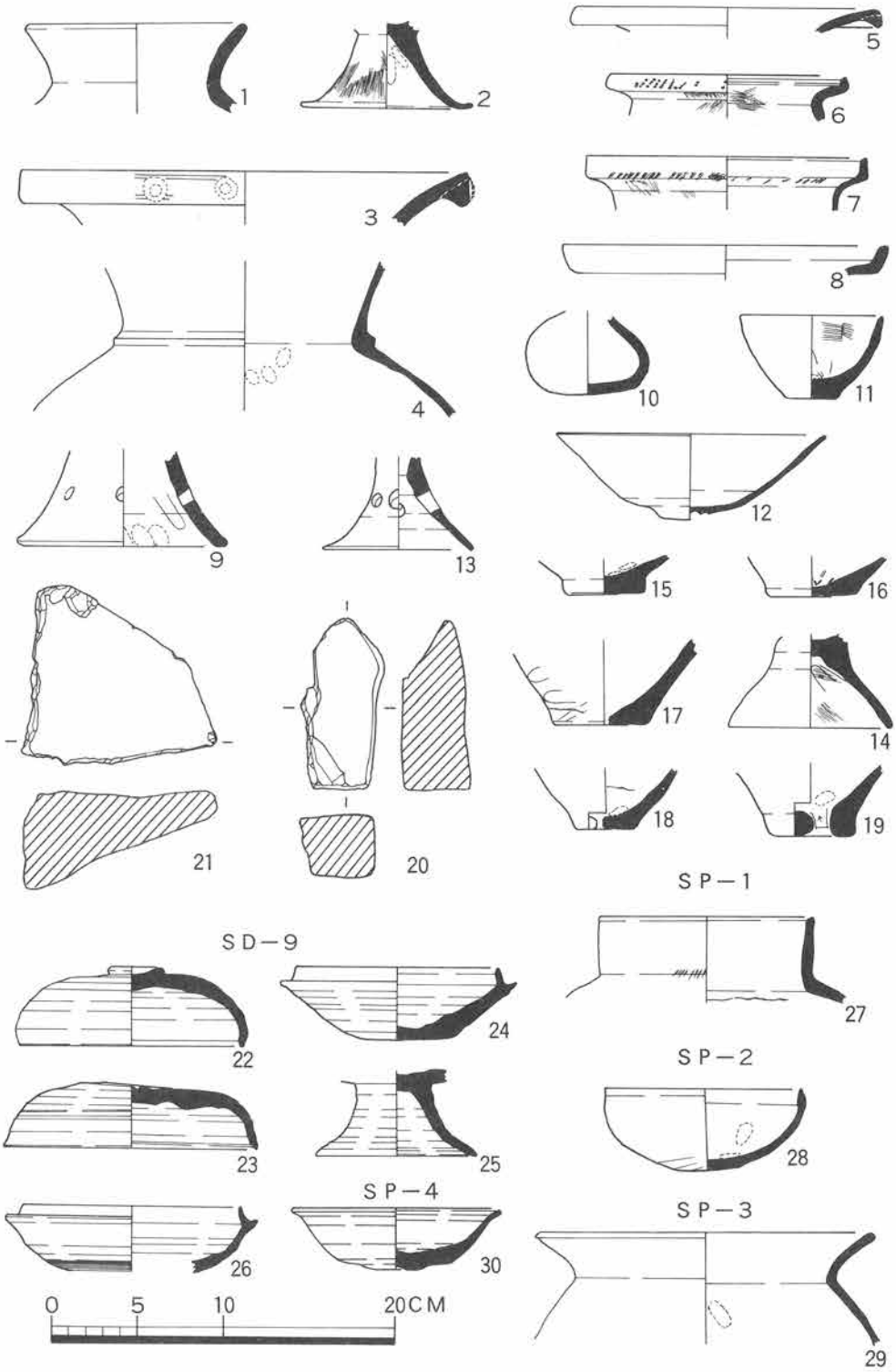
小型の鉢で平坦な平底から体部は内弯気味にのび、口縁端部は尖り気味に終る。調整は外面をナデ・内面はハケで仕上げる。

高杯（12・13）

12は杯底部と口縁部の境の稜が鈍い布留式期の高杯である。13は脚部が「ハ」の字状に開く高杯で、脚部中位に4つの円孔を穿つ。

底部（14～19）

14は「ハ」の字状を呈する脚台で、端部は丸くおさまる。調整は外面にナデ、内面にハケ目、ナデが施されている。15～17は平底を呈する壺の底部である。18～19は有孔鉢の底部で、穿穴は中心よりややずれている。内外面ともナデ調整である。



第12図　ＳＫ－３・ＳＤ－２・ＳＤ－９・ＳＥ－１・柱穴（ＳＰ－１～４）出土遺物

砥石（20・21）

20は自然形を強くとどめた直方体状で使用面は３面が観察できる。21も自然形を強く残しているが、割れており本来の形状ははっきりしない。使用面は１面であるが、砥面はなめらかで使用頻度は比較的高いようである。

ＳＤ－９出土遺物（第12図）

溝内より土師器、須恵器が出土したが、うち図化可能なものは須恵器４点であった。

22は中央部に凹状のつまみを付す蓋杯で、天井部から丸くカーブしながら口縁部となり、端部は丸くおさめる。調整は天井部１／３がヘラ削り、その他は回転ナデによる。23はやや扁平な器形を呈す蓋坏である。天井部と口縁部の稜は形骸化した不明瞭なものになり、端部は内傾し段を有す。調整は天井部にわずかにヘラ削り手法が残るが、中心は未調整である。24は立ちあがりが短く内傾する杯である。器壁は厚く、調整も底部はヘラ切り後に指ナデで整える程度である。25は脚部が「ハ」の字状に開く高杯で、調整は回転ナデによる。これら須恵器を陶邑窯[注①]と対比すれば、22はⅡ型式第２段階、23・24はⅡ型式４～５段階に相当するものと考えられる。

ＳＥ－１出土遺物（第12図）

土師器、須恵器が出土したが、小片のため図化できたものは須恵器１点にとどまった。26は有蓋高杯の杯部である。立ちあがりは内傾し短く、器体は扁平である。体部下半にカキ目を施す。

その他の遺構出土遺物（第12図）

いずれも柱穴埋土中からの出土である。27は口縁部が直立する短頸壷で、端部は内傾する面をもつ。調整は表面磨滅が著しく不明瞭であるが、頸部外面にハケ目、内面に粘土紐痕が残る。28はやや平坦な底部から体部は内弯する杯で、端部は尖り気味におさまる。調整は明瞭ではないが、わずかに底部外面にヘラナデ、体部内面に指おさえがみられる。29は口縁部が「く」の字状に屈曲する甕で、端部外面に面をもつ。調整は体部内面に指おさえがみられるだけで不明瞭である。30は須恵器の杯である。内弯する体部から口縁部は屈曲し、端部は尖る。調整は回転ナデ及びナデを施す。やや変った形状であるが中主町森ノ内遺跡[注②]をはじめ、近隣市町にも類例をみることができる。８Ｃ代のものと考えられる。

Ⅱ　中世の遺構と遺物

1　遺　構

掘立柱建物（ＳＢ－12～26）

掘立柱建物は大小合わせて15棟検出した。多くは調査地南辺に集中している。

ＳＢ－12（第13図）

調査区西側で検出した４間×４間の建物である。主軸方位はＮ－30°－Ｅを示し、柱間距離は桁行2.4ｍ・梁間2.1ｍを測る。柱穴は直径20～30cmの円形か、もしくは25～70cmの楕円形である。柱穴の埋土はおおむねマンガンを含んだ褐灰色土の単層である。遺物は一部の柱穴から土師器・黒色土器・緑釉陶器の少片が出土している。時期は13Ｃ初頭とみられる。

ＳＢ－13（第13図）

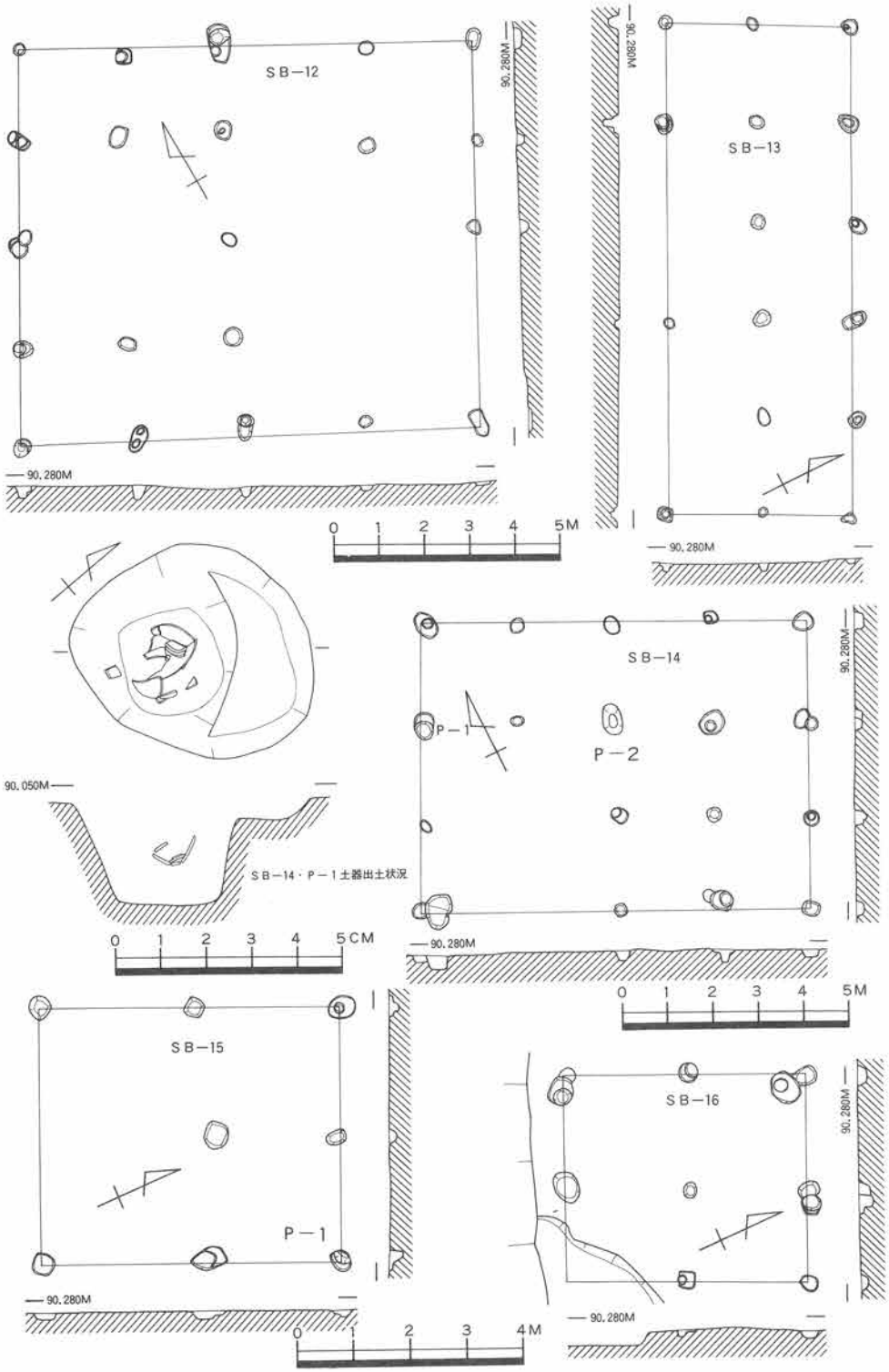
ＳＢ－12と切合っている建物である。５間×２間と東西に細長いが、南側桁行第３・５柱穴は検出されなかった。主軸方位はＮ－26°－Ｅを示し、柱間距離は桁行2.1ｍ・梁間2.1ｍを測る。柱穴は規模・形状にややばらつきがみられる。柱穴埋土はマンガンを含有した灰褐色土の単層である。遺物は約半数の柱穴から土師器、黒色土器の小片が出土している。時期は13Ｃ前半と考えられる。

ＳＢ－14（第13図）

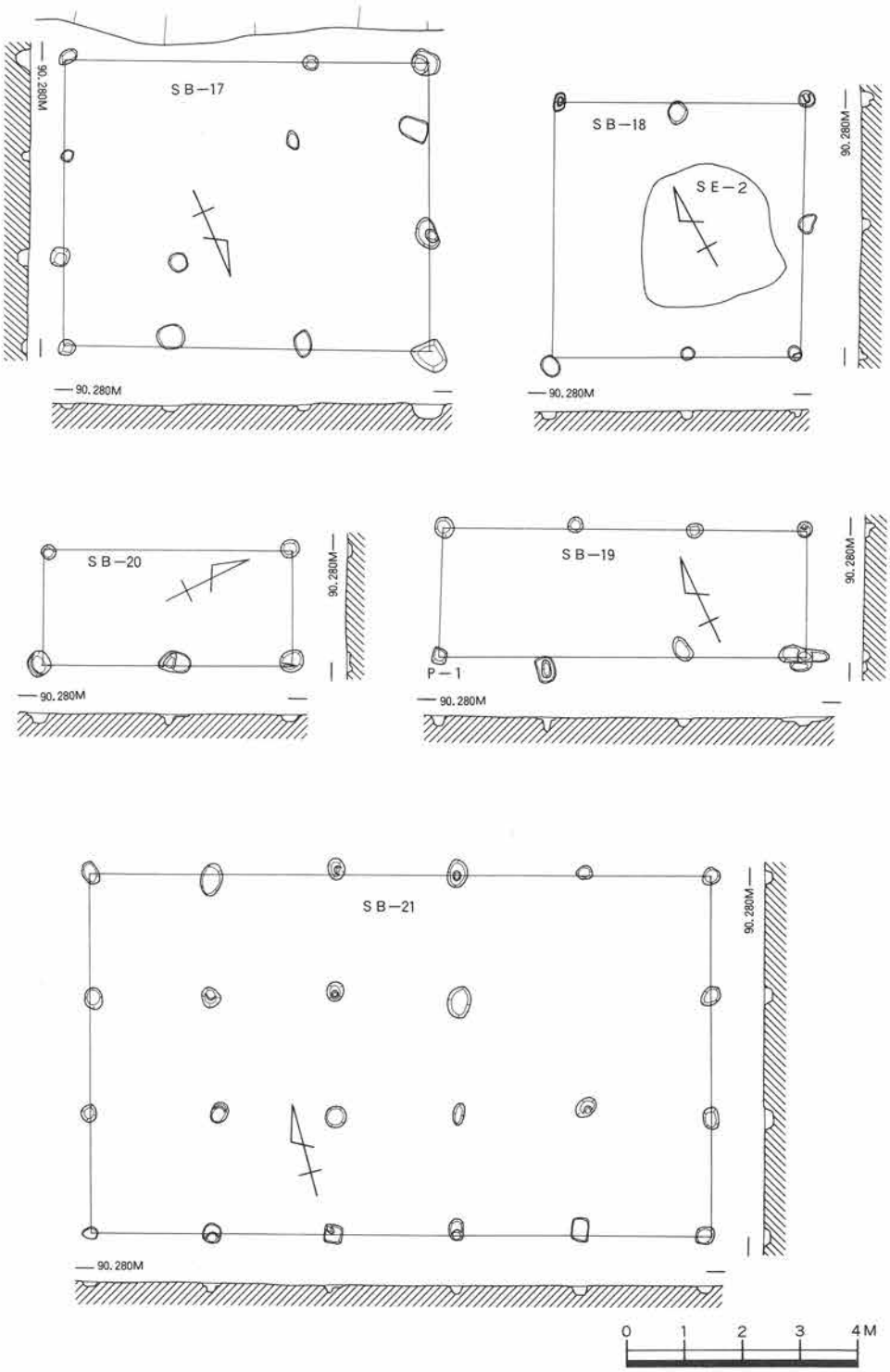
ＳＢ－13の南側で検出した５間×３間の建物である。主軸方位はＮ－28°－Ｅを示し、柱間距離は桁行2.1ｍ・梁行は1.8ｍと2.4ｍで南側が短い。柱穴は長径50～70cmの楕円形もしくは径30cmの円形を呈す。柱穴覆土はおおむねマンガン・炭化物を含有した褐灰色土と暗灰色粘質土の２層である。遺物は土師器や黒色土器が小片ではあるがほぼすべての柱穴から出土している。特にＰ－１からは白磁碗・黒色土器埦、土師器埦、羽釜がいずれも破片であるが一括して出土している。ただ柱穴中位からの出土であり、建物廃絶後の投棄と考えられる。

ＳＢ－15（第13図）

ＳＢ－14の西側で検出した２間×２間の南北棟建物である。総柱建物であると考えられるが南側妻列第２柱穴はＳＤ－11に切られ、存在しない。主軸方位はＮ－24°－Ｅを示し、柱間距離は桁行1.8ｍ・梁行2.1ｍを測る。柱穴は一辺40cmの方形か長径40～60cmの楕円形を呈す。埋土はおおむねマンガンと炭化物を含有した褐灰色土の単層であるが、一部下層が暗灰色粘質土の２層に分層できる。Ｐ－１には直径20cmの柱根が残存していた。時期は


SB−12
90.280M
SB−13
90.280M
SB−14
P−1
P−2
90.050M
SB−14・P−1土器出土状況
0 1 2 3 4 5CM
0 1 2 3 4 5M
SB−15
P−1
SB−16
0 1 2 3 4M

第13図　遺構平面図



第14図　遺構平面図

12C後半頃とみられる。

ＳＢ－16（第13図）

ＳＢ－14と17に重複して検出した。２間×２間の総柱建物と考えられているが、南東コーナーの柱穴はＳＸ－１に切られている。主軸方位はＮ－24°－Ｅを示し、柱間距離は桁行梁行いずれも2.1ｍを測る。柱穴は長径30～40cmの楕円形もしくは直径30cmの円形を呈する。柱穴埋土はいずれもマンガンを含有する褐灰色土の単層である。遺物はほぼすべての柱穴から土師器、黒色土器の小片が出土している。

ＳＢ－17（第14図）

ＳＢ－14の東に重複して検出した。建物の規模は３間×３間で、主軸方位はＮ－27°－Ｅを示す。柱間距離は桁行が2.1ｍと1.8ｍ・梁間が1.8ｍと1.5ｍとそれぞれ南側と東側の柱間が短い。柱穴の規模・形状にはかなりのばらつきがみられる。柱穴埋土はほぼマンガンを含有した褐茶灰色土の単層である。北東コーナーの柱穴中央より、一辺15cm、高さ10cm程の面どりした石が検出された。石は花崗岩で礎板に用いられたものと考えられる。遺物は約半数の柱穴から土師器と黒色土器の小破片が出土している。

ＳＢ－18（第14図）

ＳＢ－17の東側で検出されたＳＥ－１の覆屋である。建物の規模は２間×２間であるが、西側桁行第２柱穴が検出されなかった。主軸方位はＮ－28°－Ｅを示し、柱間寸法は桁行2.4ｍ、梁行2.1ｍを測る。柱穴覆土はいずれもマンガンを含有した茶灰色土の単層である。

ＳＢ－19（第14図）

ＳＢ－17の北東で検出された３間×１間の東西棟建物である。主軸方位はＮ－26°－Ｅを示す。柱間距離は桁行1.8ｍと2.7ｍで中央が長く、梁間は2.1ｍを測る。柱穴は長径40cmのダ円形もしくは径30cmの円形を呈する。埋土はおおむね灰茶色土の単層である。遺物は北西コーナー柱穴底近くから完形の土師器大皿（第20図３）が正常位で出土した。時期は13C初頃であると考えられる。

ＳＢ－20（第14図）

ＳＢ－18の南東に隣接して検出した２間×１間の南北棟建物であるが、西側桁行中央の柱穴は検出されなかった。主軸方位はＮ－24°－Ｅを示し、柱間距離は桁行2.1ｍ、桁行2.1ｍを測る。柱穴は長径30～50cmの楕円形を呈す。埋土は灰茶色土の単層である。

ＳＢ－21（第14図）

ＳＢ－20の南東で検出した５間×３間の建物である。主軸方位はＮ－28°－Ｅを示し、柱

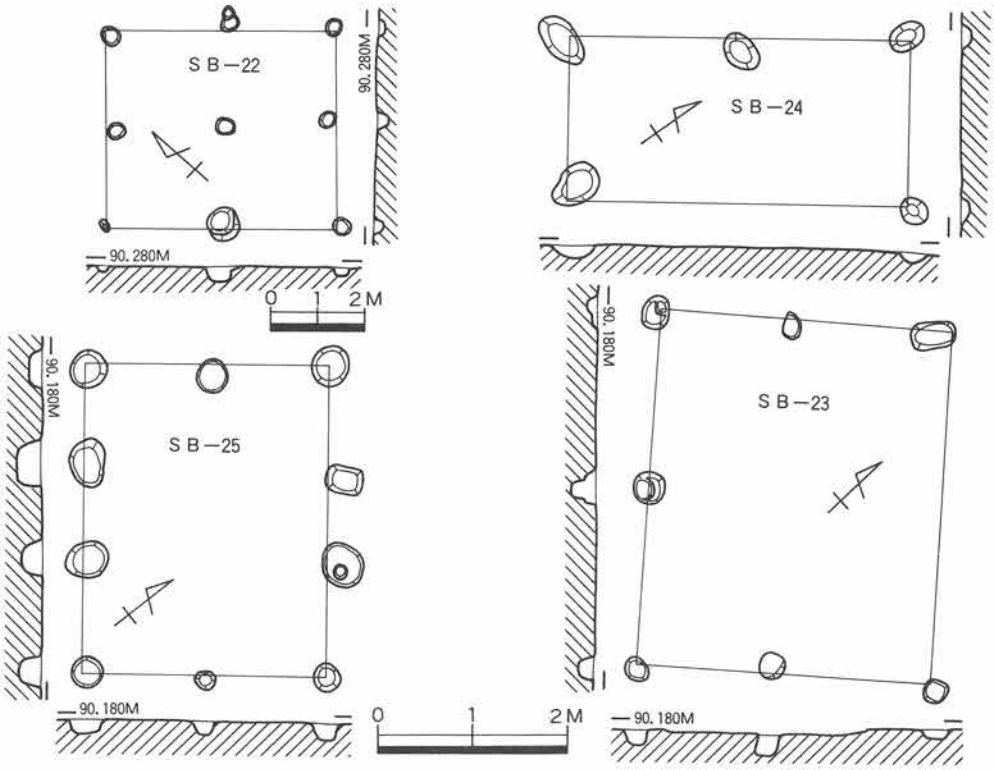
間距離は桁間、梁行とも2.1mを測る。柱穴の形状にはかなりのばらつきがみられるが埋土はおおむねマンガンを含有した灰褐色土の単層である。遺物はほぼすべての柱穴内から土師器、黒色土器の小片が出土している。時期は13C初頭と考えられる。

SB－22（第15図）

SB－7の東に位置し、一部西側が重覆して検出した2間×2間の建物である。主軸方位はN－46°－Eをとり、柱間距離は桁行2.5m・桁行2.1mを測る。柱穴の形状はおおむね楕円形を呈し、大きさは長径30～40cm、深さ20cm程度であるが、南側桁行中央穴が直径7.5cm、深さ36cmと他に比して大きい。柱穴の埋土は黒茶褐色粘質土の単層である。

SB－23（第15図）

SB－1の北東に近接して検出した2間×2間の建物であるが、東側桁列の中央穴は検出されなかった。主軸方位はN－47°－Eを示し、柱間距離は桁行2m、梁間1.5mを測る。柱穴は直径25～35cmの円形もしくは長径30～50cmの楕円形を呈す。柱穴埋土はおおむね黒灰色粘質土である。



第15図　遺構平面図

ＳＢ－24

ＳＢ－23の南に隣接して検出した１間×２間の建物であるが、西側桁行のみ２間である。主軸方位はＮ－38°－Ｅを示し、柱間距離は桁行２ｍ、梁間1.6ｍを測る。柱穴は長径30～60㎝の楕円形を呈する。柱穴埋土は黒茶褐色粘質土の単層である。

ＳＢ－25

調査区中央やや西側で検出した３間×２間の東西棟建物である。主軸方位はＮ－41°－Ｅをとり、柱間寸法は桁行1.1ｍ、梁間1.4ｍを測る。柱穴掘方は25～40㎝の円形もしくは長径50㎝の楕円形を呈する。柱穴覆土はおおむね黒灰色粘質土の単層である。遺物はほとんどの柱穴から土師器片が出土しているが時期は明確でない。

柵列

ＳＡ－１

ＳＢ－21の北及び西側をＬ字形に囲む柵列である。柱穴間は2.1ｍで、長さはそれぞれ、10.5ｍを測る。柱穴埋土は灰褐色土の単層である。遺物は若干の柱穴より土師器片が少量出土している。

ＳＡ－２

ＳＡ－１同様ＳＢ－21に付設された柵列で、ＳＢ－21とＳＡ－１の北側で検出したが、南東端は調査区外へ伸展する可能性がある。柱間距離は３ｍとやや長い。柱穴埋土はマンガンを含有した灰褐色土の単層である。

ＳＡ－３

ＳＢ－13に付設する柵列と考えられる。柱間距離は３ｍを測る。柱穴埋土は茶灰色土の単層で、若干の土師器片が出土している。

井戸

ＳＥ－２

調査区南側、ＳＢ－19とＳＢ－26の間で検出した。掘方2.4ｍ×2.1ｍの不正方形を呈し、西側に小さな平坦面を持つ。井戸底までの深さは2･3ｍを測るが、井戸枠は75㎝程下げた時点で検出した。井戸枠は縦板組横桟どめの構造をとり、板材を縦方向に並べ横桟で保持するものである。横桟は長さ95㎝、方６㎝程度の木が目違い柄で組まれ、支柱で補強されている。横桟は三段が現存するが一段目と二段目は西側桟木がいずれも欠落しており、さらに一段目は北側と南側・二段目は北側の桟木が土圧のため内側へずれ込んでいる。縦板は長さ0.5～1.3ｍ、幅５～15㎝程度のもので、北・南・東側はほぼ原位置を保っているが、

西側は半分以上が井戸枠内へ倒れ込んでいる。水留は曲物が使用されており、粘土を間層に上下に２基を検出した。粘土より上の曲物（第二曲物）は径49cm、高さ40cmを測り、土圧のためか井戸枠中心より東へずれていた。粘土より下の曲物（第一曲物）は径45cm、高さ30cmとやや小型であり、井戸枠のほぼ中心にすえられていた。

井戸内の層位は６層に大別される。第Ⅰ層は井戸廃棄後の堆積層で、地山の崩落や掘方くずれが認められ、かなり細かく分層するとⅠ－ｂとそれ以後に堆積したⅠ－ａに分かれる。遺物はほぼ全ての埋土に包含されているが少破片がほとんどである。第Ⅱ層は第二曲物内の堆積層で、暗灰色粘質土と砂礫混りの濃灰色泥土の二層に分層される。遺物は13Ｃ中頃の土師器小皿と黒色土器埦が出土している。第Ⅲ層は井戸枠内に堆積した砂礫混りの淡灰色粘質土である。第Ⅳ層は西側縦板が倒れ込んださいに流れ込んだ土である。第Ⅴ層は第一曲物内の堆積層で、濃灰色粘質土と灰色砂礫混粘質土に分層できる。遺物は13Ｃ初頃の土師器小皿と黒色土器埦・青磁埦が出土した。第Ⅵ層は縦板外の堆積層で井戸構築時の掘方埋土と考えられる。

さて、本井戸は上述したように第Ⅳ層を間層にして上下２基の曲物が検出されており、曲物内からそれぞれ13Ｃ初め頃と中頃の土器を出土した。これは井戸の２時期の使用を示すものと考えられる。すなわち、西側桟木がはずれたため土圧で西側縦板が井戸枠内に倒れ込み、同時に縦板外側の土が流れ込み曲物（第一曲物）をふさいだのであろう。その後流れ込んだ土を除去することなくその上に再び曲物（第二曲物）を設置したものと思われる。しかし、再構築した曲物の深さで十分な勇水を確保できたのか、あるいはたとえ十分な勇水があったとしても清浄な水は期待できず、飲料を目的とした井戸本来の役割りを十分はたしえたかどうかは疑問である。

土壙（ＳＫ－23～32）

ＳＫ－23

調査区南側で検出した楕円形の土壙で、ＳＢ－14の柱穴に一部切られている。長径4.1m 短径1.5ｍ、深さ10cmを測る。埋土は暗褐灰色土の単層である。遺物は土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器の小片が出土している。12Ｃ代のものと考えられる。

ＳＫ－24

ＳＢ－21の西に近接して検出した土壙である。南側は攪乱を受け、全容は明らかでないが、現状では長径１ｍ、短径1.2ｍ、深さ30cmを測る。埋土はマンガン、炭化物を含有した灰褐色土の単層である。遺物は土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、白磁の小片が出土している。時期は12C 末頃とみられる。

ＳＫ－25

調査区南辺、落込み状遺構の底面で検出した。南側が調査区外にあたるため全形は明確でないが、直径１ｍ の円形状を呈すると思われる。中央部は二段堀りの形態を示し、深さは24cmを測る。埋土は上層が灰褐色土・下層が暗灰色粘質土に分層できる。遺物は土師器、黒色土器、須恵器小片が出土している。

ＳＫ－26

ＳＫ－25の西・落込み状遺構の底面で検出した。長径2.5m の長楕円形を呈する。深さは20cmを測り、底面は皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質土の単層で、遺物は土師器が少量出土している。

ＳＫ－27

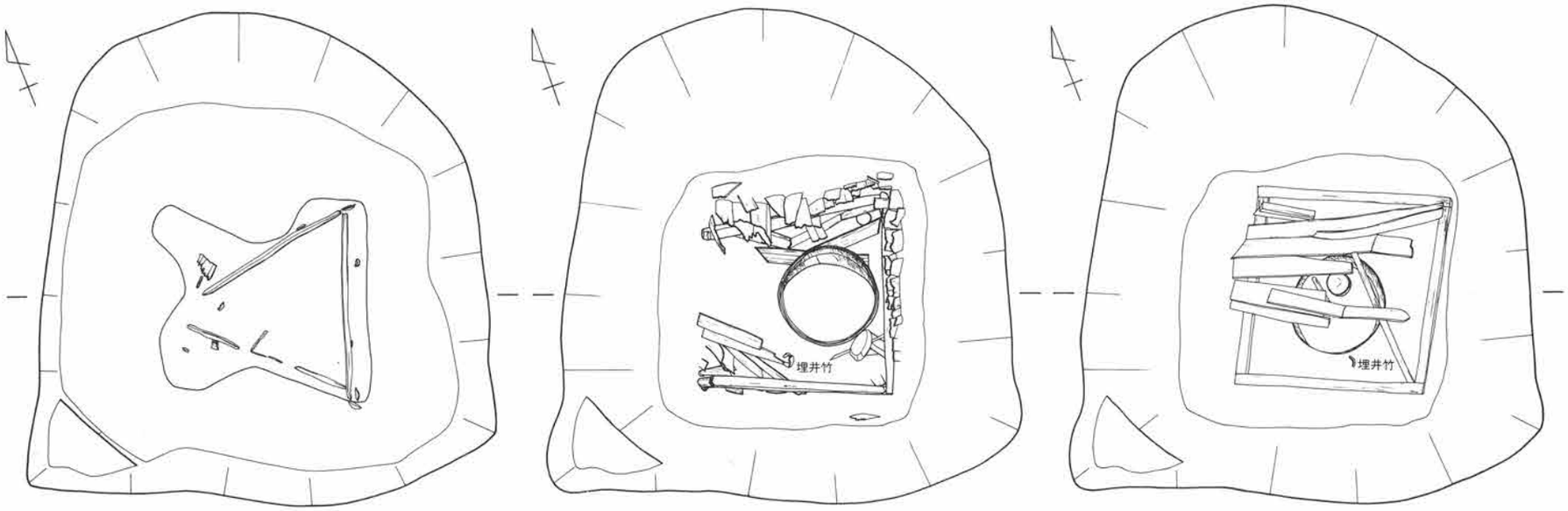
ＳＫ－26同様、落込み状遺構の底面で検出した。長径2.5m の長楕円形を呈する。埋土は茶灰色粘質土で・遺物の出土はなかつた。

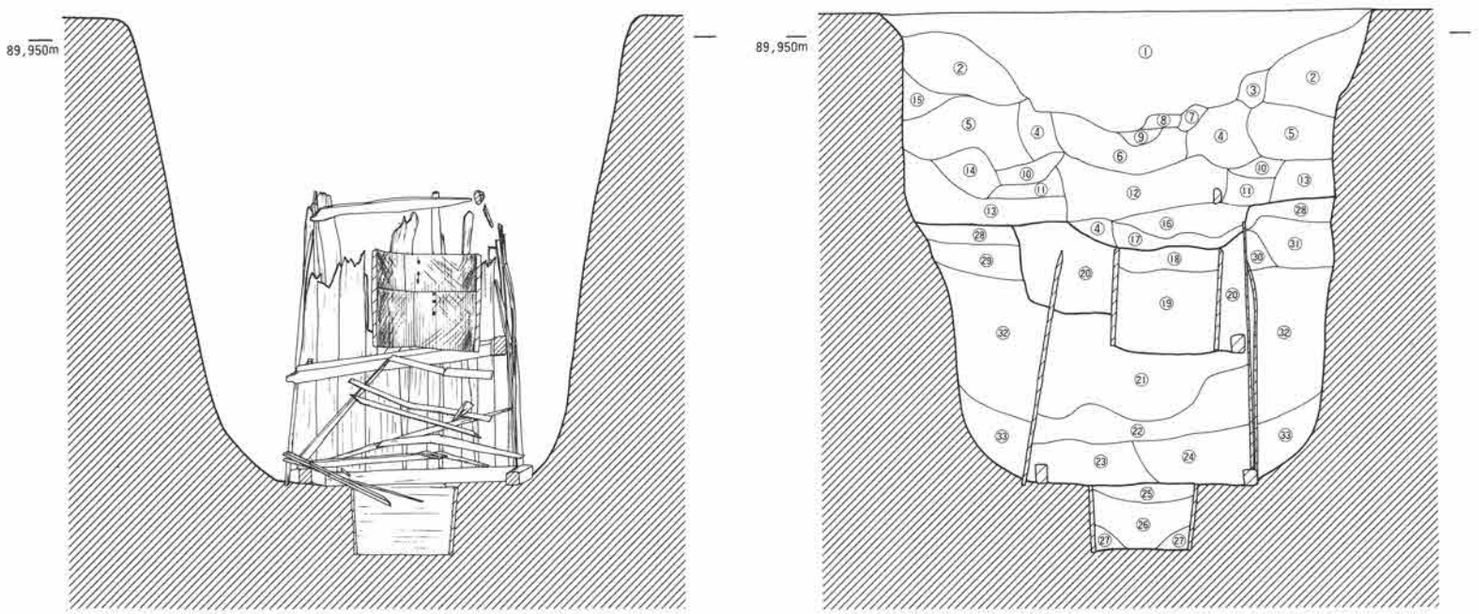
ＳＫ－28

ＳＫ－23の南側に検出した楕円形の土壙で、ＳＢ－21に一部切られている。長径2.3ｍ・短径30cm・深さ10cmを測る。埋土は灰茶色土の単層である。遺物は素地が軟質な緑釉片が出土した。12Ｃ代のものとみられる。

ＳＫ－29

調査区西端で検出した、長径2.5m の楕円形の土壙である。埋土は上層が灰褐色土、下層は暗灰色粘質土が堆積する。





第 I 層
①灰茶褐色土（細い砂礫多し）
②褐灰色土（粗い砂礫多し）
③暗灰褐色土
④灰色粗質土（粗砂まじる）
⑤暗灰褐色弱粘質土（細い砂礫多し）
⑥明灰色粘質土
⑦淡灰茶色弱粘質土
⑧淡灰色弱粘質土
⑨暗黄灰色土（やや粗い砂含む）
⑩暗灰茶色粘質土
⑪暗灰茶黄色粘質土
⑫濃灰色粘質土
⑬暗灰色粘質土（砂礫まじる）
⑭暗茶灰色土（砂礫多し）
⑮暗褐色土
⑯茶灰褐色粘質土
⑰暗黄灰色粘質土
第 II 層
⑱暗灰色粘質土
⑲濃灰色泥土
第 III 層
⑳淡灰色粘質土
第 IV 層
㉑暗灰色粘質土
㉒暗灰色粘質土（砂礫まじる）
㉓暗灰色粘質土
㉔明灰色粘質土
第 V 層
㉕濃灰色粘質土
㉖灰色砂礫
㉗灰色粘質土
第 VI 層
㉘灰茶色粘質土
㉙暗黄灰色粘質土（砂礫まじる）
㉚暗灰茶色粘質土
㉛暗灰黄橙色粘質土（鉄分含有）
㉜暗灰色粘質土（細砂まじる）
㉝暗灰色粘質土（粗砂まじる）

0 1m

第16図　ＳＥ－１　平面図・断面図

ＳＫ－30

調査区北辺で検出した不定形の土壙である。長径、７ｍ、短径２ｍ、深さ30cmを測る。埋土はマンガンを含有した茶灰色土の単層である。遺物は土師器・黒色土器・陶器片があり、比較的量も多かった。13Ｃ後半代とみられる。

ＳＫ－31

ＳＫ－30の南東で検出した長楕円形の土壙である。長径６ｍ、短径１ｍ、深さ20cmを測る。埋土は灰茶色土の単層で、土師器や黒色土器の小片が出土している。

ＳＫ－32

ＳＫ－31の南で検出したＬ字形の土壙である。埋土は灰褐色粘質土で、遺物の出土はなかった。

溝

ＳＤ－10

ＳＫ－23と28の中間で検出した。長さ11ｍ、幅50cm、深さ10cmを測る。ＳＢ－21と22の柱穴に一部切られている。埋土は灰褐色土の単層である。遺物は土師器、黒色土器が小片ながら出土した。

ＳＤ－11

ＳＤ－10西で検出した。南側は落込み状遺構に切られているが、現状で長さ６ｍ・幅１ｍ・深さ30cmを測る。埋土は明灰茶色土の単層である。遺物は残存状態が悪く図示できなかったが、13Ｃ代の土師器小皿が出土している。

ＳＤ－12

ＳＢ－12に重復して検出した。長さ7.8m、幅0.5～１ｍ・深さは５cmと浅い。ＳＢ－13に付設された溝で・屋敷地を画する性格をもつと考えられる。埋土は茶灰色土の単層で、瓦器埦の破片が（第20図11・12）出土している。時期は13Ｃ前半代と考えられる。

ＳＤ－13

ＳＢ－21の北と西をＬ字形に囲む溝である。北溝は長さ3.5m、西溝は長さ15m、幅は50cm・深さは20cmを測る。一般に雨落溝と呼称されるが、ＳＤ－12同様屋敷地を画する性格を持つと考えられる。埋土はマンガンを含有した茶灰色粘質土で、土師器、黒色土器が出土しているが、いずれも小片である。時期は13Ｃ初頭と考えられる。

ＳＤ－15・16

ＳＤ－13同様ＳＢ－21に付設された溝である。ＳＤ－15は長さ5.5ｍ、幅１～1.7ｍ、深さ５cm。ＳＤ－16は長さ７ｍ、幅13m、深さ５cmを測る。両者とも幅広く、浅い溝である。埋土はいずれも淡灰色土の単層である。

ＳＤ－17

ＳＢ－12あるいはＳＢ－13に付設された溝である。長さ4.7m、幅60cm、深さ10cmを測る。埋土は灰褐色粘質土の単層で、遺物は土師器片が若干出土している。

ＳＤ－14

調査区北端で検出した。北東側は調査区外へ延長するが、現状では長さ7.4m、幅1.6～3.5ｍ・深さ20cmを側る。埋土は鉄分が沈殿した灰色粘質土と茶褐橙色粗砂の２層からなる。遺物は12C後半～14C代にわたる土師器、須恵器、黒色土器、陶器の破片が比較的多く出土した。

ＳＸ－１

南側を落込み状遺構に切られ全容は明らかでないが、一辺1.8ｍの方形状の平坦部と一辺５ｍの三角形状、ないしは楕円形状の周溝からなる特異な形状を示すと思われる。周溝内の埋土は茶灰色土・暗褐灰色粘質土・灰褐色粘質土の３層からなる。遺物は西側周溝を中心に12C後半～13C前半にかけての土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土している。

落込み状遺構

調査区南側を流れる現河川にほぼ平行に走る自然の落込みで、一部南側の遺構群を切っている。遺物は12Ｃ後半～13Ｃ代にわたる土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器片が出土した。

近　世

土壙

ＳＫ－33

調査区東端で検出した。一辺４ｍの方形状を呈し、深さは50cmを測る。埋土は灰色粘質土・褐灰色粘質土・鉄分が沈殿した橙茶褐色砂の３層が堆積する。遺物は13C代の白磁埦や近世初頭の陶器片が出土した。埋土から水が滞溜していた痕跡を認めることができ、水をためる溜池状の施設であったことが推定される。

第17図　第１調査区平面図（中世）

2　遺　物

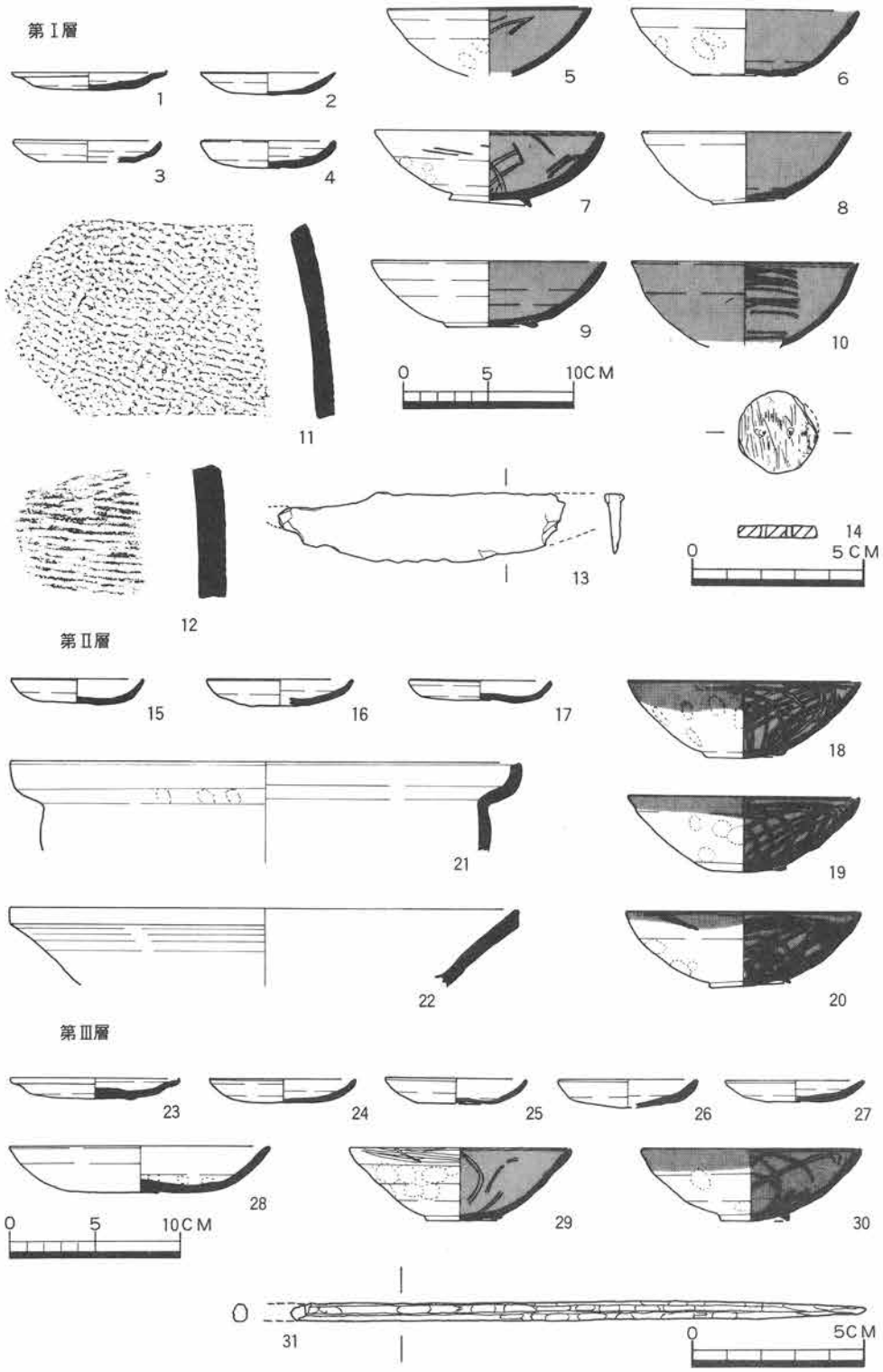
ＳＥ－２出土遺物

第Ⅰ層出土遺物（第18図１～14）

遺物量は最も多いが細片が大部分である。１～４は土師器小皿である。「て」の字口縁１・口縁部が直線的に立ちあがり、端部を尖らせ気味に薄くおさめるもの(2)、口縁部はやや内彎し、端部を丸くおさめる３・４の四つがある。口径、器高は１が９cm、１cm、２が8cm・1.2cm・３は8.8cm・1.2cm・４が8cm・1.4cmである。５～９は黒色土器埦であるが、残存状態が悪く、外面の研磨や内面の暗文は不明瞭である。５、６、８は瓦器は13点あるが小片のため図化できたのは１点だけである。10は体部が内弯する埦で、端部内面に一条の沈線がめぐる。外面はナデ、内面は横方向のヘラ研磨が施されている。焼成は悪く、色調もいわゆる銀黒色にはほど遠い。一応、白石編年[注④]のⅡ－３段階に比定できるが、在地産の可能性が強いように考えられる。11・12は須恵質の陶器片である。11は暗灰色を呈し、格子目叩きが施されている。同一個体と考えられる破片が12点あった。12は外面に細い平行叩きがみられ、内面はナデで仕上げる。13は鉄製刀子である。刃部、茎部の先端が欠損しているが、現存長さ8.5cm、幅２cm、刃部厚さ３mmを測る。14は滑石製有孔円盤である。直径2.4cm、厚さ４mmを測り、２孔を穿つ。周縁を面とり。表裏面に研磨痕が残る。

第Ⅱ層出土遺物（第18図15～22）

第二曲物内出土土器で、比較的残存状態が良好であった。15～17は口縁部が内弯気味に立ちあがり、端部を丸くおさめる土師器小皿である。口径・器高は15から８cm・1.4cm・8.8cm・1.6cm・8.8cm・１cmを測る。18～20は黒色土器埦である。口径14cm・器高4.4cmを測る。体部はやや内弯し、口縁端部内面に一条の沈線がめぐる。高台は断面が扁平な三角形状ものを貼りつけており、高台の機能をかろうじて保っている。外面口縁にヘラ研磨・内面にラセン状の暗文が施されているが、いずれも簡略化傾向にある。20は内面にハケ目調整が残っている。21は口縁部が受口状を呈する瓦質鍋で、内外面ナデで仕上げる。22は口縁端部に平坦面をもつ鉢で、東播産のものと考えられる。



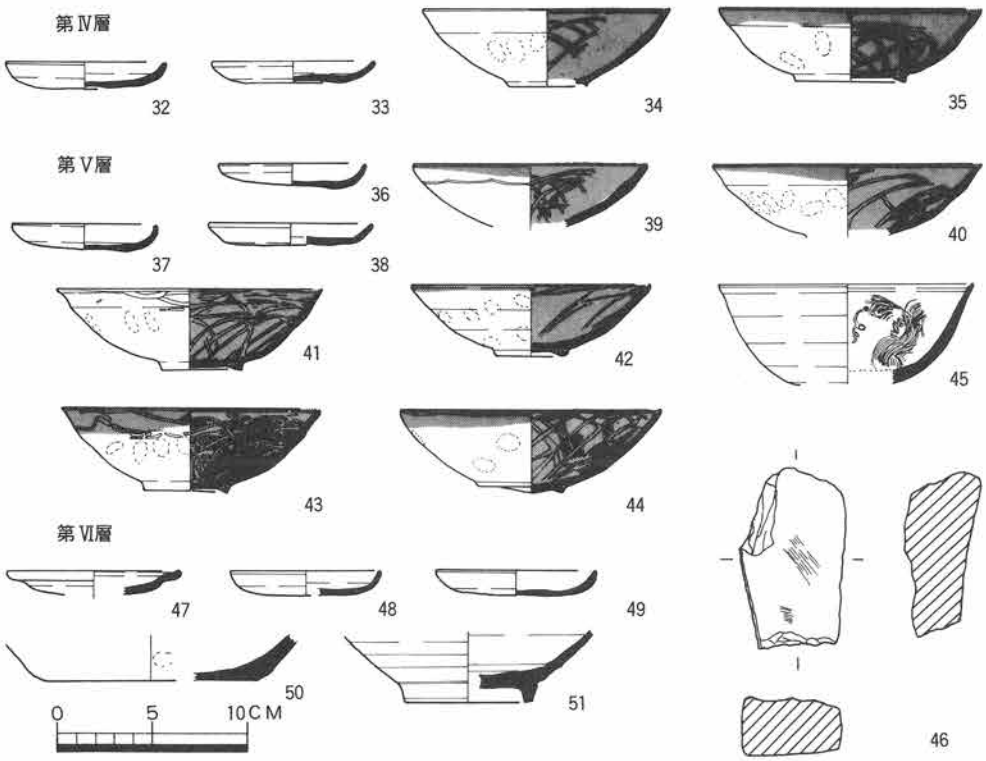
第18図　ＳＥ－２出土遺物

第Ⅲ層出土遺物（第18図23～31）

23～27は土師器小皿である。「て」字状口縁23・口縁部が内弯し端部を丸くおさめるもの24～26・口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、端部を尖り気味にする27の三者がある。口径・器高は23から10cm・1.2cm、8.8cm・1.4cm、8.4cm・1.4cm、8.4cm・1.6cm、8.2cm・1.2cmを側る。28は口縁部が内弯気味に立ち上がり端部がやや外方へ突出する土師器大皿である。口径15.6cm・器高2.6cmを側る。29・30は口径13cm、器高4.4cmを側る黒色土器椀である。外面口縁部にヘラ研磨、内面にラセン状の暗文が施されているが残存状態は悪く、明瞭でない。31はハシ状木製品である。先端を鋭利な刃物で削り尖らせている。現存長は17cmを測る。

第Ⅳ層出土遺物（第19図32～35）

32・33は口縁部が内弯し、端部が丸くおさまる土師器小皿である。口径、器高は32が8.6cm・1.4cm、33が8.8cm・1.2cmを測る。34・35は黒色土器椀である。34は口径13.4cm・器高4cm、35は口径14cm、器高4cmを測る。口縁部外面にヘラ研磨・内面にラセン状暗文が施されているが剝離のため明瞭でない。



第19図　ＳＥ－２出土遺物

第Ⅴ層出土遺物（第19図36～46）

第一曲物内出土遺物で、残存状態は良好であった。36～38は土師器小皿である。36・37は口縁部が内弯気味に立ち上がるタイプのもので、口径・器高はそれぞれ8㎝、1㎝を測る。38は口縁部が直線的に立ち上がり、底部との境が明瞭なもので、口径8.8㎝、器高1㎝を測る。39～44は黒色土器椀である。口径、器高は39・40が12.6～13㎝・3.8㎝、41～44は14～14.4㎝、4.4㎝を測る。口縁部外面のヘラ研磨及び内面のラセン状暗文は見著に認められる。39は口縁部外面にヘラによる波状文が一条めぐる。43・44は内面にハケ目が残る。45は青磁碗で、内面に櫛による文様が施されている。胎土は精良で明灰色を呈し、釉は緑青色に発色する。龍泉窯系と考えられ[注④]、森田・横田氏分類のⅠ類－3に相当する。46は砂岩質の砥石で、使用面は1面が認められる。火熱を受けた痕跡がある。

第Ⅵ層出土遺物（第19図47～51）

47～49は土師器小皿である。47は「て」字状口縁・48・49は口縁部が内彎気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。口径・器は47が9.6㎝・1.2㎝、48が8㎝・1.2㎝、49が8.4㎝・1.2㎝を測る。50はいわゆる中世須恵器の鉢である。底部だけの残存であるが内面に使用痕が認められる。東播産の可能性が考えられる。51は高台を比較的高く削り出す白磁椀である。外面下半ヘラ削りで、内面見込みに段を有す。胎土は精良で灰白色を呈す。森田・横田氏分類のⅤ類に相当する。

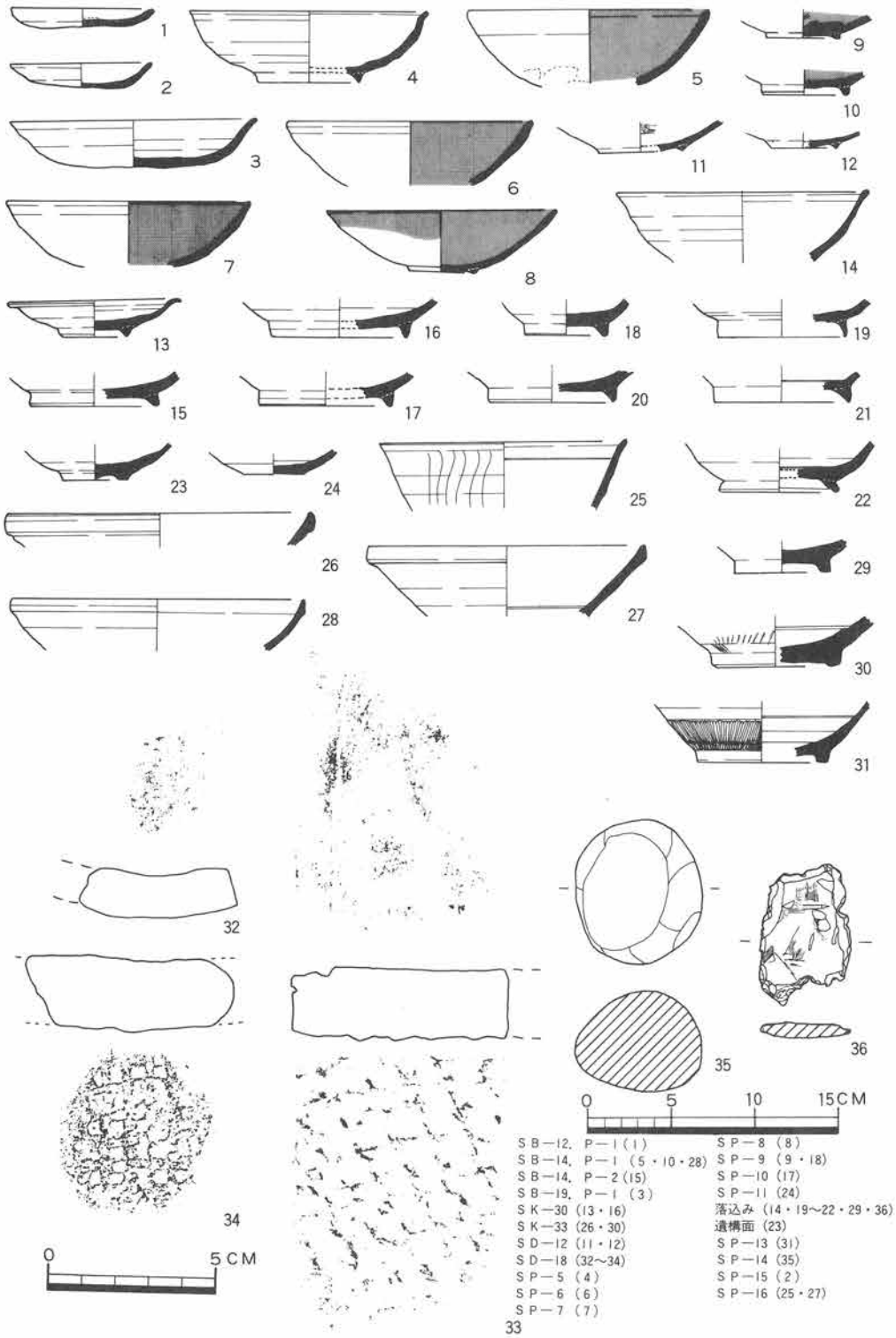
その他の遺構出土遺物（第20図）

土師器（1～4）

1・2は土師器小皿で、器高・口径は1が7.4㎝・1㎝・2が7.4㎝・1.2㎝を側る。3は口径12.8㎝・器高2.4㎝を測る土師器大皿である。底部内外面に指頭圧痕を見著に残し、口縁端部のみを外方へ突出させる。4は口径14.2㎝、器高4.2㎝とやや浅い土師器椀である。体部は内弯し、口縁部は外反する。調整は回転ナデによる。

黒色土器（5～10）

いずれも椀であるが残存状態は悪く調整や暗文は明瞭でない。5～7は口径14.6㎝を測る。器壁は厚手で8は口径13.8㎝・器高3.6㎝とやや扁平な器体を呈す。断面三角形状の高台を貼りつけているが底面が接地しており、かろうじて高台の機能を保っているといえる。9は三角形状、10は比較的しっかりした高台を貼りつける。



第20図　その他の遺構出土遺物実測図

瓦器（11・12）

いずれも埦の底部である。外面はナデ、内面はヘラ研磨がみられる。器壁はやや薄手であるが胎土、焼成とも悪い。

灰釉陶器（13～19）

皿と埦がある。13は縁皿で、口縁端部を外下方につまみ出す。施釉は口縁部のみわずかに認められる。14は埦で、内弯する体部から口縁はわずかに外反し、端部は丸くおさまる。施釉は漬け掛けによる。15～19は埦の底部である。高台貼りつけ後、ロクロナデで仕上げられており、底部に糸切痕が残るものが多い。猿投窯編年[注⑤]に比定すると13は鳴海82号窯式に、14～19も折戸53号窯式～百代寺窯式の灰釉陶器終末期にあてることができるが、一部は山茶碗の範疇に含まれると考えられる。

縁釉陶器（20～22）

20～22はすべて埦の底部である。素地はいずれも軟質であるが、釉の剝離が著しい。22は高台内面に段を有すいわゆる近江型の形態をもつ。全体的に丁寧につくられており、良品と思われる。

陶磁器（23）

23は唐津焼の埦である。高台は断面台形状を呈し、体部は内弯気味に上方にのびる。黄緑色の釉がかかり、見込みに焼成時の三叉トチン痕が残る。

磁器（23～30）

24は白磁皿で底部をわずかに上げ底状に削る。釉は薄く黄灰色を呈するが、体部下半には施釉されない。見込みに段を有す。25～28は白磁碗の口縁である。25は口縁部がやや外反する。外面体部に櫛目文、内面口縁部付近に沈線を有す。釉は黄灰色を呈す。26・27は大きな玉縁を有す碗で、29は見込みに沈線状の段をもつ。釉は厚く26が灰白色、27が黄灰色を呈す。28は小さな玉縁をなし、体部は丸味をもつ。釉は薄く黄白色を呈す。29～31は椀の底部である。30は高台も厚く削り出しもわずかである。見込みに沈線状の段を有す。31は高台をやや厚く削り出し、見込みを押え凹ませる。釉は29・30が灰白色、31が黄灰色を呈し、外面体部は施釉しない。森田、横田氏分類にあてはめると、24・31はⅥ類－Ⅰｂ、25はⅤ類－２・26・29はⅣ類、30はⅣ類－１a、28はⅡ類に相当する。

３点が出土した。いずれも平瓦と考えられる。32・33は格子目叩きが、31・33には布目が残る。

Ⅲ　小　結

本調査区で検出した古墳時代の遺構の年代は庄内式期、布留式期、６Ｃ末～７Ｃ初頭の３期がある。庄内式期の遺構はわずかに土壙１基しか検出しておらず、集落の実態についてはつかめなかった。布留式期の遺構は倉庫状建物１棟、土壙２基、溝２条で、住居は検出できなかった。生活面の削平により住居の検出が困難なためであると考えられるが、あるいは集落の中心が西側調査区外に存在するのかもしれない。６Ｃ末～７Ｃ初頭になると遺構の数も増え、本調査においてはこの時期が中心であったことがわかる。

古墳時代以後、平安後代中頃にかけての遺構は検出されていない。この間、集落は途絶えていたものと思われる。

平安時代末期～鎌倉時代になると再び集落が形成されてくる。この時期の建物はＳＥ－2の覆屋を除き11棟検出されているが、建物の配置、切り合いから４期（Ⅰ～Ⅳ期）４群（Ａ～Ｄ層）に分けることができる。

Ⅰ期はＡ群のＳＢ－12、17があたる。Ⅱ期はＡ群のＳＢ－13、16、Ｂ群のＳＢ－19～21があたる。Ⅲ期はＡ群のＳＢ－14・15があたる。Ⅳ期はＣ群のＳＢ－22～24とＤ群のＳＢ－25があたる。Ａ～Ｃ群はいずれも２～３棟で構成され、母屋にやや小ぶりな建物が１～２棟付属する。ＳＢ21のように建物のまわりを柵や溝で囲むものもある。

私宅のまわりに柵や溝をめぐらし、外界と区画する行為の起源は農民が畠地を野獣の侵入や他人からの作物の、奪を防ぐために設けたとする説がある。私宅にめぐらされた柵や溝には私有権を明示し、他者の侵入を防止する役割があったのだろう。その意味においてはＳＢ－21とＳＢ－19とは別の群としてとらえるべきかもしれない。Ⅰ～Ⅲ期の建物方位はⅥ－26°～30°－Ｅをさし、周辺の条里地割りⅥ－33°～34°－Ｅとは若干のズレを示す。これはこの地域を界川及びその支流の川筋にあたり、地割りが乱れていたためと考えられる。

Ⅳ期は建物方位はⅣ－40°－Ｅを示し後述する区面溝集落の建物方位とほぼ合致する。

最後にＳＥ－２に係る井戸祭祀の痕跡についてふれておこう。

まず第一曲物底に黒色土器椀（第19図41・43）と土師器小皿（第19図37）が正常位に納置されていたことについてである。これらは曲物北東端に重ね置かれ、横に棒状の木製品がそえられていた。出土状況から転落あるいは井戸廃絶時のものとは考え難く、井戸構築時に井戸底に納入されたものと考えられる。石川県鳳至郡穴水町西川島遺跡群では、曲物、土器、人形が井戸の「まなこ」として井底に納入されていた例があり、井戸（水神）信仰のあらわれとしてとらえられている。※注⑧ 本例も何らかの意識をもって納入されたものではないだろうか。

次に井戸枠内にほぼ垂直につきささった状態で検出された竹筒についてである。竹筒は径約７㎝、長さ現存約65㎝で節がくり抜かれており、先端は井戸底の礫層にまで達していた。水野正好氏は「井筒をのこした一井とその秘呪」の中で井戸に残された竹筒を井戸を埋めるさいの儀式に用いた井鎮具としてとらえられている。※注⑧ 本例も井鎮具としての条件を十分に満たすものであり、「埋井の竹」としてとらえることができると考える。ただ、この井戸の場合使用時期が２時期想定され、「埋井の竹」がどの時期の廃絶に伴なうものかが問題となる。現状ではその判断は困難であるが、竹筒が第二曲物底、第Ⅳ層上面から検出され、井戸の中心（曲物）をはずれていたことや以前使用していた井戸（第一曲物）を放置したままその上に曲物を再構築することは考えにくいことから、第一曲物廃絶後に立てられた可能性が強いと考える。（宮下）

注①　中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981年

注②　中主町教育委員会山田謙吾氏に御教示いただいた。

注③　白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究』54古代学協会1969年

注④　横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館集』４　九州歴史資料館　1978年

注⑤　檜崎彰一、斉藤孝正「猿投窯編年の再検討について」『研究紀要』２　愛知県陶磁資料館　1988年

注⑥　穴水町教育委員会『西川島』Ⅰ・Ⅱ　1980、1981年

注⑦　水野正好「竹筒をのこした一井とその秘況」『草戸千軒』No.36

第２節　第２調査区

Ⅰ　調査概要

第２調査区は調査対象地区の南端にあたる部分で現在の境川とその支流に挟まれた地区を対象に調査区を設定した。確認された遺構は、古墳時代の祭祀に関わる土壙１基と平安時代末期から中世にかけての遺構、掘立柱建物４棟、溝４条、土壙墓１基と柱穴とみられるピット群である。遺構の密度は調査区の中央やや北よりの地点でかわる。これより南に於いては安定した土壌のうえに掘立柱建物やピットが散在的に存在しており、これより北では、すぐ脇を走る現在の河川に平行して走るように太古の河川の跡と思われる（念の為に一部深掘りの調査を実施したが３ｍ以上のバラスの堆積がみられただけで遺物はみられず、上面に切っている遺構のうち一番古い布留式土器が出土した土壙以前に既に埋まっていたものと思われる。）バラスの堆積がみられその面をベースとして古墳時代の土壙や平安末期の溝群やピット群が多数検出された。また、調査区の南端では現境川の元の川幅と考えられる砂レキ層が確認できた。

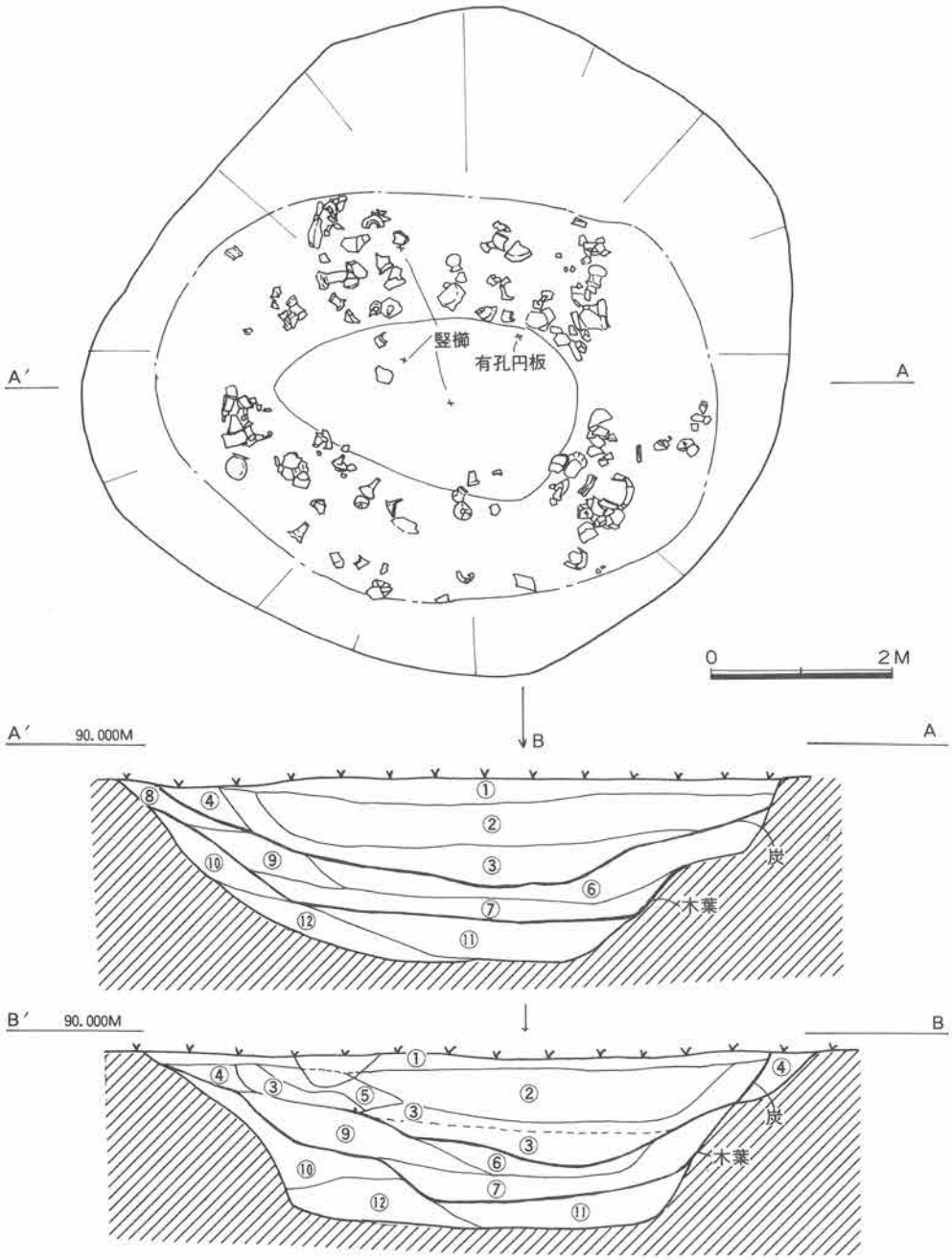
Ⅱ　古墳時代の遺構と遺物

１　遺　構

ＳＫＯ１（第21図）

調査区の北端部の中央に位置し、直径約８ｍ、深さ１ｍを測る楕円形の土壙で層位は全部で12層を数えほぼレンズ状に堆積している。①層（灰褐色混礫土）、②層（茶灰褐色粘質土）の下に多量に土器を包含している③層（暗黒褐色粘質土）がありこれらの下に一面に薄く炭の堆積層がみられた。さらにこの下には⑥・⑨層の土器を多量に包含する層群があり、その下に⑦層（暗緑灰色の精選された極めの細かな粘土）が貼られたように堆積しておりそのさらに下に木の葉を一面に敷きつめたような木葉層がある。その下に最下層となる層に高杯、丸底、鉢、ミニチュア土器とともに板状・棒状・槌状の木製品が出土した層があった。これらの層位は少なくとも３つの区切りで捉えることのできる層序があることがわかる。出土遺物には特に③層に集中しており立櫛が３点、羽口、有孔円板が２点、用途不明石製品、はずみ車１点、水晶の剝片、砥石などがありこれらのことを総合して考えて祭祀土壙として捉えてよいと考えられる。

２　遺　物



①灰褐色混礫土
②茶灰褐粘質土
③黒褐色粘質土（遺物多量）
④暗灰茶褐色砂泥（4～5㎝大の礫を含む）
⑤茶褐色粘土
⑥黒茶褐色粘土
⑦暗緑灰色粘土（粒子細かくまじりけなし）
⑧黒茶灰色粘泥（炭）
⑨黒灰褐色粘土
⑩黒色粘砂（黄色土ブロックまじり）
⑪黒灰泥土（木器出土層）
⑫黒褐色粘泥砂

第21図　ＳＫ－１遺物出土状況・平面図・断面図

ＳＫＯ１（第22・23図）

土師器

壺Ａ（12、20）

ともに口縁が二段に上方に大きく立ち上がるもので厚みが１cmと厚く、いわゆる、広義の二重口縁を持つ壺で体部は球形か卵形をするとおもわれるが口縁から下部は欠失していて無い。特に（20）は口縁端部を強く押しナデて内外面ともに外方へ摘みだすように横ナデを施すという特徴をもっており、内面には漆のようなものが付着している。色調はいずれも赤褐色をしており、胎土も砂粒を多量に含む粗いものである。(12）は③層より、(20）は⑨層より出土している。（西部瀬戸内系の様式をもつものと思われる。）

壺Ｂ（１、２）

口縁がやや緩やかな「く」の字を呈する器高20cm前後の小型の壺になると考えられるものである。（１）は外面がやや摩滅しており調整がわからないが、内面の粘土紐の巻きあげの痕跡がよく認められる。（２）は口縁を指圧で整形し体部５～6 条のハケを施しており、内面に粘土紐の巻きあげの痕跡が顕著に見られる。色調は淡褐色で胎土はやや粗い。ともに、③層より出土している。

甕Ａ（９、21）

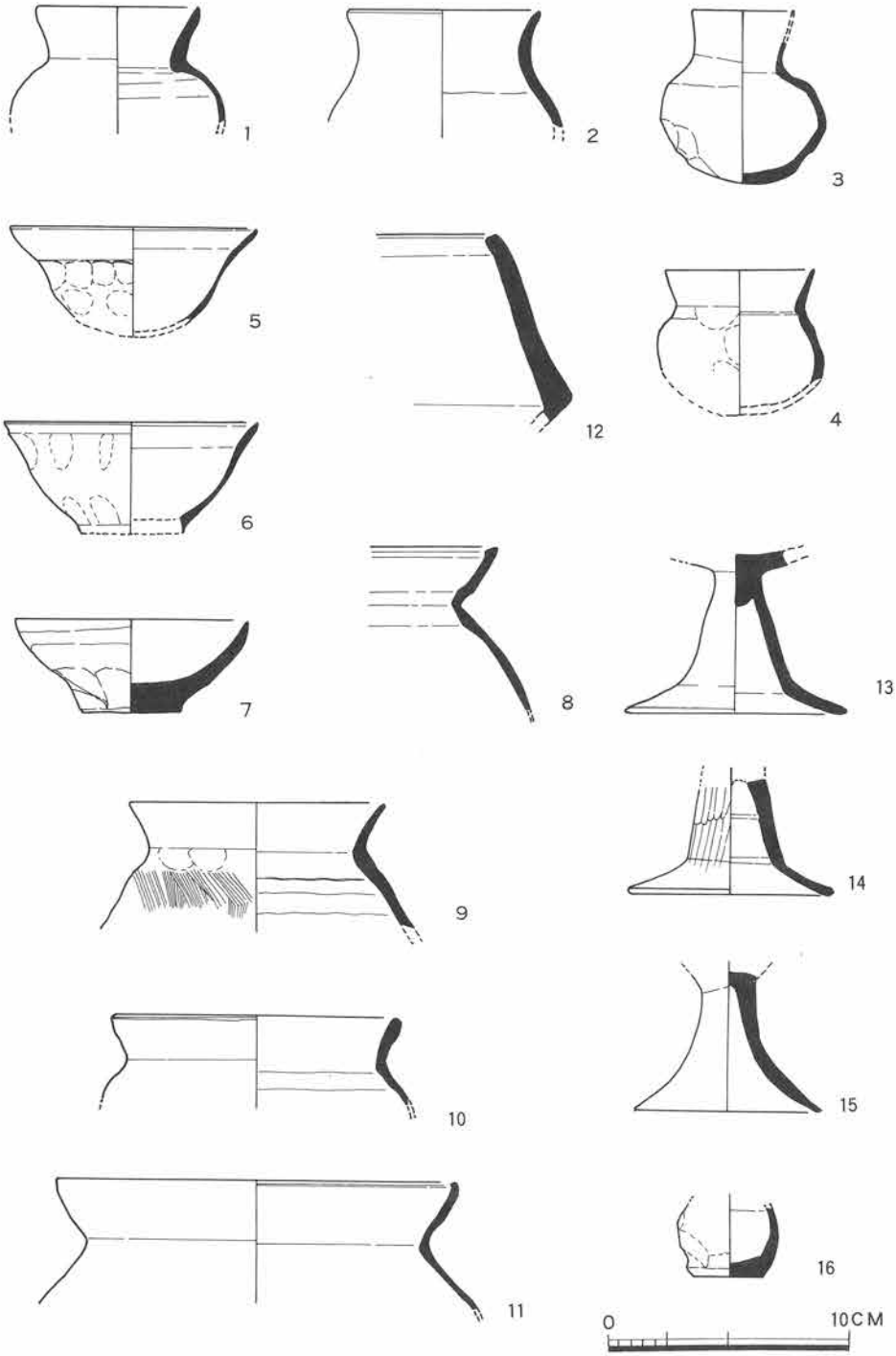
体部から外方に直線的に伸びる口縁で「く」の字を呈するもので端部を細く摘みあげるもので、（９）は体部を指圧で整形したのち縦ハケを施す。内面には粘土紐の巻き上げ痕が顕著に残っている。色調は淡白褐色を呈し、胎土は砂粒を多量に含む。③層より出土した。（21）は体部がややいびつな卵形を呈するもので、調整は全体に摩滅しているため解らない。色調は淡茶褐色で胎土はやや粗らい。③層より出土している。

甕Ｂ（10、23、25）

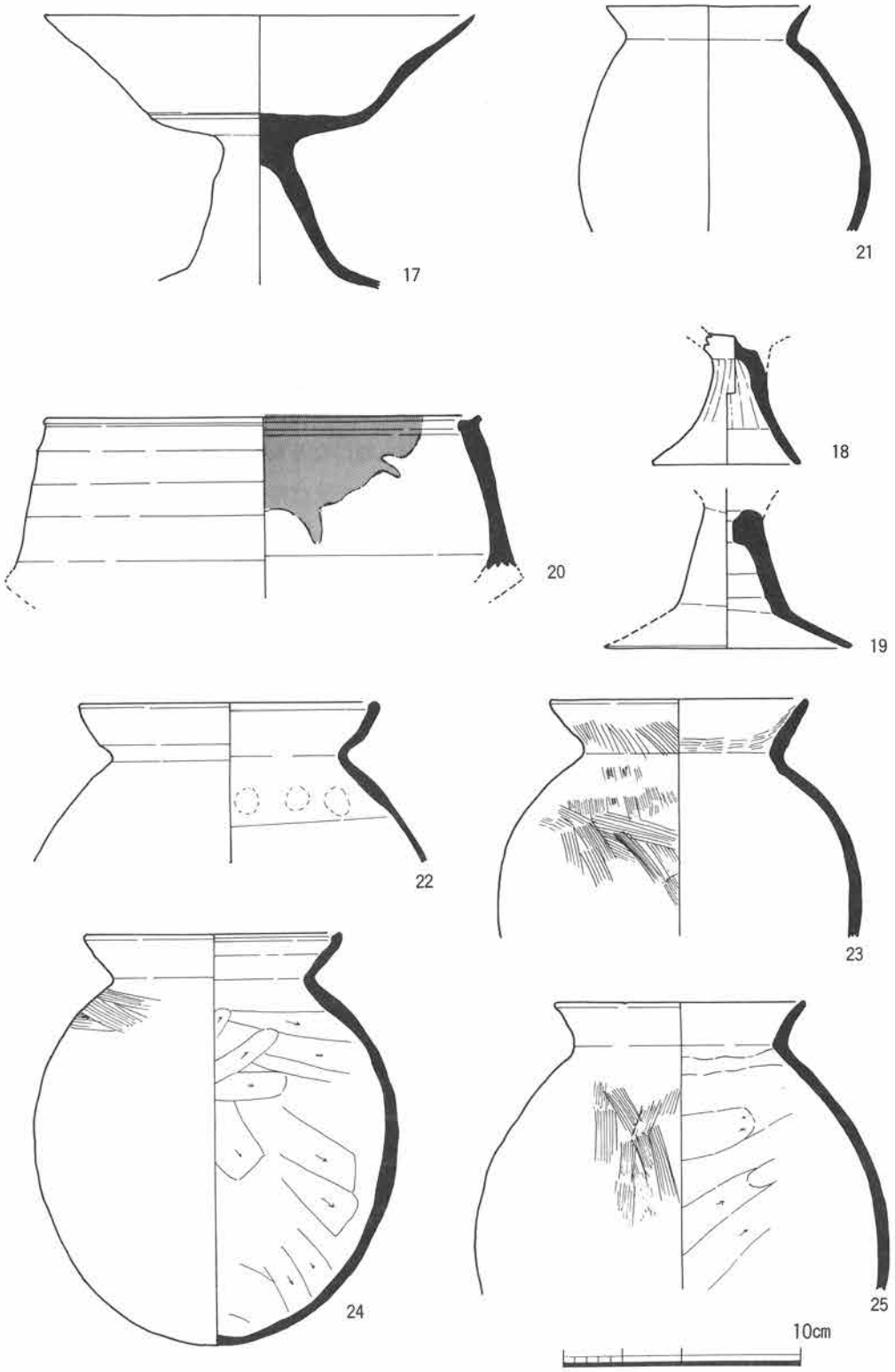
体部から外方に直線的に伸びる口縁で「く」の字を呈するものであるが、端部が「コ」の字状に肥厚し面を持つ。(10）は色調が白濁色で、胎土は黒色で細かい。③層出土。(23）は体部外面を縦方向のハケを施し、内面は口縁部を横ハケ、体部を斜め方向のハケを施している。最下層出土。（25）は外面の口縁部をナデ、体部を縦方向にハケを施す。内面は口縁部から頸部直下までナデ、体部を斜めにハケを施す。最下層出土。

甕Ｃ（８、11、22、24）

体部から内湾ぎみに外方に伸びる口縁で、端部を内側に折り曲げたように肥厚させる。



第22図　ＳＫ－１・③層出土遺物



第23図　ＳＫ－１最下層出土遺物

（8）は外面部を全体に横ナデを施し、内面は口縁部を横ナデし、体部には指圧痕が残っていた。また、頸部の内外面には強い横ナデの段が残っている。②層より出土。（11）は全体に摩滅が著しく調整は不明である。色調は黒褐色を呈し、胎土は砂粒を多量に含み粗い。③層より出土。（22）は外面部を横ナデをし、頸部には強い横ナデによる段を有する。内面は口縁部から頸部過半を横ナデを施し、体部は横方向のヘラケズリを施す。最下層出土。（24）は外面の口縁部を横ナデし、体部を斜めにハケを施す。内面は口縁部から頸部にかけて横ナデをし、体部から底部を斜めにヘラケズリを施す。最下層出土。

鉢A（5）

鉄兜形を呈するもので、斜め上方に伸びる体部からさらに屈曲するように外方に伸びる口縁部を持つものである。底部は欠失しているが丸底になるものと考えられる。外面の体部を指圧で成形したのち口縁部のみを横ナデする。内面は口縁部を横ナデする。色調は淡褐色で、胎土は小石粒を多く含みやや粗い。②層より出土。

鉢B（6）

鉄兜形を呈するものであるが、体部がやや内湾するように立ち上がり、そこより斜め上方に伸びる口縁を有する。底部は欠失しているが平底であると考えられる。外面の体部を指圧で成形したのち口縁端部のみを横ナデする。内面は口縁部を横ナデする。色調は淡赤褐色で、胎土は堅く密である。②層より出土。

鉢C（7）

厚い平底の底部から内湾するように体部を立ち上がらせ口縁端部を鋭く摘む。外面の体部は下半をケズる。また、体部には粘土紐の痕跡が残る。色調は淡褐色で胎土は細かい。③層より出土している。

高杯A（17）

杯部下半部は内湾せずに平坦で、そこより小さな段を持つようにたちあがってすぐに上半部が直線的に大きく広がった深いものである。脚部は「く」の字に屈曲して伸びる。

色調は淡褐色で、胎土は細かい。③層より出土している。

高杯脚部A（13、15、18）

裾の部分で屈曲せずに緩やかに外反するように立ち上がるものである。（13）は摩滅で調整は不明。色調は淡赤褐色で、胎土は細かい。②層より出土。（15）は摩滅で調整は不明。色調は赤褐色で、胎土は砂粒を多量に含む。③層より出土。（18）は外面を縦方向に細くケズる、内面には上半部に絞られたような縦方向のしわがのこる。裾部は横ナデを施

している。色調は白褐色で、胎土は砂質で細かい。③層下層より出土。

高杯脚部B（14、19）

裾の部分で「く」の字状に屈曲して台錐状に上方に伸びるもので、裾の端部には面を持つ。特に内面先端に型を差しこんだような小さく鋭い穴があき脚部の部分に二段の沈線が廻る。（14）は外面をヘラケズリを施している。色調は淡褐色で、胎土は細かい。③層の下層より出土。（19）は、表面が摩滅しており調整は不明である。色調は赤褐色で、胎土は砂粒を多量に含み粗い。最下層より出土。

小型丸底（3、4）

いずれも体部球形で丸底のものである。（3）は口縁部がやや長く真っすぐに立ち上がるもので口径は小さい。淡褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。②層より出土。（4）は口縁部は短く外方に広がるもので、口径は大きい。暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む粗いものである。③層より出土。

ミニチュア土器（16）

土師器の甕を模造した「てずくね土器」で胴径のわりには高さのないものである。口縁部は欠失しているが丸くおさめるものであると考えられる。③層の下層より出土した。

装身具（第24図）

竪櫛（26、27、28）

細く削った竹ヒゴを数本ないし数十本そろえて、中央を糸でくくりそこを中心にしてU字形に曲げ半円形の頭部と裾広がりになる歯部との間を糸でくくり、木の皮のようなものでまいたもので、そのうえから黒漆を塗って固めている。何れも残りはよくなく歯部はない。ひとつの遺構から3点も出土したのは県下でも初めてである。③層下層出土。

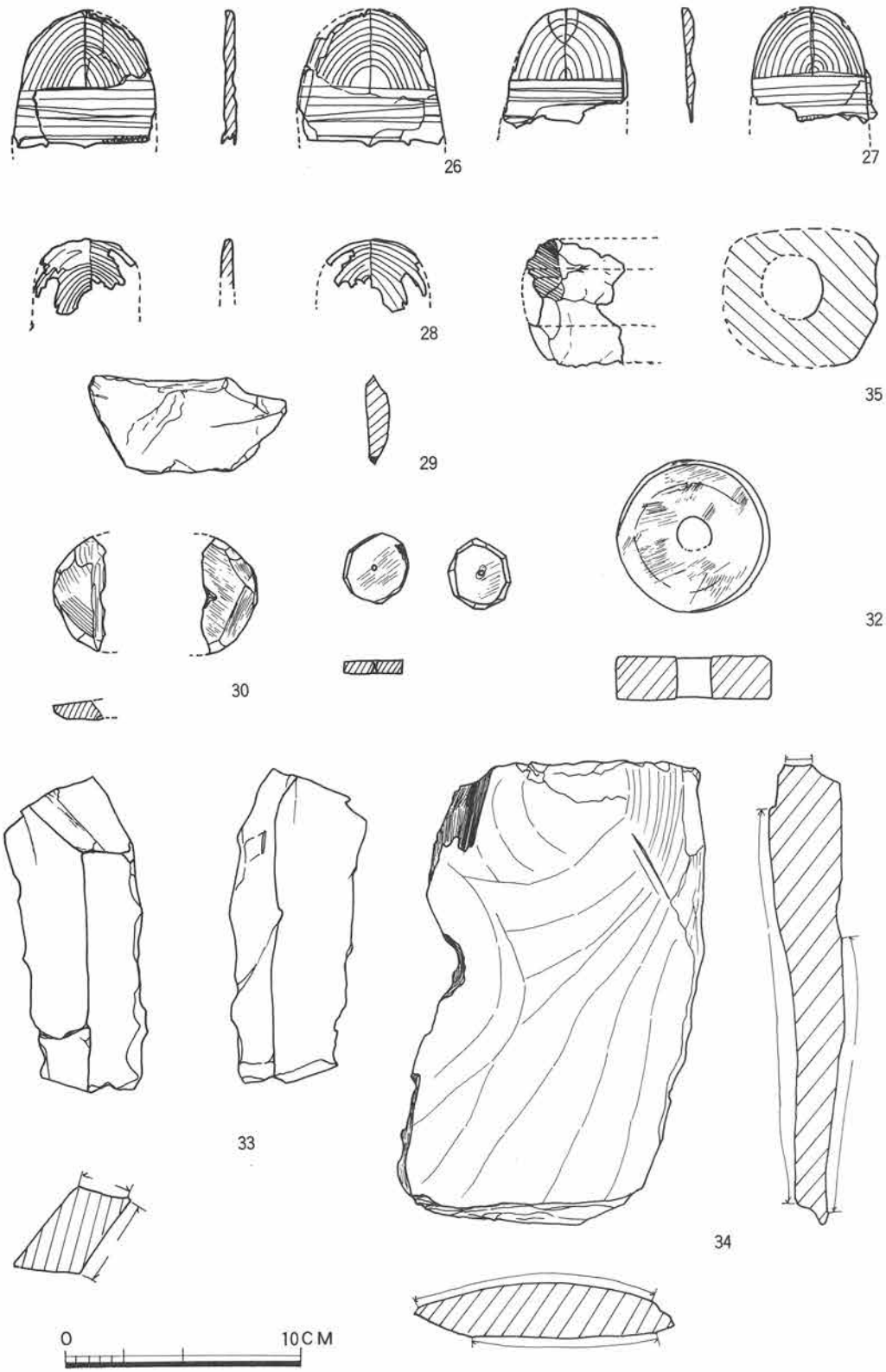
石製品（第24図）

円板（30、31）

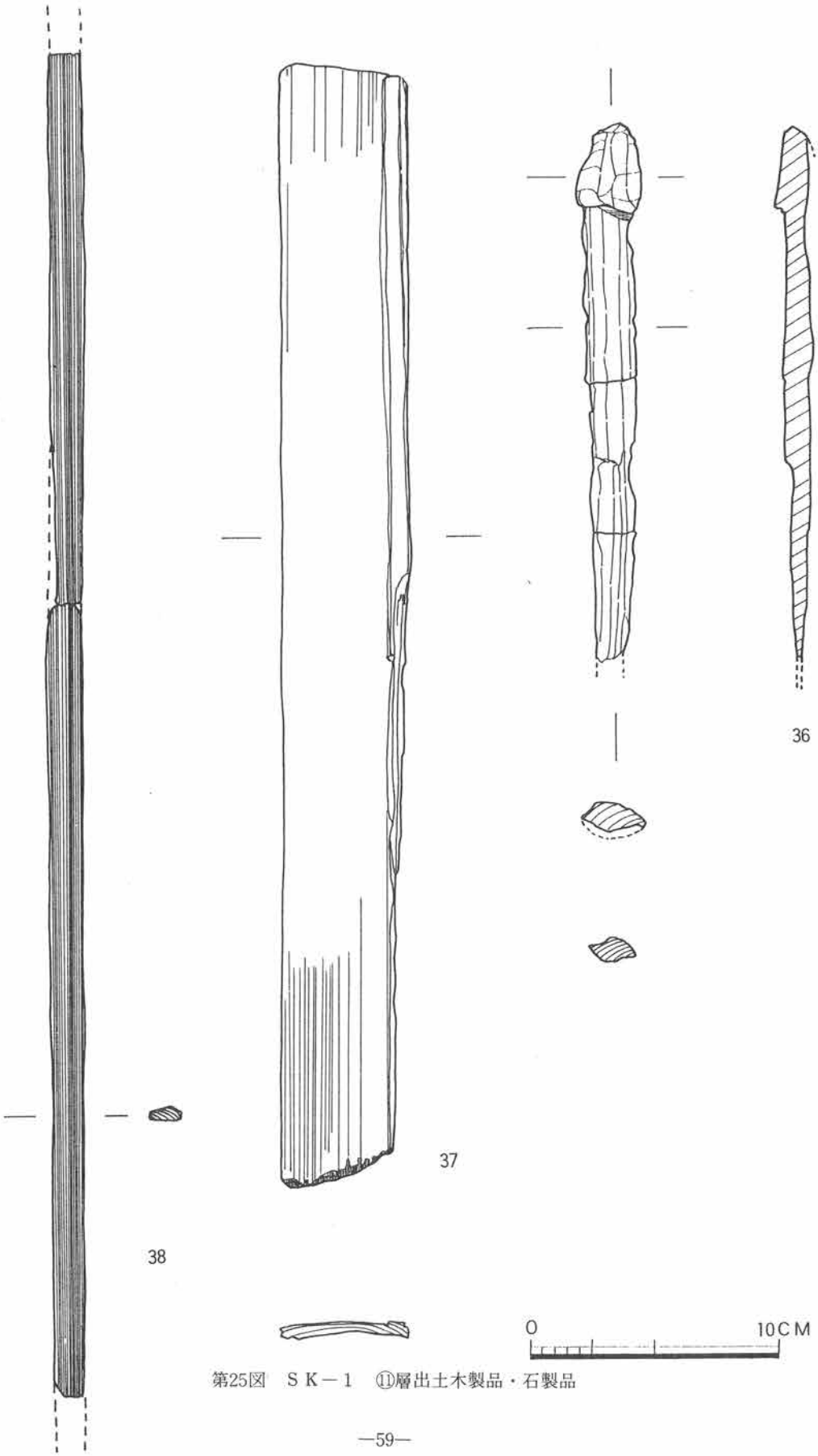
（29）は、緑色の石で中央に孔を持ち、表面を平滑に研き縁を8面に面とりを施した有孔円板である。⑥層より出土している。（30）は、中央で半折れしているが両面を平滑に研き縁を4面以上に面とりをする無孔円板である。黒色で、泥岩もしくは粘板岩かとおもわれる。③層下層より出土。

はずみ車（32）

緑色の石で、中央に1cmの孔をもち、厚さ1.2cm直径4.2cmの円板である。形態よりはずみ車の可能性がある。⑥層より出土している。



第24図　ＳＫ－３ ③層出土竪櫛・土製品



第25図　ＳＫ－１　⑪層出土木製品・石製品

刀状石製品（29）

片方を摘みだしたように、もう片一方を剣先のようにとがらせたものである。②層より出出している。

砥石（33、34）

（33）は断面菱形のもので、２面を使用している。黒色の泥岩である。⑥層より出土した。（34）は、長方形で、断面レンズ形をしたもので上部に切断した痕がみられ中央に打ち掻いたときのバルブが残る。両面に使用痕がみられる。黒色の粘板岩である。③層下層より出土した。

土製品（第24図）

ふいご羽口（35）

先端の部分の半分であるが、中空の孔があり先端が溶解しているところから羽口と考えられる。

木製品（第25図）

木製品は下層の粘土張りの下の層より閉じ込められたように出土しているが、ここに図示した以外にも槌のようなもの棒状のものなど多数出土している。

男根状木製品（36）

柾目方向に面取りがなされた断面レンズ状のもので、先端を亀頭状に削りだしている。

板状木製品（37）

幅約6.7cmで長さ60.5cm以上の板であるが片方の縁に約１cmの段を持つ。

棒状木製品（38）

幅約１cmで長さ65cm以上ので、上下ともまだ続き用途は不明であるが長い棒である。

Ⅲ　中世の遺構と遺物

２．遺　構

掘立柱建物

第２調査区では推定できた建物が５棟ある。以下にそれぞれの説明を加える。

ＳＢ０１（第26図）

調査区の南端部に位置し、建物の規模は桁行２間×梁間４間（ただし、桁行の西から１間、梁間の南から数え３間目と４間目に内を割るようにもう１間増やしている。）の西向きのＮ―35°―Ｅの軸を持った南北棟である。寸法は桁行総長4.35ｍ、梁間総長7.92ｍで

柱間寸法は桁行で南より1.98m＋1.65m＋2.31m（0.99m＋1.32m）＋1.98mである。柱穴はおおよそ直径、深さともに30cm前後を測る隅丸方形と楕円形のもので構成されており柱は存在していず柱当たりも見当たらないが底より10cm位のところで柱が当たる部分のみ段堀りしているものが多く認められた。また、特に北西隅の柱穴には底に礎板石が使用されておりその上部では4個体分の羽釜が出土している。

ＳＢ０２（第27図）

調査区のほぼ中央の東端に位置するもので建物の規模は桁行1間以上×梁間5間のN—35°— Eの軸を持った南北棟である。寸法は桁行総長1.98m以上、梁間総長9.24mで柱間寸法は梁間で南より1.65m＋1.98m＋1.98m＋3.63mである。柱穴はおおよそ直径30～40cm、深さ40cm前後を測る隅丸方形と楕円形のもので構成されている。柱および柱当たりはなく底より5～10cm位のところで段を持つものが多い。

ＳＢ０３（第27図）

ＳＢ０２に切られるものでＳＢ０２の建て替えと考えられる。建物の規模は桁行1間以上×梁間4間のN— 37°—Eの軸を持つ南北棟である。寸法は桁行総長1.98m、梁間総長10.89mで柱間寸法は梁間で南より3.96m＋1.98m＋1.98m＋2.97mである。柱穴はおおよそ直径30cm前後のものが多くほとんど楕円形を呈している。

ＳＢ０４（第28図）

調査区の北部に位置し、建物の規模は桁行1間×梁間3間で東側に1間の廂をもつN—25°—E軸の南北棟である。寸法は桁行部総長3.30m、梁間総長4.62mで柱間寸法は桁行部で西より1.32m＋1.98m、梁間で南より2.31m＋2 31m＋2.31mと等間隔である。柱穴は直径40cm前後で削平されていて全体に浅く円形のものが多い。形態より獣舎と考えられる。

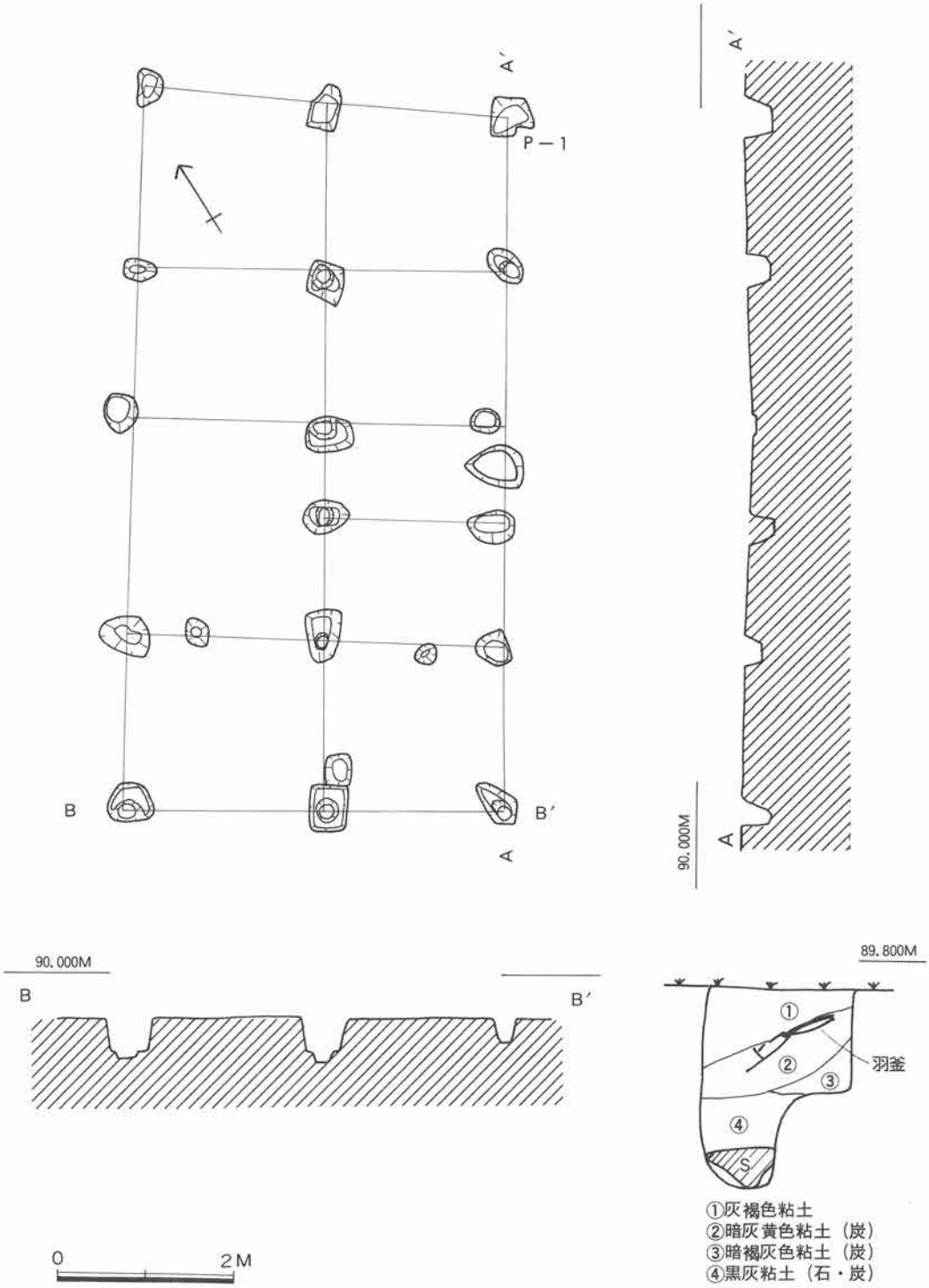
ＳＢ０５（第28図）

調査区の北南部に位置し、建物の規模は1間×1間でN— 20°—Wの軸を持つものである。寸法は南北・東西ともに総長3.63mで柱間寸法は南北で南より1.65m＋1.98m、東西で東より1.32m＋2.31mである。柱穴は直径10cm前後の円形のものがほとんどで浅い。

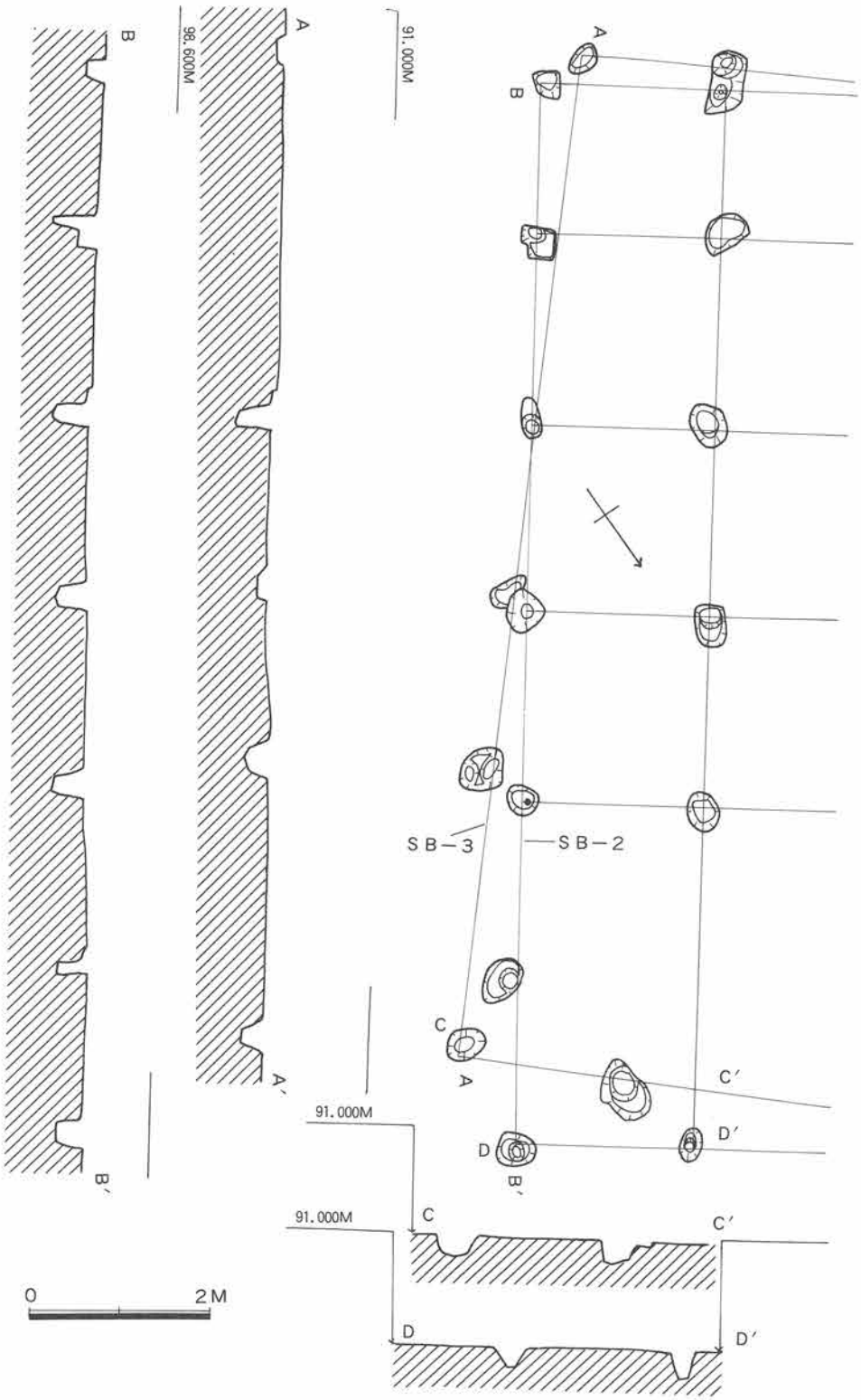
溝

確実に溝であると考えられるものが調査区全域で5条検出された。以下にその説明を加える。

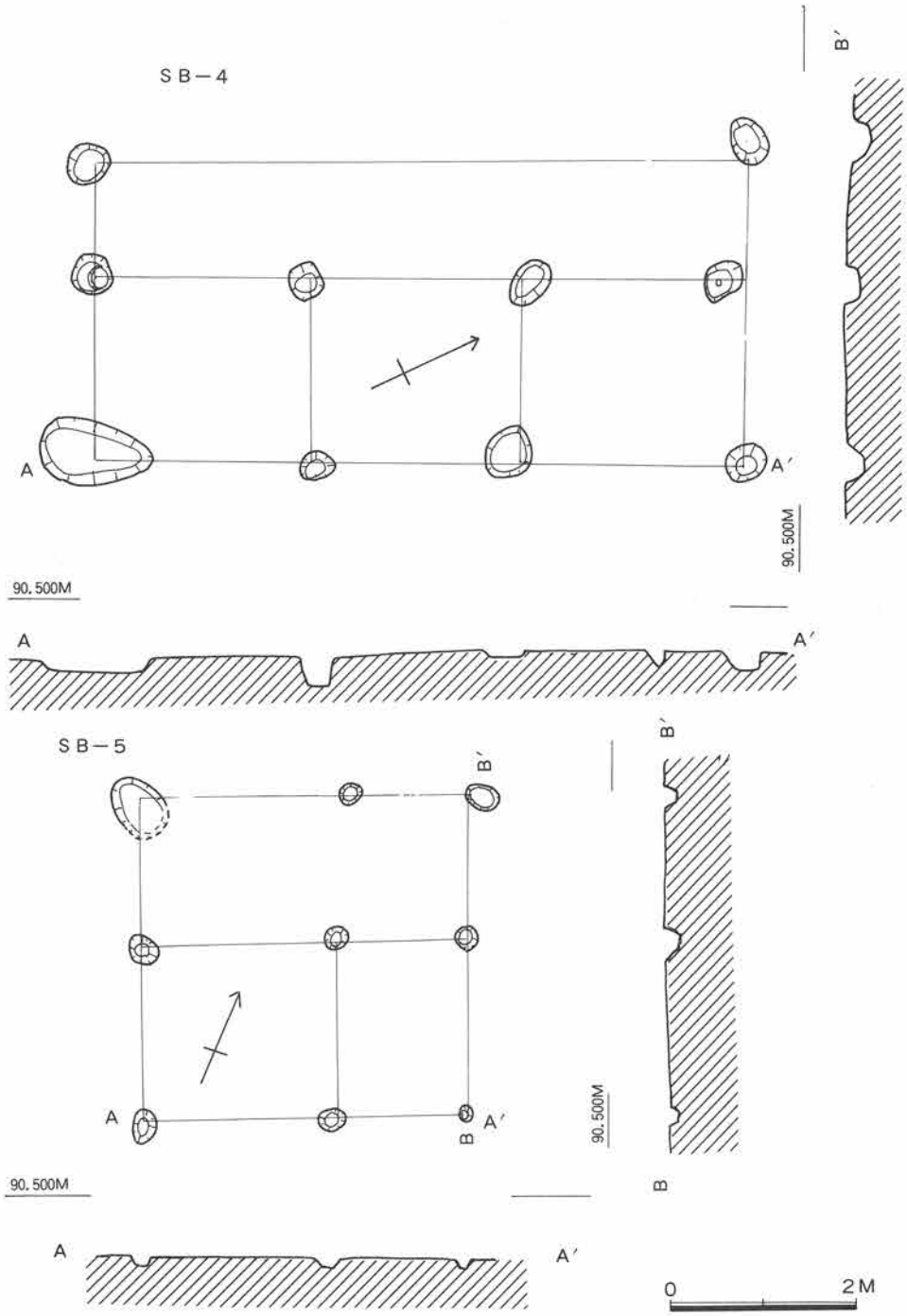
ＳＤ０１



第26図　ＳＢ－１平面図：Ｐ－１断面図



第27図　ＳＢ－２．３平面図



第28図　SB－4．5平面図

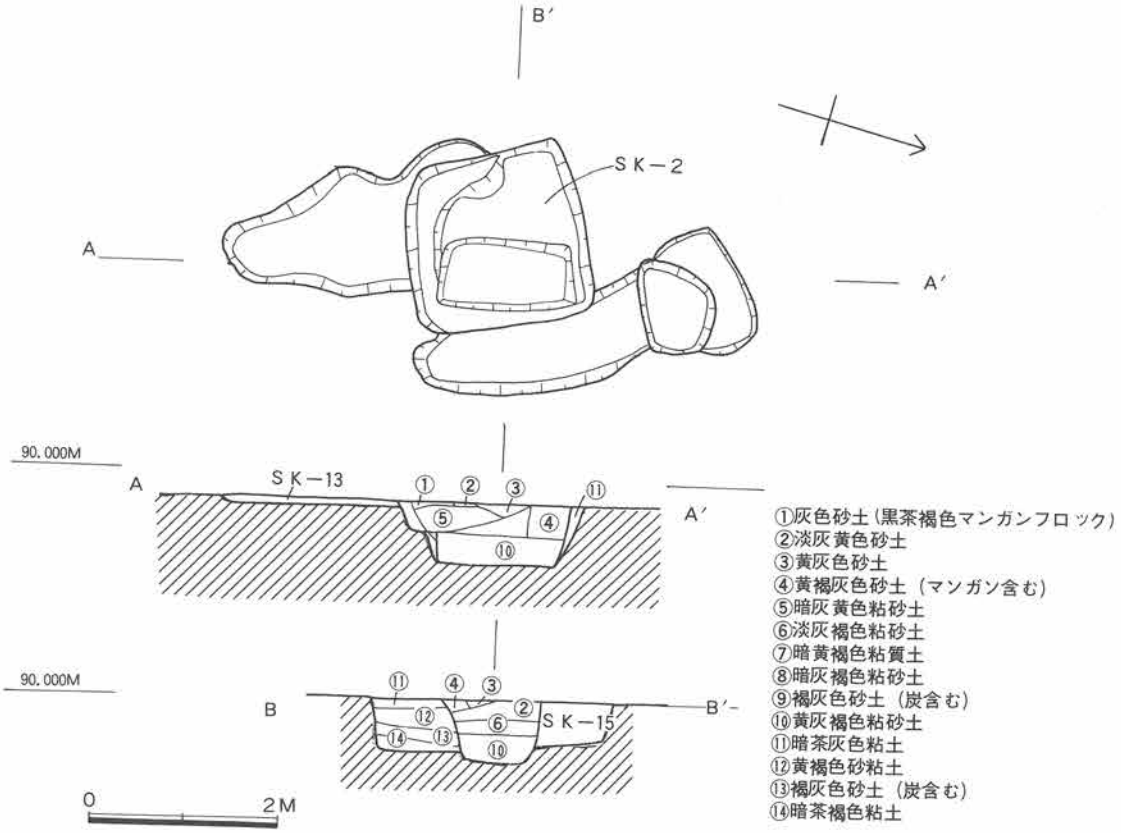
ＳＢＯ１の東側をＬ字に走る溝である。幅は約50cmで深さは20ｍの断面Ｕ字形の溝である。建物に併う雨落ち溝であるとおもわれるが、建物が存在するであろうと考えられる方向は調査区外で直接これに併う建物は検出されていない。

ＳＤＯ２

ＳＢＯ１とＳＢＯ２の間を区画するように流れる溝である。幅は約1.5mで深さは０.５ｍの浅いものである。

ＳＤＯ３～Ｏ５

調査区の北部を南北に走る溝で、約６ｍ程を検出した。幅は約50cmで深さは約15cmで現河川を挟んで第３調査区につながっている。



第29図　ＳＫ－２平面図・断面図

土壙

土壙は調査区の北半部に集中してみられ長楕円形や不定形のものが多く、出土遺物も概して小量で大半が性格の不明なものが多い。ここでは主要なものをとりあげて以下に記述する。

ＳＫ０２（第29図）

調査区の中央部東よりに位置し、ふたつの不整形で浅い土壙を切るように存在するもので、南北1.92ｍ、東西1.80ｍ、深さ0.56ｍを測るほぼ方形のものである。さらにこの中央やや東よりには一段低くなるように南北1.40ｍ、東西0.76ｍの長方形の落ち込みがある。⑭層の堆積がみられまわりの方形部と内部の長方形部では違った堆積がみられる。青白磁の合子が出土しているところなどから土壙墓の可能性が強い。

柱穴状遺構

明確に建物を構成する柱穴以外に何れかの時代もしくはなんらかの理由により掘りこまれた柱穴状の遺構である。ここでは調査区の中央と東端の部分の２個所に集中している。

ＳＰ群０１

調査区の中央ＳＢ０２とＳＫ０２の東側に広がる空間地で35個ほど検出された。直径20cm前後の円形のものがほとんどである。

ＳＰ群０２

調査区の東端のＳＤ０３より東、ＳＢ０４、０５の存在する部分で約60個ほど検出された。直径は大きいもので50cm前後のものがあるが、概して20cm前後のものが多い。ＳＤ０５より東よりのものは黄褐色土上に掘りこまれているが、ＳＤ０４より西では暗茶褐色のレキを多量に含む土壌に掘りこまれている。

２．遺　物

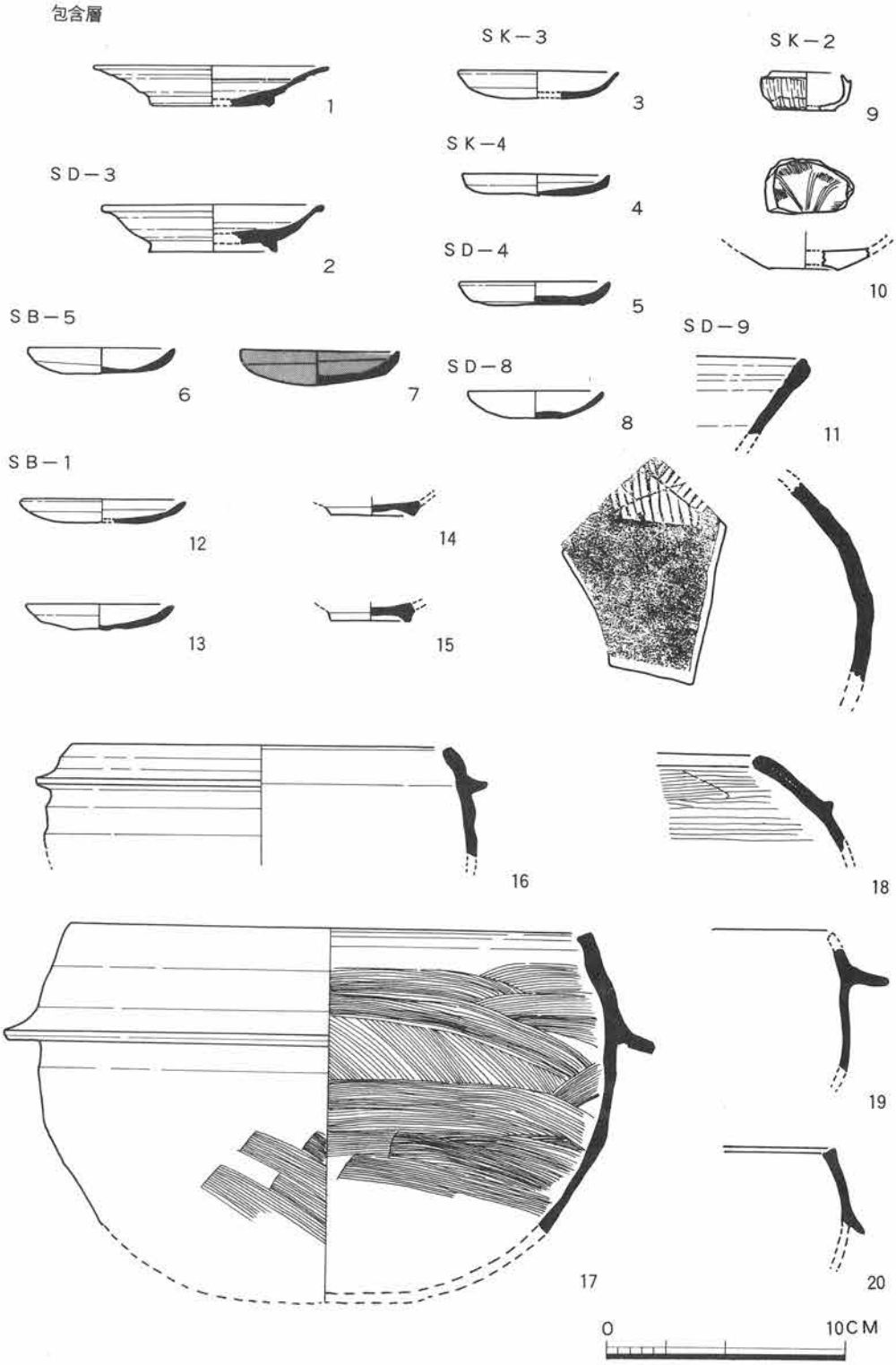
ＳＢ０１（第30図）

土師質土器皿

(12)、(13) は平坦な底部からやや口縁端部を斜め上方につまみだすもので口縁部を一度だけナデるものである。(12) はＳＰ０４より (13) はＳＰ０５より出土した。

黒色化土師質土器埦

(14)、(15) ともに埦の高台部分である。足の低い断面三角形に近い形に貼り付けている。(14) はＳＰ０２より (15) はＳＰ０３より出土している。


包含層
1
SK－3
3
SK－2
9
SK－4
4
SD－3
2
SD－4
5
10
SB－5
6
7
SD－8
8
SD－9
11
SB－1
12
14
13
15
16
18
19
17
20
0
10CM

第30図　遺構出土遺物

ＳＫ０２（第30図）

青白磁合子　　（９）

口径４cmを測るもので体部には蓮弁状の稜を持った合子の身である。素地は白色を呈するもので緻密で堅い。釉は青白色である。輸入磁器と考えられる。

龍泉窯系青磁皿　　(10)

凹み底の底部から斜め上方に立ち上がる体部から屈曲するように上方に立ち上がる口縁部を有すると考えられるもので、底部外面は掻きおとしているが体部には貫入の激しい暗緑色の釉が施されている。素地は灰白色を呈していて緻密で堅い。〔太宰府Ｉ－２・Ｃ〕

ＳＫ０３（第30図）

土師質土器皿　　（３）

底部から内湾するように立ち上がり口縁部を一旦屈曲させるように斜め上方に立ち上がらせるものである。黄褐色を呈している。

ＳＫ０４（第30図）

土師質土器皿　　（４）

平坦な底部からいきなり口縁部を屈曲させるもので、端部は鋭く収める。口縁部に一度だけ横ナデを施す。黄褐色を呈している。

ＳＤ０３（第30図）

緑釉陶器皿　　（２）

やや厚い底部から体部をロクロ横ナデによる整形によって斜め上方に立ち上がらせて口縁端部を外反させ玉淵のように丸く収める。高台は直に立ち上がる断面三角形を呈するもので、内面接合部に段を有する。素地は暗灰色を呈しており緻密で堅く、外面全体に濃緑色の釉が施されている。近江産と考えられる。

ＳＤ09（第30図）

常滑焼こね鉢　　(11)

ロクロによる横ナデによって体部から口縁部を斜め上方につまみだしたもので、口縁端部に面と段を持つものである。色調は淡灰色で胎土は白色粒子を多量に含むものである。口縁部外面に重ね焼きの痕跡がみられる。

包含層（第30図）

灰釉陶器皿（１）

強いロクロ横ナデで整形されたもので内面に段を有する。色調は灰色で胎土は緻密で堅い

土師質羽釜　　(18)

色調が暗茶褐色を呈するもので胎土が非常に粗い。形態は破片であるが口縁部が大きく内湾し端部を丸く収めるもので、鍔部は小さな断面三角形を呈し上方を向いている。調整は横ナデを施したのち内面だけを横方向に荒いハケでナデている。ＳＰ０１より出土。

土師質羽釜　　(20)

色調が淡白褐色を呈するもので胎土が非常に粗い。形態は破片であるが口縁部がやや内傾し口縁端部に面を持つように外方よりナデられたもので、鍔部は下向きに垂れ下がっている。ＳＰ０１より出土。

土師質羽釜　　(17、19)

色調が淡褐色を呈するもので胎土は粗く砂粒を多く含む。形態は体部から内湾するように立ち上がった胴部に口縁部が鍔のあたりから内傾するように向うもので、口縁端部は平坦な面を持つように内面からつまみ出されている。鍔部は大きくやや斜め外方に張りだしており端部に面を持つ。調整は外面の口縁から鍔の直下までを2.5㎝の大きな単位で横ナデを施し、体部は斜め方向のハケを施している。外面は口縁端部のみを横ナデし他を横方向のハケを施している。鍔より下半には多量のススが付着している。ＳＰ０１より出土。

瓦質羽釜　　(16)

瓦質のもので胎土は細かいが石英粒を多量に含んでいる。口縁端部がやや内傾するもので鍔部は台形状のものが平行に張り出している。調整は内外面ともに口縁部辺りを強い横ナデを施している。ＳＰ０２より出土した。

常滑焼甕　　(21)

体部の破片で暗緑色の釉がかかっている。また、上部に羽状の印刻文がある。ＳＰ０４から出土している。

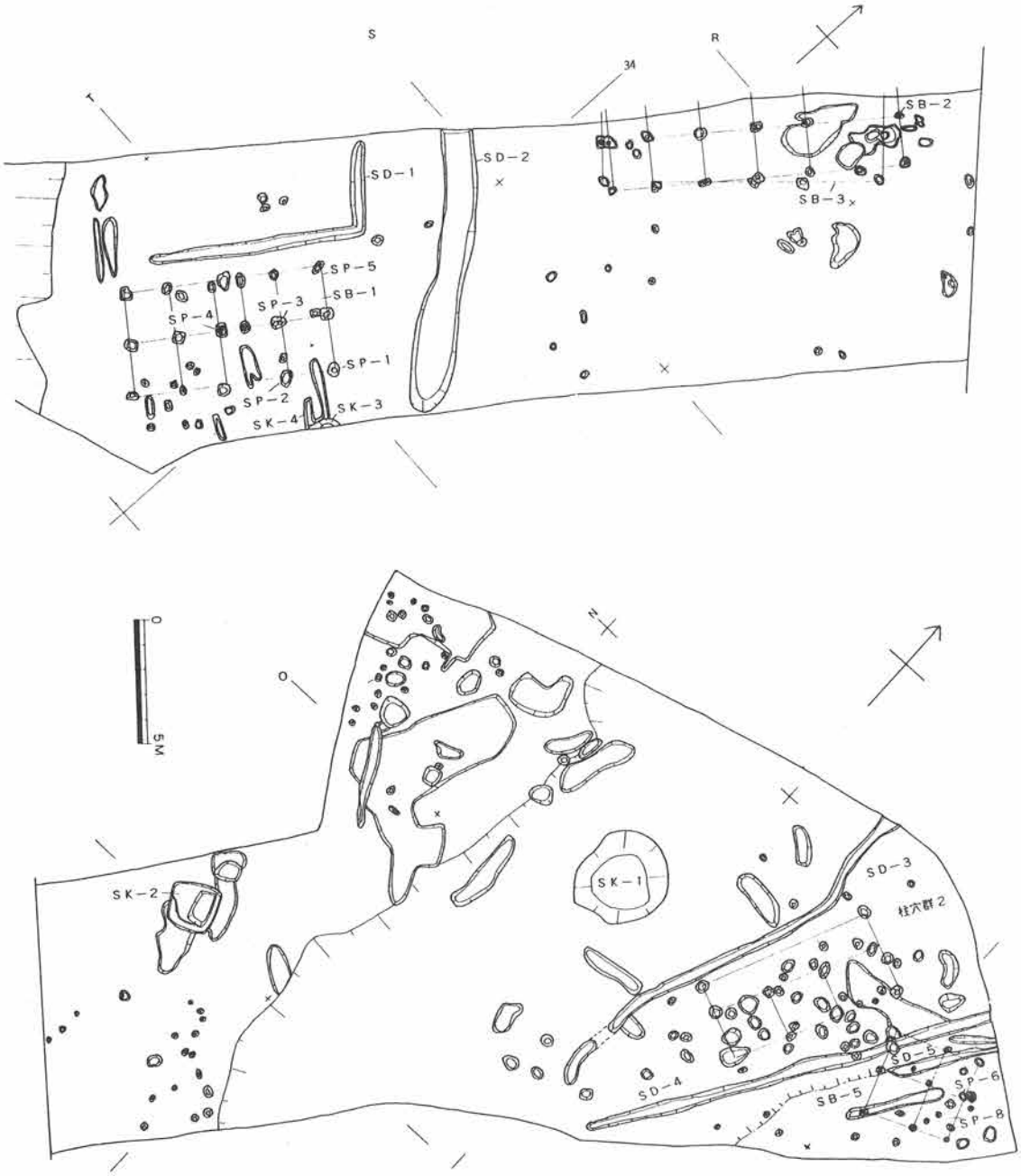
ＳＢ０５（第30図）

土師質土器皿　　（６）

平坦な底部からやや内湾するように口縁部を斜め上方につまみ出すもので、体部の下半までを一度だけ横ナデしている。色調は暗赤褐色を呈し、胎土は黒色粒を多く含む。ＳＰ０４より出土した。

黒色化土師質土器皿　　（７）

底部からやや内湾するように口縁部が真っすぐにたちあがるもので、口縁端部だけを一度横ナデさせて屈曲させている。ＳＰ０７より出土した。



第31図　第２調査区　平面図

Ⅳ 小 結

ここで第２調査区の調査で得られた成果を簡単に以下にまとめる。古いところでは、古墳時代前期の土壙が１基確認された。これは土壙としては非常に大きなものである。その特異性は埋土の在り方（最下層に木製品を埋め白い粘土を貼付けたり炭を敷き詰めたりしている。）、出土遺物（縦櫛、種々の石製品）からも伺える。いわゆる、祭祀土壙と考えられる。ここからは真東に三上山が望むことができる。しかし、集落ないにおける位置関係は検証できなかった。今後はこのような土壙の空間的な位置関係を重視しなければならない。

中世期の遺構としては掘立柱建物が検出されたが、建物を区画するような溝や井戸は検出することはできなかった。遺構の密度や位置からみても集落の南端を構成する一角であったと考えられる。また、この調査区の南端には現河川とまったく重復するところに旧河川が走っており横江遺跡の南端を決めることができた。

以上がここで確認された結果であるが、ここの調査区遺構の配置よりもこれより東にまだ集落の広がる可能性は確実であり、第２期造成予定地の調査の結果によってここの調査の結果がより明らかにされるものと考えられる。（木戸）

第３節　第３調査区

Ⅰ　調査概要

第３調査区は北を畦道、西を墓道、東と南を境川に挟まれた部分に調査区を設定した。確認された遺構は、古墳時代の溝が３条と中世末の掘立柱建物３棟、柵列５列、溝、井戸１基、土壙、柱穴群である。この調査区でほぼ１区画の居住構成が認められるものと考えられる。また、古墳時代の溝は中世期の溝と重復しており、その中世期の溝は現在の境川と重複している。

Ⅱ　古墳時代の遺構と遺物

１．遺　構

溝

ＳＤ０１～０３

調査区の南端を東西方向に斜めに横切る溝である。０１は０３によって切られており、０１・０３ともに０２により切られている。これらの溝は、西は現境川ぞいに第１調査区でも検出されている。何れの溝からも布留式土器併行期の土器が多量に出土している。

柱　穴

ＳＰ０１

調査区の北端中央部に位置する柱穴で直径約50cmの長楕円形である。ここより石製勾玉が出土している。

２．遺　物

ＳＤ０２（第32図）

古式土師器

壺　（４）

口縁が直線的に上方に「く」の字に伸びるもので、端部の内面に小さなナデの段を持つ器壁は薄く、胎土は粗く赤褐色を呈し、砂っぽく白色粒子を多量に含む。

甕　（５）

体部から外方に反り出すように頸部を作り、そこから口縁部を垂直に立ち上がらせ端部を鋭くとがらせるもので、焼成は良好で色調は茶褐色を呈し胎土細かい。

高杯（６）

やや太い胴部からハの字に開く脚部を持ち、端部に垂直な面を持つ。足の内面に帯状の凹が1条廻る。胎土は細かな砂粒を含む。色調は赤褐色を呈する。

小型丸底壺（2・3）

(2)は体部が球状を呈するもので頸部でやや段を付ける。焼成、胎土ともに悪く黒灰色を呈し、粗い砂粒を多量に含む。(3)は偏平な体部を呈するもので、底部は厚く内面に指圧による成形痕が強く残っている。色調は赤褐色を呈し、胎土は粗く小石を多く含む。

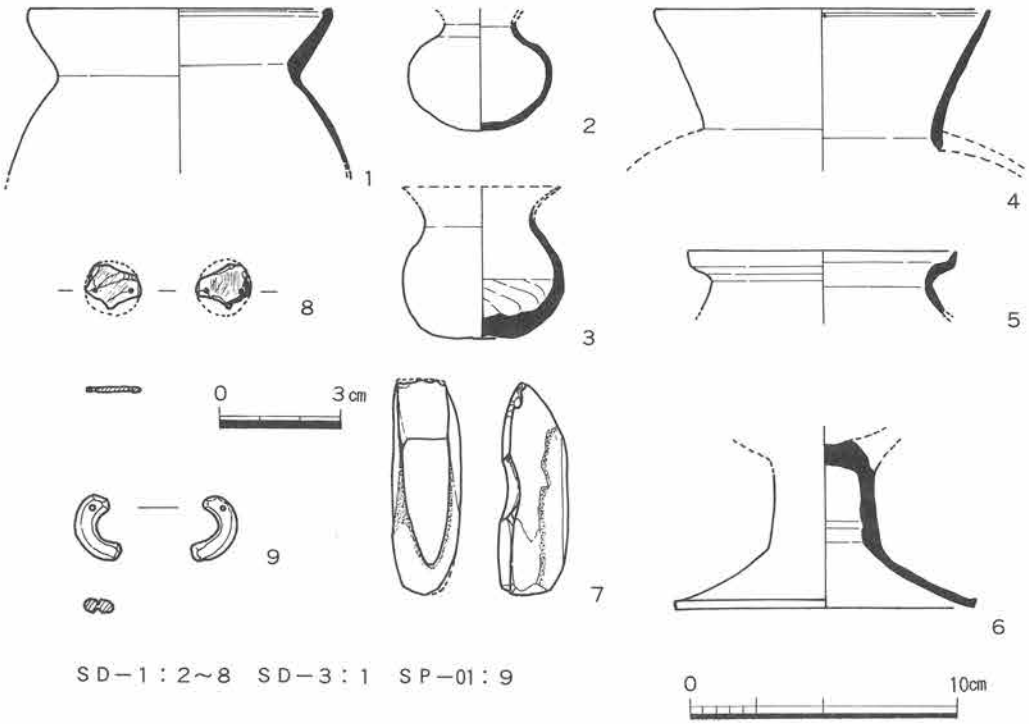
石製品

有孔円板（8）

直径2.6㎝、厚さ2㎜の石製円板で全体に欠損が激しい。中央両端に対になる2つの孔があけられている。

抉り入り片刃石斧（7）

全長10.5㎝、幅3.4㎝の磨製石斧で、中央部上面に浅い抉りが入っている。刃部端は使用により欠損している。



第32図　古墳時代出土遺物

ＳＤ０２（第33～35図）

古式土師器

壺Ｂ（１、４、６、10）

外反しながら外に広がる口縁部を有し、肩張りの体部へと続く。口縁端部は丸く収めるもので、（１）（４）は赤褐色、（６）は白褐色を呈し器壁薄く焼成、胎土共に不良である。(10)は暗褐色を呈し、調整は口縁部は内外面ともにナデで仕上げられ、頸部は強いナデにより段を有する。外面体部の肩には縦方向のハケの後、横方向のハケガ施されている。内面はヘラ削りである。

壺Ｅ（13、18）

口縁部が直線的に外方に伸びるもので球形の体部を持つもので、⒀はやや長めの口縁部部を持ち端部にいく程は薄く尖っている。白褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。(18)はやや短めの口縁部を持ち、頸部に強い横ナデの段を持つ。体部は球形で下半部に黒斑を持つ。色調は淡褐色を呈し、胎土は白色小石粒を多く含む。

壺Ｈ（14）

撫で肩の体部から外方に広がる口縁部を持つが、外面に丸みを持ち中程で強い横ナデによる段を持つ。色調は赤褐色を呈し、胎土は粗い砂粒を多量に含む。

壺Ａ（15）

口縁部が二段に外反するもので、端部を丸く収める。やや厚めの器壁を持ち口径は大きい。色調は淡褐色を呈する。

壺Ｊ（17）

口縁部が大きく外反し開く広口の壺で、帯状の端部が下方に垂下したものである。端面には横ナデの後３条の沈線を廻らせた上に、棒状の貼り付け突帯を３本付す。色調はいわゆるチョコーレト色を呈し、胎土には角閃石が多量に含まれていることから生駒山麓産の土器の可能性が強い。

甕Ａ（５、９）

体部から外方に直線的に伸びる口縁で「く」の字を呈し端部を丸く収める。（５）は口縁部内面に横方向のハケを施し色調は白褐色を呈する。胎土は細かな砂粒を含む。（９）は口縁部内面に横方向のハケを施し頸部外面に斜め方向のハケを施す。色調は白褐色を呈する。

甕Ｂ（２、３）

体部から外方に直線的に伸びる口縁で「く」の字を呈するが、端部が「コ」の字状に肥

厚し面を持つ。(2)は頸部に強い横ナデの段を持ち、体部はナナメ刷毛を施す。色調は暗褐色を呈する。(3)は口縁部に縦ハケを施す。色調は内面黒色、外面淡茶褐色を呈する。

甕C (11、12)

体部から内弯ぎみに外方に伸びる口縁で端部を内側に折り曲げたように肥厚させる。(11)は白褐色を呈する。(12)は赤褐色を呈する。

甕Ⅰ (7、8、16)

体部から外方に立ち上がり、もう一度内弯するようにつまみだし端部に面を持つ。受け口状口縁を持つものである。(7)は体部肩に横方向のハケを施す。色調は暗白褐色を呈する。(8)は淡褐色を呈する。(16)は脚台である。輪積みによって成形されている。

高杯杯部A (20、24)

杯部が屈曲して外方に伸びるもので端部は丸く収める。(20)は下半部が内弯せずに短くのび上半部が直線的に大きく広がった深いもの、(24)は下半部が内弯し上半部が大きく外反するもので、色調は両者とも赤褐色を呈する。

高杯杯部B (21、22、23)

杯部の下端で段を持ち、そこから屈曲して外方に伸びるもので端部をつまみだして面を持たせる。(21)は杯部外面に縦ハケを施す。色調は赤褐色である。(22)は外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。色調は白褐色である。(23)は口縁端部の上面に刻み目を施す。色調は淡褐色である。

高杯杯部C (19)

椀型の杯部を持つもので端部は丸く収める。脚部は細い。色調は赤褐色である。

高杯脚部 (25～31)

頸部から屈曲して裾で広がるもので、内面に指圧による成形痕が認められるものもある。

小型丸底壺A (32～35)

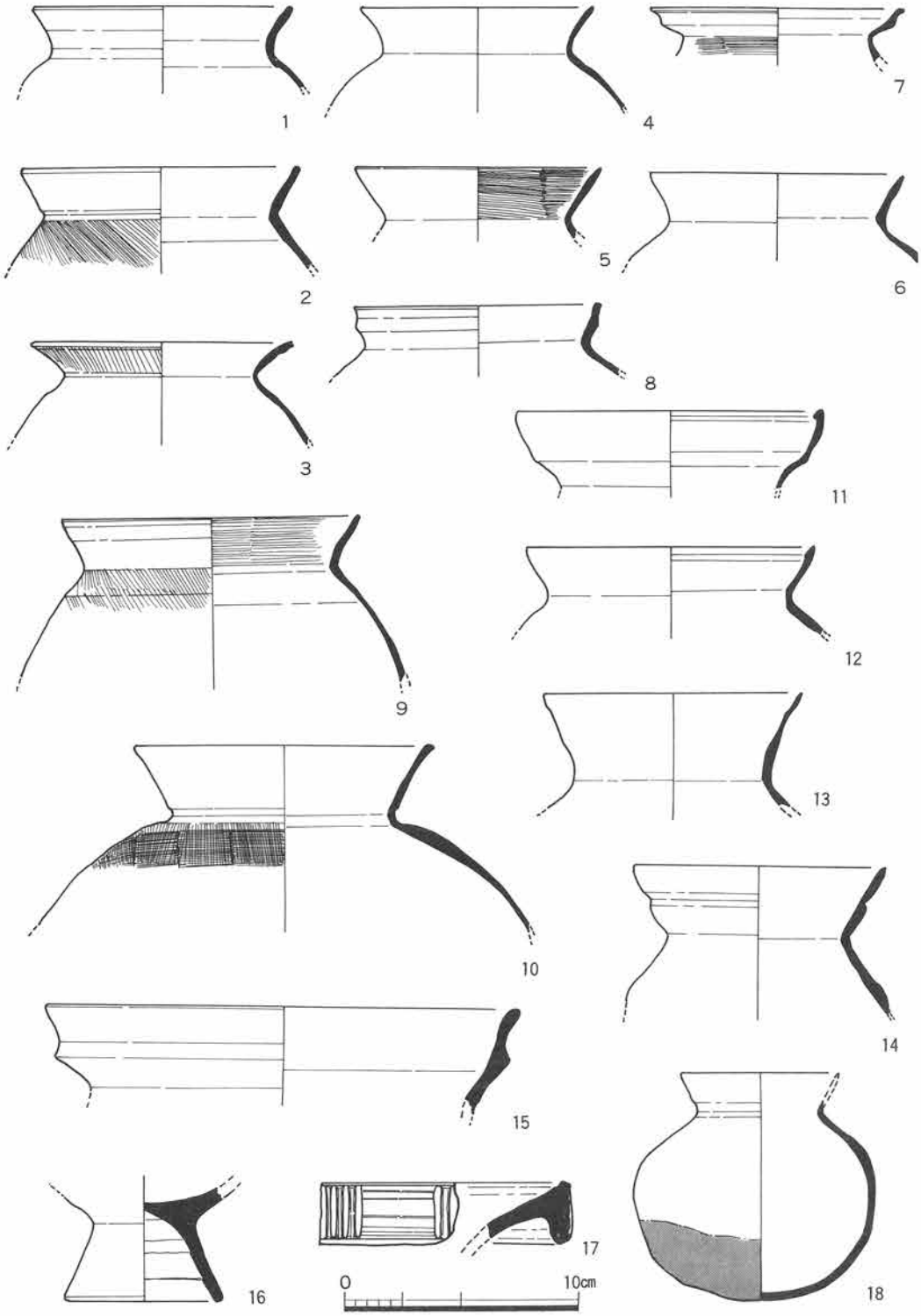
体部球形で丸底を呈するもので、口縁部は「は」の字に開くものである。色調は全て赤褐色を呈する。

小型丸底壺B (36～39)

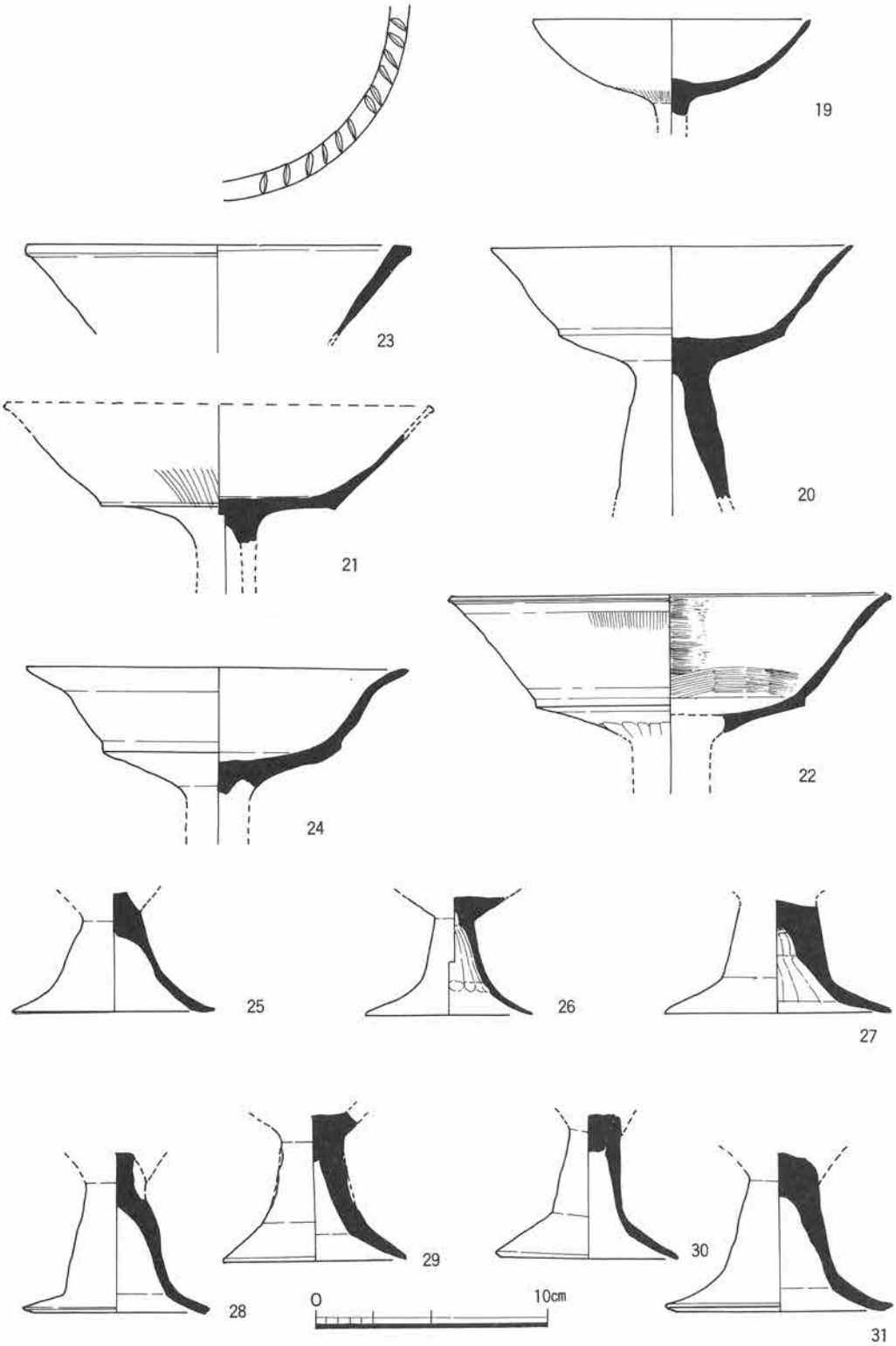
体部算盤玉形で偏平な底部を呈するもので、口縁部は「は」の字に開くものである。色調は全て赤褐色を呈する。

小型丸底壺C (42～45)

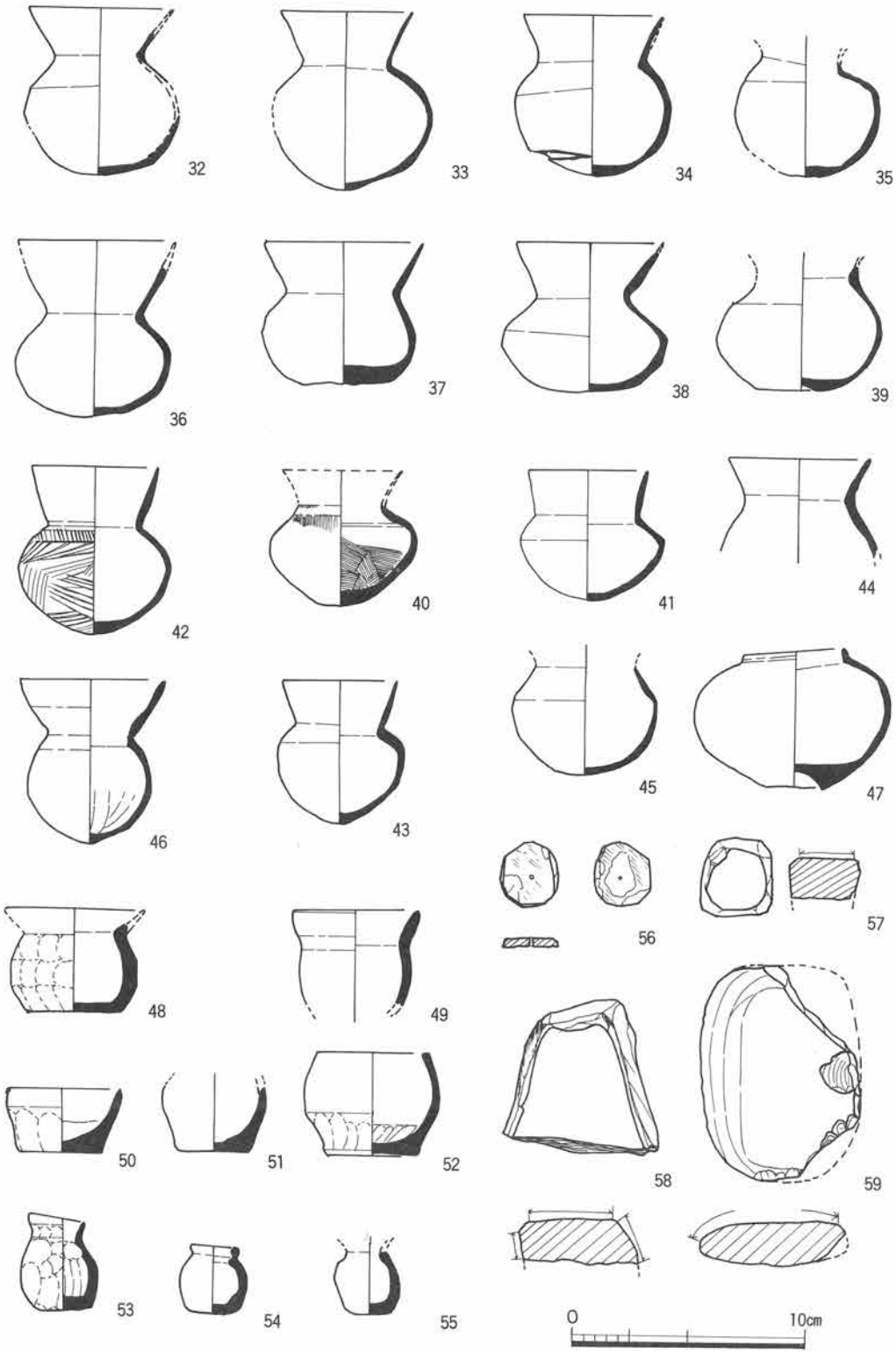
体部肩張りで尖底な底部を呈するもので、口縁部は「は」の字に開くもののほか内湾す



第33図　ＳＤ－２出土遺物その１



第34図　ＳＤ－２出土遺物その２



第35図　ＳＤ－２出土遺物その３

るもの真っすぐぎみに立ち上がるものとがある。(40)は外面に粗い乱ハケを施し(42)は内面に細かな乱ハケを施している。色調は赤褐色以外に暗白褐色、暗茶灰色のものがある。

無頸壺 (47)

小さな上げ底から算盤玉状の体部が伸び、口縁部は垂直に少しだけたちあがらせるものである。色調は暗褐色を呈し胎土は細かい。

ミニチュア土器 (48～55)

(48)は平底で偏平な体部をもつものである。(49)は球形の体部を持つものである。(50～52)は平底の鉢形である。口縁部は横ナデが施されている。(53～55)は平底の壺形のもので小さな口縁部を持つ。いずれも、手こねで成形されている。

石製品

有孔円板 (56)

長径3.6cm、短径3.1cm、厚さ5mmの大きさを持ち中央に孔をひとつ持つものである。

砥石 (57～59)

(57)はほぼ方形のもので、下面は割れたままで上面だけを使用している。砂岩系である。(58)は台形を呈するもので、下面と下方は割れており上面と両側面を使用している。(59)は一部を欠損するが小判形を呈するもので全体が磨製されている。

ＳＤ０３

土師器

甕Ｃ（１）

体部から内湾ぎみに外方に伸びる口縁で、端部を内側に折り曲げたように肥厚させる。色調は、淡褐色を呈し胎土は砂粒を多量に含む。

ＳＰ０１（第32図）

石製品

勾玉（９）

長さ1cmを計るもので磨製のものである。孔は貫通していず未製品であると考えられる。材質は不明であるが、色調は小豆色を呈する。

Ⅲ　中世の遺構と遺物

１．遺　構

柵列

ＳＡ01～03

調査区の東側、建物と区画溝との間に広がる空間に２間～４間の規模で作られた柵もしくは板塀と考えられる。

掘立柱建物

調査区のほぼ全域で300余りの柱穴を検出した。複数の建物が数次に渡って存在した可能性が考えられるが、その複元は非常に困難であった。ここでは推定できた３棟の建物について以下に記述する。

ＳＢ－01

調査区の北東部に位置し、建物の規模は基本的には桁行５間×梁行２間（但し南側は３間）の南北棟であり寸法は桁行総長24m24cm、梁行総長８m32cmで柱間距離は桁行では北より6.24m＋6.24m＋4.16m＋4.16m＋3.44mであるのに対し、梁行では西より4.16m＋4.16mである。また、西端に１間×１間の張出がある。柱穴は、おおよそ直径0.8m～1mの円形のもので構成されるが、深さは削平を受けたらしく30cm以下と平均的に浅い。柱痕を持つ柱穴は存在しない。ＳＥ01の時期のものと考えられる。

ＳＢ02

調査区の南東に位置し、建物の規模は桁行４間×梁行１間の東西棟である。寸法は桁行総長18.72m、梁行総長7.36mで柱間距離は桁行東より4.8m＋3.68m＋3.68m＋6.56mである。また、西側中央部で１間×１間の張出がある。柱穴はおおよそ直径0.4m～1mの楕円形のもので構成されるが、深さは削平を受けたらしく0.8m以下のものが多い。柱痕を特つものは存在しない。ＳＢ01と構成を同じくするものと考えられる。

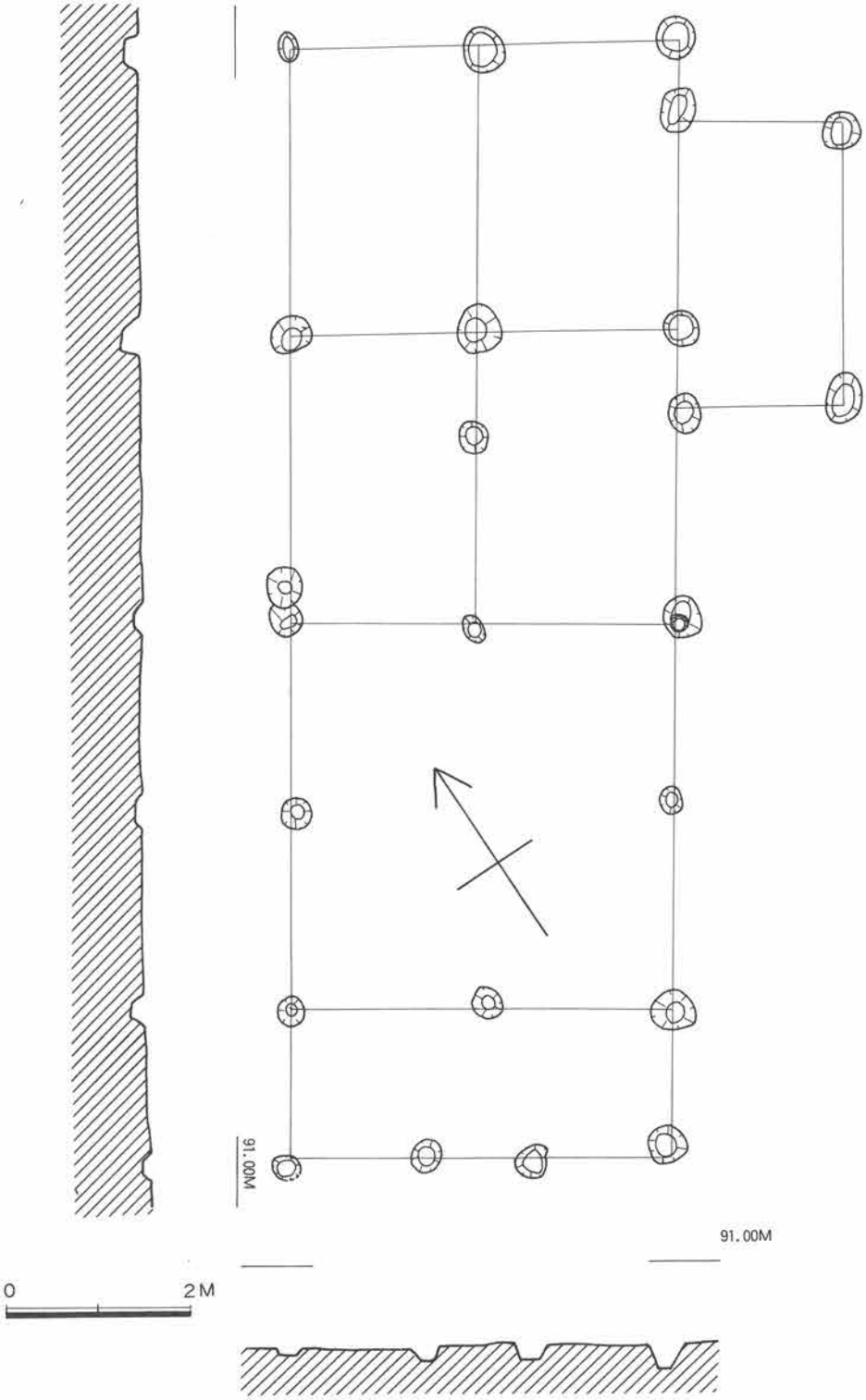
ＳＢ03

調査区の北西部に位置し、建物の規模は桁行２間×梁行１間の東西棟である。寸法は桁行総長8.88m、梁行総長4.16mで柱間距離は桁行で4.8m＋4.08mである。柱穴はおおよそ直径0.8mの円形のもので構成されているが、深さは削平を受けたらしく0.4m以下のものが多い。柱痕を持つものは存在しない。ＳＢ01と構成を同じくするものと考えられる。

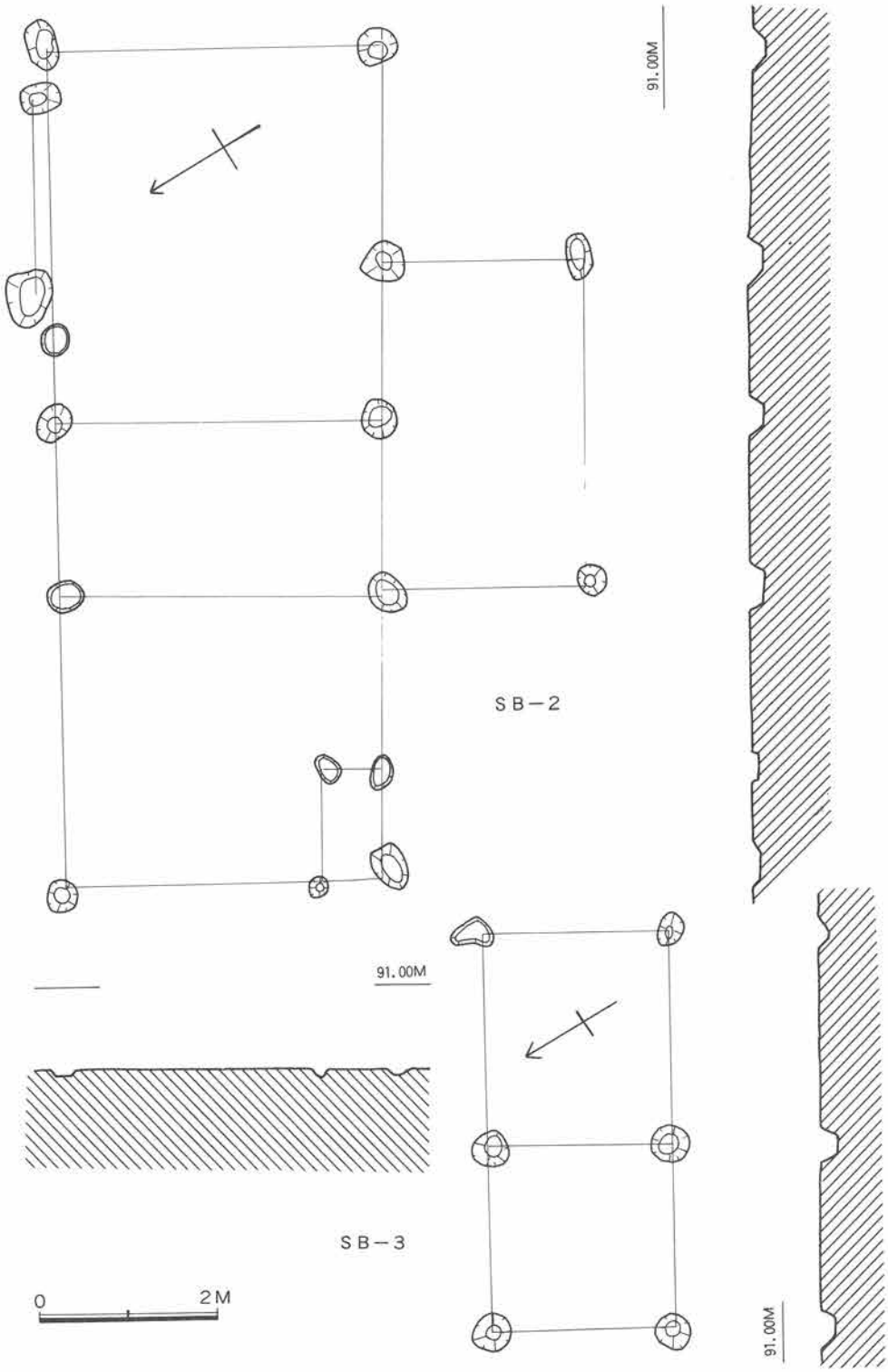
溝

ＳＤ04

調査区の西端を南北に走る溝であるが、北側はここよりさらに東に直角に曲がり南側は



第36図　ＳＢ－１平面図



第37図　ＳＢ－２・３平面図

ＳＤ05、06につながる。大きくみて区画溝の一角を成すものと考えられる。溝の幅は約３ｍである。北から南に向かって流れていたと考えられる。断面はＵ字形を呈している。層位はレンズ状の３層の堆積からなっていた。

ＳＤ05、06

ＳＤ04から東に伸びる溝で両者は平行に走っている。幅は１ｍ～1.5ｍで断面はＵ字を呈している。

ＳＤ07、08、09

ＳＤ07はＳＤ04の外側にテラス状に位置するもので南端は井戸に通じている。また、井戸近くの場所においては瓦質の鍋、釜が破砕した状況で多量に発見されている。ＳＤ08はこのＳＤ07より直角に東に伸びる溝で約10ｍ検出している。幅は50cmである。ＳＤ09はＳＤ08と同じようにＳＤ07の北端で直角に東に伸びるもので端は方形の溜り状になっていた

ＳＤ10

ＳＤ10はＳＤ09の方形の溜りとＳＤ03によって切られた溝で南北方向に伸びている。幅は５ｍと広く浅いものである。

ＳＤ11、12、13

調査区の西半に南北に走るもので相対的に細く浅い溝であり、他の遺構を全て切っているところから一番新しい時期のものと考えられる。

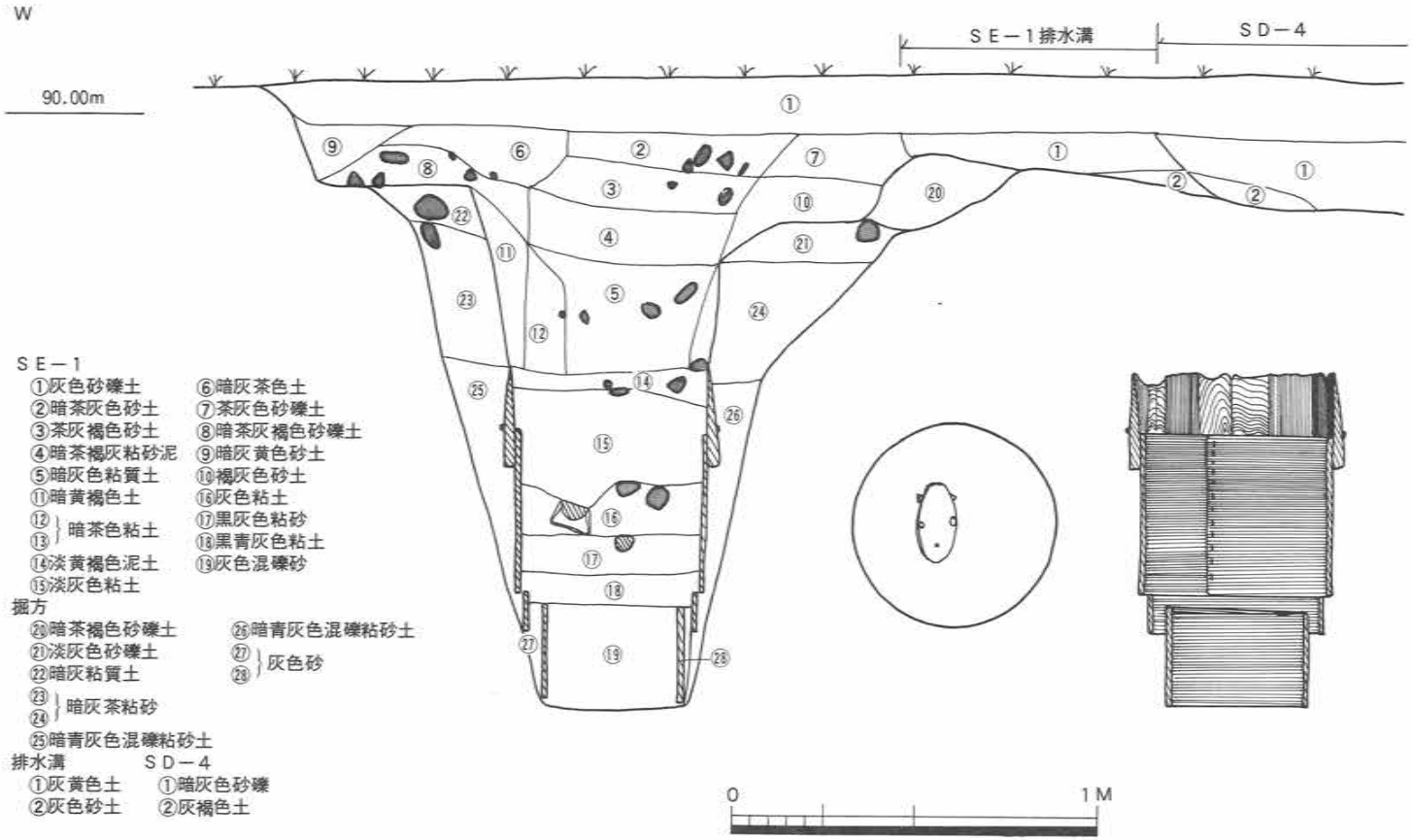
井　戸

井戸は１基を検出した。この井戸はこの区画内の掘立柱建物等の遺構に付随するように存在している。

ＳＥ01

調査区の西辺中央部で検出した井戸である。径約２ｍの円形の掘方のほぼ中央に井筒を据えている。井筒は４段であった。１段目は幅約10cm長さ約25cmの板16枚を円形にして外側を竹のタガで固定したものを使用していた。２段目は径約50cm長さ約45cmの曲物を使用していた。３段目は径約45cm長さ約10cmの曲物を使用していた。４段目は径約40cm長さ約25cmの曲物を使用していた。また、４段目の曲物の下には沈むのを防ぐためにおおきめの石で固定されていた。井筒内の埋土は⑲層で構成されていた。また、掘方の埋土は⑦層で構成されていた。（第28図参照）この井戸の西側ＳＤ４と接する部分では湧水が流れ出るように排水溝が切りこまれていた。出土遺物より時期は14世紀後半と考えられる。

土　壙


W
90.00m
SE－1排水溝
SD－4
SE－1
①灰色砂礫土
②暗茶灰色砂土
③茶灰褐色砂土
④暗茶褐灰粘砂泥
⑤暗灰色粘質土
⑪暗黄褐色土
⑫ ⑬ 暗茶色粘土
⑭淡黄褐色泥土
⑮淡灰色粘土
⑥暗灰茶色土
⑦茶灰色砂礫土
⑧暗茶灰褐色砂礫土
⑨暗灰黄色砂土
⑩褐灰色砂土
⑯灰色粘土
⑰黒灰色粘砂
⑱黒青灰色粘土
⑲灰色混礫砂
掘方
⑳暗茶褐色砂礫土
㉑淡灰色砂礫土
㉒暗灰粘質土
㉓ ㉔ 暗灰茶粘砂
㉕暗青灰色混礫粘砂土
㉖暗青灰色混礫粘砂土
㉗ ㉘ 灰色砂
排水溝
①灰黄色土
②灰色砂土
SD－4
①暗灰色砂礫
②灰褐色土
0
1M

第38図　SE－1断面図

十数基の土壙を検出したが、大半が浅く性格不明のものが多かった。ここでは、主要なものをとりあげて以下に記述する。

ＳＫ01、03

ＳＤ07、08、09に囲まれた範囲に存在する土壙で径約２ｍを測る楕円形のものである。

ＳＫ02

調査区の北東角に位置する南北２ｍ、東西５ｍのほぼ長方形の土壙である。

２．遺　物

ＳＤ04（第39図）

土師質土器皿（１～12）

（１）、（２）は広い平底の底部から体部が内弯するようにたちあがり、口縁部がそこから広がり端部が垂直に立ち上がるもので口縁部を一度だけ横ナデを施す。（１）は②層より、（２）は③層より出土している。（３）は丸底の底部から斜めに口縁部が立ち上がるもので、口縁端部を一度だけ横ナデを施す。（４）～（６）はやや丸みを帯びた底部から短い口縁部を立ちあがるもので口縁端部を一度だけ横ナデを施す。何れも③層から出土している。（７）（８）はやや丸みを帯びた底部から短い口縁部が立ち上がるものでやや強い横ナデにより端部に面ができている。（７）は②層から出土している。（８）は③層から出土している。（９）～（11）は偏平な底部から口縁部を短くたちあがらせるものでその分器高が低い。口縁端部を一度だけナデる。いずれも③層より出土している。（12）はやや丸い底部から内湾するように口縁部が立ち上がるものであるが強い横ナデを２度施し口縁端部を真っすぐにたちあがらせている。③層から出土している。

土師質土器釜（13）

大きく内弯するように口縁部をたちあがらせ端部を丸く収めるもので、やや垂れぎみの貼付けの鍔を持つ。色調は淡赤褐色で、胎土は非常に粗く砂粒を多量に含む。③層より出土。

半瓦質土器釜(14)

体部からやや内湾しながら外方に立ち上がる口縁部を持ち、端部は上面に面を持つ。頸部のくびれた部分に真っすぐに張りだした台形状の鍔を貼付ける。胎土は白褐色を呈する①層より出土した。

半瓦質土器火舎(23)

口径30cm前後で平底の底部を持ち、やや外反ぎみに立ち上がる体部からそのまま口縁部にいたり内側に摘み出すように肥厚させるものである。胎土は粗く多量の砂粒を含む。色調は黒茶褐色を呈する。③層より出土している。

東播系中世須恵器こね鉢（15、16、18、19、21）

（15）は口縁端部外面の屈曲部を丸く仕上げるもので、片口部分である。③層より出土している。（16）は口縁部は真っすぐに立ち上がるが、端部のつまみだしが上下方向に顕著なものである。③層より出土している。（18）は口縁端部を外方に少しだけつまみだすものである。③層より出土している。（19）、（21）は口縁部が内側に内斜し端部を上下に大きくつまみだすもので独立した縁帯を形成している。（19）は②層から、（21）は③層から出土している。

山茶碗系こね鉢（17、20、22）

量的に東播系こね鉢とほぼ同等の出土をみているもので、内面底面は極度に摩滅しているものが多い。胎土は長石や石英を多量に含む粗いもので色調は暗灰色または灰白色を呈する。（17）、（20）は口縁端部を肥厚させ丸く収めるもので強い横ナデを施す。①層より出土している。（22）は底部であるが、平担な糸切りの底部に「ハ」の字に開くやや高めの貼付け高台を有するものである。内面には多量の砂粒が付着していた。外面はヘラケズリである。③層より出土している。

磁　器

白磁碗（31）

口縁端部を鋭く外方につまみだすものである。胎土は緻密で地は淡灰色を呈し、暗白灰色の釉がかかっている。〔太宰府Ⅷ－1〕に相当するものと考えられる。③層より出土。

白磁口禿皿（32）

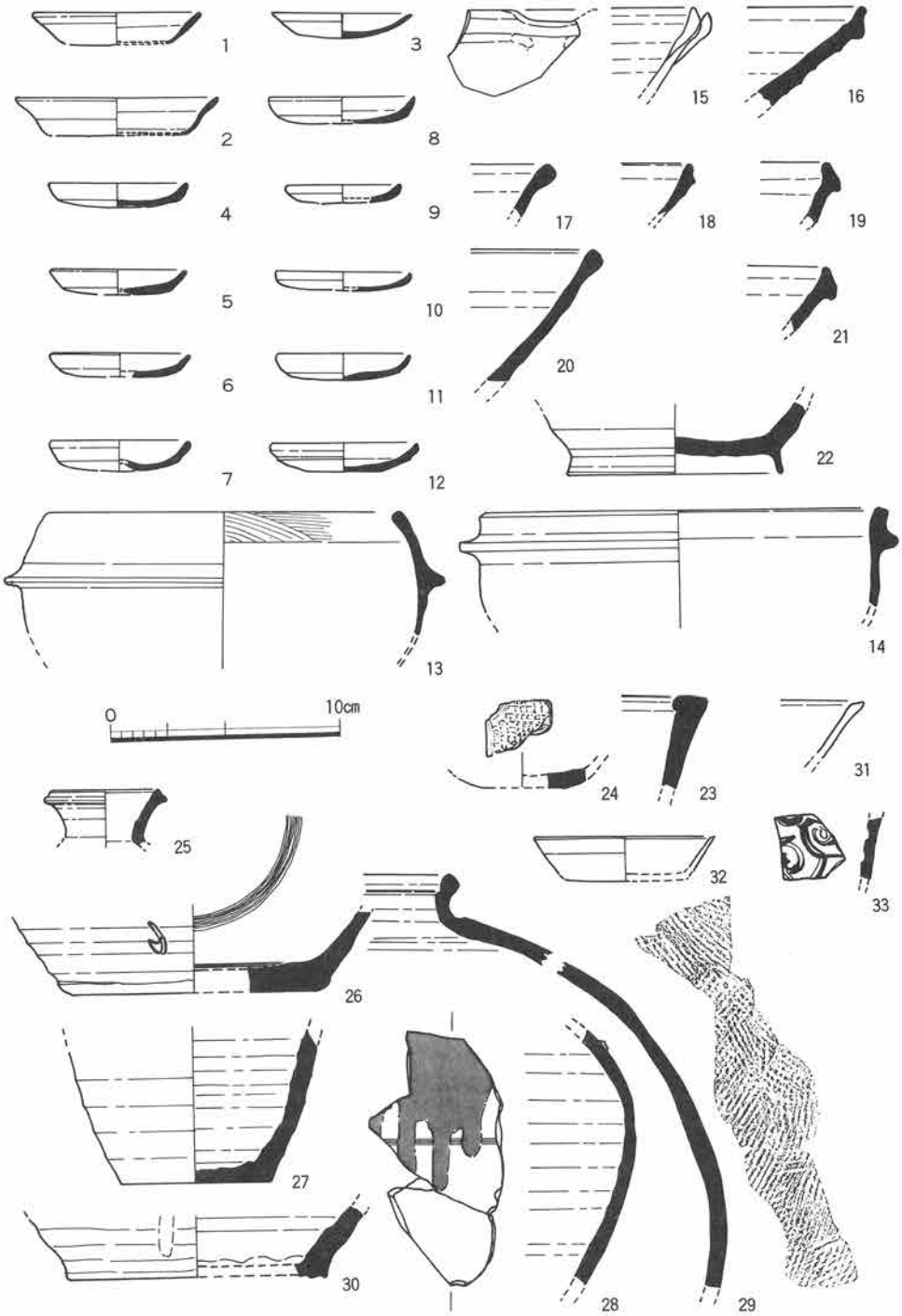
平底の底部から口縁部が真っすぐ斜めに立ち上がるもので、口縁端部内面の釉を掻きとっている。胎土は緻密で地は白灰色を呈し、暗白灰色の釉がかかっている。〔太宰府Ⅸ－2〕に相当するものと考えられる。

青白磁梅瓶（33）

唐草模様のある体部の小片で、ロクロによる横ナデによって成形されている。器壁は薄く胎土は緻密である。地は白色で青白色の釉がかかっている。③層より出土している。

県下では初めての出土である。

陶　器



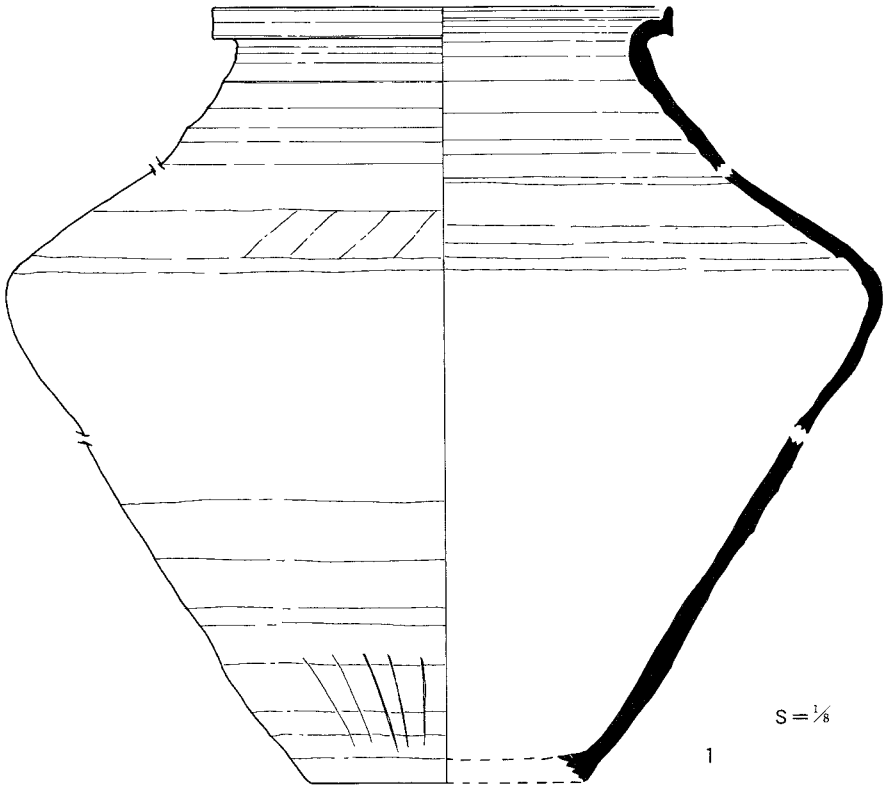
第39図　ＳＤ－４出土遺物

瀬戸おろし皿（24）

底部から体部にかかる部分が出土している。胎土は緻密で地は淡灰白色、淡褐黄色の釉がかかっていた。②層より出土している。

瀬戸瓶子（25、28、27）

（25）は細い頸部から短く外方に広がる口縁を持ち端部をつまみだすもので口クロによる横ナデによって成形されている。地は白灰色で淡緑色の釉がかかっている。③層より出土した。（27）は底部で丁寧なロクロによる横ナデによって成形されている。地は白灰色を呈する。②層より出土した。（28）は体部で４条の掻目が廻っている。漆緑色の釉がかかっている。②、③層より出土した。



第40図　ＳＤ－５出土遺物

瀬戸折縁皿（26）

折縁皿の平底の底部で内面みこみに６本の沈線が廻っている。地は白灰色で淡緑灰色の釉がかかっている。②層より出土している。

常滑甕（30）

（30）輪積み痕の残る底部である。②層より出土している。（１）は小さな底部から外斜め上方に立ち上がる体部から、やや低い位置にある肩から斜め内上方にたちあがらせ、頸部から短く外にひっぱり出した口縁部を口縁端部上方につまみだすものである。つくりは丁寧で横ナデ後、縦方向のナデを施している。胎土は緻密で、白色の小石を若干含む。

産地不明甕（29）

肩張りの大きな体部を持つもので、強く横ナデされた頸部から短くたちあがらせた口縁端部を丸く収めるもので内面に段を持つ。口縁部の外面は斜めのタタキを施された後横ナデが施されている。体部外面はナナメ方向のタタキが無方向に行われている。内面は全て横ナデが施されている。胎土は緻密である。色調は淡灰色を呈し、肩部外面に自然釉がみられ内面頸部から肩にかけてカーボンの付着が認められる。③層より出土した。

ＳＤ05（第41図）

黒色化土師質土器碗（１）

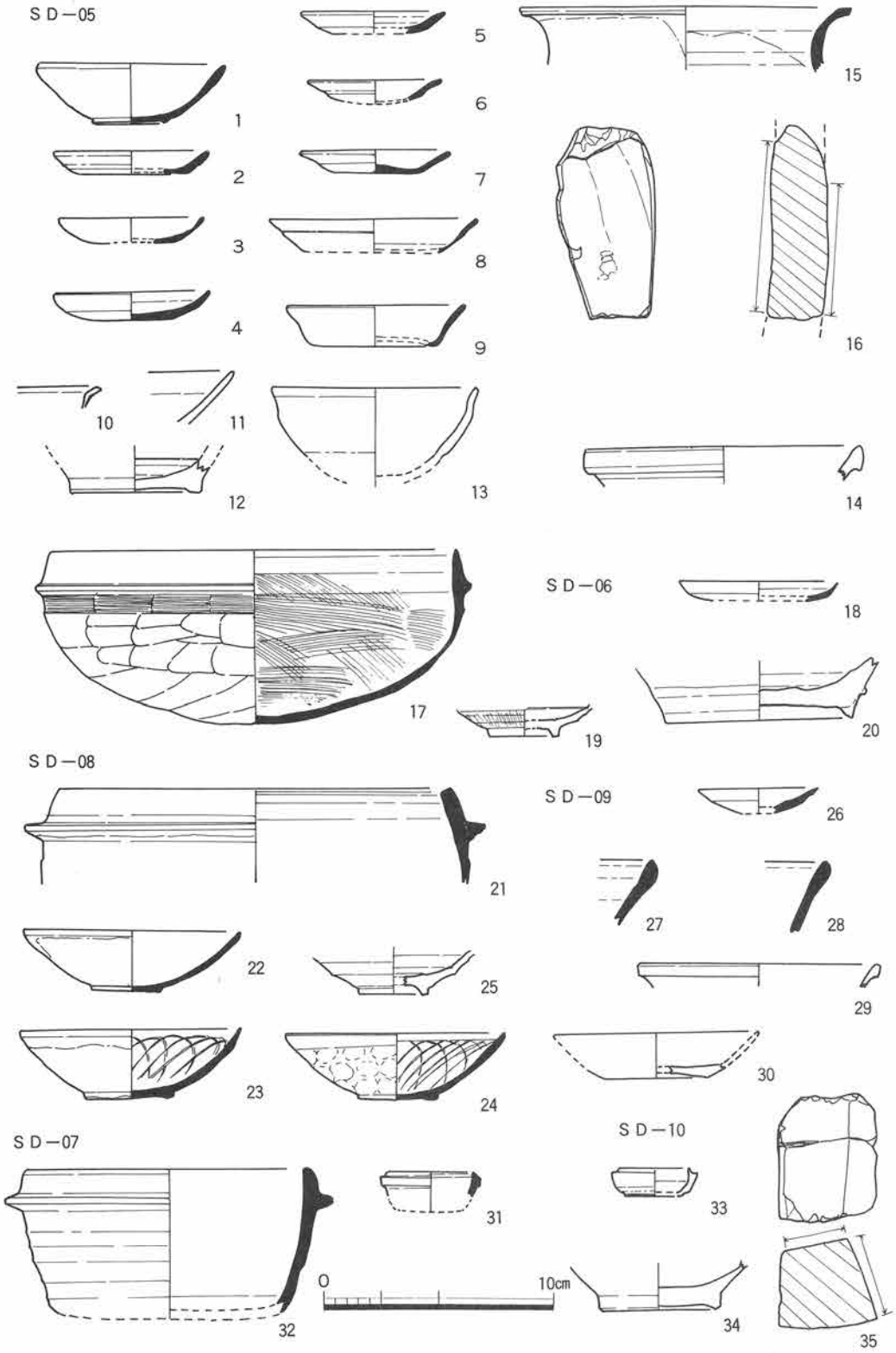
底部から内弯するように立ち上がる肥厚した口縁部を持ち、端部にヘラキリの面を持つもので小さな貼付けの三角高台を持つ。内外面の全体にカーボンが吸着している。施紋は摩滅していて存在しない。

土師質土器皿（２～９）

（２）はやや浮き上がる底部から斜め上方につまみだした口縁部を丸く収めるもので、２度の横ナデを施す。淡褐色を呈する。（３、４）は無調整の底部から内弯するように立ち上がる口縁部を有するもので、端部を丸く収める。一度だけ口縁部を横ナデする。淡褐色を呈する。（５～８）は平担な底部から外反するように斜め上方に立ち上がるもので端部に面を持つ。一度だけ口縁部を横ナデする。淡褐色を呈する。（９）はやや浮き上がる底部から内弯するように立ち上がる口縁部を持つもので器高が高く杯形となっている。

土師質土器釜（17）

丸底の底部から内弯するように立ち上がる体部から真っすぐ上に口縁部が立ち上がったもので、形骸化した小さな断面三角形の貼付け鍔が付く、外面は鍔の直下に横方向のハケを施し、その下底部までをヘラケズリしている。内面は口縁部を横ナデし、他をハケで調



第41図　ＳＤ出土遺物

整している。胎土は砂質で粗く茶褐色を呈する。

陶　器

瀬戸碗（13）

口縁部が「く」の字形に外反するもので、釉は白緑色のものをかけている。基本的には形態は天目茶碗と同じであるが底部は普通平底である。

常滑壺（15）

広く外反して立ち上がる口縁部を持ち端部に面を持つ。地は白灰色で淡緑色釉である。

産地不明甕（第40図１）

肩張りで口縁が直立するもので、地は灰色表面淡褐色である。信楽焼の可能性がある。

磁　器

白磁碗（12、14）

玉縁状口縁部を持つ白磁碗の口縁部と底部である。〔太宰府Ⅳ－１〕に相当する。

青磁碗（11）

内面に一条の沈線が廻るもので、地は暗緑灰色を呈し、淡青緑色の釉がかかっている。

青磁杯（10）

龍泉窯系の蓮弁紋の杯で口縁部が「く」の字に外反するもので、地は灰色を呈し濃緑色の釉がかかっている。〔太宰府Ⅲ－４－ｂ〕に相当するものであると考えられる。

石製品

砥石（16）

先丸の柱状の砥石で３面が使用されている。材質は砂岩である。

ＳＤＯ６（第41図）

土師質土器皿（18）

平坦な底部から短い口縁部を立ち上がらせたもので端部は鋭い。③層より出土した。

陶　器

山茶碗系こね鉢（20）

厚く平坦な底部に三角形の尖った高台を貼付けたものである。

磁　器

白磁碗（19）

台形の削出しの高台を持ち、外面はヘラケズリを施す。内面には一条の沈線が巡り見込みには重焼きの痕跡がある。地は暗緑灰色を呈す。〔太宰府Ⅷ〕に相当すると考えられる。

ＳＤＯ７（第41図）

瓦質鍋（32）

平底の底部からやや内湾ぎみに真っすぐ立ち上がる体部ざそのまま口縁部に続き端部を丸く収めるもので、口縁部よりやや下がったところにやや上向きの台形の鍔が付く。体部外面は指圧によって成形されている。内面は横ナデが施されている。②層より出土した。

ＳＤＯ８（第41図）

土師質土器碗（22～24）

口径に対して器高の低いもので尖底の底部からやや内湾ぎみに斜めに口縁部が立ち上がるもので、端部はヘラギリされたのち横ナデを施しヘラミガキされている。体部外面は指圧成形され内面は右回りの花弁状連続ら旋のヘラミガキを施す。高台は偏平な形骸化した小さな貼付け高台である。

磁　器

白磁碗（25）

ヘラケズリの体部から台形の高台が削出されている。地は白褐色を呈する。

ＳＤＯ９（第41図）

土師質土器皿（26）

尖底の底から斜め上方に立ち上がる口縁部を持ち、端部は鋭く収める。口縁部を一度だけ横ナデを施す。小型の皿である。

東播系中世須恵器こね鉢（27）

口縁部端外面の屈曲部を丸く仕上げるものである。

山茶碗系こね鉢（28）

やや外反するように立ち上がる体部から口縁部を丸く収めるものである。

磁　器

白磁碗（29）

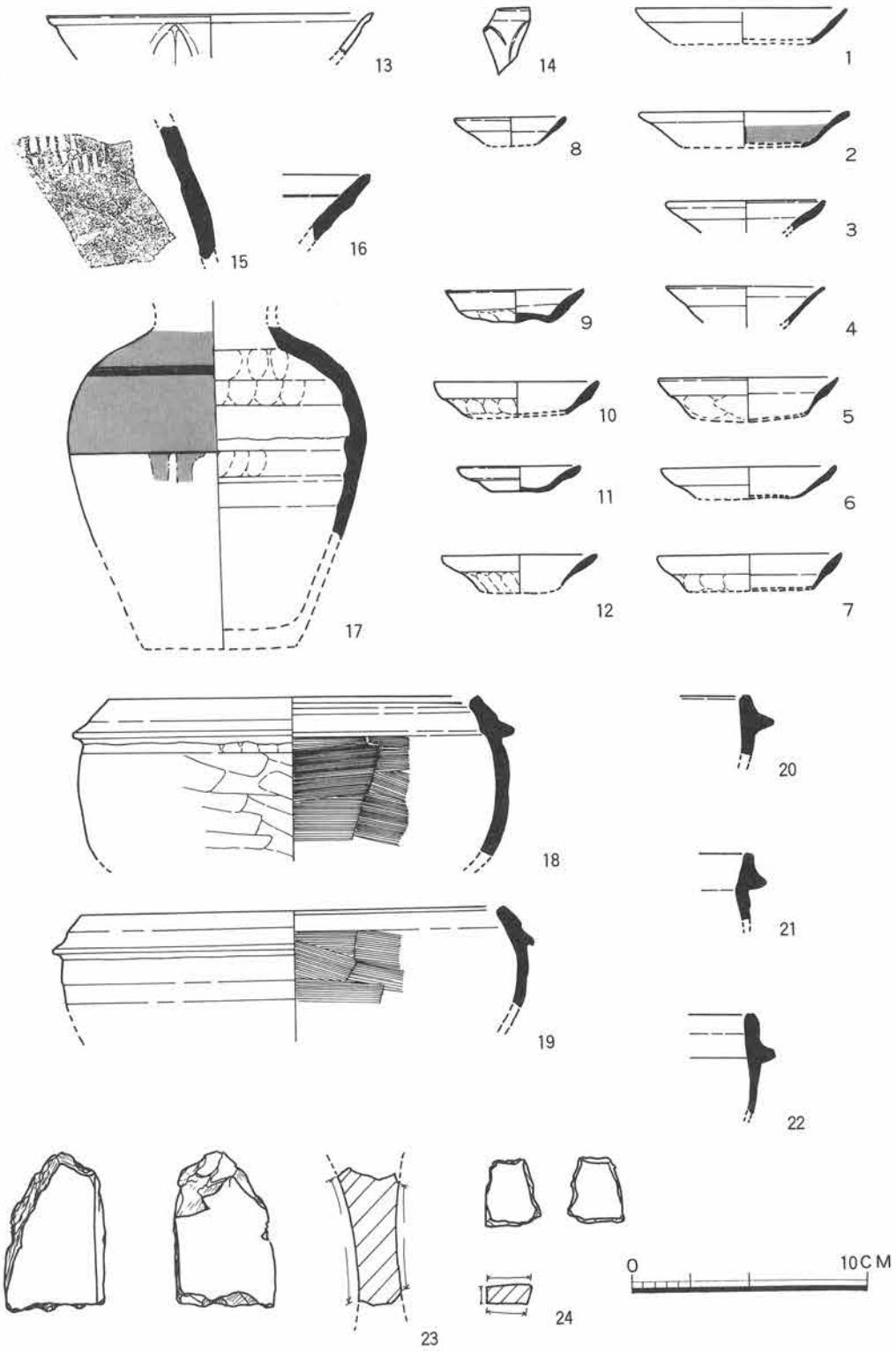
薄い玉縁状口縁部を持つ白磁の碗である。〔太宰府Ⅱ－１〕に相当するものと考えられる。胎土は暗緑灰色を呈し黒色の粒子を多量に含む。

白磁杯（30）

口禿の杯の底部片で、やや底部が上げ底になっている。内面見込みに１条の沈線が廻る

ミニチュア土器釜（31）

瓦質の鍋を模したと考えられるものであるが用途は不明である。



第42図　ＳＥ出土遺物

ＳＤ10（第41図）

磁　器

青白磁合子（33）

合子の身である口径４㎝、器高１.６㎝のものである。地は白色で白色の釉がかかっいる。

白磁碗（36）

碗の底部である。やや「は」の字に削り出された高台を持つ。地は灰白色である。

石製品

砥石（35）

角柱状のもので２面を使用している。材質は竜紋岩系である。

ＳＥＯ１（第42図、第43図）

土師質土器皿（１～12）

（１～４、８）は平坦な底部からやや外反するように立ち上がる口縁部を持つもので、端部は肥厚しない。口縁部を一度だけ横ナデするが体部下半は指圧成形されている。（１）は㉓層から出土した。（２）の内面にはススが付着してい灯明皿として使用されていたと考えられる。排水溝①層より出土した。（３、４、８）は小型のものである。（３）は⑤層より、（４）は⑪層より、（８）は排水溝①層より出土している。（５～７、10）はやや大型で（９、11、12）は小型でやや真ん中が浮き上がる底部から外反するように立ち上がる口縁部を持つもので端部が肥厚するものである。口縁部を一度だけ横ナデするが体部下半は指圧成形されている。（９）は⑭層から、（５）（10）は⑮層から、（11）は⑰層から、（６）（７）（12）⑲層から出土した。

土師質土器釜（18、19）

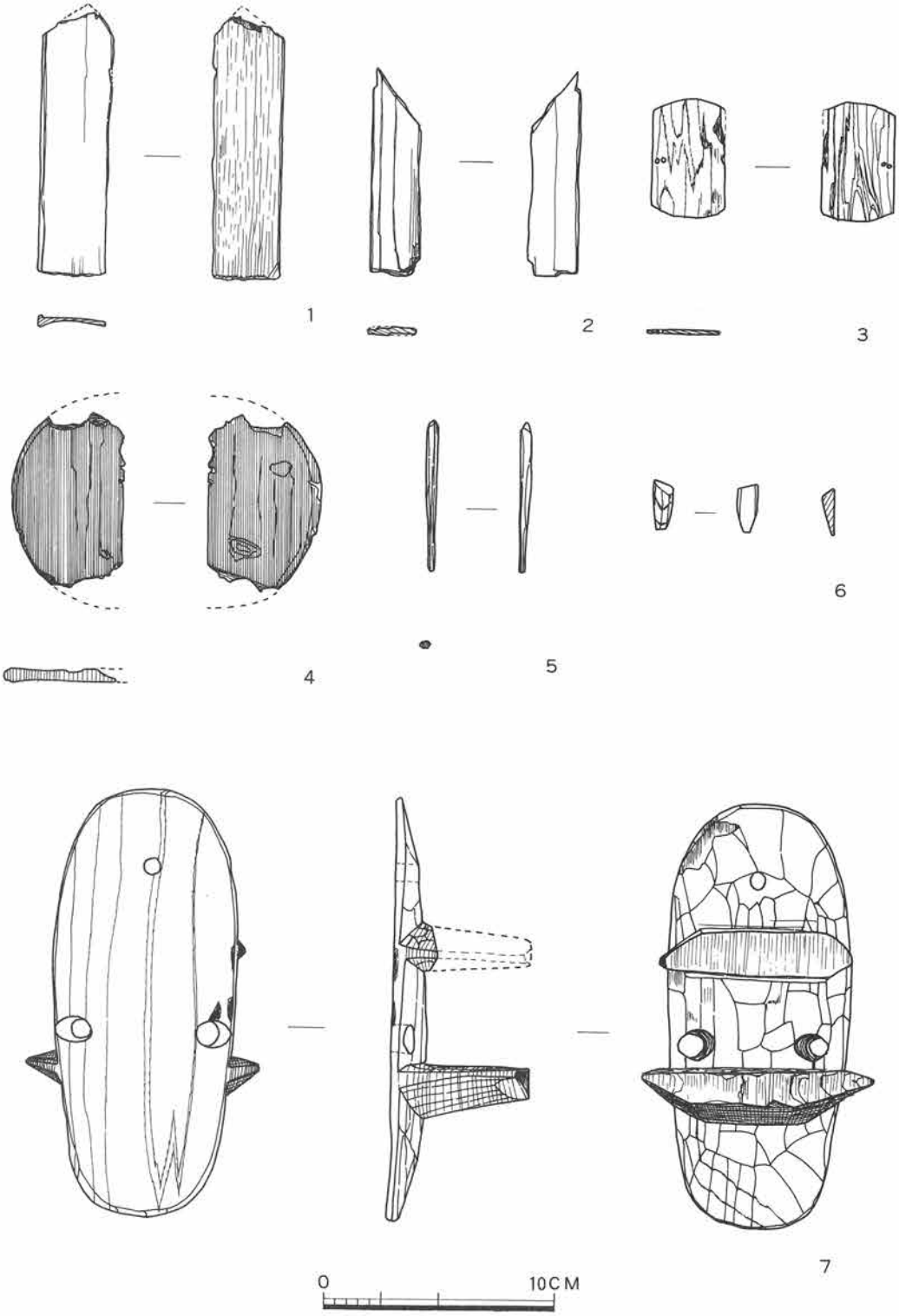
体部から内湾するように立ち上がる口縁部を有するもので、垂下した小さな貼付けの鍔を持つ。外面はヘラケズリで調整され、内面は横ハケにより調整されている。胎土は細かく、色調は淡赤褐色を呈している。（18）は⑳層より、（19）は⑲層より出土した。

瓦質土器鍋（20～22）

いずれも小片であるが、真っすぐに立ち上がった口縁部直下に小さな断面三角形の鍔が付く。（20）は②層より、（21）は⑩層より、（22）は⑮層より出土した。

山茶碗系こね鉢（16）

体部から真っすぐ斜め上方に口縁部を立ち上がらせるもので、端部に内面に段を持つものである。内面に１条の沈線が廻り自然釉がかかる。⑪層より出土した。



第43図　ＳＥ－１出土木製品

陶　器

瀬戸三筋壺（17）

肩部から体部にかけての破片で、肩部に三条の沈線が廻る。内面には等間隔の指圧痕が残る。地の色調は内面黄褐色、断面白灰色を呈する。外面には緑色の釉がかかる。①層より出土した。

常滑甕（15）

体部の破片であるが、格子紋の押印帯があるところから肩部と考えられる。④層より出土した。色調は黒灰色を呈する。

磁　器

青磁碗（13、14）

いわゆる龍泉窯系の蓮弁紋である。地は灰色で青緑色の釉がかかっている。（13）の碗は⑱層より、（14）は⑰層より出土した。

石製品

砥石（23、24）

（23）は⑮より出土している。（24）は花崗岩製で②層より出土している。

木製品（第43図）

小札（3）

小判形を呈した札状の板で片側の真ん中に2つの孔があけられている。⑯層から出土。

曲物底（4）

曲物の底板と考えられる円盤状の板で、その半分以上を欠失している。⑰層から出土。

箸状（5）

長さの半分以上を欠失している。削りは粗く面取りをしただけの物である。⑯層出土。

楔（6）

幅1.2cm、長さ2.7cmの先を尖らせた楔で縦方向の5回の面取りで作られている。井筒の一段目の桶のタガ閉めに使われたものと考えられる。⑱層から出土した。

下駄（7）

小判形を呈するもので後にいく程幅狭く作られている。前の鼻緒が右にやや寄っているので左足のものと考えられる。歯は削り出しである。柾目材である。⑯層上面で出土した

用途不明板状（1、2）

長方形の板材である。両者ともに片方を真っすぐに片方を斜めに切っている。⑯層出土

ＳＫＯ１（第44図）

土師質土器皿（１）

不整形な底部から短く斜め上方に立ち上がる口縁部を持つもので、端部に押しナデの面を持つ。体部を一度だけ横ナデする。色調は淡白褐色で赤色粒子を多量に混入している。

ＳＫＯ２（第44図）

東播系中世須恵器こね鉢（６）

こね鉢の片口部分で、口縁端部外面の屈曲部に明らかな稜を持つものである。体部内外面は回転横ナデによる成形が行われている。

山茶碗系こね鉢（７）

こね鉢の底部である。底面ケズリののち小さな台形状の高台を貼付けている。体部外面はヘラケズリが施されている。内面はよく使用されており摩滅している。

ＳＫＯ３（第44図）

磁　器

白磁碗（３）

幅ひろの玉縁状口縁を呈する碗で〔太宰府Ⅳ－１〕に相当するものと考えられる。

青磁碗（２）

厚みのある底部の外周に断面台形の高台が削出されて、体部は底部からやや内湾ぎみに続く。高台内以外に緑色の釉が施されている

ＳＫＯ４（第44図）

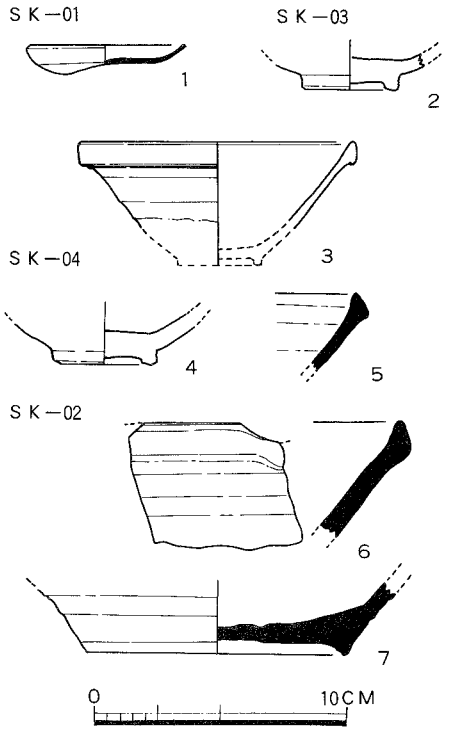
東播系中世須恵器こね鉢（５）

口縁端部外面の屈曲部に稜を持ものである。

磁　器

青磁碗（４）

厚みのある底部の外周に断面台形の高台が削出されている。高台内以外は緑青色の釉が施されている。胎土は精良で、色調は淡青灰色を呈する。



第44図　ＳＫ出土遺物

ＳＰＯ３（第45図）

土師質土器皿（１、２）

やや丸みのある平坦な底部から短い口縁部を斜めにたちあがらせるもので、端部に面を持つ。胎土は粒子細かい。色調は淡白褐色を呈する。

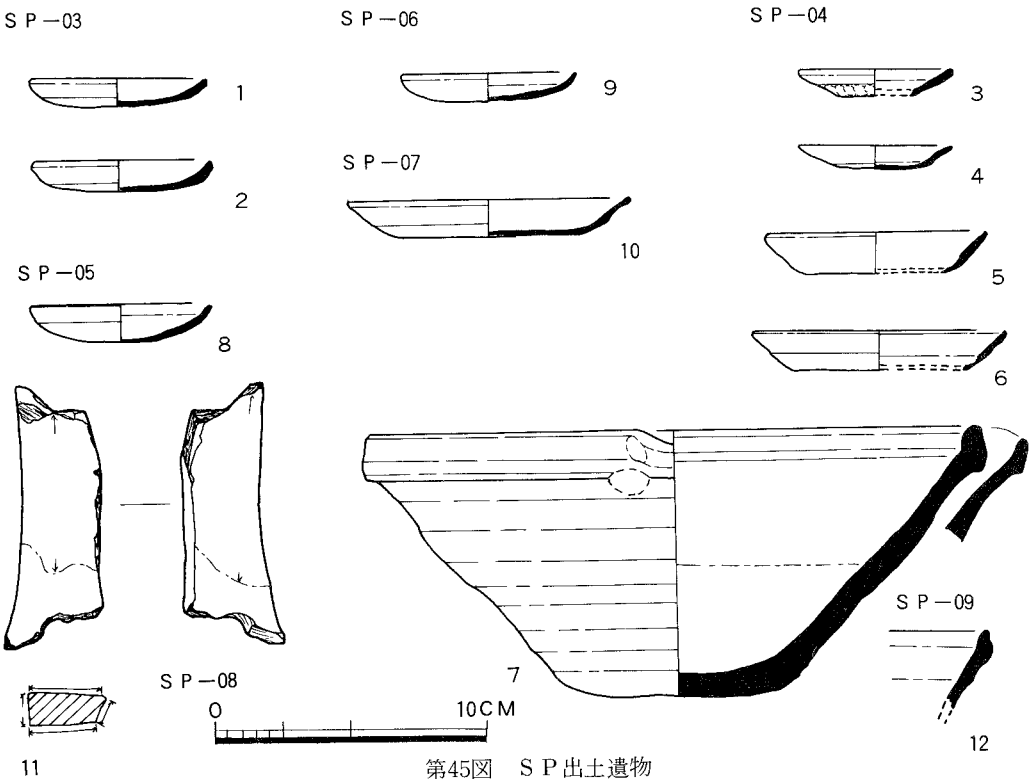
ＳＰＯ４（第45図）

土師質土器皿（３～６）

（３）は平坦な底部から厚く肥厚する口縁部が斜め上方に立ち上がらせるもので、端部を押しナデし面を持つ。体部は指圧で成形する。色調は暗茶褐色を呈する。（４）は不整形の底部から外反させるように口縁部を斜め外方にたちあがらせるもので、幅広い強い横ナデを一度だけ施す。（５、６）は中型の皿で、広く平坦な底部から厚い口縁部を斜め上方に立ち上がらせて端部をやや内側につまみだし面を持たせている。体部の中程あたりまでを一度だけ横ナデしている。胎土は細かく、色調は淡褐色を呈している。

東播系中世須恵器こね鉢（７）

糸切りされた小さな底部から波打つように回転横ナデにより成形された体部が斜め上方にのび、口縁端部外面の屈曲部は稜が発達し独立した縁帯を形成しており丸く収める。内



第45図　ＳＰ出土遺物

面下半は極度の使用により摩滅している。

ＳＰ０５（第45図）

土師質土器（８）

丸い底部から内弯するように体部を立ち上がらせ、口縁部を屈曲させるもので端部は丸く収める。口縁部を一度だけ横ナデする。胎土はやや砂質で、色調は白褐色を呈する。

ＳＰ０６（第45図）

土師質土器皿（９）

底部から内弯させるように口縁部をたちあがらせるもので口縁部を屈曲させ幅の狭い横ナデにより面を作っている。胎土は細かく、色調は暗褐色を呈する。

ＳＰ０７（第45図）

土師質土器皿（10）

平坦で大きな底部から強い横ナデにより外反するように斜め上方に口縁部をたちあがらせるもので、端部を丸く収める。口径に対して器高の低い大型の皿である。

ＳＰ０８（第45図）

石製品

砥石（11）

両方とも欠失しているがばち型に開くもので、４面とも使用している。

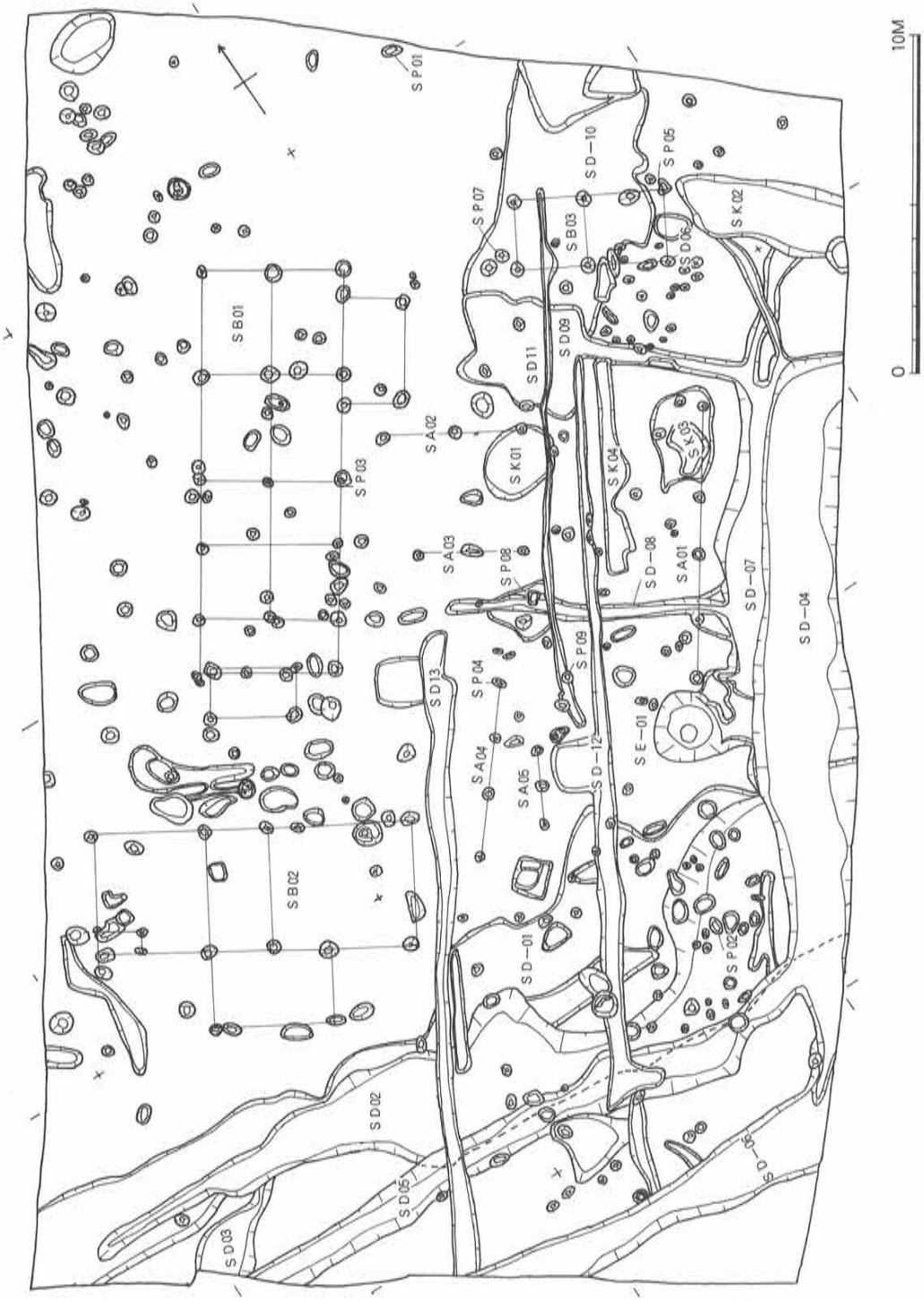
ＳＰ０９（第45図）

東播系中世須恵器こね鉢（12）

口縁端外面の屈曲部を丸く仕げるもので強い横ナデで端部外面に浅い凹線を入ている

Ⅳ　小　結

ここで第３調査区の調査で得られた成果を簡単にまとめる。先ず、古いどころでは古墳時代前期を中心とする溝が確認されている。この溝は東から琵琶湖に向かって流れておりここからは多量の土器が出土しているが高杯がその半数をしめていることや有孔円板やミニチュア土器等からその特異性を感じることができる。第１調査区で集落跡が発見されているがここではこれに伴うものは認められない。草津市側の上寺遺跡との関係が今後の問題となるであろう。中世期の遺構としては区画溝で囲まれた建物１戸分が検出かれた。井戸の位置、敷地の広さを知るうえで良い資料となるであろう。遺物より成立時期が13世紀後半で廃絶時期が14世紀末と考えられる。（木戸）



第46図　第３調査区　平面図

第４節　第４調査区

１　遺　構

調査地の北東端に位置する調査地で、約 560 ㎡の面積を対象とした。遺構検出面は耕作土直下で淡黄青色粘質土を地山とする。

Ⅰ　古墳時代

ＳＫ－１

調査区やや南西よりで検出した不定形の土壙である。南東端はＳＤ－１に切られて明確でない。規模は現状で長径５ｍ、短径2.5ｍ、深さ10㎝を測る。埋土は黒灰色粘質土を基調とする。遺物は古墳時代前期の土師器小片が少量出土している。

ＳＫ－２

ＳＫ－７の東で検出した楕円形状の浅い土壙である。西端はＳＫ－１に切られている。現状では長径 1.5 ｍ、深さ７㎝を測る。埋土は黒色粘質土の単層である。

ＳＤ－１

調査区北東端から南西へ向ってほぼ直線的に走り、ＳＤ－５に合流する溝である。溝の中央は耕作による攪乱をうけている。幅約１～ 1.4 ｍ、深さ10～20㎝を測る。遺物は７Ｃ初頭の須恵器杯身（第49図８）がや少量の土師器片が出土している。

ＳＤ－２

ＳＤ－１に平行して走る溝で調査区中央付近で終息する。幅１～1.8ｍ、深さ20～30㎝を測る。断面はゆるやかなＵ字形を呈する。遺物は土師器、須恵器の小片が出土している。

ＳＤ－３

ＳＤ－２と同一方向に走る溝でＳＤ－２に切られている。現状では幅１ｍ、深さ15～30㎝を測る。弥生土器（第49図４）、須恵器（第49図７）が出土している。

ＳＤ－４

南北方向に走る溝で南側はＳＤ－３に切られている。現状では幅 1.5 ｍ、深さ30㎝を測る。埋土は砂混りの暗灰色粘質土の単層である。少量の土師器片が出土している。

ＳＤ－５

調査区南西端で緩やかなカーブを描いて南流する東西溝である。幅は約 1.8 ｍ、深さは40～50㎝を測り、断面は緩やかなＶ字形を呈する。遺物は土師器甕、須恵器高杯（第49図９・10）が出土している。

Ⅱ 中 世

ＳＢ－１（第47図）

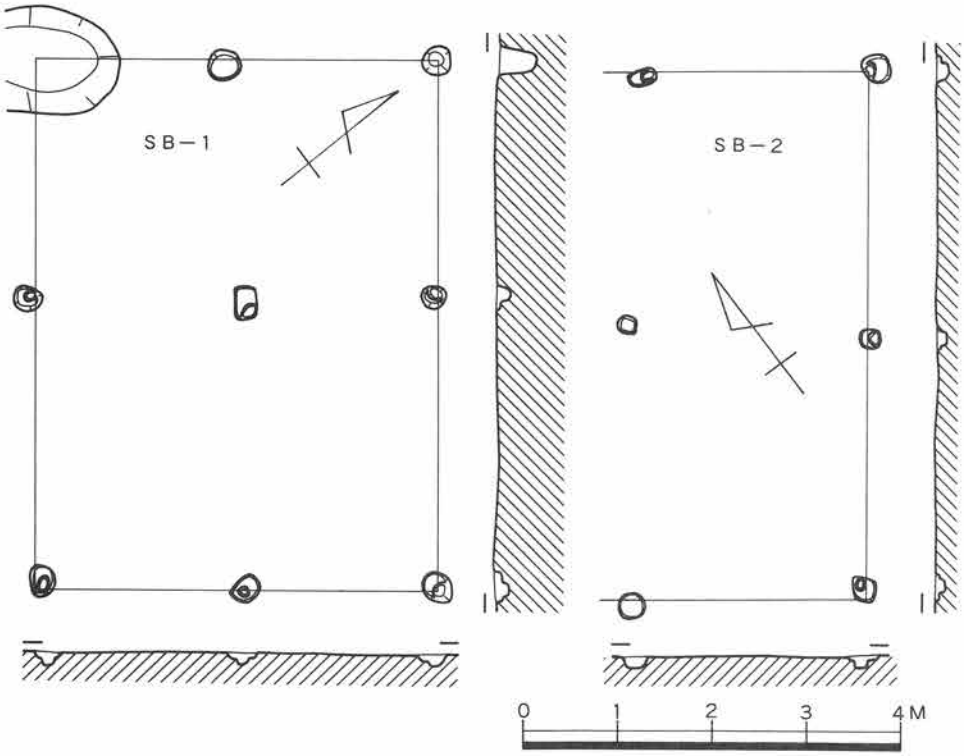
調査区北東端で検出した。主軸方位はＮ－41°－Ｅを示す。建物の北東及び南東は調査区外であるため全体の規模は明確でないが、現状では２間×２間の総柱建物である。柱間距離は桁行 2.1 m、梁間 2.5 m、3.2 mを測る。柱穴の形状は多少ばらつきがみられ、埋土は淡灰茶色土を基調とする。

ＳＢ－２（第47図）

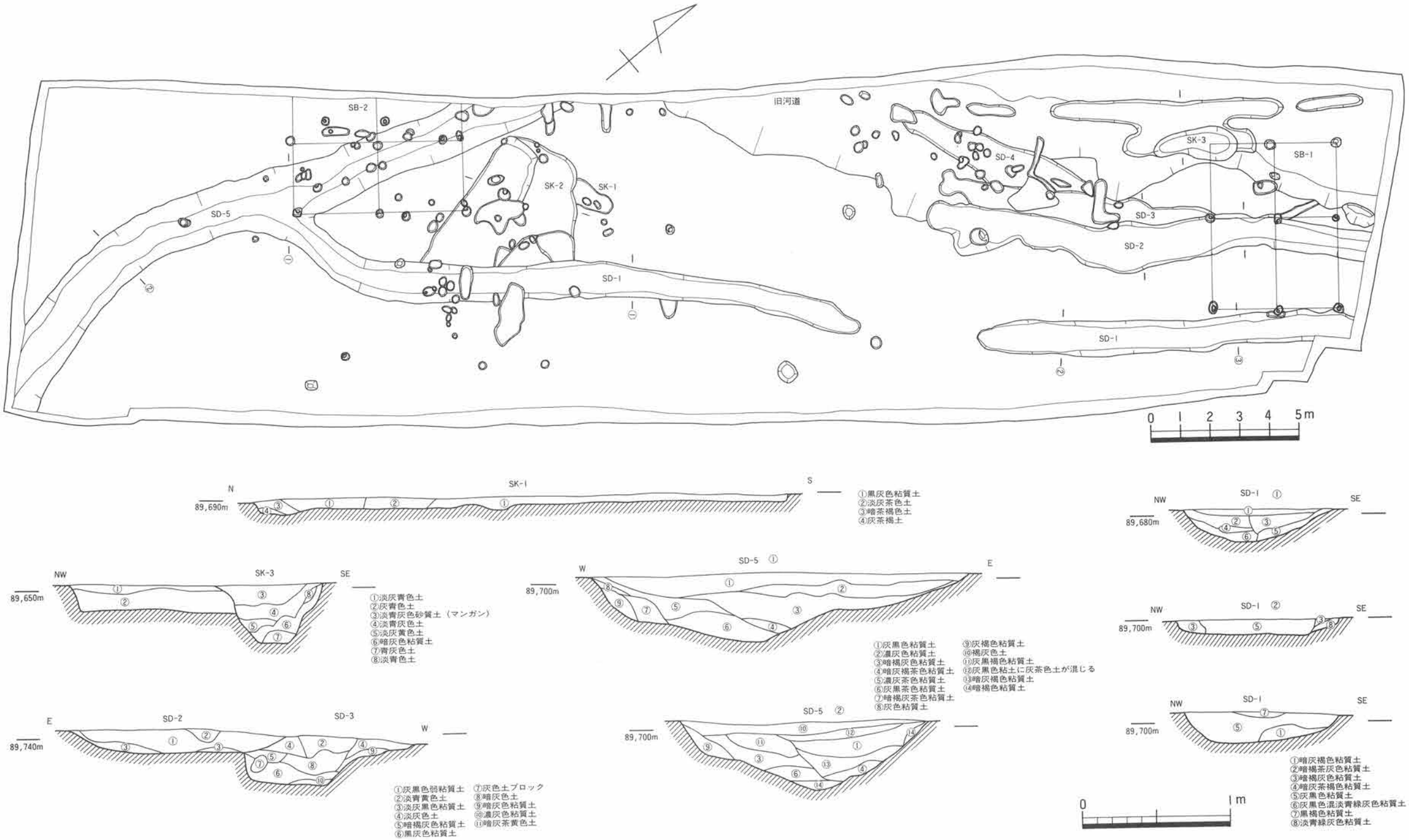
調査区西側で検出した。主軸方位はＮ－43°－ＥでＳＢ－１とほぼ同じ方位を示す。建物は北西調査区外に伸展すると思われるが現状では１間×２間で、柱間距離はそれぞれ2.5m、2.9 mを測る。柱穴の形状は円形もしくは楕円形を呈し、埋土はほぼ灰茶色土の単層である。

ＳＫ－３

ＳＢ－１北コーナと重複して検出した。長径 2.8 m、短径１m、深さ40cmを測る楕円形状の土壙である。遺物は土師器片が少量出土している。



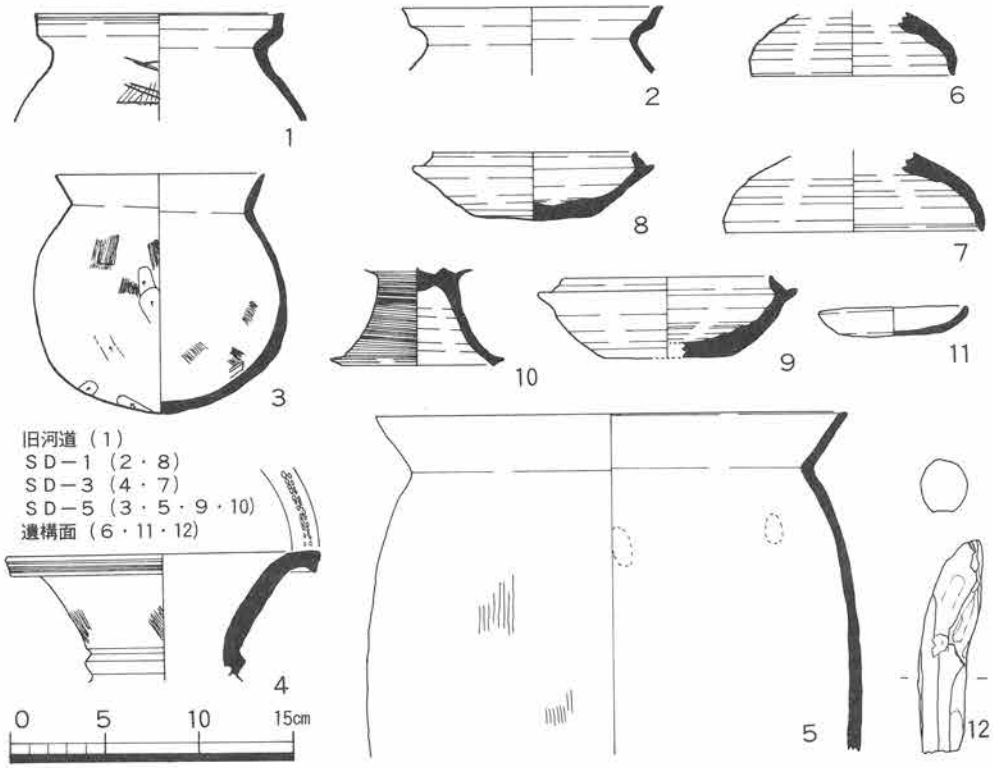
第47図　建物平面図



第48図　第４調査区　遺構平面図・断面図

Ⅲ　遺　物

1・2は受口状口縁甕の口縁部である。いずれも口縁部の鍔の稜は純い。磨滅が著しいが1は外面口縁部に沈線、体部にハケ目が残る。3は口縁部が「く」の字状、体部が球形状を呈する甕である。体部外面はハケ目、下半はナデ、内面はハケで仕上げる。体部外面には煤の付着がみられた。4は広口壷の口縁部である。垂下する口縁部外面に3条の沈線、内面に列点を施す。頸部には断面三角形の突帯を貼りつける。5は口縁部がやや内弯気味に立ち上がる長胴甕である。調整は明瞭でないが外面体部にわずかにハケ目が残る。6、7は須恵器の蓋である。6はやや小型で偏平な器体をもち、7は口縁端部が内傾する面をもつ。器面の調整は回転ナデによる。陶邑Ⅱ型式4段階に比定できる。8、9は須恵器の杯である。いずれも立ち上がりは短く内傾し、受部も短い。調整は回転ナデにより、底部は未調整である。陶邑Ⅱ型式4段階に相当すると考える。10は基部が太く短い高杯の脚部である。外面にカキ目を施す。11は土師器小皿である。口径は8cm、器高は1.4cmを測る。12は瓦質釜の脚部で11とともに遺構面からの出土である。



第49図　遺物実測図

Ⅳ　小　結

第４調査区で検出した遺構は古墳時代前期の土壙２基、後期の溝５条、中世期の建物２棟、土壙１基であった。後期の溝はほぼ７Ｃ前半代に時期が求められ、第１調査区で検出したほぼ同時期の集落との関連が考えられる。中世期の建物についてはその明確な年代は不明であるが、建物方位が後述する区画溝集落とほぼ同じであることから同時期かあるいはそれに近い時期のものと思われる。　（宮下）

第5節　第5調査区

第4調査区の南西に隣接した約320㎡を対象にした。遺構検出面は耕土から50～60㎝で達する。この間の層位は明灰黒色土（耕土）・明黄茶色土（床土）・褐灰色土・暗黄褐色土（床土）で、2面の耕作面が認められる。地山は第4調査区で地山土とした淡青黄色粘質土で、多量の遺物を包含した旧河道はこの面で検出した。

1　遺　構

旧河道

調査区のほぼ全域が旧河道の埋土という状況であったが、東側でわずかに肩の一部を検出することができた。層位はⅠ暗灰色粘質土・Ⅱ黒灰色粘質土・Ⅲ暗灰色粘砂土・Ⅳ灰褐色粘質土・Ⅴ灰色砂の5層を基準とする。遺物はⅠ・Ⅱ・Ⅲ層から古式土師器を中心にした大量の土器や木製品が出土した。特にⅢ層中の出土量は最も多く、木製品のほとんどがここから出土している。Ⅳ層はいわゆる腐植土層で、土師器片や木葉や木の実など自然遺物がみられた。Ⅴ層はこの時期の河の最下層にあたるが、縄文時代晩期の深鉢3個体が出土した。又、東側肩部と底面から杭列を検出したが、規則性を見い出すことができず、その性格・目的については不明である。

2　遺　物

出土遺物は大量の土器と木製品がある。土器は弥生時代後期～古墳時代中頃までのものがほとんどであるが、一部に縄文土器や須恵器を含み、全体的にやや時間幅をもつ。器種は壺・甕・高杯・器台・鉢などがあるが、甕が半数近くを占める。

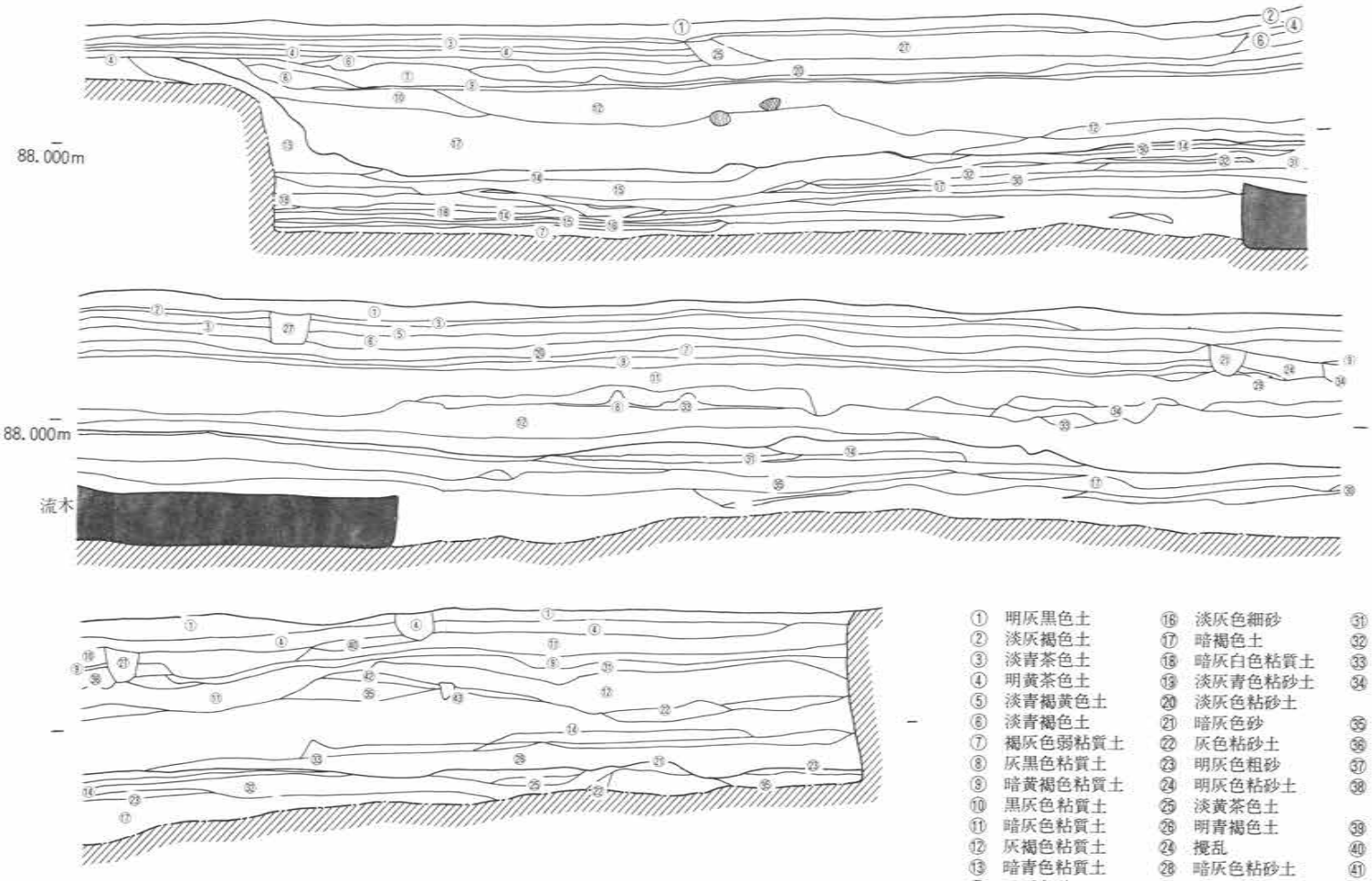
暗灰色粘質土出土遺物（第52図①～㉛）

旧河道最上層で、弥生土器や古式土師器の他に中世期の土師器・黒色土器・陶器・陶磁器などが少量みられた。

壺（①～③・㉒）

①は口縁部が短く外反する広口壺で、端部はつまみ上げられている。②は球状の体部に直立気味に外方へ開く口縁部を付す台付壺である。脚台は比較的高く「ハ」の字状にゆるやかに開き3孔を穿つ。胴部には突帯を貼りつけ沈線と刻み目をいれ、すぐ上部には波状文を粗雑に施す。調整は内外面にヘラ磨き、底部外面付近にハケ目が認められるが明瞭でない。内面頸部には塗布された赤色顔料が一部残存している。③は短頸直口壺で比較的肩部が張る。調整は体部外面ハケ目、その他はナデで仕上げ、頸部外面にはヘラ状工具による刻み目を施す。㉒は口縁部が直線的に外傾し端部に面をもつ、調整は磨滅のため不明瞭

第50図　第５調査区　旧河道平面図



第51図　旧河道断面図

① 明灰黒色土
② 淡灰褐色土
③ 淡青茶色土
④ 明黄茶色土
⑤ 淡青褐黄色土
⑥ 淡青褐色土
⑦ 褐灰色弱粘質土
⑧ 灰黒色粘質土
⑨ 暗黄褐色粘質土
⑩ 黒灰色粘質土
⑪ 暗灰色粘質土
⑫ 灰褐色粘質土
⑬ 暗青色粘質土
⑭ 明灰色砂
⑮ 暗灰色細砂
⑯ 淡灰色細砂
⑰ 暗褐色土
⑱ 暗灰白色粘質土
⑲ 淡灰青色粘砂土
⑳ 淡灰色粘砂土
㉑ 暗灰色砂
㉒ 灰色粘砂土
㉓ 明灰色粗砂
㉔ 明灰色粘砂土
㉕ 淡黄茶色土
㉖ 明青褐色土
㉗ 攪乱
㉘ 暗灰色粘砂土
㉙ 青灰色粘質土
㉚ 灰色砂
㉛ 灰褐色粘砂土
㉜ 灰色細砂
㉝ 暗褐灰色粘質土
㉞ 暗褐灰色粘質土に淡灰色砂がまじる
㉟ 褐色粘砂土
㊱ 明青灰色粘質土
㊲ 明灰色細砂
㊳ 淡青色土に明茶黄色土がまじる
㊴ 淡青灰黄色土
㊵ 暗青茶色土
㊶ 青褐茶色土
㊷ 暗褐灰色粘砂土
㊸ 淡青緑灰色粘質土

0　2M

であるが内面に指頭圧痕がみられる。胎土は２～６㎜大の石粒を多く含有している。

小型丸底壺（④～⑫）

扁球状の体部にまっすぐ外方へのびる口縁部がつくもの（④～⑧・⑪・⑫）と球形の体部にやや内弯する口縁部がつくもの（⑨～⑩）がある。

甕（⑬～㉑）

⑬～⑳は受口状口縁甕である。⑬～⑮は口縁端部を強く外方へつまみ出し、口縁部外面にヘラ描き沈線をめぐらすタイプで、頸部外面には平行文（⑬）斜格子状文（⑭）の刻み目を施す。⑯は口縁端部を外方へつまみ出すが口縁部は無文である。頸部外面に粗雑な波状文を施す。⑱は口縁部が内傾するタイプで、口縁部外面に刷毛原体による刺突列点文、頸部外面に粗い平行文を施す。⑰・⑲は口縁端部の外方へつまみ出しが弱いタイプで無文である。⑳は口縁部の屈曲が弱く、端部に平担面を有す。頸部外面にハケ目調整を施す。㉑は一応受口状を呈するが、口縁部は「く」の字状に屈曲した後中位に段をなし、外反して立ち上がるもので、立ち上がりの度合いは非常に弱い。口縁部内外面横ナデ、体部内面はヘラ削りを施す。

有孔鉢（㉕）

平底の底部から体部が直線的に外傾するタイプで、内面にハケ目調整が施されている。

高杯（㉖～㉙）

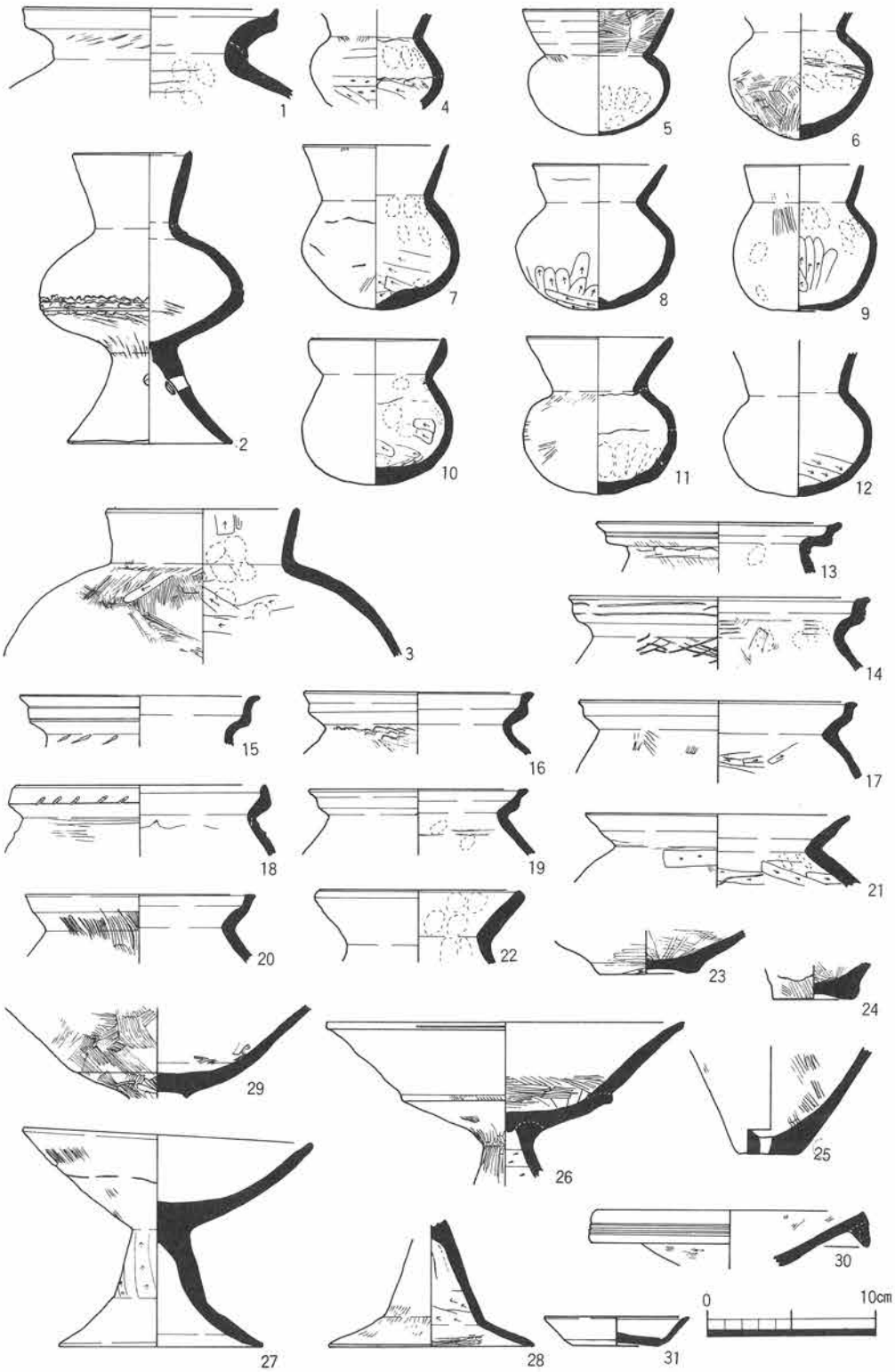
㉖は内弯する杯底部と外反する口縁部の境に明瞭な稜を有す。調整は口縁部内外面がハケの後ナデ、杯底部内外面と脚柱部外面はヘラ研磨を施す。㉗は杯底部と口縁部の境が不明瞭で口縁部が内弯気味にのびる杯部に「ハ」の字状に開く脚部がつく。調整は杯部外面がハケの後ナデ、内面がナデ、脚柱部外面ヘラナデ、裾部外面は横ナデを施す。㉘は、「ハ」字形の脚柱部から裾部にかけて大きく開く脚部で、裾部内外面にハケ目調整を施す。

器台（㉚）

擬以口縁の下端上に粘土帯を貼りつけて口縁部を垂下させ、端面にクシ描きの平行文を施す。調整は明瞭でないが内外面にヘラ研磨が認められる。

白磁皿（㉛）

口縁部が直線的に立ち上る皿で、端部はいわゆる口禿である。胎土は比較的精良で灰白色を呈す。施釉は全面に施され、黄灰白色に発色する。〔太宰府Ⅸ類－１〕に相当し、年代は13Ｃ後半～14Ｃ代に比定できる。



第52図　旧河道暗灰色粘質土出土土器

黒灰色粘質土出土遺物（第53図㉜～㊵・第54図㊶・㊷）

旧河道東岸に帯状に堆積していた土器群である。

壺（㉜～㊱）

㉜・㉝・㊱は短頸直口壺である。㉜は口縁部が直線的に外傾し、端部が平担面をもつ。頸部外面と口縁端部にヘラ状工具による刻み目を施す。㉝・㊱は口縁部が直立しやや外弯する。㉝は体部が扁球状を呈し、底部はやや突出した平底である。体部下半外面に煤、内面に炭化物の付着がみられ、煮沸に使用されたものであると考えられる。調整は㉝が内外面ハケ目、㊱が外面ヘラ研磨、内面頸部ハケ目、体部ナデを施す。㉞は口縁が外上方へ直線的にのび、拡張した端面をもつ。㉟はひきしまった頸部から口縁部は受口状に立ちあがり端部は平担面を有す。調整は外面ヘラ研磨、内面はハケ目とナデを施す。

小型丸底壺（㊲～㊹）

扁球状の体部に直線的に外上方へのびる口縁部を有す

甕（㊺～㊿）

㊺～㊽は受口状口縁甕である。㊺は口縁部の屈曲が弱く、端部は平担面を有す。㊻はわずかに口縁部端部を外方へつまみ出す。㊼・㊽は口縁部がほぼ直立し、端部が内傾する面をもつ、㊼は口縁部の内外面に一条のヘラ描き沈線、体部外面に斜格子文を施す。

㊾～㊿は口縁部が「く」の字状に屈曲する。㊿は口縁端部が下方に若干肥厚する。

鉢（(54)）

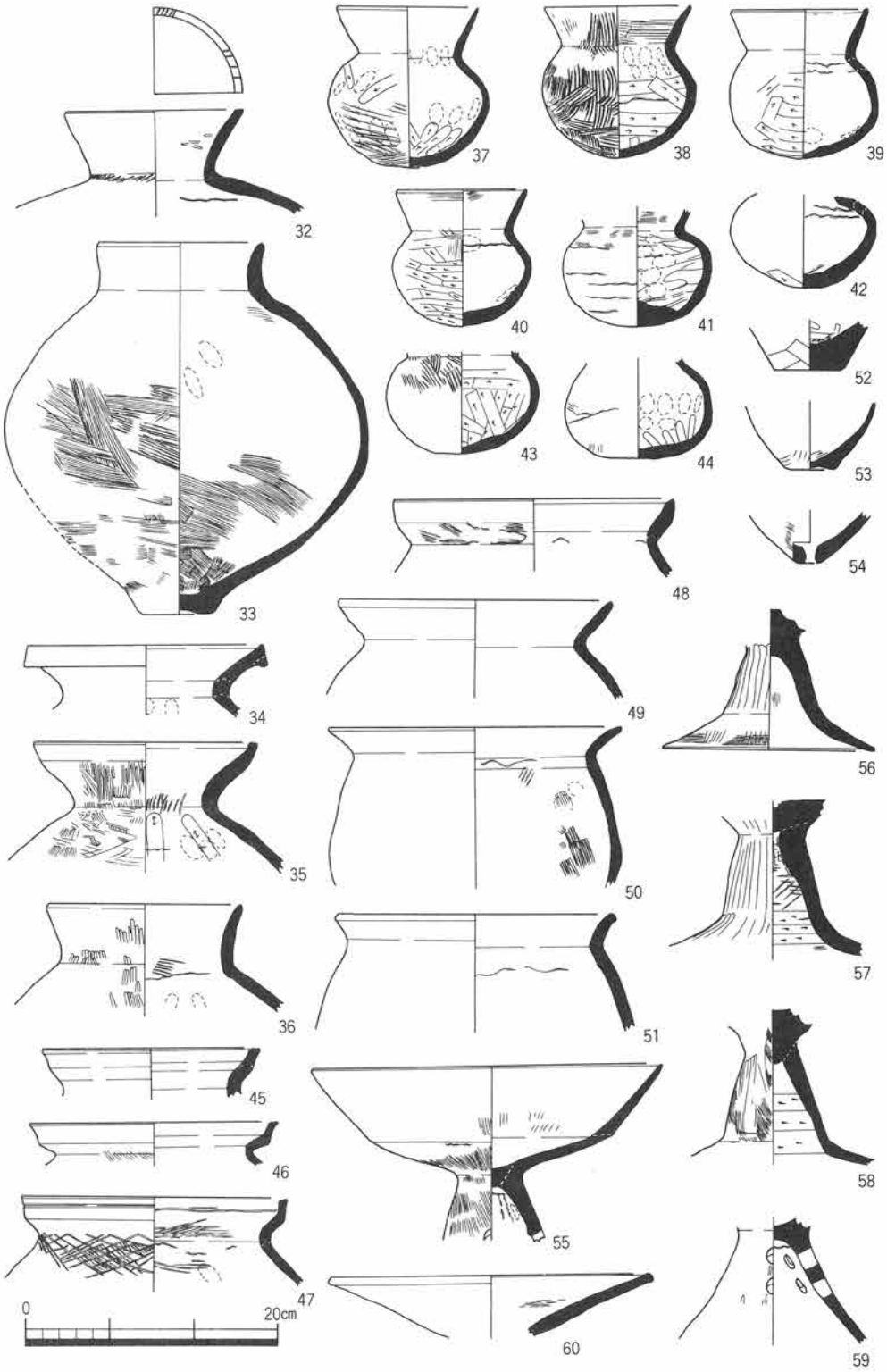
有孔鉢の底部である。小さな平底から体部はやや内弯気味に立ちあがる。調整は外面ハケ目、内面ナデを施す。

高杯（(55)～(59)）

(55)は杯部口径が脚部に比して大きく、又口縁部は杯高の⅔を占める。内弯する杯直部とほぼ直線的に外上方へのびる口縁部との境は明瞭な稜によって分けられる。脚部はやや内弯気味に開き３方を穿つ。(56)～(58)は「ハ」の字状の脚柱部から裾部にかけて大きく開く。(59)は下半部が内弯して開き２段に６孔を穿つ。調整は(55)が杯部外面にヘラ研磨、杯部内面、脚部外面にハケ目が施されている。(56)・(57)・(59)は脚部外面ヘラ研磨、(58)はハケ目、内面は(57)・(58)にヘラ削りが施されている。(55)・(59)の底部成形は円盤充填法による。

器台（(60)）

直線的に外方へ開く器台の受部で、端部はやや肥厚して狭い面をもつ。



第53図　旧河道黒灰色粘質土出土土器

絵画文土器（㊶）

５㎝×３㎝の少破片で壺の体部片とみられる。外面にヘラ状工具で絵画状の線刻がみられる。

石鏃（㊷）

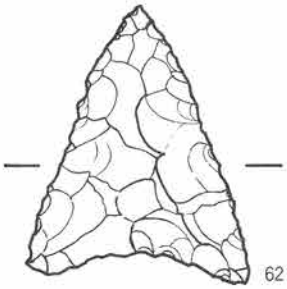
鋭い尖頭をもつ二等辺三角形を呈し、浅い弧状の基部をもつ無茎石鏃である。石材はサヌカイトである。

暗灰色粘砂土出土遺物

土器（第55図～第59図）

壺（㊸・㊺～㊻・㊽・㊾）

61

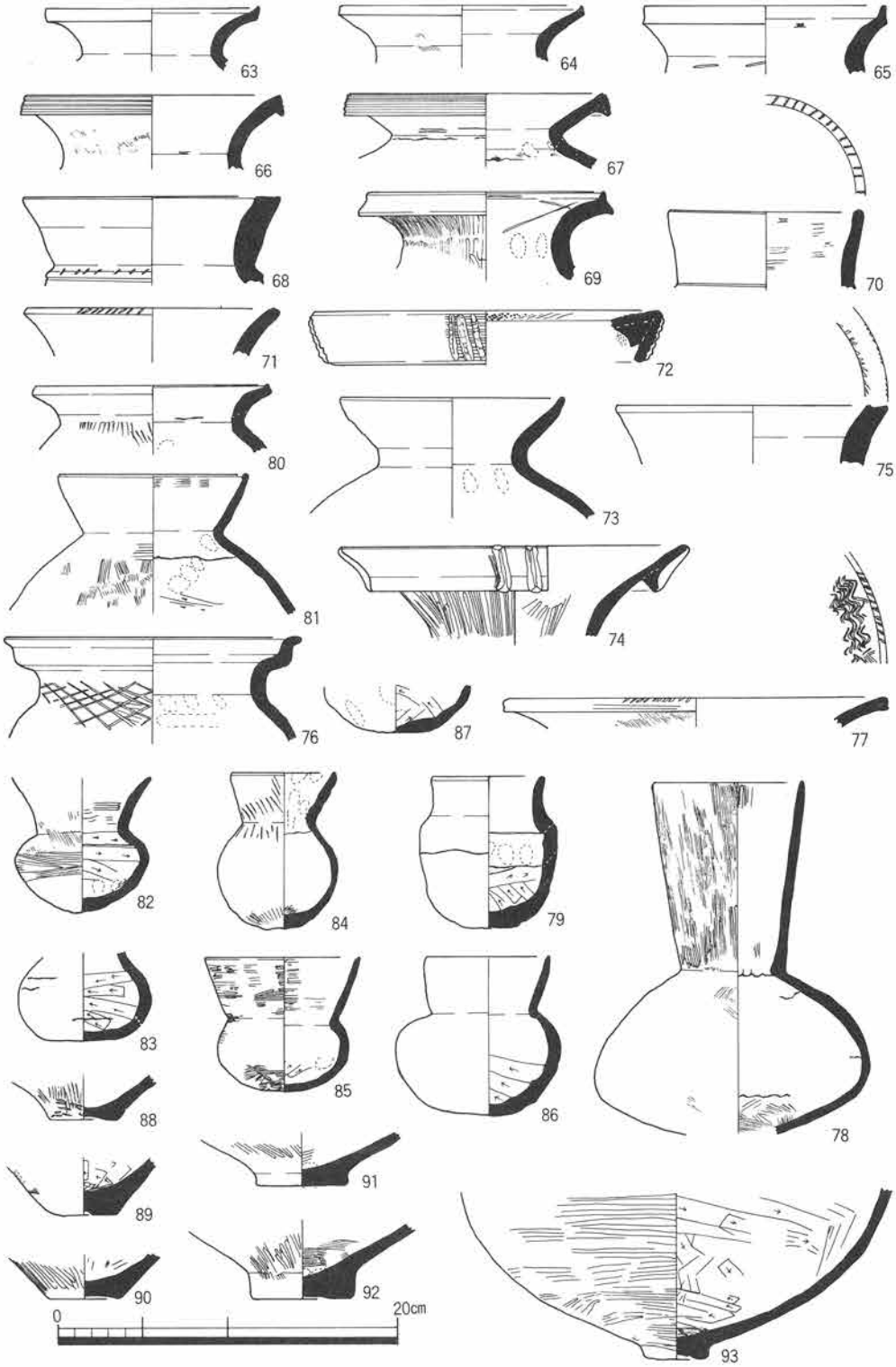


62

原寸

第54図　旧河道黒灰色粘質土出土遺物

㊸・㊺は口縁部が外反し、端部はつまみ上げられ外方に面をもつ。㊻は口縁部がゆるやかに外反し端部を垂下させるもので、端面に平行文を施す。㊼は外上方へ短く直線的にのびた口縁部の端部を拡張し、端面に平行文を施す。㊽は肉厚の口縁部がやや外弯気味に立ち上がり、端部は平端面を有す。頸部には突帯を貼りつけ刻み目を施す。㊾は直立気味に立ち上がる頸部から口縁部は外反し、端部をつまみ上げる。頸部外面ヘラ磨き、内面はナデで仕上げるが、X状の記号文かみられる。㊿は直立やや外傾気味に立ち上がる口縁部の端面に刺突列点、頸部に沈線を施す。(71)は外反気味にのびる口縁部の端面に刻み目をいれる。(72)は東海系のパレス壺の口縁部である。垂下口縁の外面に平行文と棒状浮文を施し、内面は竹管文で加飾する。搬入品と考えられる。(73)はひきしまった頸部から口縁部は内弯しながら受口状にたち上がる。(74)は大きく外反する口縁部に粘土を貼りつけ垂下させ、棒状浮文を施す。調整は細いヘラ磨きが内外に施されている。(75)は外弯する肉厚の口縁部の端部内外面に刻み目を施す。(76)は受口状口縁壺で端部を強く外方へつまみ出す。体部外面にヘラ状工具による斜格子文を施す。(78)は細頸壺である。扁球状の体部に直線的に外傾する細長い口縁部がつく。調整は口頸部外面ヘラ研磨、体部内外面はハケで仕上げる。(79)は粗製の小型壺である。すべてナデ仕上げ、内外面に粘土接合痕や指頭圧痕が見著に認められる。(88)～(93)・(95)～(109)は壺の底部である。平底（(88)～(90)・(95)～(98)・(101)・(107)～(109)）、突出した平底（(91)・(92)～(99)・(110)・(104)～(106)）、形骸化した平底（(102)）、底に粘土を貼り付け、高台状を



第55図　旧河道暗灰色粘砂土出土土器

呈するもの（⑩③）がある。⑩⓪の内面には赤色顔料の塗布が認められた。

小型丸底壺（⑧②～⑧⑦）

⑧②は扁球状の体部に大きく外反する口縁部がつき、口径は体部最大径をしのぐ。外面ハケ、内面ナデで仕上げる。⑧④は球状の体部から口縁部は直線的に小さく外傾する。調整は外面と底部内面がハケ、その他はナデで仕上げる。⑧⑤は扁球状の体部から口縁部は直線的に外傾し、口径は体部最大径をしのぐ。内外面とも丁寧なヘラ磨きが施された精製品である。⑧⑥は口縁部がやや内弯気味に立ち上がる。

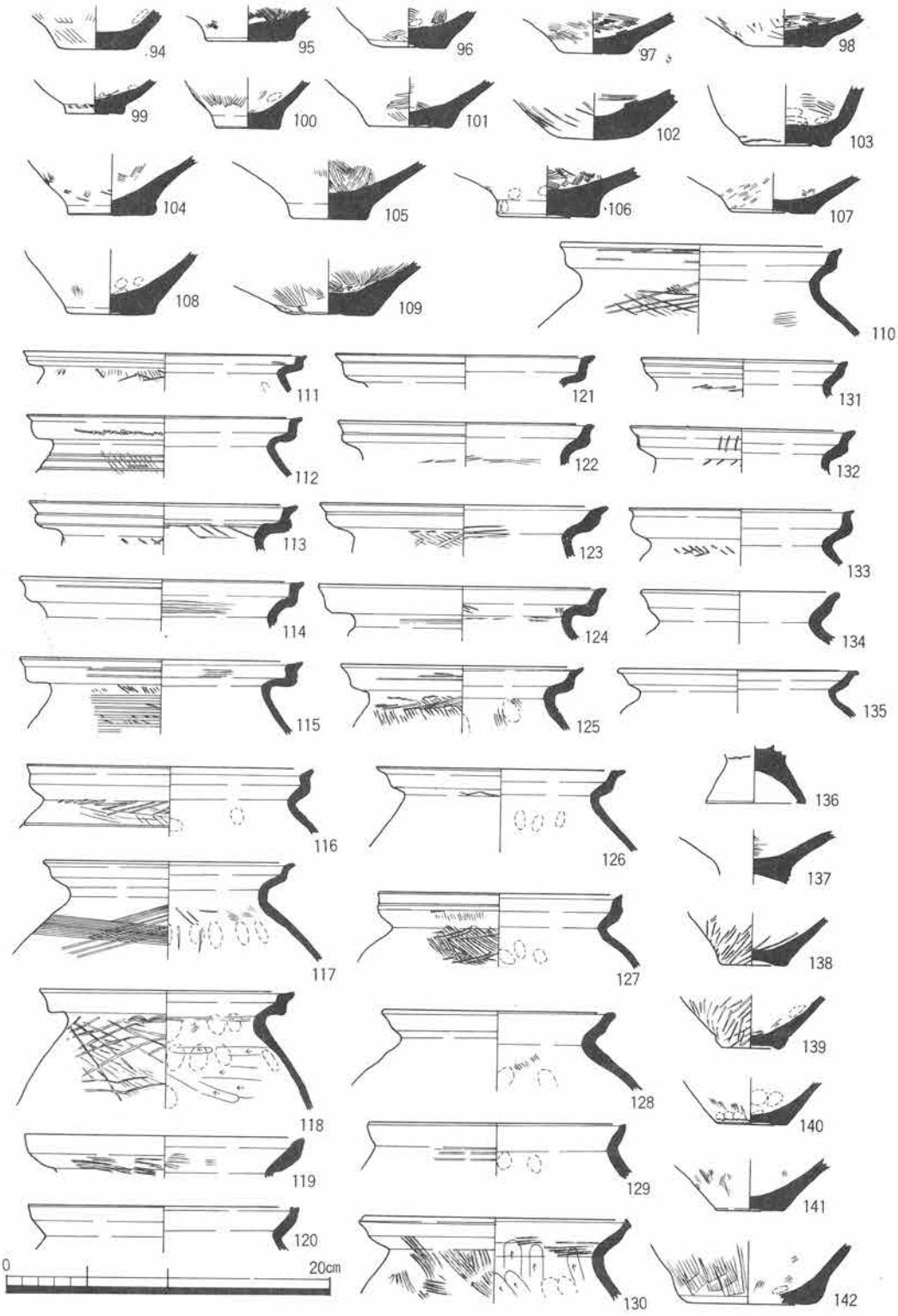
甕（④⑤～⑤①、⑨④～①⑦⑨）

①①～①②⑧・①③⓪～①③⑤・①④④・①④⑤・①⑥③・①⑥⑤・①⑥⑦は受口状口縁甕である。口縁部を外方へ強くつまみ出し、口縁部外面にヘラ描き沈線を施すもの（①①⓪～①①⑤・①②①～①②③・①②⑤・①③①）、多条の櫛描き沈線を施すもの（①④⑤）、ヘラによる刻み目をいれるもの（①③②）、口縁端部をつまみ出さず、ヘラ描き沈線を施すもの（①②⑦）、口縁端部をつまみ出し、口縁部が無文のもの（①①⑥～①①⑧・①②④・①②⑥・①③③・①③⑤・①④④）、口縁部の屈曲が弱く、端部を丸くおさめるもの（①②⑧・①③④）、内傾するもの（①①⑨）、凹むもの（①②⓪）、外傾するもの（①③⓪）がある。調整は口縁部内外面横ナデ、体部内外面ナデかハケで仕上げるが、体部内面に削りを加えるもの（①④④）もある。

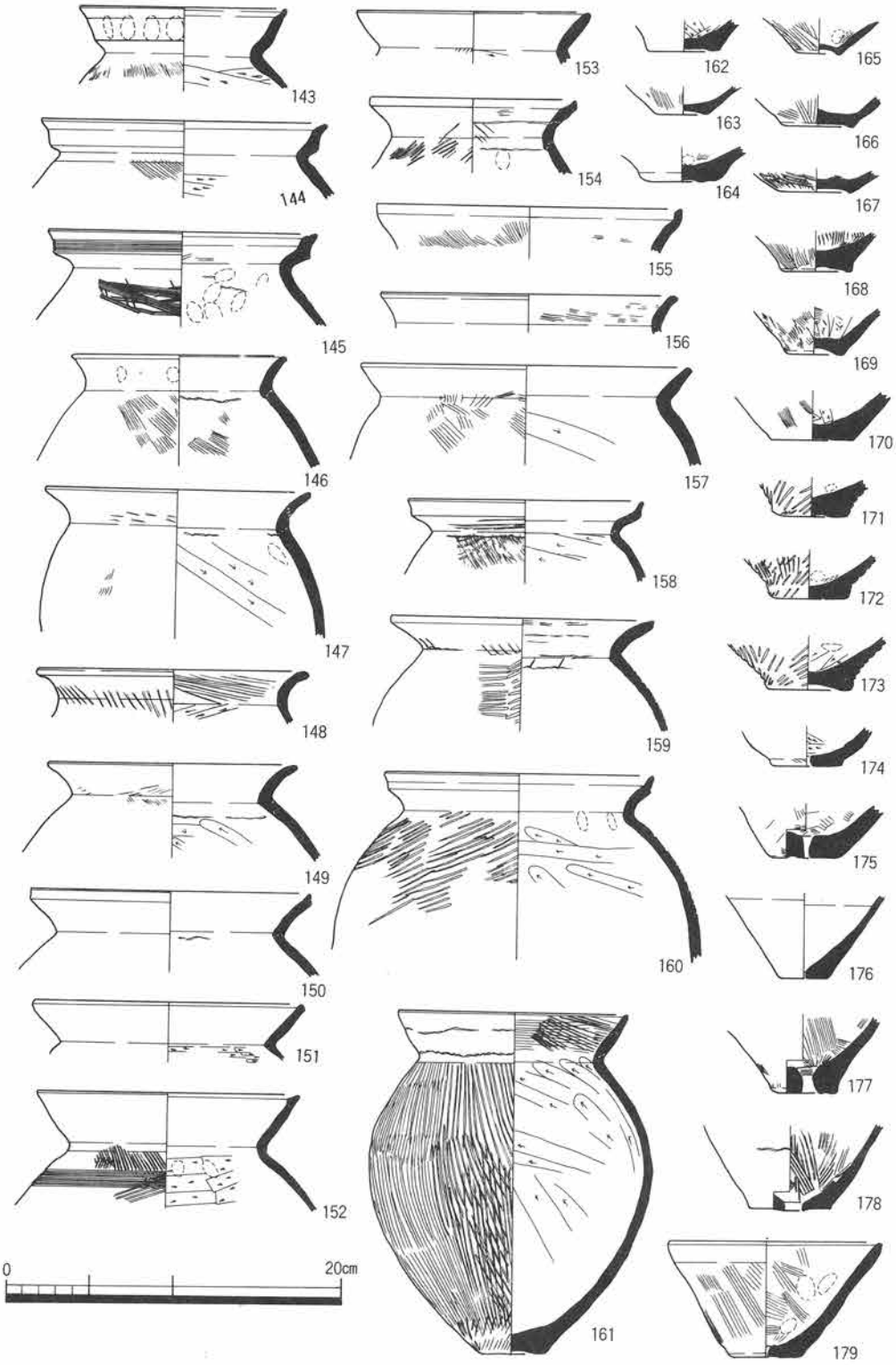
⑥④・⑧⓪・①④⑥～①⑤⓪・①⑤③・①⑤⑥・①⑤⑦・①⑥①は「く」の字状に屈曲する甕の口縁部である。端部をつまみ上げ外方に面をもつもの（⑥④・⑧⓪・①⑤⓪）、端部を丸くおさめるもの（①④⑥～①④⑨・①⑤③・①⑥①）、端部に面をもつもの（①⑤⑥・①⑤⑦）がある。⑧①・①⑤①・①⑤②は口縁端部内面が肥厚する、いわゆる布留式甕である。①⑤②は口縁部がやや内弯気味に立ち上がり、端部の稜はするどい。①③⑧・①③⑨・①⑤④・①⑤⑧～①⑥⓪・①⑦①～①⑦③は体部外面にタタキを施す甕である。端部をつまみ上げるもの（①⑤④）、口縁部が受口状を呈するもの（①⑤⑧・①⑥⓪）、「く」の字に屈曲した口縁部の端部が面をもつもの（①⑤⑨）がある。タタキはいずれも右上がりで比較的粗く、体部内面はナデで仕上げる。①④③は北陸系の有段口縁の甕である。口縁部内外面ナデ、横ナデ、体部外面ハケ目、内面削りを施す。⑦⑦はⅢ様式併行の甕で口縁端部に刻み目、口縁部内面に波状文を施す。

鉢（①⑦④～①⑦⑨）

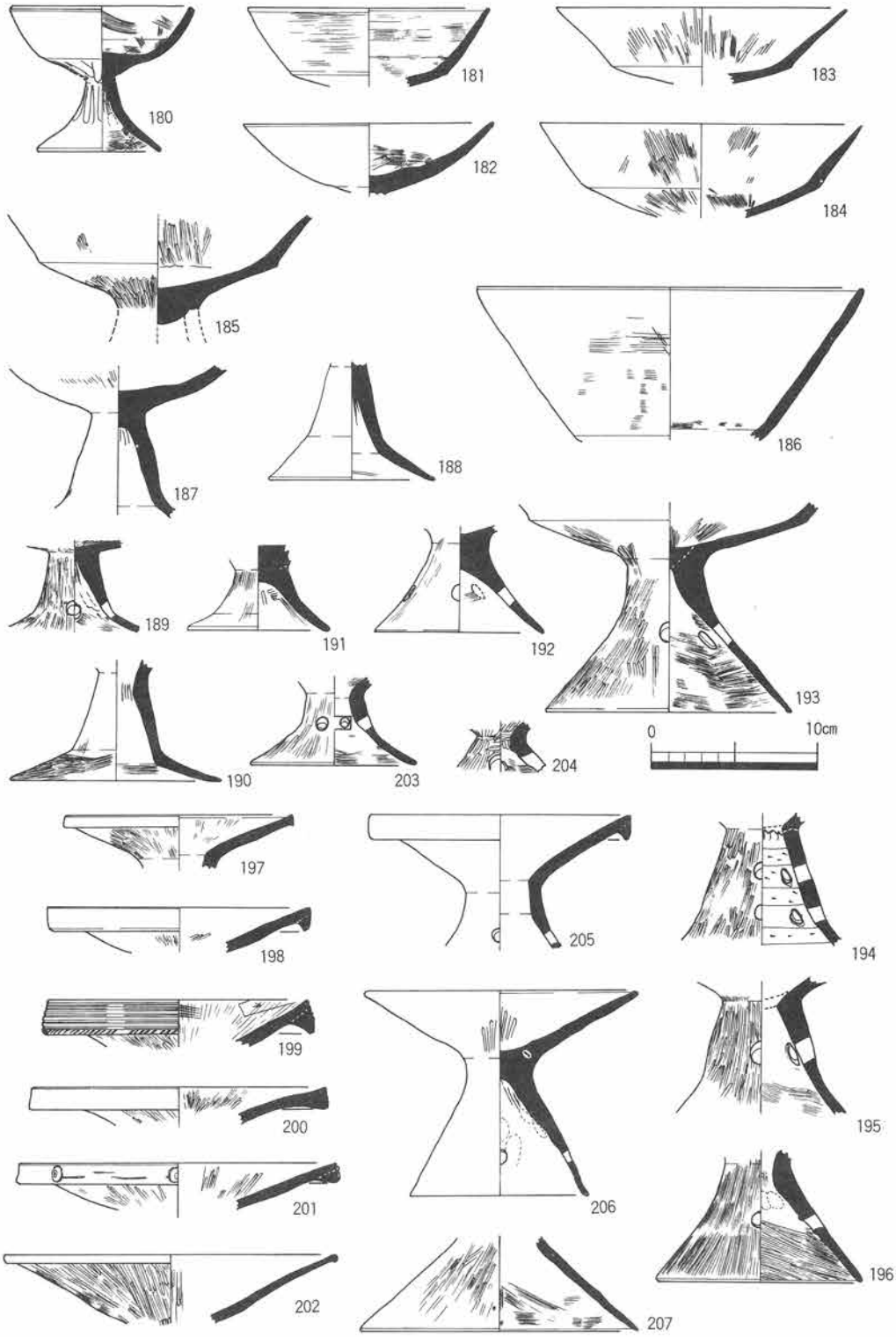
すべて有孔鉢である。突出した平底をもち、体部は内弯気味に立ち上がるもの（①⑦④）、平底の底部から体部は直線的に外傾するもの（①⑦⑤～①⑦⑨）がある。調整は内外面ハケ及びナデで仕上げる。



第56図　旧河道暗灰色粘砂土出土土器



第57図　旧河道暗灰色粘砂土出土土器



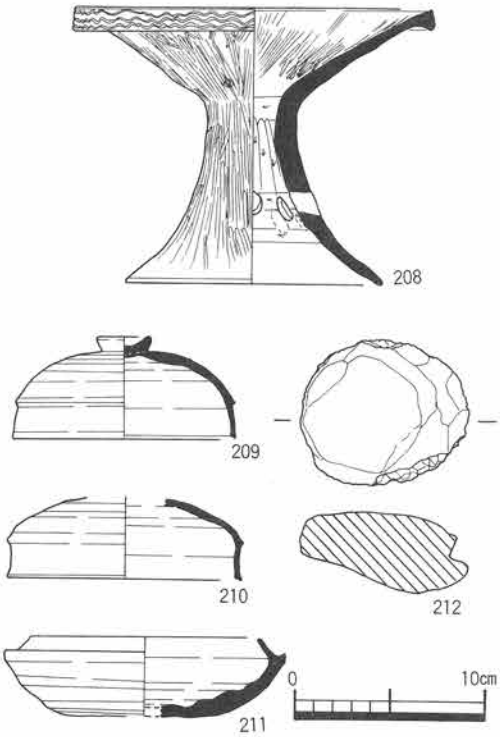
第58図　旧河道暗灰色粘砂土出土土器

高杯（⑱⓪～⑲⑤・⑳⑦）

杯部が椀形のもの（⑱⓪・⑱②）、杯底部とやや内弯気味の口縁部の境に純い稜を有すもの（⑱①）、杯底部が内弯し、口縁部が外反するもの（⑱③～⑱⑤・⑲③）、杯底部と口縁部の境が不明瞭なもの（⑱⑦）、杯部が深いもの（⑱⑥）がある。脚部は「ハ」の字を呈する脚柱部から裾部にかけて開くもの（⑱⑦～⑱⑨・⑲④・⑲⑤）円錘形のもの（⑲②）、裾部が直線的に開くもの（⑲③・⑳⑦）がある。

器台（⑲⑦～⑳⑥・⑳⑧）

⑲⑦・⑳②・⑳⑤・⑳⑧は受部が直線的あるいは内弯気味に外上方へのび、端部が拡張して面をもつ、端部が肥厚して狭い面をもつもの（⑲⑦・⑳②）、擬以口縁に粘土を貼り付け、口縁部を垂下させ（⑲⑧～⑳①・⑳⑤・⑳⑧）、端面に平行文・刻み目（⑲⑨）、平行文・円形浮文（⑳①）波状文（⑳⑧）を施すものがある。内外面ヘラ磨きで仕上げる。⑳④は小型器台で脚部に４つの円孔を穿つ。内外面丁寧なヘラ磨きを施す。⑳⑥は受部が直線的に外傾し、脚部は直線的に下方に開く。受部内外面にヘラ磨きが認められる。透しは３孔を穿つ。



第59図　旧河道暗灰色粘砂土出土土器

須恵器（⑳⑨～㉑①）

蓋杯（⑳⑨・㉑⓪）と杯身（㉑①）がある。⑳⑨・㉑⓪は天井部が丸味を帯び、口縁端部の内傾する凹面が明瞭な段をなす。天井部と口縁部を界する稜は鋭く、⑳⑨は天井部に扁平なつまみを付す。調整は天井部過半が回転ヘラ削り、その他回転横ナデを施す。㉑①は立ち上がりが短く内傾し、端部は丸くおさまる。調整は底部外面過半回転ヘラ削り、その他回転横ナデを施す。中村編年に比定すると⑳⑨・㉑⓪がⅠ型式５段階、㉑①がⅡ型式４段階に相当する。

砥石（㉑②）

こぶし大の花崗岩で使用面は１面である。

木製品（第60図～第80図）

容器（第60図㉑③）

四脚付槽である。平面形は長方形を呈し、底部からの立ち上がりは明瞭で外傾する。底部には削り出しによって方柱状の脚台を付す。腐食が著しく加工痕は不明瞭であるが内面にわずかに手斧状工具による削りが認められる。現存長42cm、幅22cm、器高9.4cm、脚高2cmを測る。

労働具（第61図～第64図）

ナスビ形着柄鋤（第61図㉑④～㉑⑦、第62図㉑⑧～㉒①、第63図㉒②・㉒③）

㉑④～㉑⑥・㉑⑧は着柄部分の基部で上半が細く下半にむかってゆるやかに外反し、傘状を呈する。刃部との境にナスビのへたにあたる突起を有し、直下には抉り込みが確認される。③・⑥の基部最上端には有頭が削り出されている。着柄面は平端に裏面は中央部を厚く、周辺部を薄く削って仕上げる。㉑⑦は基部先端を欠損するがほぼ完形品である。基部と刃部の境にあたる側縁には抉り込みがいれられ、二股に分岐する刃部はゆるやかに外弯し、先端に刃をつくり出す。着柄面は平担に裏面は中央部を厚く、周辺部を薄く削る。現存長51cm、基部残存長9.3cm、基部最大幅8.6cm、刃部長44cm、刃部中間幅4.8cmを測る。㉑⑨～㉒③は二股鋤の刃部である。㉑⑨・㉒⓪・㉒②・㉒③は刃部中央部を厚く削るが全体に平端な板状に仕上げる。㉒①は細く厚めに仕上げ、断面は楕円形を呈する。

ヨコヅチ（第64図㉒④）

柄の先端のみの残存である。丸太材の樹皮を剝いた程度で、そのまま芯を利用する。残存状態が悪く整形痕は観察されなかった。

木錘（第64図㉒⑤）

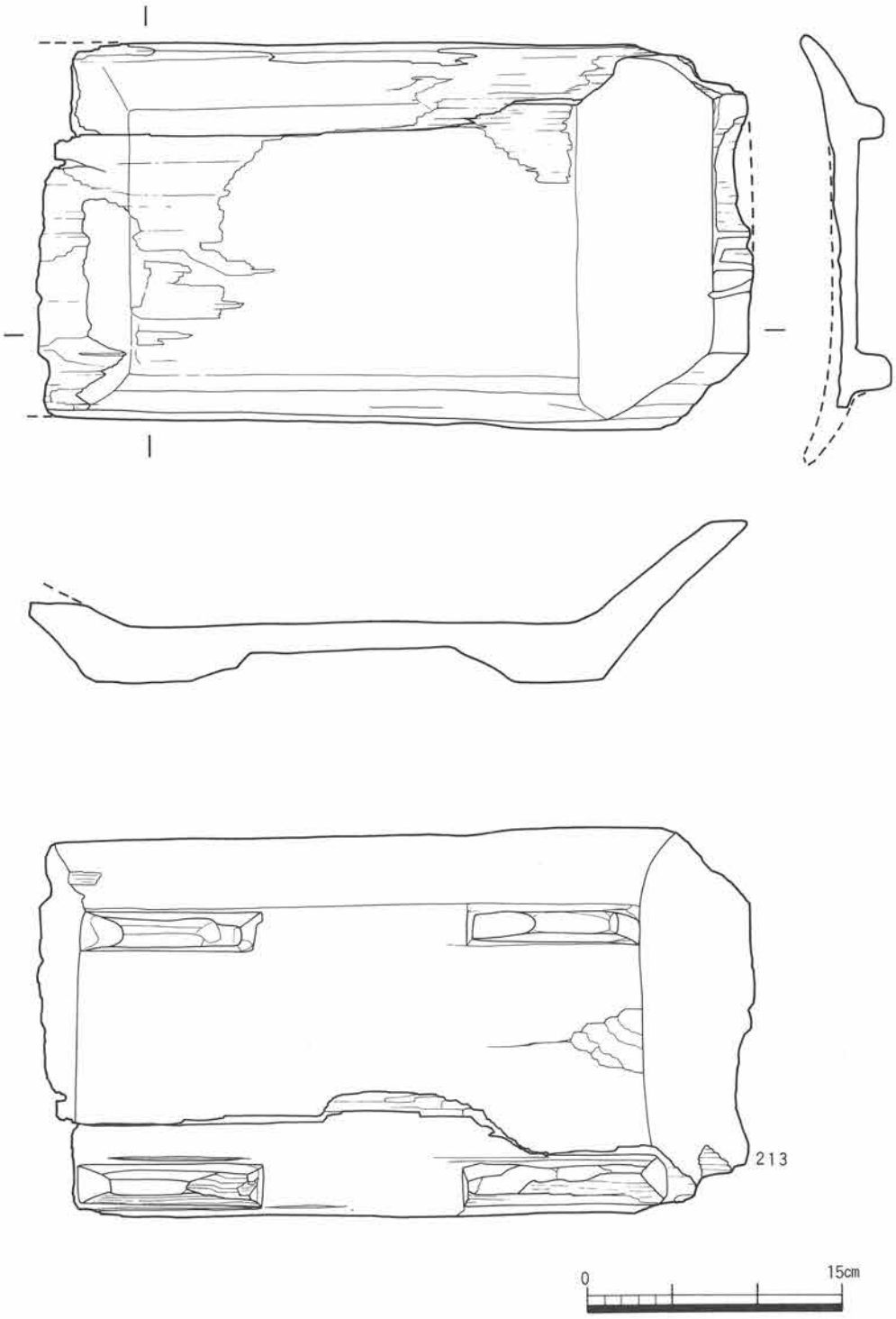
丸太材の周辺の一部をカットし、その中央に一辺26cmの方形孔を貫通させたものである両側面上に面取りの加工痕が明瞭にあるが切断面を調整したものであると思われる。

弓（第64図㉒⑥・㉒⑦）

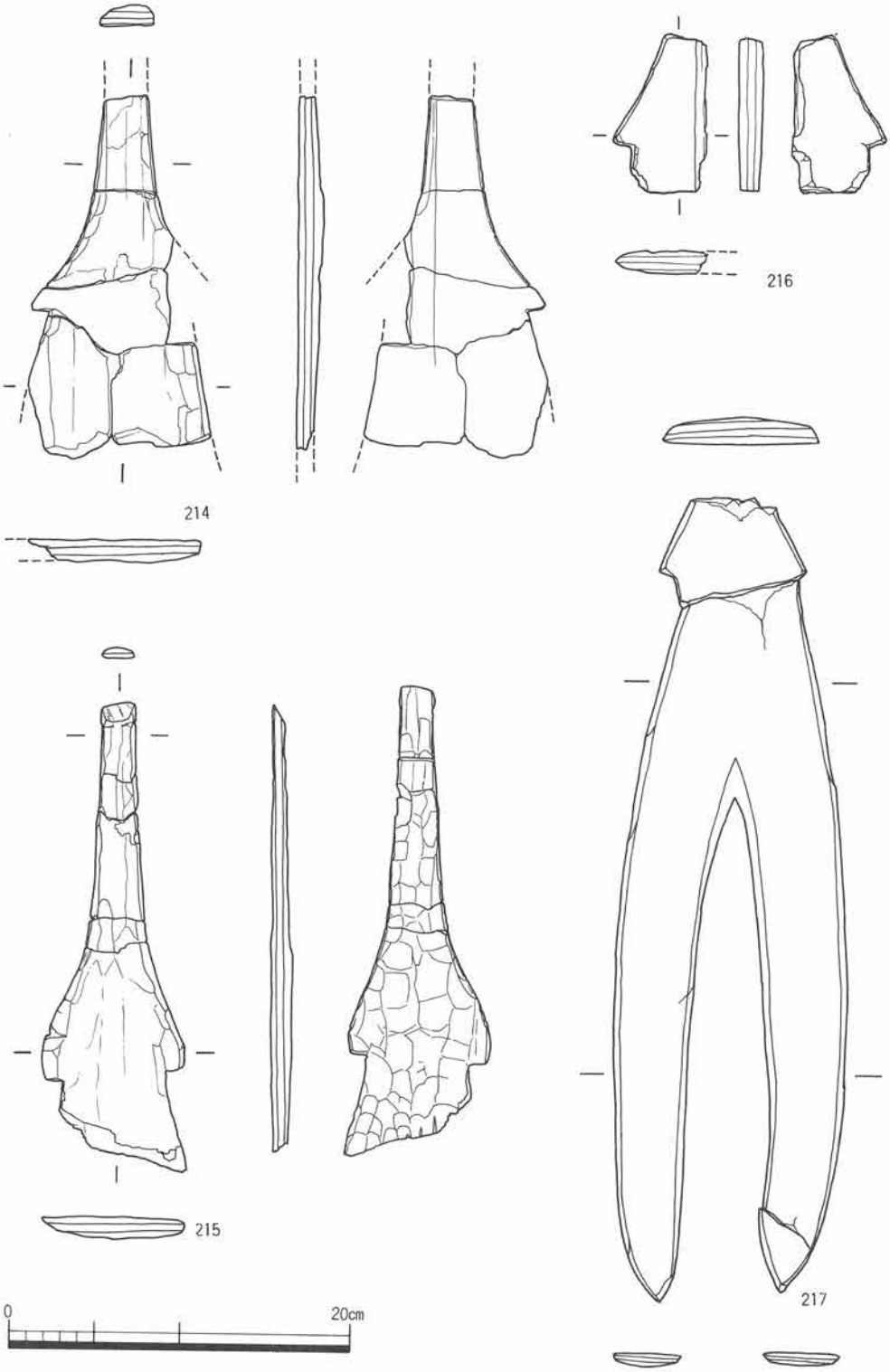
丸木の弓であるがいずれも途中から欠損している。小枝をはらい樹皮を剝いだ程度で面とりは行なわない。㉒⑥は先端を抉り込み、又㉒⑦は先端付近の両側面を削り、弭を作り出している。㉒⑥は現存長33cm、直径1.8cm、㉒⑦は現存長57cm、直径2.2cmを測る。

櫂（第64図㉒⑧）

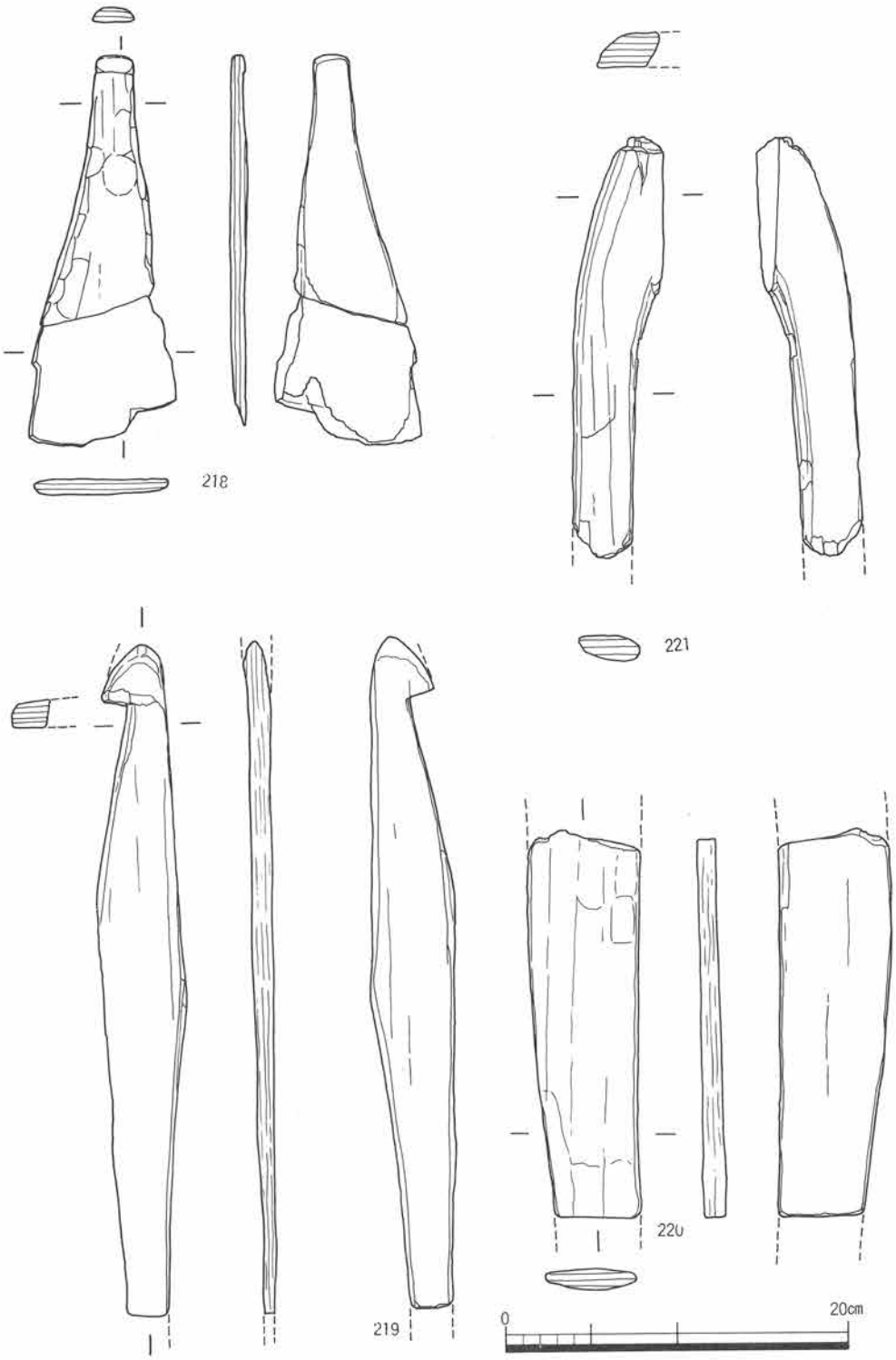
柾目板を用いる。握り部と水掻部の先端を欠損するが現状で長さ43cm、水掻部幅6cmを測り、水掻部は狭い。水掻部は両面とも中央を厚く削られており、断面がレンズ状を呈す。



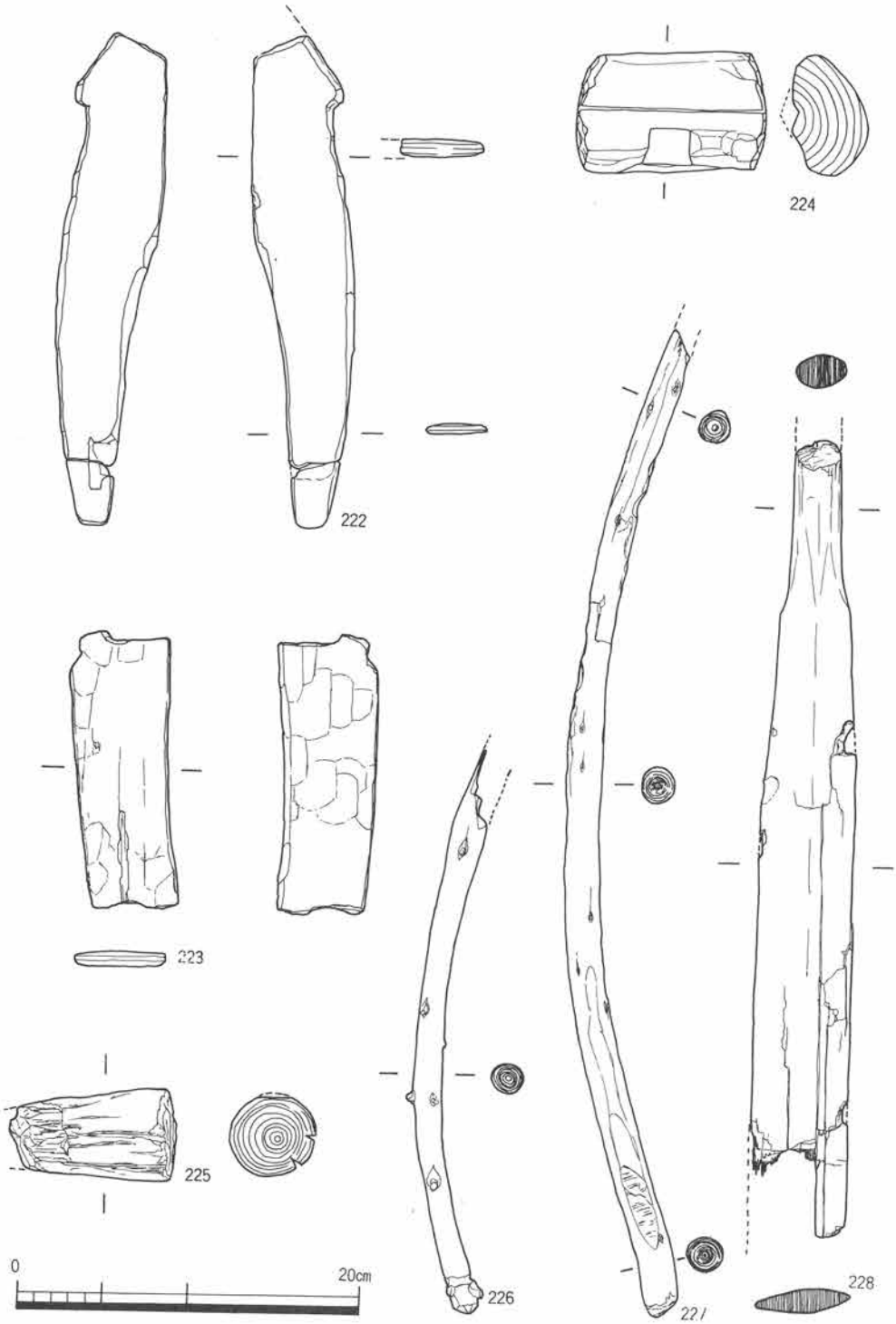
第60図　旧河道暗灰色粘砂土木製品



第61図　旧河道暗灰色粘砂土木製品



第62図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



第63図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品

紡織具（第64図）

紡錘車（㉙）

木製では本遺跡唯一のものである。直径６cm、厚み１cmを測る小円盤で断面は台形を呈する。中央に軸となる紡茎をさし込む直径0.8cmの孔を穿つが使用痕は不明である。

機織具部品（㉚～㊱）

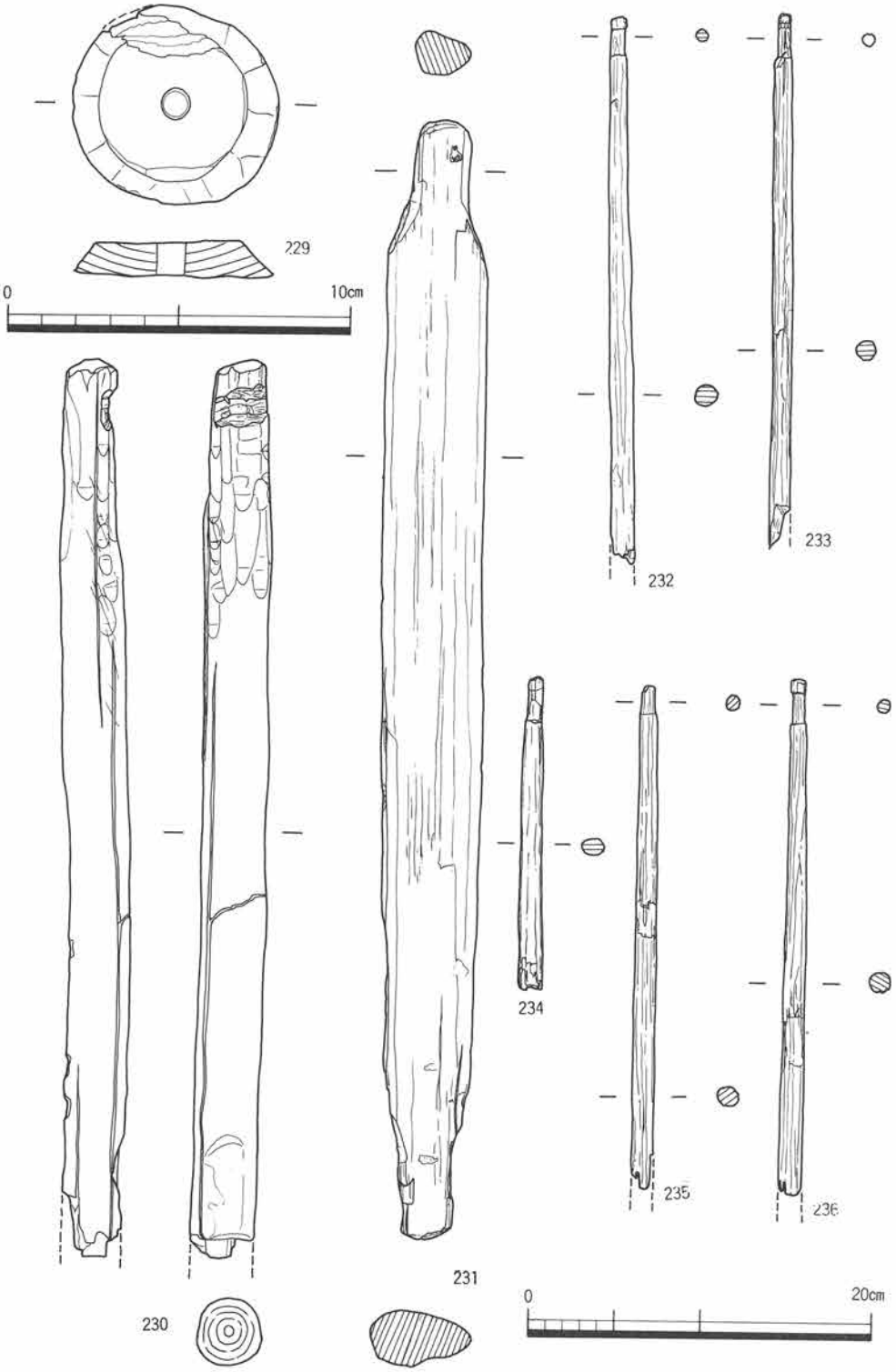
他遺跡で紡織具として報告されているものに近以するものを一応機織具部品とする。㉚は棒状の先端及び末端を面どりして整え、一方から抉りをいれて有頭部をつくり出す。途中から欠損するが現状で長さ52cm、厚さ２cmを測る。㉛は両端を細く削り、先端を面どりする。長さ64.5cm、厚さ中央部で3.2cm、突起部で2.6cmを測る。㉜～㊱は細長い棒状を呈し、先端部を削り込み突起をつくり出す。いずれもその形状から経糸を巻いておく経巻具か、織り上がった布を巻く布巻具と推定されるが、経糸を巻いた痕跡を示す擦痕は観察されなかった。

板材（第65図・66図）

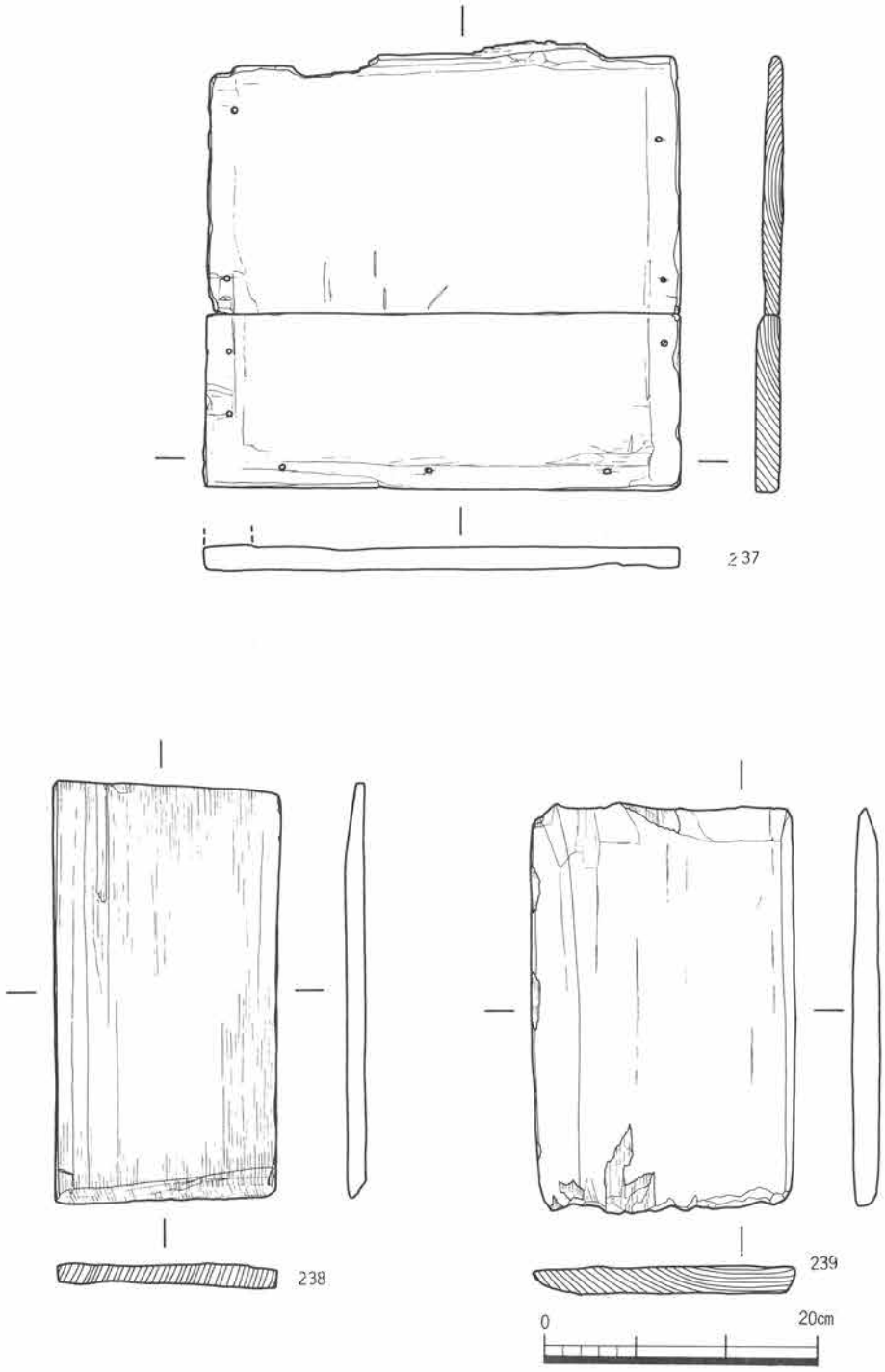
㊲は一辺26cmの方形の板で厚さ1.4cmを測る。約１cm幅を低く削り出した四辺に３～４の釘穴が観察される。箱状容器の蓋あるいは底板と考えられる。㊳～㊸は用途、機能を明確にし得ないが、㊶以外は比較的丁寧に仕上げられている。㊶はいわゆる有孔板と呼称される類に層するもので、不規則に５つを穿孔する。㊷は厚さ3.8cmを測るぶ厚い板で、下端に手斧状工具による切断痕が明瞭に残る。表面は火熱を受けたためか炭化している。礎板の用途に供されたものであろうか。

建築材（第67図・第68図㊻・㊼）

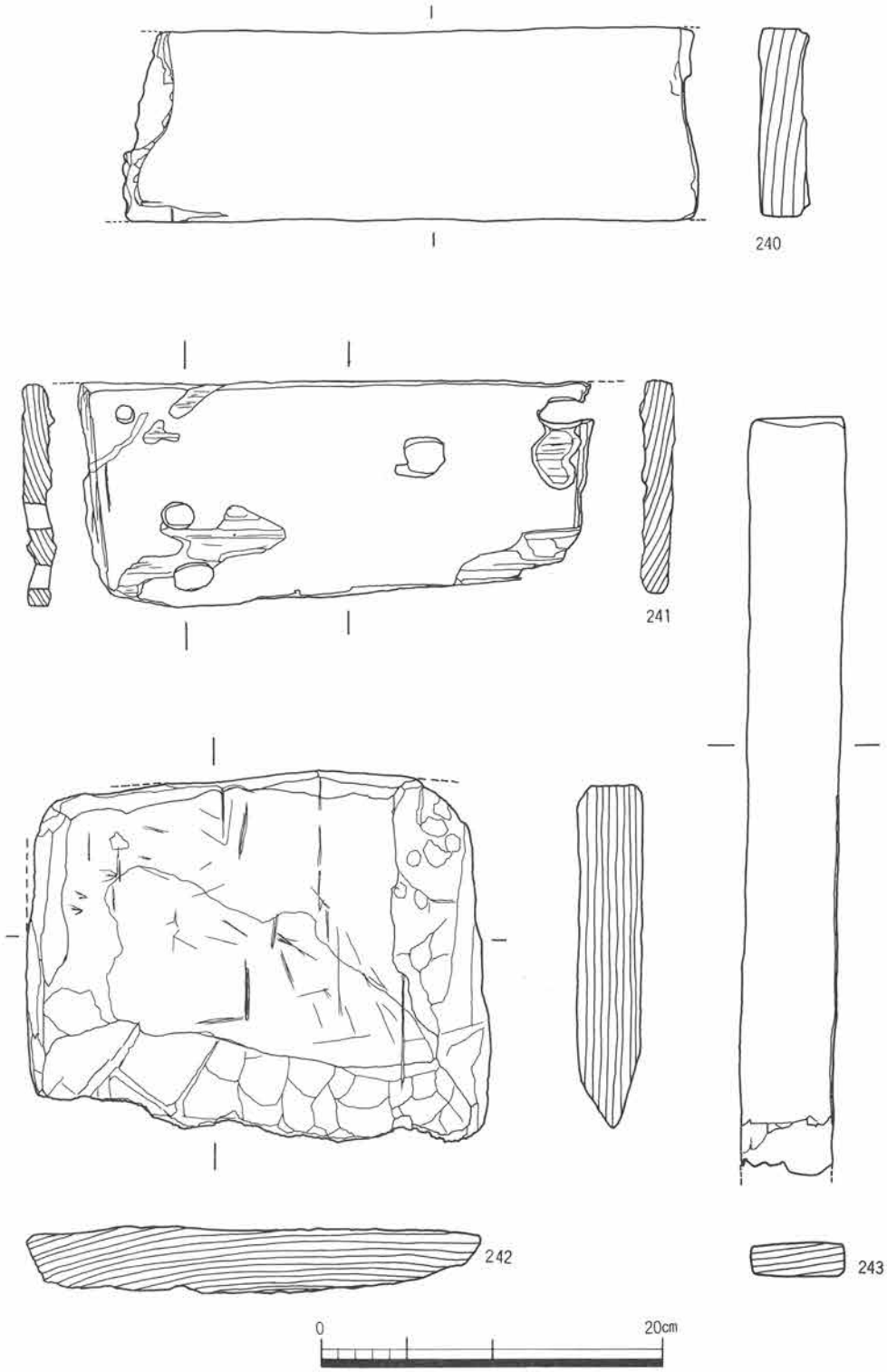
㊹は一端を欠損するが現存長136cmを測る大型品である。側縁の一方を高く削り出し、断面はＬ字状を呈する。上端付近に幅3.2cmの溝状の抉りをいれ、ほぼ中央に6.5cm×3.2cmの長方形状の孔を穿つ。表裏両面とも丁寧に調整されており、手斧状工具による削痕が明瞭に観察できた。㊺・㊻は梯子で同一個体の可能性がある。㊺は上下端及び右側半分を欠損するなど残存状態は悪い。足かけ部は４段が残り、上面は板とほぼ直角に下面は斜めに削る。現存長106cm、現存幅11.2cm、厚さ2.4cmを測る。㊼は断面三角形を呈す板目材である。上端を欠損するが現存長128cm、幅12.8cm、厚さ５cmを測る。割載面２面を含め３面とも丁寧に削られ仕上げられている。



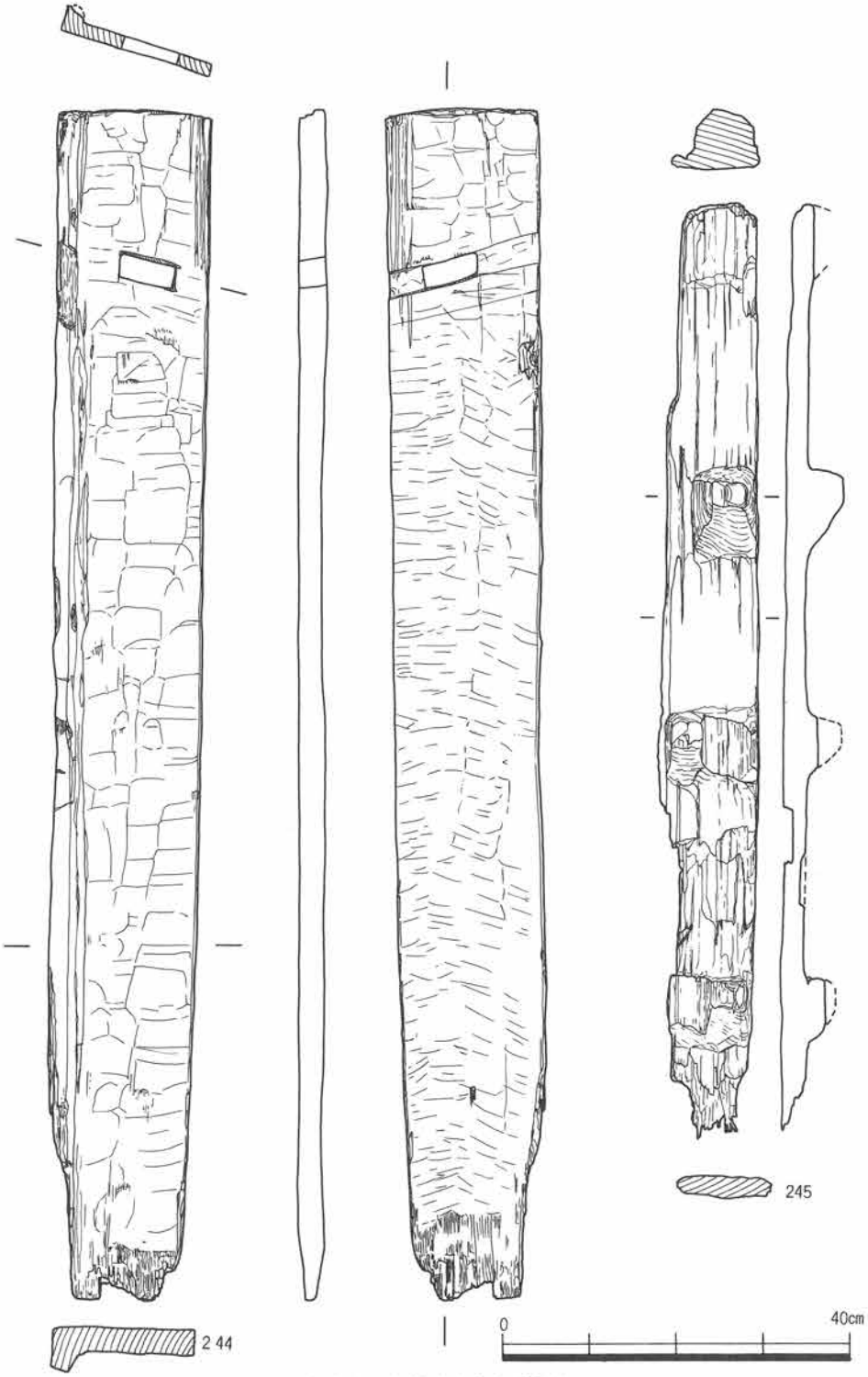
第64図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



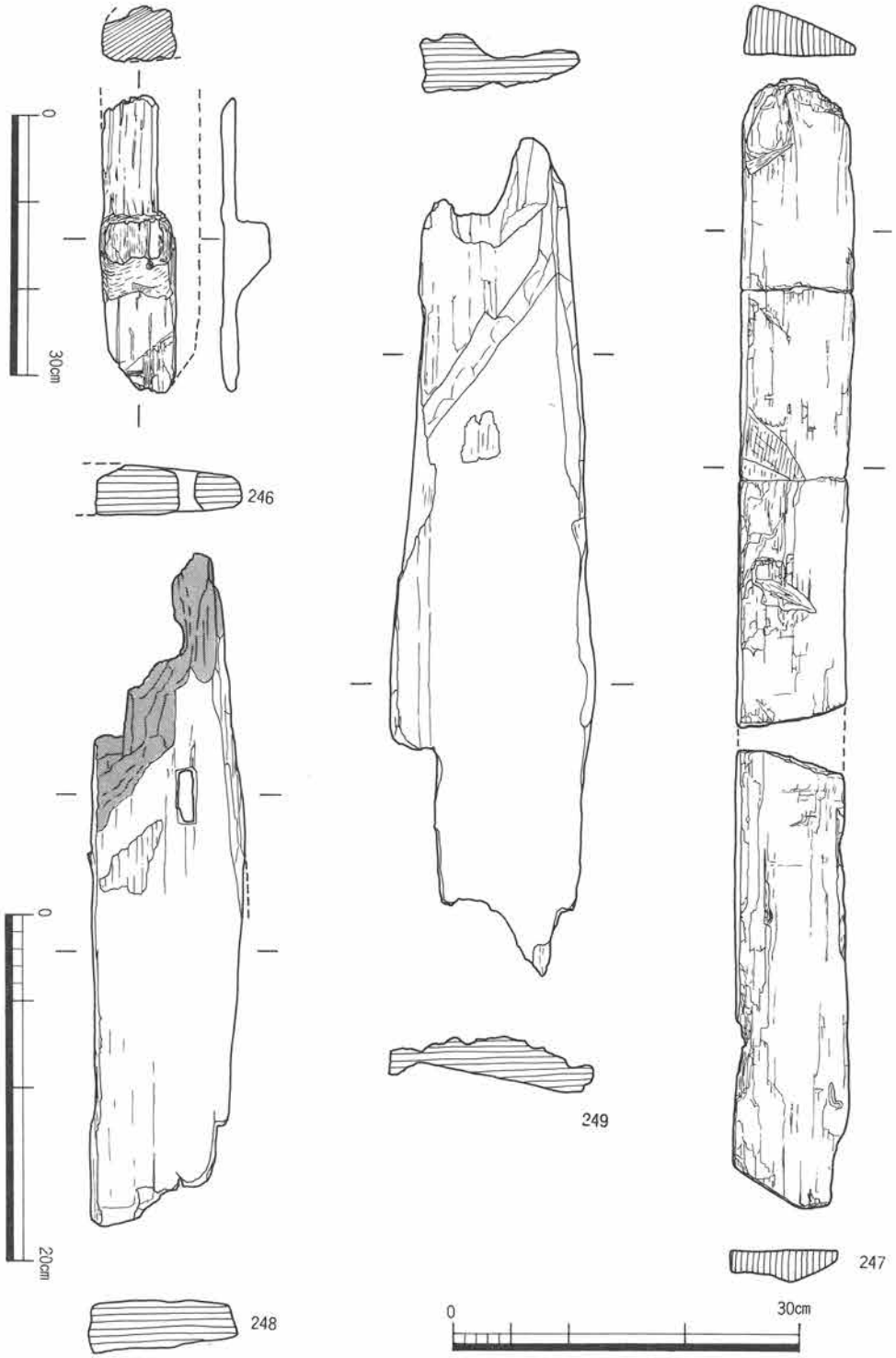
第65図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



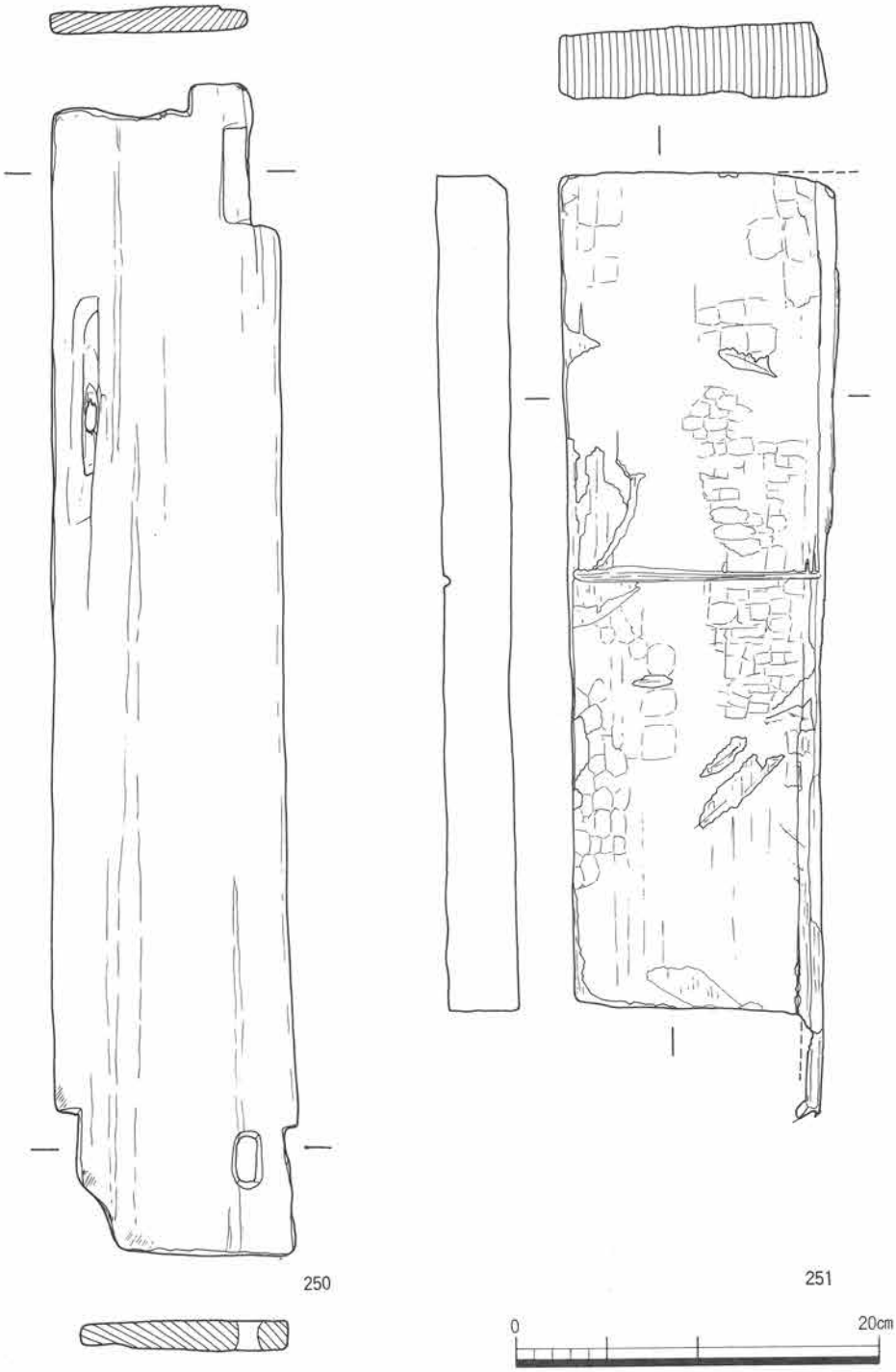
第66図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



第67図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



第68図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



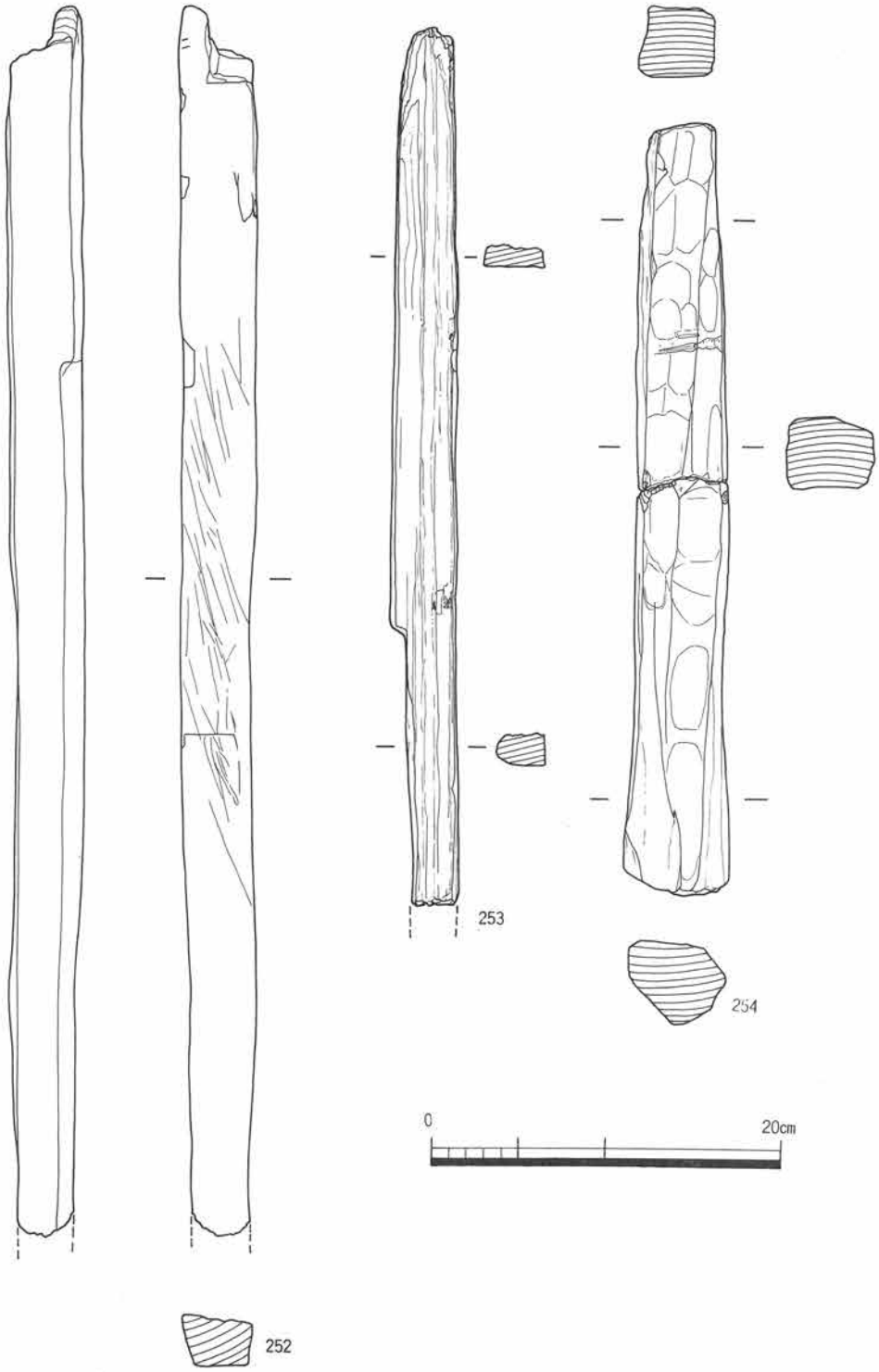
第69図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品

部材（第68図㊽・㊾～第73図㊻・㊼）

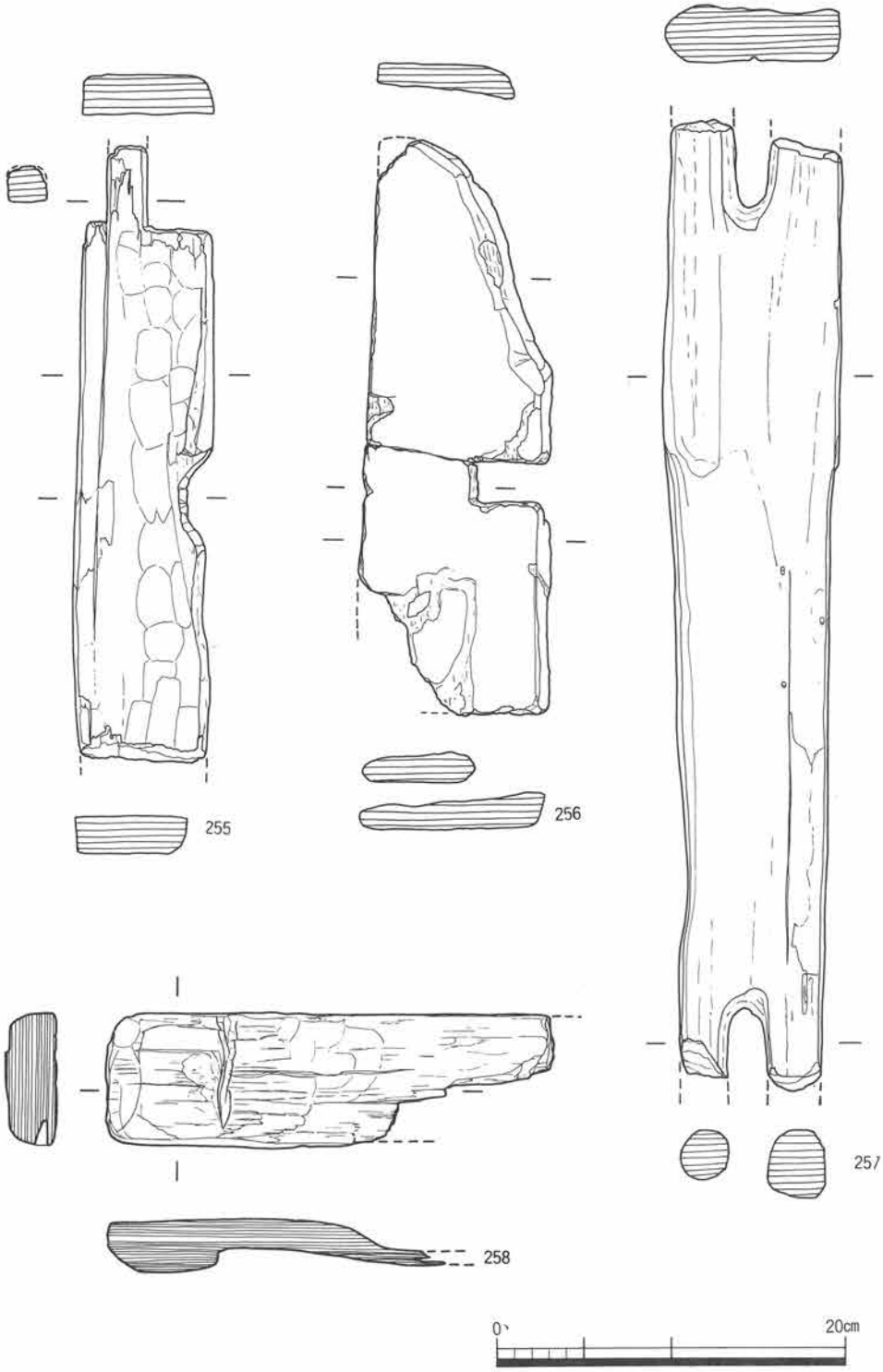
いずれも柄穴や釘穴、切り込み等を有し、他のものと組合わせて使用する部材であると考えられる。㊽は表裏とも丁寧に仕上げられた板材で、上端を焼失、下端を折損する。65cm×2.4cmの長方形状の柄穴を有する。㊾は一面のみ丁寧に削るが裏面、両側面とも割載面をそのまま残す。㊿は両木口に明瞭な矩形の切り込みを有す板材で、下端と左側辺付近に柄穴を穿つ。(51)は表裏及び両側面とも丁寧に仕上げられた柾目板で、中央部に幅0.3cm、深さ0.2cmの溝を掘る。表裏面に手斧状工具による加工痕が明瞭に残る。(52)は断面四角形を呈す角材で、上端の片方から切り込んで柄をつくり出す。側面の一方に加工時の直線的な線刻がみられる。(53)は一方の側面の中央やや下方を抉り込んだ棒状品である。(54)は四面に加工痕が明瞭で下方に細く削られている。(55)は上端を両方から切り込み幅2.4cmの柄をつくり出し、右側面のほぼ中央を抉り込む。加工時の削痕は表裏に明瞭である。(56)は平端に仕上げられた板材の片方の側面中央部に矩形の切り込みをいれ、その上部を斜めにカットする。(57)は両木口の中央にそれぞれ抉りをいれる。(58)・(59)は板目材を木取りしたものをそれぞれ表裏面、及び表面をえぐり込む。(60)は左側面から右側面にかけて薄く削り、右側面中央部を抉り込む、(61)は一端を片方から切り込みをいれて柄をつくり出す。(62)は丸太の辺材部を木取りした角材で、斜めにカットした側面の一方に釘穴が5ヶ所認められ、うち中央穴は貫通している。(63)は一端の中央に抉りをいれ柄をつくり出す板材で、貫通する釘穴が1孔認められる。(64)は一端を両方から切り込み柄をつくり出す。(65)は一端を片口から削り込み柄をつくり出し、右側面に抉りをいれる。(66)は丸太材の辺材部を木取りした角材で、中央部付近に4cm×3cmの長方形状の柄穴を有す。両端を折損するが現存長83cm、幅7cm、厚さ4cmを測る。(67)は下端を斜めにカットし、左側面上端部を穿り込む。上端部付近には4cm×3cmの柄穴を穿つ。表裏とも平端に仕上げられ、手斧状工具による加工痕が明瞭に残る。現存長73.5cm、幅14.5cm、厚さ4cmを測る。

杭（第73図(68)～第77図）

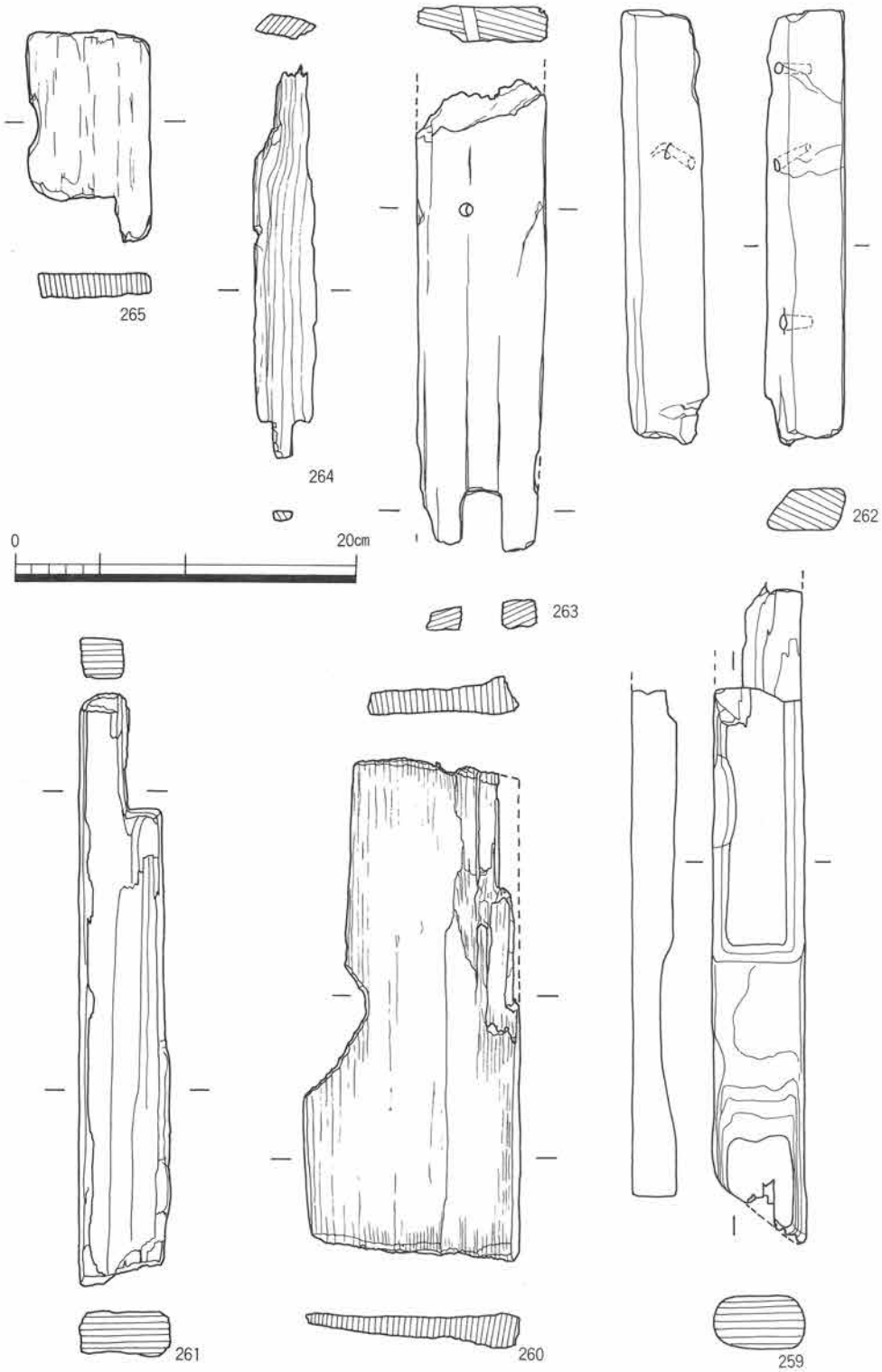
(68)は丸太の辺材部を木取りしたもので、上端を抉り込み突起状の有頭部をつくり出す。表面は中央部から上端にかけて削り込み平端面を有す。先端は4方向から削り尖らせる。(69)～(71)・(74)・(82)～(85)は丸太材の先端を多方向から削り尖らせる。(71)は表面全体に明瞭な削痕が残るが、その他はすべて小枝を打ち払い、樹皮を剝いだ程度である。(72)はさほど鋭くないが両端を尖らせる。(73)・(76)は丸太材の辺材部を木取りしたものである。(75)は先端を4方向から鋭く削り、断面は方形を呈する。(75)・(77)・(79)は矢板状を呈し、先端を鋭く削る。



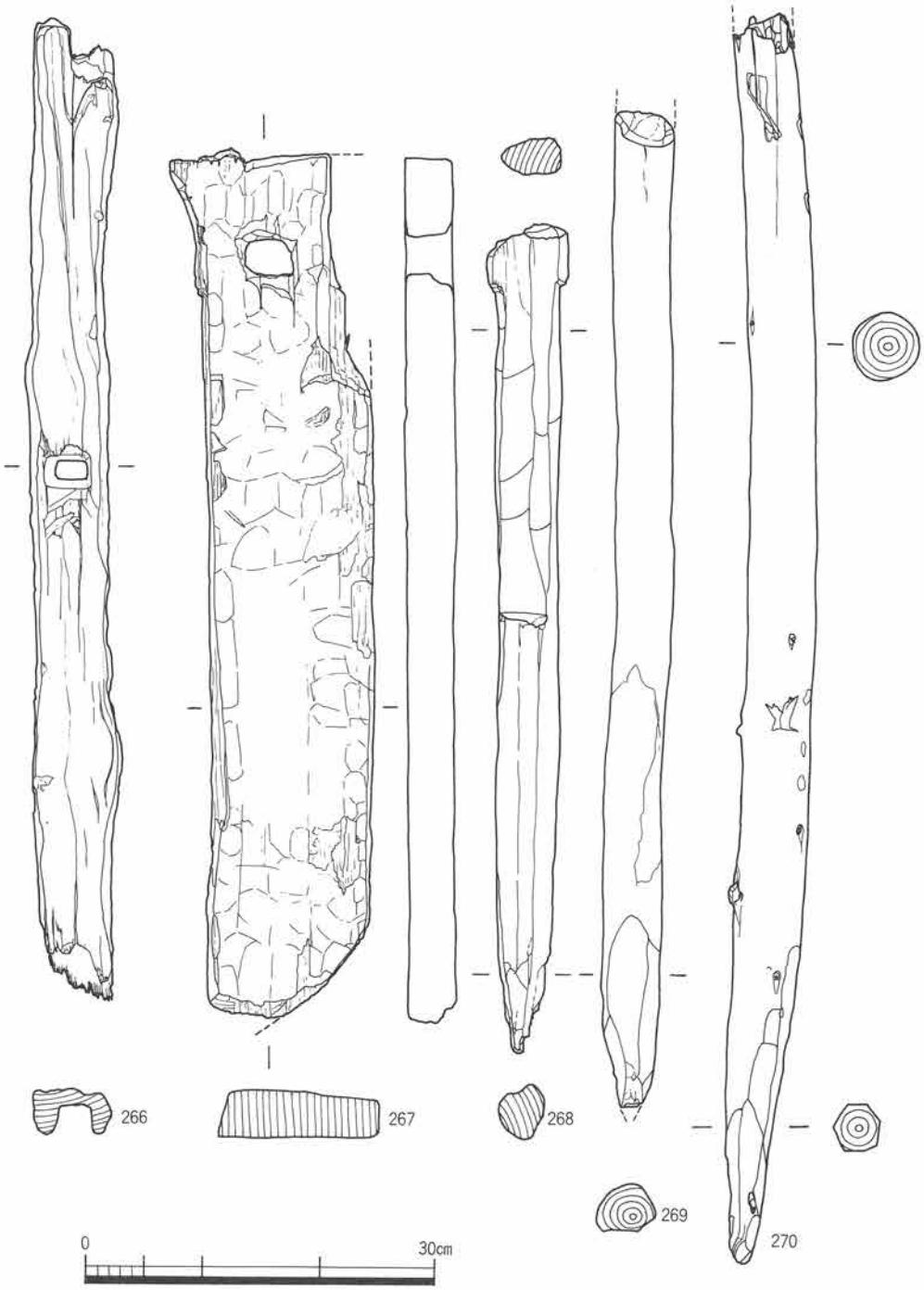
第70回　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



第71図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



第72図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



第73図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品

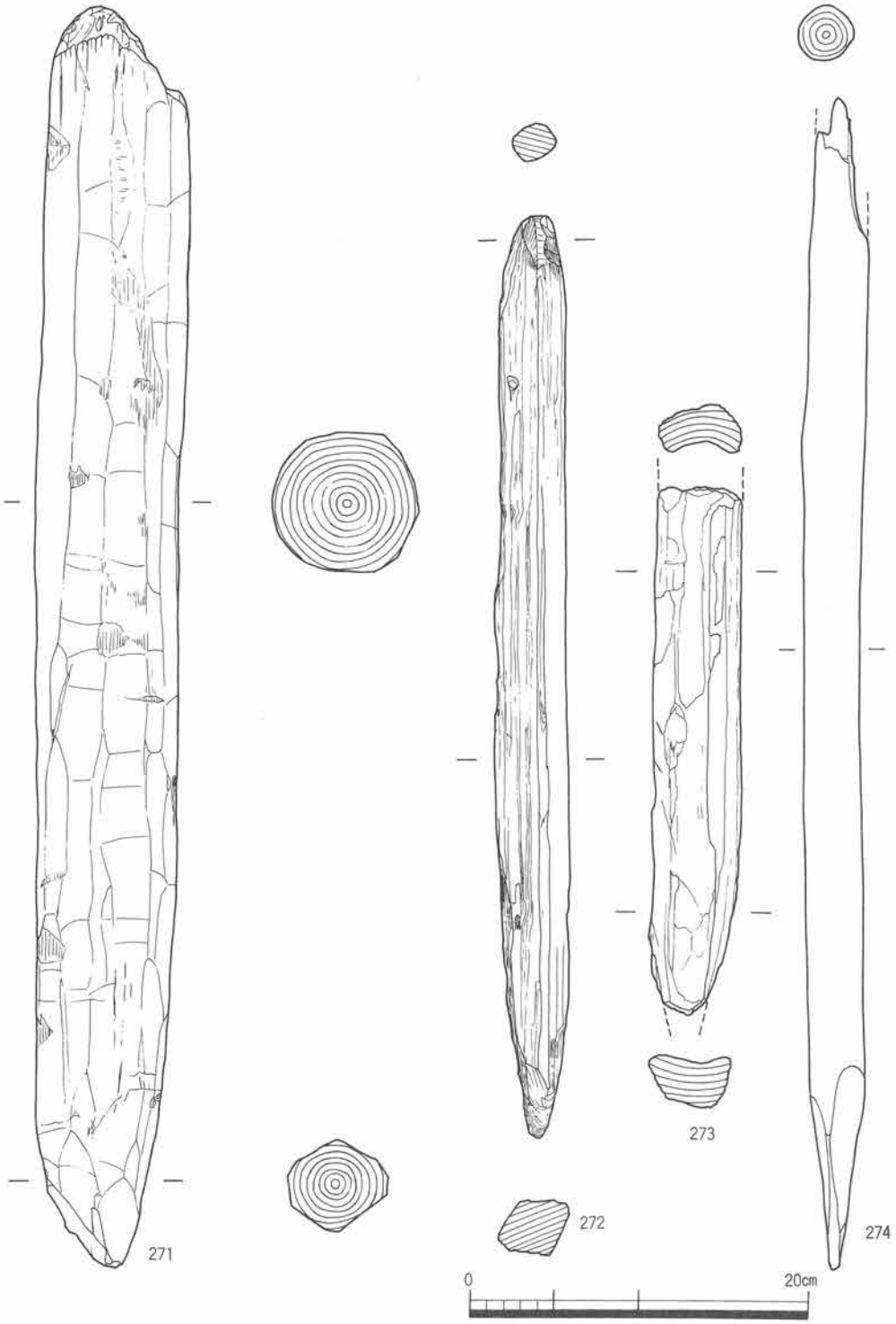
㉕は柾目に木取りし、先端を６方向から削る。一辺５cmの方形の柄穴を有し、部材の転用と考えられる。㉗は板目に木取し、先端は側面２方向から削る。上下に長径13cmの楕円形状の穴をくり抜き。上端は内弯気味に削る。㉙は板目に木取りし、先端は４方向から削る表裏とも加工時の削痕が明瞭に観察できる。㉘・㉛・㉚は柾目に木取りした板材の先端を４～５方向から鋭く削る。㉘は表面全体が被熱により炭化し、割れが生じている。

祭祀具（第78図㊻～㊽）

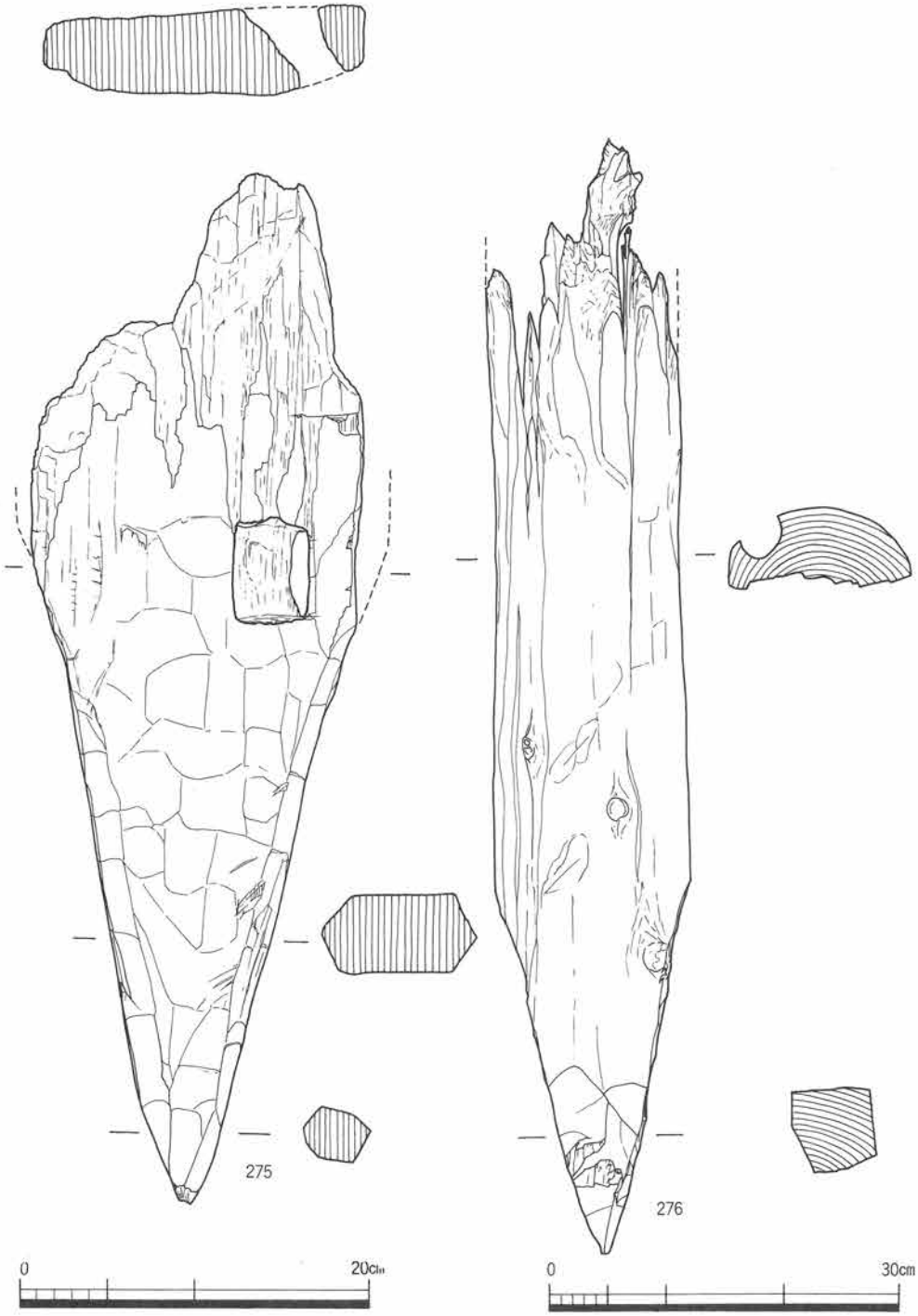
㊻は刀形木製品の柄で、両側面を削み突起をつくり出す。㊼は剣形木製品の柄と考えられる。両面に鎬を有し、断面は菱形を呈す。㊽は刀形木製品の刃部である。切先は鋭く、刃身は直線的である。

用途不明品（第78図㊾～第80㊿）

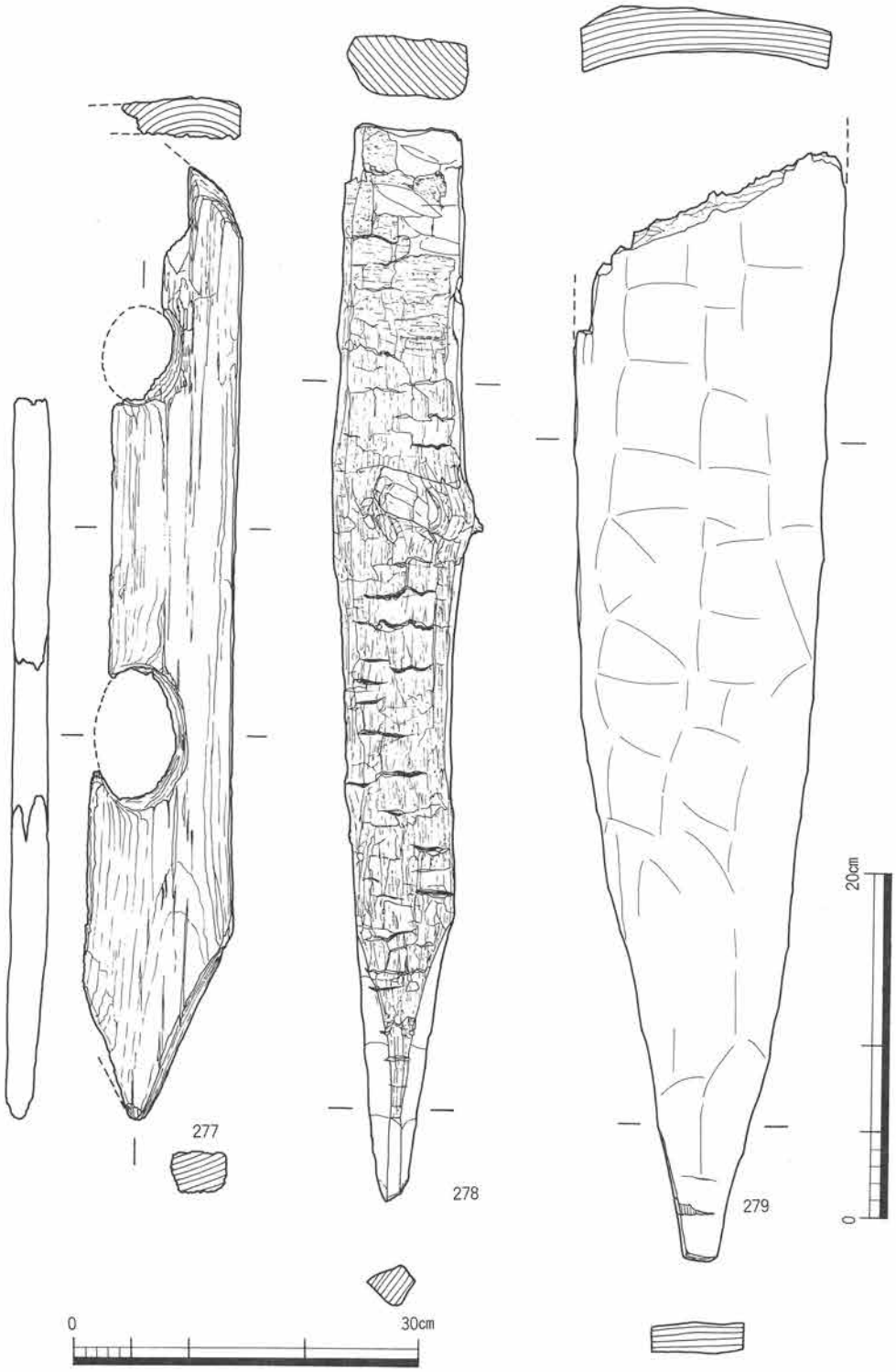
㊾は平滑に仕上げた板の一端り抉りをいれ細くし、その部分を下部に至るほど薄く削る。ヘラ状木製品、小刀状木製品として報告されているものに類以品を見い出すことができる㊿～(51)は先端を鋭利に尖らせた棒状品である。㊿は完形品であるが(51)・(52)は途中から欠損する。刺突様に供されたものか。(53)～(55)はいわゆる有頭棒である。(53)は柾目に木取りした板材の上端を有頭状に削り出し、下端は斜めにカットする。裏面は平端で断面カマボコ型を呈する。(54)は丸木材の先端に抉りを入れ有頭部をつくり出す。端部は７方向から削り尖らせる。(55)は先端を抉り込み、突起状の有頭部をつくり出す。(56)は丸太材の辺材部を木取りした角材の一面を大きく抉り込む。(57)・(58)は側面先端部に切り込みや抉りをいれる板である。(57)は側辺の片方を欠くが同様の切り込みがあったと考えられる。表裏とも平滑に仕上げるが削り痕が明瞭に残る。(58)は両側面の両先端に切り込みと抉りをいれる。表裏面及び両端は丁寧に削って仕上げ、削り痕は明瞭に残る。(59)は板材を円孤状に削って仕上げ、長径1.3cmの円形孔を穿つ。(60)は薄く平滑に仕上げた板材の周縁に抉りをいれる。(61)は細い丸太材の上端を削り、有頭部をつくり出し、下端は鋭利な刃物でカットする。(62)は板目に木取りした板材の一端を丸く削る。表面は平滑に仕上げるが裏面は末調整である。(63)～(65)は棒状品である(64)は先端に丁寧に削りが施されている。形状から何かの柄とも考えられる。(66)は全体に面取りが施され、両端を斜めに大きくカットする。中央部に焦げがみられる。形状から紡織具の可能性がある。(67)・(68)は薄い板材の縁を削るもので、現状で(67)は１孔、(68)は５孔の穿孔がある。(67)は形代（鳥形？）、(68)は蓋板の可能性がある。(69)は断片であるため器形は不明であるが刀の柄頭に類以していると思われる。表面に焦げが部分的にみら



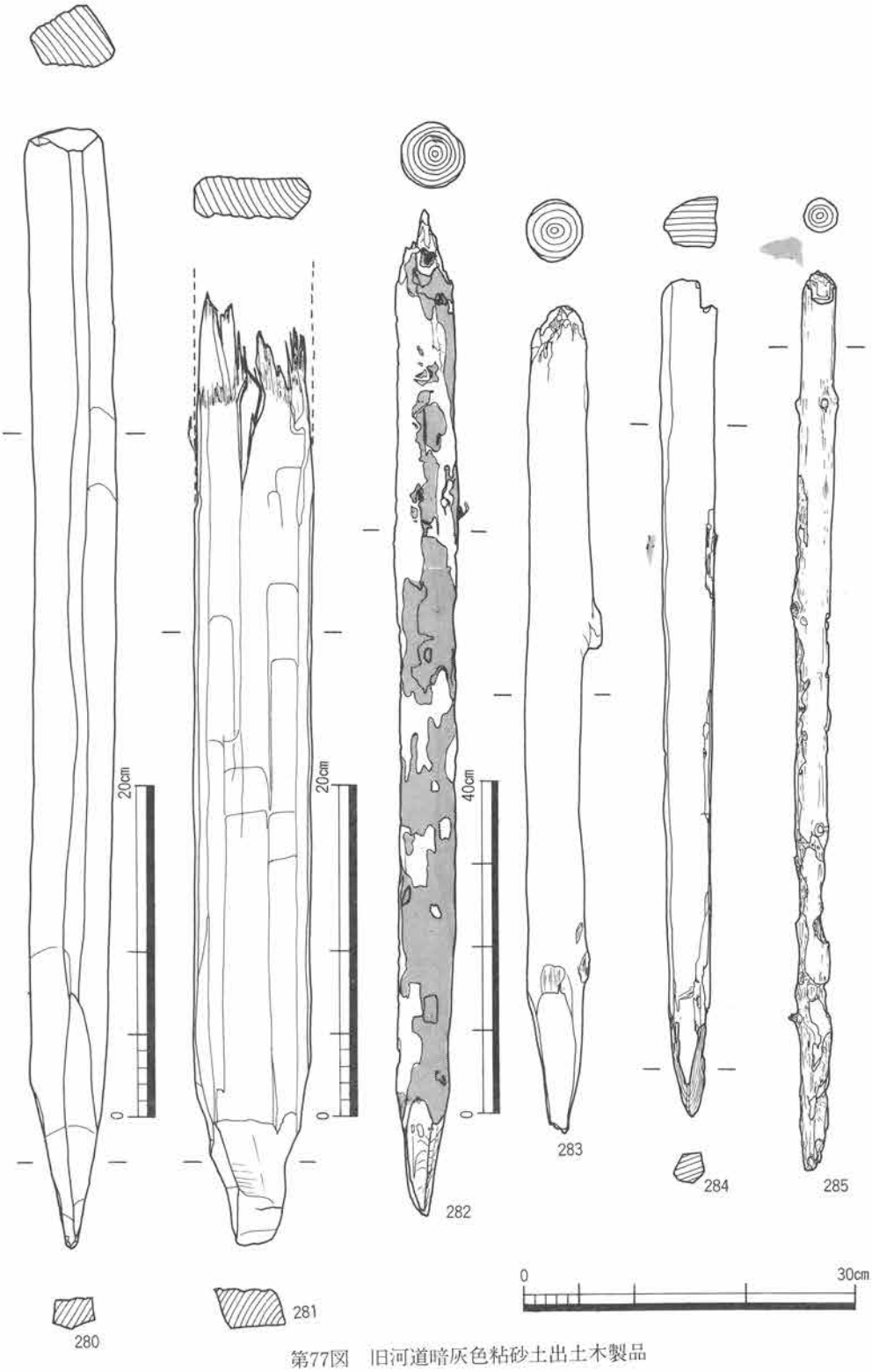
第74図　旧河道暗灰色粘砂土出土製品



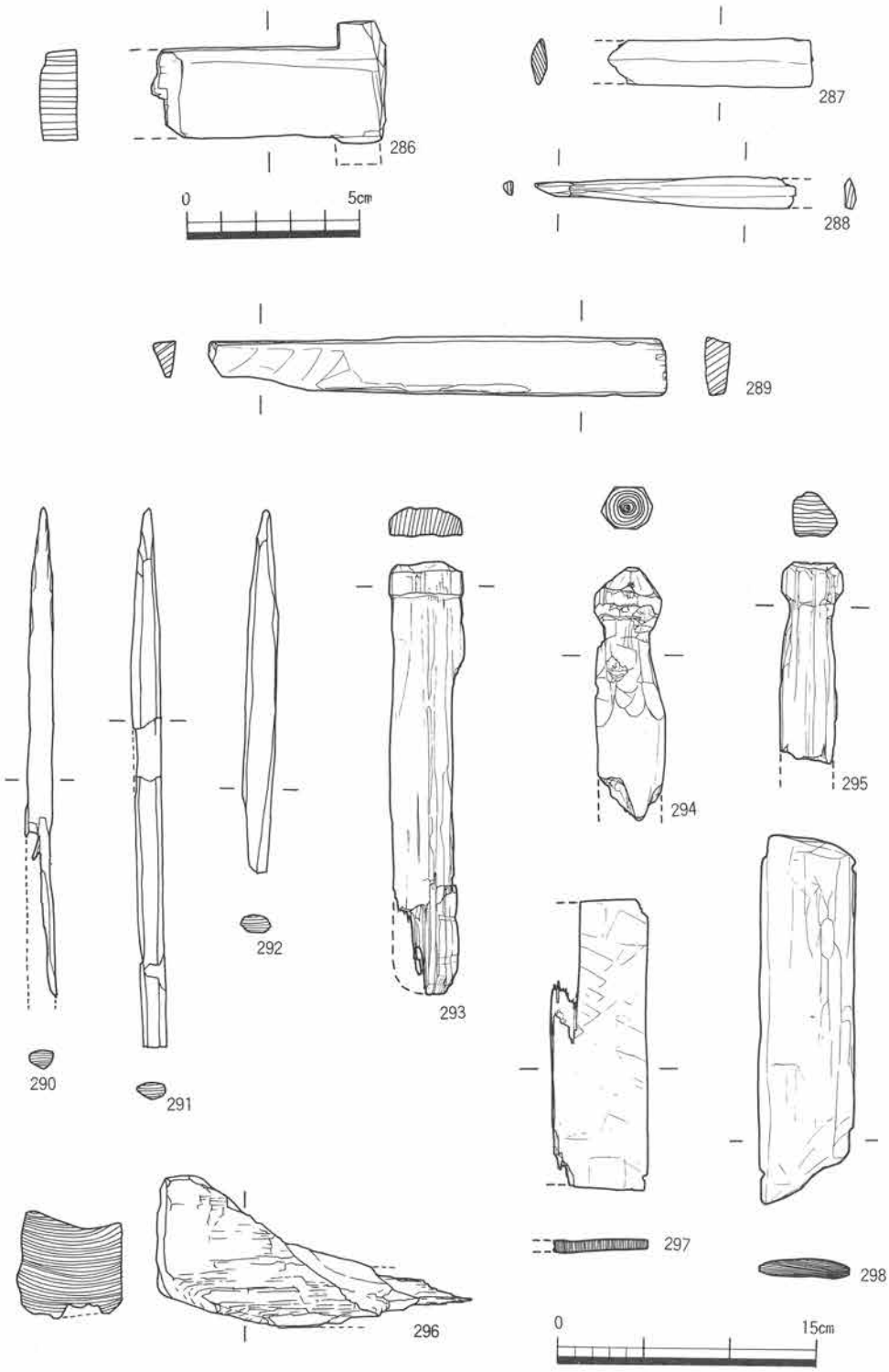
第75図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



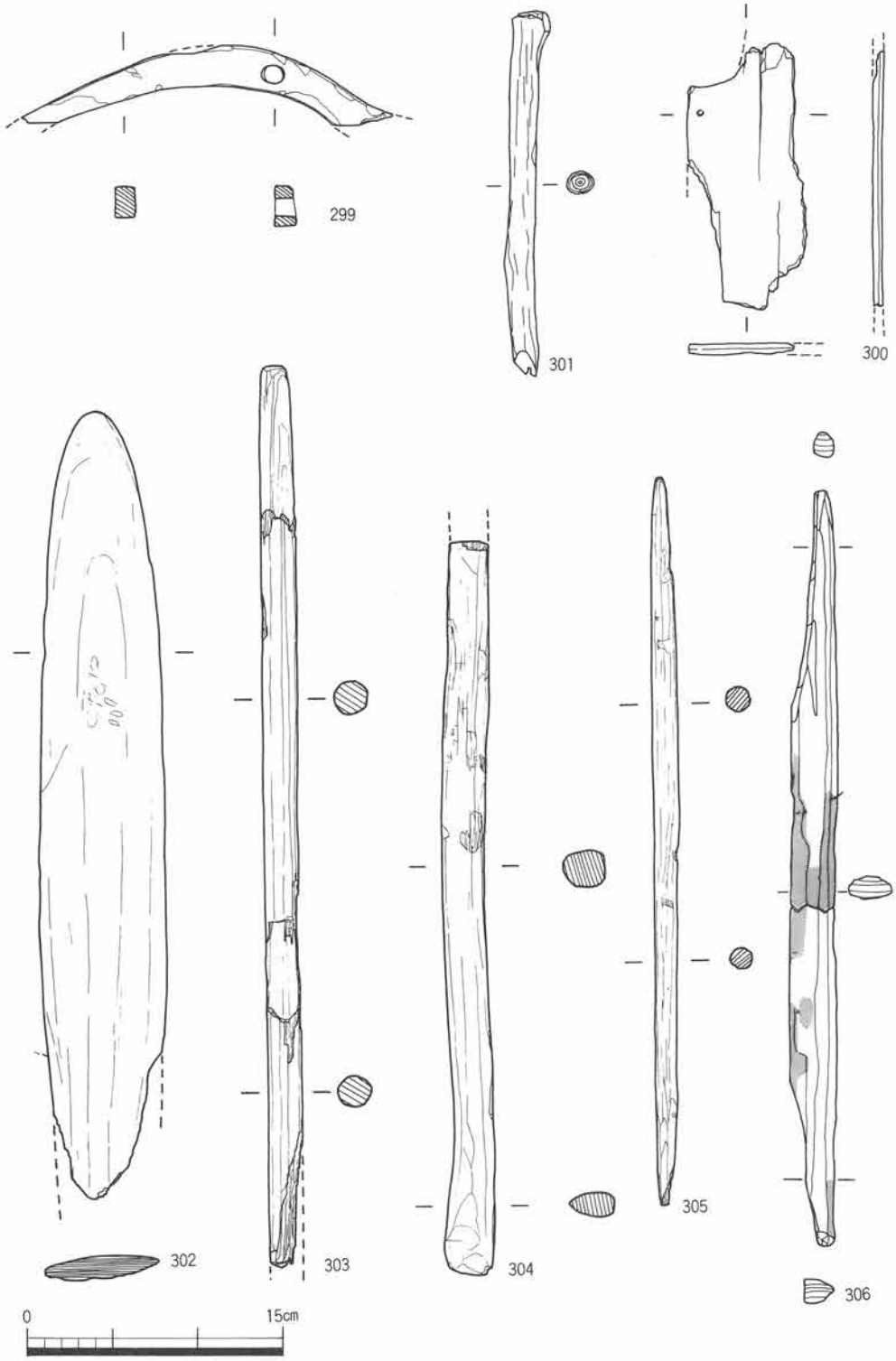
第76図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



第77図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



第78図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品



第79図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品

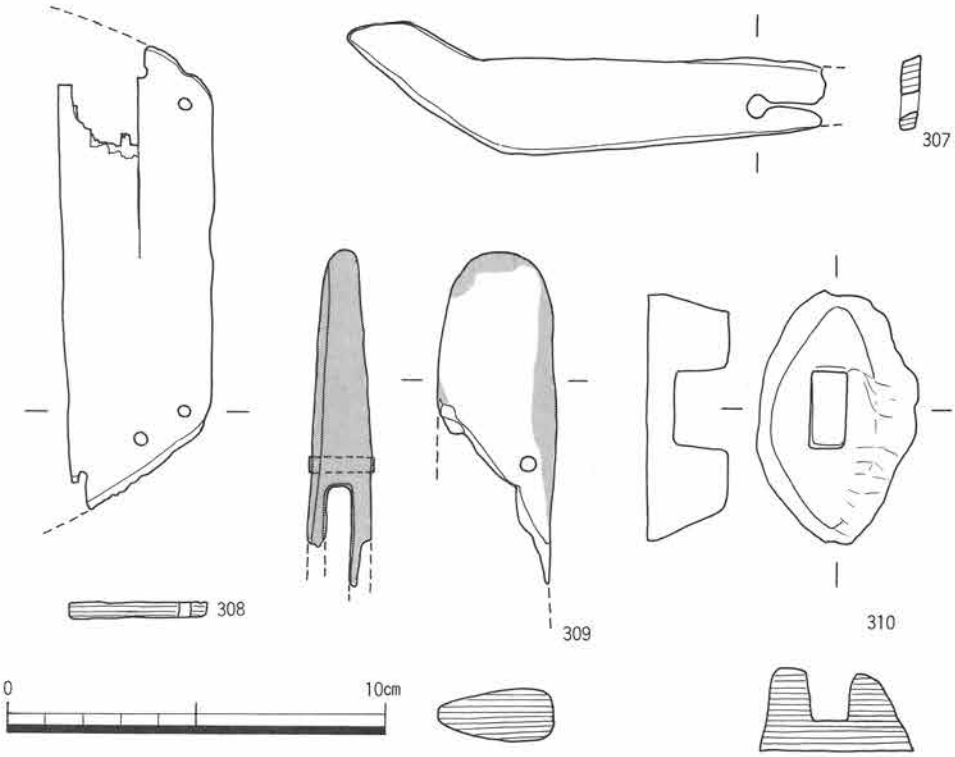
れ、１本の目釘をうつ。現存長8.7cm・幅3.1cm・厚さ1.5cmを計る。㉚は長さ6.5cm・幅４cm高さ2.2cmを計る小型品で、上端中央部に長辺２cm・短辺１cmの長方形の穴を深さ1.4cmに刳り貫く。

灰色砂出土遺物

河道埋土の最下層にあたる。縄文土器と土師器、自然木・自然遺物が出土した。

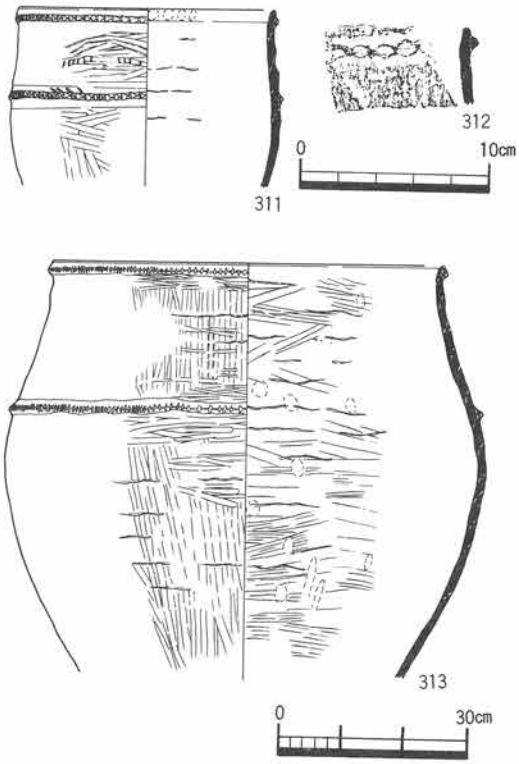
縄文土器（第81図）

３点いずれも深鉢である。㉛は内弯する体部から口縁部でやや外反し端部は丸くおさまる。口縁端部下方と体部外面に断面三角形の貼付突帯、その頂部にD字状の刻み目が整然とならぶ。調整は口縁部外面が横方向のナデ、体部にかけてヘラによる横方向のナデ、下半は縦方向のナデ、内面はナデで仕上げる。体部貼付突帯のすぐ上には爪かあるいはヘラによる圧痕が残る。口径21cm残存高14.2cmを計る。㉜は口縁部下方の貼付突帯の頂部に貝殻状の刻み目を施す。調整は口縁部外面が木口による縦方向のナデ、突帯の上下方をナデ、内面は横方向のナデを施し、㉛同様指頭圧痕が明瞭に残る。㉝は内弯する体部から口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁端部と体部外面に断面三角形の突帯を貼りつけ、その頂部に菱形状の刻み目を施す。調整は口縁部から体部外面に木口による縦方向のナデ、突帯の



第80図　旧河道暗灰色粘砂土出土木製品

上下に横方向のヘラナデ、内面は木口による横方向のナデの後、ヘラと指によるナデを施す。体部外面に煤の付着がみられる。胎土はいずれも暗褐色を呈し、1～3㎜程度の砂粒を含む。長原式の範疇に含まれると思われる。



第81図　旧河道灰色砂出土土器

小結

本調査区で検出した旧河道は本遺跡の東側と西側の遺構群を分断するような状況で検出した。河道最上層中には13～14C代の遺物がみられ、河道が中世以後に埋没したことがわかる。河道の底面とした灰色砂の下層にはさらに腐植土と砂がほぼ交互に帯状の堆積を繰り返している。地山土とした淡青黄色粘質土はちょうどその上にのった状態であり、河川の歴史がさらに溯ることが予想される。遺跡内には盛時の川幅が200ｍを越えたといわれる境川が流れており、この地域が境川の活発な活動範囲であったことは要易に想像がつく。河道内出土遺物を見ると古墳時代初頭前後のものが圧倒的量を占めており、この頃には境川の活動も安定し、人間が居住するに必要な条件が整ったのであろう。いずれにしてもこの地域に居住した人間は常に水に接した生活を強いられており、その恩恵を受けると同時に驚異にもさらされていたのである。（宮下）

第６節　第６調査区

１　遺　構

約350㎡が対象面積であるが、第５調査区側４㎡は調査用仮設電柱の設置のため調査は実施しなかった。表土下20cm程で遺構検出面に達するが、標高は86ｍを測り、遺跡内でも本調査区はやや低地に位置する。地山は西側が暗褐色土、東側は遺物を包含した灰褐色土からなり、中世期の掘立柱建物・井戸・土擴・溝・自然流路を検出した。

掘立柱建物（ＳＢ－１・２）

ＳＢ－１

調査区東端で検出した建物で、主軸方位はＮ－46°－Ｅを示す。建物は東側調査区外へ伸展するため全容は明らかでないが、３間×３間以上の規模であると思われる。柱穴は長径40cmの楕円・一辺40cmの方形・もしくは直径40cmの円形を呈し、いずれも整地土上面から掘りこまれている。遺物はＰ－１から土師器皿・黒色土器椀（第87図１～８）、Ｐ－２から石製硯（第87図９）が出土した。

ＳＢ－２

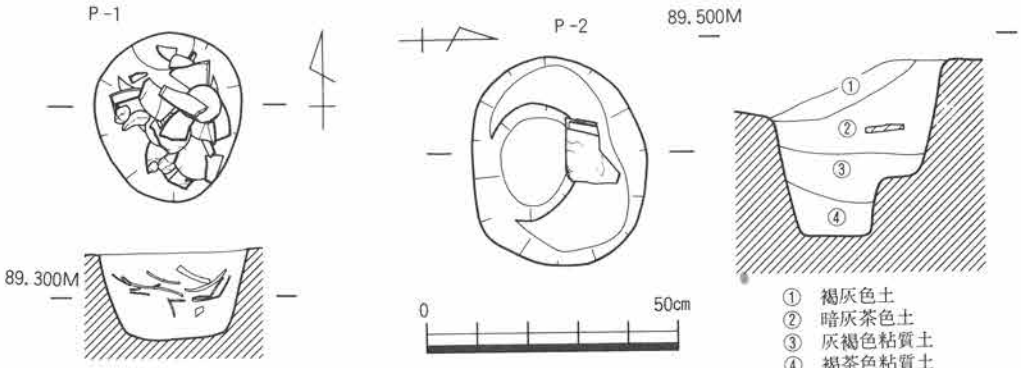
調査区中央南端で検出した建物で、主軸方位はＮ－56°－Ｅを示す。南側は調査区外へ伸展するため全容は明らかでないが、２間×２間以上の規模であると思われる。柱間距離は桁行2.5ｍ・梁行１8ｍを測る。柱穴埋土は褐灰色土の単層で、遺物は少量の土師器片が出土している。

井　戸

ＳＥ－１（第84図）

調査区中央南辺で検出した。掘方の平面形は２ｍ×1.6ｍの楕円形状で、２段に掘り込まれている。現状で曲物を２段重ねて井筒とするが、検出面から曲物上面まで約45cmあることから曲物があと１～２段、あるいはべつの構築物が重ねられていたと考えられる。堀方上面で検出したドーナツ状の礫群は曲物ないし別の構築物に裏込めされたものであろう。又、上段曲物のまわりには直径１～２cm、長さ20cm程度の竹筒がほぼ等間隔で差し込まれていた。出土状況及び竹筒の規模から土留め等の用途は考え難く、その性格は不明である。遺物は上段の曲物内から土師器小皿・黒色土器椀・ヘラ状木製品（第87図14～18）をはじめ大量の木切れや竹切れが出土した。これら遺物から遅くとも14Ｃ末頃には廃絶したものと考えられる。

第82図　第６調査区遺構平面図



第83図　ＳＢ－１，Ｐ－１・２遺物出土状況図

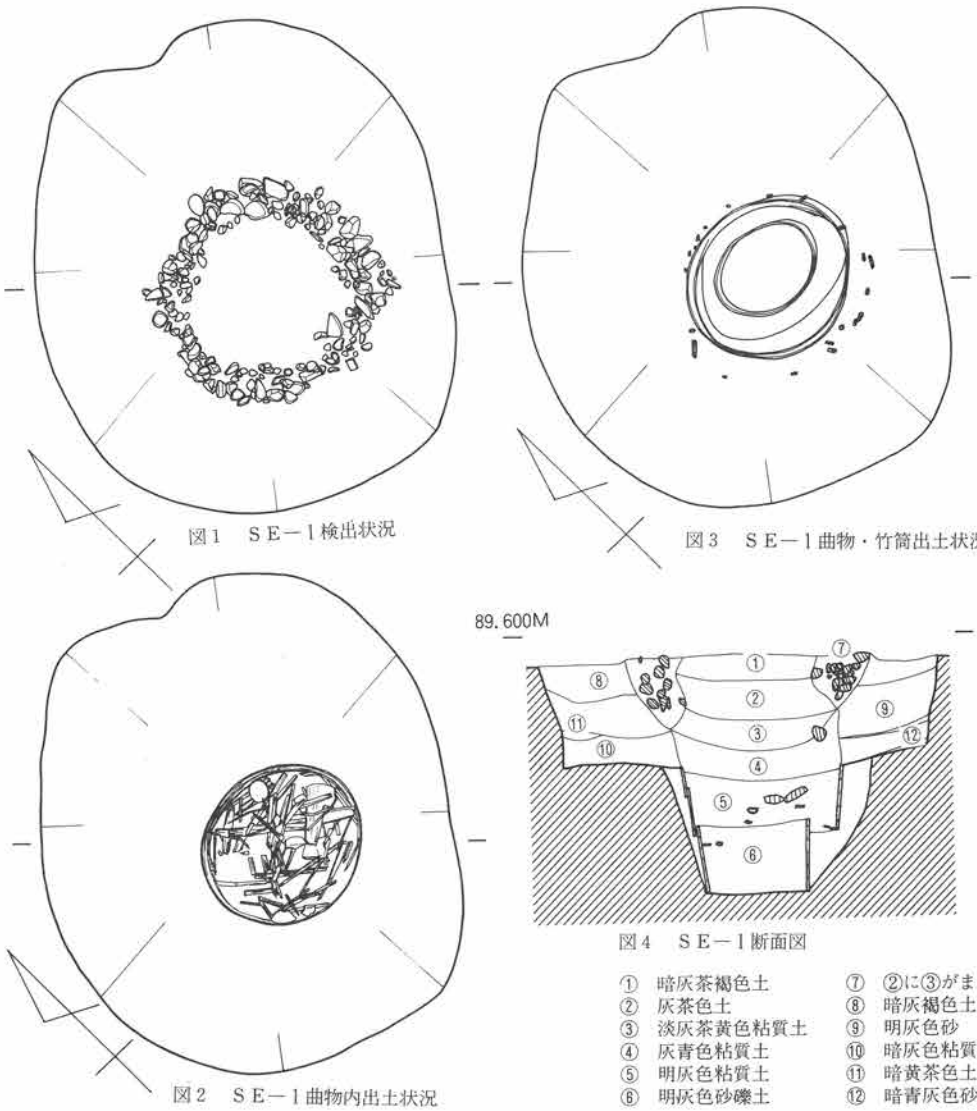


図１　ＳＥ－１検出状況

図３　ＳＥ－１曲物・竹筒出土状況

図２　ＳＥ－１曲物内出土状況

図４　ＳＥ－１断面図

第84図　ＳＥ－１平面図・断面図

土擴（ＳＫ－１～５）

ＳＫ－１

調査区西側で検出した長方形状の土擴である、長径２ｍ・短径1.8ｍ、深さ50cmを測る。埋土は上下二層に大別できるが上層はかなり細い分層が可能である。遺物は土師器大皿・小皿・黒色土器椀（第88図①～⑬）が出土している。

ＳＫ－２

ＳＫ－１の北に位置し、南端をＳＫ－１に切られている。長径2.5ｍ、短径1.6ｍを測る楕円形状の土擴である。深さは30cmを測り、底面は鍋底状を呈する。遺物は土師器小皿・黒色土器椀、白磁椀、瓦器ミニチュア羽釜（第88図⑭～⑲）がある。

ＳＫ－３

ＳＫ－１の南に近接して検出した長方形状の土擴である。長径1.2ｍ、短径90cm、深さ20cmを測る。埋土は灰色砂礫土、暗黄茶色土が堆積する。遺物は若干の土師器片が出土しただけである。

ＳＫ－４

ＳＥ－１の東に近接して検出した長方形状の土擴で、長径1.5ｍ、短径1.1ｍ、深さ　cmを測る。底面は鍋底状に落ち込み、ほぼ平坦である。埋土は暗灰色粘質土の単層で、遺物は出土していない。

ＳＫ－５

ＳＫ－４の北に位置し、北端をＳＫ－５、東側をＳＤ－１に切られている。埋土は暗褐灰色粘質土の単層で、土師器の小破片が出土した。

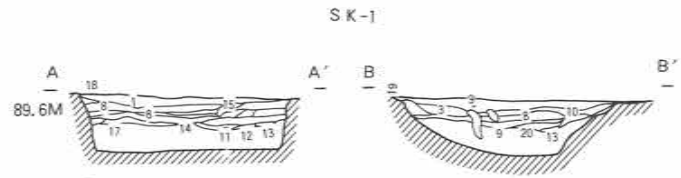
溝（ＳＤ－１～３）

ＳＤ－１

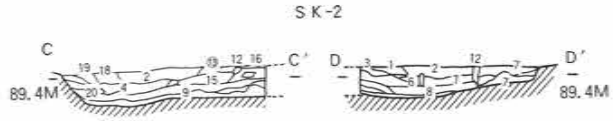
第７調査区ＳＤ－１の東端部分で、調査区中央を流れるＳＲ－１に合流する。幅３ｍ、深さ40cmを測り、断面は緩いＵ字形を呈する。埋土はおおよそ３層程のレンズ状堆積を示していた。遺物は土師器・黒色土器の少片と白磁椀・陶器の破片（第88図㉑・㉒）が出土した。

ＳＤ－２

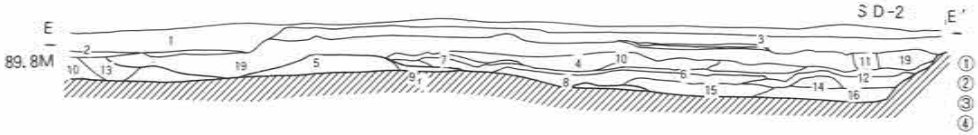
調査区南側で検出した溝でＳＤ－１に合流している。幅は最大で5.5ｍ、深さは30cmを測り、底は平坦である。遺物は少く、白磁椀と陶器壺の破片（第88図㉓・㉔）の他土師器片が少量出土しただけである。



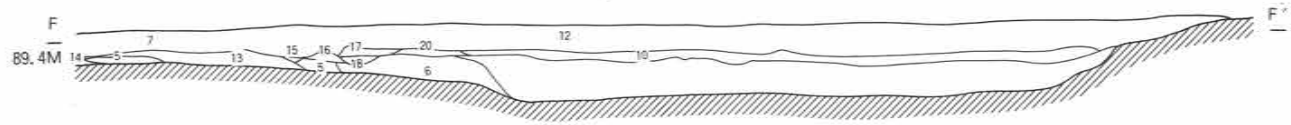
① 明灰茶色土
② 茶褐灰色土
③ 灰茶色土
④ 褐灰色土
⑤ 暗灰茶褐色土
⑥ 暗灰黄青色粘質土
⑦ 暗褐灰色土
⑧ 暗灰褐色土
⑨ 暗赤褐色土
⑩ 明灰色粘質土に茶褐色粘質土がまじる
⑪ 灰色粘質土に淡青色粘質土がまじる
⑫ 灰色粘質土
⑬ 淡青灰色粘質土
⑭ 暗灰色粘質土
⑮ 暗褐茶灰色土
⑯ 灰色砂質土
⑰ 明灰色粘質土
⑱ 褐灰色土
⑲ 暗灰色土
⑳ 灰色粘質土に暗茶褐色土がまじる

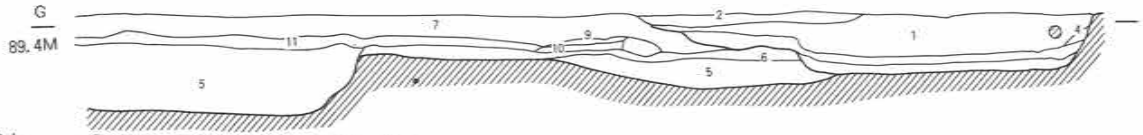


① 暗灰黄褐色土
② 暗灰茶褐色土
③ 灰茶褐色土
④ 灰色粘質土に暗黄青色粘質土がまじる
⑤ 暗茶褐色土
⑥ 暗灰茶色土
⑦ 暗茶褐灰色土
⑧ 明茶褐色粘質土
⑨ 暗灰色粘質土
⑩ 明茶褐色土
⑪ 灰茶色粘質土
⑫ 灰色土
⑬ 淡黄茶青色土
⑭ 黄茶青色土
⑮ 暗灰色粘質土に淡青色粘質土がまじる
⑯ 淡赤茶褐色土
⑰ 灰黄茶青色土
⑱ 暗褐灰色土
⑲ 茶灰色土
⑳ 暗褐色土



① 暗灰色土
② 明黄茶色土
③ 淡青灰色土
④ 暗灰茶色土
⑤ 暗灰褐色土
⑥ 暗灰褐茶黄色土
⑦ 褐灰色土
⑧ 淡灰茶色粘質土
⑨ 明灰色粗砂
⑩ 暗褐灰色土
⑪ 明灰茶色粘質土
⑫ 明青灰色土に灰茶色土がまじる
⑬ 明灰茶色土
⑭ 明灰色粘質土
⑮ 灰色粘質土
⑯ 淡灰色粘質土
⑰ 明灰褐茶色土
⑱ 灰色砂質土
⑲ 灰茶色土

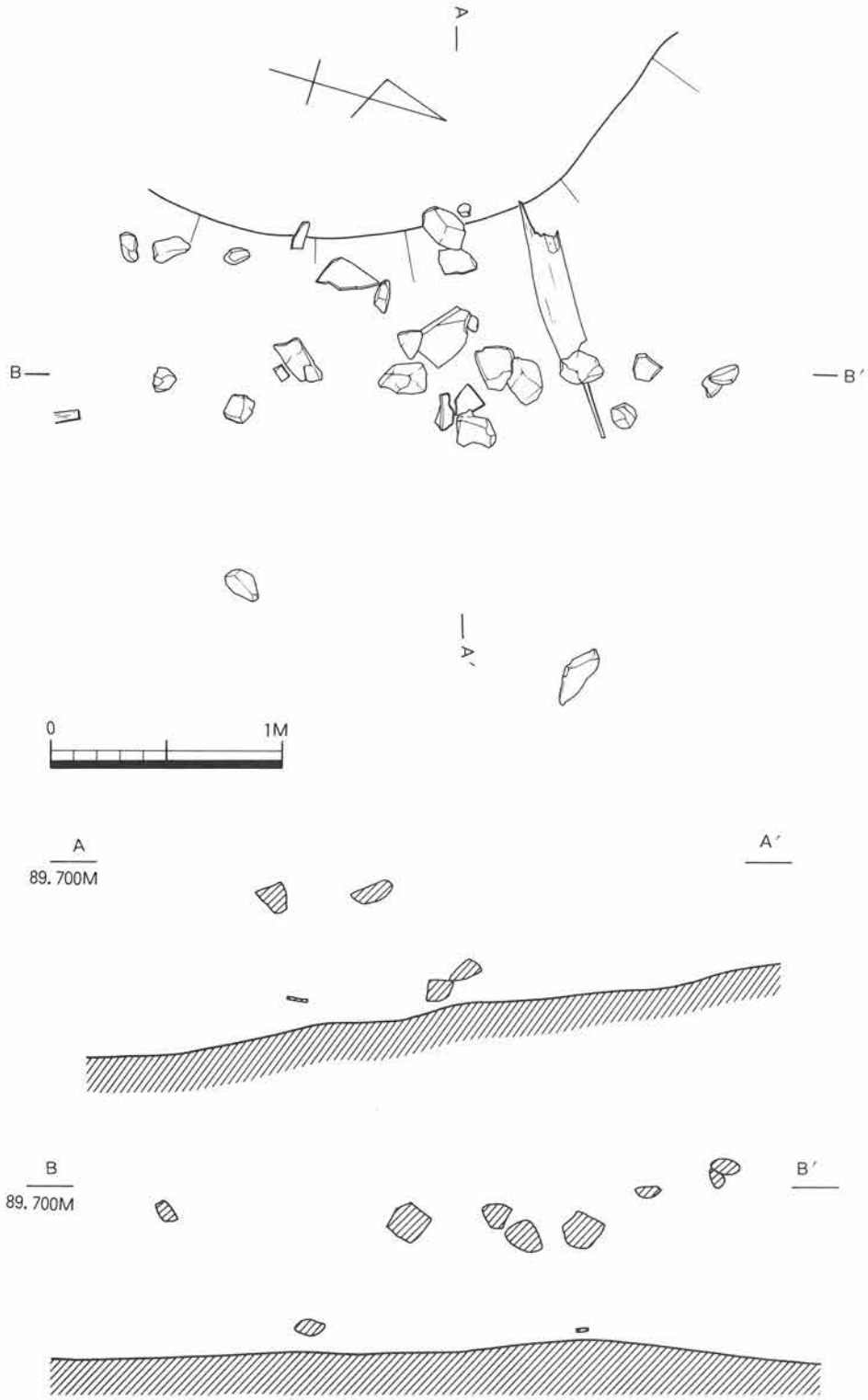




① 灰茶褐色土
② 茶黄灰色土
③ 灰色粘質土
④ 淡青灰色粘質土
⑤ 暗灰色粘質土
⑥ 暗灰色シルト
⑦ 暗灰茶色土
⑧ 暗茶灰黄色土
⑨ 灰色砂
⑩ 茶黄色砂
⑪ 茶褐灰色粘質土
⑫ 暗茶灰色土
⑬ 灰茶褐色砂質土
⑭ 明灰色砂
⑮ 褐灰色粗砂
⑯ 灰褐色砂
⑰ 明灰褐色砂
⑱ 暗灰色砂
⑲ 暗黄茶灰色粘質土
⑳ 暗灰色粘質土に淡青色粘質土がまじる
㉑ 灰褐茶色土
㉒ 茶褐色土

第85図　遺構断面図

2M



第86図　整地層礫群出土状況図

ＳＤ－３

北端のみを検出した。幅90cm、深さ30cmを測り、断面はＵ字形を呈する。埋土は暗灰色粘質土の単層である。

自然流路（ＳＲ－１）

調査区東側で蛇行して西流する自然流路と考えられる。最大幅７ｍ、深さ60～90cmを測る。埋土は自然流路特有のやや複雑な堆積を示すが、おおむね上下二層に大別できる。遺物は大量の土師器小皿を中心に黒色土器椀・片口鍋・おろし皿・青磁椀・斎串など（第89図）が出土した。

２　遺　物

ＳＢ－１出土遺物（第87図①～⑨）

Ｐ－１（①～⑧）　Ｐ－２（⑨）

土師器皿（①～④）

①～③は小皿で、平端な底部から口縁部が斜めに立ち上がり、端部を丸くおさめるもの（①）、やや丸い底部から口縁部が内弯気味に立ち上がるもの（②）、底部から口縁部にかけてなだらかに開き、端部を尖らせ気味におさえるもの（③）がある。いずれも体部中位程までを一回横ナデを施す。口径8.5cm、器高1.2cm～1.6cmを測る。④は大皿で、体部から口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。口径12.4cmを計る。

黒色土器椀（⑤～⑧）

いずれも口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部は丸くおさめるものである。⑧は不安定な底部に断面三角形状の高台が貼りつく。口径は⑤・⑥・⑧が14cm、⑦が13cm、器高は⑧が4.8cmを計る。

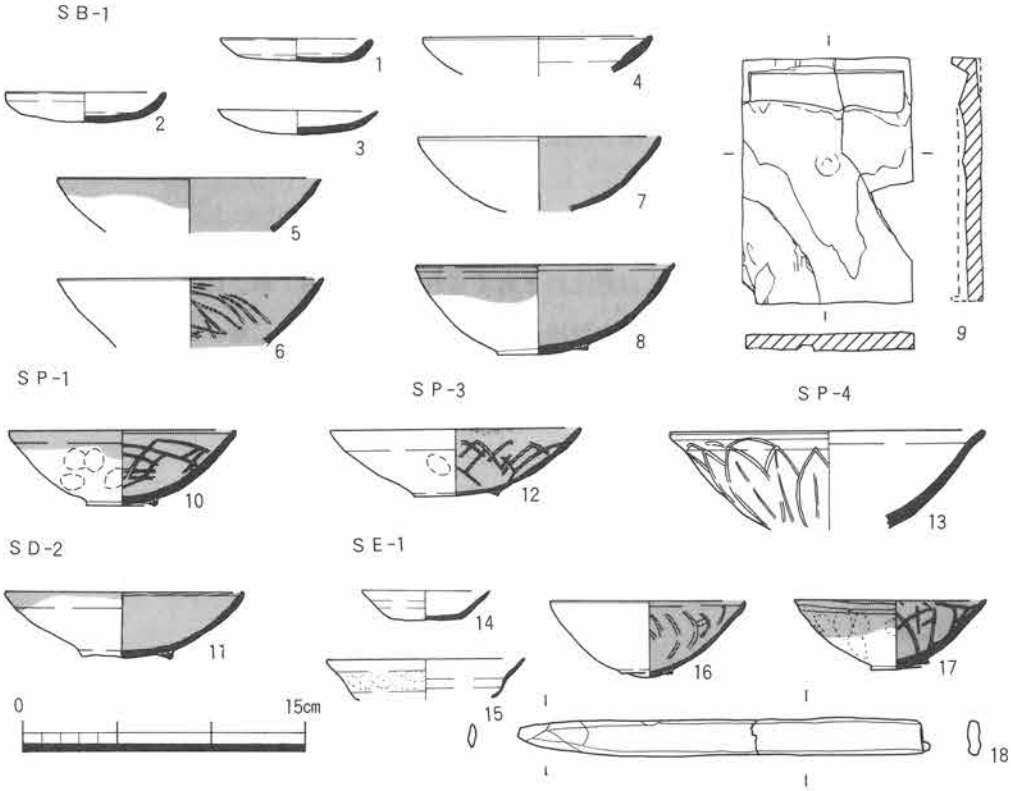
石製硯（⑨）

平面形は長方形を呈する。硯頭部の縁帯は狭く、海部にむかって鈍角に削られている。側面は上方にむかってやや広がり、裏面は平坦である。石材は暗灰色を呈する粘板岩である。縁帯のほとんどと陸部を欠損する。

その他柱穴内出土遺物（第87図⑩～⑬）

黒色土器椀（⑩～⑫）

⑩は小さく丸い底部から内弯気味に立ち上がる口縁部をもつもので、断面台形状の高台を貼りつける。⑪・⑫は低く内弯するもので、高台は断面三角形状のものを貼りつける。調整は磨滅のため明瞭でないがラセン状暗文が施されている。



第87図　ＳＢ－１，ＳＥ－１，その他柱穴内出土遺物

青磁椀（⑬）

内弯する体部から口縁部は外反気味に立ち上がる。体部外面には蓮弁文を有する。素地は白灰色を呈し、釉は緑色に発色する。龍泉窯系と考えられ、〔太宰府Ｇ分類Ｉ－５・６〕に相当する。

ＳＥ－１出土遺物（第87図⑭～⑱）

土師器皿（⑭・⑮）

⑭は平坦な底部から口縁部がやや屈曲気味にのび、底部との境に明瞭な稜を有す小皿である。体部外面中位まで横ナデ、他はナデで仕上げる。⑮は口縁部が屈曲する大皿で、端部は若干折り返す。口縁部外面を横ナデ、他をナデで仕上げる。体部外面中位に連続する指頭圧痕が明瞭に残る。口径は⑭が6.6cm、⑮が10.6cm、器高は⑭が1.6cmを計る。

黒色土器椀（⑯・⑰）

丸い底部から口縁部が内弯気味にのびる。高台は細い粘土紐を粗雑に貼りつけただけで完全に形骸化している。炭素の吸着は⑰の外面口縁部と内面にみられるが、⑯はまったくみられない。調整は⑰の口縁部外面にヘラ研磨がみられるが、他はすべてナデである。

内面の暗文は⑯・⑰共にみられるが、かなり粗雑である。口径は共に10.2cm、器高は⑯が4cm、⑰が36cmを計る。

ヘラ状木製品（⑱）

先端を刃物状工具で鋭く削り、表裏、及び側面も平滑に仕上げている。途中で欠損するが、現状で21.6cmを計る。

ＳＫ－１出土遺物（第88図①～⑬）

土師器皿（①～⑤）

①～③は小皿で、不安定な底部から斜め上方へ立ち上がる口縁部をもつものである。体部への横ナデは一段だけ施されている。口径は①・㉑が8.5cm、②が9cm、器高は①・②が1.6cm、③が1.4cmを計る。④・⑤は大皿で、口縁部が直線的に立ち上がり、底部との境に明瞭な屈曲部を有す。口径は④が11.8cm、⑤が13cm、器高は2cmを計る。

黒色土器椀（⑥～⑬）

丸い底部から内弯気味に立ち上がる口縁部をもつ。高台は低い断面三角形状、又は台形状のものを粗雑に貼りつけるが、⑨のように形骸化しているものもある。口縁部外面はヘラ磨きがみられるものもあるが（⑪・⑬）、ほとんどがナデで、口縁部内面の沈線はまったくみられない。内面はいずれもラセン状暗文を施すが磨滅のため明瞭でない。口径は11.3cm～12.2cm、器高は3～4cmとやや小ぶりである。

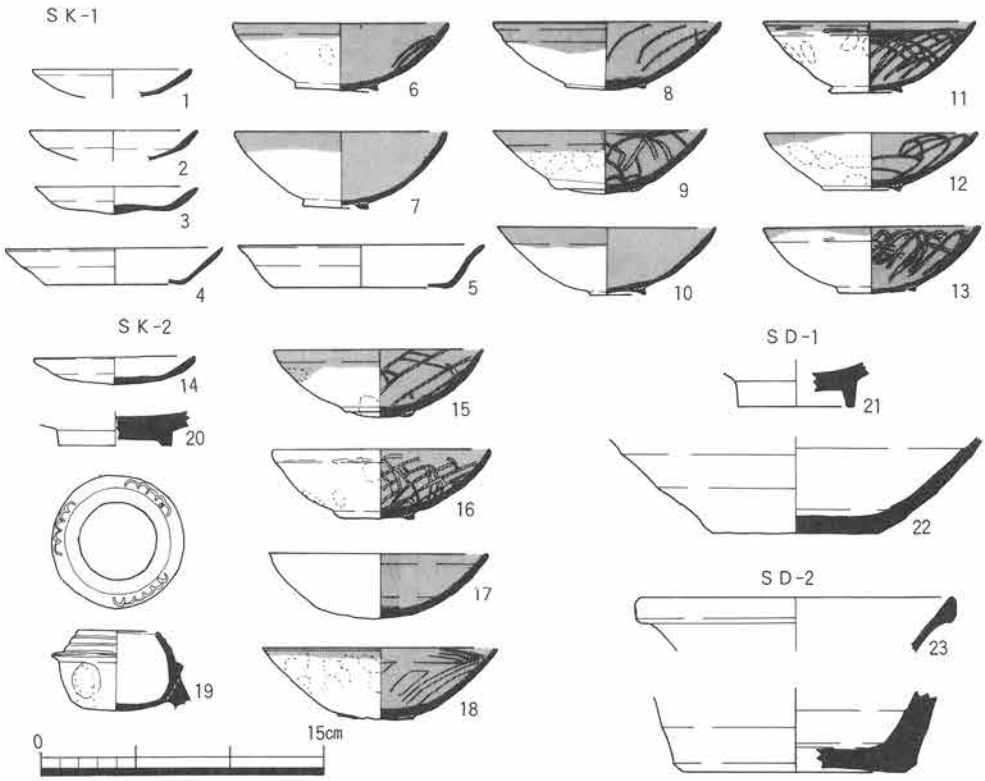
ＳＫ－２出土遺物（第88図⑭～⑲）

土師器小皿（⑭）

丸く不安定な底部から屈曲気味にのびる口縁部を有する。体部外面中位までを一回横ナデを施す。内面約½に炭素の付着がみられ、灯明皿等に使用されたものと考えられる。口径8.8cm、器高1.6cmを計る。

黒色土器椀（⑮～⑱）

丸い底部から口縁部が内弯気味にのびるもの（⑮～⑰）、口縁部が直線的にのびるもの（⑱）がある。高台は㉟が欠落していて不明であるがその他はすべてほぼ形骸化しており、極めて不安定である。炭素の吸着は⑮・⑱が口縁部外面と内面全体に、⑯が内外面全体に見られるが、⑰はまったく認められない。口縁部外面のヘラ研磨は⑯にわずかに認められるだけである。内面はいずれもラセン状暗文が施されている。口径は⑮～⑰が11.6cm、⑱が12.4cm、器高は3.4～3.8cmを計る。



第88図　SK--1，SK－2，SD－1，SD－2出土遺物

瓦器ミニチュア羽釜（⑲）

ミニチュアの羽釜である。鍔の上面に花弁状の暗文が5～6単位で3ヶ所に施されている。素地は緻密で灰白色を呈す。焼成も良好で色調は銀黒色である。体部外面から底部にかけて煤の付着が見著である。又内面にも焦げ跡が認められ、口径は43cm、鍔径は7cmを計る。

青磁椀（⑳）

高台は断面四角形を呈し、底部の器肉は厚い。高台部畳付及びその内部は露胎である。破片のため不明瞭であるが見込みに草花文がみられる。素地は灰白色を呈し、釉は黄緑色に発色する。〔太宰府Ⅰ－2〕に相当する。

SD－1（㉑・㉒）

㉑は白磁椀の底部である。釉は薄く、体部と高台の境付近まで施釉する。〔太宰府Ⅴ類〕に相当する。㉒は信楽焼の壺の底部とみられる。

SD－2（㉓・㉔）

㉓は玉縁状口縁の白磁椀で、〔太宰府Ⅳ類〕に相当する。㉔は産地不明の須恵質陶器壺である。胎土は青灰色を呈し、長石や黒い砂粒を含む。

ＳＤ－１出土遺物（第89図）

上層遺物（①～㉘・㉜～㉟）

土師器小皿（①～④・⑥～㉕）

出土土器中一番量が多い。平坦な底部から口縁部が短く屈曲するもの（①・⑥・㉑）、平坦な底部から口縁部が内弯気味に立ち上がるもの（②・⑦・⑧・⑩・⑪・⑬）、平坦な底部から口縁部は外上方へ立ち上がり、端部に面をもつもの（③・④・⑱・㉓）、あげ底気味の底部から口縁部が外上方へ立ち上がるもの（⑨・⑭～⑯・⑲・⑳・㉔）、不整形な底部から口縁部が直線的に立ち上がるもの（⑫・㉕）、丸底の底部から口縁部が内弯して立ち上がるもの（⑰・㉒）がある。いずれも一段ナデ手法で、口径は7.5～8.8cm、器高は８mm～1.6cmを計る。

土師器大皿（㉖）

平坦な底部から口縁部はやや内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。口縁部一段ナデ手法で、口径は13.5cm、器高は2.4cmを計る。

黒色土器椀（㉗・㉘）

丸い不安定な底部に断面三角形状の高台がつくもので、口縁端部の沈線はみられない。内面と外面口縁部～体部の一部にかけて炭素の吸着が認められるが、器面の磨滅が著しいために調整等は不明瞭である。

土師質片口鍋（㉜）

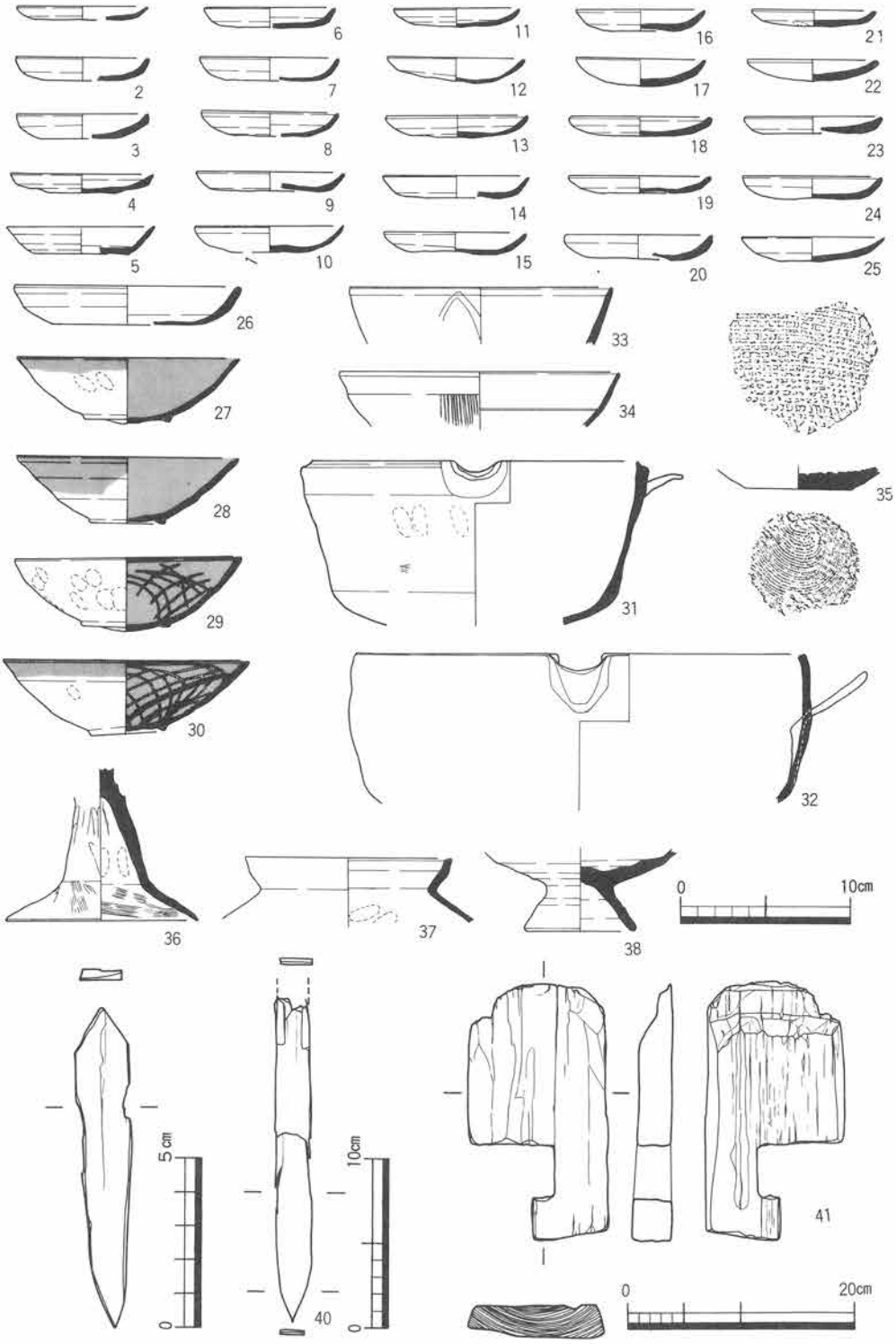
内弯する体部から口縁部はまっすぐ立ち上がり、端部に面をもつ。口縁の一部を切り込み片口をつける。胎土は粗く、１～３mm程度の砂粒を多く含む。

おろし皿（㉟）

底部のみの残存で糸切り痕が明瞭に残る。胎土は緻密で灰白色を呈し、淡黄灰色の釉がかかっていた。瀬戸産と思われる。

陶磁器（⑤・㉝・㉞）

⑤は白磁皿である。平らな底部から体部・口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は口禿である。素地は灰白色を呈し、やや青味がかった白色の釉が薄くかかる。〔太宰府Ⅸ－１〕に相当する。㉝は龍泉窯系の青磁椀で外面に蓮弁文がみられる。素地は緻密で灰白色を呈し、釉は緑色に発色する。〔太宰府Ⅸ－１〕に相当する。㉞は同安窯系の青磁椀である。内弯する体部から口縁部が外反気味に屈曲するもので、体部外面に櫛目、内面に沈線を施す。素地は灰白色を呈し、黄灰色の釉が薄くかかる。〔太宰府Ⅰ－１ｂ〕に相当する



第89図　ＳＤ－１出土遺物

と考える。

下層遺物（㉙～㉛・㊱～㊶）

黒色土器椀（㉙・㉚）

㉙は丸い底部から直線的に立ち上がる口縁部をもつもので、端部内面に沈線がみられる。炭素の吸着は㉙が内面に、㉚が口縁部外面と内面に認められる。共に口縁部外面にヘラ研磨、内面にラセン状暗文が施されている。口径は㉙が13.4cm、㉚が14.5cm、器高は共に4.2cmを計る。

土師質片口鍋（㉛）

丸底の底部から体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は外面に明瞭な段を有し、口縁の一部を切りこみ片口をつける。胎土は精皮で暗褐色を呈す。外面に炭素の吸着が顕著に認められる。ナデで仕上げるが体部外面と片口付近に指頭圧痕が残る。

その他の土器（㊱～㊳）

㊱は高杯脚部である。「ハ」字状を呈する脚柱部から裾部にかけて大きく開く。脚柱部外面はヘラ研磨、裾部内面はハケ目で仕上げる。㊲は受口状口縁甕の口縁部で、端部は内傾する面をもつ。㊳は須恵器高杯である。短く「ハ」字状に開く脚部に浅い杯が接続する。調整は回転ナデである。

木製品（㊴～㊶）

㊴・㊵は斎串である。㊴は先端を削り尖らせ、側縁上部に抉りを入れる。長さ9.3cm、厚さ3mmを計る。㊶は上端を欠損するが現存長15cm、厚さ5mmを計る。㊶は板目に木取りした板材の一方の側面を抉り込んだ部材である。表面及び側面は平滑に仕上げられているが裏面の仕上げは粗く上端には斜めの切断痕が残る。

整地層出土遺物（第90図・91図）

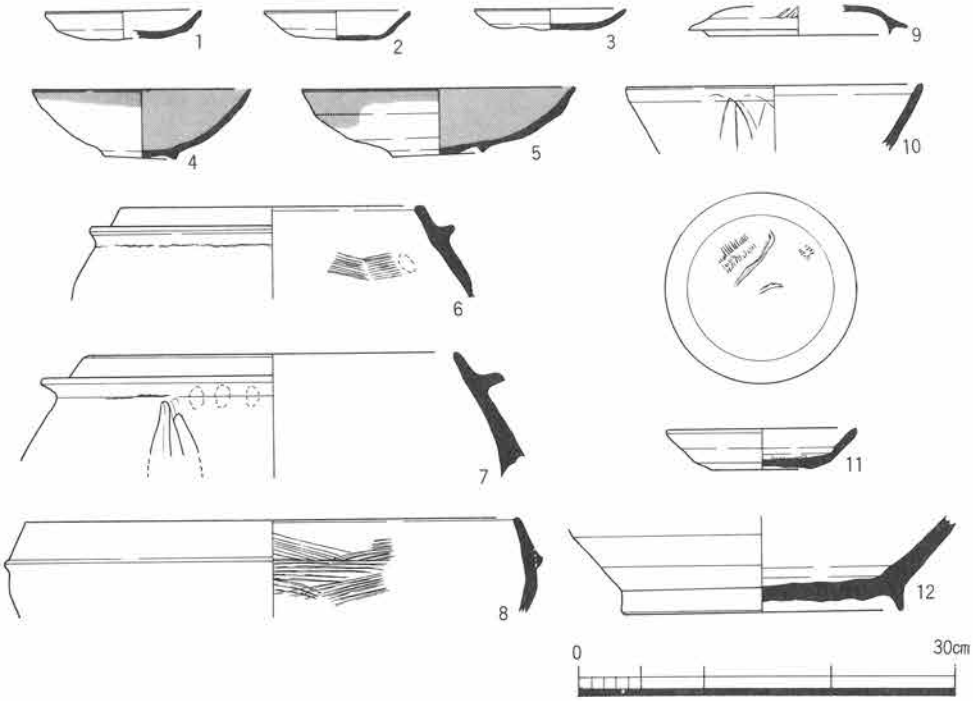
土師器小皿（①～③）

不調整な底部から口縁部が直線的に立ち上がる。いずれも口縁部は一段ナデである。口径、器高は①が8.2cm×1.4cm、②が7.8cm×1.4cm、③が8cm×1.2cmを計る。

黒色土器椀（④・⑤）

扁平な浅い椀で、内弯する体部に断面三角形の高台を貼り付ける。⑤は口縁端部に沈線がみられる。共に磨滅が著しく、内面の暗文は観察できなかった。④は口径11.6cm、器高3.6cm、⑤は口径14.6cm、器高3.5cmを計る。

土師質釜（⑥）



第90図　整地層出土遺物

内傾する口縁部に斜外上に短く突出する鍔がつく。調整は外面がナデ、体部内面は横方向の粗いハケを施す。

瓦質羽釜（⑦）

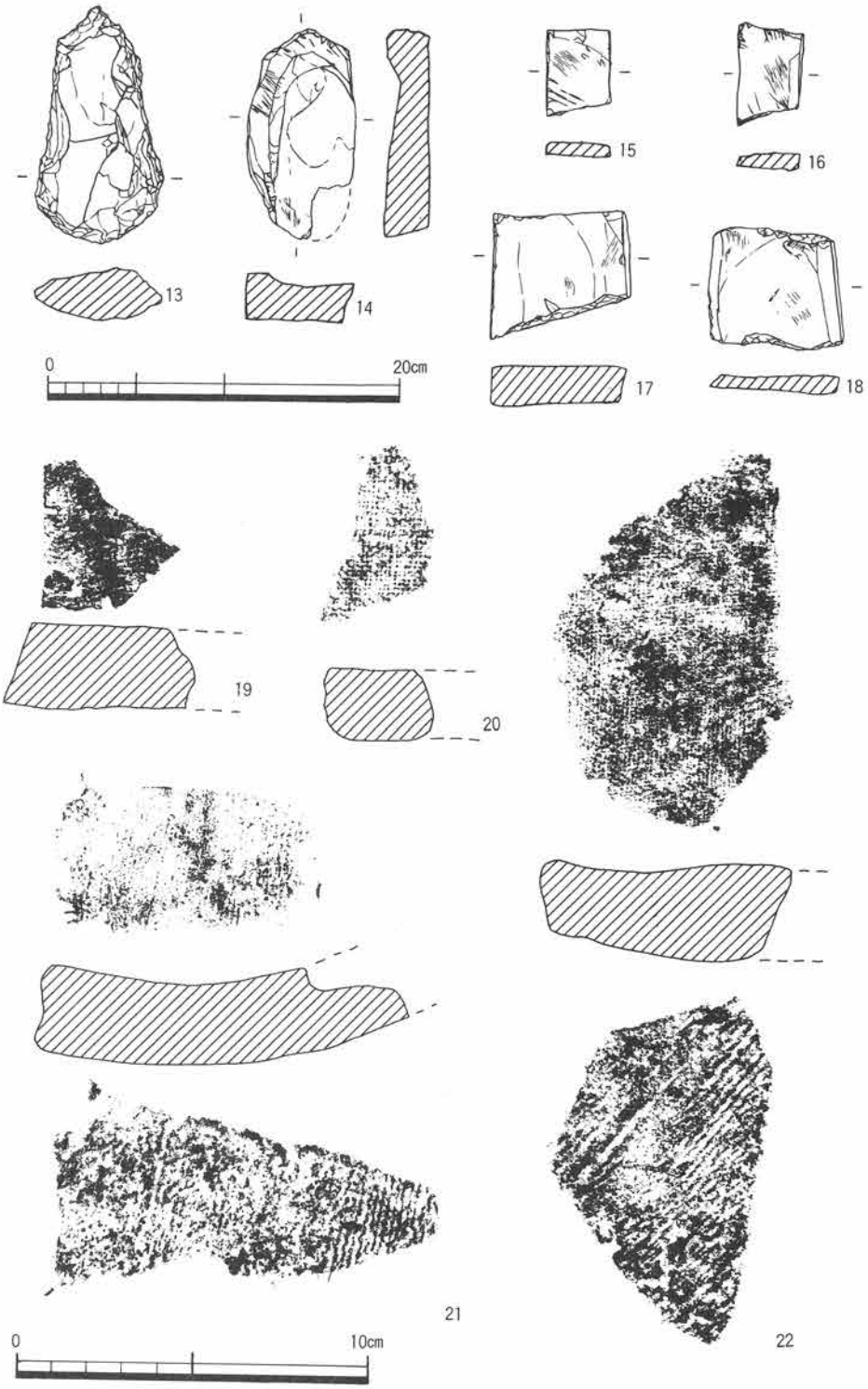
内傾する口縁部に断面方形状の鍔を貼り付ける。鍔の直下には支脚の接合痕が大きく残る。胎土は若干の砂粒を含み、焼成は比較的良好である。

土師質焙烙（⑧）

内傾して立ち上がる口縁部の下位に小さな鍔を貼り付ける。体部外面はヘラ削り、内面は横方向のハケ調整を施す。胎土は砂粒を微量に含み、焼成は良好である。色調は外面が灰褐色、内面は黄橙色を呈す。外面の煤の付着は顕著である。

陶磁器（⑨～⑪）

⑨は青磁の小壺の蓋で返りをもつ。外面には花文の浮文が施され、釉は青白色のガラス質になった透明釉が内外面にかかる。身受部は露胎となり赤茶色に発色する。胎土は緻密で灰白色を呈す。⑩は龍泉窯系の青磁椀で外面に蓮弁文がみられる。素地は緻密で灰白色を呈し、緑色の釉がやや厚めにかかる。〔太宰府Ⅰ－５・ｂ〕に相当する。⑪は同安窯系の青磁皿である。体部中位で屈曲し、体部と見込みの境に段を有する。見込みにヘラによ



第91図　整地層出土遺物

る片彫りと櫛によるジグザグ文様を有する。素地は灰白色を呈し、黄灰色のガラス質の釉がかかる。施釉は外面体部下半と底部には施釉されない。

陶器こね鉢（⑫）

厚く平坦な底部に断面三角形状の細い高台を付す。使用瀕度は高く、内面の器面は滑めらかである。常滑産と考えられる。

打製石斧（⑬）

撥状を呈し、頭部は尖る。全体的に大きな剝離面によって形成され、刃部及び側面に調整が加えられている。刃部及び側縁に磨耗痕が観察される。

石製硯（⑭）

破損が著しく器形は明確でない。縁帯は幅広く、器肉は厚い。側面はほぼ垂直に立ち上がり、裏面は平坦に仕上げられている。整形段階の削痕がみられ未製品とも考えられる。

砥石（⑮～⑱）

砥石は全部で９点出土したが図示したのはうち４点である。⑮・⑯は幅3.5cmの小型品で仕上げ砥石と考えられる。使用面は表裏二面で側面は工具による切断痕が残る。⑰・⑱は上下端を欠損する。使用面は表裏二面で側面は面とりがされている。

瓦（⑲～㉒）

平瓦の小片ばかり５点が出土した。いずれも凸面に縄目、凹面に布目が残る。

小結

本調査区において検出した遺構はすべて中世期に属するものであった。中でも特に注目すべきはＳＤ－１と整地土の存在である。ＳＤ－１は敷地を区画する溝と考えられ、さらに西方に伸びる。又整地土はＳＤ－１の東部分を埋め立て整地するものである。本調査区東側から第５調査区にかけては境川支流とみられる自然流路が検出されており、当時はまだ低湿地であったことが理解できる。この低湿地の一部を埋め立てて宅地とし、自然流路をそのまま区画用の溝として利用していたと考えられる。今回検出した建物や井戸はこの区画された敷地内にあり、この集落が当初からかなりの計画性をもった村づくりがなされていたことが推察される。（宮下）

第７節　第７調査区

Ⅰ　調査概要

第７調査区は道路計画敷のほぼ中央部分に調査区を設定した。北は第６調査区につながり、西は第11調査区、南は第10調査区につながっている。調査区はほぼ南北30ｍ、東西15ｍを設定した。確認された遺構は全て中世期に属するものだけで構成されており、大きな溝によって区画されたなかに掘立柱建物跡が検出されている。以下にそれらの内容について説明を加える。

Ⅱ　中世の遺構と遺物

１．遺　構

掘立柱建物

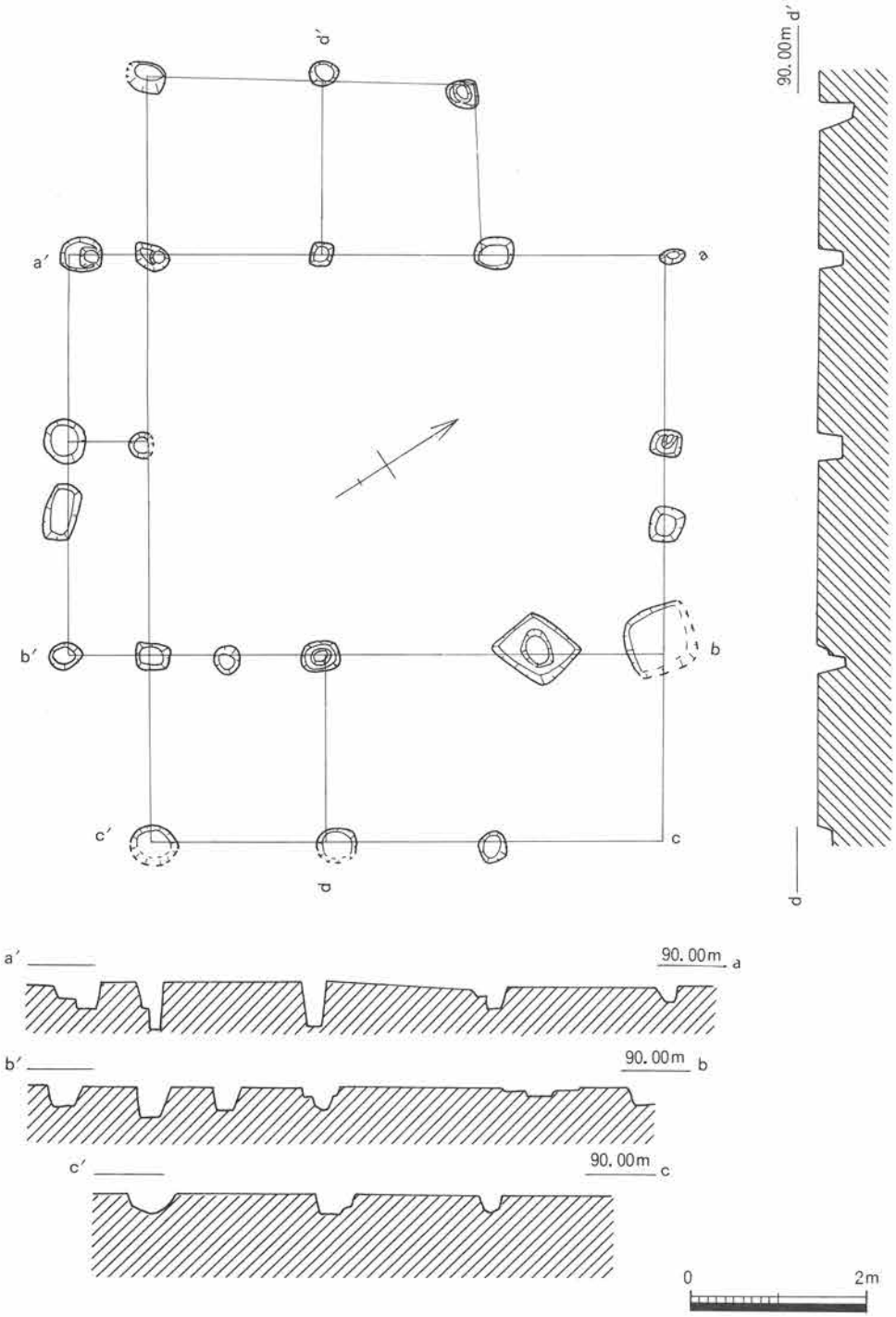
この調査区に於いては115の柱穴跡を検出したが、掘立柱建物として復元できたのは３棟であった。以下にその概要を記述する。

ＳＢ01（第92図）

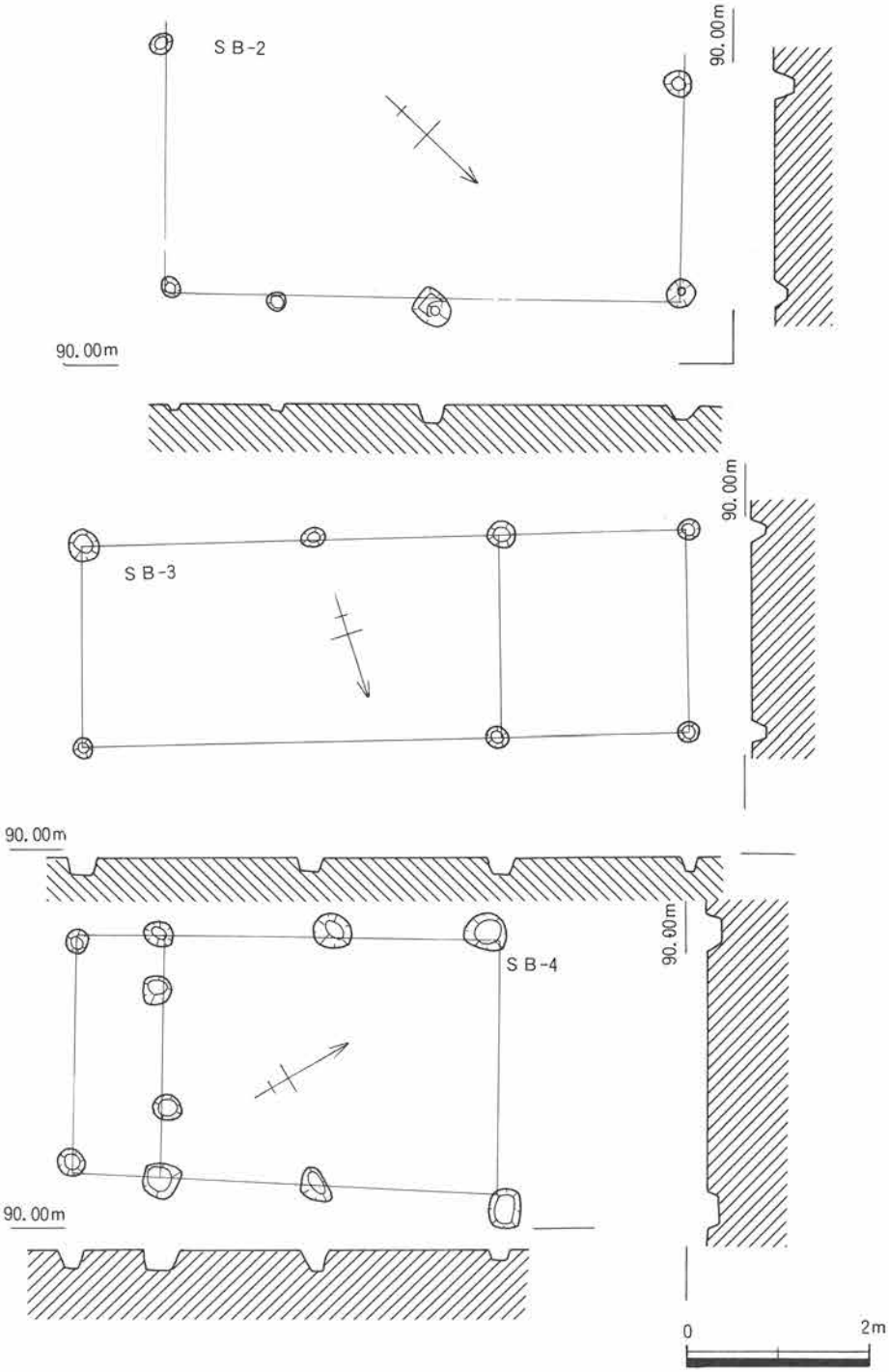
調査区の北角に位置する掘立柱建物跡である。建物の規模は桁行４間×梁間３間の東西棟である。中央には柱を持たず、南側の中央部に半間分の縁状の貼り出しを持つ。寸法はおおよそ桁行総長９ｍで、柱間距離は東からおおよそ2.4（８尺）＋2.4m（８尺）＋2.1ｍ（７尺）＋2.1m（７尺）であるのに対し、梁間総長は６ｍで柱間距離は南から2.1m（７尺）＋1.8m（６尺）＋2.1m（７尺）であった。柱穴はいずれも径約30cm～60cmの円形もしくは隅丸方形のもので構成されていた。柱痕はいずれも存在していない。東端の柱穴（ＳＰ01）から１間分がＳＤ01に切られているので区画溝の時代以前のものと考えられる。

ＳＢ02（第93図）

調査区の南西角に位置する掘立柱建物跡である。建物の規模は桁行１間以上×梁間２間の南北棟である。寸法はおおよそ桁行総長2.1ｍ以上で、梁間総長は5.7ｍで柱間距離は東からおおよそ2.7m（９尺）＋3.0m（10尺）であった。柱穴は30cm前後の円形のもので構成されていた柱痕を持つ柱穴は存在しない。ＳＤ04、05はこの建物に伴う雨落溝と考えられるがＳＢ02ともどもＳＤ01によって切られているので区画溝の時期以前のものと考えられる。ＳＢ01とも方位をやや異にしており時期が違うものと判断できるが前後関係は解らない。



第92図　ＳＢ－１平面図



第93図　ＳＢ－２～４平面図

ＳＢ03（第93図）

調査区のほぼ中央に位置する掘立柱建物跡である。建物の規模は桁行３間×梁間１間の東西棟であった。北側の西から２間目は存在しない。寸法はおおよそ桁行総長6.9mで柱間距離は西より2.1m（７尺）＋2.1m（７尺）＋2.7m（９尺）で、梁間総長はおおよそ 2.4m（８尺）であった。柱穴は約径20cmの円形のもので構成されていた。柱痕を持つ柱穴は存在しない。いずれの建物とも方位を同じくしないが、ややＳＢ01に近い。構造から獣舎のようなものが考えられる。

ＳＢ04（第93図）

ＳＢ01のほぼ中央に重複するように位置する掘立柱建物跡である。建物の規模は桁行２間×梁間１間で、南側の梁間の間に２本の補助柱を持ち半間分の張り出しを持つ。寸法はおおよそ桁行総長は3.6mで柱間距離は1.8m（６尺）と等間隔であり、梁間総長はおおよそ2.1m（７尺）であった。柱穴はいずれも径約20cm～30cmの円形のもので構成されていた。いずれも柱痕は存在しない。

溝

ＳＤ01（第94図）

調査区の東辺と南辺に添うようにＬ字に大きく流れる溝で集落の内部を区画する区画溝の一部と考えられる。これらの溝は現行条里にも一致している。溝は幅約３～４mを計りほぼ真っすぐに北から南に向かって流れていたものと考えられ途中に新たな区画を形成する為枝別れしたのち現河川（境川・海道川）に至っている。また、北端の東岸で洗場状のテラスが検出されている。層位はおおよそ３層から５層のレンズ状堆積を示していた。時期は14世紀後半と考えられる。溝の西端に常滑の大甕の口縁部が据えられていた。

ＳＤ02

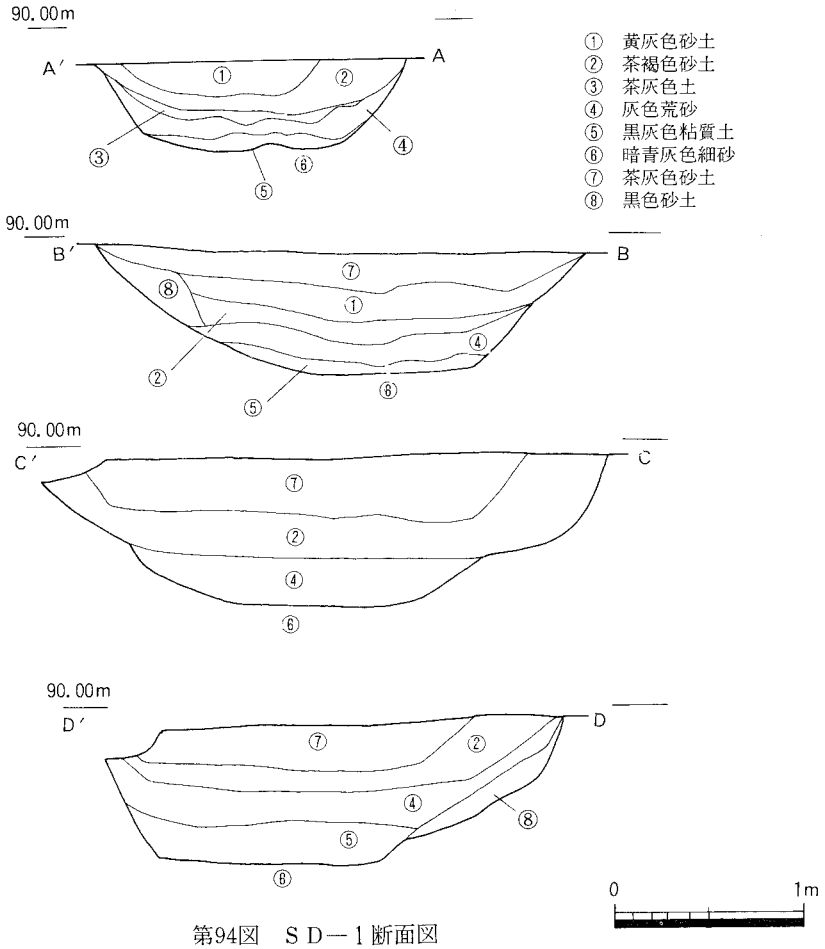
ＳＤ01のＬ字に曲がる部分を北側に繋ぐバイパス状の溝である。検出状況からみてＳＤ01と同じ時期のものと考えられる。

ＳＤ03

ＳＤ01の中央部からやや湾曲するように南に伸びる溝である。南端の方でＳＤ01やＳＤ02によって切られている。

ＳＤ04、05

調査区の南半分に位置する溝である。ＳＢ02を囲うようにＬ字に曲がり、２重に巡っているところから雨落溝と考えられる。いずれもＳＤ01や02により切られている。



第94図　ＳＤ－１断面図

土　壙

ＳＫ01（第95図）

調査区のほぼ中央に位置する東西約1.5m南北約３mの長方形を呈する土壙である。この土壙を囲うように１間×１間の覆い屋の跡が認められる。内部には①暗黄灰色粘質土②黄灰色粘質土、③黒茶灰色粘質土、④暗黄灰色粘質土が堆積していた。土壙の形状と鉄釘が出土しているところから土壙墓の可能性が強い。

ＳＫ02（第95図）

調査区の北に位置する。東西1.2m南北4.5mの長方形を呈する土壙である。内部には①黄灰色粘質土、②暗黄灰色粘質土、③暗灰色粘質土が堆積していた。ＳＢ01と重複しＳＢ

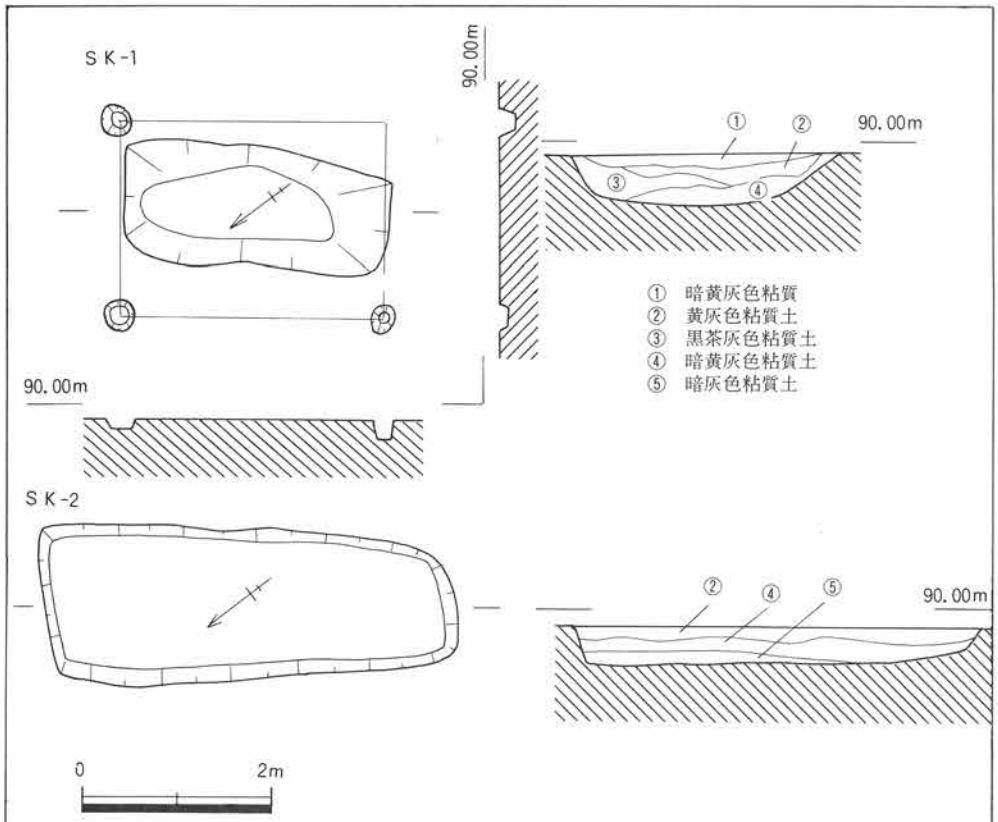
04によって切られている。ＳＫ01と方向が同じこと、形状がにていること等から土壙墓の可能性が強い。

ＳＫ03

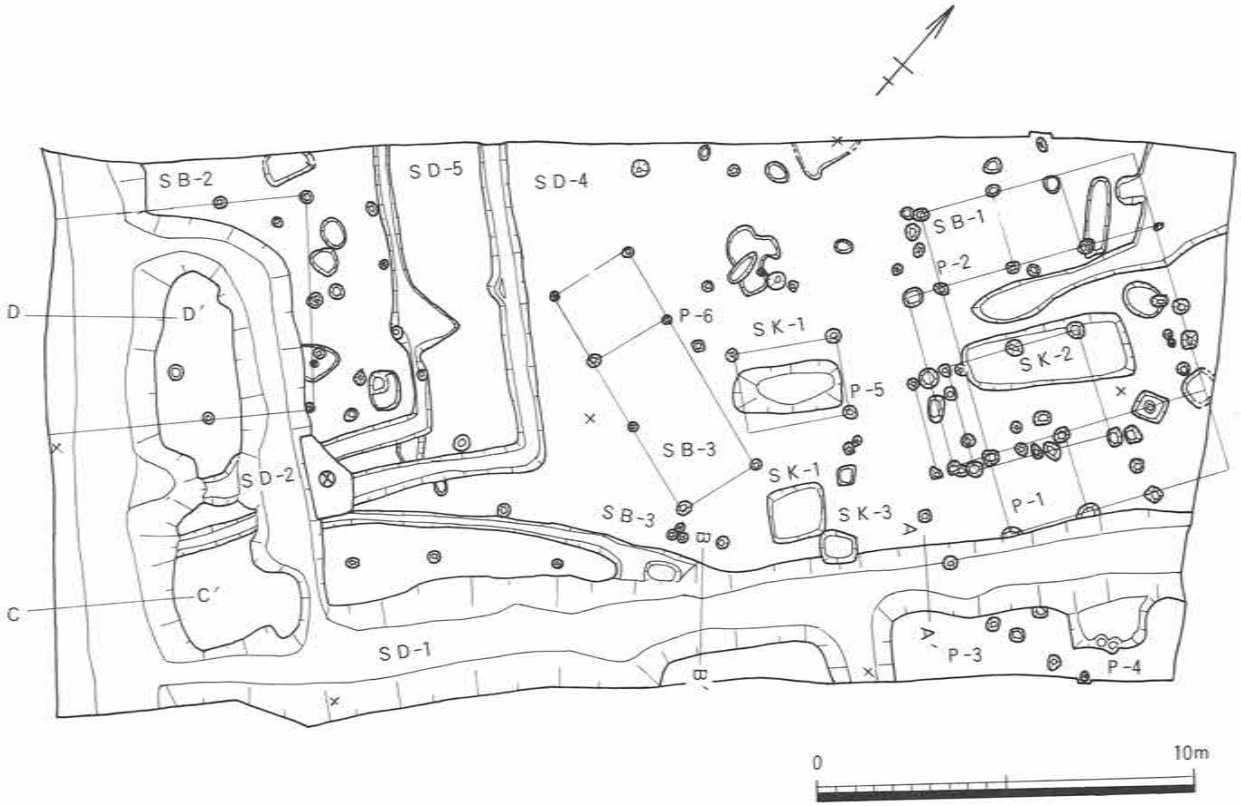
ＳＤ01を切るように西岸に位置する土壙である。ほぼ一辺１ｍの方形を呈する。埋土は黄褐色土であった。

ＳＫ04

ＳＫ03の南に位置する土壙である。ほぼ一辺1.5mの方形を呈する。埋土は暗黄灰褐色土であった。



第95図　ＳＫ－１・２平面・断面図



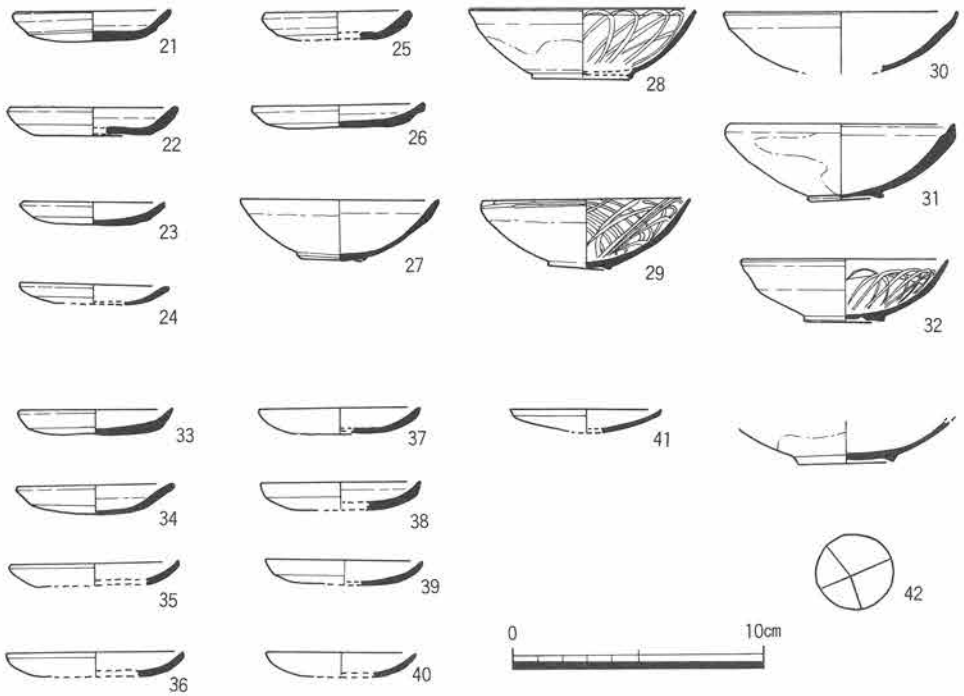
第96図　第７調査区平面図

2．遺　物

ＳＤ01（第97図～第101図）

土師質土器皿（21～26、33～41、43～56、62～69）

（21）～（26）は比較的平担は不調整の底部から斜めに立ち上がる口縁部を持つものである。いずれも、体部の下半辺りまでを一度だけ横ナデを施している。口縁端部は稜を持つ。（21）及び（26）はやや強い横ナデにより段を持っている。全て⑦層から出土している。（33）と（38）は平担な不調整の底部から屈曲させるように立ち上がりやや尖る端部を有する。体部中程までを一度だけ横ナデを施す。（34）はやや丸みを持った底部から外反するようにのびる口縁部を持ち端部を丸く収めるものである。体部下半まで一度だけ横ナデを施す。（37）（39）（40）やや丸い底部から内湾するように立ち上がる口縁部をもつもので端部を丸く収める。体部中程までを一度だけ横ナデを施す。（35）（36）（41）は平担な底部から斜め上方に立ち上がらせる口縁部を持つもので端部に面を持つ。口縁端部だけに横ナデを施している。全て②層から出土している。（43）～（46）は平担な底部から斜め上方に外反しながら立ち上がら口縁部を持つもので端部に稜を持つ。体部下半近くまでに強い横ナデを一度だけ施す。（47）はやや尖底ぎみの底部から屈曲するように短



第97図　ＳＤ－１　②層出土遺物実測図

く立ち上がる口縁部を持つもので、器高は低く器壁は薄い。体部中程までを二度横ナデを施す。（48）はやや尖りぎみの底から斜め上方に立ち上がる口縁部を持つものである。体部下半近くまでを二度横ナデを施す。（49）（55）（56）は平担な底部からやや内湾するように立ち上がる口縁部を持ち端部を丸く収めるものである。体部下半近くまでを一度横ナデを施す。（50）（54）は丸みを帯びた底部から斜め上方にのびる口縁部を持つもので端部を丸く収める。体部中程を一度だけ横ナデを施す。（51）（52）（53）は平担な底部から屈曲するように斜め上方に立ち上がる口縁部をもつもので端部に稜を持つ。体部下半近くまでを一度だけ横ナデする。（62）～（69）はやや丸みを帯びた底部から内湾するように口縁部が立ち上がるもので端部をやや尖らせる。体部下半近くまでを一度だけ横ナデを施す。をいずれも④、⑤層から出土している。

黒色化土師質土器椀（28～32、42、57～61、70～77）

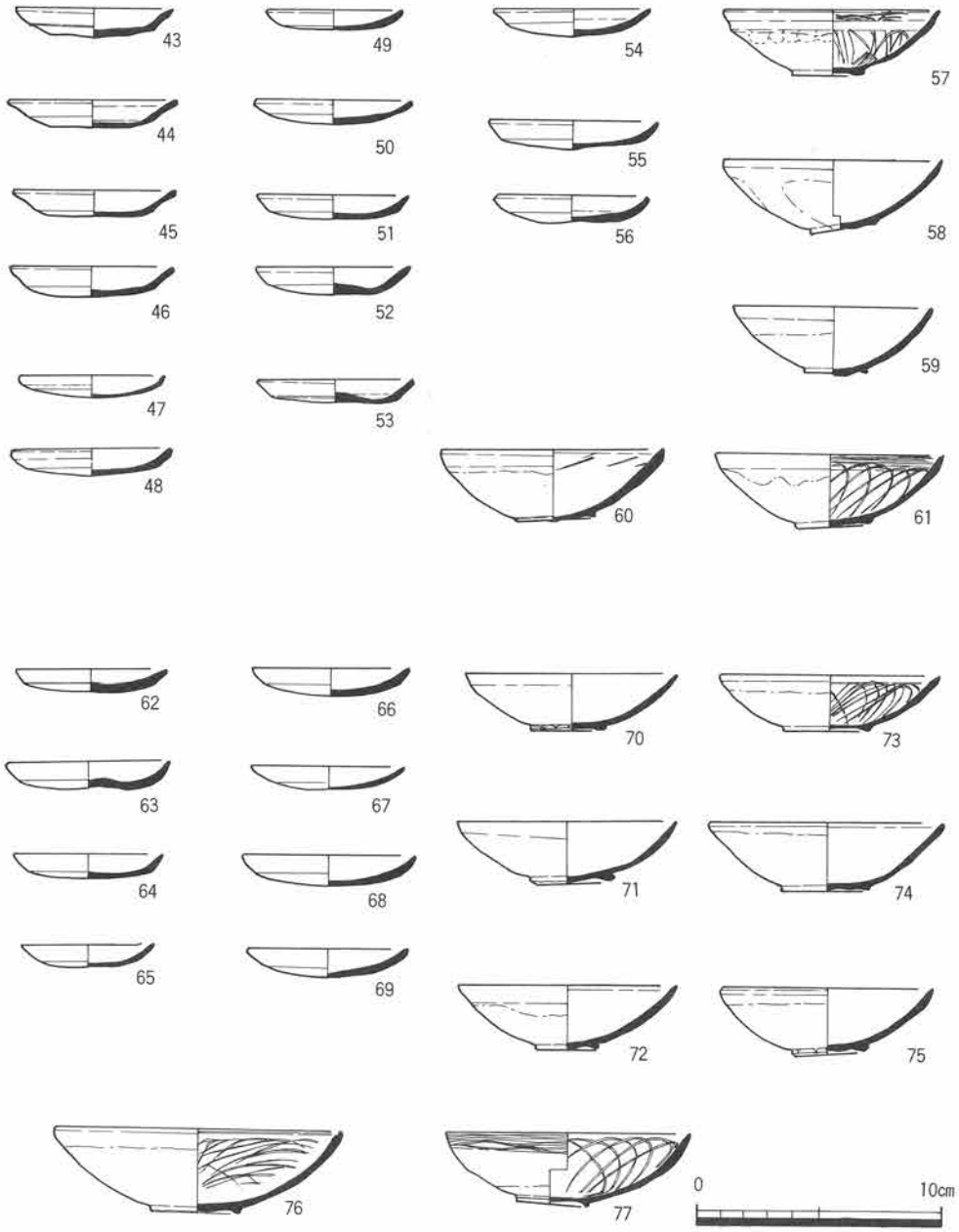
（28）～（32）、（57）～（61）いずれも丸い底部から内湾するように斜め上方に立ち上がる口縁部を持つもので、口縁端部がヘラ切りによって屈曲するように真っすぐに立ち上がる。外面は口縁部だけを一度横ナデしたのち端部を篦ミガキを施す。内面は見込み中央を中心とした花弁状のら旋のミガキを施している。高台は低い断面三角形の形ばかりのものを貼り付けている。内面全体と外面口縁部から体部の一部にかけてカーボンが吸着させてある。（42）の底部には十字の篦記号が認められた。（76）～（77）上記のものより器高の低いもので時期が下がると考えられるものである。小さく丸い底部から低く内湾し口縁端部を屈曲させるように立ちあがらせるものである。内面は見込みを中心とする花弁状らの旋のミガキを施している。外面は口縁部を横ナデしたのち篦ミガキを施している。いずれも内面全体と外面の口縁部から体部にかけてカーボンが吸着させてある。

土師質土器釜（89）

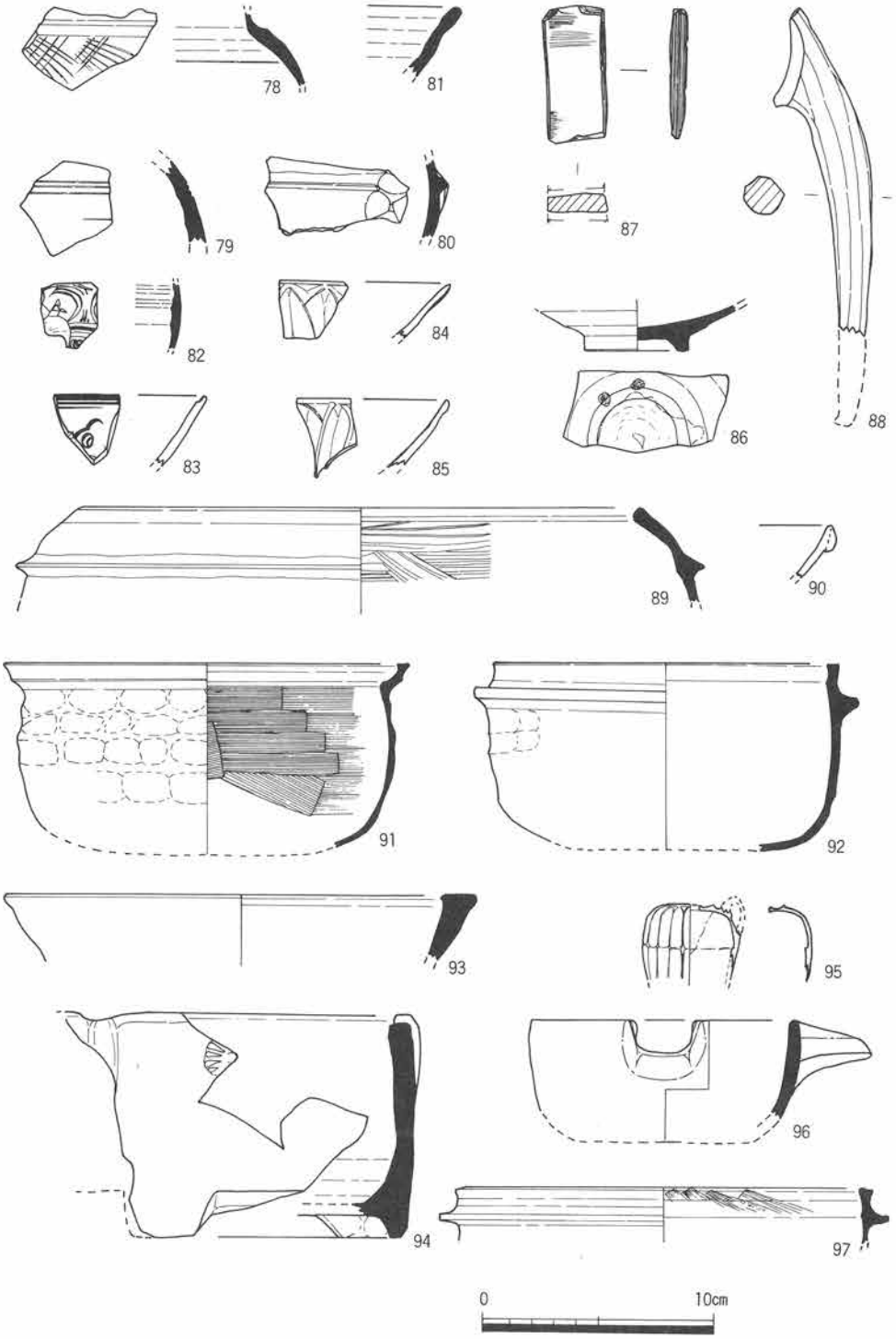
端部に面を持ち内傾する口縁部をもつもので小さな断面三角形の鍔を貼り付けている。外面口縁部を横ナデを施している。内面は荒いハケで調整している。色調は暗茶褐色を呈している。胎土は粗く多量の砂粒を含んでいる。

土師質土器片口鉢（96）

底部は欠失しているが、口縁部が体部から真っすぐに立ち上がり端部を丸く収める鉢である。口縁の一部を切りこみ凹字状の片口をつけている。色調は暗茶褐色を呈している。胎土は粗く砂粒を多く含んでいる。なお、このような形態の土器は現在のところ認められない。可能性として常滑の片口鉢を模したものとも考えられる。



第98図　ＳＤ－１④層⑤層出土遺物実測図



第99図　ＳＤ－１出土遺物実測図

土師質土器火舎（93）

上部に幅広い面を持つ肥厚した火舎の口縁部である。端部は内面にむかってつまみ出すしている。胎土は粒子の粗い砂粒を多量に含み黒色と淡褐色のサンド状になっていた。

瓦質土器釜（92、97）

平らな底部から真っすぐに立ち上がる体部からそのまま口縁部を形成するものである。口縁部は強い横ナデを施されている。端部には面を持たせているが、（92）は内面をつまみ出し（97）は外面をつまみだしている。外面口縁部直下にはいずれも真っすぐに横に張りだした断面台形状の鍔を貼り付けている。鍔下の体部は指頭圧で成形されている。内面は細かなハケで調整されている。いずれも全体に作りが良く、色調は暗灰色を呈し、胎土は細かい。搬入品と考えられる。

瓦質土器鍋（91）

平担な底部からやや湾曲するように立ち上がる体部から、屈曲させて受口状の口縁部をつまみだすものである。口縁部は横ナデが施されている。体部外面は指頭圧により成形されている。内面は横方向のハケが施されている。全体に作りが良く、色調は白褐色を呈し胎土は細かくしまっている。搬入品と考えられる。

瓦質土器火鉢（94）

平担な底部から真っすぐに体部が立ち上がり口縁部を丸く収めるものである。口縁部は６ないし８稜の輪花状になるものと考えられる。また、底部には板状の３脚がつくものと考えられる。体部には菊花のスタンプ捺印文様が認められる。色調は淡白灰色を呈する。

東播系中世須恵器こね鉢（98～101）

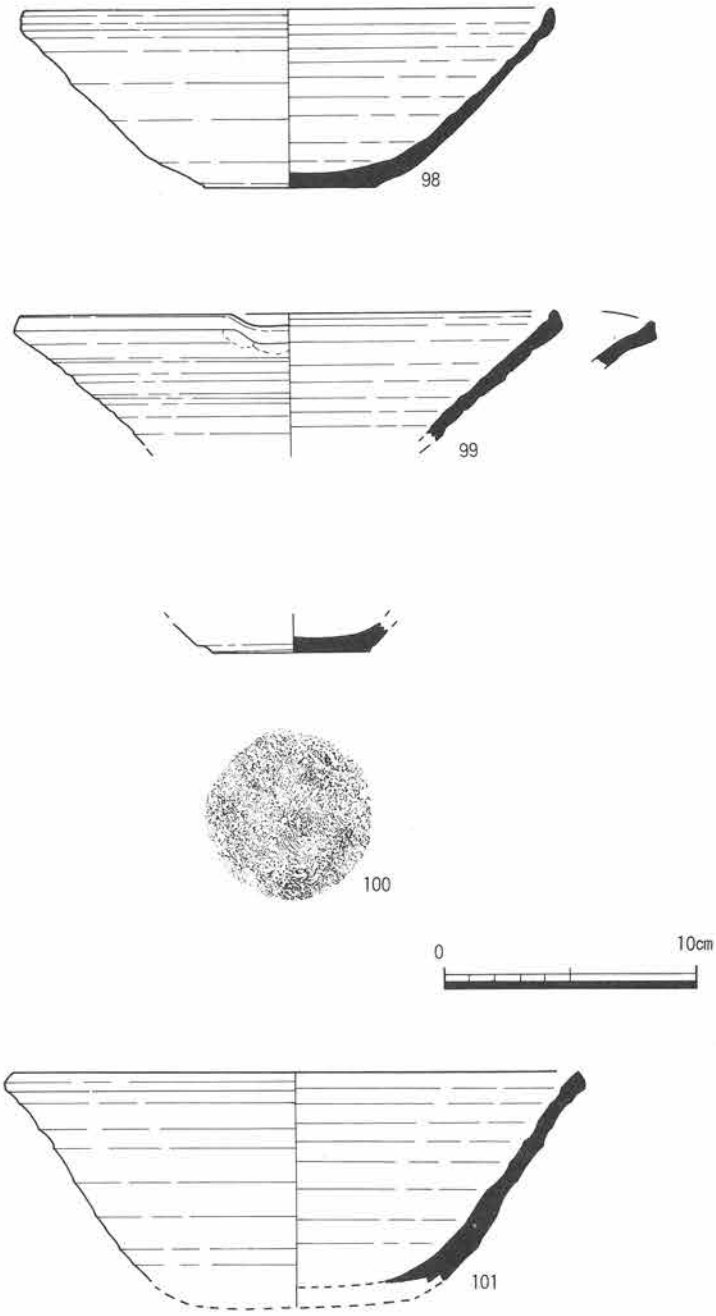
糸切りの小さな底部から体部を斜め上方にたちあがらせるものである。口縁端部は、（98）（99）とも内側にやや折り曲げ丸く収めるもので、（101）は端部を外方にややつまみだすものである。いずれもロクロによる横ナデにより成形されており段を有する。

産地不明中世須恵器系陶器甕（78）

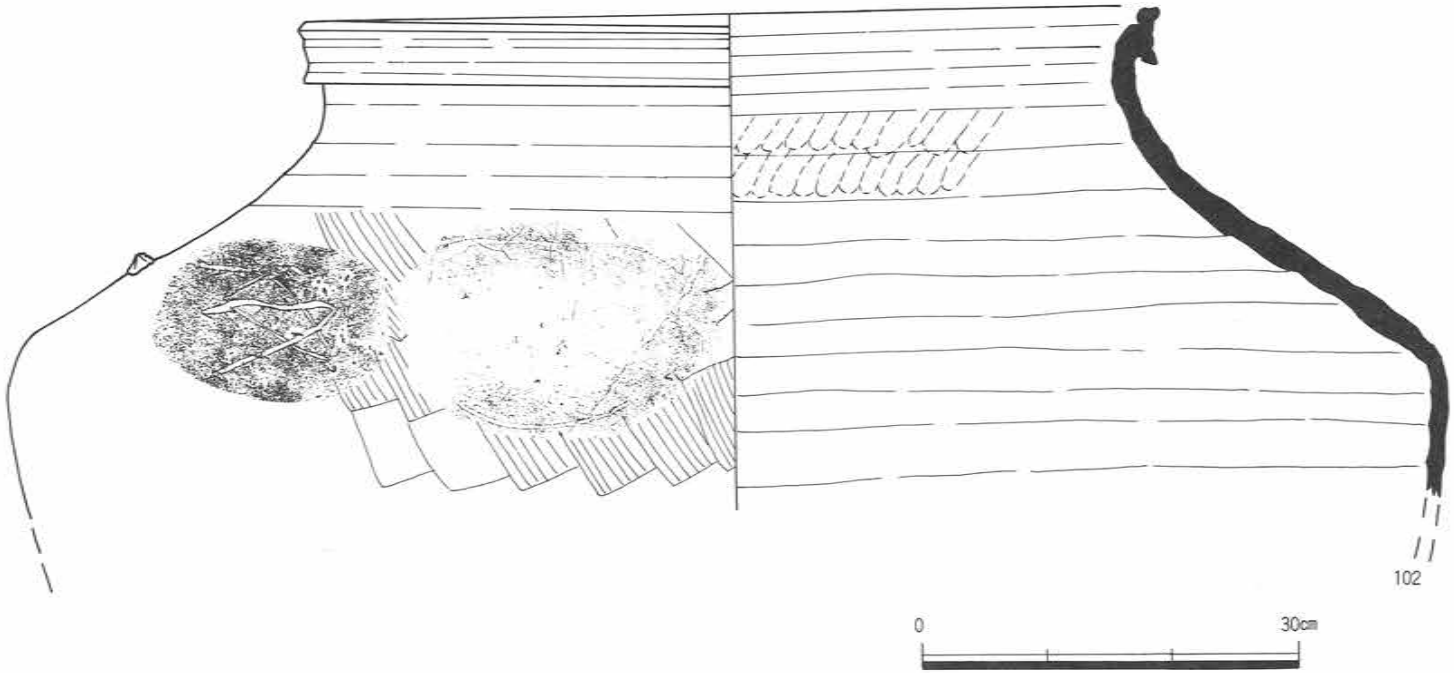
甕の頸部と考えられる。頸部は段を有するように強い横ナデを施している。体部は浅く鋭い目を持つ源体によって交差するようにタタキが施されている。色調は暗灰色を呈する胎土は細かく緻密である。

産地不明中世須恵器系陶器壺（80）

広口壺の肩に巡るタガの一部と考えられる。指圧により貼り付けられたつまみが認められる。三木窯の可能性がある。



第100図　ＳＤ－１出土遺物実測図



第101図　ＳＤ－１出土遺物実測図

山茶碗系こね鉢（81）

斜めに立ち上がる口縁部の一部で口縁端部を丸く収めるものである。ロクロによる横ナデによってできた段を強く有する。色調は暗灰色を呈する。胎土は粗く石粒を多く含む。

陶　器

瀬戸三筋壺（79）

体部の破片であるが肩部に三条の沈線が廻る。外面は淡緑色の袖によって施袖されている。地は淡白灰色を呈し、胎土は緻密で堅い。

常滑甕（第101図）（102）

張りだした肩部から内傾するように立ち上がる頸部から、受口状に折り曲げた玉縁状の口縁を有するものである。体部は幅のある粘土紐の輪積みによって成形され内面に継ぎ目と指圧による調整痕が認められる。外面は肩部以下を荒いハケが施されており、頸部より口縁部には幅の広い横ナデが施されている。また、体部外面には「つ」と花印状の刻印が認められる。14世紀後半のものと考えられる。

磁　器

白磁碗（86、90）

玉縁状口縁を持つ白磁の碗である。胎土白灰色を呈し、袖には貫入が多い。

白磁水滴（95）

菊花弁状文様の合子を二つ繋ぎあわせて作られている。天頂部に孔を有する。また、一方に把手がつく。

青磁碗（83～85）

（83）は龍泉窯系の劃花紋の碗の口縁部である。地は緑灰色を呈し、内外面ともに濃緑色の袖がかかっている。〔太宰府Ⅰ－4－a〕に相当すると考えられる。(84、85)は龍泉窯系の蓮弁紋の碗の口縁部である。地は白灰色を呈し、内外面ともに緑色の袖がかかっている。〔太宰府Ⅰ－5－b〕に相当すると考えられる。

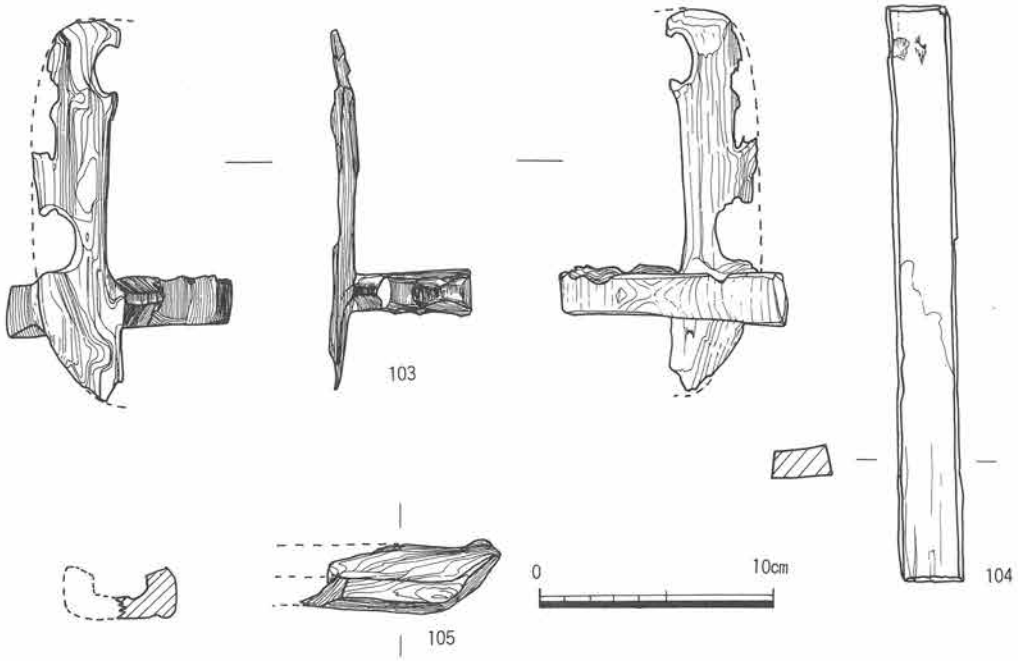
青白磁梅瓶（82）

梅瓶の体部である。素地は白色を呈し、体部外面には青白色の袖がかかっている。地には唐草紋の一部が認められる。

石製品

砥石（87）

長方形を呈し、四面を工具で切断されている。暗灰色を呈する粘板岩系のものである。



第102図　ＳＤ－１出土木製品実測図

木製品（第102図）

下駄（103）

腐食が激しいが小判形を呈するもので先がやや平たいものである。歯は削り出しである

船形代（105）

船形代の一部と考えられる。凹字状の断面を持つようにくり抜かれており、先を削りだしてへさきをあらわしている。

用途不明板状（104）

長方形の板材である。四面を切断して成形している。柾目材である。

鉄製品（第104図）

釘（112）

現長約６㎝を計るもので、厚みは約0.5㎝を計る。真ん中でやや細くなり頭が大きいものである。断面方形を呈する。

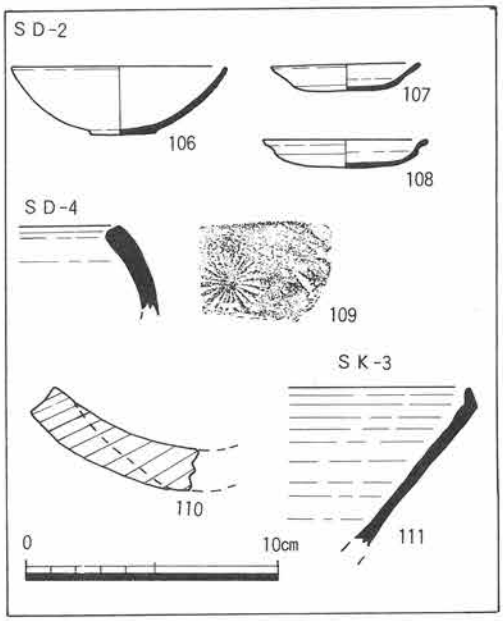
ノミ状工具（113）

現長さ約５㎝を計るもので、厚みは約0.5㎝を計る。柄の部分は差し込みのための段を有する。先は両側から平担に尖らせている。断面方形を呈する。

ＳＤ02（第103図）

土師質土器皿（107、108）

（107)は不調整の平担な底部から外反するように斜め上方に立ち上がる口縁部を持つもので、口縁端部を丸く収める。体部下半近くまでを一度だけ横ナデする。(108）は不調整の平担な底部から内湾するように立ち上がった体部が一度屈曲して外方につまみだされる口縁部持つものである。端部は丸く収める。体部中程までを強い横ナデを一度だけ施している。



第103図　ＳＤ，ＳＫ出土遺物実測図

黒色化土師質土器碗（106）

丸い底部からやや内湾するように斜め上方に立ち上がる口縁部を持つものである。口縁端部は屈曲せずそのまま丸く収める。底部には断面三角形の小さな形ばかりの高台が貼り付けられている。内面は磨滅しているが見込みを中心とした花弁状のら旋ミガキが施されていたと考えられる。内面全体と外面の口縁部にカーボンが吸着させている。

鉄製品（第104図）

釘（114）

長さ４㎝以上を計る鉄製の釘である。現形状はＳ字に曲がっている。釘の頭は手の字に曲がっている。

ＳＤ04（第104図）

土師質瓦（110）

表面縄目叩き紋による調整と裏面布目痕が残る平瓦である。途中には桶巻き作りの継ぎ目痕が認められる。

瓦質土器火鉢（109）

平担な底部から内湾する体部を経て内湾する口縁部を形成する桶状の火鉢の口縁部である。口縁端部は内傾して内側に面を持つ。外部口縁部直下に22弁の菊花のスタンプ捺印紋が付けられている。

ＳＫ01（第104図）

鉄製品

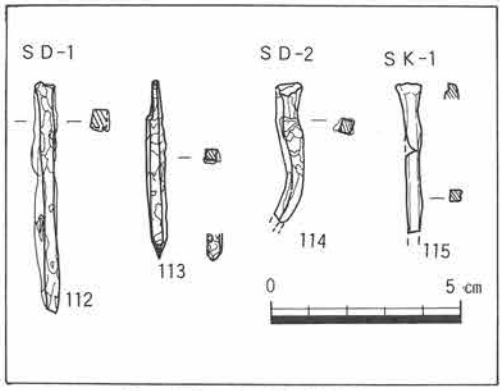
釘（115）

長さ４cm以上を計る鉄製の釘である。頭を手の字状に曲げやや大きくなっている。

ＳＫ03（第103図）

東播系中世須恵器こね鉢（111）

体部が斜め上方に立ち上がり、そこから屈曲させるように口縁部を内側につまみだすものである。体部はロクロ横ナデによる成形により多くの段を有する。



第104図　出土鉄器実測図

ＳＰ01（第105図）

土師質土器皿（１～７）

（１）は平坦な底部から屈曲させるように短く上方に立ち上がる口縁部を持つもので、端部をやや尖らせるものである。底部近くまでを一度だけ横ナデを施している。（２、３）はやや丸い底部から内湾するように立ち上がる口縁部を丸く収めるものである。体部の中程までを一度だけ横ナデを施している。（４）（５）（７）はやや丸い底部から内湾するように立ち上がった口縁部から口縁端部を鋭く内側に屈曲させるものである。口縁端部だけを一度だけ横ナデする。（６）は丸い底部から内湾するように立ち上がる口縁部を形成し端部を丸く収めるものである。体部の中程までを一度だけ横ナデする。

石製品

砥石（８）

長方形を呈する砥石である。短辺の面端は欠失しているが、長辺は両方ともに砥石として使用されている。材質は花崗岩である。

ＳＰ02（第105図）

土師質土器皿（10）

やや尖った底部から屈曲するように短い口縁部が真っすぐに立ち上がるもので端部をやや尖らせている。口縁部だけを一度横ナデしている。

黒色化土師質土器碗（11）

丸い底部から内湾するように立ち上がった体部から肥厚するように口縁部をつまみだし

ているもので、端部をやや屈曲させ丸く収めるものである。底部には形骸化した断面三角形の高台を貼り付けている。内面には見込み中央を中心とする花弁状ら旋紋のミガキを施している。内面と外面の口縁部にカーボンを吸着させている。

ＳＰ03（第105図）

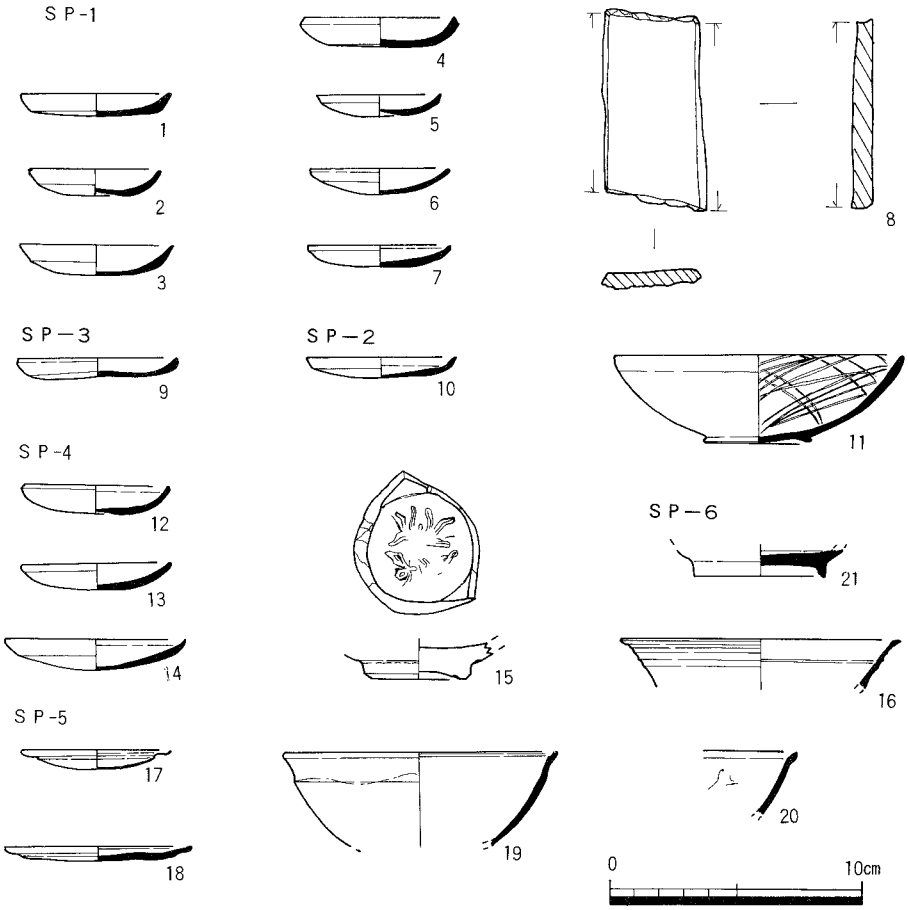
土師質土器皿（９）

波打つ底部から屈曲するように短い口縁部が立ち上がるもので端部をやや尖らせるもので器高の低いものである。底部近くまでを一度だけ横ナデを施している。

ＳＰ04（第105図）

土師質土器碗（12～14）

（12）、（13）はやや丸い底部から内湾するように立ち上がり口縁端部を屈曲させるも



第105図　ＳＰ出土遺物実測図

のである。口縁端部だけを一度横ナデする。（14）は尖った底部から斜めに立ち上がった体部から屈曲させるように短い口縁部を立ちあがらせるものである。口縁部だけを一度横ナデする。

青　磁

青磁碗（15）

龍泉窯系の青磁碗の底部である。高台は削りだしである。高台の内面まで全体に暗緑灰色の袖がかかっている。胎土は密で粒子細かく、地は灰白色を呈している。〔太宰府Ⅰ－5－C〕に相当すると考えられる。

白磁碗（16）

斜め上方に真っすぐに立ち上がり端部を外方につまみ出すものである。体部は強いヘラケズリにより成形している。内面に一条の沈線が廻る。地は白灰色を呈し、白緑色の袖がかかっている。胎土は堅く緻密で黒色の粒子を多量に含んでいた。〔太宰府Ⅵ－1－a〕に相当すると考えられる。一部ＳＫ04出土のものと接合している。

ＳＰ05（第105図）

土師質土器皿（17、18）

両者ともにいわゆる手の字の皿であるが、（17）は丸い底部から２段に屈曲する口縁部を保つもので端部を丸く収める。口縁部のみを横ナデによって調整されている。器壁は非常に薄く、胎土は非常に細かい。色調は淡褐色を呈する。（18）は平坦な底部から鈍く２段に屈曲するもので端部をわずかに内におり曲げる。器高は低く器壁は厚い。

黒色化土師質土器碗（19）

大きく内湾するようにたちあがり一度内側に屈曲させすぐに外側につまみだす。口縁部を強く横ナデしている。内面と外面の口縁部にカーボンを吸着させている。

軟質緑袖碗（20）

内湾する体部から口縁端部を屈曲させ外反させるものである。地は淡赤褐色を呈し、胎土は細かく脆い。全体に暗濃緑色の袖がかかっていた。内外側には毛彫りの陰刻が認められる。

ＳＰ06（第105図）

緑袖碗（21）

碗の底部である。高台内面にトチンのあとがあり、段を有する。地は暗灰色を呈し、暗濃緑色の袖がかかっていた。近江産のものと考えられる。

Ⅲ小結

ここで第７調査区の調査で得られた成果を簡単にまとめる。まず、本調査区においては古墳時代の遺構・遺物は認められないことがあげられる。この調査区における一番古い遺構と遺物はＳＰ05、06に認められる11世紀代に遡るものであった。これにより横江遺跡における古墳時代以降の集落は、この平安時代後期に始まることが明らかとやなった。しかしながら、これらの時期の遺構は遺跡のなかにおいても極わずかであり、このことからもまだこの時期においては集落は散村的な形態にあったことが考えられる。この調査区における主要な遺構は建物の敷地を区画するように計画し配された区画溝とそれにともなう建物跡である。横江遺跡の中世集落はこの集落形態の時期を最後に廃絶したものと考えられるが、この調査区のＳＤ01にはおおよそ14世紀中ごろから後半位の遺物を検出している。区画内の建物についてもこの時期に伴うものがあると考えられるが、それ以外にもＳＢ01に方向を異にする建物跡やＳＤ01によって切られるようにして建物跡とそれに伴うＬ字に曲がる雨落ち溝等が検出されており、これらの遺物から判断して13世紀代に遡る集落跡が存在していたと考えられる。これらのことからも横江遺跡の中世集落の成立は数度に渡る活期があったものと考えられる。また、これらの区画溝はこの調査区からさらに四方に伸びて区画をなしていることが推察され計画によって作られた大集落の一角であることが考えられる。この溝は飛び渡るには少しばかり距離があるが、溝には橋を溝築した跡は検出されていない。調査中にはこれらの区画溝が集落内を縦横に走る道としてとらえることもできるのではないかとも考えられたが、溝の傾斜や鉄分の沈殿状況から察しても集落のおお外を流れる河川にとりついていたことは間違いがなく、水路の様に水を導きいれて流し、区画溝を防御的役目もはたしていたと考えられる。よって、橋は簡易に板橋がかけられていたのかもしれない。よって、これらの構造はいずれの区画に至るにも他の敷地を幾つもとうらずばいけないような構造にあり、区画溝によって区切られた集落形態の成立を考えるうえで今後大きな疑問がのこるところであろう。（木戸）

第８節　第８調査区

第１調査区の北側約1500㎡を対象とした。地山は大部分が暗褐色砂礫土であるが、西辺のみ黄褐色粘質土である。遺構は古墳時代と中世の建物期のものがあるが、遺構が希薄な調査区中央部を境に、西側が古墳時代の遺構・東側が中世の遺構に分かれる。遺構の埋土も古墳時代のものが黒色粘質土、中世のものが灰色土と褐色土に分けることができる。

Ⅰ　古墳時代の遺構と遺物

遺構

掘立柱建物（ＳＢ－１～９）

ＳＢ－１

調査区西側で検出した１間×１間の建物である。主軸方位はＮ－25°－Ｅを示し、柱間距離は2.2～2.5ｍを測る。柱穴は長径40㎝の楕円形もしくは直径50㎝の円形を呈す。柱穴内より少量の土師器片の出土があった。

ＳＢ－２（第107図）

調査区南端で検出した１間×１間の建物である。主軸方位はＮ－23°－Ｗを示し、柱間距離は３ｍ前後を測る。柱穴は長径30㎝の隋円形もしくは直径30～40㎝の円形を呈す。柱穴から少量の土師器片の出土があったが年代は不明である。竪穴住居の可能性もある。

ＳＢ－３（第107図）

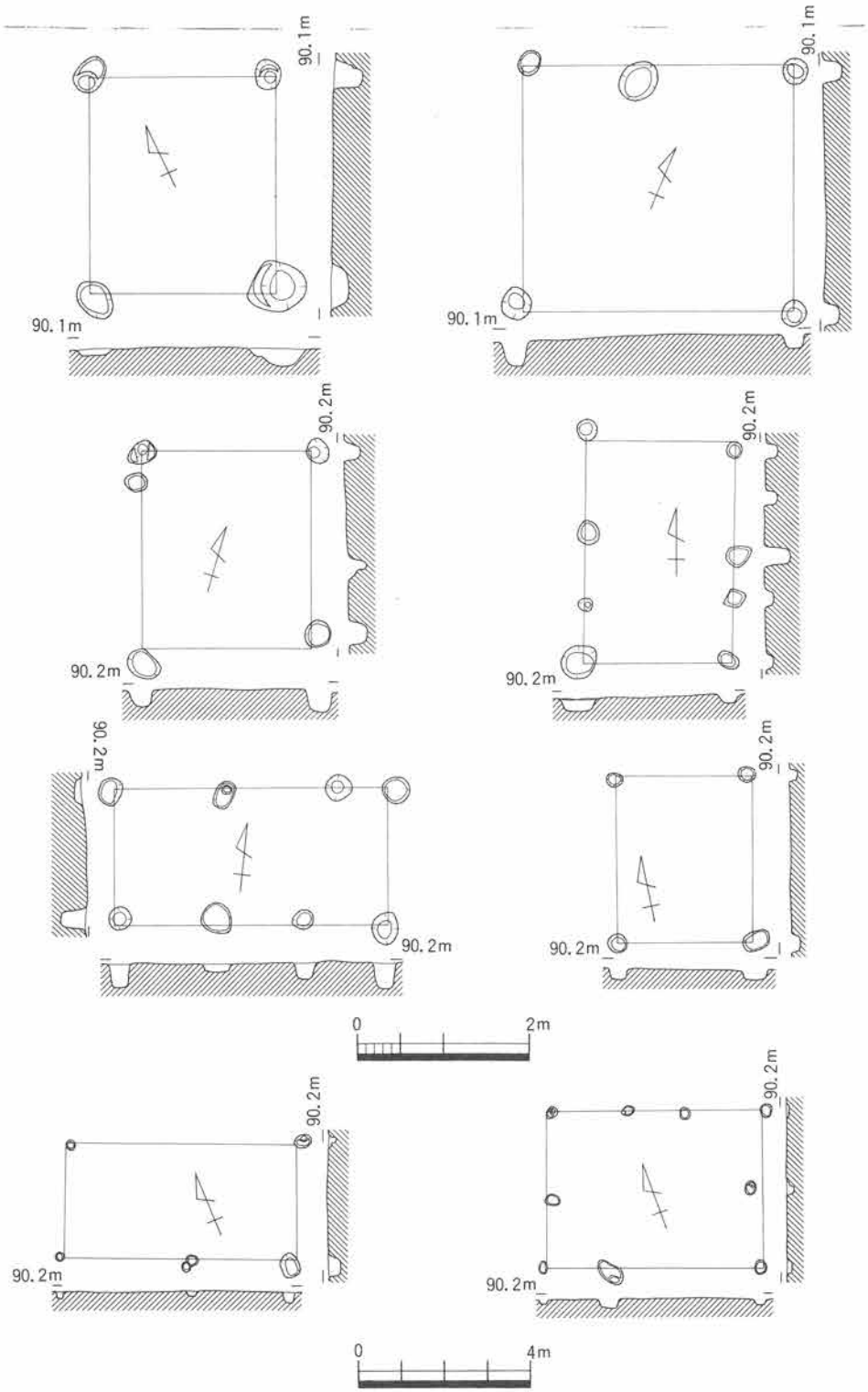
調査区東側で検出した１間×１間の建物である。柱穴には切合い関係がみられ建て変えが想定できる。主軸方位はＮ－17°－Ｗ、柱間距離は４ｍを測る。柱穴は長径70～80㎝の隋円形や直径60㎝の円形を呈す。壁が削平され床面のみが残存した竪穴住居の可能性がある。

ＳＢ－４（第107図）

ＳＢ－３の北東で検出した３間×１間の南北棟建物である。主軸方位はほぼ磁北をさし。柱間距離は桁行70㎝～１ｍ・梁行1.7ｍを測る。遺物は柱穴内から土師器片が少量出土しただけで、建物の年代は不明である。

ＳＢ－５（第107図）

調査区西辺で検出した３間×１間の東西棟建物で、主軸方位はＮ－83°－Ｅを示し柱間距離は桁行1.2ｍ・梁行1.5ｍを測る。柱穴は長辺30㎝の長方形や直径20～30㎝の円形を呈す。



第106図　建物平面図（古墳時代）

ＳＢ－６（第107図）

ＳＢ－３の北西に位置する１間×１間の小型の建物である。主軸方位はＮ－12°－Ｅを示し、柱間距離は桁行1.9ｍ・梁行1.6ｍを測る。柱穴は直径20cmの円形もしくは長径30cmの隋円形を呈し、深さは10～15cm程度である。

ＳＢ－７（第107図）

ＳＢ－５の南で検出した３間×２間の建物である。主軸方位はＮ－68°－Ｅを示し、柱間距離は桁行1.5～1.8ｍ・梁行1.8ｍを測る。柱穴は長径30～60cmの隋円形で構成されている。遺物は柱穴埋土中より土師器の小破片が少量出土した程度である。

ＳＢ－８（第107図）

調査区ほぼ中央で検出した２間×１間の建物である。主軸方位はＮ－68°－Ｗを示し、柱間距離は桁行2.5～2.7ｍ・梁行2.7ｍを測る。柱穴は直径20cmの円形もしくは長径40～60cmの隋円形を呈す。

ＳＢ－９

ＳＢ－６の北に位置する４間×２間以上の大型の建物で、北側を旧河道に切られている。主軸方位はほぼ磁北にとり、柱間距離は３ｍを測る。柱穴は直径40cmの円形・60～70cmの隋円形を呈す。

井戸（ＳＥ－１～３）

ＳＥ－１（第108図）

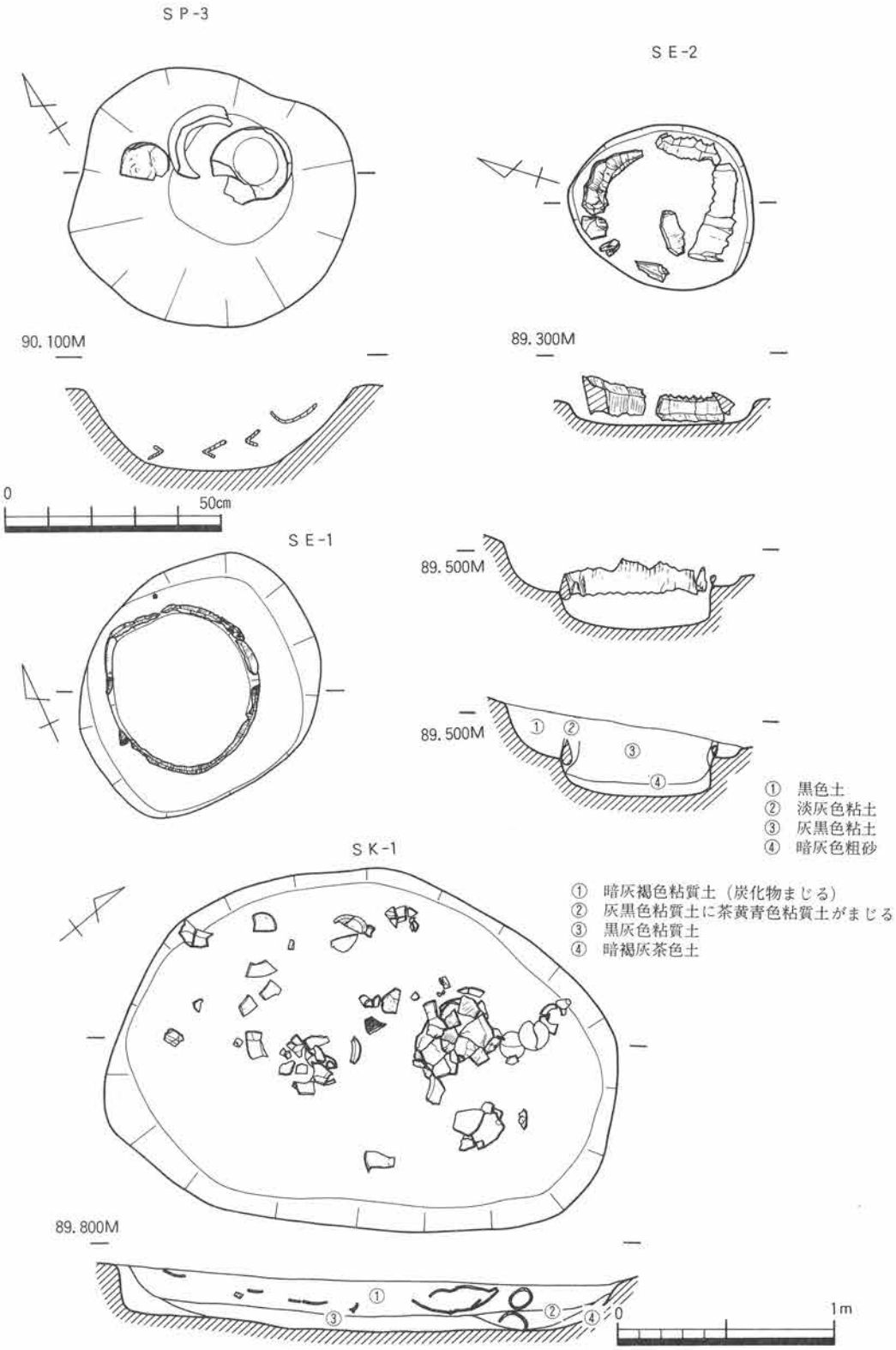
旧河道底面で検出した。掘方は長径1.2ｍ、短径１ｍを呈し、中央に直径80cmのくり抜きの井筒が井戸枠としてすえられていた。掘方の埋土は黒色粘質土の単層で、井戸枠内は灰黒色粘質土と暗灰色砂土の上下二層に分かれる。又井戸枠部分は木製の腐食痕が観察できた。遺物は井戸枠内下層から５Ｃ末頃の須恵器高杯（第112図１）が出土した。

ＳＥ－２（第108図）

ＳＥ－１の北で検出した。掘方は長径90cm、短径70cmの卵形を呈し、ＳＥ－１同様くり抜きの井筒が井戸枠としてすえられていた。深さは20cmと浅く、かなりの削平をうけている。埋土は黒色粘質土の単層である。

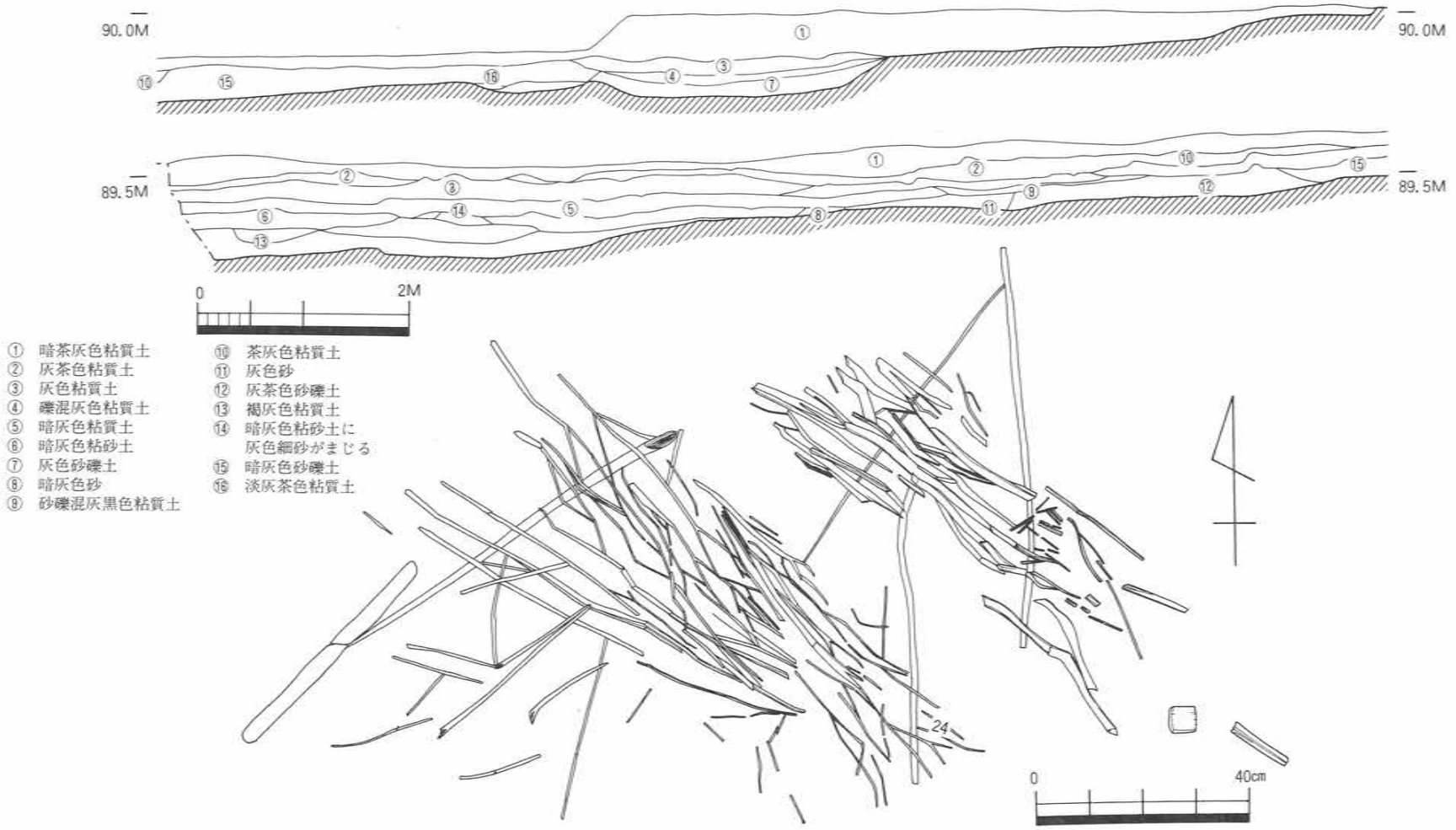
ＳＥ－３

調査区西辺でＳＥ－１・２同様旧河道の底面で検出した。掘方は直径1.2ｍの円形を呈しほぼ中央に井戸枠が埋設されていたとみられる直径50cmの円形の穴が確認できた。埋土は暗灰色粘質土の単層である。



第107図　ＳＰ－３，ＳＥ－１・２，ＳＫ－１遺物出土状況図

第108図　第８調査区遺構平面図



第109図　旧河道断面図，垣状遺構出土状況図

ＳＥ－４

ＳＥ－１の西約７ｍの位置で検出した。掘方は長径1.5ｍ・短径1.3ｍの隋円形を呈する。枠等の施設は検出しなかった。深さは30cmと浅く他の井戸同様かなりの削平を受けていると考えられる。埋土は暗灰色粘質土の単層で須恵器杯身、蓋（第112図５・６）が出土した。

竪穴住居（ＳＨ－１）

ＳＢ－８の西に隣接して検出した。北側半分を旧河道に削られているが、一辺４ｍの方形竪穴住居とみられられる。埋土は黒褐色粘質土の単層である。埋土中から６Ｃ初頃とみられる須恵器杯身と有蓋・無蓋高杯（第121図２～４）が出土した。

土壙（ＳＫ－１）

ＳＫ－１（第107図）

旧河道肩部の平担部分で検出した。長径2.4ｍ・短径1.7ｍの隋円形を呈する土壙である。深さは25cm程で底面はほぼ平担である。遺物は６Ｃ初頭とみられる土師器甕・高杯、須恵器杯身・蓋・甕（第110図）と多量の製塩土器（第110図）が一括投棄の状況で出土した。

遺　物

ＳＥ－１（第112図１）

１は有蓋高杯である。立ち上がりは内傾し、受部は短く外方へのびる。脚部はハ字に大きく開き、器高はやや底い。脚部の透しは円孔を三方に穿つ。杯部のヘラ削りは⅓程度と狭い。中村Ⅰ型式[注1]４段階に相当する。

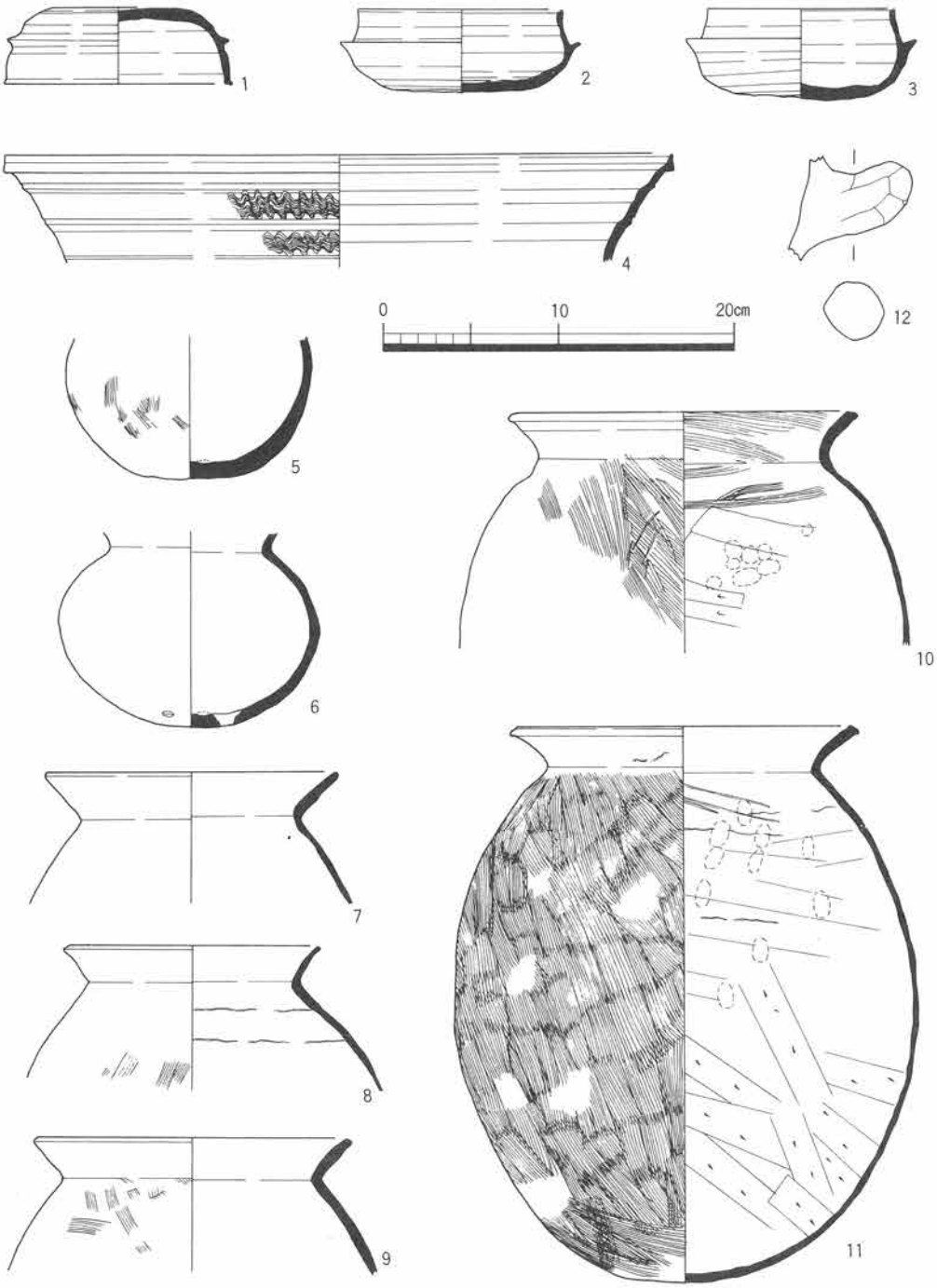
ＳＥ－４（第112図５・６）

いずれも須恵器で５は杯蓋・６は杯身である。５はやや扁平な器形で、天井部と口縁部を界する稜は短く純い。口縁部はやや内弯気味に下り、端部は内傾する稜を有す。６は立ち上がりが内傾し、端部は丸くおさまる。中村Ⅱ型式１段階に相当すると考える。

ＳＫ－１（第110図・111図）

須恵器（第110図１～４）

１は杯蓋で、天井部は平担で稜は短く純い。口縁部はやや内弯気味に下り、端部はわずかに凹面をなして内傾する。２・３は杯身である。内傾する立上がりは比較的高く端部は内傾する明瞭な段を有す。受部は短く外上方へのび端部は丸い。４は甕の口縁部である。口縁部は外反し、端部を上方へ屈曲させている。外面には櫛描波状文が２段施されている。文様帯を界する稜はやや純く、その上部に沈線がめぐる。中村Ⅰ型式５段階に相当する。



第110図　ＳＫ－１出土遺物(1)

土師器（第110図５～12）

５・６は直口壺の体部である。５は底部に穿穴がみられる。７～11は甕である。全形がうかがえる10・11は比較的長胴化が進んでおり、11は体部が卵型を呈する。口縁部は外反し、端部は沈線状の凹みを有す。体部外面ハケ、内面ヘラ削り、口縁部外面はナデ、内面は10がハケ、11がナデを施す。12は甑の把手とみられる。

製塩土器（第111図）

いずれも破片であり、比較的大きなものを選別、実測した。口縁部の形態は内傾するもの、直立するものがあり、又端部は尖り気味のもの、丸くおさまるものがある。底部の破片は明瞭でないがいずれも丸底を呈すると思われる。口径３～５㎝、最大腹径５～６㎝、器壁２～４㎜を測る画一性の高い土器である。調整はほとんどが内外面ナデを施すが、指頭圧痕が顕著に残る外面に比べて内面は比較的丁寧に仕上げられている。31は唯一外面にタタキが施されていた。胎土は31が砂粒が多くやや粗い他はいずれも精良で、焼成も堅固である。色調は淡灰色と淡黄灰色のものが多いが、火熱のためかピンク色や淡橙色に変色したものもかなりみられた。

ＳＨ－１（第112図２～４）

土師器・須恵器が比較的まとまって出土したが、小破片であるため実測図示できたのは須恵器３点である。２は杯身である。立ち上がりは比較的高く、端部は内傾する段を有する。受部は短く外方へのび端部は丸い。ヘラ削りは約½に施す。３は無蓋高杯の杯部である。内弯する体部から口縁部は外反気味に立ち上がる。体部外面に波状文を施す。４は有蓋高杯である。杯部の形状は３に近以する。脚部はハ字に開き、端部で外方へ屈曲させ、さらに下方にカギ形に曲げる。スカシ窓は三角形のものが三方向に刻まれる。２・４は中村Ⅰ型式５段階、３は中村Ⅰ型式４段階に相当すると考える。

ＳＰ－１（第112図７）

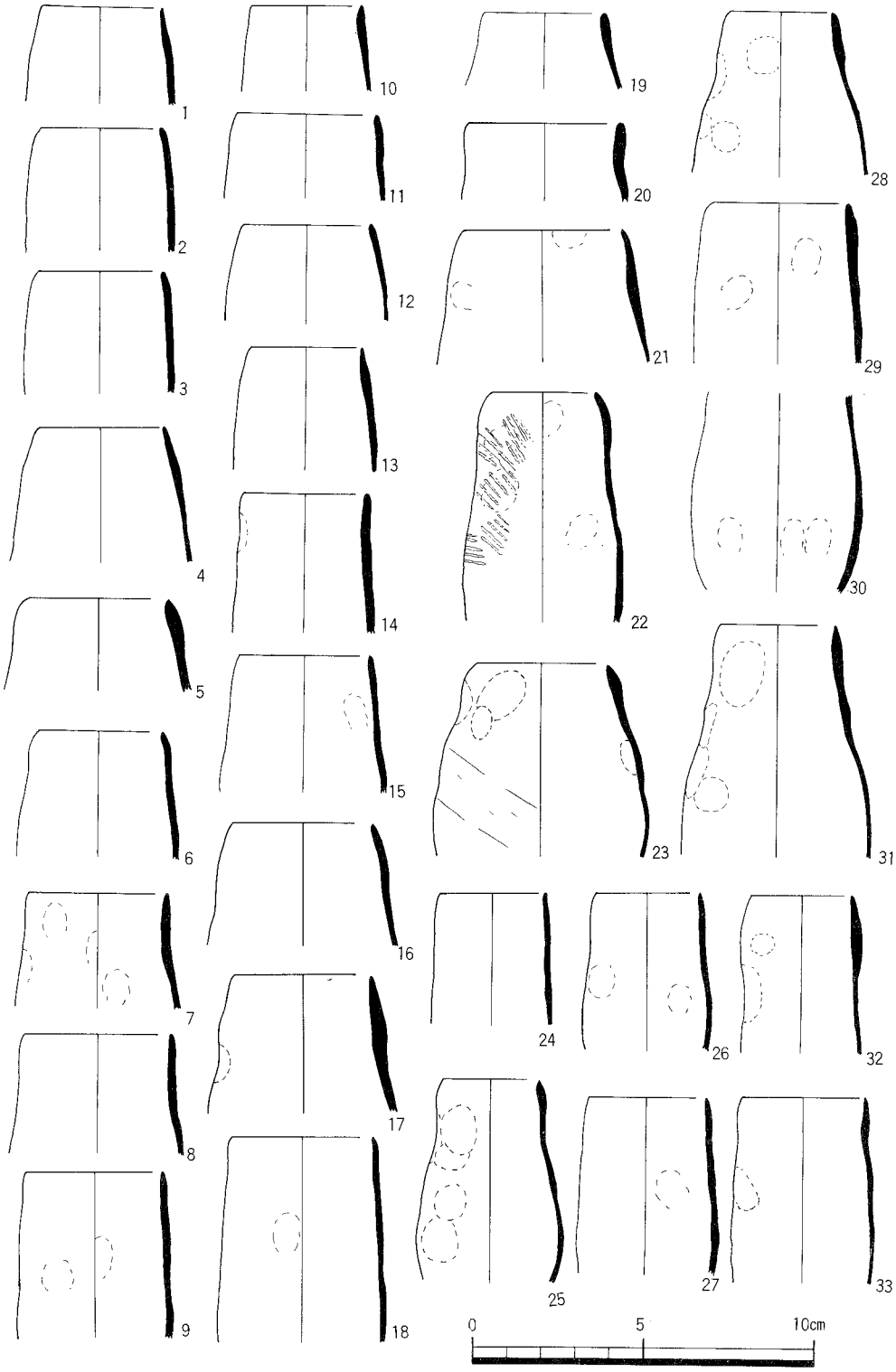
立ち上がりは内傾し、端部に内傾する段を有する須恵器の杯身である。中村Ⅰ型式５段階に相当する。

ＳＰ－２（第112図８）

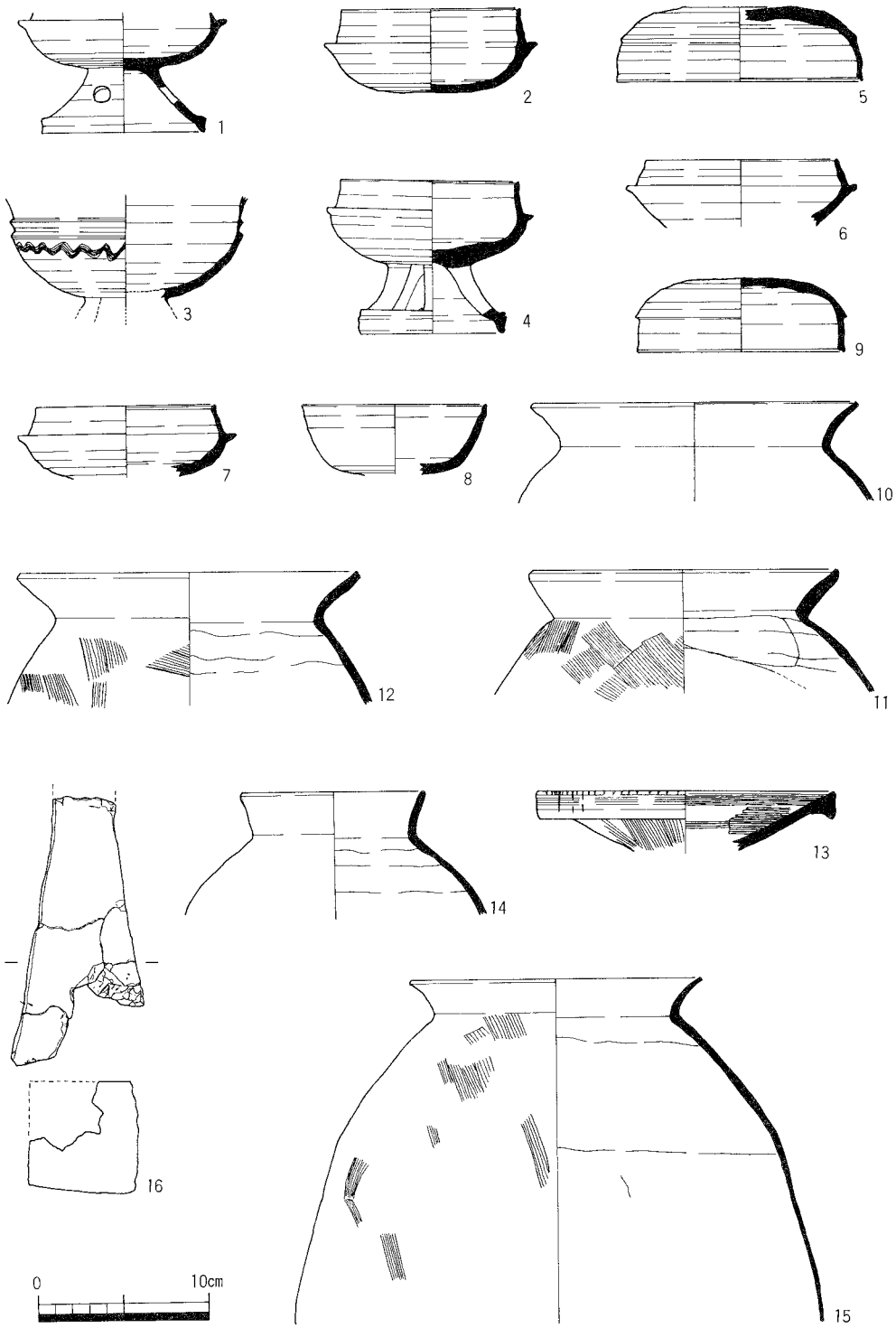
須恵器の無高台の杯身でかる。平担な底部から口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。

ＳＰ－３（第112図９～11）

９は須恵器の杯蓋である。口縁端部は内傾する明瞭な段を有し、稜は短い。器高は口径



第111図　ＳＫ－１出土遺物(2)



第112図　ＳＥ・ＳＨ・ＳＰ出土遺物（古墳時代）

に対して高く、天井部は丸い。天井部約½回転ヘラ削り、その他は回転ナデを施す。中村Ⅰ－5段階に相当する。10・11は口縁部が「く」字に屈曲する甕で、端部は上方へつまみ上げられ尖り気味におわる。10は唐滅のため調整は不明であるが、11は口縁部内外面ナデ体部外面ハケ目、体部内面ヘラ削りを施す。

ＳＰ－４（第112図12）

口縁部が「く」字に屈曲する甕で、端部は沈線状の凹みを有する。体部外面ハケ目内面はナデで仕上げる。

ＳＰ－５（第112図13）

受部がやや内弯気味に外上方へのびる器台で、口縁部に粘土を貼り付け垂下させる。端面に櫛描平行文とヘラ状工具による刻み目を施す。調整は内外面丁寧なヘラ研磨で仕上げる。

ＳＰ－６（第112図14）

口縁部がほぼ直線的に外上方にのびる壺である。調整は器面の磨滅のための不明である。体部内面に粘土接合痕が残る。

ＳＰ－７（第112図15）

長胴型の甕で口縁部は外反気味に立ち上がる。体部外面ハケを施す。

ＳＰ－８（第112図16）

方柱状を呈する土製支脚である。火熱のためか底部が欠落している。色調は淡橙色を呈し、炭化した植物繊維がまじっていた。現存長16cmを計る。

旧河道

調査区北側を現河川に沿って西流する河道である。最大幅10m以上を測る大規模なものである。層位は非常に複雑な堆積を示すが、一応Ⅰ黒灰色粘質土、Ⅱ灰色粘質土・Ⅲ黒色粘質土・Ⅳ暗灰色粘質土・Ⅴ暗褐灰色土・Ⅵ暗灰色粘砂土・Ⅶ暗灰色砂土・Ⅷ灰色砂土・Ⅸ暗褐色土（腐植土）の９層を基本とする。遺物は多量の土器と木製品が出土したが、特にⅢ・Ⅷ層中からの遺物の出土が目立った。

遺　物

(1)黒色粘質土出土土器（第113図～116図）

河道の南西肩部に堆積していた。出土土器は弥生土器・土師器・須恵器がある。

弥生土器

壺（1～3・6・7・9～13・14・16）

1～3・6・7は口縁部が大きく外反し、端部を拡張する広口壺である。1～3は口縁帯に沈線と円形浮文を施す。又1の端部にヘラによる刻みを施す。1・2は搬入品の可能性がある。6・7は口縁部内外面に櫛描波状文、さらに7は外面に円形浮文、端部にヘラによる刻み目を施す。5は東海系のパレス壺の口縁部である。口縁部外面にヘラ描き沈線と棒状浮文を施す。8は短頭直口壺で、体部外面に丁寧なヘラ磨きを施す。9～13・15は長頸壺である。口縁部が外反して端部が垂下するもの（9・10）、口縁部が直線的に上方にのびるもの（11）、口縁部が直線的に外上方にのびるもの（12）、口縁部が短く立ち上がるもの（13・14）がある。13は肩部に円孔状の文様がみられる。16は底部で木葉圧痕が残る。26は受口状口縁壺で、口縁部に刺穴利点文を施す。

甕（41・43～46・52）

41・43～46は受口状口縁甕で、口縁部に刺突列点文と頸部に平行文を施す。52は「く」字に短く屈曲する小型甕である。

鉢（42）

口縁部は短く受口状に立ち上がる。口縁部・頸部に刺突列点文・体部に平行文と刺突列点文を施す。

高杯（60・67・74・79・82・83）

60は杯部がやや深く口縁部は外傾する。脚部は「ハ」字状に開く。67は大きな杯部に円筒状の脚部がつく。口縁は直口する。

土師器

壺（4～7・14・25・27～40・57）

4は口縁部が外反気味に立ち上がり、端部に面をもつ。5は東海系パレス壺の口縁で、口縁帯に沈線と棒状浮文を施す。6・7は口縁部に粘土を貼り付け垂下させ、櫛描波状文や円形浮文で加飾する。7は端部に刻み目を施す。14・27は直口壺である。25は有段口縁に球形の体部を有す。内外面ハケ及びナデで仕上げる。28～40は小型丸底壺である扁球状の体部に直線的に立ち上がる口縁部がつく。35は脚台が付く。

甕（47～51・53）

47～51は受口状口縁甕である。47は肩部に直線文を施す。53・56は「く」字状口縁甕である。53は端部内面が肥厚する。

鉢（23・24）

23は口縁部・体部が直線的に外傾する。外面ハケ、内面ナデを施す。24は突出した底部から体部が内弯して立ち上がる。内外面ナデで仕上げる

高杯（58・59・61～66・68～73・75～78・80・81）

58は深い椀形を呈し、脚部は「ハ」字に開く。59は杯部が深く杯底部と口縁部の境が明瞭である。脚部は裾部にかけて大きく開く。61～62は杯底部と口縁部の境が明瞭な稜により分けられる。66は大きく深い杯部に内弯気味に開く欠山系の高杯である。68・80は小さな椀形の杯部に大きく開く脚部がつく。68は口縁部外面に直線文・端部に列点文、脚裾部に内外面に直線文・端部に列点文を施す。

須恵器（84～86）

杯蓋（84）、杯身（85）、高杯（86）、甕（87）の４点を目示した。中村編年にあてはめると84・85はⅡ－１段階、86はⅠ－５段階、87はⅡ－２段階に相当する。

(2)暗褐灰色粘質土出土土器（第116図88～97）

土師器

94は口縁端部を拡張する壺で頸部に凸帯を貼付ける。口縁帯に波状文、凸帯頂部・口縁端部・口縁屈曲部内面に列点文を施す。92は大型壺の底部で内外面ハケで丁寧に調整を行なう。89～91はくの字口縁甕である。91は端部内面が肥厚する。90・91の体部内面にヘラ削りを行なう。93はバケツ形を呈する体部に角状の把手がつく甑である。底部は欠損する。

須恵器（96・97）

96は杯蓋で。天井部と口縁部を分ける稜は甘く。端部の段もみられない。中村Ⅱ－１段階に相当する。97は鉢の底部である。

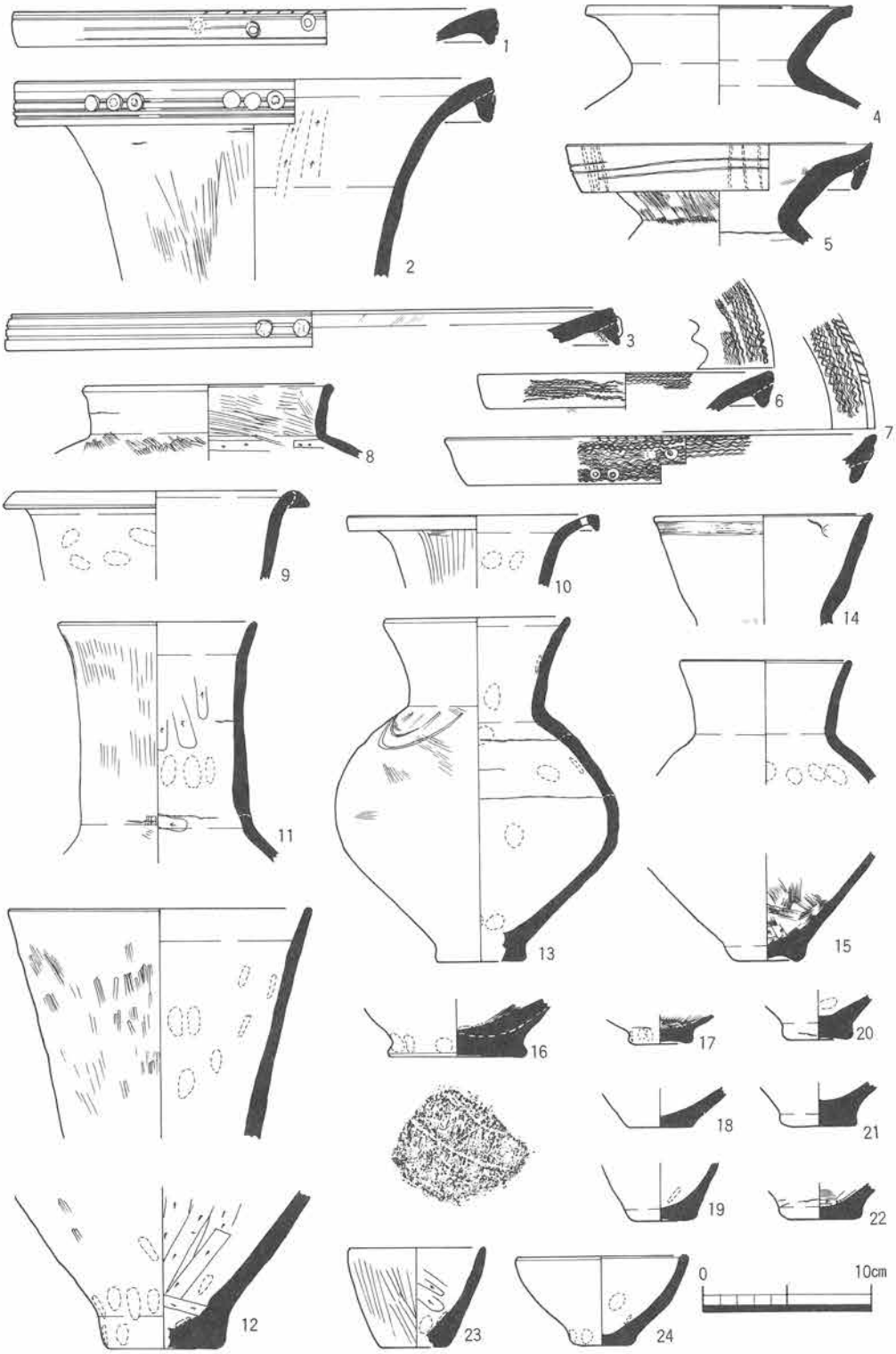
(3)暗灰色粘質土出土土器（第117図98～113）

土師器（98～101）

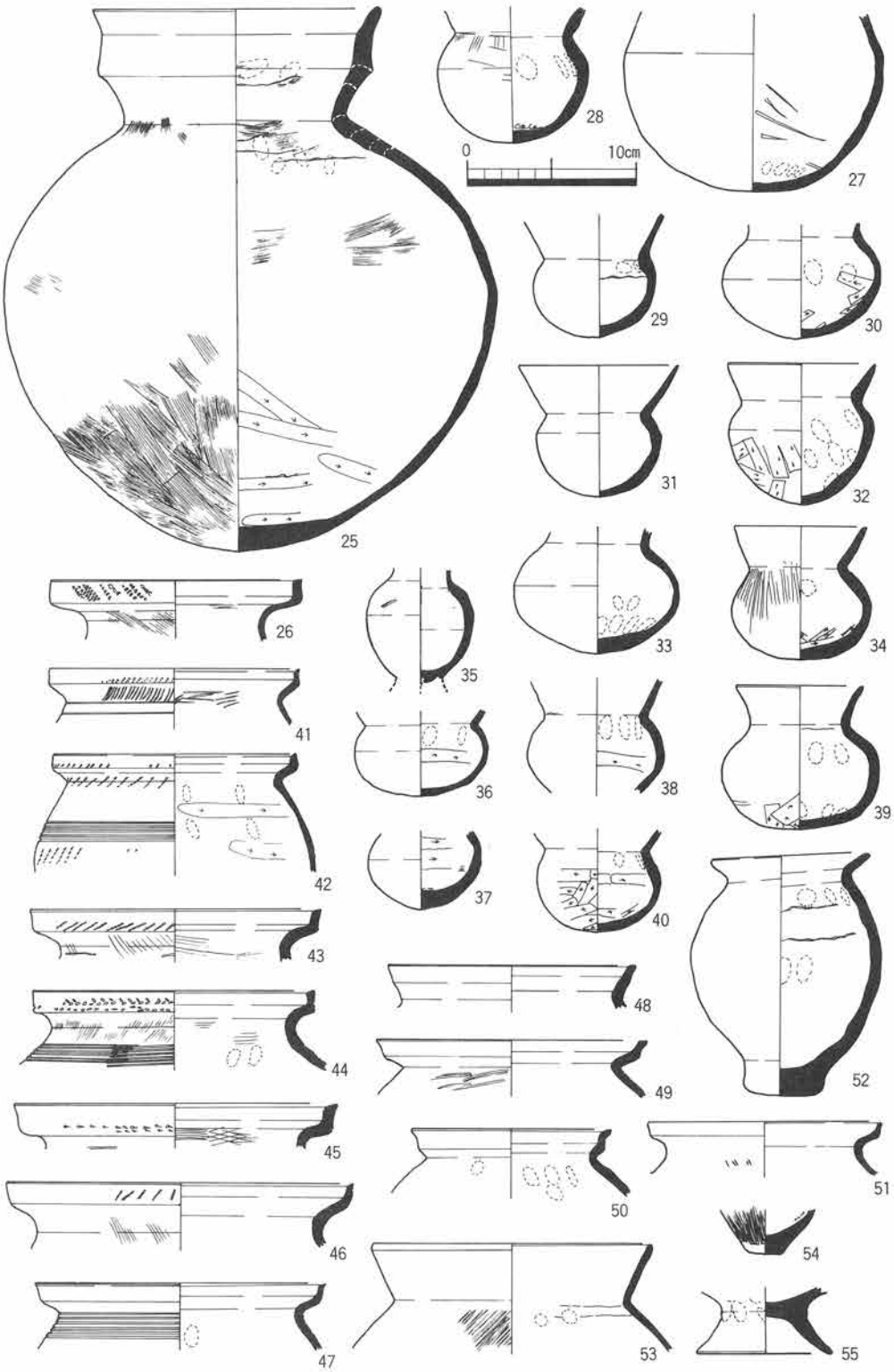
98は口縁部が短く立ち上がる壺である。体部内面にヘラ削りを施す。99は長胴甕である。体部外面縦ハケ、内面ナデを施す。

須恵器（102～113）

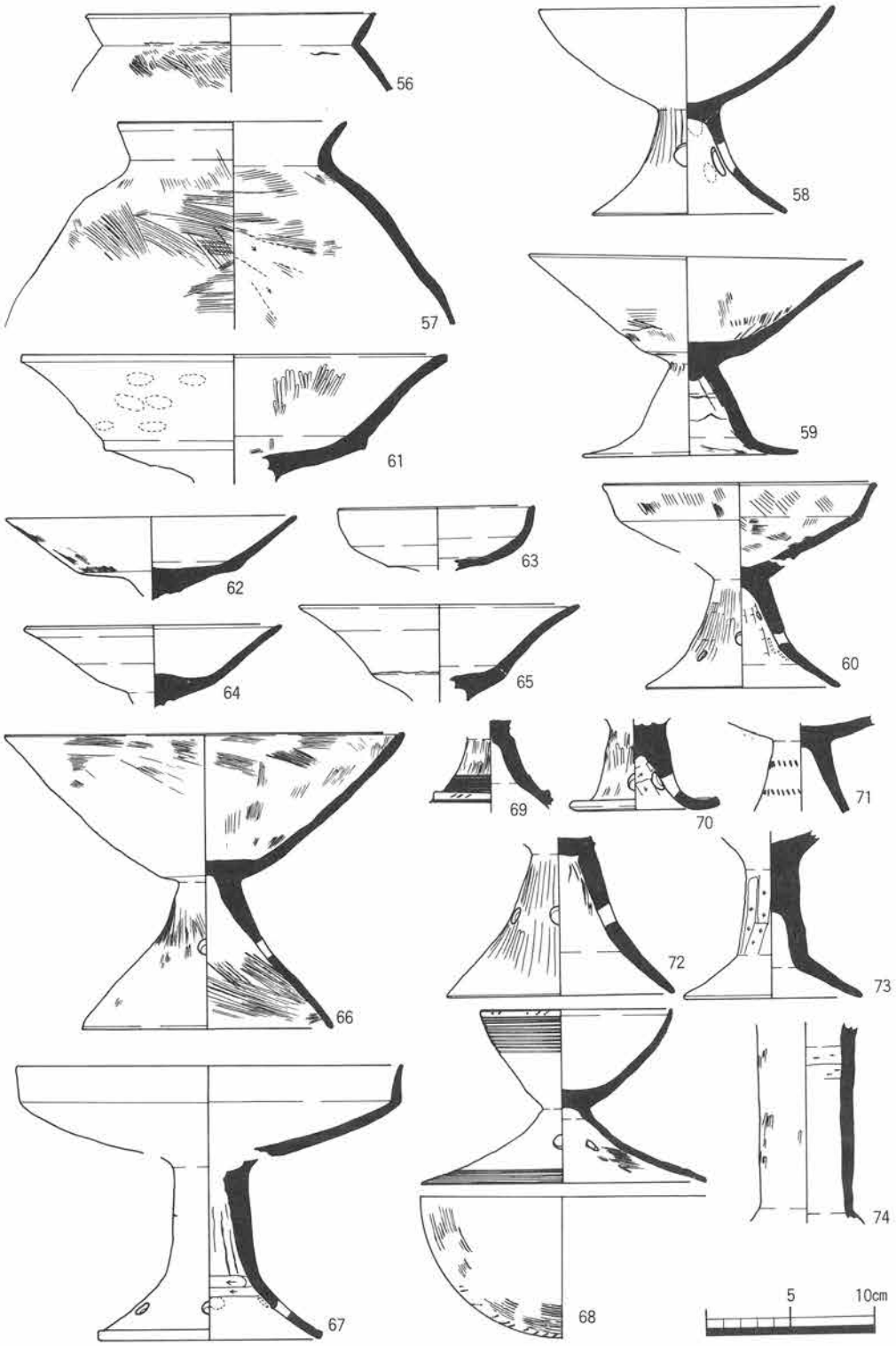
102は杯蓋で、短く鋭い稜を有す。中村Ⅰ－５段階に相当する。103～105は杯身である。103は立ち上がりが内傾気味に比較的長くのび、端部に内傾する段を有す。105は器高が低く、立ち上がりは短く内傾する。103・104は中村Ⅰ－５段階・105はⅡ－３段階に相当する。110は短頸壺・112は壺の底部である。110は体部下半のみヘラ削りを施す。106～109は甕の口縁部で



第113図　旧河道黒色粘質土出土土器



第114図　旧河道黒色粘質土出土土器



第115図　旧河道黒色粘質土出土土器

ある。106・107は口縁部が大きく外反し、稜は鋭い。107はヘラ状工具による波状文がみられる。108・109は口縁部が外反気味に屈曲し、端部は肥厚する。109は体部外面に櫛原体による押圧、体部内面は同心円のタタキがみられる。111は鉢で底部に何かで刺突したごとくの小孔が多くみられる。113は比較的丸みのある胴に短い口縁部がつく平瓶である。天井部にハケ原体による押圧、体部及び底部にカキ目を施す。自然釉が多量にかかる。

(4)灰色粘質土出土土器（第117図114～126、第118図）

弥生土器（115～117）

115・116は口縁部に粘土を貼り付け垂下させる壺で、116は口縁帯に沈線と円形浮文を施す。いずれも搬入品の可能性がある。

土師器（118～134）

118は二重口縁の壺である。121～123は小型丸底壺で、扁球状の体部に比較的短い口縁部がつく。119は受口状口縁甕、120は口縁部が「く」字に屈曲する甕である。128～133は甑の把手とみられる。

須恵器（135～144）

135～137は杯蓋である。135・136は口縁部がハ字に外反し、天井部と口縁部を分ける稜は形骸化している。137は稜は小さく尖り、口縁端部に内傾する段を有す。135・136は中村Ⅱ－2段階、137はⅠ－5段階に相当する。138～141は杯身である。138・139・141は端部に内傾する段を有するが、140はみられない。141は体部外面に記号文がみられる。中村編年のⅠ－5～Ⅱ－1段階に相当する。142は有蓋高杯の脚部である。透しは三角形のものを三方に刻む。中Ⅰ－5段階に相当する。143は無蓋高杯である。体部文様帯の稜は比較的鋭く、その下に波状文を施す。144は口縁部が外反して端部を外方へ肥厚される甕である。131は鉢で、底部には貫通する穴を有する。

(5)灰色砂出土土器（第122図145～第123図188）

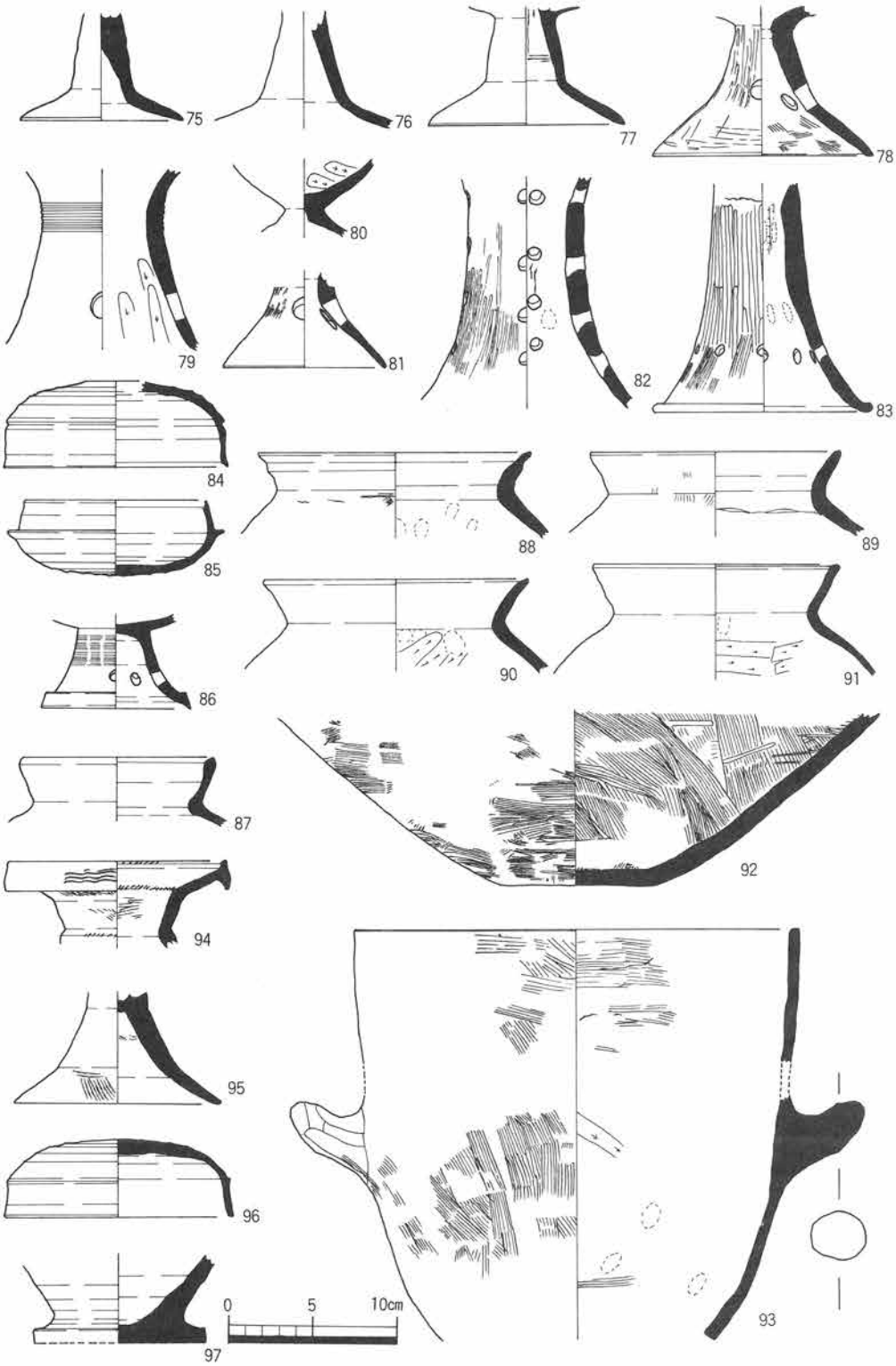
弥生土器（147・156～158）

147は大きく外反した口縁部が受口状に立ち上がる壺である。外面に円孤文・内面に刺突列点文を施す。156～158は受口状口縁甕で、口縁部に刺突列点文を施す。

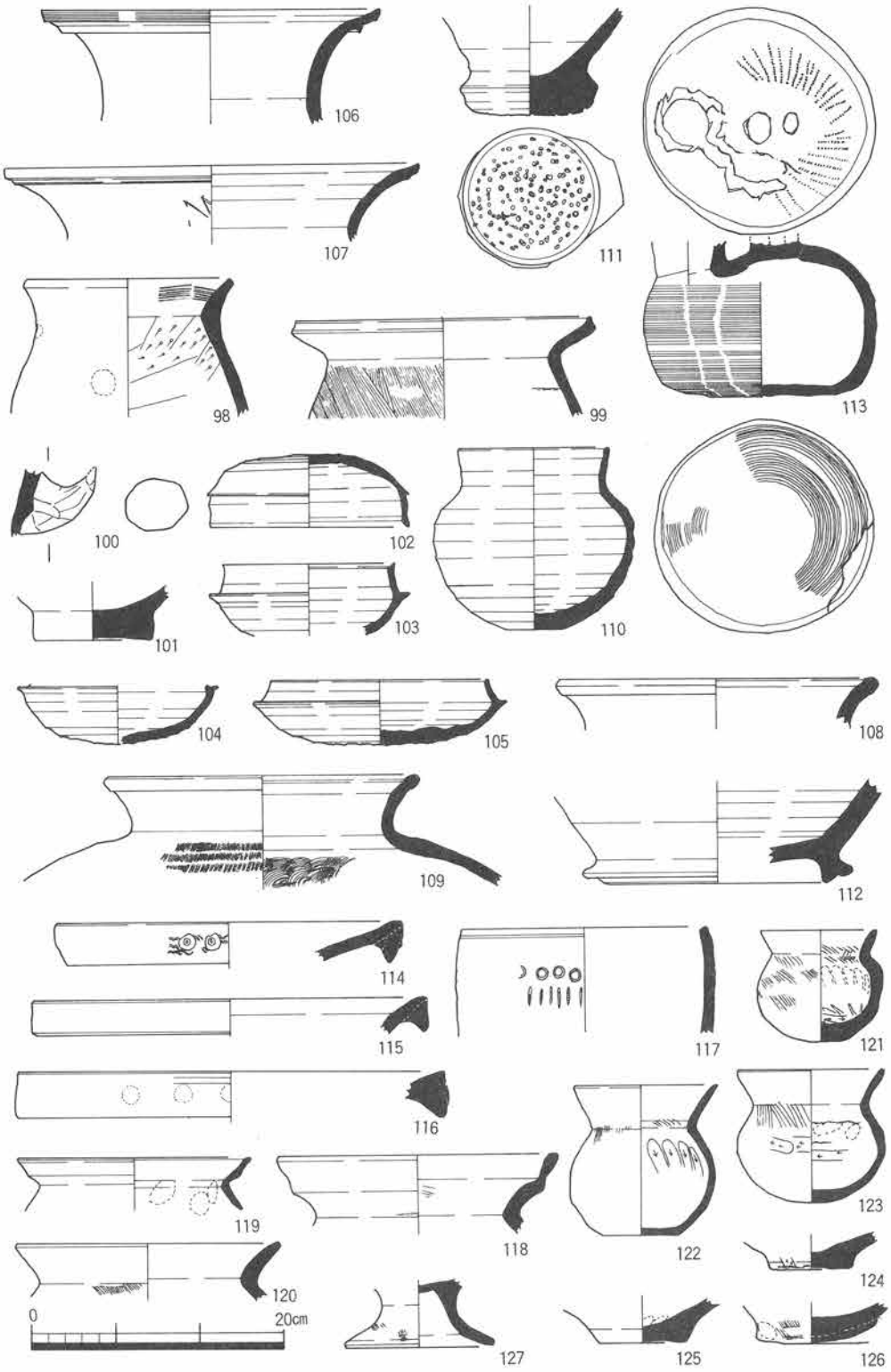
土師器

壺（145・147・149～152・153～155）

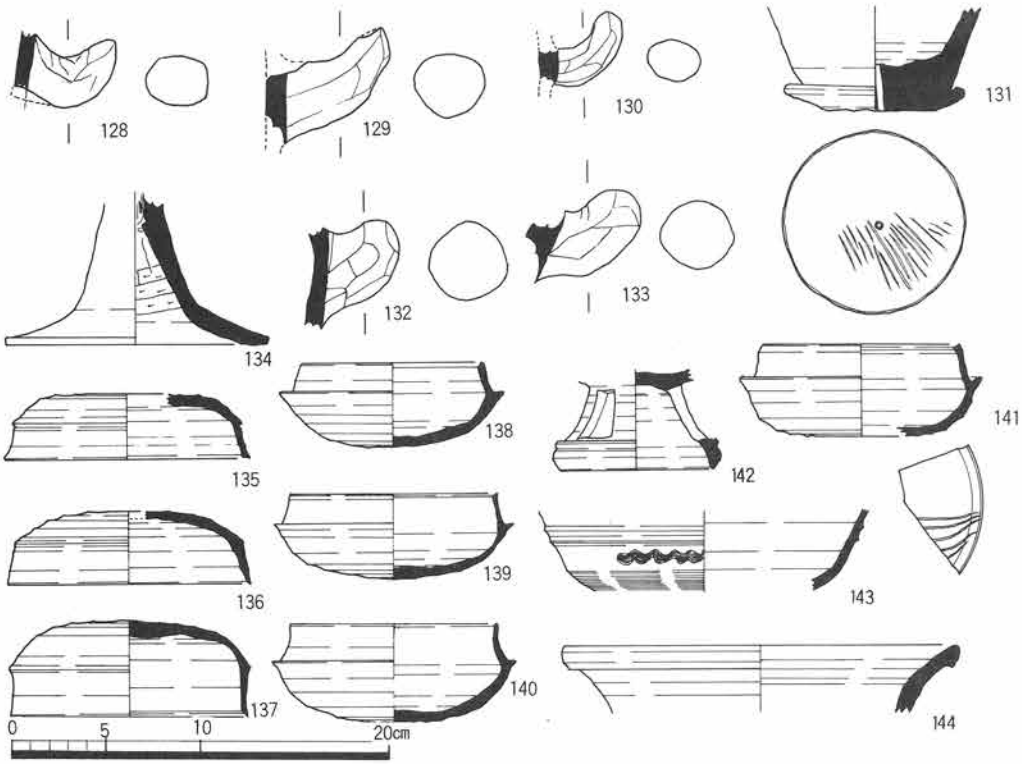
145・146・149は二重口縁の壺である。146は口縁部外面に半載竹管文を施す。149は直立する頸部から口縁部は屈曲し、さらに内傾気味に立ち上がる。内面は光沢があり、漆のような



第116図　旧河道暗褐灰色粘質土出土土器



第117図　旧河道出土木製品



第118図　旧河道灰色粘質土出土土器

ものが塗られていると考えられる。

甕（159～169・171・172）

159～165は受口状口縁甕である。160は肩部に直線文を施す。168は有段口縁の甕で、端部は外傾する面をもつ。口縁部内外面ナデ、体部外面ハケ目、内面はヘラ削りを施す。169は布留式甕で端部内面は肥厚する。内面体部はヘラ削りを施す。

鉢（173～175）

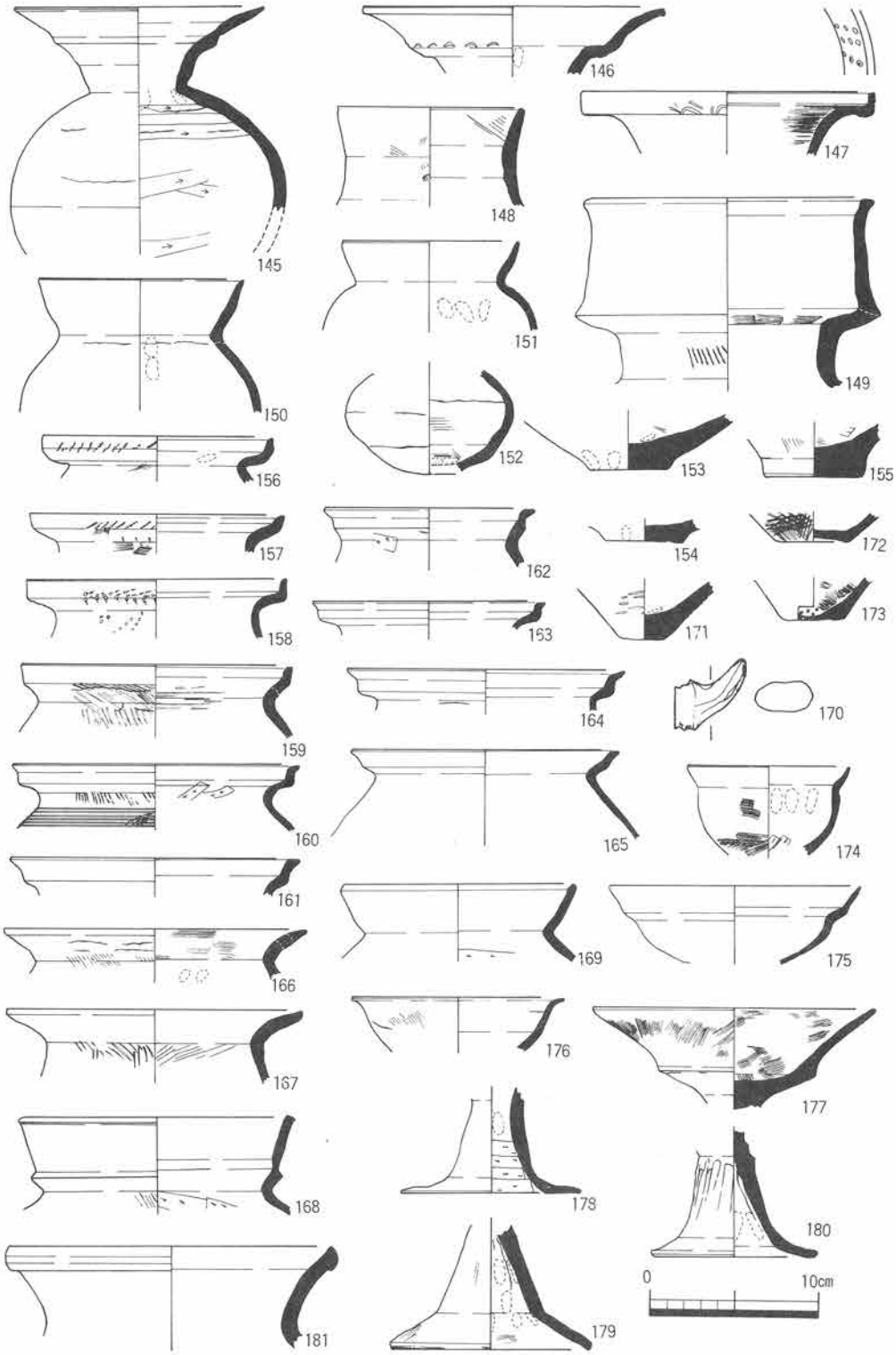
173は有孔鉢の底部で多くの小孔がみられる。174は内弯する体部に短く屈曲する口縁部をもつ。体部外面ハケ内面はナデを施す。175は内弯する体部から口縁部は屈曲して立上がる。

高杯（176～180）

176は椀形の浅い杯部を有し、端部をつまみ出す。177は口縁部と杯底部の境に明瞭な稜を有す。脚部はハ字を呈し、裾部にかけて開く（178～180）

須恵器（181～187）

181は口縁部が外反する甕で、端部は外方に肥厚する。182～184は杯蓋である。天井部は丸く稜は鋭い。中村Ⅰ－4～5段階に相当する。185は杯身である。立ち上がりは内傾し、端部に沈線状の凹みを有す。受部は外方へのび端部は鋭い。全体に丸みをおび、体部に静止



第119図　旧河道灰色砂出土土器

ヘラ削りを施す。中村Ⅰ－3～4段階に相当すると考える。186は有蓋高杯の杯部である。187は把手付椀である。体部の稜は鋭く、その下に波状文を施す。底部に静止ヘラ削りが観察できる。中村Ⅰ－3～4段階に相当する。

縄文土器（188）

内弯する体部から口縁部はやや外反気味に立ち上がる深鉢である。口縁端部下方に断面三角形の突帯を貼り付け、頂部にD字状の刻み目を施す。

(6)暗灰色砂出土土器（第120図189～195）

土師器（189～192）

189は内弯する体部から口縁部が短く「く」字に屈曲する甕である。体部外面ハケ目、内面は削りの後ナデを施す。192はハ字に開らく高杯の脚部である。

須恵器（193～195）

立ち上がりが高く、器高の約½程ある杯身である。中村Ⅰ－4段階に相当すると考える。149・195は口縁部が外反する甕である。194は口縁部外面にカキ目、195は体部外面にタタキを施す。中村Ⅰ－5～Ⅱ－1段階と考える。

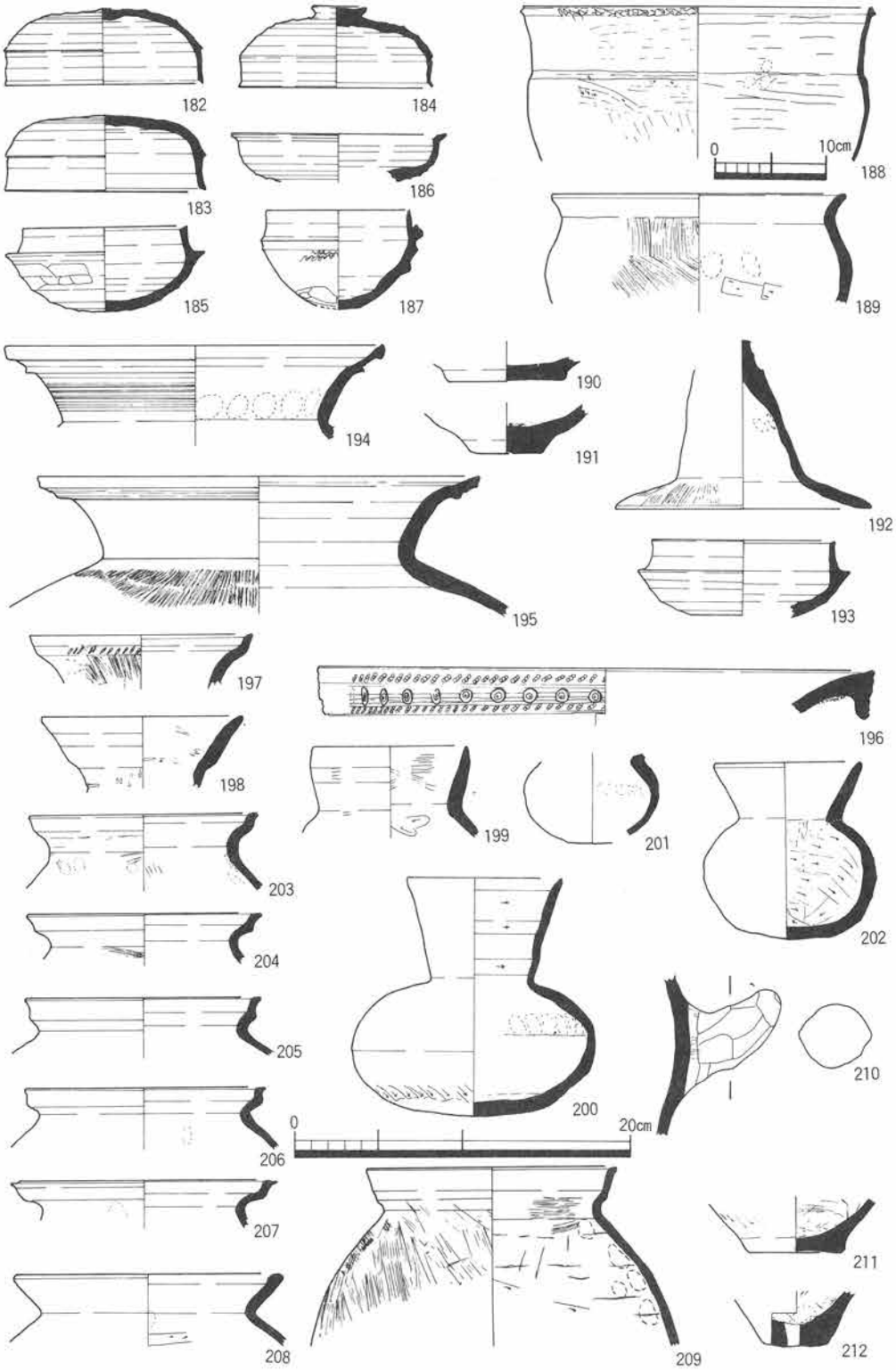
(7)暗灰色粘砂土出土土器（第120図196～第121図237）

弥生土器（196・197・223・224）

196は外反する口縁部に粘土を貼り付け垂下させる広口壺である。口縁帯は沈線・円形浮文・刺突列点文で加飾する。口縁帯に赤色顔料が残る。胎土は暗褐色を呈し角閃石を含む搬入品と考えられる。197は口頸部は外反し、さらに口縁部が受口状に立ち上がる壺である。口縁部に刺突列点文を施す。223・224は円筒状の高杯の脚柱部である。224は直線文を施す。いずれも杯部の接合は円板充填による。

土師器（198～222・225・226）

198は二重口縁壺の口縁部で内外面にヘラ磨きが観察される。200は肩平な体部から口縁部が直線的に立ち上がる直口壺である。199・201・202は小型丸底壺である。203～207は受口状口縁甕である。208は布留式期に通有な口縁端部内面が肥厚する甕で、内面はヘラ削りが施されている。209は有段口縁の甕である。口縁部内外面横ナデ、体部外面ハケ目、体部内面はナデを施す。214は口縁部が「く」字に屈曲する甕で、端部は沈線状の凹みを有する。215は内弯する杯底部から口縁部が大きく外反する高杯である。216・221は杯底部と口縁部が明瞭に分かれる高杯である。調整は216が外面ハケ目、221は口縁部外面に粗いハケ目、杯底部と内面に板ナデを施す。217～220は浅い椀形を呈する高杯である。



第120図　旧河道灰色砂，暗灰色粘砂，暗灰色砂出土土器

須恵器（227～237）

227・228は杯蓋である。227は稜が小さく、下方に沈線を入れることで稜を浮び上がらせている。228は稜が鋭く、口縁部はやや外反気味に開く。227は中村Ⅱ－１、228はⅠ－５段階に相当する。229・230は杯身である。229は立ち上がりは長く、端部に内傾する段を有す。230は立ち上がりは短く内傾し、端部を丸くおさめる。口径に比して器高は低い。229は中村Ⅰ－５段階、230はⅡ－３～４段階に相当する。231～233は有蓋高杯である。231は端部に内傾する明瞭な段を有する。体部にカキ目が観察される。232は小さく「ハ」字に開く脚部で、端部を下方にカギ形に折り曲げる。透しは長方形のものを三方に刻む。233は脚部にカキ目が施されている。透しは長方形のものを三方に刻む。いずれも中村Ⅰ－５段階に相当する。234・235は小型の甕である。外反する口縁部外面に稜線と波状文からなる文様帯を有す。234は口縁部にカキ目、235は口縁部と体部にカキ目及び体部に格子タタキを施す。237は口径38cmを計る大型甕である。口縁部は外反し、端部近くに鋭い稜を有する。口縁部外面に波状文、体部外面に平行タタキを施す。

(8)層位不明土器（第122図）

弥生土器（238・242・254～260・291）

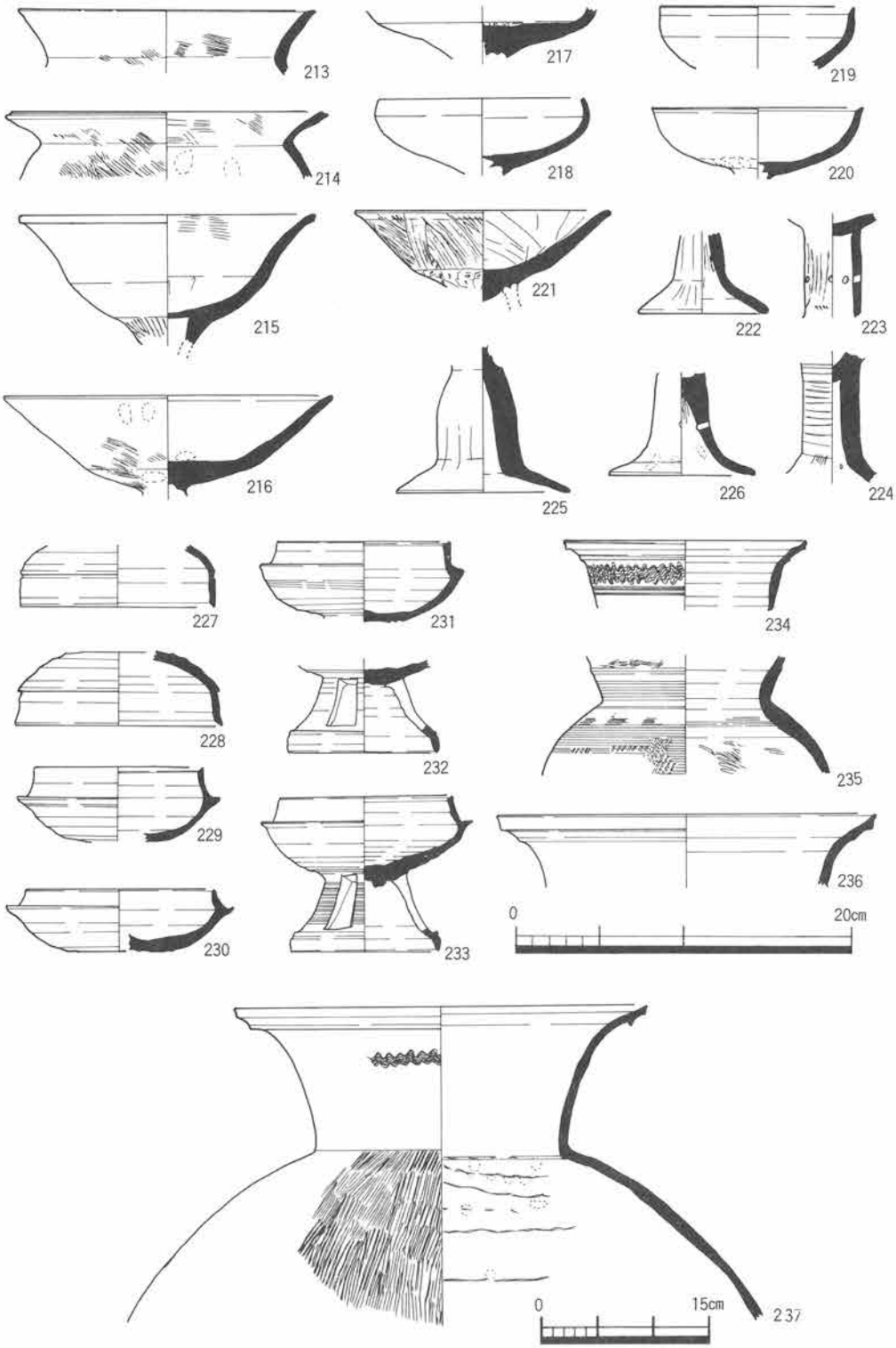
238は外反する口縁部に粘土を貼り付け垂下させる壺である。口縁帯に沈線と円形浮文を施す。242は口縁部が外反気味に立ち上がり、端部を拡張する壺で、頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁帯に刻み目、肩部に列点文と波状文を施す。口縁部内外面ヘラ磨きを施す。内外面に塗布された赤色顔料が残っていた。254～260は受口状口縁甕である。口縁部外面に刻みを施すもの（254・255）、突刺列点文を施すもの（256～260）がある。256・257は口縁部の立ち上がりがシャープで、刺突列点文も端部近くまで施す。260は肩部に平行文を施す。

土師器（239～241・243～253・261～274）

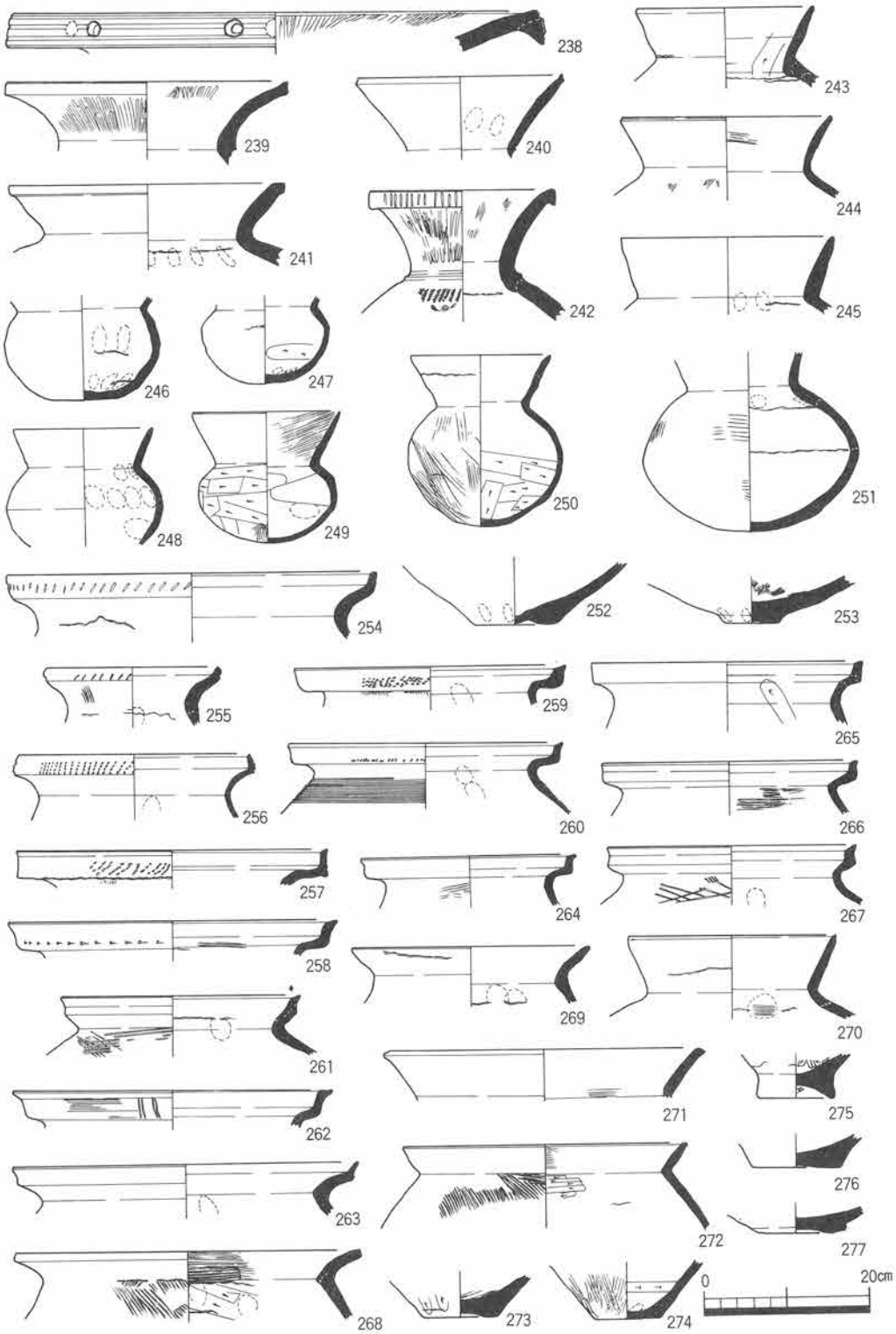
239は口縁部が外反し口縁部内外面丁寧なヘラ磨きする。246～250は小型丸底壺である。249の体部外面と250の体部内面は板ナデによる砂粒の移動が顕著である。261～267は受口状口縁甕である。267は肩部に斜格子文を施す。268・279は口縁部がくの字に屈曲する甕で体部内面にヘラ削りを施す。286・287は浅い椀形の高杯で287は口縁部外面に直線文を施す。

須恵器（295～303）

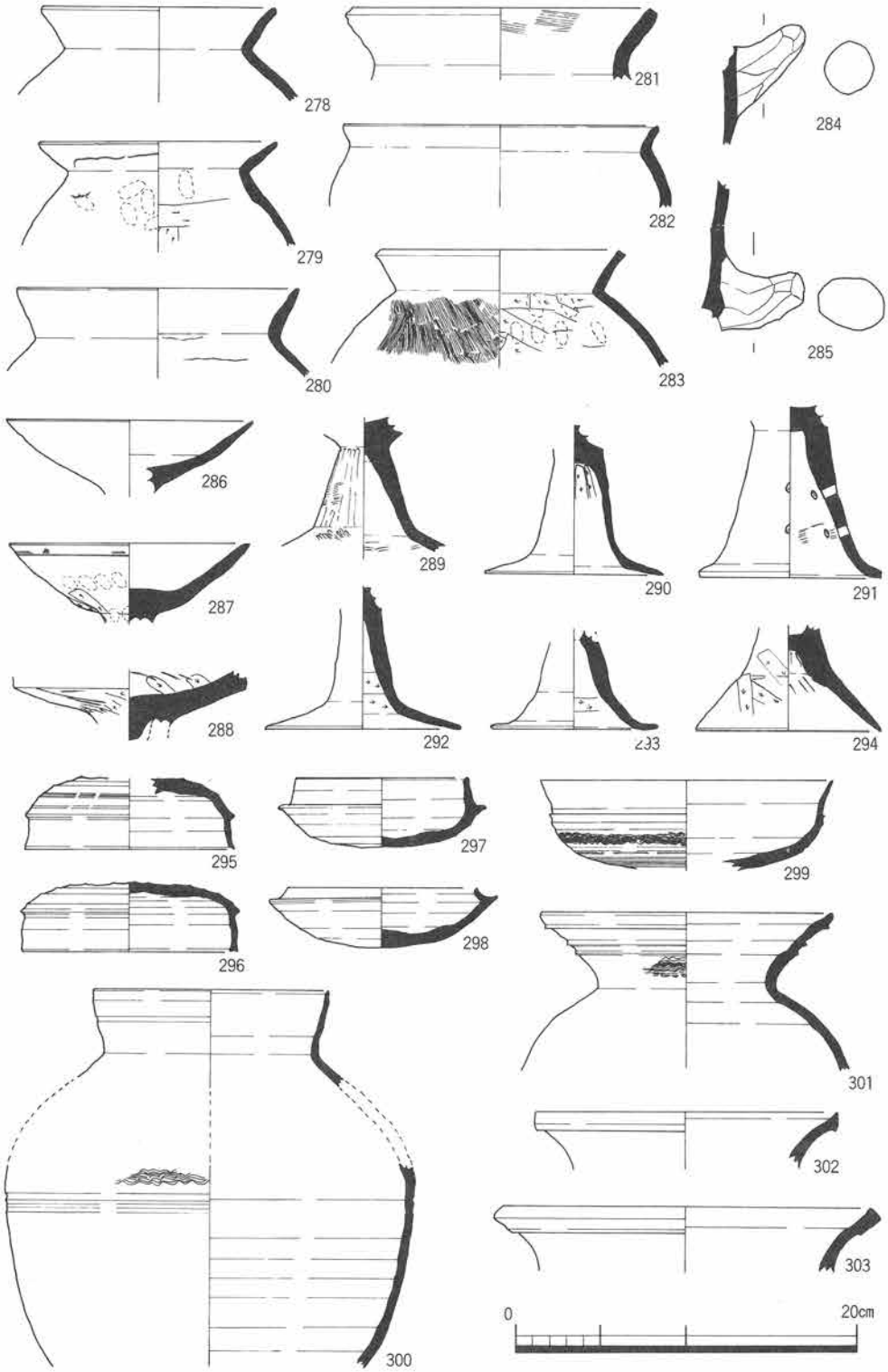
295・296は杯蓋で、天井部と口縁部の境に稜を有す。295は天井部にカキ目を施す。中村Ⅰ－５段階に相当する。297・298は杯身である。297は内傾する立ち上がりの端部を丸くおさめ



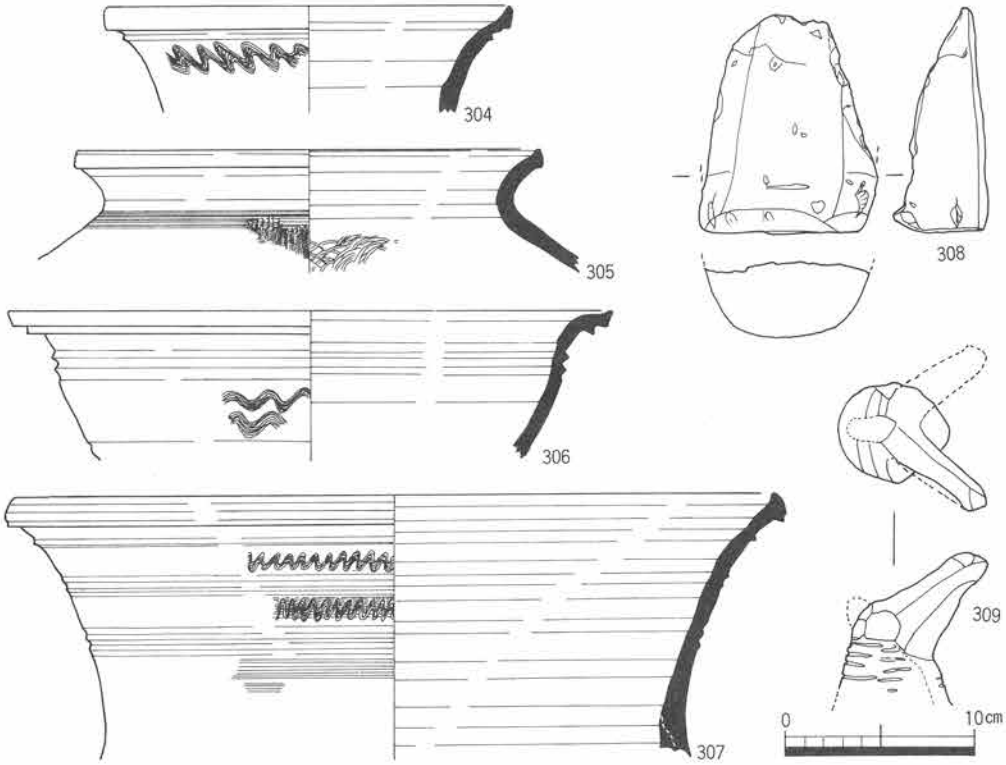
第121図　旧河道出土土器



第122図　旧河道出土土器



第123図　旧河道出土土器



第124図 旧河道出土遺物

る。298は立ち上がりが短く内傾し、端部を丸くおさめる。297は中村Ⅱ－1段階・298はⅡ－5段階に相当する。299は無蓋高杯である。口縁部は外反気味に立ち上がり、体部外面に稜線と波状文からなる文様帯を有す。杯底部にはカキ目を施す。300は口縁部が直線的に立ち上がる短頸壺で、端部は尖り気味におわる。体部中位に波状文と沈線を施す。301・304・307は口縁部がゆるやかに外反し、口縁部に稜線と波状文からなる文様帯を有す甕である。307は口縁部にカキ目を施す。302・303・305は口縁部はゆるやかに外反し、端部を下方に肥厚させる甕である。305は体部外面にカキ目、内面は同心円タタキを施す。306は器台である。体部は内弯して立ち上がり、口縁部は外反し端部を外方へ屈曲させる。体部外面には稜線と丁寧に施された波状文が観察される。中村Ⅰ－3段階に相当すると考えられる。

土製品（308・309）

いずれも土製支脚である。308は断面カマボコ形を呈する。309はいわゆる「大埴輪」と称されたものである。角状突起は1本が残存するが、剝離痕から本来は3本あったと考えられる。体部は中穴で外面に粗い平行タタキが施されている。

旧河道最上層から出土した遺物で、小破片が多い。年代も弥生時代後期から鎌倉時代ま

でかなりの幅がみられる。

弥生土器（313・318）

313は受口状口縁甕で口縁部外面に刺突列点文を施す。318は高杯の脚部とみられ、中位に直線文が5条観察できる。円孔は2段で、上段に5孔、下段に2孔を穿つ。

土師器（310～312・314～317）

310は口縁部が直線的に立ち上がる短頸直口壺で、端部は外傾する面をもつ。311は二重口縁壺である。

須恵器（310～331）

319～321は杯蓋である。319は口縁部に内傾する明瞭な稜を有し、天井部は丸い。320は天井部と口縁部を分ける稜はほとんど消滅し、わずかに沈線をめぐらす程度である。321はつきみが付く蓋で、稜は鋭い、それぞれ中村編年のⅠ－5・Ⅱ－2・Ⅰ－4段階に相当すると考える。322・323は杯身である。322は立ち上がりが長く、端部に内傾する段を有す。中村Ⅰ－5段階に相当する。324～327は口縁部が外反する甕である。324は肩部外面にカキ目と平行タタキ、体部内面に同心円タタキを施す。325は口縁部外面にカキ目、326は波状文を施す。328・329は高台付の杯である。331は小型の瓶子である。底部は平底で糸切痕が残る。

土師器小皿（332・333）

332は平担な底部から口縁部は内弯気味に立ち上がる。333は底部はあげ底気味である。いずれも外面体部中位まで1段横ナデを施す。

黒色土器椀（334～336）

内弯する体部に断面三角形状の高台が貼り付く。335は口縁端部に沈線・336は口縁部外面にヘラ研磨を施す。内面のラセン状暗文はすべてに観察できる。

瓦質鍋（341）

丸い底部から体部は直線的に立ち上がり、口縁部は受口状を呈す。内外面、特に外面に指頭圧痕が顕著である。外面体部に煤の付着がみられる。

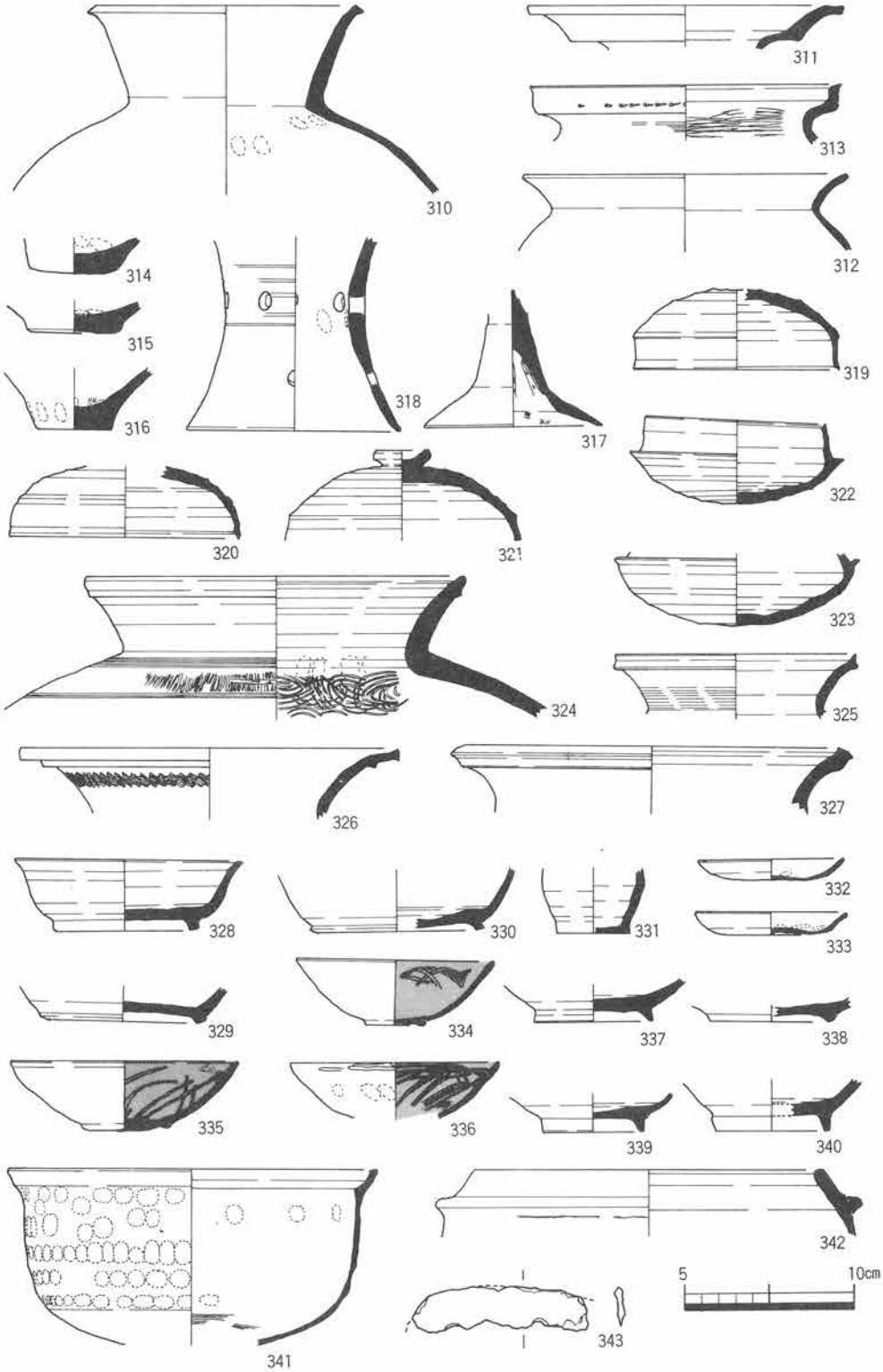
土師質羽釜（342）

内傾する口縁部直下に断面方形の短い鍔がつく。

灰釉陶器（337～340）

いずれも椀の底部と考えられる。断面方形の高い高台（337・339・340）と低い高台（338）を貼りつける。

2　鉄製品（第125図343）



第125図　旧河道出土土器

破片であるため全形は明らかでないが鉄鎌の刃部と考えられる。現部長10.5cm・幅25cm厚み4mmを計る。

3　ガラス玉（第126図1）

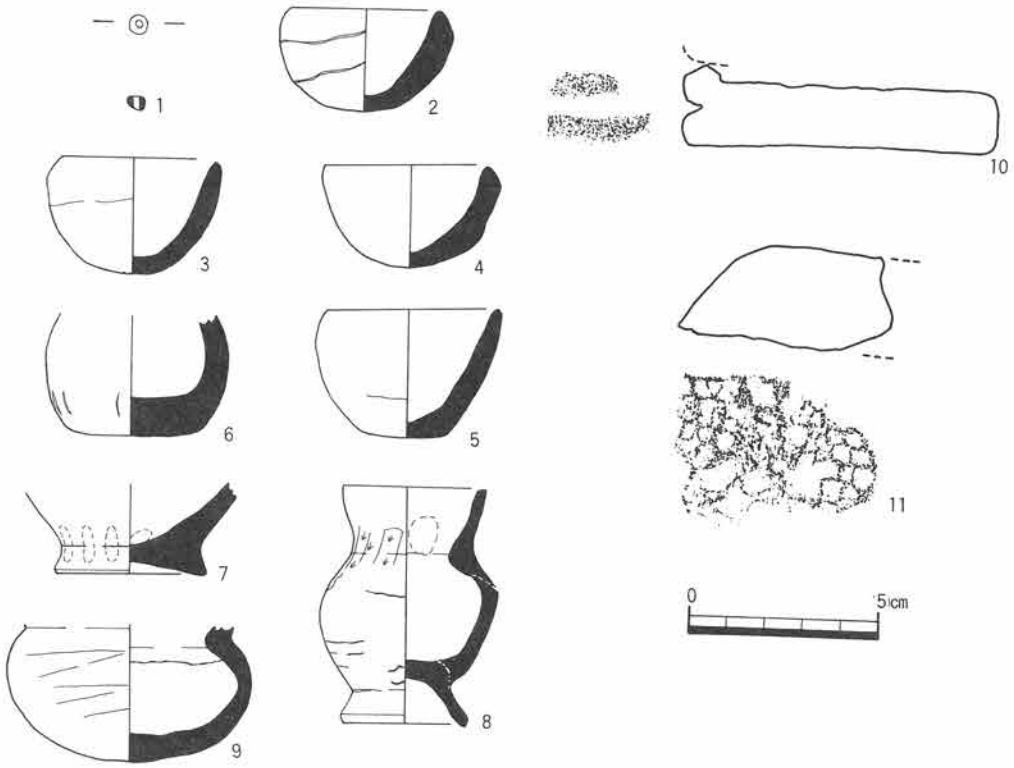
淡青色を呈するガラス玉である。直径5mm・厚み4mmを計る。

4　ミニチュア土器（第126図2～8）

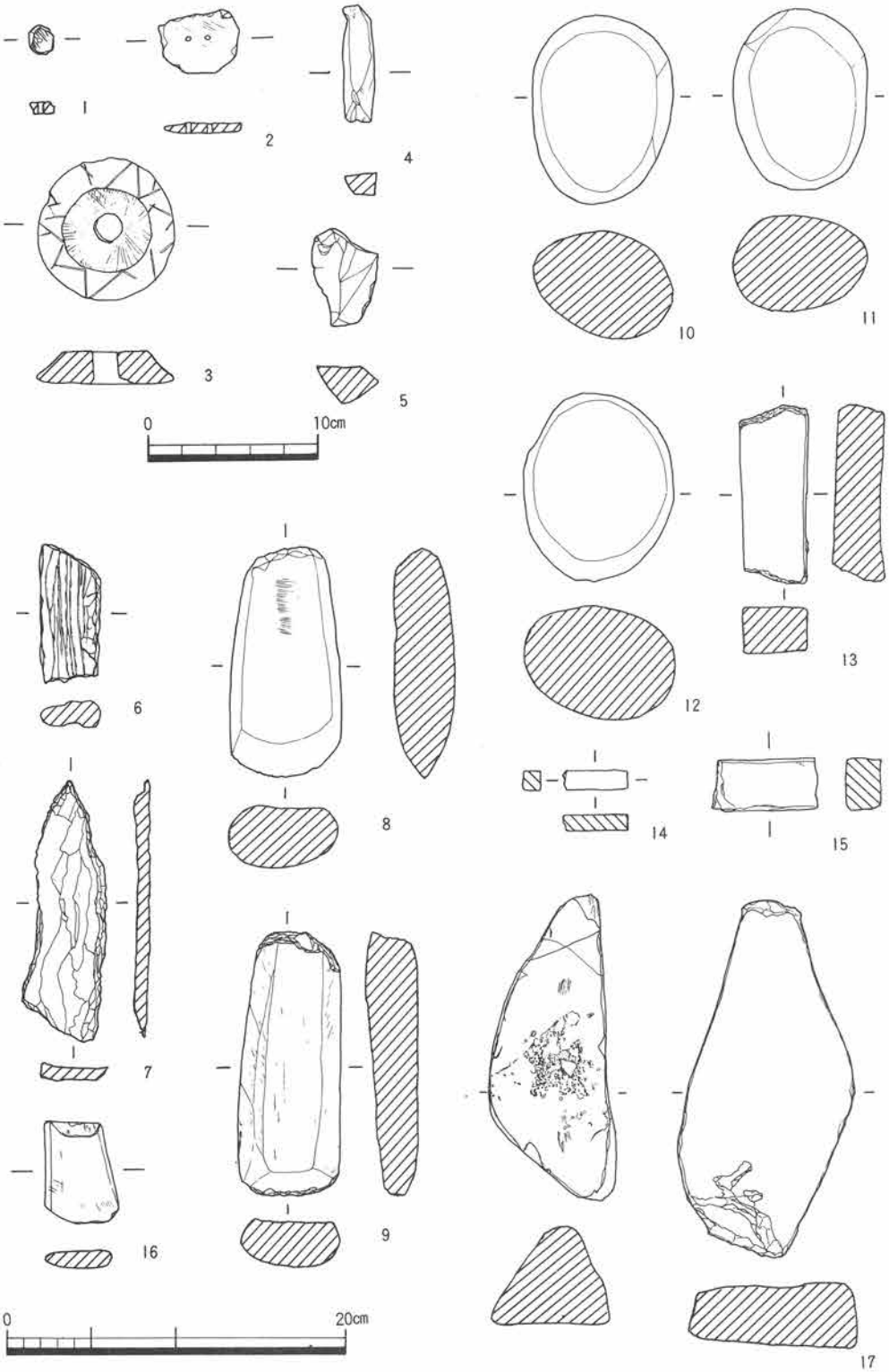
2～5は鉢を模したとみられる手捏土器である。粘土紐を3段程巻き上げ、指で整形する。口径4cm、器高3cm前後を計る。6は壺及び甕を横したものと考えられる。体部外面下半に爪による圧痕がみられる。8は台付壺である。球形の体部に内弯気味に立ち上がる口縁部がつく。脚台はハ字に短く開く。すべてナデで仕上げる。9は鉢を横したともみられるが、むしろ小型丸底壺をミニチュア化したものと考えられる。内外面に丁寧なヘラ磨きが施されている。2～5・8は黒色粘質土層内からまとまって出土したもので、比較的一括性が高いと考えられる。

瓦（第126図10・11）

最上層中より3点出土したがうち2点を図示した。10は重弧文軒平瓦である。色調は赤褐色を呈し、比較的硬質である。11は平瓦の小破片である。凸面に格子目タタキが施され



第126図　旧河道出土　ガラス玉，ミニチュア土器、瓦



第127図　旧河道出土石製品

ている。色調は黄褐色を呈し、やや軟質である。

Ⅳ　石製品（第127図）

1～3は滑石製品である。1は白玉で表裏面を丁寧に研磨し、中心近くに直径1㎜の円孔をあける。直径7㎜、厚み4㎜を計る。2は有孔円板である。表裏面は研磨され、側面も円形を意識して面がととのえられている。直径1㎜の穴を2孔あける。3は断面台形を呈す紡錘車である。表裏・側面とも丁寧に研磨を施し、平滑に仕上げられている。中心に直径8㎜の軸穴をあけ、側面に鋸歯文を施す。上端径2.5㎝、下端径4㎝、厚み1㎝を計る4・5はサヌカイトの剝片である。6・7は紅変片岩の剝片である。8・9ま磨製石斧で表面は平滑に仕上げられている。いずれも使用時の刃こぼれが認められる。12～11はこぶし大の丸石である。表面は平滑で光沢がある。色調は淡緑黄色を呈す。10～18は砥石である。14は長さ3.6㎝・厚さ1㎝を計り、直方体状を呈する小型品である。仕上げ砥石の用途が考えられる。17は一面のみ使用痕が認められ一応砥石としたが、使用面の中央に無数の凹みがあり、いわゆる鎬石のような用途も考えられる。

Ⅷ　木製品（第128図～137図）

労働具

着柄鋤（第128図1・第129図3）

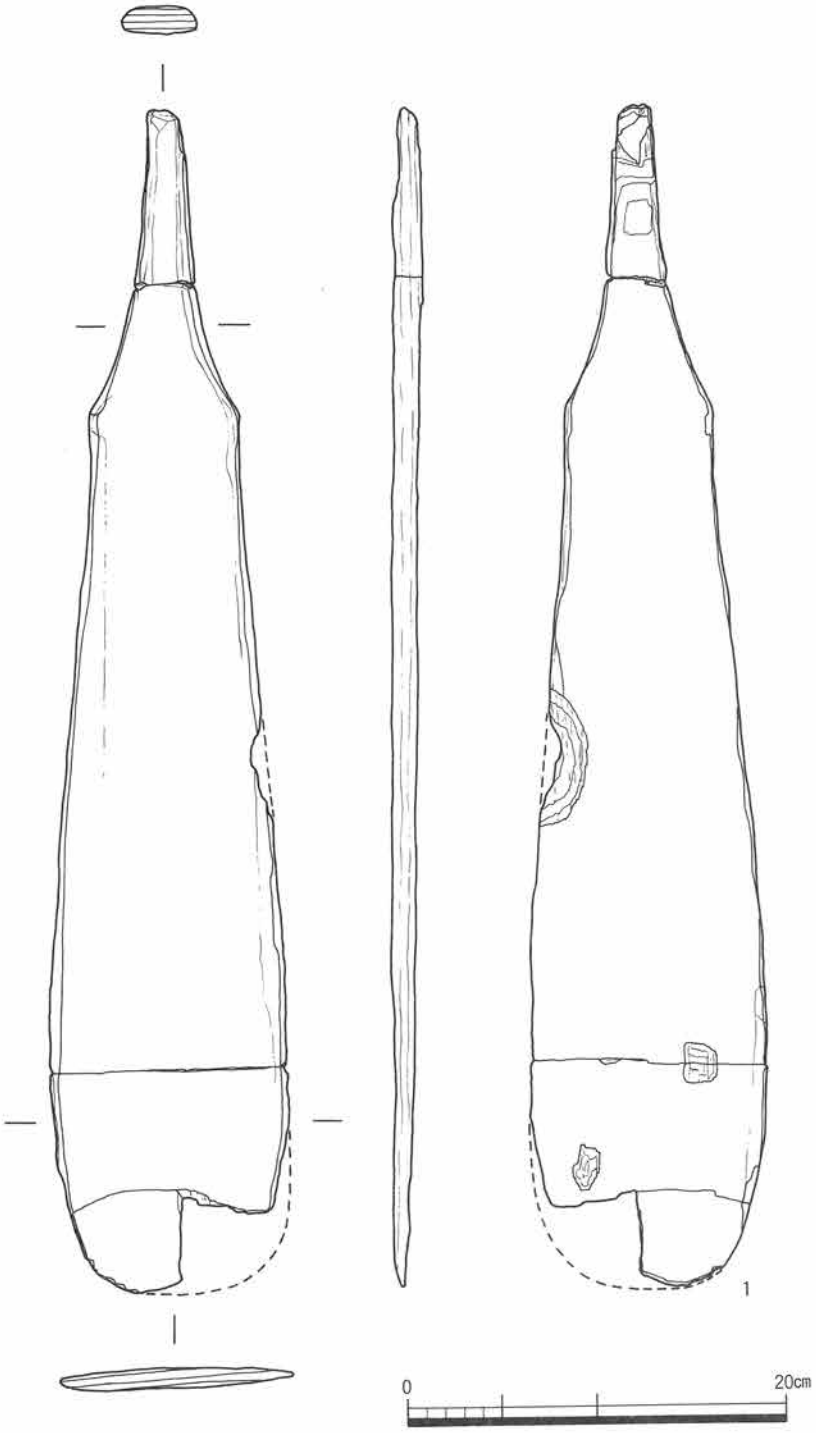
1は基部が上半は細く、下半にむかってゆるやかに外反し、刃部との境に明瞭な稜を有する。刃部は中央を比較的厚く、周辺部を薄く削るが、全体に板状に仕上げる。現存長60㎝・刃部最大幅12㎝を計る。3はナスビ形着柄鋤で、斯部と刃部との境の傘状突起は欠損する。刃部は中央部を厚く、周辺部を薄く削る。現存長30㎝を計る。

鍬（第129図2・第130図5）

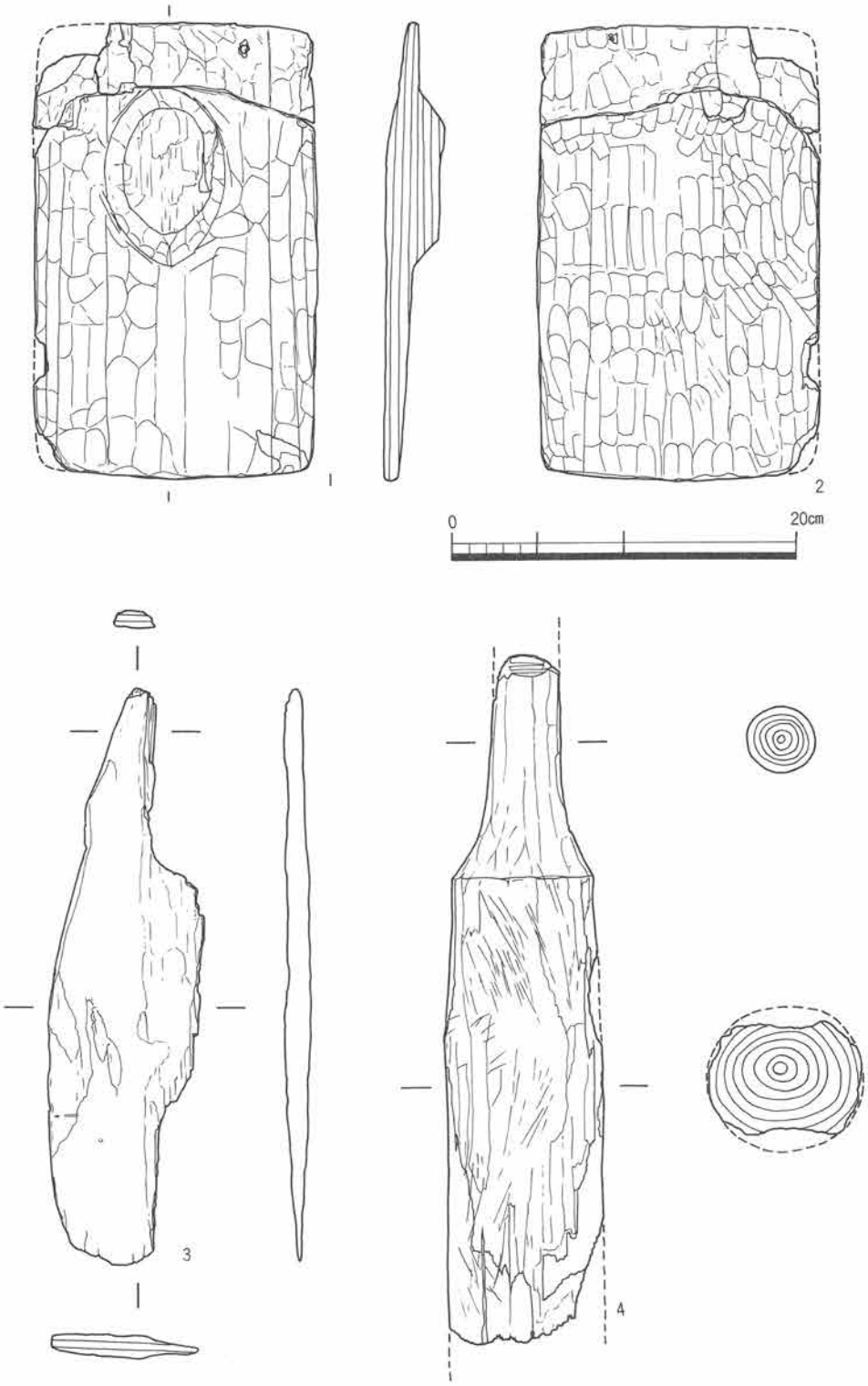
2は平鍬の未製品である。平面形は長方形を呈し、身の表面に隋円形の降起を有する。表裏面は丁寧に削られ、平滑に仕上げられている。5は破損が著しいが丸鍬とみられる。平面形は隋円形もしくは円形を呈すると考えられる。身には柄を装着する柄穴があけられ、その左右に補修孔であろうか、2孔ずつ計4孔が穿たれている。

堅杵（第129図4・第130図6）

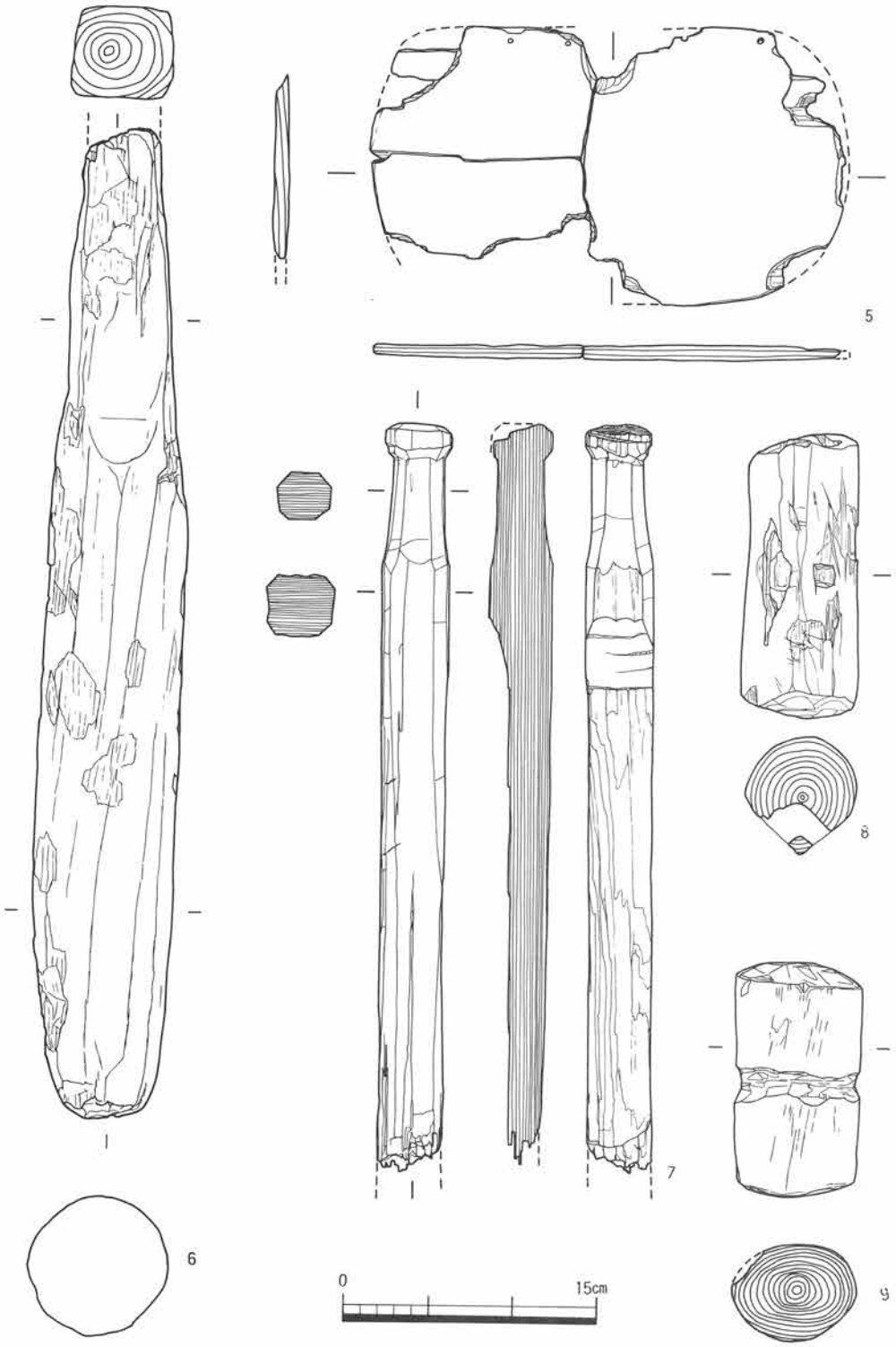
4は握り部が円筒形を呈する。機能部は先端が炭化しており、焼失欠損したものと考えられる。6は掘り部が方柱状を呈する。機能部先端に使用痕が認められる。4・6いずれも心持材を使用する。



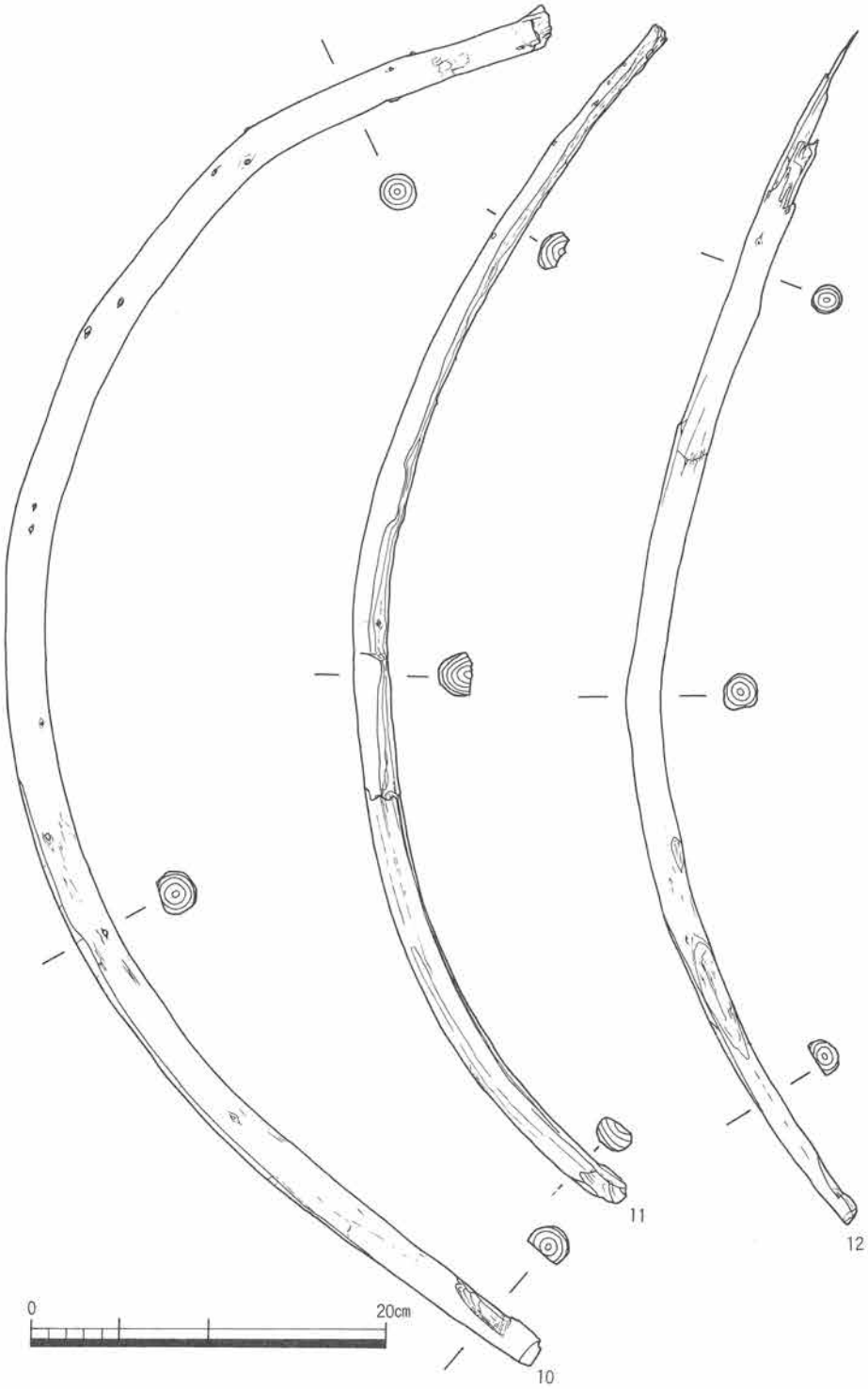
第128図　旧河道出土木製品



第129図　旧河道出土木製品



第130図　旧河道出土木製品



第131図　旧河道出土木製品

紡織具部品（第130図７）

棒状の先端を６方向から削り、バット状の有頭部をつくり出す。有頭部も丁寧な面どりが行なわれている。体部は断面方形に削った後、一方を大きく抉る。現存長45cmを計る。

木錘（第130図８・９）

８は丸太材の周辺の一部をカットし、その中央に一辺1.5cm程の方形孔を貫通させたものである。９は丸太材の周縁中央部を抉り、凹ませたものである。８・９いずれも両端面に面取りの加工痕が明瞭に残るが、切断面を調整したものと思われる。８は長さ17cm、直径6.5cm、９は長さ14cm・直径６cmを計る。

弓（第132図・142図）

６本出土したがいずれも丸木の弓である。小枝をはらい樹皮を剝いだ程度で、面取りはほとんど行なわない。先端付近の内側を削り、弭をつくり出している。

部材（第133図）

16は板材の一端を削り、先端近くに一孔を穿つ。17は棒状品の中央部近くを抉る。18は板材の一面を先端にかけて薄く削り、一側面の先端近くに抉りを入れる。19は板材を三日月形に削り、両端近くにそれぞれ径２cm程の穴を刳りぬく。上端から下端にかけて薄く削り断面は三角形を呈する。表面は比較的平滑に削るが裏面は仕上げが粗雑である。20は柾目に木取りした板材の周縁を削り面取りを行なう。21は側面に木釘が打たれた板材で、両先端は丸みをもたしている。器面は滑らかであるが表面に刃物痕が明瞭に残る。

建築材（第134図・135図）

22は上端近くの側面に８cm×３cmの長方形状の穴を貫通させる。現存長136cm・幅22cmを計る大型品である。23は上端に矩形の切り込みを入れ、その付近に長辺7.5cm、短辺４cm、深さ２cmの柄穴を穿つ。24は辺材近くを木取りした板で、現存長112cmを計る。25は角材の一端を矩形に抉る。26は柾目に木取りした板である。器面に明瞭な削痕が残る。

祭祀具（第136図）

刀形（27～30）

27は刀身と柄をはっきり分けるタイプのものである。刀身と柄の境に切り込みを入れることで鍔を表現している。28は柄を表現せず、刀身と茎のみをかたどるタイプのものである。先端は斜めに削り、鮒切先にする。29は刀身の片側下端を抉り、刀背と茎の片側をそろえるため平面形が包丁形を呈する。30は刀子状を呈するものである。上端から１度切り込みを入れ、さらにその先を削り、刀身をつくり出す。先端は斜めに削り落し、鮒切先と

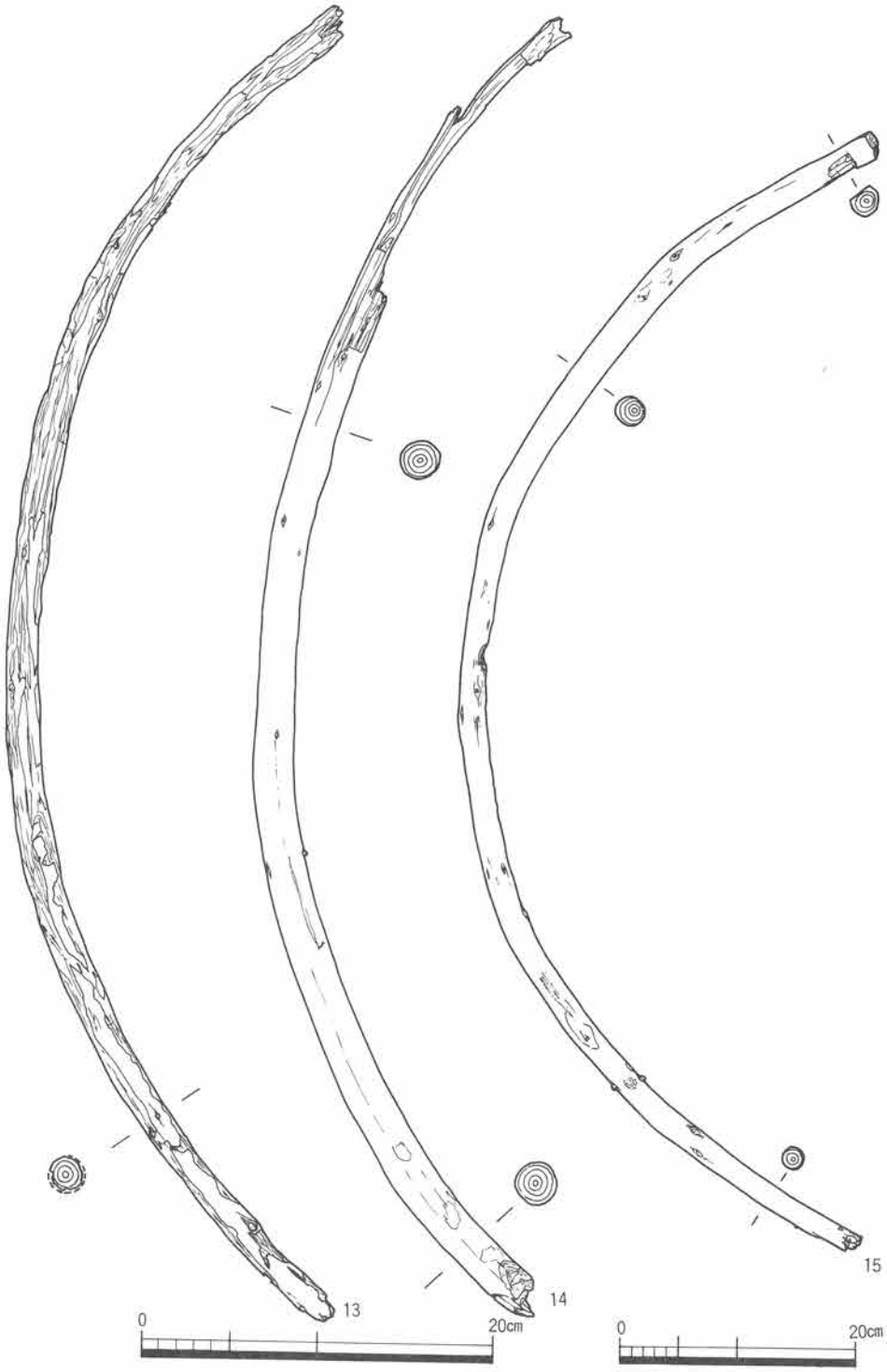
する。柄にあたる部分は削痕が明瞭で、周縁は先端を尖らすように削る。

陽物形代（31・32）

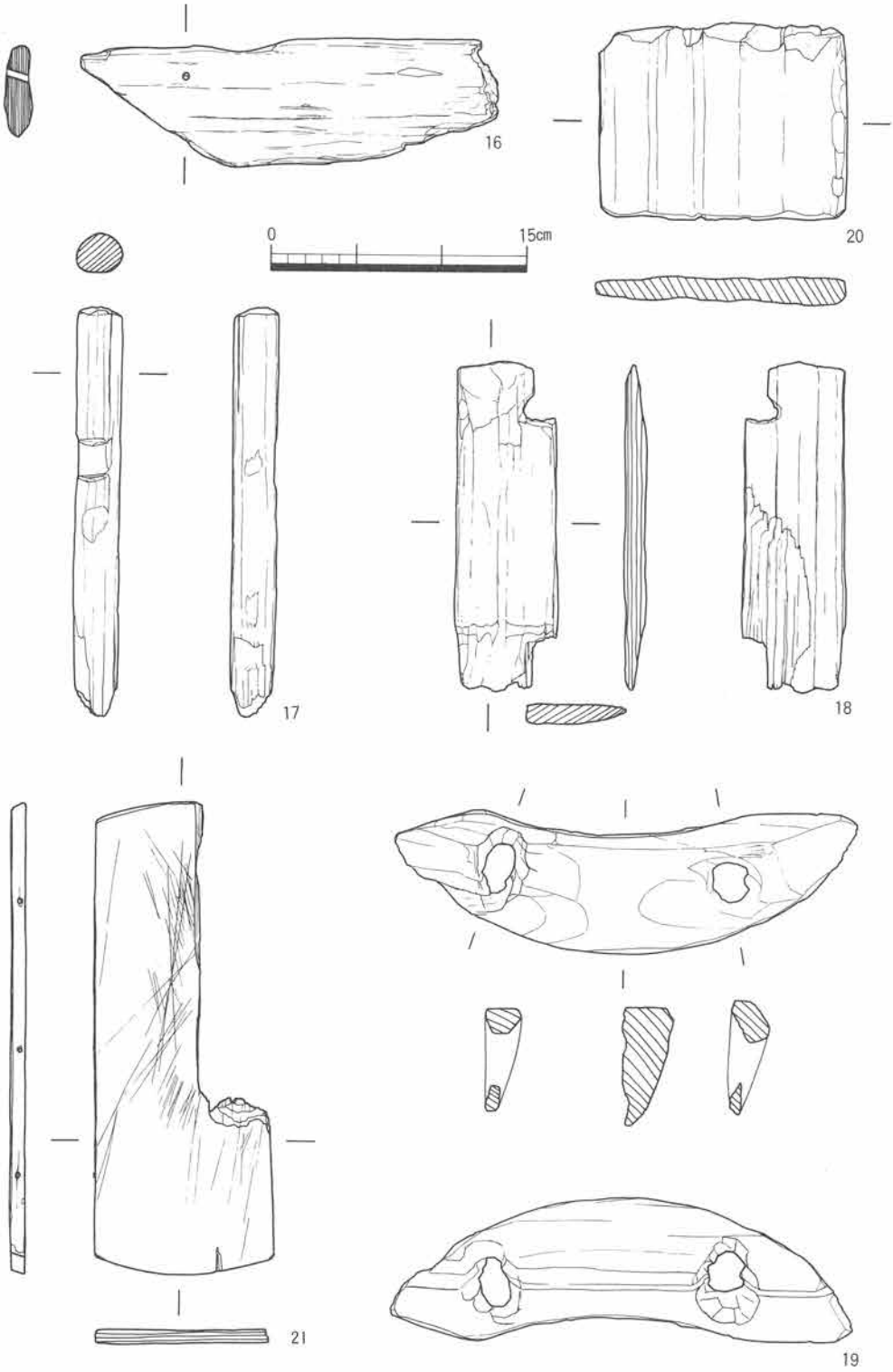
いずれも男性の性器を形どったものと考えられる。樹皮をとり去った心持材の一端を抉り、さらに有頭部を亀頭形に加工している。

用途不明品（第137図）

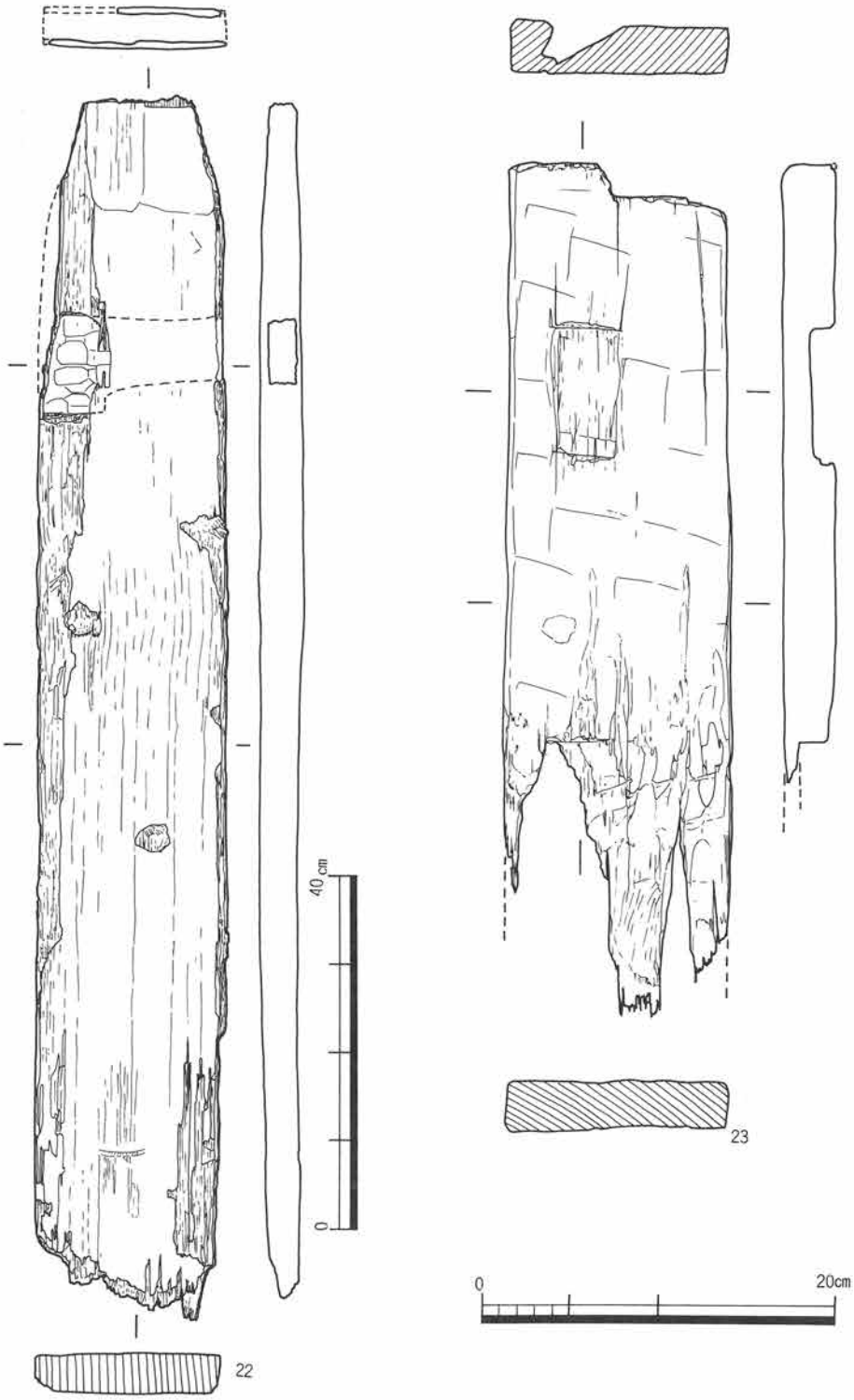
33・34・39は棒状品である。33は表面に面取りがされ断面が八角形を呈す。35は平面形がバチ形を呈し、側面にそれぞれ弧状の抉りが2段いれられている。下端部には何かをはさむためか切り込みが入れられている。36は柾目に木取りした板材を上端から抉り、一側面が滑めらかな曲線を描く。器面は平滑に仕上げられている。37は板目に木取りした角板の側面を削り、面取りを行ない。さらに先端部を抉り出す。鍬の把手とも考えられる。38は板材の側面を弧状に削る。上端部は突起部が削り出されている。



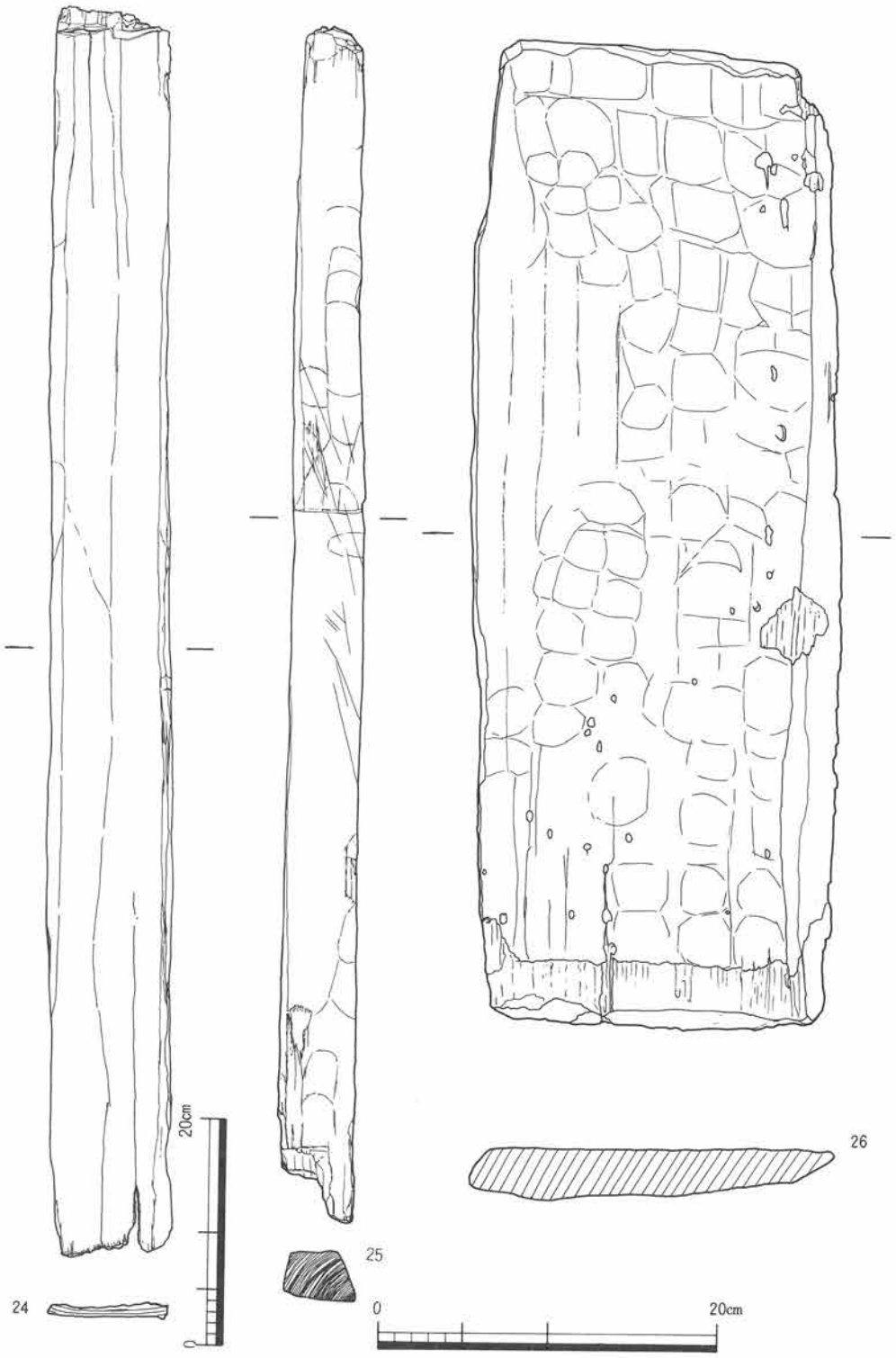
第132図　旧河道出土木製品



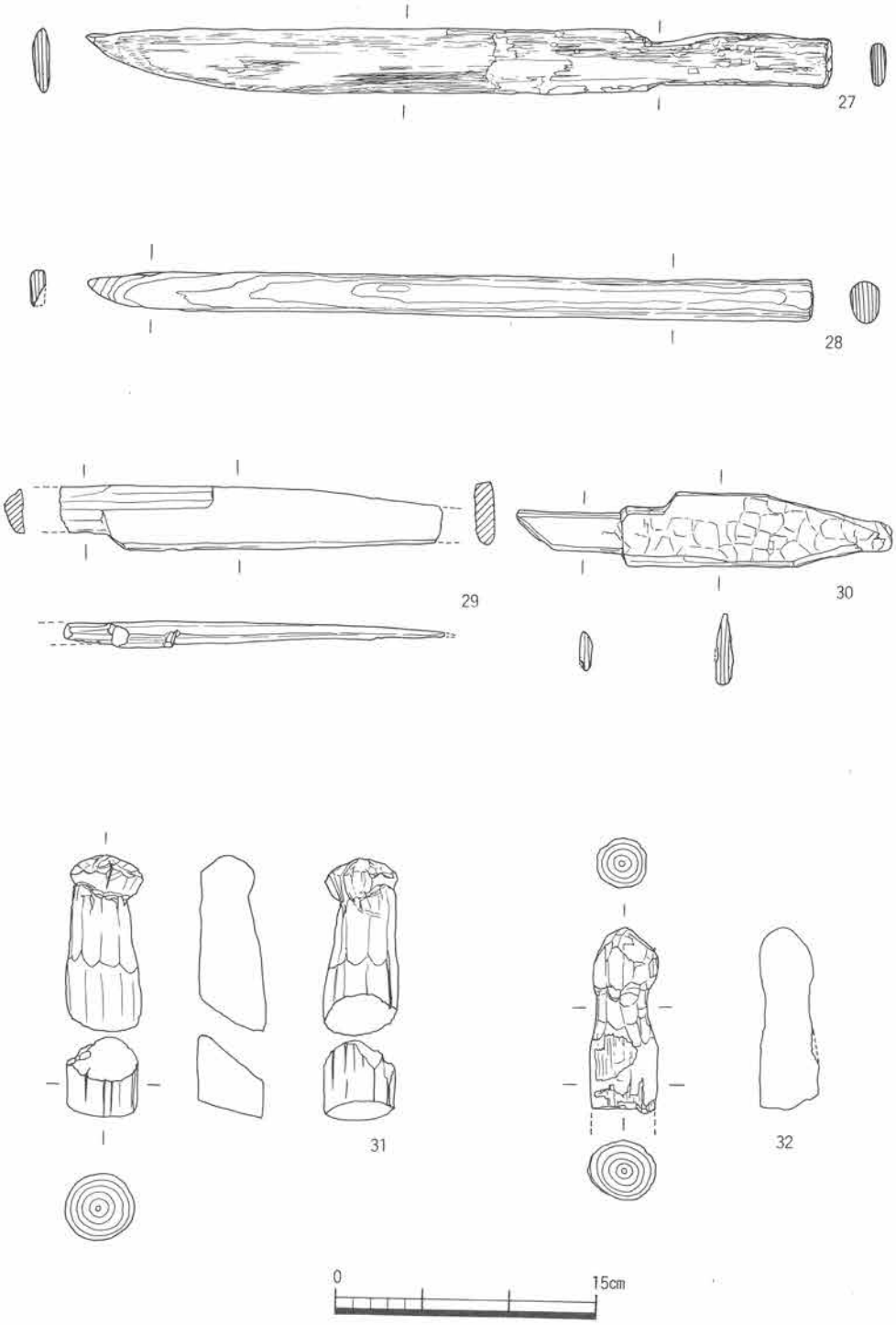
第133図　旧河道出土木製品



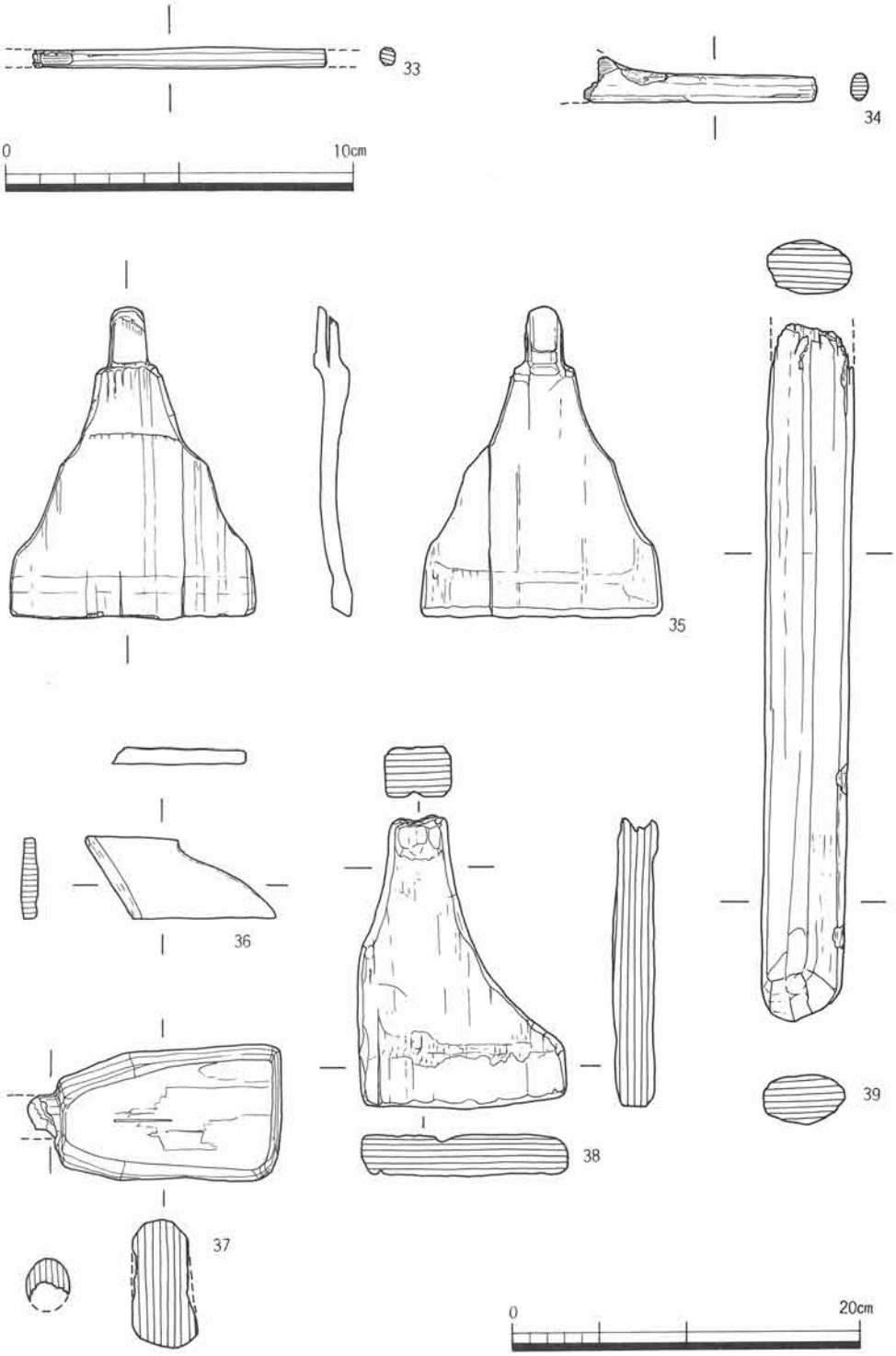
第134図　旧河道出土木製品



第135図　旧河道出土木製品



第136図　旧河道出土木製品



第137図　旧河道出土木製品

Ⅱ　中世の遺構と遺物

遺　構

掘立柱建物（ＳＢ－10～17）

ＳＢ－10（第138図）

調査区東側で検出した４間×３間の建物である。主軸方位はＮ－32°－Ｅを示し、柱間距離は桁行1.8ｍ・梁行1.8～2.1ｍを測る。柱穴は30～70cmの隋円形もしくは20～40cmの円形を呈す。柱穴内から土師器と黒色土器の小片が出土した。

ＳＢ－11（第138図）

ＳＢ－10の東に隣接して検出した４間×２間の総柱建物で、主軸方位はＮ－42°－Ｅを示し柱間距離は桁行2.1ｍ・梁行2.7ｍを測る。柱穴は30～80cmの隋円形や40cmの円形を呈す。

ＳＢ－12（第138図）

ＳＢ－10の南に隣接する３間×３間の建物である。主軸方位はＮ－37°－Ｅを示し柱間距離は桁行1.8ｍ・梁行２ｍを測る。柱穴は40～70cmの隋円形もしくは直径20cmの円形を呈す。

ＳＢ－13（第138図）

調査区西側で検出した２間×１間の建物である。主軸方位はＮ－56°－Ｅを示し、柱間距離は桁行2.5～３ｍ、梁行４ｍを測る。柱穴は30～50cmの隋円形もしくは直径30cmの円形を呈する。

ＳＢ－14（第138図）

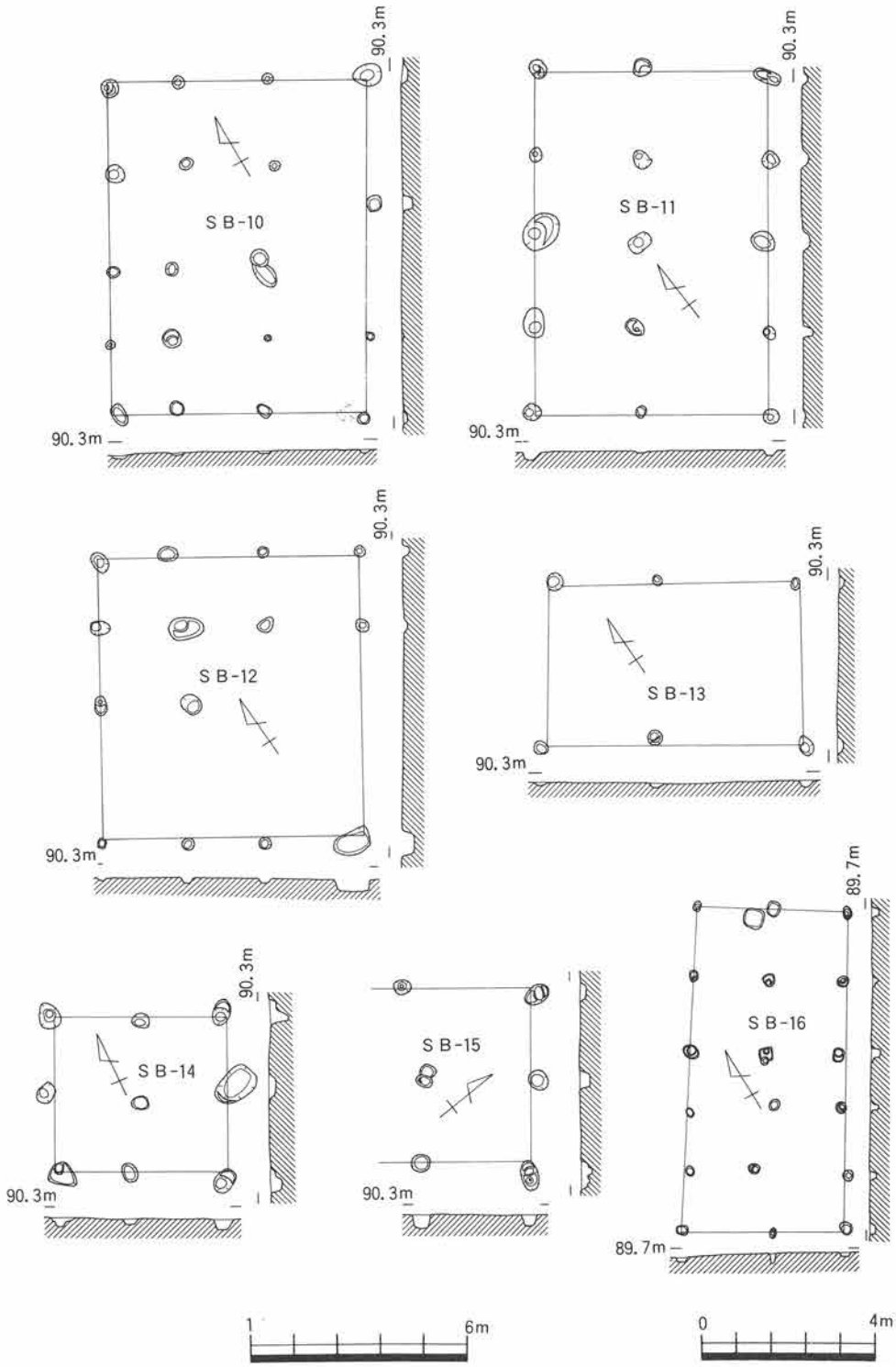
ＳＢ－10の北に隣接して検出した。２間×２間の総柱建物で倉庫と考えられる。主軸方位はＮ－26°－Ｅを示し、柱間距離は2.1ｍを測る。柱穴は長径50cm～１ｍの隋円形を呈する。南側梁列中央穴に根石とみられるこぶし大の石が２個遺存していた。

ＳＢ－15（第138図）

ＳＢ－13の南西で検出した。建物は南側調査区外にのびるため全容は明らかでないが、現状で２間×１間の規模である。主軸方位はＮ－39°－Ｅを示し、柱間距離は桁行2.7ｍ、梁行２ｍを測る。柱穴は長径40～60cmもしくは直径40～50cmの円形を呈す。

ＳＢ－16（第138図）

ＳＢ－14の北、旧河道上で検出した、５間×２間の大型の建物である。主軸方位はＮ－35°－Ｅを示し、柱間距離は桁行1.8ｍ、梁行2.1ｍを測る。柱穴の規模・形状にはばらつきがみられる。遺物はすべての柱穴内から土師器又は須恵器の小破片が少量出土した。



第138図　建物平面図

ＳＢ－17

ＳＢ－16の東に位置する１間×１間の小型の建物である。ＳＢ－16同様、南側建物群を検出した地山面から一段低くなった（比高差50cm）旧河道上から検出した。主軸方位はＮ－36°－Ｅを示し、柱間距離は2.1mを測る。

ＳＥ－５（第114図）

ＳＢ－10の東に隣接して検出した。ＳＢ－11西側桁列中央穴に掘方の一部が切られている。掘方は長径1.7m、短径1.4mの隋円形を呈し深さは1.1mを測る。北側にテラス状の段を有する。井戸を掘削する時の足場にしたものであろうか。構造は井底に曲物を一段設置しただけの簡単なものである。埋土は３層がほぼ水平に堆積する。遺物は１・２層から土師器・黒色土器・須恵器と鉄釘（第115図）が出土した。年代は13Ｃ代と考えられる。

ＳＥ－６（第114図）

調査区東端で検出した。掘方は直径２ｍの円形を呈し、深さは1.2mを測る。構造はＳＥ－５と同様、井底に曲物１段を埋設しただけの簡易なものである。埋土は４層がほぼ水平に堆積する。遺物は３層中に板や棒状の木製品が、１・２層中に土師器・黒色土器・須恵器・常滑焼とみられる陶器の小破片が出土した。年代は14Ｃ代と考えられる。

溝（ＳＤ－１）

調査区東側で検出したＬ字状の溝で途中切れてさらに東にのびる。ＳＢ－14・16・17を囲む溝と考えられ溝が途切れた部分が屋敷の入口とみられる。幅は40～50cm、深さは10～20cmである。土師質羽釜・黒色土器椀・鉄釘が出土した。年代は13Ｃ後半頃と考えられる。

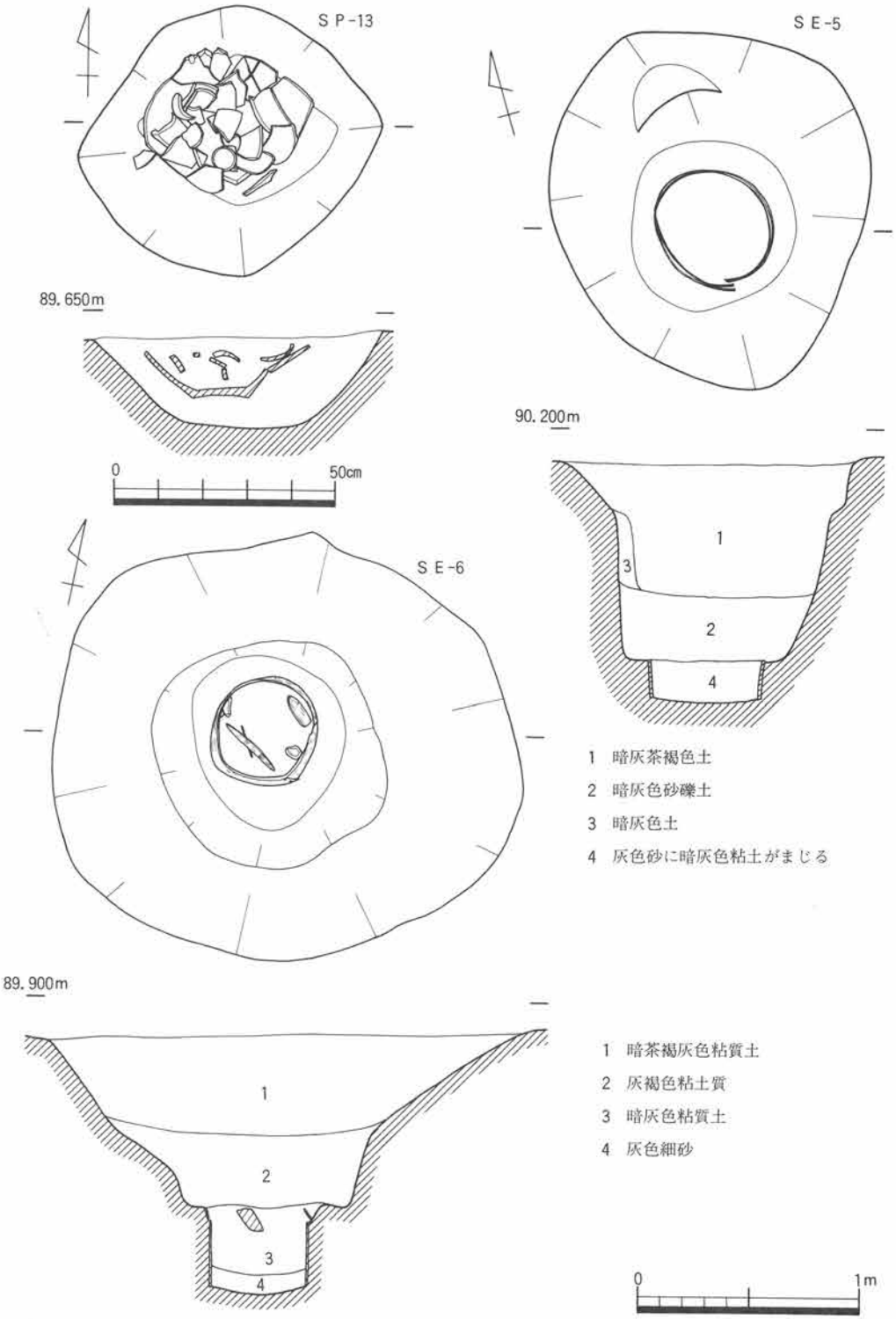
土壙（ＳＫ－１・２）

ＳＫ－１

調査区東側で検出した。長径３ｍ、短径1.4mを測る不定形な土壙で、ＳＢ－16と切り合い関係にある。埋土は暗黄褐色粘質土の単層である。

ＳＫ－２

ＳＥ－６に掘方の一部を切られている。形状は直径２ｍの円形を呈する。断面は摺鉢状を呈し、深さは１ｍと勇水点に達していることから井戸の可能性もある。埋土は褐灰色土と暗灰色粘砂土の上下二層が堆積する。



第139図　ＳＰ—13・ＳＥ—５・ＳＥ—６出土状況図

遺　物

ＳＥ－５（第140図１）

土器はいずれも小破片のため、鉄釘１点を図示するにとどめた。１は頭部を欠くが現存長３㎝、厚みは５㎜を計る。

ＳＤ－１（第140図２～７）

２は鉄釘である。現存長6.2㎝・厚みは1.2㎝を計る。腐食が著しいが断面は方形を呈する。３～６は黒色土器椀である。３は口縁部が内弯気味に立ち上がる浅い椀で、高台は断面三角形状のものを貼り付ける。磨滅が著しいが内面にランセ状暗文が観察できる。法量は口径12.3㎝・器高3.5㎝を測る７は瓦質羽釜である。口縁部は内傾し、端部は丸くおさまる。口縁部直下に短く外上方へ張り出した断面台形状の鍔を貼り付けている。

ＳＰ－９（第140図８）

平担な底部から口縁部は内弯気味に立ち上がる土師器小皿である。横ナデは口縁部外面に一段施す。口径９㎝・器高1.6㎝,を計る。

ＳＰ－10（第140図９）

あげ底気味の底部から口縁部はほぼ直線的に立ち上がる土師器小皿である。口縁部外面に横ナデを一段施す。口径9.6㎝・器高1.4㎝を計る。

ＳＰ－11（第140図10～12）

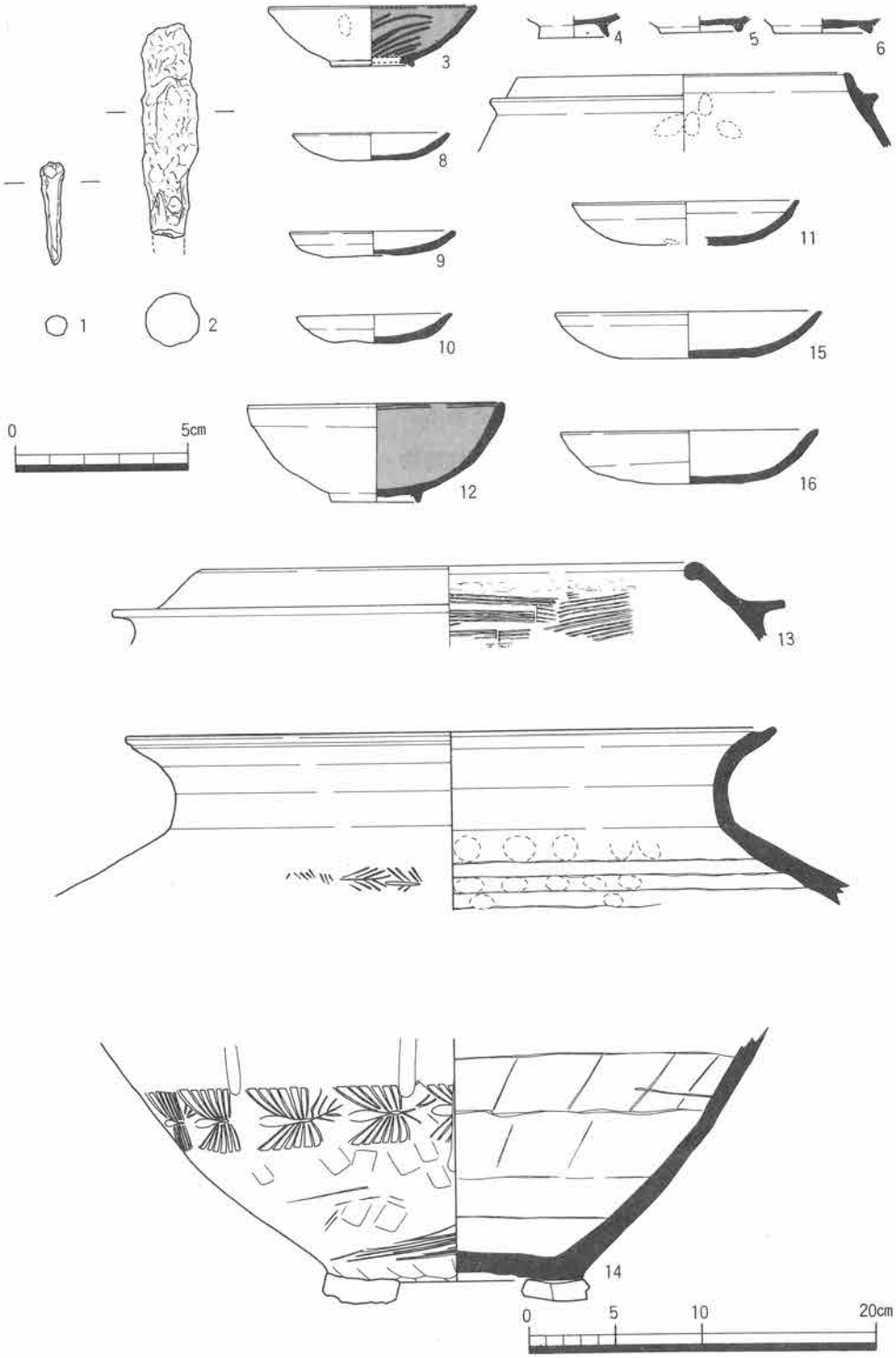
10は土師器小皿である。不整形な底部から口縁部は外反気味に立ち上がる。外面体部中位まで横ナデを一段施す。口径９㎝・器高1.6㎝を計る。11は土師器大皿である。平担な底部から口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁部外面に横ナデを一段施す。口径13.2㎝・器高3.5㎝を測る。12は黒色土器椀である。口縁部が内弯して立ち上がる深い椀で、断面台形のしっありした高台がつく。口縁端部内面には沈線がめぐる。器面の磨滅が著しく、調整等は不明瞭である。口径15㎝・器高5.7㎝を計る。

ＳＰ－12（第140図13）

土師質羽釜である。口縁部は内傾し、端部は内側に折り込み丸くおさめる。口縁部直下に断面方形の鍔を貼付ける。内面に横方向の粗いハケ目を施す。復元口径は29㎝を計る。

ＳＰ－13（第140図14）

常滑焼の甕で体部のみを欠損する。直立する頸部から口縁部は外反して立上がり端部は丸くおさめる。底部は平底で焼成時の台とみられる別個体の破片が付着している。口縁部



第140図　ＳＥ・ＳＤ・ＳＰ出土遺物（中世）

内外面横ナデ、外面体部下半ヘラによるナデアゲ、内面体部下半はヘラによる横方向のナデを施す。外面肩部と体部下半に蝶文の叩目を一列施す。外面体部下半に自然釉がかかる。

遺構面（第140図15・16）

表土掘削時に出土した遺構に伴なわない土器である。いずれも土師器大皿で、口縁部は内弯気味に立ち上がる。口縁部外面に横ナデを一段施す。15は口径15.5cm・器高2.5cm、16は口径15cm・器高は3cmを計る。

4　小結

ここでは第8調査区の成果を以下にまとめる。

まず古墳時代については竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土壙を検出した。竪穴住居で確実なものとしては6C初頭に位置づけられるSH－1・1棟だけであったが掘立柱建物とした中に建物の規模等から竪穴住居の可能性があるものが含まれており（SB－1～3）もう少し数が増えることが予想される。掘立柱建物の年代については根拠に乏しくその判断は難しいが、建物の柱穴から出土した遺物の検討からここでは一応6C前半代に位置づけておく。近江における竪穴住居から掘立柱建物への転換は6C後半代と湖西南部地域が最も早いことが知られている。守山市内においても吉身北、南遺跡が6C後半～7C初頭にその転換期を迎えるが、本遺跡においてはそれよりやや早い6C前半代にはすでに掘立柱建物が主流を占めており、いまだ竪穴住居が一般的であった湖南地域においては比較的先進的は集落景観を呈していたと考えられるのである。

土壙においては製塩土器が多量に出土したSK－1が注目される。製塩土器は小片を含めて相当数出土しており県内では希な発見である。内陸部で出土する製塩土器は「堅塩」の運搬及び精製容器と祭祀用品としての性格が考えられている。本例は土壙の北西端70～80cmの範囲にまんべんなく散らばしたように出土した。製塩土器には火熱を受け変色しているものも多量にみられたが。土壙の埋土には明瞭な炭化物や灰層は確認できないことから近接する場所で製塩土器を焼き、破損した土器を本土壙に一括廃棄したとものと考えられる。その行為が何らかの祭祀に関わるものはどうかを判断する資料は今のところは無い。ただ本土壙が旧河道の肩部にあるという立地と、本遺跡から滑石製品や木製形代が出土することなどからその可能性を指摘するにとどめる。又製塩土器はすべて薄手で硬質の小型丸底式のタイプのものであった。産地は決め難いが、体部外面にタタキが施されたものが若干みられることから紀淡地方[注2]か瀬戸内地方の可能性が強いと考える。

中世は掘立柱建物と井戸が主要な遺構である。建物の方位と柱穴内の遺物からほとんどのものが区画溝が伴なう時期（14C代）のものと考えられるが、本調査においては明瞭な区画溝は検出されなかった。小溝で囲まれたＳＢ－16・17は旧河道上に立地しているが、河道最上層の堆積の状況から第６調査区で見られたようにあらかじめ整地作業を行なった後、建物を建築していることが推定できる。

最後に旧河道は第５・６調査区で検出した河道の延長部と考えられ、境川の威盛の一部を示すものである。川底からは今でも清水が湧き、当時の人間にかなりの恩恵を与えていたことは容易に想像がつく。しかし調査区中央から西にかけてその痕跡が示すように、ひとたび濁流となれば人家は流され、地面さえも削り取る暴れ川と化したのである。旧河道から出土した木製形代や滑石製品などの祭祀品には当時の人間の水に対する祈りがこめられているのかもしれない。（宮下）

注１　中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房1981年

注２　岡山大学近藤義郎先生に実見していただいた。

第９節　第９調査区

Ⅰ　調査概要

第９調査区は遺跡のほぼ中心をなすところである。確認された遺構は他の地区と同様に区画溝と掘立柱建物で構成された中世期に属するものであった。しかしながら、他の地区とは違い単郭としては敷地・建物ともに規模が大きく、しかも土壇上に構築されていた。また、出土遺物の量も多くその内容も他を凌ぐものがあった。遺構は集落のほぼ中心に位置しており、これを中心として集落が形成された形跡が伺えた。以下にそれらの内容について説明を加える。

Ⅱ　中世の遺構と遺物

１.遺　構

掘立柱建物

この調査区においては千個を越える柱穴跡を検出した。数時期に渡って立替えがおこなわれたと考えられるが、掘立柱建物として復元できたのは井戸の覆屋を含めた23棟であった。以下にその概要を記述する。

ＳＢ０１（第141図）

北側土壇の西端をおりたところにＳＫ０２を覆うように位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行２間×梁間１間の南北棟で、中央に柱を持たないものである。建物の方向は現行条里に沿うＳＤ04に平行するものである。

ＳＢ02（第141図）

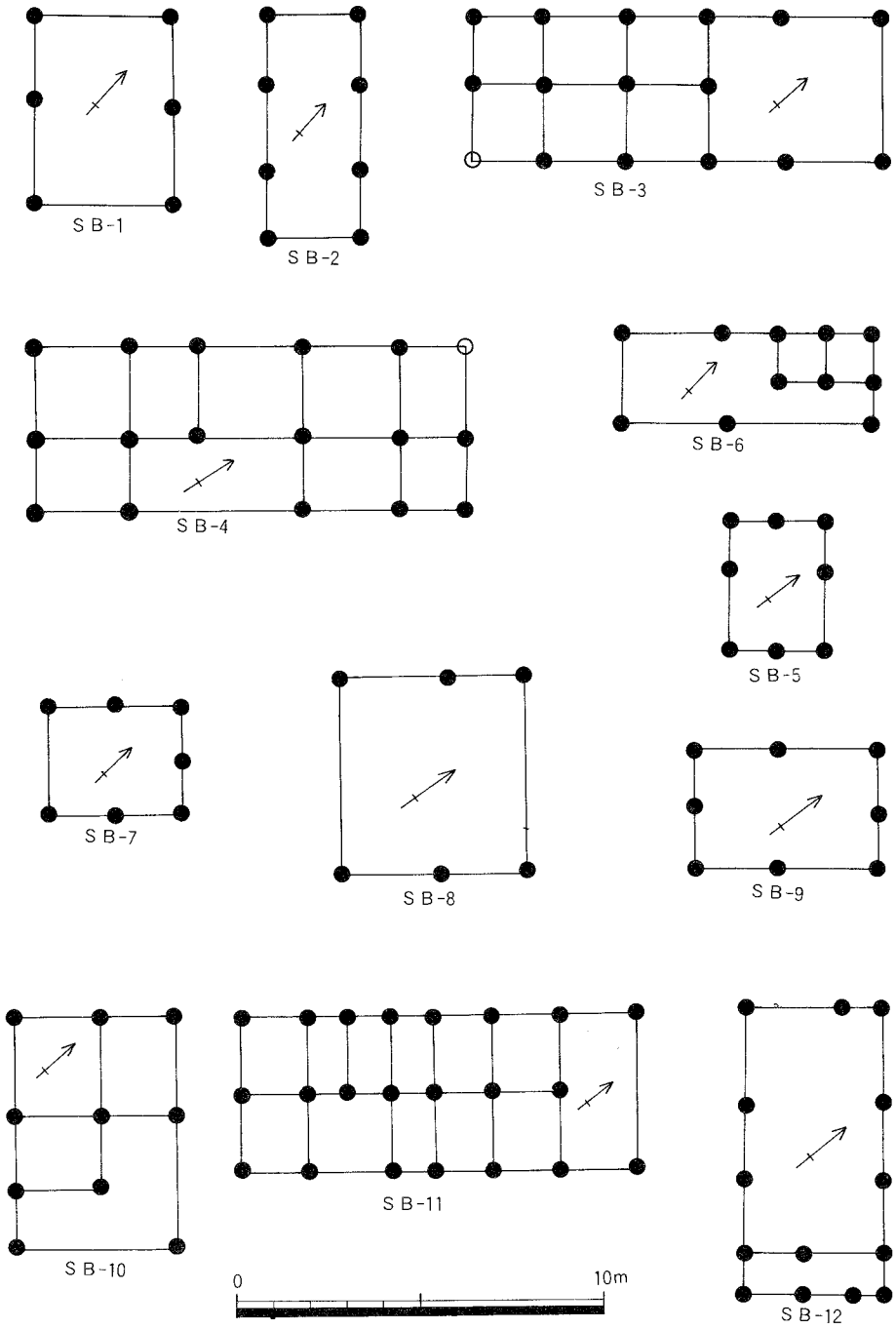
北側土壇の北東角に位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行４間×梁間１間の南北棟で、中央に柱を持たないものである。建物の方向はＳＤ04に平行するものである。

ＳＢ03（第141図）

北側土壇の南角に位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行５間×梁間２間の東西棟で、南側桁行３間分は総柱で中間柱はやや西に寄っている。また北側桁行２間分の梁間の中間柱がなく土間打ちになっている。建物の方向はＳＤ04に平行するものである。

ＳＢ04（第141図）

北側土壇のＳＢ02の北側に位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行５間×梁間２間の南北棟で、北より１間目と４間目が他の半間になっておりやや短く東端北より３間目が１間なく入口を構成している。また梁間はやや東側が短くなっている。建物の方向はＳＤ04より大きく西に振っているものである。



第141図　ＳＢ間取図１

ＳＢ05（第141図）

北側土壇のＳＢ04の南端に重複して存在する掘立柱建物である。建物の規模は桁行２間×梁間２間の東西棟で梁間北より１間目がやや短くなっている。建物の方向はやや西に振っているものである。

ＳＢ06（第141図）

北側土壇の中央北よりに位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行４間×梁間１間の南北棟で北西角を梁間１間割増ししている。建物の方向はＳＤ04よりやや東に振るものである。

ＳＢ07（第141図）

北側土壇の北西角に位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行２間×梁間２間の南北棟である。建物の方向はＳＤ04に平行するものである。

ＳＢ08（第141図）

南側土壇の北角、ＳＤ16に挟まれたところに位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行１間×梁間２間の東西棟で梁間がやや北に寄っている。中間柱はない。建物の方向はＳＤ04より大きく西に振るものである。

ＳＢ09（第141図）

ＳＢ09の北側に位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行２間×梁間２間の南北棟である。中間柱はない。建物の方向はＳＤ04より大きく西に振るものである。

ＳＢ10（第141図）

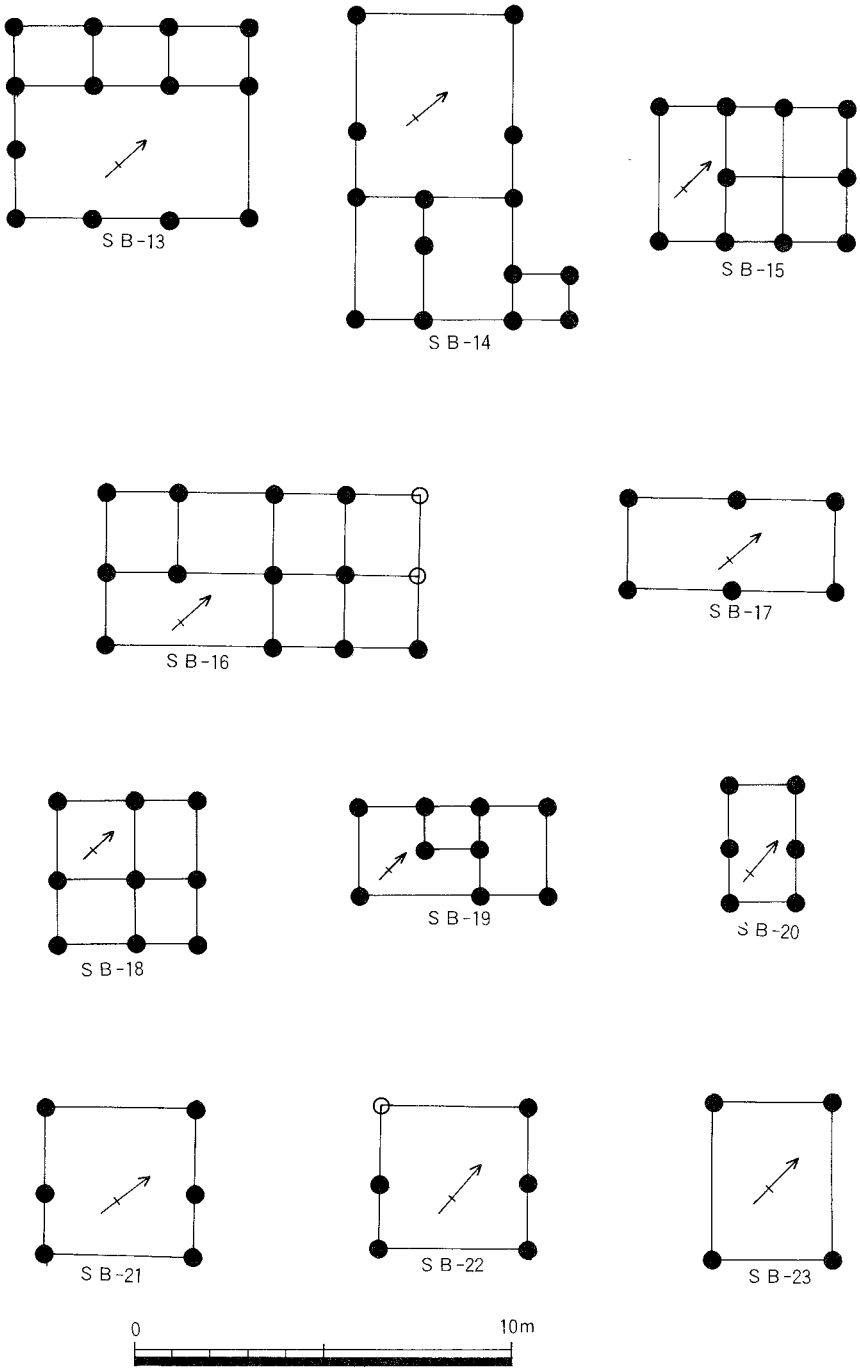
南側土壇南東角に位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行３間×梁間２間の東西棟である。建物の方向はＳＤ04と平行するものである。

ＳＢ11（第141図）

南側土壇のＳＢ10に重複する位置に存在する掘立柱建物である。建物の規模は桁行７間×梁間２間の南北棟で桁行の北から４間目から６間目にかけてが短い。また、桁行と梁間に各々２本の柱が抜けている。建物の方向はＳＤ04から大きく西に振っているものである。ある。

ＳＢ12（第141図）

南側土壇のＳＢ10とＳＢ14の間に挟まれた位置に存在する掘立柱建物である。建物の規模は桁行４間×梁間３間の東西棟で桁行の南から１間目以外は中間柱はない。建物の方向はＳＤ04より大きく西に振っているものである。



第142図　ＳＢ間取図２

ＳＢ13（第142図）

南側土壇のＳＢ11の北側に位置する掘立柱建物で、建物規模は桁行３間×梁間３間の東西棟で梁間東２間分には中間柱がない。建物方向はＳＤ04よりやや西に振っている。

ＳＢ14（第142図）

南側土壇のＳＢ13に重複するように存在するように位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行４間×梁間２間の東西棟で南東角に１間×１間の張りだしをもっている。また、梁間西より２間分は中間柱がない。建物の方向はＳＤ04よりやや西に振っている。

ＳＢ15（第142図）

南側土壇のほぼ中央に位置する掘立柱建物である。建物の規模は梁間３間×桁行２間の南北棟で梁間南から１間目に中間柱がある。建物の方向はＳＤ04と平行している。

ＳＢ16（第142図）

南側土壇のＳＢ15の直ぐ東に位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行４間×梁間２間の南北棟で桁行南から１間目の柱が無い。建物の方向はＳＤ04と平行している。

ＳＢ17（第142図）

南側土壇の北角に位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行２間×梁間１間の南北棟である。建物の方向はＳＤ04より大きく西に振っているものである。

ＳＢ18（第142図）

南側土壇のＳＢ17の北に位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行２間×梁間２間の総柱である。建物の方向はＳＤ04からやや西に振っているもので倉と考えられる。

ＳＢ19（第142図）

南側土壇のＳＢ16の東側に位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行３間×梁間１間の南北棟で桁行の南から１間目の柱が１本無く入口を形成している。建物の方向はＳＤ04からやや西に振っている。

ＳＢ20（第142図）

南側土壇ＳＢ19と重複する位置に存在する掘立柱建物である。建物の規模は桁行２間×梁間１間の東西棟である。建物の方向はＳＤ04に平行しているものである。

ＳＢ21・22・23（第142図）

ＳＫ23・ＳＥ21、22の覆屋となるものである。ＳＢ21は桁行２間×梁間１間の東西棟でＳＤ04より大きく西に向いている。ＳＢ22はＳＤ04よりやや東に向いている。ＳＢ23は１間×１間の東西棟で方向はＳＤ04に平行している。

溝

調査区ないには大小合わせて20数本の溝と考えられる遺構を検出した。以下に、その主なものについて説明を加える。

ＳＤ01（第143図）

調査区の北西から南西にかけてＬ字に曲がる溝である。第１調査区にある郭と第３調査区にある郭とを区切る区画溝の一部と考えられる。第３調査区にある郭にむけて一部区切れて、またさらに南に伸びている。幅は約２ｍを計り、深さは約40cmであった。埋土は４層からなる平行堆積であった。

ＳＤ02

調査区の西に位置する土壙状の溝で、長さ約８ｍ、幅約１ｍで完結する。

ＳＤ03

ＳＤ02の北側に位置し、ＳＥ01・ＳＫ02に切られた形で存在する溝である。アメーバー状の土壙から西に真っすぐ、長さ７ｍの溝が続いている。

ＳＤ04（第143図）

調査区の北から逆ｈ状に流れる溝である。建物と敷地を区画する区画溝である。溝は幅約３～４ｍ、深さ1.2ｍを計る。また、南の端には２つの土壙状の落ち込みがある。この土壙ＡとＢの間は土盛状になっており、その周囲には杭の跡も認められるところから近年報告のある土橋や板橋があったものと考えられる。（第144図）この溝からは13～14世紀にわたる多量の遺物が出土している。

ＳＤ05・06

南側土壇の西端を敷地の中央から土壇の端まで切り通すように流れる溝である。途中でＳＤ16に切られている。

ＳＤ07

調査区の西端を南北に流れる幅約１ｍの溝である。ＳＤ01と先端が行き違うように位置しており、間に道が形成されている。

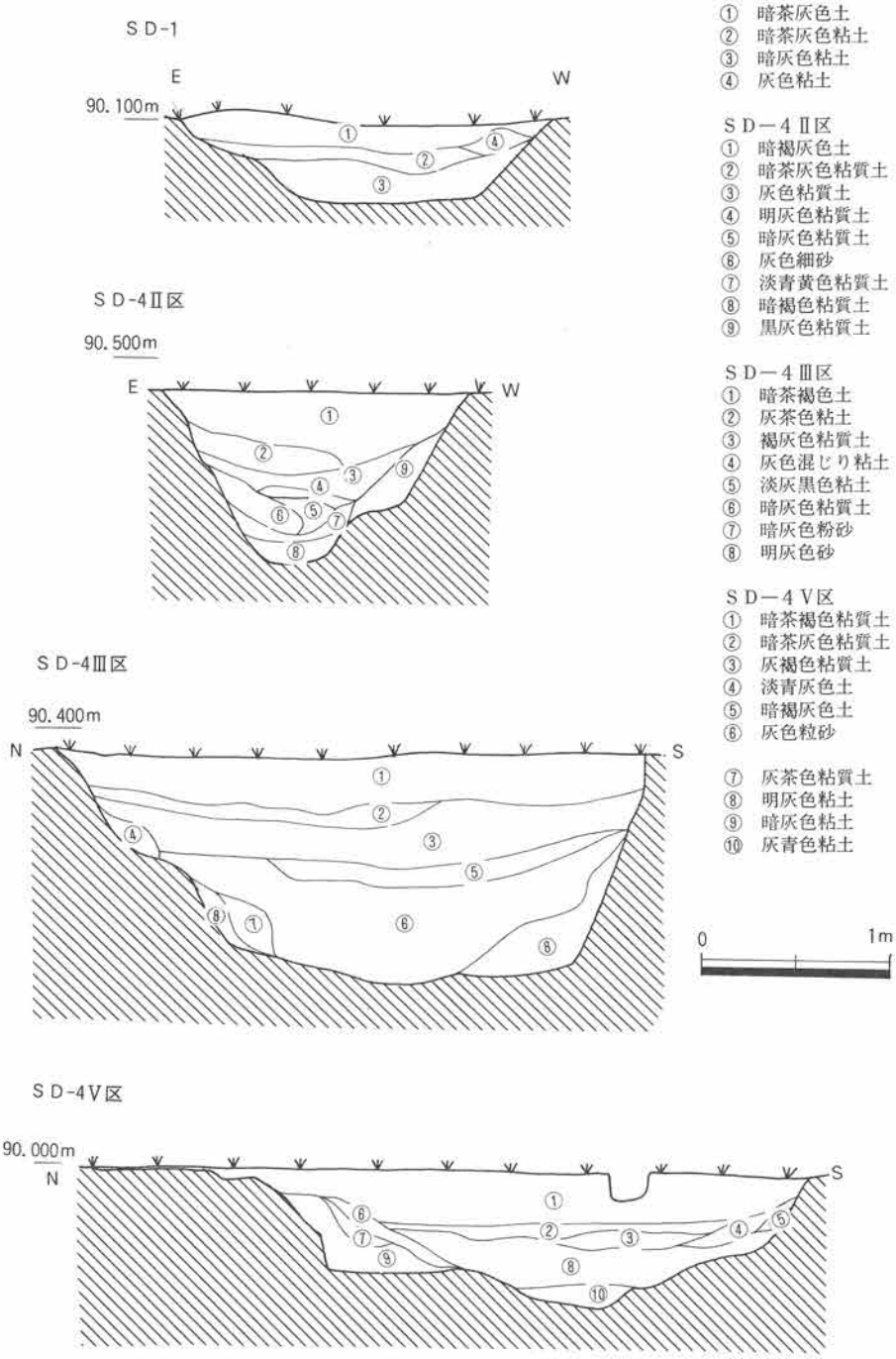
ＳＤ08・09・12

南側土壇の中央を東西に流れる溝である。全てＳＤ12によって途中を切られている。

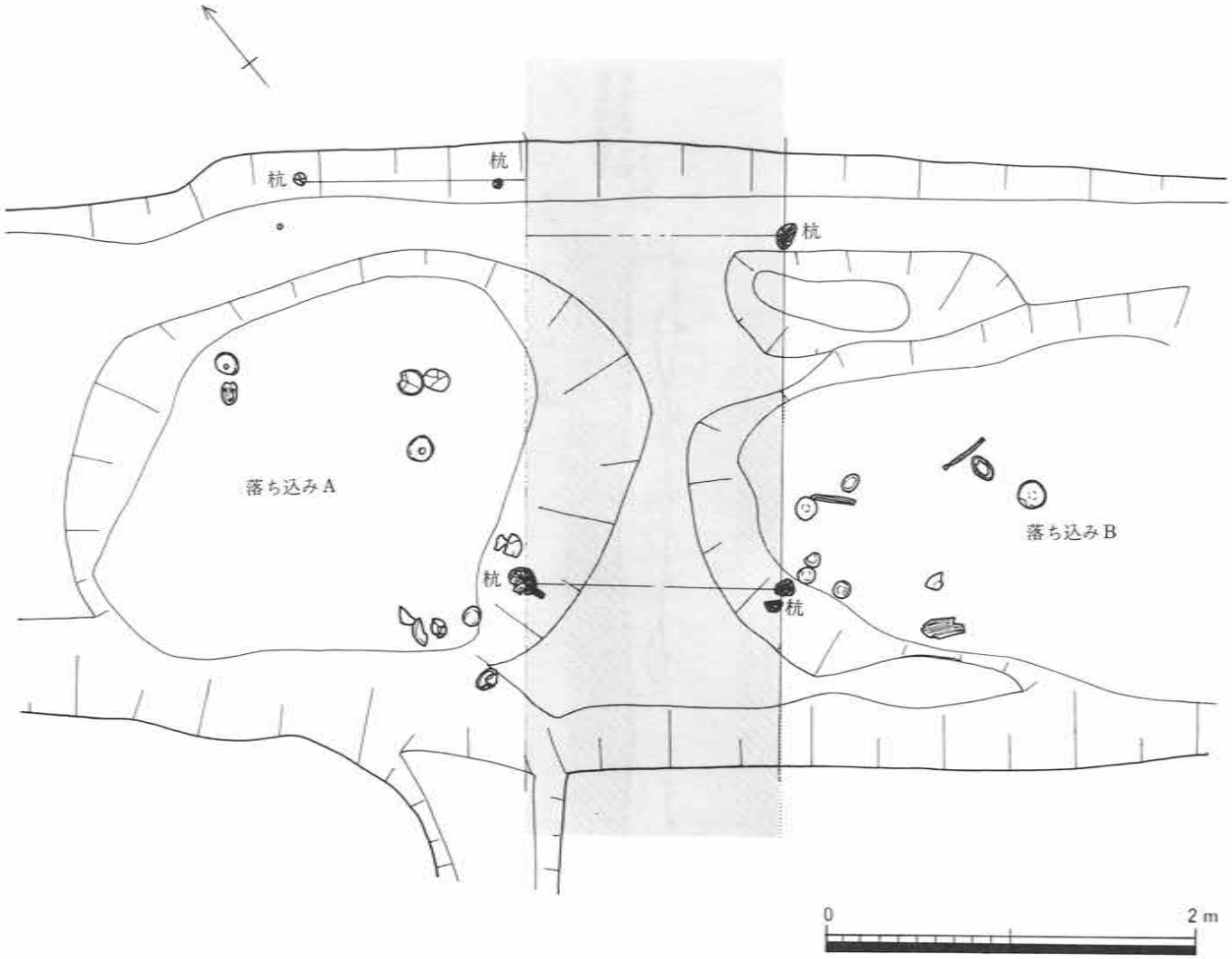
ＳＤ10

南側土壇の北西の端を南北に蛇行するように走る溝である。長さ約13ｍで完結している。

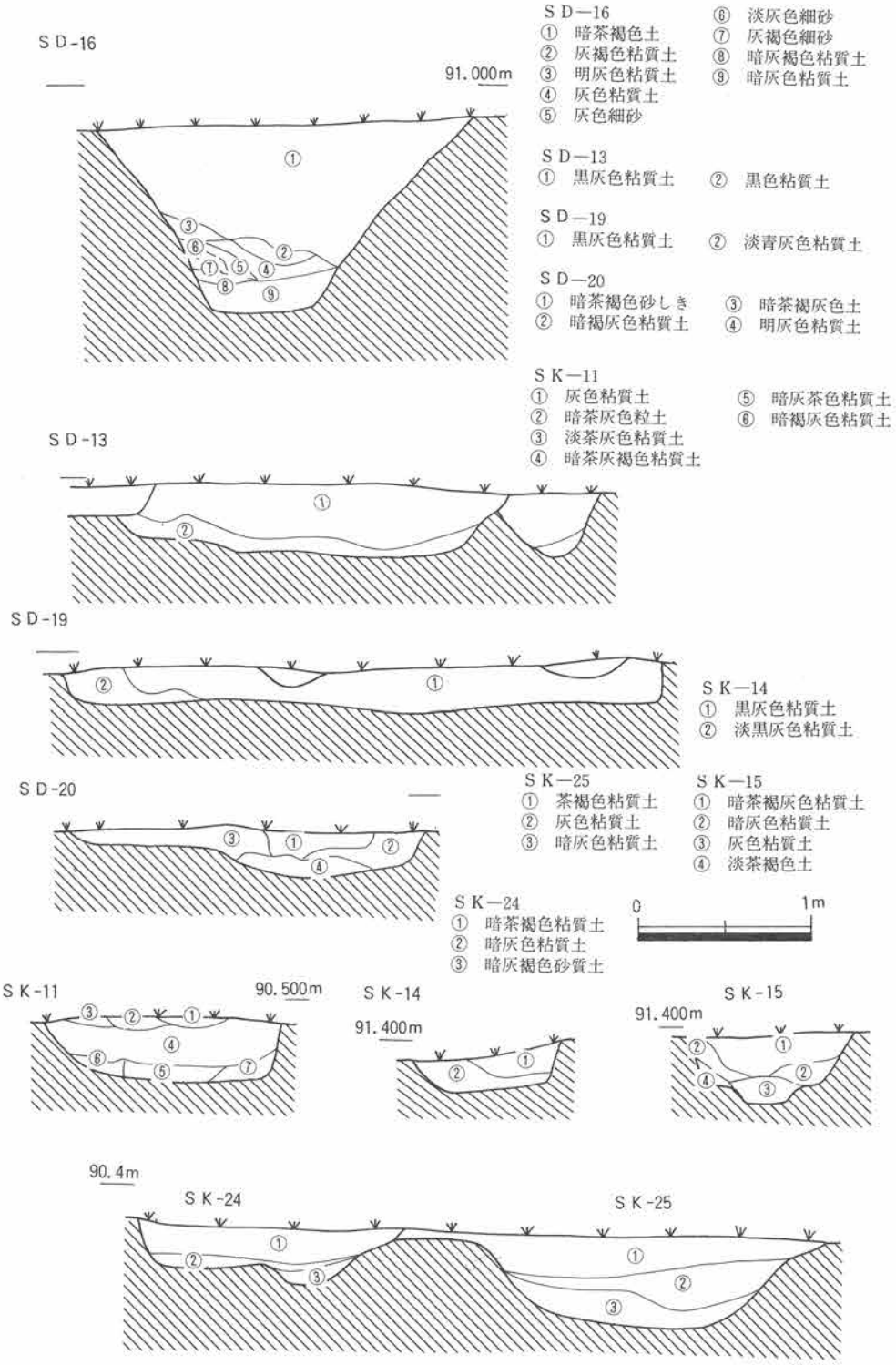
ＳＤ11



第143図　ＳＤ－１，４断面図



第144図　ＳＤ－４橋推定位置図



第145図　ＳＤ，ＳＫ断面図

南側土壇の北隅に位置する溝である。アメーバー状土壙から触手が広がるように４本の溝が張出し、各々が完結している。

ＳＤ13・14・19（第145図）

南側土壇の北辺をＬ字に連なる溝である。この溝は隣の調査区にも続くことが確認されている。その形状から方形周溝墓であると考えられ、下層の遺構が露頭したものと考えられる。

ＳＤ15

南側土壇の南端に東西に流れる溝である。長さ約５ｍで完結している。

ＳＤ16（第146図）

南側土壇の中央を南北にＳＤ04に向かって貫く溝である。幅は約２ｍ、深さ約1.2mであった。ＳＤ04と同じように建物と敷地を区切る区画溝と考えられる。

ＳＤ18

南側土壇の北辺を東西に走る溝である。東は調査区外に伸び西はＳＤ16に突き当たる。

ＳＤ20（第146図）

南側土壇の西を南北に走る溝である。南端をＳＤ16によって切られている。

ＳＤ21

南側土壇の西隅にアメーバー状に広がる溝である。

ＳＤ22

北側土壇上をコの字状に走る溝である。溝は北と東側を建物を囲うようにＳＤ04と平行に走りＳＤ04との間に犬走りを形成している。また、そのまま西側を走るＳＤ07とも平行に走り、道状の空間を形成している。

ＳＤ23・24

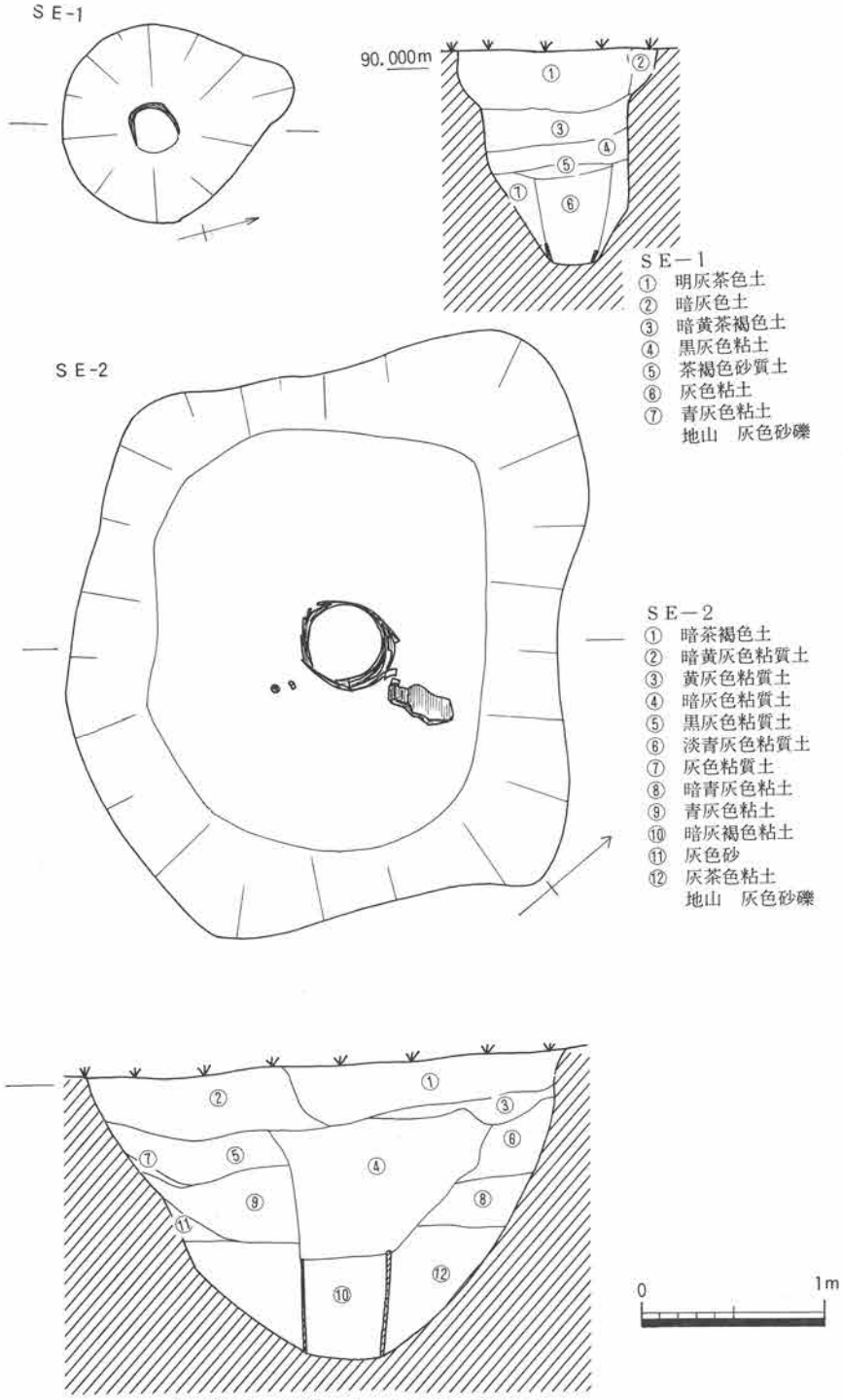
北側土壇の中央、東側を土壇の端に向かって切り通すように斜めに走る溝である。

井　戸

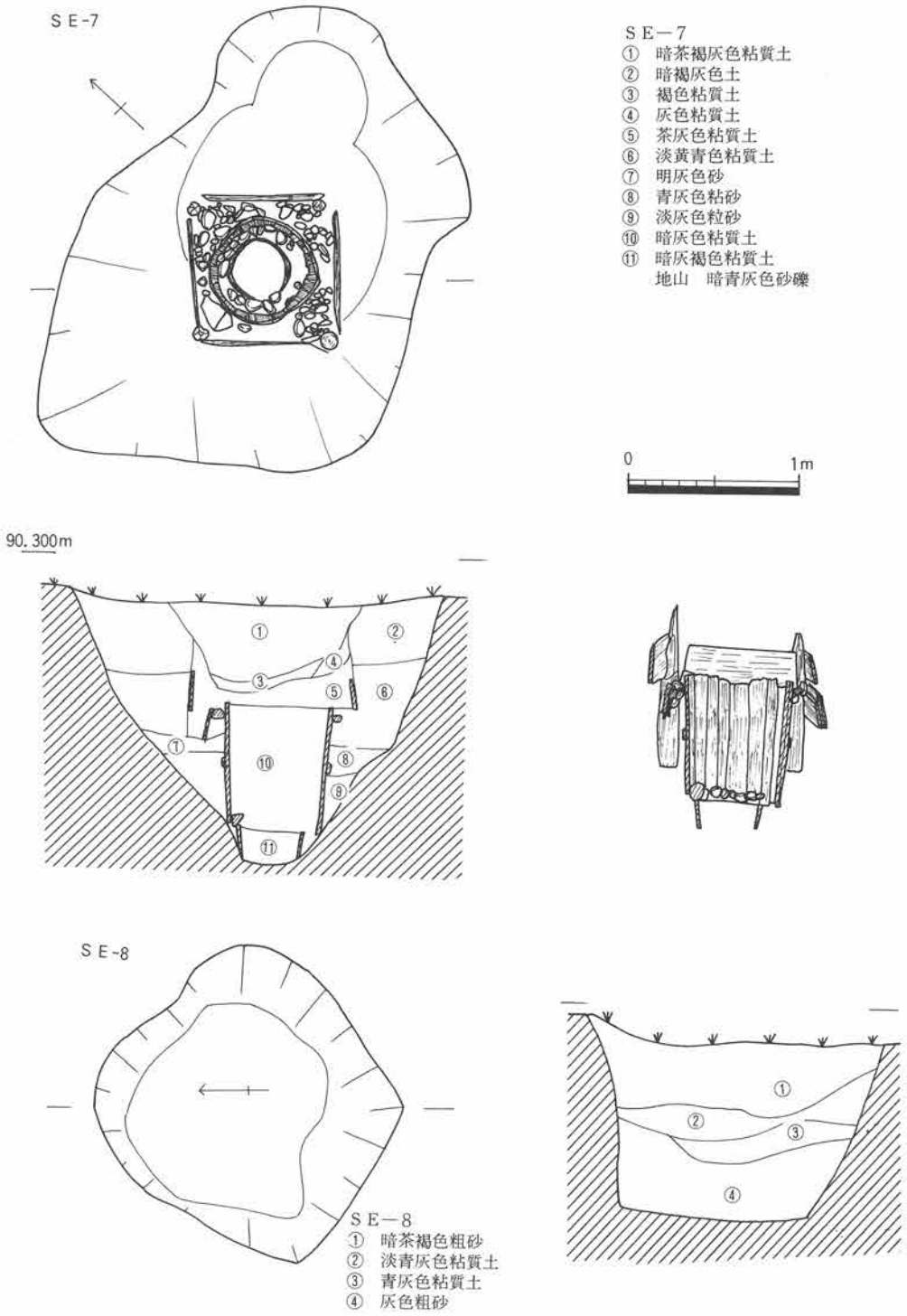
井戸は９基を検出した。いずれも建物の敷地の北辺もしくは南辺に区画溝等に付随するように存在していた。

ＳＥ01（第146図）

ＳＢ01の南、ＳＤ04に付随する位置で検出した井戸である。掘方は径約２ｍの涙形でほぼ中央に井筒を据えていた。深さは2.4ｍで最下段に径約20cmの曲物が検出された。埋土は７層からなっており、その状況から上段の曲物は抜き取られたものと考えられる。



第146図　SE－1，2平面・断面図



第147図　ＳＥ７，８平面・断面図

ＳＥ02（第146図）

調査区の東端、ＳＢ20の北に位置する井戸で覆屋を持っている。掘方は長辺約６ｍ、短辺約５ｍの長方形を呈しており、中央やや北よりの位置に井筒を据えていた。深さは約３ｍで最下段より２段分の曲物が検出された。埋土は12層からなっており、その状況から上段の曲物は抜き取られたものと考えられる。埋土からは埋井の儀が行われたとみられる竹筒がたてられていた。

ＳＥ03～06は調査の都合上欠番となっている。

ＳＥ07（第147図）

南側土壇のほぼ中央に位置する井戸で覆屋を持っている。掘方はアメーバー状を呈しており、中央に四隅横桟立板の井筒枠と井筒を据えていた。深さは約３ｍで最下段に径約40㎝、高さ約20㎝の曲物が据えられ、その上部に径約1.2ｍ、高さ約1.5ｍのタガで絞られた丸桶が据えられていた。また、井戸内には埋土は井筒内は６層で、掘方は４層で構成されていた。ほぼ当時の状態を止めているものと考えられる。

ＳＥ08（第147図）

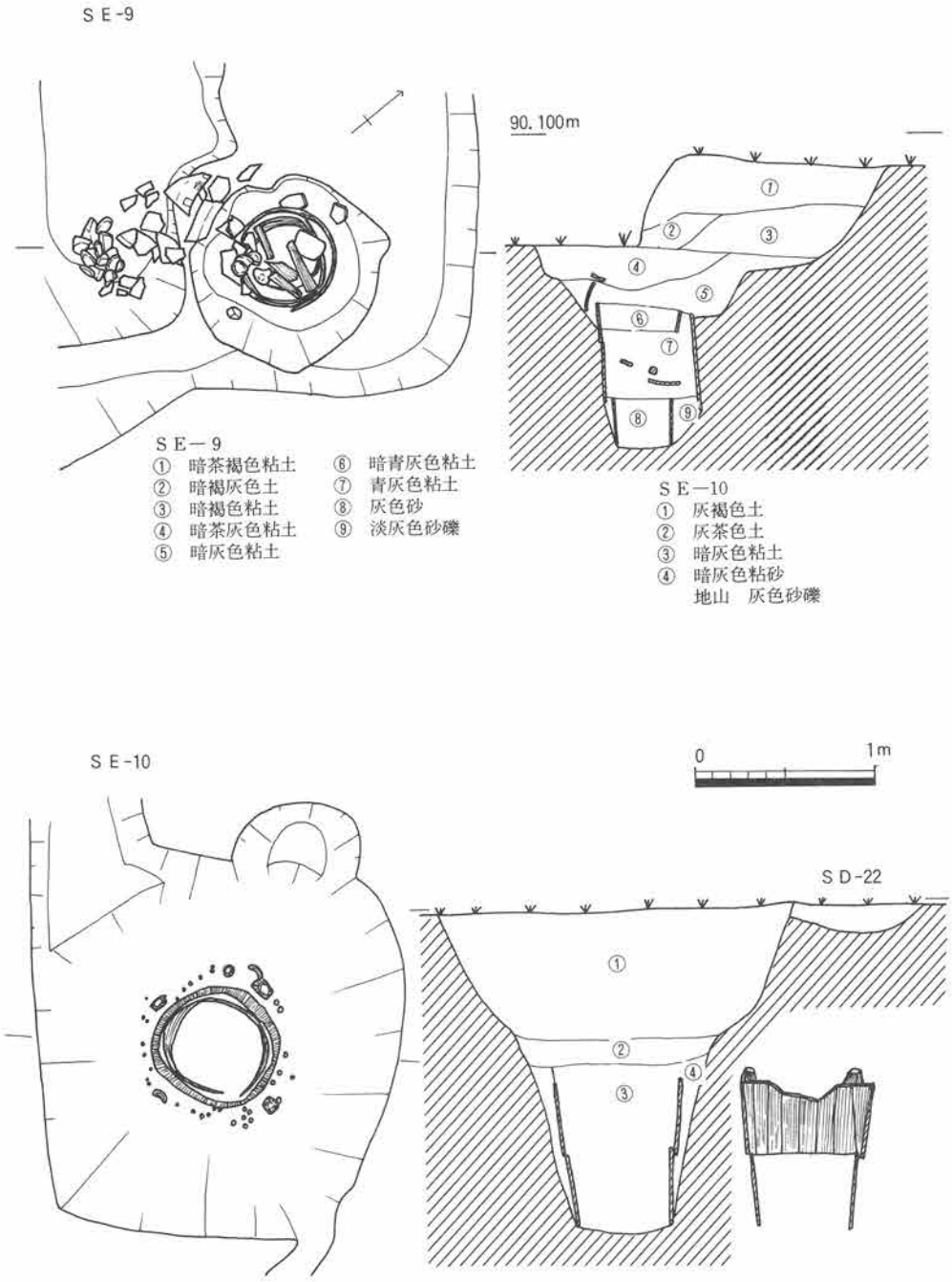
北側土壇の東辺、ＳＤ04との間の犬走りに土壇に一部が喰いこむように位置する井戸である。掘方は一辺約2.4ｍの方形を呈しており、井筒は検出されなかった。深さは約２ｍである。埋土は４層の平行堆積であった。

ＳＥ09（第148図）

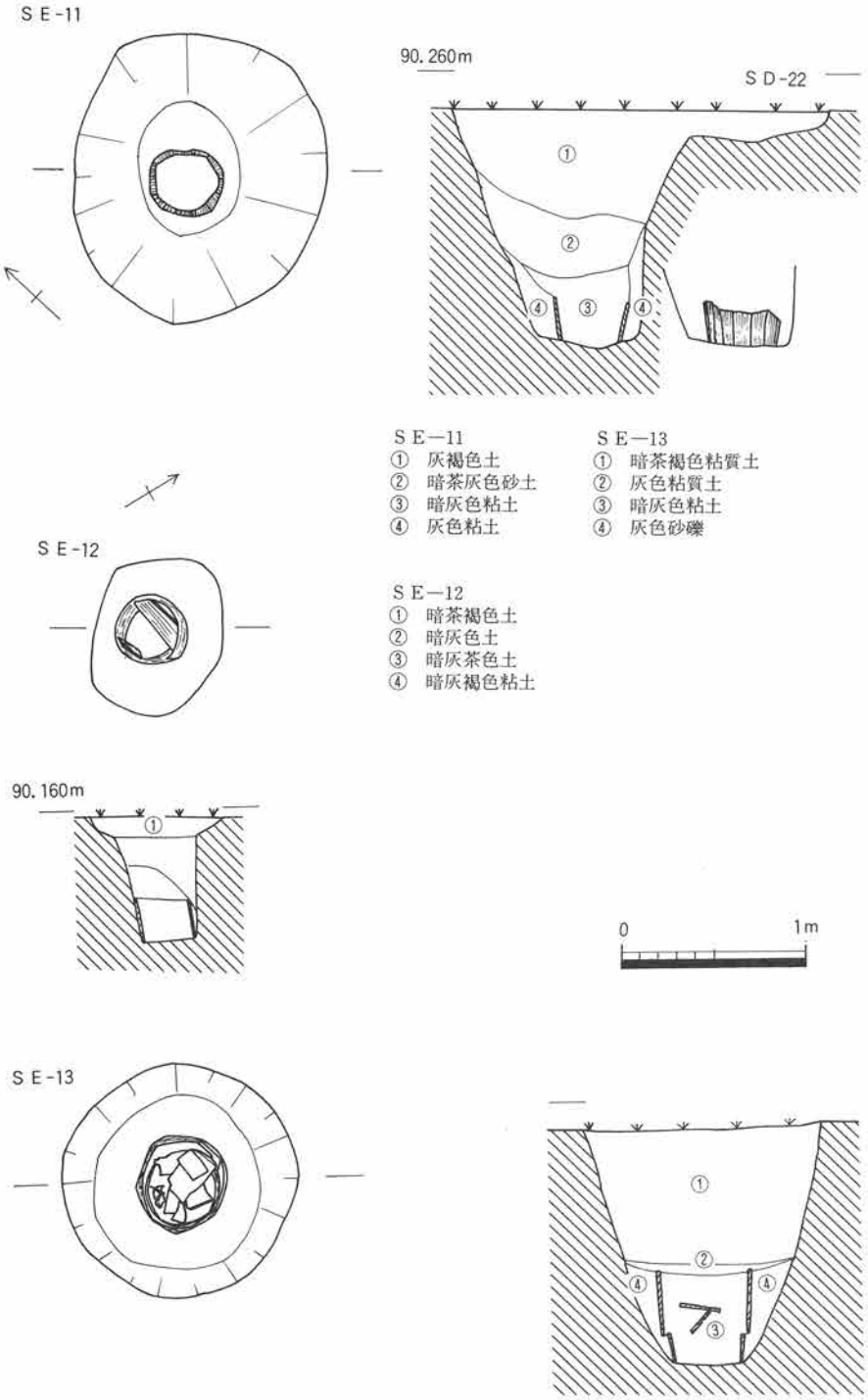
北側土壇ＳＥ08の南隣で、同じようにＳＤ04との間の犬走りに土壇に喰いこむように位置する井戸である。掘方は約２ｍの円形を呈しており、その中央に掘方いっぱいに井筒が据えられていた。深さは約1.4ｍで最下段に径約60㎝、高さ約60㎝の曲物を、その上部に径約１ｍ、高さ１ｍの曲物、さらに上部に径約80㎝、高さ約40㎝の曲物の三段が据えられていた。埋土は６層からなっていた。ほぼ当時の状態を止めているものと考えられる。

ＳＥ10（第148図）

北側土壇の北辺、ＳＤ22に喰いこむような形で位置する井戸である。掘方は径約４ｍの円形を呈しており、その中央に井筒が据えられていた。深さは約3.2ｍでほぼ掘方のいっぱいに、径1.2ｍ、高さ80㎝の曲物を最下段に据え、その上部には径約1.2ｍ、高さ１ｍのの丸桶を据えていた。曲物の四隅には固定するための柱が立てられており、さらに柱と柱の間の隙間には無数の竹が打たれていた。埋土は４層からなっていた。



第148図　SE－9，10平面・断面図



第149図　SE—11, 12, 13平面・断面図

ＳＥ11（第149図）

北側土壇北辺、ＳＤ22に喰いこむような形で位置する井戸である。掘方は径約３ｍの円形を呈しており、そのほぼ中央に井筒が据えられていた。深さは約2.4mで最下段に径約80cmの丸桶が据えられていた。埋土は４層からなっていた。その状況から上部の井筒は抜き取られているものと考えられる。

ＳＥ12（第149図）

北側土壇の南端のＳＤ04との間にある犬走りに位置する井戸である。掘方は径約1.6mのの円形を呈しており、そのほぼ中央に井筒が据えられていた。深さは約1.4mで最下段に約60cm、高さ約40cmの曲物が据えられていた。埋土は４層からなっており、その状況から上部の曲物は抜き取られているものと考えられる。

ＳＥ13（第149図）

南側土壇の西辺のＳＤ04との間にある犬走りに位置する井戸である。掘方は径約2.6mの円形を呈しており、その中央に井筒が据えられていた。深さは約2.6mで最下段に径約40cm、高さ約60cmの曲物が、そのうえに径約１ｍ、高さ80cmの曲物が据えられていた。埋土は４層からなっており、その状況から上部の曲物は抜き取られているものと考えられる。

土　壙

ＳＫ01・02

北側土壇を西側に下りたところに存在する土壙である。土壙は一辺２ｍの方形を呈しており、対になるように並んでいる。

ＳＫ03

ＳＫ01の南６ｍに位置する土壙である。土壙は一辺１ｍの方形を呈していた。

ＳＫ04

北側土壇を西側に下りたところに存在する土壙である。土壙は楕円形をしており、ＳＫ01に切られている。

ＳＫ05

北側土壇の東隅に存在する土壙である。土壙はＮ字状を呈している。

ＳＫ06

南側土壇の南隅を下りたところに存在する土壙である。長さ４ｍの方形を呈する。

ＳＫ07

南側土壇の南隅を下りたところに存在する土壙である。不整形なアメーバー状を呈する。

ＳＫ08、23

何れも南側土壇の中央を東に下りたところに存在する。ＳＫ23は方形を呈するものでＳＫ８はその回りを取りかこむ不整形のものである。覆屋（ＳＢ23）をもっている。

ＳＫ09、10、18

何れもＳＫ23の北隣に存在するもので３つ並びになっている。方形を呈している。

ＳＫ11（第145図）

南側土壇の西側中央に存在するものである。台形状を呈した短辺から溝がＳＤ４に向かって走り出している。

ＳＫ12

南側土壇の西端ＳＤ４に接するように存在する円形のものである。

ＳＫ13、20

北側土壇のほぼ中央に位置するものである。楕円形を呈し二段ぼりになっている。

ＳＫ14～17（第145図）

何れも、南側土壇の東端に一群となって存在するものである。形状は円形もしくは糸瓜状をていしている。14を15が切り、15を16が切っている。ＳＫ14の埋土は２層（①黒灰色粘質土②淡黒灰色粘質土）よりなっていた。ＳＫ15の埋土は４層（①暗茶褐灰色粘質土②暗灰色粘質土④淡茶褐色土）よりなっていた。

ＳＫ19

北側土壇のほぼ中央に位置するものである。達磨状を呈したものである。

ＳＫ21

北側土壇の南中央に位置しＳＤ24を切るもので、卵形が２つつながった形を呈している

ＳＫ24、25（第145図）

南側土壇の東端を東に下りたところに位置するもので方形のものと長方形のものが対につながったものである。ＳＫ24の埋土は３層（①暗茶褐色粘土②暗灰色粘質土③暗灰色褐色粘質土）よりなっている。ＳＫ25の埋土は３層（①茶褐色粘質土②灰色粘質土③暗灰色粘質土）よりなっていた。

ＳＫ27

南側土壇の南端に存在する円形のものである。ＳＢ11に切られている。

ＳＫ29

南側土壇の中央に存在するものである。円形を呈している。

2．遺　物

遺構面上出土古墳時代遺物（第151図）

須恵器杯蓋（1～6）

(1)～(4)はやや丸い天頂部から湾曲するように体部が下がり、短く鋭い稜を持ったのち口縁部がややハの字に外反するものである。体部上半をヘラケズリしている。〔中村Ⅰ－4類〕に属するものかと考えられる。(5)はやや平坦な天頂部から屈曲するように体部が下がり、短く鋭い稜をもったのち口縁部が真っすぐに立つもので端部に稜をもつものである。体部下半からヘラケズリしている。〔中村Ⅰ－5類〕に属するものかと考えられる。(6)は平坦で窪む天頂部から短く湾曲するように体部が下がり、短く鋭い稜をもったのち真っすぐに立上がる口縁部をもつものである。端部には稜を持つ。体部下半からヘラズリしている。

須恵器杯身（13～20）

(13)～(15)は丸みを帯びた底部から内傾するように立上がるもので端部に稜をもつものである。受部は鋭く斜め上方に突出している。体部下半をヘラズリしている。〔中村Ⅰ－5類〕に属するものかと考えられる。(16)は丸みを帯びた底部から内湾するように立上がる体部から稜をもって内傾する口縁部を持つものである。〔中村Ⅱ－2類〕に属するものかと考えられる。(17)は底部から斜め上方に立上がる体部から短く屈曲するように内傾する口縁部をもつものである。〔中村Ⅱ－4類〕に属するものかと考えられる。(18)、(19)は尖底の底部から斜め上方に開くように立上がる体部から内側に屈曲する口縁部をもつものである。「中村Ⅱ－5類〕に属するものかと考えられる。(20)は器高ひくく、底部から弯曲するように立上がる体部から内側に屈曲する口縁部をもつものである。〔中村Ⅱ－6類〕に属するものかと考えられる。

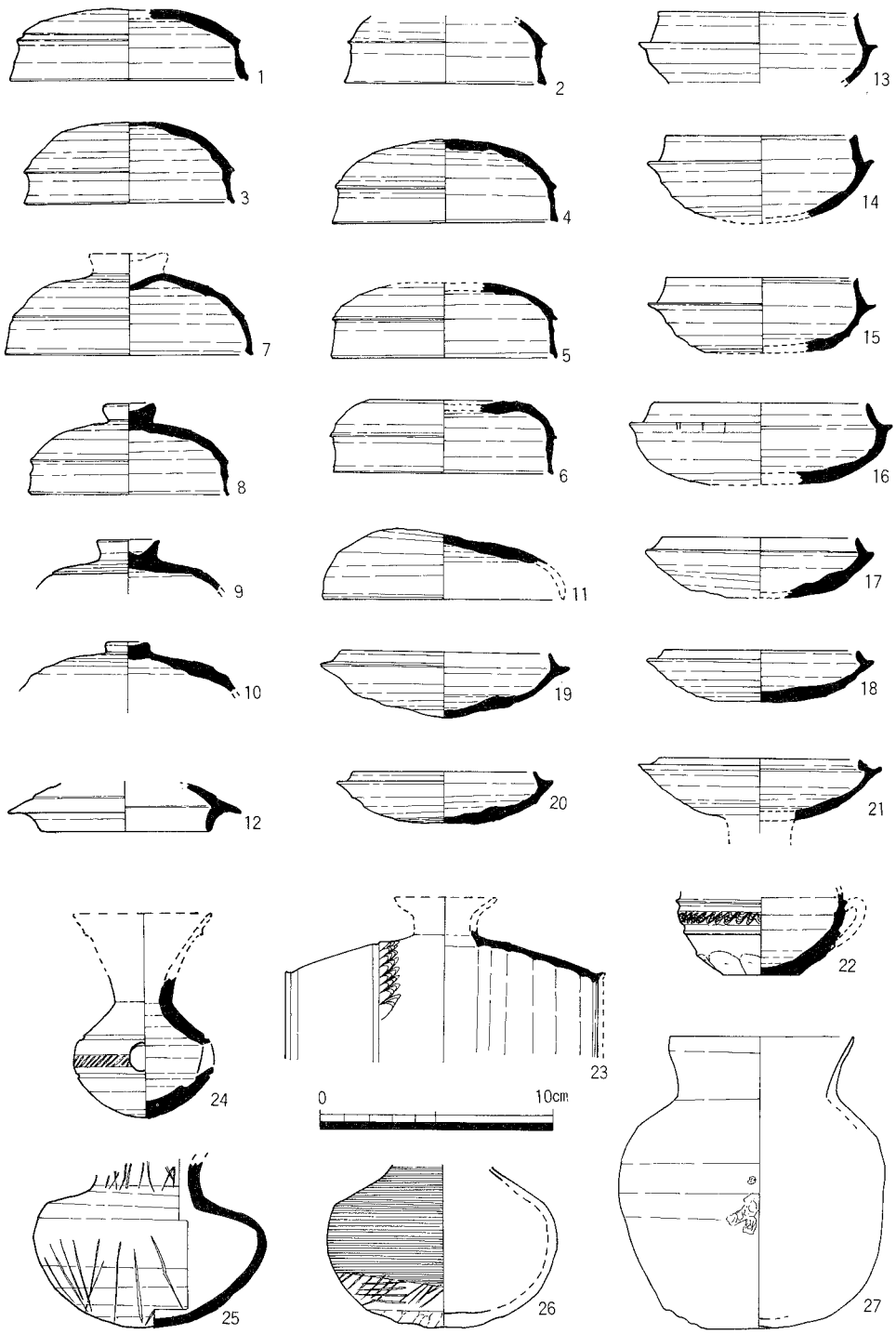
須恵器有蓋高杯（8～10、21）

(8)、(9)は弯曲する体部から真っすぐに立っ口縁部をもつものである。端部はやや外反して稜を持つ。天頂部には窪んだ宝珠つまみを貼付けている。〔中村Ⅰ－4類〕に属するものかと考えられる。(10)は円形のつまみを付けている。(21)は内弯しながら立上がる体部から内側に屈曲する口縁部をもつものである。脚部が底部に貼く。〔中村Ⅱ－4類〕に属するものかと考えられる。

須恵器台付長頸壷蓋（12）

かえりを内面に有する小型の蓋である。上部は欠失している。〔中村Ⅱ－4類〕に属す

第150図　第９調査区平面図



第151図　遺構面上出土須恵器

るものかと考えられる。

把手付碗（22）

平底の底部から内湾気味に立上がる体部をもつもので、体部に２本の稜を持ち櫛描波状紋を施紋している。体部下半はアーチ状のヘラケズリを丁寧におこなっている。把手は欠失している。〔中村Ⅰ－３類〕に属するものかと考えられる。比較的作りのよいものである。

樽形瓻（23）

体部中央に最大径があり、肩部に凹線と櫛描波状紋を持つものである。体部中央に上外方により下内方へ円孔を穿孔している。〔中村Ⅰ－２類〕に属するものかと考えられる。

瓻（24）

丸い底部から内傾し頸部に至るものである。体部中央には円形の穿孔があり、２条の凹線と刺突紋が認められる。口縁部は欠失していない。

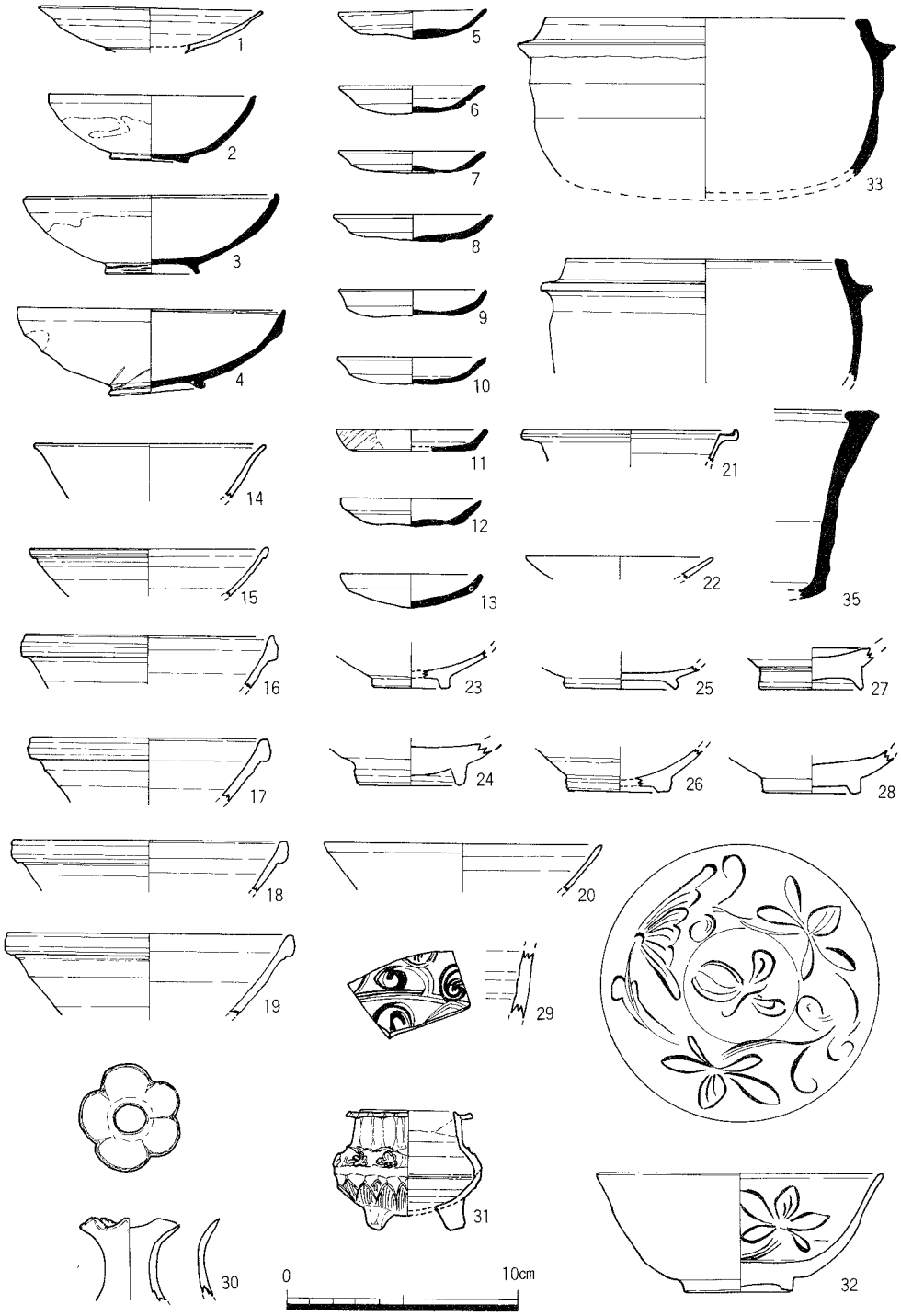
壷（25～27）

(25)は丸底の底部を持つ壷である。頸部で屈曲し真っすぐに立上がる。体部から底部にかけては縦方向にヘラ描きの線刻が認められる。また、口縁部は欠失していてないが、頸部に同じように数条のヘラ描きの線刻が認められる。形状から人物の足の可能性がある、(26)は丸底の底部から内湾するように丸く立上がる体部をもつもので、肩でやや屈曲して頸部は細いものである。頸部から体部下半までにかけて細かなカキ目が認められる。体部下半から底部にかけてはタタキ目の痕が認められる。(27)はやや丸みを帯びた底部から一度屈曲して真っすぐに立上がる体部から肩部で内傾して頸部に至り、口縁部が外反するものである。口縁端部は鋭く収める。体部上半を横ナデを施している。全体に付着物が多量に認められ体部外面と内面の一部に自然釉が認められる。

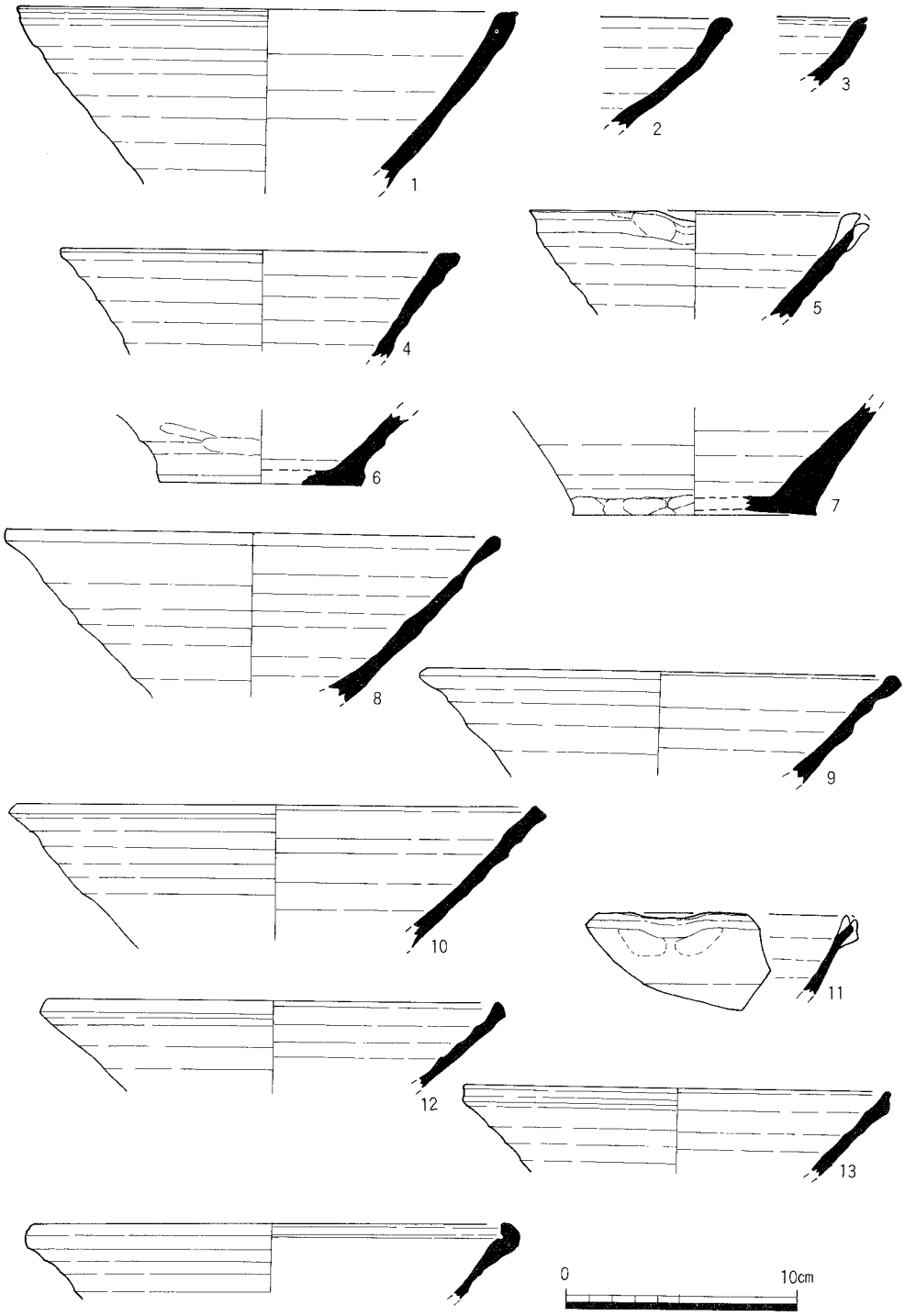
遺構面上出土中世遺物（第152図）

土師質土器皿（５～13）

（５）～(10）は指頭圧えで成形された底部から斜め上方に外反する口縁部をもつものである。口縁部は強い横ナデを施こしており、端部に稜をもつものである。(11)は平坦な底部から屈曲するように口縁部が斜め上方に立ち上がるものである。(12)は指頭圧えの底部から斜め上方に立上がる口縁部を持つものである。口縁部を一度横ナデしている。(13)は尖底の底部から体部が斜め上方に立上がる体部から口縁部が屈曲するものである。口縁部を一度横ナデしている。



第152図　遺構面直上出土中世遺物 1



第153図　遺構面直上出土中世遺物２

黒色化土師質土器椀（2～4）

（2）は小型で偏平なもので高台が形骸化している。（3）、（4）は大きな口径をもち内湾するように体部が立ち上がるものである。高台外面には貼り付け時のヘラ押さえの跡が認められる。

瓦質土器釜（33、34）

（33）は内湾する体部から内傾する口縁部をもつもので端部を内側にナデつまみだしている。頸部には断面三角形の鍔が貼付けられている。（34）は内湾する体部から内傾する口縁部をもち端部を外方につまみだしている。頸部には断面台形状の鍔を貼り付けている。

磁　器

白磁碗（14）～（19）、（25）～（27）

（14）は口禿の碗である。淡青白色の釉で施釉されている。（15）～（19）は玉縁の碗である。（15）は〔太宰府Ⅱ－1類〕に属するもので、素地は灰白色を呈し、釉は貫入のある灰色を呈する。（16）～（19）は〔太宰府Ⅳ－1類〕に属するもので、素地は灰白色を呈し緻密である。（25）～（27）は碗の底部である。素地は褐色を呈し、釉は黄白色を呈している。

白磁花瓶（30）

口縁5弁の花弁状に開くユリ口の瓶である。釉は淡青灰白色を呈している。

白磁香炉（31）

三脚を持つもので、下ぶくれの体部から頸部が真っすぐに立ち上がり口縁部に波状の鍔を有するものである。体部下半には蓮弁が上半には唐草状の花紋が各々浮彫りにされている。素地、釉ともに白色を呈している。

青白磁梅瓶（29）

梅瓶の体部である。唐草紋の浮彫りが成されている。

青磁碗（20）、（25）、（26）、（28）、（32）

（20）は素地が灰白色を呈し、淡緑色の釉で施釉されていた。（25）～（28）は碗の底部である。（32）は龍泉窯系の劃画蓮華紋の青磁碗で〔太宰府Ⅰ－2－b〕に属する。花紋は二花一葉である。

青磁杯（21）

〔太宰府Ⅲ－3類〕に属すると考えられる龍泉窯系の青磁杯で、口縁部を受け口状に縁折りした杯である。素地は灰色を呈し厚目の青緑釉がかかっている。

ＳＥ02（第154図）

土師質土器皿（２～８）

いずれも不調整の底部から斜め上方に口縁部をたちあがらせるものである。口縁部を一度横ナデを施すが、口縁端部は端迄ナデずに稜を遺す。特に（６）には底部に円盤状の粘土の接合面が認められ、体部に走る斜めの接合面から考えれば円盤状の粘土に粘土帯を巻き付けて体部成形がなされたことがうかがえる。いずれも胎土は粒子細かく、白褐色を呈する。曲物内底より出土した。

黒色化土師質土器椀（１）

やや器高の低い形態のもので、内湾ぎみに均等の厚さで立ち上がる体部から口縁部にいたり、口縁端部に面を持つものである。体部外面は指頭圧痕で成形したのち口縁部へラミガキしている。体部内面は横ハケで調整したのち花弁状の連続ら旋紋をヘラミガキしている。曲物内底より出土した13世紀後半のものと考えられる。

ＳＥ07（第155図）

黒色化土師質土器椀（１）

斜め上方に立ち上がる体部から口縁部を形成するものである。口縁部内面に横ナデの時の沈線が認められる。

陶　器

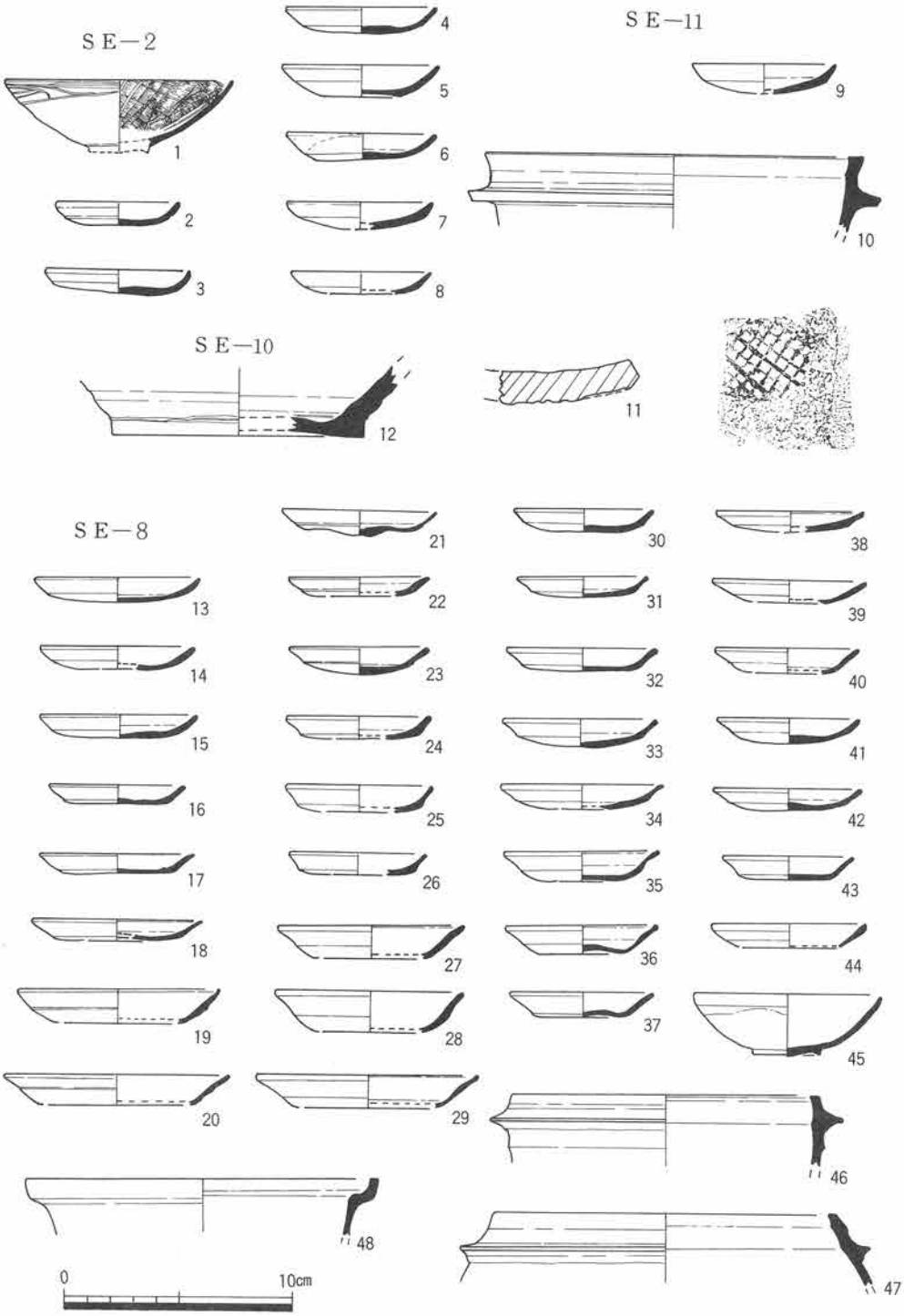
常滑焼甕（２、３）

いずれも大きく外反する口縁部をもつものである。口縁部は横ナデにより成形され、端部には強い横ナデによる窪みが認められる。12世紀後半のものと考えられる。井戸枠内より出土した。

ＳＥ08（第154図）

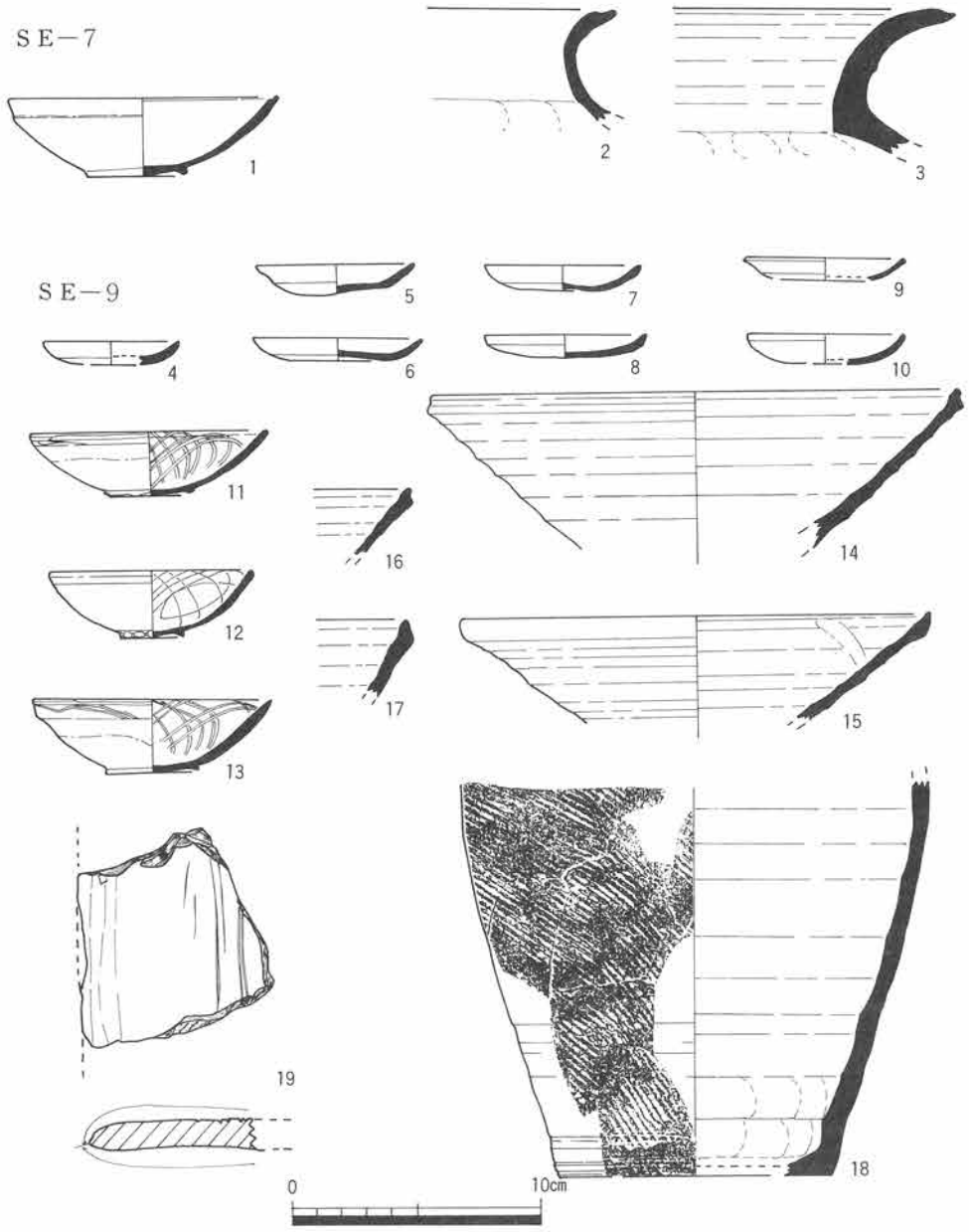
土師質土器皿（13～44）

(13) ～ (15) は底部からやや内湾するように短く口縁部をたちあがらせるもので、口縁部を一度だけ横ナデする。(16) ～ (18)、(22)、(38) ～ (42) は平坦な平底から斜め上方にやや外反するように立ち上がるものである。口縁部を一度横ナデする。(21) は底部が不成形のものである。(23) はやや丸底のものである。(24) ～ (26) は平坦な底部から短い口縁部が立ち上がるものである。やや強い横ナデを施している。(30) ～ (34) はやや丸みを帯びた底部から外反する口縁部を持つものである。端部に稜を持つ。(35) ～ (37) はやや窪んだ底部から斜め上方に長く、外反するように口縁部が立ち上がる



第154図　SE−2，8，10，11出土遺物

ものである。体部真中あたりまで強く横ナデする。(19) は大皿である。強く横ナデした口縁部を持つもので、端部を内側に巻込むものである。(20)、(29) は大皿である。平坦な底部から斜め上方に口縁部立ちあがらせるもので、口縁部を一度横ナデするものである。(27)、(28) は器高の高いものである。①層より出土している。



第155図　SE−7，9出土遺物

黒色化土師質土器椀（45）

やや内湾ぎみに立上がる小型のもので、内外面とも摩滅している①層より出土した。

土師質土器釜（47）

下ぶくれの体部を持ち、口縁部が内傾するものであると考えられる。口縁部は強い横ナデにより調整され、口縁端部上面には面を持つ。断面三角形の鍔を貼り付けている。胎土は粗く小石粒を多量に含む。色調は白灰色を呈する。①層より出土している。

瓦質土器釜（46）

真っすぐに立ち上がる口縁部を持つもので、口縁部は内湾する位強く横ナデしている。口縁端部上面には面を持つもので、断面三角形の鍔が真っすぐに貼り付けられている。①層より出土している。胎土は粒子が細かい。

瓦質土器鍋（48）

口縁部が受け口状に真っすぐに立ち上がるものであり、端部に面を持つものである。胎土は粒子が細かい。①層より出土している。

ＳＥ09（第155図）

土師質土器皿（４～10）

（４）、（６）、（７）はやや内湾するように口縁部をたちあがらせるものである。口縁部を一度横ナデしている。（５）は底部に凹凸をもつもので口縁部を斜めに立ち上がらせる。端部は鋭く収める。（９）は底部から斜め上方に口縁部をたちあがらせるもので、強い横ナデを施しているため端部に稜を持つものである。（８）、（10）は口縁端部を屈曲するように短く横ナデを施すものである。

黒色化土師質土器椀（11～13）

（11）はやや器高が低いものである。体部外面は指頭圧痕で成形し、口縁部を横ナデしたのちヘラミガキしている。内面は花弁状のら旋ミガキを施している。高台は低く、10回の指押さえで貼り付けられている。二段目の曲げもの内より出土している。（12）は底部から斜め上方に立ち上がる体部から口縁部を形成するものである。口縁端部はヘラ切りによって尖っている。体部外面は指頭圧痕で成形され、口縁部は横ナデされている。内面は細い花弁状のら旋ミガキが施されている。高台は小さく８回の指押さえにより貼り付けられている。（13）は底部から斜め上方に立ち上がる体部から、口縁部がヘラ切りにより屈曲するように立ち上がるものである。体部外面は指頭圧痕で成形され、口縁部は横ナデののちヘラミガキされている。内面は花弁状のら旋ミガキが施されている。高台は低く大き

く８回の指押さえによって貼り付けられている。下段の曲物より出土している。

東播系中世須恵器こね鉢（14～17）

（14）、（16）は底部から直線的に斜め上方にのびて体部を形成し、口縁端部は強い横ナデにより内傾する。体部にはロクロ調整痕が顕著に認められる。12世紀後半のものと考えられる。上段の曲物より出土している。（15）、（17）は底部から直線的に上方にのびて体部を形成し、口縁部を丸く成形しつまみ上げるように真っすぐにたちあがらせるものである。体部にはロクロ調整痕が顕著に認められる。13世紀前半のものと考えられる。上段曲物より出土している。ともに魚住古窯のものと考えられる。

産地不明中世須恵器瓶（18）

瓶の底部と考えられるものである。体部外面は斜め方向のタタキを数段にわたって施しており。底部近くは強い横ナデを施している。内面は成形時のロクロ横ナデが認められる産地不明であるが、形態としては熊本県下り山１号窯や香川県西村窯、十瓶窯や赤瀬山２号窯や岡山県戸岩窯出土等にみられる広口、長頸の瓶と同じようなものと考えられる。

石製品

砥　石（19）

偏平な砥石の一部である。鋭利なものを磨いたと考えられる搾痕が数条認められる。

ＳＥ10（第154図）

信楽焼すり鉢（12）

信楽焼のすり鉢の底部である。胎土は密で堅く、色調は茶褐色を呈する。

ＳＥ11（第154図）

土師質土器皿（９）

丸みを帯びた底部から口縁部が斜め上に立ち上がるもので、端部は鋭い。口縁部を一度横ナデしている。胎土はやや粗く、色調は暗赤褐色を呈する。上段の曲物から出土した。

瓦質土器釜（10）

やや斜め上方に開く口縁部を持つものである。口縁部上面は面を持ち、内側につまみだすように強く横ナデが施されている。頸部には断面台形の張りだした鍔を貼付けている。胎土は細かな砂質である。色調は灰白色、黒銀色を呈している。曲物内から出土した。

平　瓦（11）

須恵質の平瓦である。端部は２方向からの面取りがされており、内側に桶板の圧痕が認められ、外面には格子の叩き痕が認められる。④層から出土している。

ＳＤ01（第156図）

土師質土器（１～６）

（１）は平坦な底部からやや内湾するように口縁部を立上がらせるものである。口縁部を一度横ナデして、端部に稜を持たせるものである。灯明皿に使用されたものらしく口縁部内外面に油が付着している。（２）、（５）、（６）はやや丸みを帯びた底部から内湾するように口縁部が立ち上がるもので口縁端部を丸く収める。口縁部を一度横ナデする。下層より出土している。（３）は丸みを帯びた底部から斜め上方に立上がる口縁部を持つもので口縁部を一度横ナデしている。下層より出土している。（４）は平坦な底部から口縁部を屈曲させるように短くつまみ出し、横ナデをするもので端部は鋭く収めるものである。いずれも色調は淡褐色を呈する。

土師質土器釜（７）

口縁部が大きく内傾するものである。外面を横ナデし、内面を横ハケで調整している。頸部には断面長方形の鍔を貼り付けている。色調は淡白褐色を呈し、胎土は粗く砂粒を多量に含む。下層より出土している。

土師質土器火舎（22）

四足の盤状の火桶である。平底の底部には貼り付けの足が体部との変化点につく。体部はやや斜め上方に立ち上がり、口縁部は上面に面を持つようにナデてやや外反する。体部の外面は横ナデで調整されている。色調は赤桃褐色を呈する。胎土は粒子粗く粘土がサンド状になっている。①層より出土している。

瓦質土器火舎（21）

簾状、宝珠が体部に文様としてみられる瓦質の火鉢である。体部にハート形の窓がつくものであると考えられる。①層より出土している。

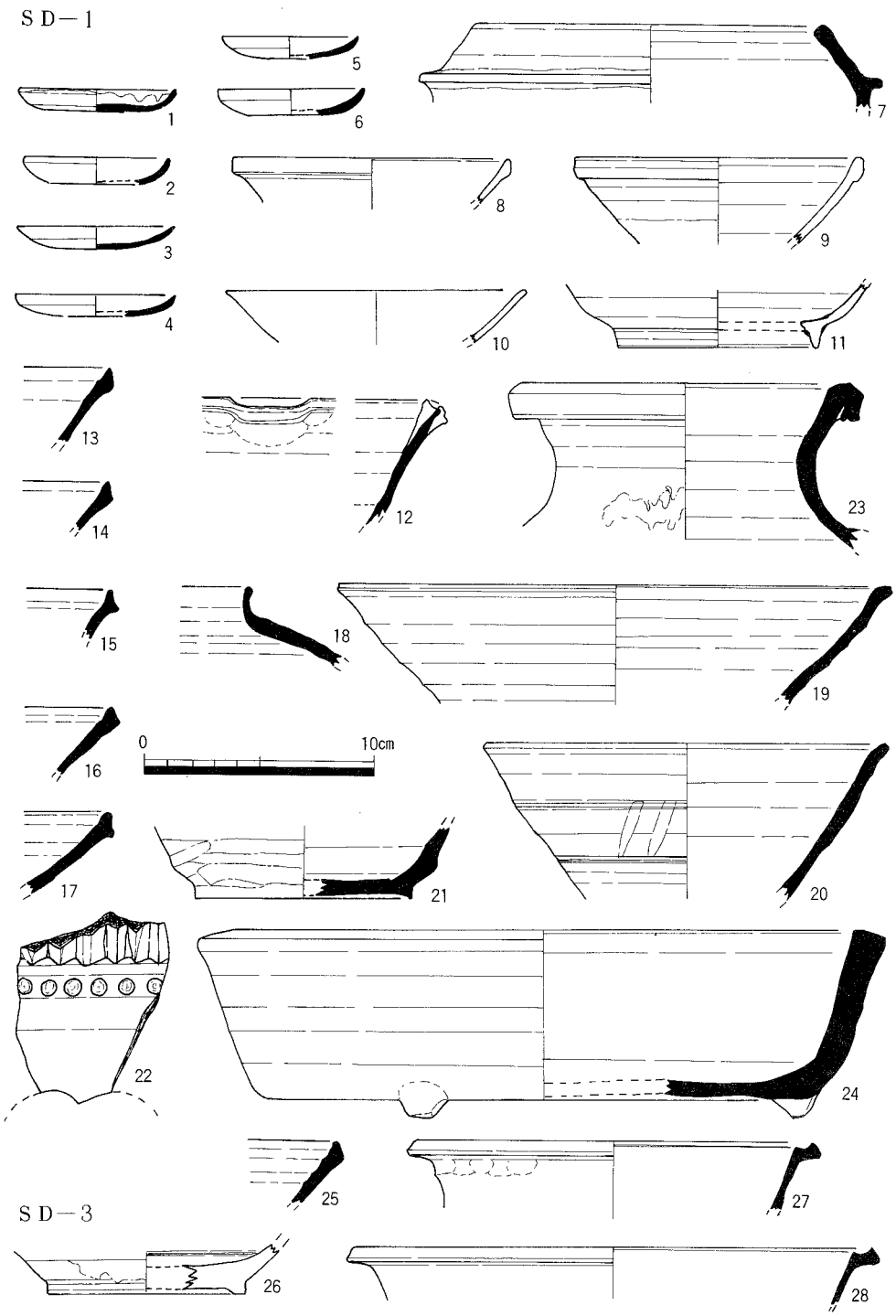
東播系中世須器こね鉢（12～17）

（12）、（15）、（17）は口縁端部を強くナデて口縁端部をつまみだし、顎をもつものである。（13）、（14）、（16）は口縁端部をつまみ上げるものである。12世紀後半から13世紀前半のものであると考えられる。

陶　器

常滑焼短頸壷（18）

内傾するように上がった体部は、頸部で一度稜を持ち真っすぐに立ち上がるものである端部は丸く収めている。内外面ともロクロ横ナデにより成形されている。色調は淡灰色を



第156図　ＳＤ－１，３出土遺物

呈し胎土は細かく密であった。下層より出土している。12世紀後半のものと考えられる。

常滑焼壷（22）

頸部からやや広口状に口縁部が広がるもので、口縁部は面を持つように外方に折曲げられて玉縁状をなす。体部は内外面ともにロクロ横ナデによって成形されている。色調は灰色を呈する。態度は密で堅い。①層より出土した。13世紀中ごろのものと考えられる。

常滑焼こね鉢（20、21）

（20）は斜め上方に立ち上がる体部から、口縁部を屈曲させるように外反させるものである。口縁端部は面をもつものである。体部はロクロ横ナデによって成形されている。色調は淡褐色を呈している。（21）はこね鉢の底部と考えられるものである。底部近くには断面三角形の高台を貼り付けた時のナデの痕が認められる。色調は白灰色を呈する。12世紀後半のものと考えられる。

信楽焼こね鉢（19）

強いロクロ横ナデにより成形された体部がやや内湾するように立ち上がり、口縁部にいたり、口縁部を外方につまみだすものである。端部は丸く収めるが、沈線が巡る。色調はセピア色を呈する。胎土は細かく密で堅い。

磁　器

白磁碗（８～10）

（８）、（９）は口縁部が玉縁状になるものである。色調は素地が灰白色を呈し、釉が淡灰白色を呈していた。〔太宰府Ⅳ－１類〕に属するものと考えられる。上層より出土している。（10）は斜め上方に立ち上がる体部から、口縁端部を外方に少しつまみだすものである。色調は灰白色を呈する。胎土は微細な黒色粒子を若干含んでいる。〔太宰府Ⅴ類〕に属するものと考えられる。

青磁盤（11）

ケズリ出し高台から内湾するように立上がる体部をもつものである。口縁部は欠失しているが、くの字に屈曲し端部を引上げる縁折れのものと考えられる。見込みには段を有する。畳付きのみ露胎しており明らかに釉を掻きとったものと考えられる。素地は灰色を呈し緻密である。釉は青緑を呈しかなり厚目に施釉されている。貫入が多い。下層より出土

ＳＤ03（第156図）

半瓦質土器鍋（25、26）

斜め上方に立上がる体部から、受口状・手の字状に端部を内側に巻き込む口縁部をもつ

ものである。体部外面は指頭圧痕で成形され、内面は横ハケにより調整されている。口縁部は横ナデにより調整されている。胎土は粒子細かい。色調は白灰色を呈する。

東播系中世須恵器こね鉢（23）

口縁端部を上方につまみあげるように横ナデするものである。色調は青灰色を呈する。13世紀前半のものと考えられる。

磁　器

白　磁（24）

水注、もしくは壺の底部になるものと考えられる。高台は削りだされている。色調は素地は灰白色を呈し、釉は薄白緑色を呈する。上層より出土している。

ＳＤ04（第157図～第158図）

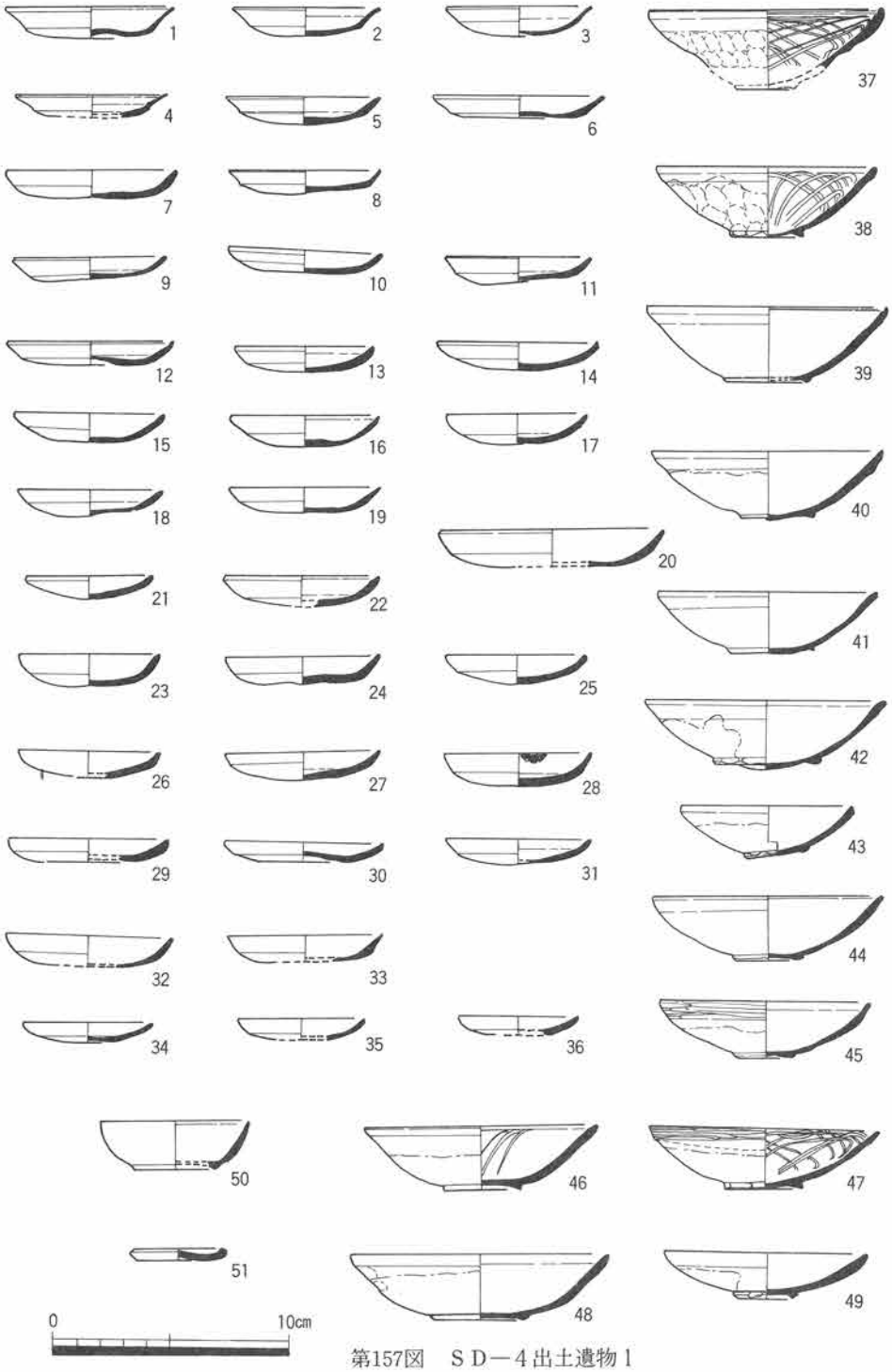
上層出土土器

土師質土器皿（第157図）（１～36）

（１）～（６）はやや丸みを持った底部から口縁部が強い横ナデにより外反するものである。（１）～（４）はⅠ区より、（５）、（６）はⅡ区より出土している。（７）～（14）は底部から口縁部が斜め上方に立ち上がるもので、口縁部を一度横ナデし端部に稜を持つものである。（８）、（10）、（13）はⅠ区より、（11）はⅡ区より、（14）はⅢ区より、（７）、（９）、（12）はⅤ区より出土している。（15）～（19）、（22）～（28）、（31）～（33）はやや丸みを帯びた体部から内湾するように立ち上がる口縁部を持つものである。口縁部は一度だけ横ナデするものである。（26）には底部に板の圧痕が認められた。（28）には口縁端部内面に灯明の芯の痕がみられるところから灯明皿に使用されたものと考えられる。（15）、（16）、（18）、（19）はⅠ区より、（22）～（24）、（26）はⅡ区より、（17）、（28）、（25）はⅢ区より、（29）、（30）は器高の低い偏平な底部から口縁部が短く屈曲するように立上がるものである。（29）はⅡ区より、（30）はⅢ区より出土している。（21）、（34）～（36）は他のものと比べてやや小型の皿であるやや内湾するように立ち上がる口縁部をもつものである。口縁部を一度横ナデしている。（21）、（34）、（34）、（36）はⅢ区より、（35）はⅤ区より出土している。（20）は大皿である。体部からやや内湾ぎみに口縁部が立上がるものである口縁部を一度横ナデしている。Ⅲ区より出土している。（51）はコースター状の土製品である。Ⅵ区より出土している。

黒色化土師質土器椀（第157図）(37～49)

(39)～(42)は器高が3cmあたりのものもある。(37)、(38)口縁部が斜めめ上方に立



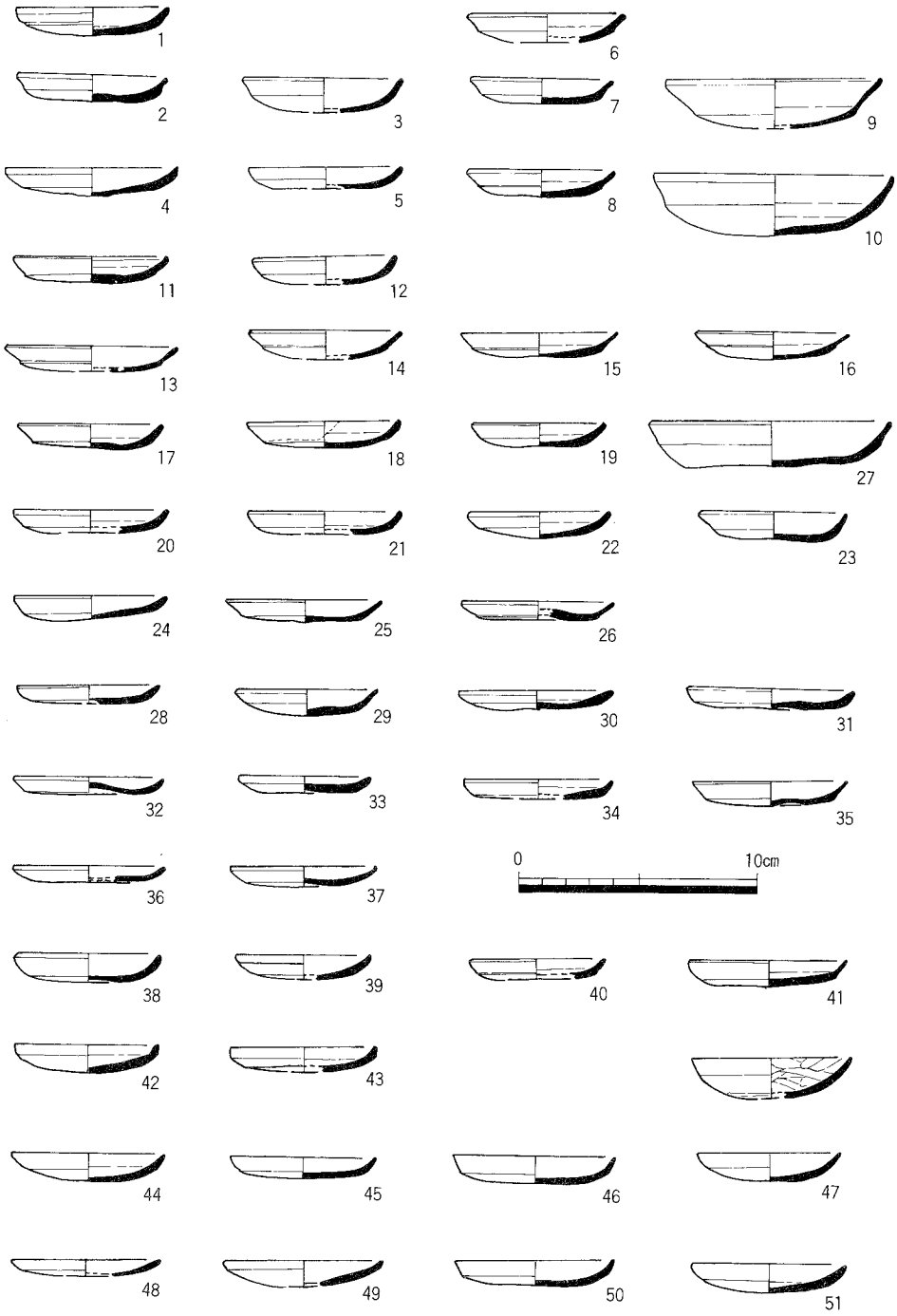
第157図　ＳＤ－４出土遺物１

上がるもので口縁端部が肥厚したものである。口縁端部の内面には一条の沈線が巡る。体部外面には体部を指頭圧痕が成形した痕があり、口縁部を横ナデしたのちヘラミガキしている。体部内面は花弁状のら旋ミガキが施されている。高台は低く断面三角形を呈するものである他は内外面ともに摩滅しているが同等のものと考えられる。(41)、(42) はⅠ区より、(38) はⅢ区より、(39)、(40) はⅢ区より、(37) はⅥ区より出土している (43) は口径9.5cm計る小型のものである。体部はやや歪んでいるが、斜め上方に立上がる口縁部をもつもので、端部がやや肥厚するものである。Ⅰ区より出土している。(44) ～ (48) は器高が3cm未満のものでやや偏平な形を呈するものである。斜め上方に立上がる口縁部をもつものである。体部外面には成形時の指頭圧痕の痕があり、口縁部をヘラミガキしている。大部外面には重焼きの痕が認められる。内面は花弁状のら旋ミガキが施されている。高台は低く形骸化しており、断面三角形のものを8回の爪押さえにより貼付けた痕が認められた。他は磨滅しているが同等のものと考えられる。(47) はⅡ区より、(46) はⅣ区より、(48)、(55) はⅤ区より、(44) はⅥ区より出土している。(49) は器高2.5cmのものでより偏平で小型のものである。口縁部は底部から肥厚するように斜め上方に立上がるものである。Ⅲ区より出土している。(50) は口径8.4cm、器高2.7cmの小型のものである。型式的に少しかけはなれたものである。Ⅲ区より出土した。

中層出土土器

土師質土器皿（第158図）（1～51）

（1）は指頭圧痕で成形された底部から口縁部が短く内湾するように立上がるものである。口縁部は横ナデしたあと端部を押しナデしている。内面底部は一方向のナデのあとが認められる。色調は暗褐色を呈する。Ⅲ区落ち込みAより出土している。（2）、（3）（6）～（8）、(11) ～ (16) は口縁部を強い横ナデにより外反させるもので口縁端部を稜をもつものである。（7）には円盤状の底部に粘土帯を巻付けた痕跡が認められる。（8）はⅠ区より、（2）、（6）、（7）、(14)、(15) はⅡ区により、（3）、(13)、(16) はⅢ区より、(11)、(12) はⅢ区落ち込みBより出土している。（4）、（5）、(17) ～ (26)、(28) ～ (30)、(38) ～ (41) は口縁部が内湾気味に立上がるもので口縁部を一度横ナデし端部に稜をもつものである。(18) には円盤状の底部に粘土帯を巻付けた痕跡が認められる。(29) には底部に板状圧痕が認められた。(40) はⅠ区より、(17) ～ (26)、(28) ～ (30)、(38)、(39) はⅡ区より、（4）、（5）、はⅢ区落ち込みAより、(41) はⅢ区より出土している。(31～ (37) は平らな底部から短く屈曲す

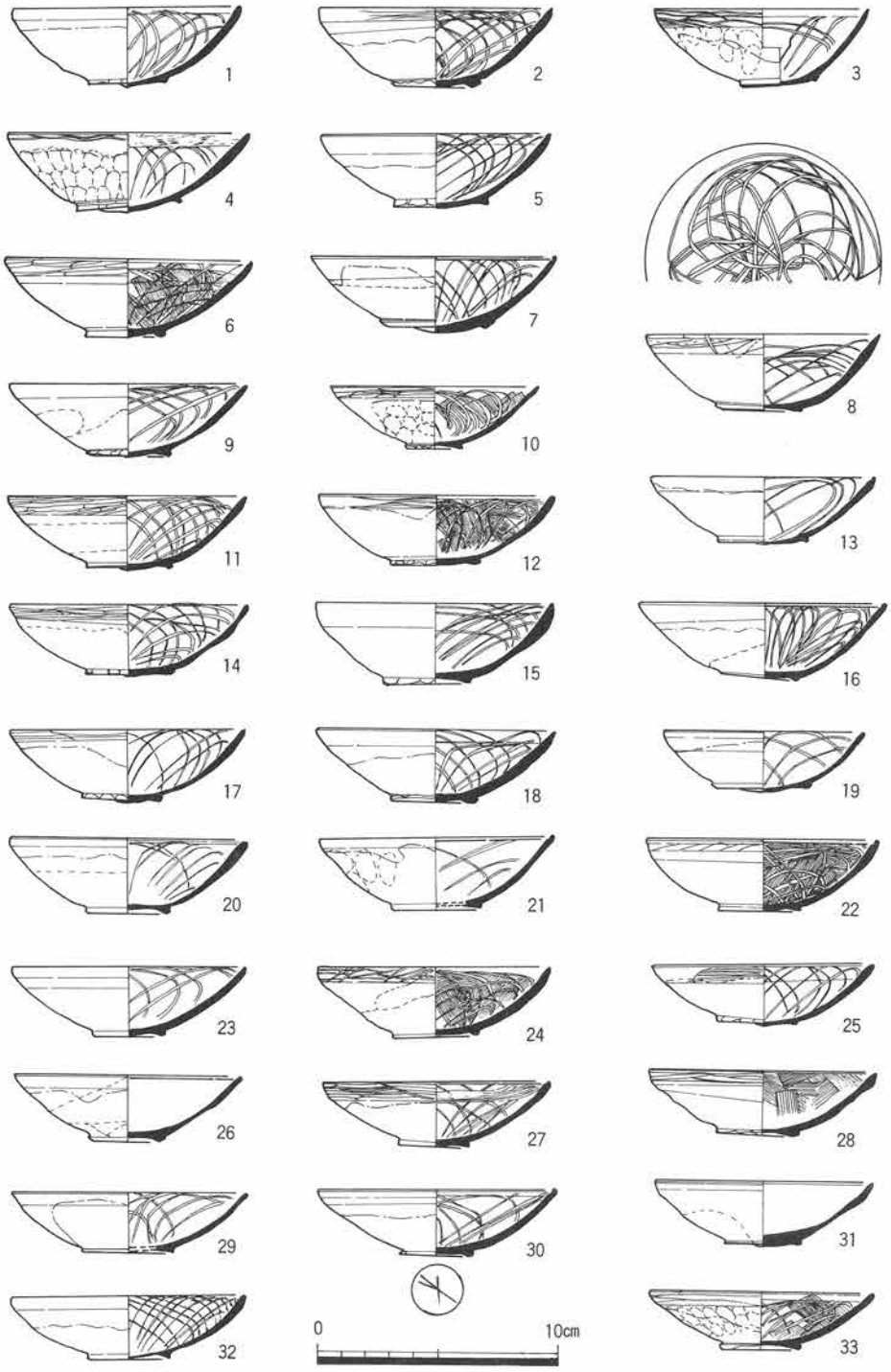


第158図　ＳＤ－４出土遺物２

るように立上がるもので端部を鋭く収める。口縁部は一度横ナデする。(35) には底部に板状圧痕が認められた。(34) はⅠ区より、(32)、(36)、(37) はⅡ区より (31)、(33)、(35) はⅢ区落ち込みより出土している。(42) ～ (51) はやや丸みを帯びた底部から内湾するように口縁部が立上がるもので口縁部を一度横ナデしている (46) ～ (49) はⅠ区より、(42) ～ (45)、(50) はⅡ区より出土している。(52) は丸みを帯びた体部を呈するもので、口縁部を一度ナデし端部を丸く収めるものである。内面はハケナデがおこなわれている。底部にヘラおこしの痕が認められる。色調は淡褐色を呈している。Ⅵ区より出土している。(9) は大皿である。やや丸みを帯びた底部から強く幅の広い横ナデにより、口縁部を外反させるもので、端部を真っすぐに立上がるように収め稜をもつものである。内外面ともに黒色化されている。Ⅱ区より出土している。(10) は大皿である。やや丸みを帯びた底部から内湾するように立上がる口縁部を持つものである。口縁部を一度強い横ナデし端部に稜を持つ。色調は淡桃褐色を呈する。Ⅲ区落ち込みAより出土している。(27) は大皿である。不調整の底部から斜め上方に立上がる口縁部をもつものである。口縁部を横ナデし端部に稜を持つものである。色調は白褐色を呈している。底部に板状圧痕が認められる。Ⅲ区より出土している。

黒色化土師質土器椀（第159図）(1～33)

(1) ～ (9)、(11)、(12)、(14) ～ (18)、(20) ～ (22)、(24) は器高が4㎝以上のものであり、(10)、(13)、(19)、(23)、(25) ～ (33) は3.7㎝以下のものに分けられるる。器高に差があるが基本的には同じ製法により製作されたものである口縁部は斜め上方に立上がり、端部はやや肥厚しヘラ切りを行なったのち鋭角に収める。体部外面は指頭圧痕で成形し、口縁部を横ナデしたのちヘラミガキしている。内面はハケ目で調整したのち、花弁状ら旋ミガキを施している。口縁部内面に横ナデ時の沈線が巡るものが認められる。高台は低く、断面三角形を呈するもので底部と同じ高さになっている (23)、(27) の高台は6回、(25) は7回、(4)、(8)、(9)、(17)、(18) は8回、(31) は9回、(1)、(6) は10回、(3)、(26) は12回、(5)、(28) は13回、(14) は14回の爪押えによって貼付けられている。(30) の高台内面にはヘラ記号が認められた。(22) の花弁状のミガキは見込み部分を避けるように放射線状にみがかれている。(7)、(8)、(11)、(13)、(16)、(22)、(25)、(26) には体部に粘土帯の不連続な継目が斜め・円を描くように認められる。(3)、(24) には体部外面に重焼きの圧痕が認められた。(7)、(16)、(19) ～ (23)、(24)、(26)、(29) Ⅱ区より、(3)、(5)、(8)、



第159図　ＳＤ－４出土遺物３

（9）、（11）～（13）、（15）、（25）、（27）、（28）、（31）、（33）はⅢ区より、（2）、（10）、（30）はⅣ区より、（1）、（6）、（4）、（14）、（17）、（18）、（32）はⅢ区落ち込みAより出土している。

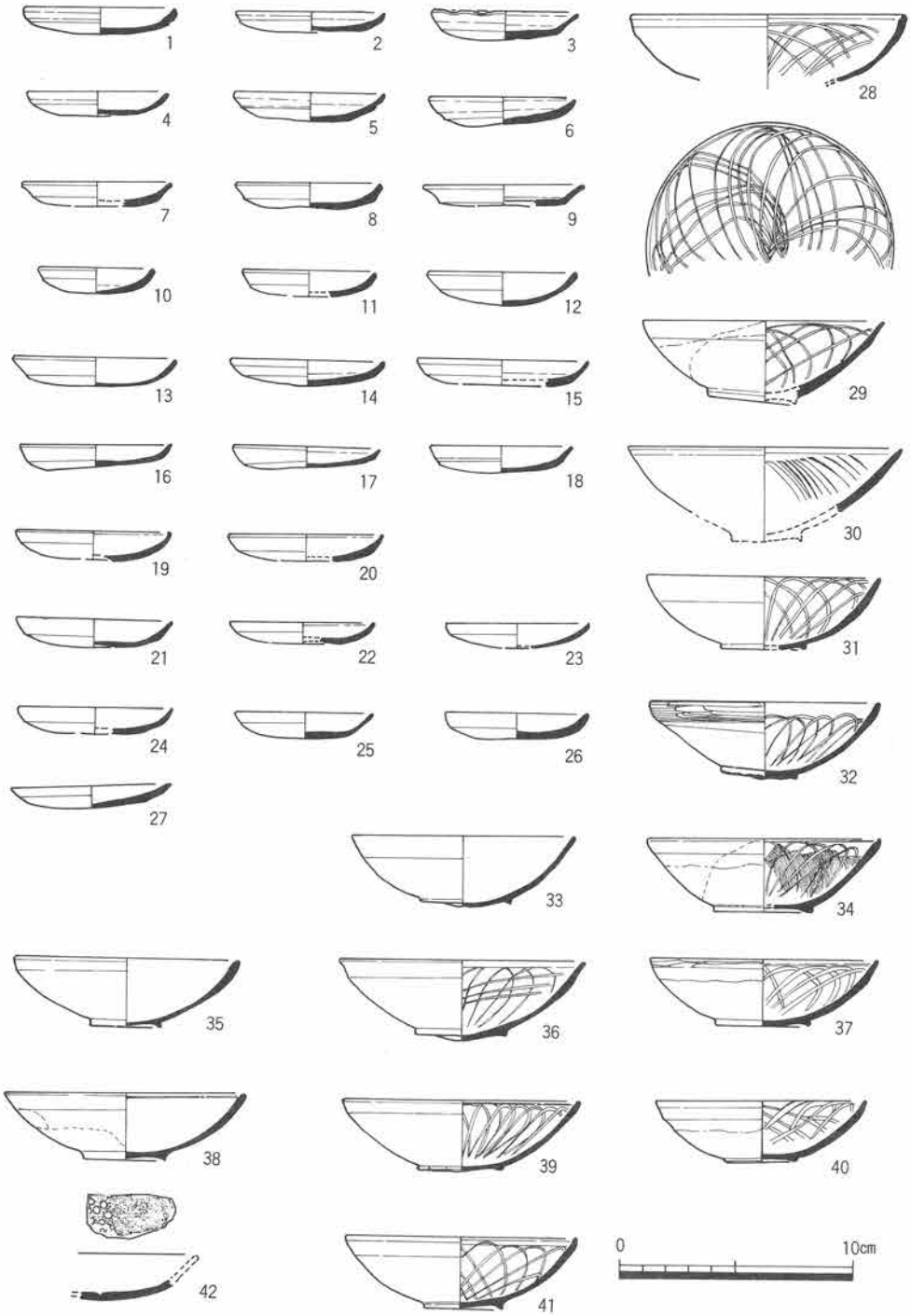
下層出土土器

土師質土器（第160図）（1～27）

（1）～（6）は不調整の底部からやや内湾するように短く立上がる口縁部を持つもので、口縁部を二度横ナデする。（1）の底部は指頭圧痕により成形されている。（5）はⅠ区より、（3）、（6）はⅢ区より、（1）、（2）、（4）はⅣ区より出土している（7）～（9）は平坦な底部から外反するように口縁部が立上がるもので、強い横ナデにより口縁端部に稜を持つものである。（9）はⅠ区より、（7）、（8）はⅡ区より出土している。（10）～（15）はやや丸い底部から内湾気味に口縁部が立上がらせるもので、口縁部を一度横ナデし端部に稜を持つものである。（14）の底部はナデられている。（13）はⅠ区より、（11）はⅡ区より、（10）、（14）はⅣ区より（12）、（15）はⅤ区より出土している。（16）～（18）は平坦な底部から口縁部を短く屈曲させるように立上がらせるものである。口縁部を一度横ナデし口縁端部に稜を持つが、端部を鋭く収めるものである。口縁端部を内側につまみ出すものである。（17）には底部に板状の圧痕が認められる。Ⅳ区より出土している。（16）はⅡ区より、（18）はⅤ区より出土している。（19）、（20）は丸みを帯びた底部から内湾気味に口縁部を立上がらせるもので、口縁部を一度横ナデする。（19）、（20）はⅠ区より出土している。（21）～（27）はやや丸みを持った底部から斜め上方に口縁部が立上がるものである。口縁部を一度横ナデしている。（21）、（22）、（24）、（26）はⅠ区より、（23）はⅤ区より出土している。（27）は器高の低いもので、底部には指頭圧痕の痕が認められる。Ⅳ区より出土している。（42）は皿の底部である。底部内面に貫通しない9つの穿孔が認められるが性格は不明である。Ⅴ区より出土している。

黒色化土師質土器椀（28～41）

（29）、（31）、（32）、（34）は器高が4.2cmのものである。（33）、（35）～（41）は器高が3.5～4.0cmである。いずれも基本的には同じ手法で成形されたものであると考えられるが、各々は底部から内湾するように立上がる口縁部をもつもので、口縁端部がヘラギリと強い横ナデのため屈曲して鋭いもの（32）、（34）、（36）、（37）、（39）～（41）と肥厚して丸いもの（28）～（31）、（33）、（35）、（38）とがある。体部外面は指頭圧痕が認められるものもあり、口縁部を横ナデした後ヘラミガキしている。内面はハケ目で調整し



第160図　ＳＤ－４出土遺物４

たのちナデて花弁状ら旋のミガキを施している。(28)、(34)、(38) には体部に粘土帯継目の不連続の線が認められる。(28)、(34)、(37) ～ (39) は口縁端部内面に沈線がめぐる。(33)、(35)、(36)、(38)、(39) はⅠ区より、(29)、(31)、(34)、(37)、(41) はⅡ区より、(28)、(32) はⅢ区落ち込みBより、(30) はⅤ区より、(40)、(41) はⅥ区より出土している。

土師質土器釜（第161図）(6 、10)

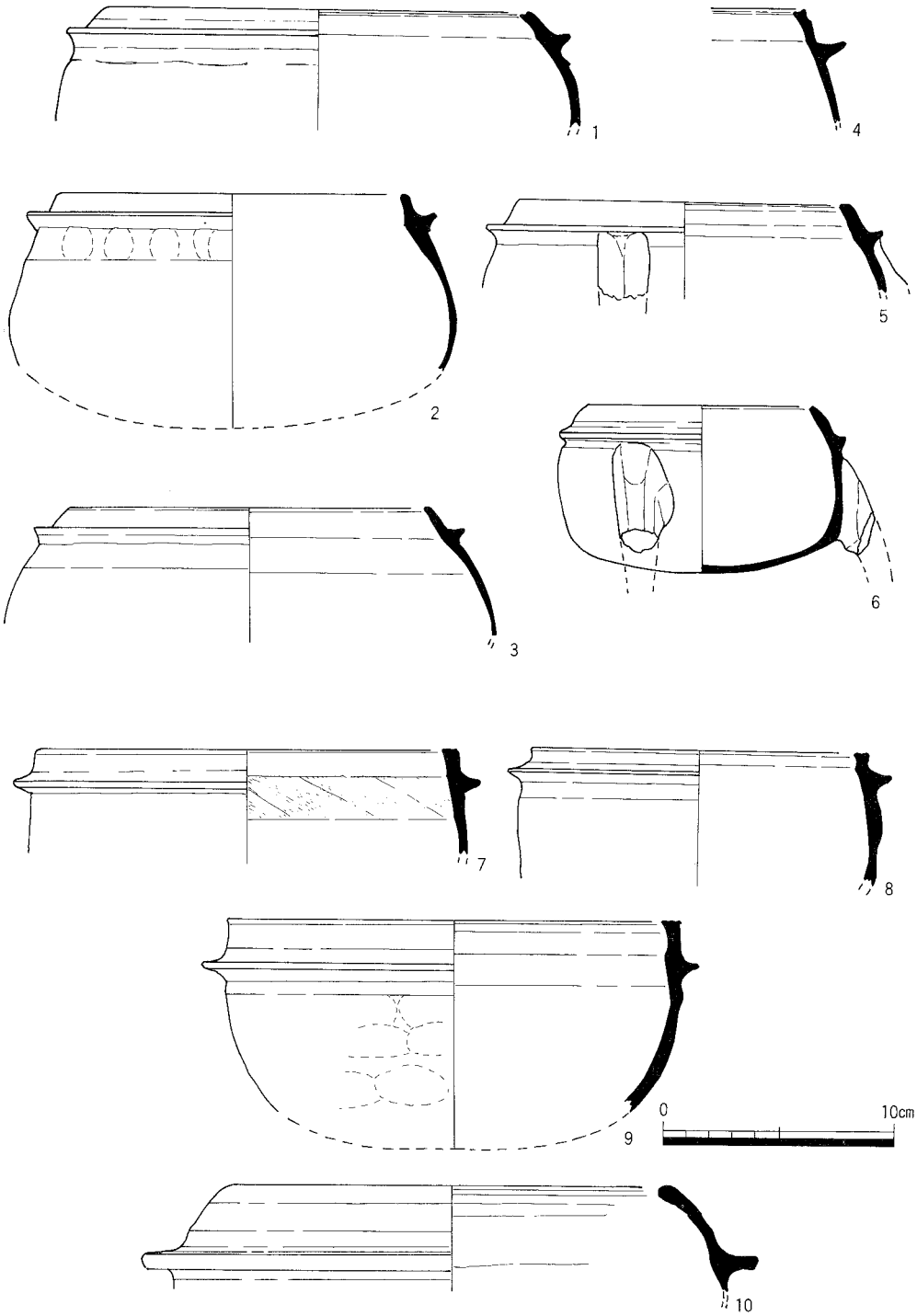
（6）はやや丸みを帯びた底部から屈曲するように体部が立上がり、内傾気味に口縁部がたちあがるものである。口縁端部は内傾するように面を持つ。頸部には断面三角形の鍔が強い横ナデとともに貼付けられている。体部には三足を付けている。この型式の足付きのものは普通瓦質である。色調は赤褐色をていしており、胎土は粗く砂粒を多量に含んでいる。Ⅳ区下層より出土している。(10) は端部にいくに従い肥厚するように大きく内傾させる口縁部を持つもので、端部は丸くおさめるものである。頸部には断面長方形の鍔が真っすぐ横方向につくものである。外面は横ナデで調整され、内面は横方向のハケ目で調整されている。色調は茶褐色を呈し、胎土は粗く砂粒を多量に含む。Ⅴ区下層より出土してる。

半瓦質土器釜（第161図）（2～3）

（2）、（3）は丸みを帯びた体部からやや内傾するように立上がる口縁部を有するもので、口縁端部を強い横ナデにより屈曲させるようにたちあがらせて端部を丸く収めるものである頸部には断面三角形状のものを上向きに貼付けている。口縁部は横ナデにより調整されている。体部には多量のススが不着しているが、成形時の指頭圧痕のあとが認められる。色調は淡黄灰色を呈し、胎土はやや細かな砂質である。（2）はⅠ区上層より、（3）はⅤ区下層より出土している。

瓦質土器釜（1、5）

内傾するように立上がる口縁部を持つもので、端部を内傾するように面を持たせた後、つまみ出すものである。頸部には断面三角形の鍔がはりつけられている。口縁部は横ナデを施し、体部外面にはススが多量に付着していた。色調は銀黒色を呈し、胎土は密で細かい。Ⅲ区上層より出土している。（5）は三足が貼くものである。Ⅴ区上層より出土している。



第161図　ＳＤ－４出土遺物５

瓦質土器鍋（第161・162図）（7～9）（1、2）

（7）は真っすぐに立上がる口縁部は上面で面を持ち、端部をやや内側につまみ出すものである。体部外面は指頭圧で成形されており、口縁部は横ナデされている。頸部には断面三角形の鍔が真っすぐに貼付けられている。口縁部内面は横ナデの後、斜め方向のハケ目が施されている。色調は黒灰色を呈し、胎土は細かいⅥ区中層から出土している。（8）はやや内傾するように立上がる口縁部を持つもので、上面で面を持ち端部を内外側につまみだしている。体部外面は指頭圧で成形され、口縁部は横ナデされている。頸部には断面三角形を呈した鍔が貼付けられている。色調は黒色を呈しており、胎土は粗い。Ⅵ区上層より出土している。（9）は湾曲する体部から真っすぐに立上がる口縁部を持つもので、口縁端部は上面に面を持ち内外方に少しつまみだすものである。体部外面は指頭圧で成形されており、口縁部は横ナデされている。頸部には断面三角形の鍔が貼付けられている。色調は灰白色を呈している。Ⅴ区下層より出土している。（1）は口縁部が受口状になるものである。体部は指頭圧で成形されており、口縁部は横ナデされている。色調は灰白色を呈し、胎土は細かい。Ⅵ区上層より出土している。（2）は外方に開くように立上がる口縁部を持つものであり、端部は2つの山形を呈する。Ⅱ区上層より出土している。

焙烙（第162図）（3～5）

（3）は口縁部が真っすぐに立上がるものである。体部外面は単位の大きなヘラケズリで成形されており、口縁部は横ナデしている。内面は横方向の単位の大きな荒い横ハケ目が施されている。頸部には突起状の鍔がつまみだされている。色調は淡白褐色を呈し胎土には赤色粒子を多量に含んでいる。Ⅱ区上層より出土している。（4）は内湾し内傾する口縁部を持つもので端部を内側に丸く折曲げるものである。体部外面はヘラケズリにより成形し口縁部は横ナデしている。内面は横方向のハケ目を施している。頸部には突起状の鍔がつまみだされている。色調は赤褐色を呈し、胎土は細かな砂粒を多く含む。Ⅱ区上層より出土している。（5）は内傾しながら立上がる口縁部を持つもので、端部を内側に折曲げ丸く収めるものである。体部外面は斜め方向のヘラケズリにより整形し、口縁部は横ナデしている。内面は斜め方向のハケ目を施している。頸部には突起状の鍔がつまみだされている。色調は赤褐色を呈し胎土は砂粒を多く含んでいた。Ⅵ区上層より出土している

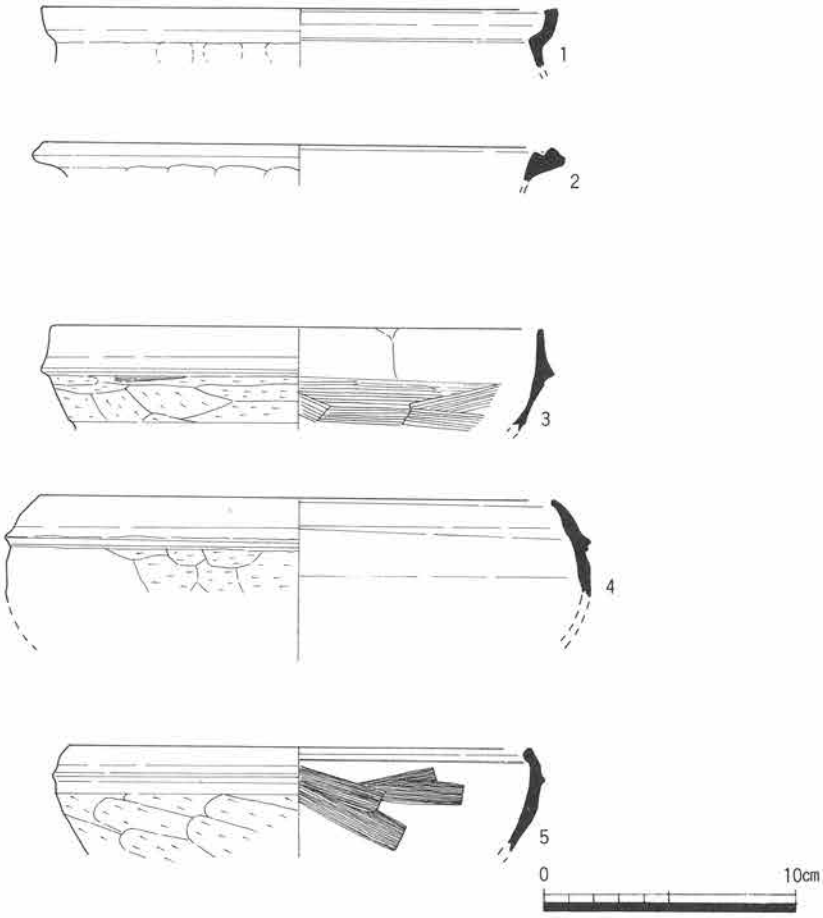
瓦質土器火舎（第163図）（1～9）

（1）～（3）は口縁部が内湾するように立上がり、端部が肥厚するものである。いずれも口縁部直下体部に菊花紋のスタンプが認められる。（1）、（2）は端部上面に面を

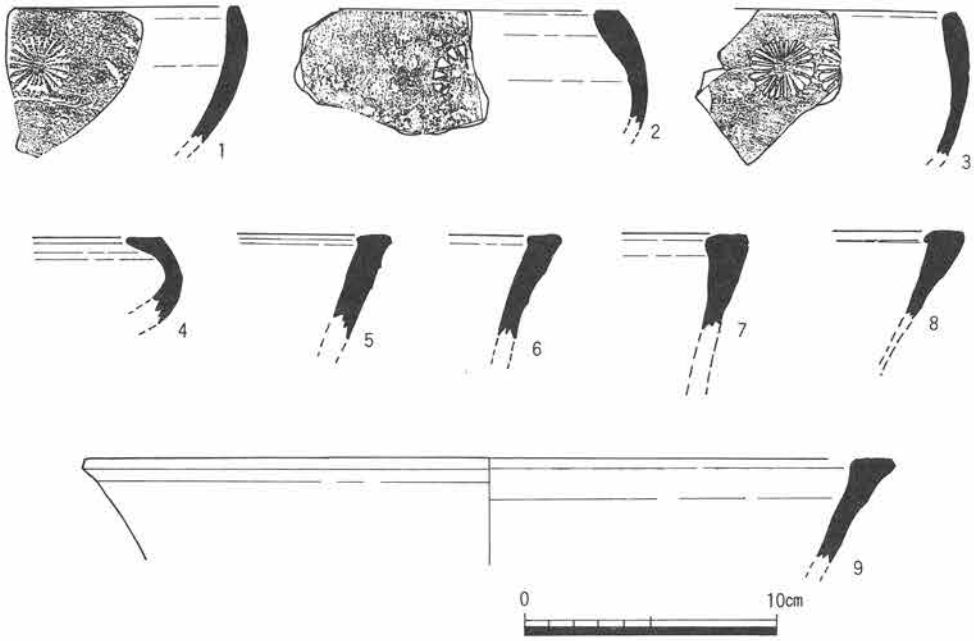
持たせるように丸く収めるものである。（3）は端部を内側につまみ出すものである。いずれもⅢ区上層より出土している。（4）はくの字状に大きく内湾する口縁部を持つもので端部を内側につまみ出して上面に面を形成させるものである。Ⅵ区上層より出土している（5）～（9）はいずれも手焙となるもので平底の底部から斜め上方に体部が立上がるもので、そのままやや外反するように屈曲して肥厚し口縁部にいたるものである。口縁端部は上面に面をもたせるようにして内側につまみだしている。（5）、（8）はⅥ区上層、（6）、（7）はⅠ区上層、（9）はⅤ区上層より出土している。

東播系中世須恵器こね鉢（第164図）（1～27）

（1）～（3）は斜め上方に立上がる口縁部から、端部を内側に屈曲させ面をもたせるようにつまみだすものである。（1）はⅤ区上層より、（2）、（3）はⅣ区中層より出土している。（10）、（11）は斜め上方に立上がる口縁部から、端部に面をもたせるよう



第162図　ＳＤ－４出土遺物６

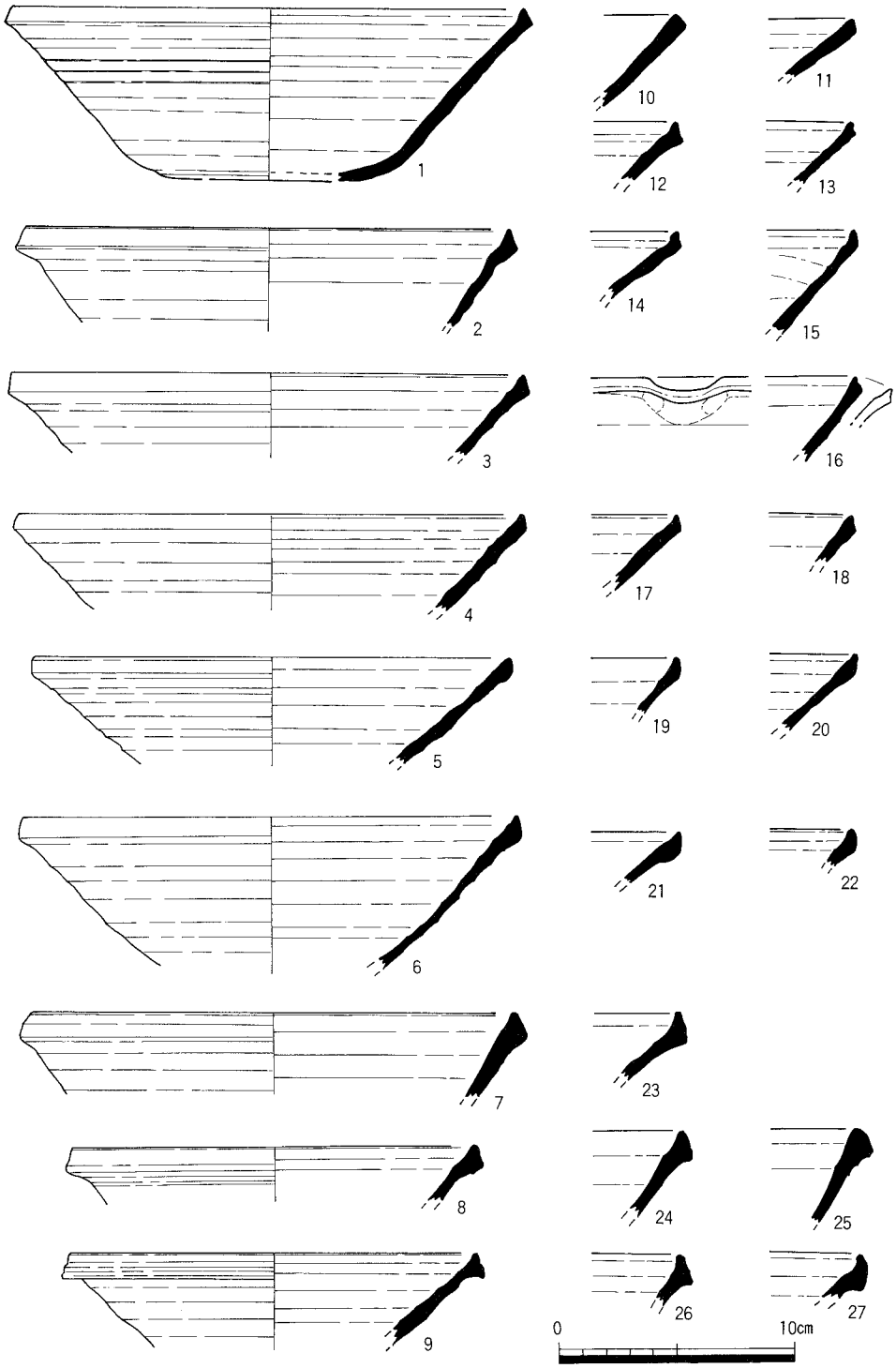


第163図　ＳＤ－４出土遺物７

に押しナデるものである。(10)、(11) はⅥ区上層より出土している。(12) ～ (16) は斜め上方に立上がる口縁部から端部を上方につまみだすものである。(14) はⅣ区下層より、(15) はⅥ区中層より出土している。（４）～（６）、(17) ～ (22) は斜め上方に立上がる口縁部から端部を上方につまみだすものである。(18)、(22)、(22) はⅠ区上層より、（４）はⅠ区中層より、（４）まⅠ区中層より、(22) はⅥ上層より、(17) いる。（７）、（８）、(23) ～ (26) 、(26) は斜め上方に立上がる口縁部から端部を玉縁状に厚く外方につまみだすものである。（８）、(26) はⅠ区上層より、(23) はⅡ区上層より、(24) はⅥ区上層より出土している。（９）は斜め上方に立上がる口縁部から端部を玉縁状に厚く上下につまみだすもので縁に段をもつものである。(27) は斜め上方に立上がる口縁部から、端部を玉縁状にして内湾するようにつまみだすものである。

東播系中世須恵器甕（第164図）（３、４）

（３）は内傾する体部から外反するように口縁部が立上がるものである。口縁端部は段をもつようにやや受口気味に鋭くつまみだすものである。体部から頸部にかけて斜め方向のタタキ目が認められ、口縁部では横ナデし、それをすり消している。（４）は内傾体部から外反するように口縁部が立上がり、端部を玉縁状につまみだすものである。体部から



第164図　ＳＤ－４出土遺物８

頸部の外面を斜め方向のタタキ目が認められ頸部より口縁部にかけて横ナデし一部タタキ目をすり消している。内面は横ナデとナデによって仕上げられている。

灰釉陶器平碗（第165図）（1）

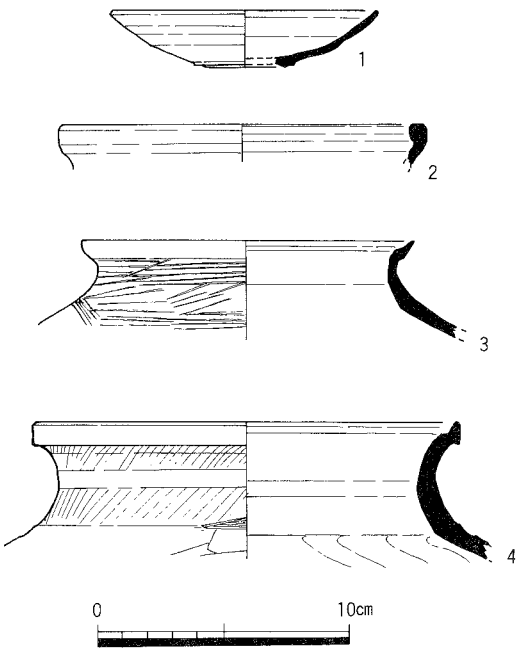
ロクロ横ナデによりやや内湾気味に立上がらせるもので、口縁端部を丸く収めるものである。

産地不明中世須恵器甕（第165図）（2）

口縁部を内側に巻込むようにまるく収めるものである。Ⅰ区下層より出土している。

産地不明中世須恵器（第166図）（1～20）

中世須恵器と考えられる甕の体部の破片である。ＳＤ04からはコンテナにして約2箱の破片が出土している。ここには代表的なタタキのものをあげた。（1）～（6）は外面を格子目のタタキを施し、内面をナデているものである。類似したものに岡山県亀山窯、勝間田窯、香川県十瓶山窯、西村窯、熊本県下り山窯等が考えられるが断定はできない。（9）、（10）は外面を格子目のタタキを施し、内面を斜めもしくは同心円のタタキ目を施するものである。(12) ～ (14)、(18)、(20) は外面を斜め方向のタタキをクロスさせたり綾杉状に叩いたりするもので、内面はナデている。(15)、(17)、(19) は外面を斜め方向のタタキをクロスさせたり綾杉状に叩いたりするもので、内面は同心円のタタキ目を施しているものである。いずれも類似したものに東播系等のものが考えられるが断定はできない。

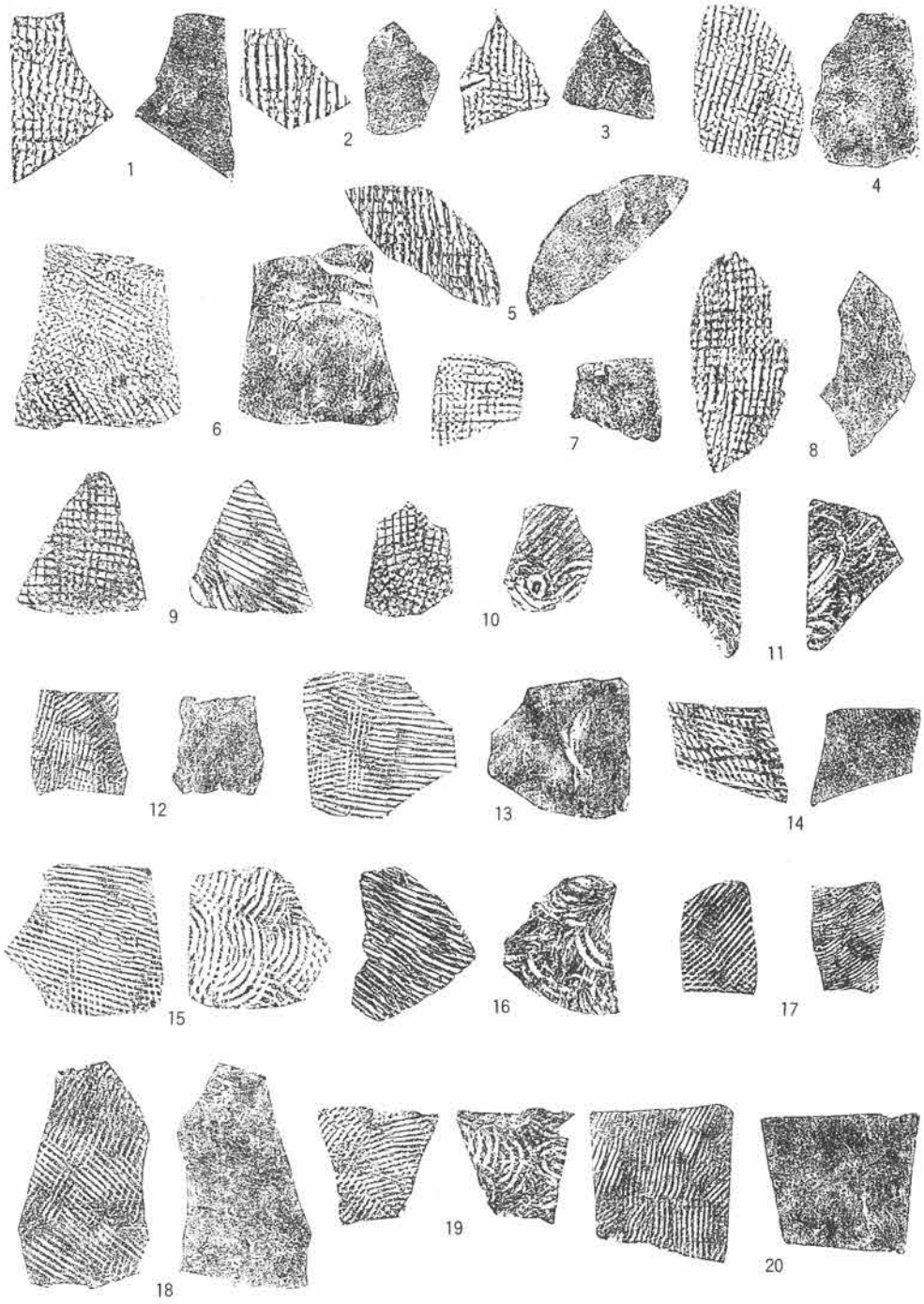


第165図　ＳＤ－４出土遺物９

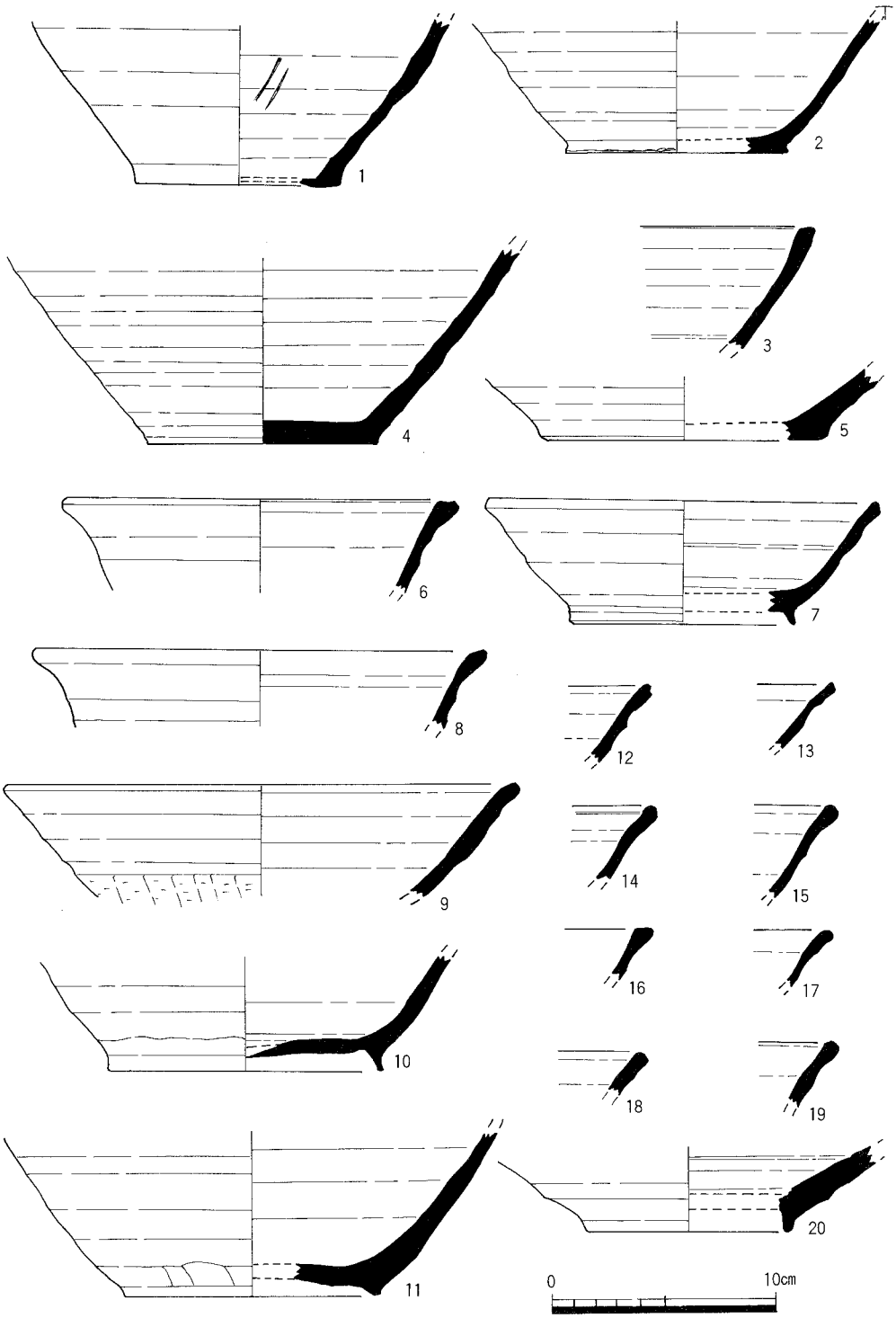
陶　器

信楽焼こね鉢（第167図）（1～5）

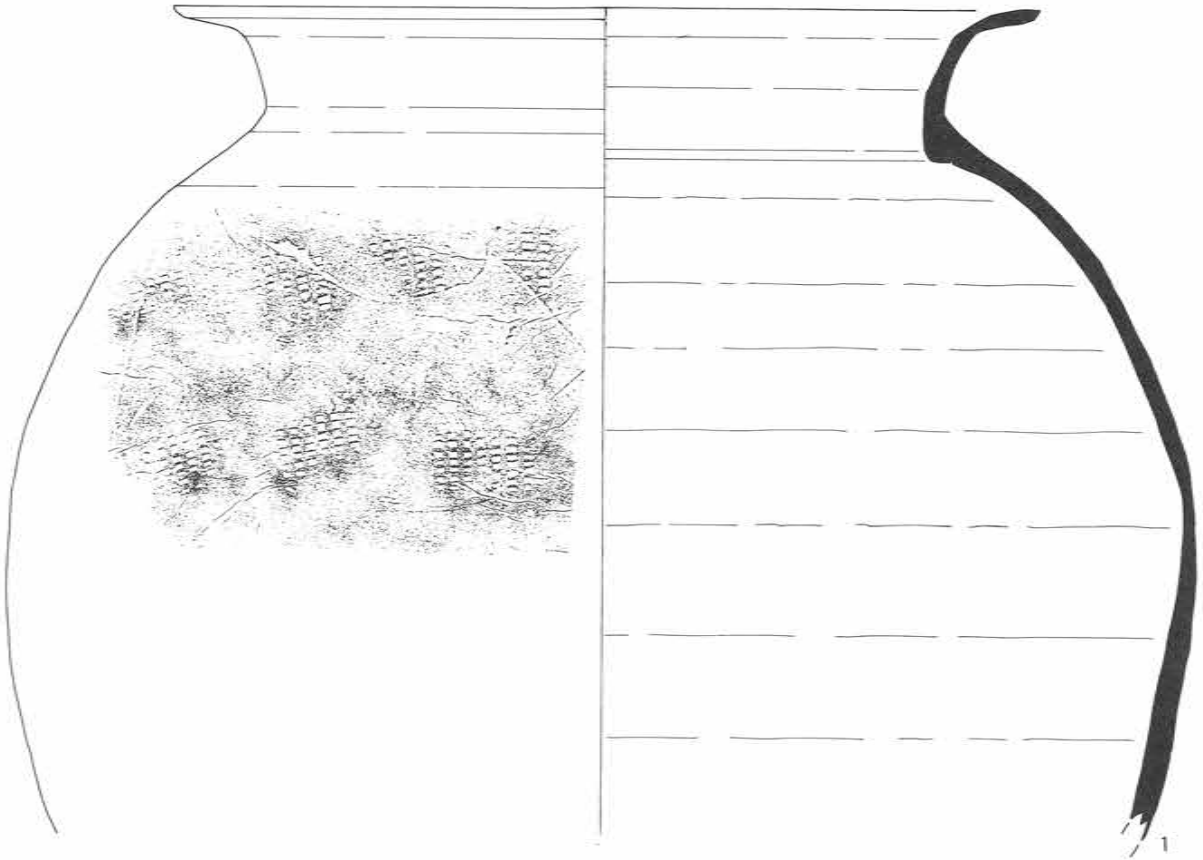
平底の底部から斜め上方に立上がる体部を持つもので、ロクロ横ナデによって成形されている。（1）には1個所に2本のすり目らしきものが認められる。口縁部（3）はやや内弯するように立上がり端部を丸く収めやや外方につまみだすものである。信楽焼五位ノ木窯のころのものと考えられる。（2）はⅣ区上層より、（1）、（4）はⅥ区上層出土している。



第166図　ＳＤ－４出土遺物10



第167図　ＳＤ－４出土遺物11



第168図　ＳＤ－４出土遺物12

山茶碗系こね鉢（第167図）（6～20）

高台の付く底部から斜め上方に立上がる口縁部を有するものである。体部下半はヘラケズリされ、上部はロクロ横ナデにより成形されている。口縁端部の形態から（6）、(16) は端部を肥厚させるように外方につまみ出すもので、（7）、（9）、(12)、(13) は端部をつまみ出し稜を形成するものである。（8）は斜め上方に鋭くつまみだすものである。(14)、(15)、(17) ～ (19) は端部を肥厚させて丸く収めるものである。(16) ～ (17) はⅠ区上層より、（6）～（8）、(20) はⅡ区上層より、(16) はⅡ区下層より、（7）はⅢ区上層より、（6）はⅥ区上層より、(18) はⅤ区下層より出土している。

常滑焼壷（第168図）（1）

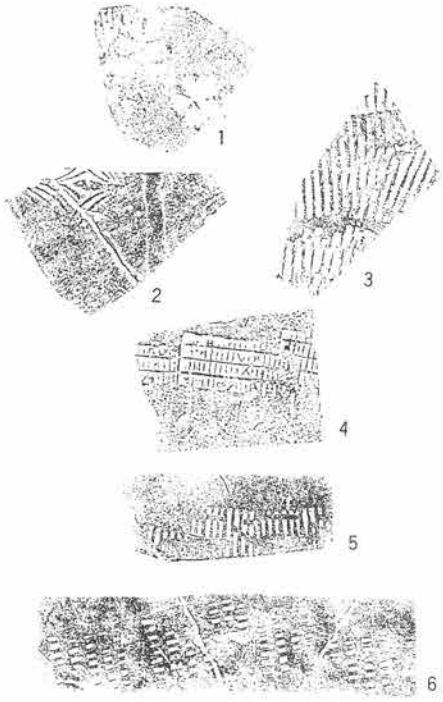
丸みを帯びた体部から屈曲するように頸部が立上がり、口縁部が外反して端部を鋭く収めるものである。体部は輪積みによる横ナデにより成形されている。体部には格子目のタタキが回転スタンプによってつけられている。大型製品である。12世紀前半の製品と考えられる。

陶器甕体部（第169図）（1～6）

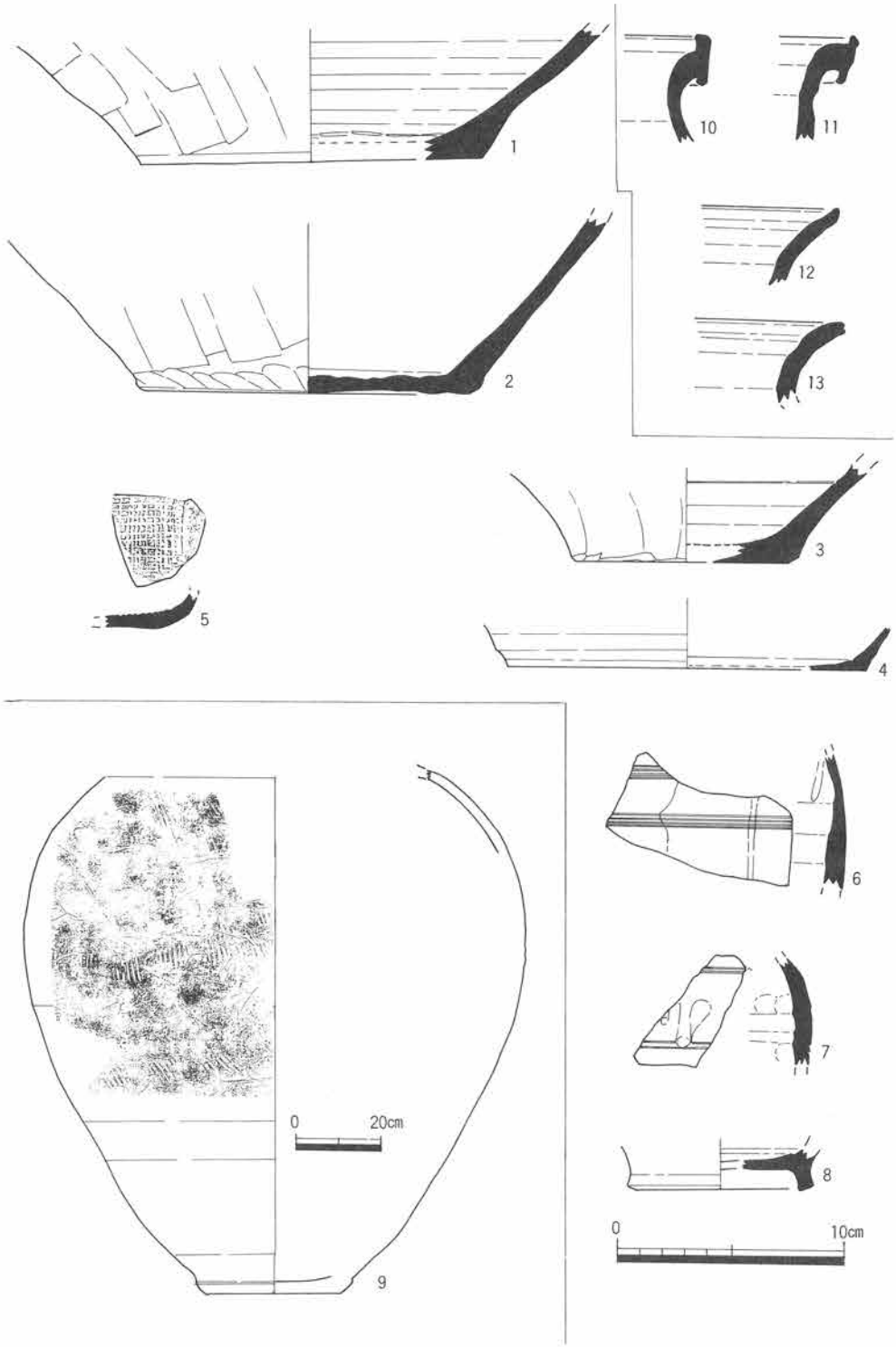
（1）はゆすり葉のスタンプが認められるものである。淡褐色を呈しているところから信楽の可能性があるが不明である。（2）、（3）は渥美焼の甕体部である。（4）～（6）は常滑焼甕の体部である。

常滑焼甕（第170図）（1・2、3、9）

（1）～（3）はいずれも砂付きの平底の底部から斜め上方に立上がる体部を持つものである。体部外面は板状のもので下から上にナデられている。（9）は平底の小さな底部から外方に開くように立上がる体部から、肩部から内湾するように頸部にむかって立上がるものである。体部には斜線状のスタンプが三段に渡って施されているものである。口縁部は欠失しているが大型製品である。



第169図　ＳＤ－４出土遺物13



第170図　ＳＤ－４出土遺物14

瀬戸三筋壷（第170図）（6～8）

（6）、（7）は肩部に三条の沈線が巡る壷の体部である。素地は茶褐色を呈し、肩部から淡緑色の釉がかかっている。いずれもⅣ区上層より出土している。（8）は底部である。淡緑色の釉がかかっている。Ⅴ区下層より出土している。

瀬戸おろし皿（第170図）（5）

糸切りの底部から体部が立上がるものである。内面に荒いカキ目が認められる。

瀬戸平盤（第170図）（4）

器壁の薄い平底の底部から斜め上方に立上がる体部を持つものである。体部内外面に褐釉がかかっている。Ⅳ区上層より出土している。

磁　器

白磁碗（第171図）（4、11～16、18、19、25）

（4）は真っすぐに立上がる削出し高台から斜め上方に体部が立上がるものである。内面見込みには猫掻の櫛目が渦巻き状に5個所認められる。全体に白濁色の釉がかかっている。〔太宰府Ⅳ－Ⅰ－b類〕に層するものと考えられる。(11)、(12)、(18)、(19)はいずれもは斜め上方に立上がる体部から口縁端部を屈曲するように短くつまみだすものである。体部はヘラケズリにより成形されている。(18)は内面口縁部直下に沈線が一条巡るもので〔太宰府Ⅴ－4－a類〕に層するものと考えられる。(19)はⅠ区中層より、(12)、(18)はⅢ区上層より、(11)はⅣ区上層より出土している。(13)～(16)は口縁部が玉縁状をなすものである。(25)はその底部である。いずれも〔太宰府Ⅳ類〕に層するものと考えられる。(13)はⅠ区上層より、(16)はⅠ区下層より、(25)はⅡ区上層より、(14)　(15)はⅢ区上層より出土している。

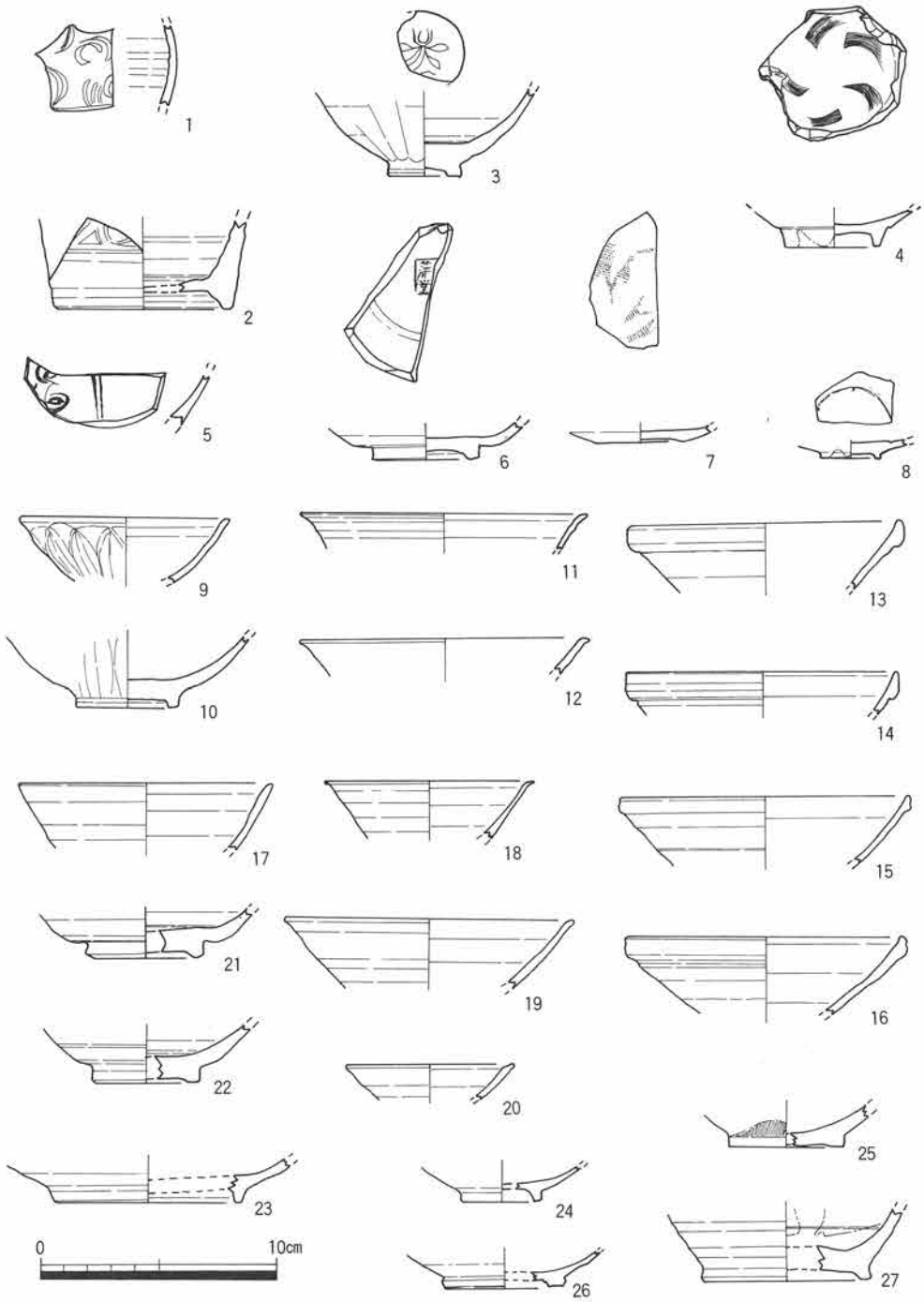
青白磁梅瓶（第171図）（1、2）

（1）は薄い器壁の体部である。唐草紋を浮彫りしている。Ⅱ区上層より出土している

（2）は高台のある底部から真っすぐに立上がる体部をもつものである。体部下半には2条の沈線が巡りその上部に唐草紋が浮彫りされている。素地は黒色粒子を多量に含み光沢の強い青色の釉がかけられている。貫入が多い。Ⅰ区上層より出土している。

青白磁碗（第171図）（8）

低く削出された高台から低く体部が立上がるものである。体部内面見込みに沈線が巡り鉄色の枕の跡が認められる。淡青白色の釉が全体にむらなくかかっている。素地は白灰色を呈している。



第171図　ＳＤ－４出土遺物15

青磁皿（第171図）（7）

上げ底の底部から斜め上方に立上がる体部をもつものである。淡黄緑色の釉が体部上半にかかっている。下部と底部は施釉されず露胎している。Ⅴ区下層より出土している。〔太宰府Ⅰ－1－b類〕に属するものと考えられる。

青磁碗（第171図）（3、5、6、9、10、17、20～22）

（3）、（9）、（10は鎬蓮弁のものである。（3）は見込みには線刻の蓮花紋が認められる。〔太宰府Ⅰ－5類〕に層するものと考えられる。Ⅱ区上層より出土している。（9）、（10）は〔太宰府Ⅰ－5－b類〕に属するものと考えられる。（9）はⅠ区上層より、（10）はⅡ区上層より出土している。（5）は劃花文の体部である。〔太宰府Ⅰ－4類〕に属するものと考えられる。Ⅳ区上層より出土している。（6）は見込みに「金玉満堂」のスタンプがあるものである。（17）、（20）～（22）は〔太宰府Ⅰ－1類〕に属するものである。（17）はⅠ区上層より、（21）はⅢ区上層より、（22）はⅣ区上層より（20）はⅤ区上層より出土している。

青磁杯（第171図）（23）

削出された高台から斜めに体部が立上がるものである。〔太宰府Ⅲ類〕に属するものと考えられる。Ⅱ区上層より出土している。

青磁壷（第171図）（27）

壷もしくは水注の底部になるものである。体部ロクロ横ナデによって成形されている高台は削出しである。Ⅴ区上層より出土している。

土製品

浮き（第182図）

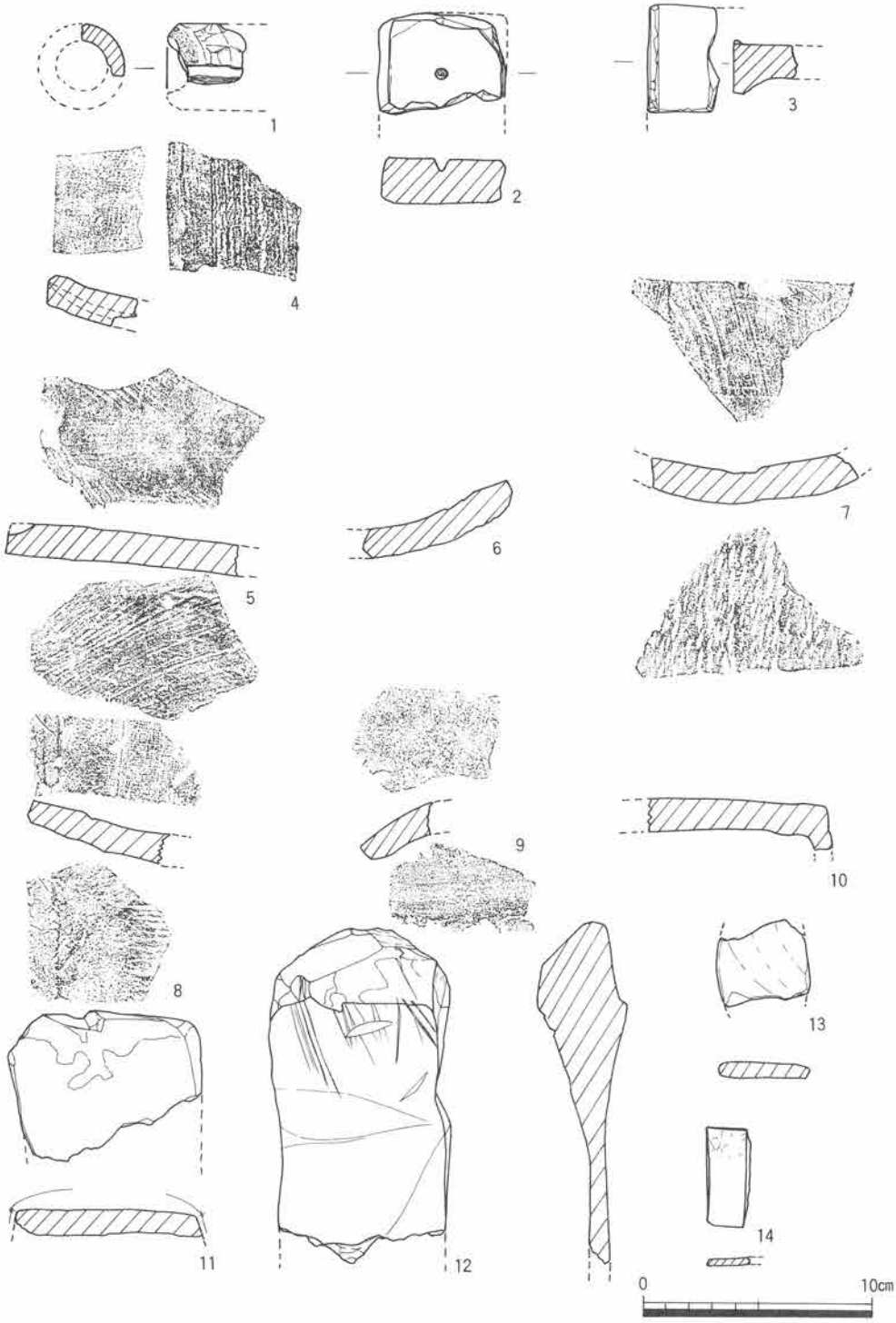
長さ3.8cm、径2cmを計るもの、長さ4.2cm、径2.5cmを計るもの、長さ5.4cm、径3cmを計るもの等、3点が出土している。

ふいご羽口（第172図）（1）

羽口の一部である。表面コークス状になっており内面の熱のため淡褐色を呈している。Ⅰ区上層より出土している。

用途不明土製品（第172図）（2）

形状は長方形を呈するもので、厚さ2.5cmを計るものである。ほぼ中央に貫通しない円形のえぐりが認められる。Ⅱ区上層より出土している。



第172図　ＳＤ－４出土遺物16

瓦（第172図）（3、7～10）

（3）は道具瓦の一部と考えられるものである。ヘラケズリにより成形されている。色調はセピア色を呈し、須恵質である。（7）は平瓦である。表面は布目＋カキ目、裏面は縄目で調整されている。Ⅲ区上層より出土している。（8）平瓦である。端部を面取りされている。表面は布目が、裏面は縄目が施されている。Ⅰ区中層より出土している。（9）は丸瓦である。端部は2回の面取りされている。表面はナデられ、裏面は布目で調整されている。Ⅱ区中層より出土している。（10）は道具瓦である。一方が箱状に屈曲している。Ⅵ区中層より出土している。

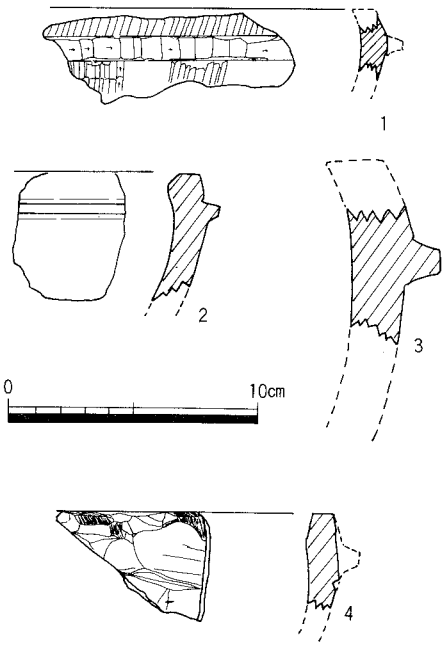
石製品

砥石（第172図）（11～14）

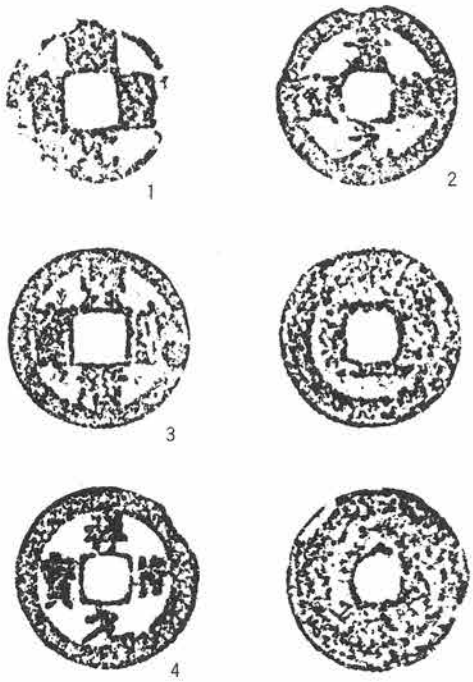
（11）は台形状のものの一部分である。Ⅳ区中層より出土している。（12）は非常によく使用されたもので両面ともに刷り減って、中央は薄くなっている。鋭利な刃物状の溝が認められる。Ⅰ区上層より出土している。（13）は小判状になるものの一部と考えられる両面使用されている。Ⅳ区上層より出土している。（14）は薄い板状ののものである。Ⅱ区上層より出土している。

滑石製石鍋（第173図）（1～4）

（1）は石鍋の頸部であるが、鍔を削り落とし口縁部体部を削りとっている。素地は淡桃銀色を呈している。Ⅳ区中層より出土している。（2）はやや内湾気味に口縁部が立上がるものである。頸部には下辺の短い鍔が削り出されている。口縁部から体部を鋸状のもので切断している。素地は黒銀灰色を呈している。Ⅱ区中層より出土している。（3）は厚く、上辺が短い鍔を削りだすものである。鍔の端部が刃物のようなもので削りとられている。素地は黒緑銀色を呈している（4）は体部から口縁部にかけての部分であると考えられるが、鍔及び体部外面のほとんどを削りとっている。素地は淡桃銀色を呈している。



第173図　ＳＤ－４出土遺物17



第174図　ＳＤ－４出土遺物18

銅製品

貨幣（第174図）（１～４）

（１）と（２）は互いに癒着しているため裏面は不明であるが、（１）は「□□元宝」で（２）は「景□元宝」である。（３）は「熙寧元宝」（初鋳1068年）、（４）は「祥符通宝」（初鋳1008年）である。いずれも北宋銭である。

木製品

下駄（第175図）（１～６）

（１）は幅推9.5㎝、長さ18.5㎝を計るものである。全体に火を受けている。花緒の穴痕が３箇所認められる。Ⅰ区中層より出土している。歯は欠質している（２）は長さ18㎝を計る長方形のものである。花緒の穴が１つ認められる。右足のものと考えられる。歯は削り出したものであるが、使いこまれ摩滅しており低い。Ⅵ区下層より出土している。（３）は幅8.5㎝長さ推15㎝を計る丸下駄である。形状から子供用左足のものと考えられる。歯は削り出しのものであるが、使いこまれ磨り減り低いものである。Ⅲ区中層落ち込みＡより出土している。（４）は幅推8.5㎝を計るものである。形状は方形を呈するものである。歯は削り出しのほので高い。Ⅳ区下層より出土している。（５）（６）は下駄の歯の部分である。（５）はⅢ区下層より、（６）はⅠ区下層より出土している。

毬材（第176図）（７）

角材の各面を削り落とし、部的に球状近くに仕上げている。一部の面に木皮の残っている。やや使用の為か摩滅している。Ⅰ区下層より出土している。

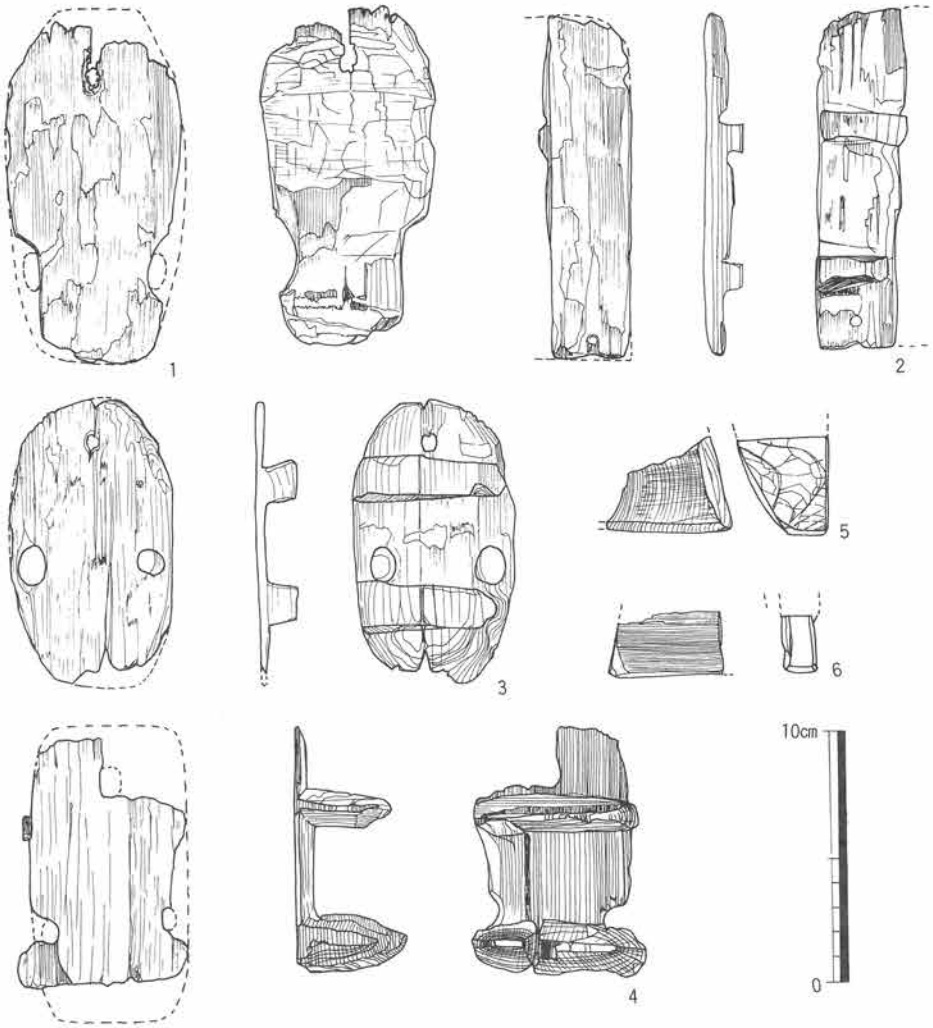
柄状木製品（第176図）（８）

器具の柄になるものと考えられる。一部面取りされて、木皮のついた木の枝の先を穿孔し器具の尻がささるようになっている。Ⅴ区上層より出土している。

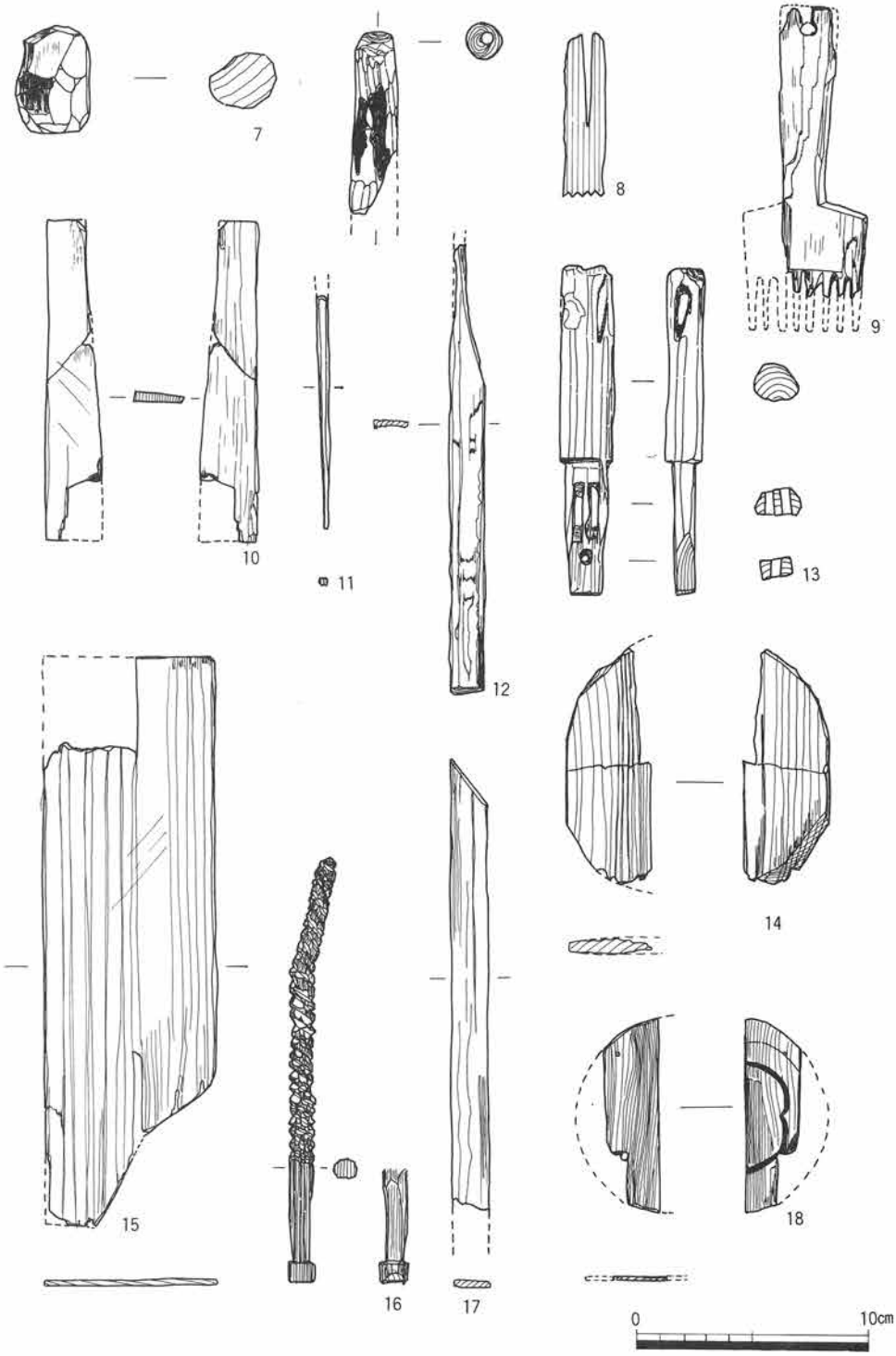
棒状木製品（第176図）（13、16）

（13）は槌状のものである。胴部は蒲鉾形に綺麗に面取りされたのち研磨されている。

先はやや窪んでいる。柄の部分は差し込めるようになっており、中央部に柄止用と考えられるソケット状の２つのほぞと穿孔が認められる。Ⅳ区上層より出土している。（16）は棒である。長さは24.5cmである。柄は10角に面取りされ持ち易いように端に握り手と片面にえぐりが付けられている。体部はら旋状に刻み目をいれてねじれるように先にいたり途中で屈曲している。Ⅲ区下層落ち込みＢより出土している。



第175図　ＳＤ－４出土遺物19



第176図　ＳＤ－４出土遺物20

板状木製品（第176図）(10、15)

(10) は長方形のもので、両端では幅が違うものである。一部角を欠失している。Ⅰ区下層より出土している。(15) は長方形の板の下端に鈍角の切れこみをいれている。Ⅳ区下層より出土している。

櫛状木製品（第176図）(9)

スコップ状になる柄の有る櫛である。歯はその先が欠失しているが、復元から8本あったと考えられる。柄はやや末広がりとなっており柄端に穿孔がひとつ認められる。鎌倉市千葉地遺跡などに類例が認められる。Ⅰ区中層より出土している。

箸状木製品（第176図）(11)

先尖りになるように細く面取りされたものである。半分以上欠失している。Ⅲ区下層より出土している。

篦状木製品（第176図）(12、17)

(12) は幅約1.5cmの板状のものである。先を尖るように削りだしている。Ⅱ区中層より出土している。Ⅱ区中層より出土している。(16) は約2cmの板状のものである。先が尖るように斜めにカットしている。Ⅲ区下層より出土している。

曲物板木製品（第176図）(14、18)

(14) 円形の板の一部で曲物の蓋板と考えられる。Ⅱ区中層より出土している。(18) は曲物の底板の半分である。周囲には目釘である木釘が認められる。板の中央には達磨状の円形の焦げ痕が認められる。Ⅳ区中層より出土している。

ＳＤ05（第177図）

土師質土器皿（1～4）

（1）は指頭圧で成形された底部から、口縁部を短く屈曲するように真っすぐに立ち上げるものである。口縁部を一度横ナデしている。（2）は口縁部を斜め上方につまみ上げるもので端部を鋭く収めるものである。口縁部を一度横ナデしている。（3）は浮き底の底部からやや内湾するように立ち上がる口縁部をもつものである。口縁部を一度横ナデしている。（4）は平坦な底部から屈曲するような斜め上方に口縁部をたちあがらせるもので口縁端部は丸く収めるものである。口縁部を一度横ナデしている。

土師質土器鍋（9）

真っすぐに立上がる体部からそのまま口縁部を形成するものである。端部は上面に面を持ち外方につまみ出すものである。頸部には断面台形状の鍔が低くつく。

ＳＤ06（第177図）

黒色化土師質土器椀（５、６）

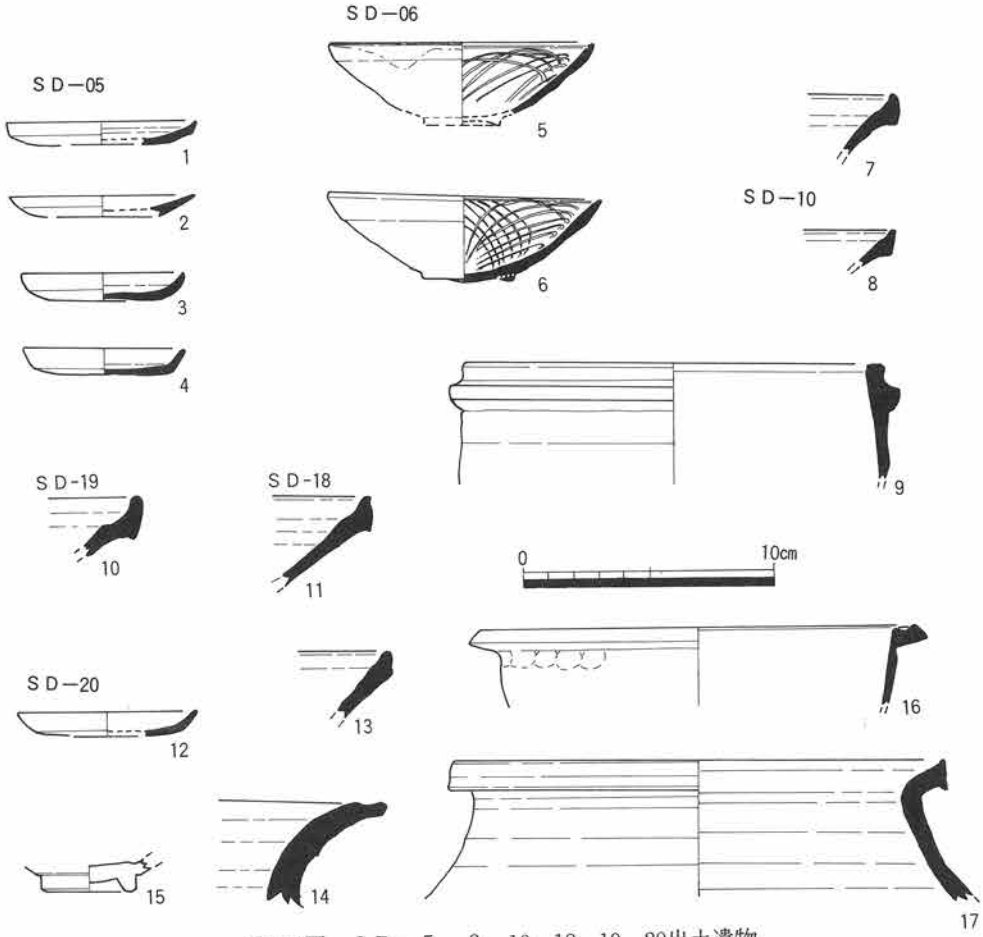
ともに高台より突出した底部から斜め上方に立上がり、口縁部近くでヘラキリのため一度屈曲して口縁部にいたるものである。体部外面は指頭圧で成形され、内面は平滑に仕上げられ花弁状のら旋ミガキを施している。口縁部は横ナデを施しており内面に沈線がある

東播系中世須恵器こね鉢（７）

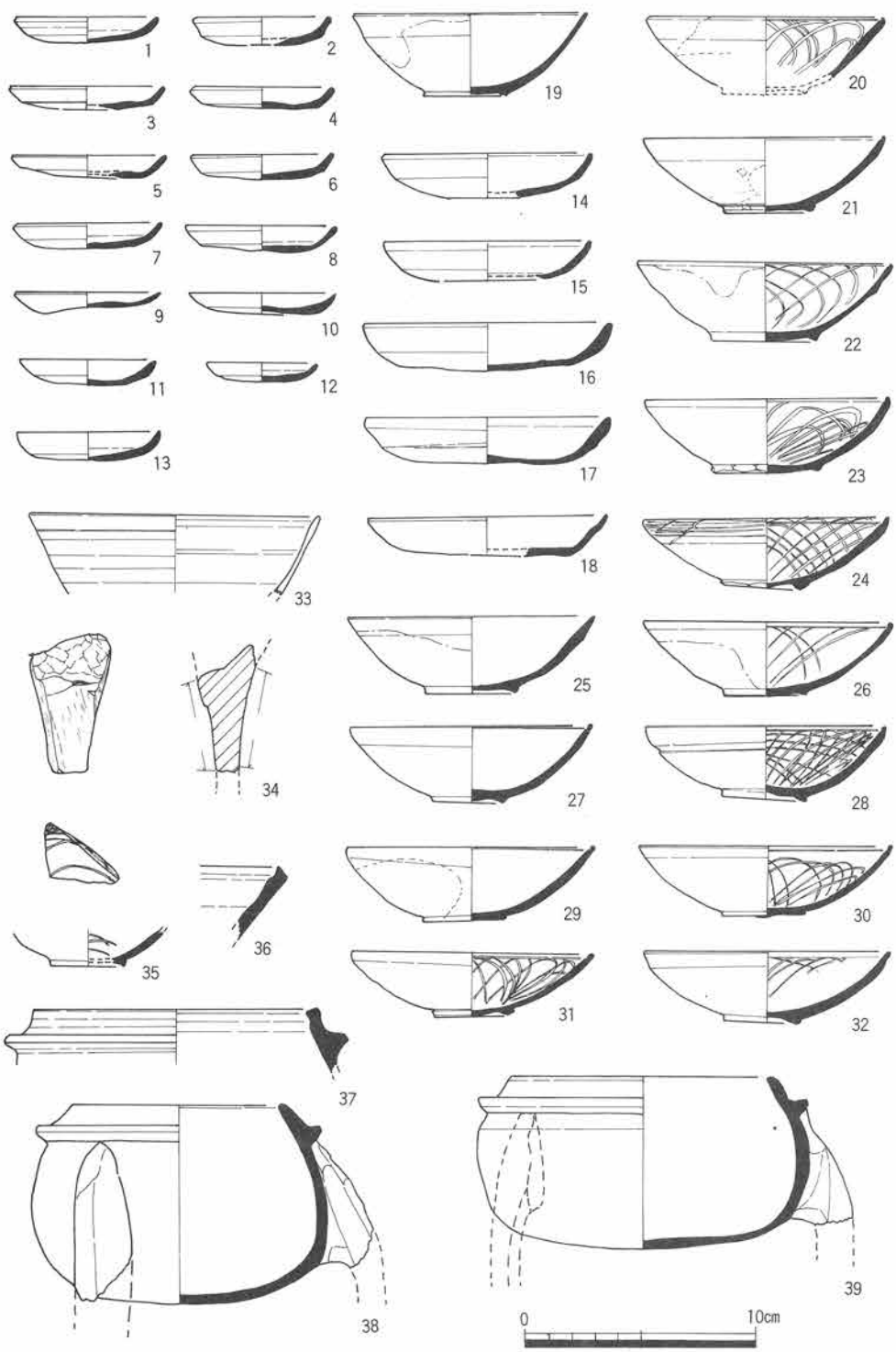
口縁部の破片である。斜め上方に立上がった体部からやや外反気味に立上がらせ、玉縁状につまみ出し肥厚させるものである。

ＳＤ10（第177図）

東播系中世須恵器こね鉢（８）



第177図　ＳＤ－５，６，10，18，19，20出土遺物



第178図　ＳＤ—16出土遺物

口縁部に面をもたせるように押ナデして玉縁を作るものである。

ＳＤ16（第178図）

土師質土器皿（１～18）

（１）はやや内湾気味に立上がる口縁部を持つものである。口縁部を２度横ナデしている。（２）は丸みを帯びた底部から強い口縁部の横ナデにより、口縁端部に稜を持ち外反気味に立上がるものである。中層より出土している。（３）～（９）は指頭圧えによって成形された底部から斜め上方に立上がる口縁部をもつものである。口縁部は一度横ナデをして端部に稜をもつものである。（７）上層より、（８）は中層より出土している。(10)、(11) は丸みを帯びた底部から口縁部が屈曲するように立上がるものである。口縁部を一度横ナデし、口縁端部は鋭く収める。(12)、(13) は口縁部が内湾するように立上がるものである。(14) ～ (18) は大皿である。(14) ～ (16) は丸みを帯びた底部から内湾気味に立上がる口縁部を持つもので、口縁部を一度横ナデして端部に稜を持つものである。(15) は口縁端部を内側に強く折るものである。いずれも中層より出土している。(17) は指頭圧により成形された底部から口縁部を斜め上方に立上がらせるもので、端部は肥厚している。口縁部を２度横ナデしている。中層より出土している。(18) は平坦な底部から斜め上方に立上がる口縁部をもつもので、端部を鋭く収める。上層より出土した

黒色化土師質土器椀（18～31）

(19) ～ (30) は器高が4.2㎝～4.5㎝のものである。(31) は器高が3.7㎝のものである。尖底気味の底部から口縁部が斜め上方に立上がり、端部はヘラ切りを行なったのち鋭角に収める。体部外面は指頭圧痕で成形し、口縁部を横ナデしたのちヘラミガキしている。内面は平滑で花弁状ら旋ミガキを施している。(24)、(28)、(31) は以外は口縁部内面に横ナデ時の沈線が巡る。高台は低く形骸化している。(19) (20) には粘土帯の不連続な継目が斜めに認められる。(19) ～ (21)、(23)、(25)、(27) は中層より一括で出土している。他もすべて中層より出土している。

瓦器碗（34）

底部の破片である。搬入品と考えられる。中層より出土している。

半瓦質土器釜（37、38）

平坦な底部から内湾しながら立上がる体部から内傾する口縁部をもつものである。口縁端部には面を持つ。頸部には断面台形の鍔が上向きに貼付けられている。体部は指頭圧えにより成形され、口縁部は横ナデされている。頸部から体部にかけて三足が貼付けられて

いた。色調は灰白色を呈し、胎土は砂粒を多量に含む。中層一括より出土している。

瓦質土器釜（36）

内傾する口縁部をもつものである。口縁端部は面を持ち、強い横ナデが施されている。上層より出土している。

東播系中世須恵器こね鉢（35）

斜め上方に口縁部が立上がるもので、口縁端部はつまみだされ押しナデ面を持つ。

青磁碗（32）

斜め上方に立上がる口縁部の一部である。淡緑灰色の釉が施釉されていた。上層より出土している。

砥　石（33）

槌状に広がるものである。両端とも欠失している。上層より出土している。

ＳＤ18（第177図）

東播系中世須恵器こね鉢（11）

斜め上方に立上がる口縁部の端部を玉縁状にして端部を上下につまみ出すものである。

ＳＤ19（第177図）

東播系中世須恵器こね鉢（10）

口縁部が受口状になりアゴ状に玉縁を形成するものである。端部は肥厚し厚く丸く収める

ＳＤ20（第177図）

土師質土器皿（12）

平坦な底部から屈曲するように口縁部を立上がらせるものである。体部下半までを一度横ナデしている。

土師質土器鍋（16）

開き気味に立上がる体部から手の字状の口縁が付くものである。頸部を指押えしている

東播系中世須恵器こね鉢（13）

斜め上方から立上がる体部から口縁部を屈曲するように収めるものである。

青磁碗（15）

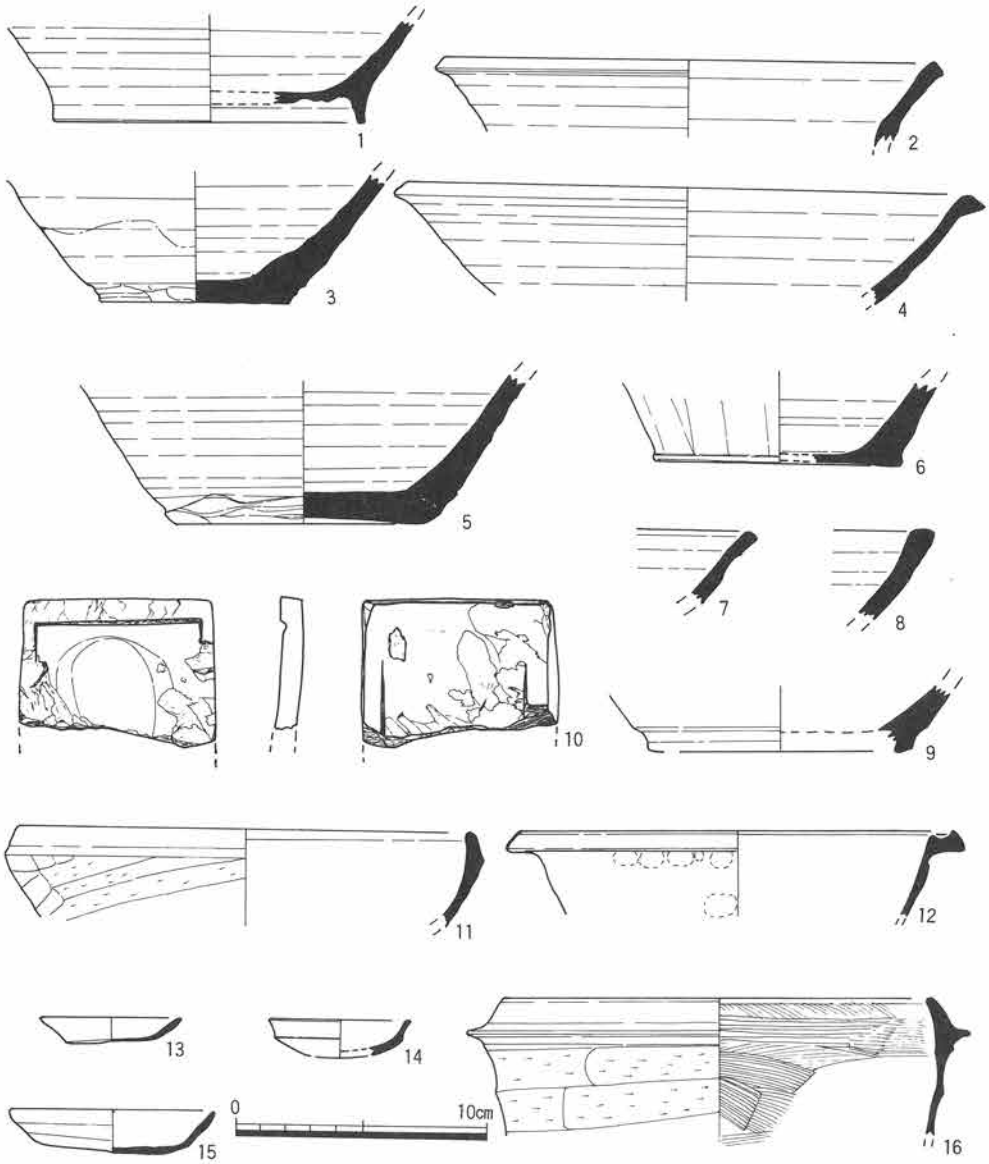
削出しの高台である。淡緑灰色の釉が施釉されている。

常滑焼壷（14）

大きく外反するように立上がる口縁部をもつものである。口縁端部に段を持つように横ナデして鋭くおさめている。

産地不明甕（17）

小型の甕である。内傾気味に立上がる頸部から口縁部が外方に屈曲して端部が玉縁状になるものである。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に白色小石を多量に含む。



ＳＫ−28：1　ＳＫ−3：2　ＳＫ29：3　ＳＫ11：46　ＳＫ1：5　ＳＫ13：7　ＳＫ23：8
ＳＫ−25：9，10　ＳＫ8：11　ＳＫ−30：12　ＳＫ−12：13，14　ＳＫ−17：15　ＳＫ−18：16

第179図　ＳＫ出土遺物

ＳＫ01（第179図）

信楽焼甕（５）

上げ底の底部からロクロ横ナデにより体部を斜め上方に立上がらせるものである。底部には粘土の継目が認められ指ナデの跡が認められる。

ＳＫ02（第179図）

土師質土器皿（13、14）

（13）は平坦な底部から斜め上方に立上がる口縁部を持つものである。端部は丸く収める。体部下半部までを一度横ナデしている。（14）は平坦な底部から屈曲するように外方に開く口縁部を持つものである。口縁部を２度横ナデしている。

ＳＫ03（第179図）

常滑焼こね鉢（２）

斜め上方に立上がる体部から口縁部を形成し、口縁端部を外方につまみだし押しナデして面をもつようにするものである。色調は暗紫灰色を呈している。

ＳＫ08（第179図）

焙烙（11）

内湾気味に立上がる体部から屈曲するように真っすぐに立上がる口縁部をもつものである。口縁部を横ナデし、体部はヘラケズリにより成形している。色調は淡褐色をていしている。

ＳＫ11（第179図）

産地不明こね鉢（４）

斜め上方に大きく開くもので口縁端部が外方につまみだされるものである。体部はロクロ横ナデにより成形されている。色調は赤褐色を呈している。

産地不明壷（６）

壷の底部である。平坦な底部から斜め上方に立上がる体部をもつものである。体部外面はハケナデを施している。

ＳＫ13（第179図）

山茶碗系こね鉢（７）

斜め上方に立上がる口縁部である。強い横ナデによりいちど屈曲するように段をもつものである。

ＳＫ17（第179図）

黒色化土師質土器皿（15）

丸みを帯びた底部から口縁部を屈曲するように外方に強く横ナデするものである。

ＳＫ18（第179図）

土師質土器鍋（16）

真っすぐに立上がる体部から口縁部がやや内傾するものである。頸部には横に真っすぐに貼出す鍔を貼付けている。体部外面は横方向の単位の大きなヘラケズリを施している。内面は横方向のハケ目を施している。口縁部は横ナデしている。淡褐色をていしている。

ＳＫ23（第179図）

信楽焼こね鉢（８）

器壁の厚い体部から口縁部が斜め上方に立上がるこね鉢の口縁部である。端部はやや肥厚して外方につまみだす。淡褐色を呈している。

ＳＫ25（第179図）

産地不明甕（９）

底部から指頭圧で屈曲するように体部が立上がるものである。底は欠失していな ない。色調は白黄色を呈する。

石製硯（10）

方形の硯である。両面使用されている。片面には海が認められ使用の為窪んでいる。他面は尻のほうである。

ＳＫ28（第179図）

山茶碗系こね鉢（１）

斜め上方に立上る体部に足高台がつくものである。体部はロクロ横ナデにより成形している。

ＳＫ29（第179図）

信楽焼甕（３）

平坦で小さな底部から斜め上方から立上がる体部をもつものである。体部は底部近くを指圧えし、他を横ナデしている。体部にススが付着している。色調は褐色を呈する。

ＳＫ30（第179図）

土師質土器鍋（12）

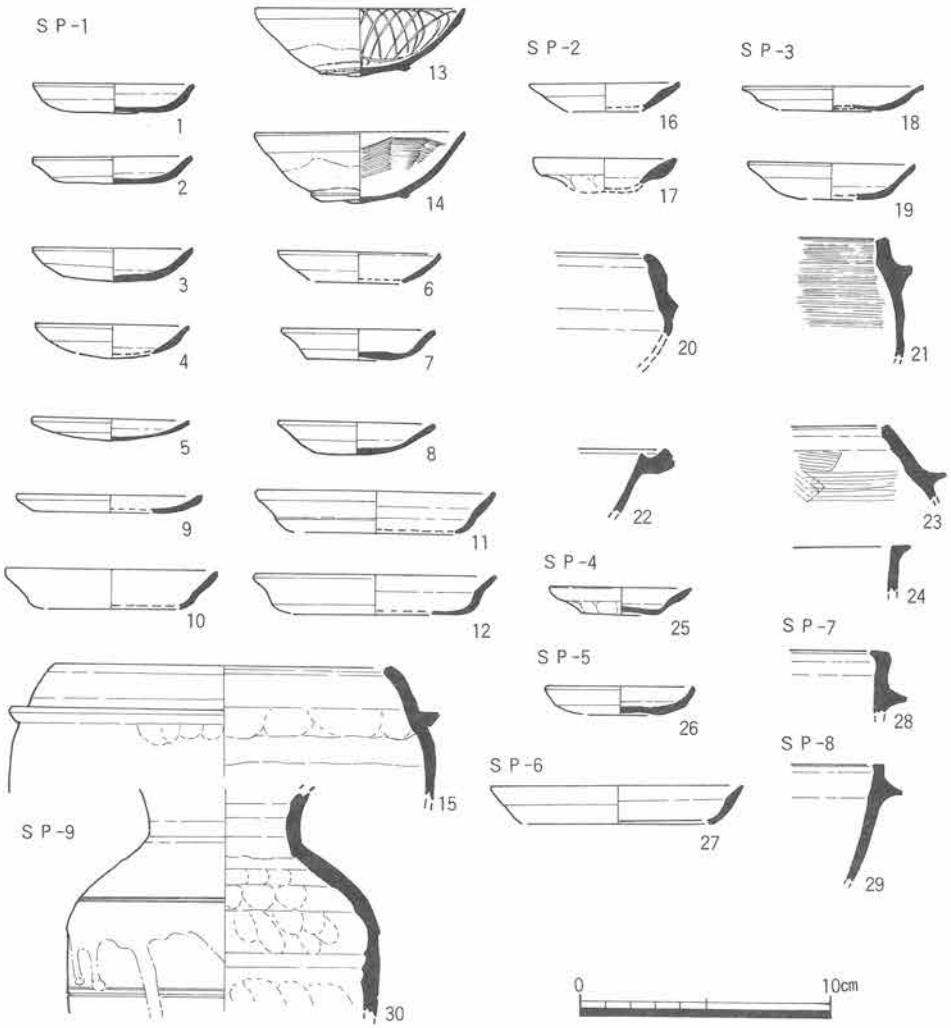
斜め上方に立上がる体部から口縁部が手の字になるものである。体部を指頭圧で成形され口縁部を横ナデしている。

柱　穴（第180～182図）

ＳＰ01

土師質土器皿（１～12）

（１）、（２）は平坦な底部から口縁部を斜め上方に立上がらせるもので、口縁部を一度横ナデし口縁端部に稜をもつように外反させるものである。（３）、（４）はやや丸い底部から斜め上方に口縁部が立上がるものである。口縁部を一度横ナデし口縁端部に稜をもつものである。（５）は尖底の底部から口縁部を短く屈曲するように立上げるものであ



第180図　柱穴出土遺物１

る。口縁端部を一度横ナデし端部に稜をもつものである。同じく（9）は底部が平坦で広いものである。（6）は斜め上方に立上がる口縁部の端部を内側に短く折曲げるものである。（7）は平坦な底部から外反しながら口縁部が立上がるものである。（8）は丸みを帯びた底部から外反気味に口縁部が斜め上方に立上がるものである。(10) ～ (12) は平坦で広い底部から体部が立上がり一度屈曲するようにして口縁部が開くものである。口縁部を一度強く横ナデしている。

黒色化土師質土器椀（13、14）

(13)、(14) は高台より出る尖底の底部から内湾気味に口縁部が立上がるもので、口縁端部はヘラキリにより成形して屈曲し鋭く収める。体部は指頭圧えにより成形され口縁部を横ナデしている。内面はハケ目の後、花弁状ら旋のミガキを施している。高台は形骸化しており平坦である。(13) は15回、(14) は8回の爪押さえより貼付けられている。

瓦質土器釜（15）

体部から内傾する口縁部をもつもので、端部は丸く収める。内外面ともに体部は指頭圧えで成形し、口縁部は横ナデしている。頸部には断面台形の鍔を上向きに貼付けている。

ＳＰ02

土師質土器皿（16、17）

(16) は平坦な底部から斜め上方に立上がる体部をもつもので、端部を丸く収めるものである。体部の中程までを一度横ナデする。赤褐色を呈している。(17) は斜め上方に立上がる口縁部を持つものである顎状に肥厚し、端部を鋭く収める。体部は強い指頭圧により成形されて口縁部を横ナデしているものである。淡褐色を呈している。

焙　烙（20）

やや内傾する口縁部もつもので端部を丸く収めるものである。内面端部には横ナデによって窪んでいる。頸部には断面三角形の低い鍔が貼付けられている。

瓦質土器鍋（22）

斜め上方に立上がる体部から手の字に肥厚する口縁部をもつものである。

ＳＰ03

土師質土器皿（18、19）

(18) 器高の低い皿で平坦な底部から屈曲しながら外方に立上がる口縁部を持つものである。口縁部は一度強い横ナデし口縁端部は丸くつまんで収める。(19) は丸い底部から口縁部が斜め上方に大きく立上がるものである。口縁部を一度横ナデし端部に稜をもつも

のである。

土師質土器釜（23）

内傾する口縁部を持つものである。端部には面を持つ。体部内面は横方向のハケを施している。

瓦質土器鍋（21、24）

（20）は内湾気味に立上がる体部から口縁部が真っすぐに立上がるもので、口縁端部に面を持つものである。内面は横方向のハケ目を施している。（24）は真っすぐに立上がる体部から外方にL字に屈曲するもので端部を鋭く収めるものである。

ＳＰ04

土師質土器皿（25）

やや上底の底部から斜め上方に立上がり、厚く肥厚して端部を鋭く収める口縁部を持つものである。体部を強い指頭圧えで成形したのち口縁部を成形し横ナデしている。

ＳＰ05

土師質土器皿（26）

底部から内湾気味に立上がる口縁部を持つもので端部を丸く収める。口縁部を一度横ナデし端部に稜を持つものである。

ＳＰ06

土師質土器皿（27）

斜め上方に一度屈曲しながら立上がり、端部を鋭く収めるものである。口縁部を一度横ナデしている。

ＳＰ07

瓦質土器鍋（28）

真っすぐに立上がる口縁部から口縁端部が内側につまみだされ屈曲するものである。頸部には断面三角形の鍔が真っすぐに付くものである。

ＳＰ08

瓦質土器鍋（29）

斜め上方に立上がり気味に立上がる口縁部を持つものである。口縁部端部には面を持つ。頸部には断面三角形の鍔が真っすぐに付くものである。

ＳＰ09

瀬戸三筋壷（30）

真っすぐに立上がる体部から肩が内傾して頸部にいたり、そこより口縁部が立ち上がるものである。肩と胴部に沈線が巡る。頸部から体部にかけて緑色の釉がかかっていた。

ＳＰ10（第181図）

白磁碗（１）

斜め上方に立上がる口縁部をもつもので、口縁部が玉縁状を呈するものである。〔太宰府Ⅳ類〕に属するものとかんがえられる。

ＳＰ11（第181図）

青磁碗（３）

斜め上方に立上がる口縁部を持つものである。緑灰色の釉がかかっていた。

ＳＰ12（第181図）

白磁皿（４）

斜め上方に立上がる口縁部から端部が短く外反するものである。口禿げのものである。

ＳＰ13（第181図）

白磁碗（２）

内湾気味に斜め上方に立上がる口縁部をもつものである。口縁部が玉縁状を程するものである。

ＳＰ14（第181図）

瓦質土器鍋（５）

開き気味に真っすぐに立上がる口縁部をもつものである。口縁端部は面を持つ。体部内面はハケ目で調整され、口縁部は強い横ナデにより段を成している。頸部には長い鍔が真っすぐに貼付けられている。

ＳＰ15（第181図）

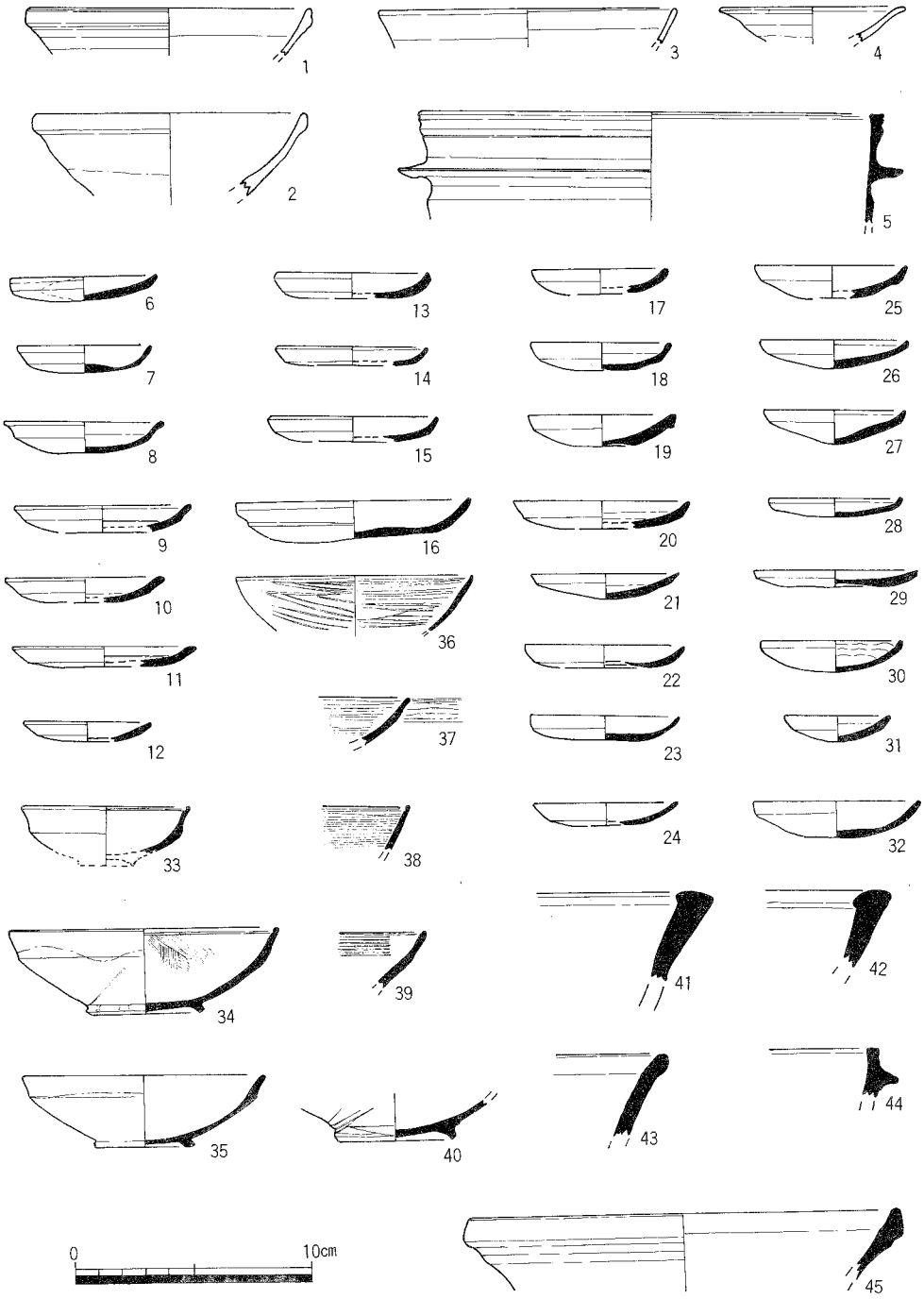
土師質土器皿（６）

やや丸みを帯びた底部から口縁部が短く屈曲して立上がるものである。口縁部を二度横ナデしている。底部中央から口縁部にかけて一枚粘土帯をひっつけた不連続な継目が認められる。

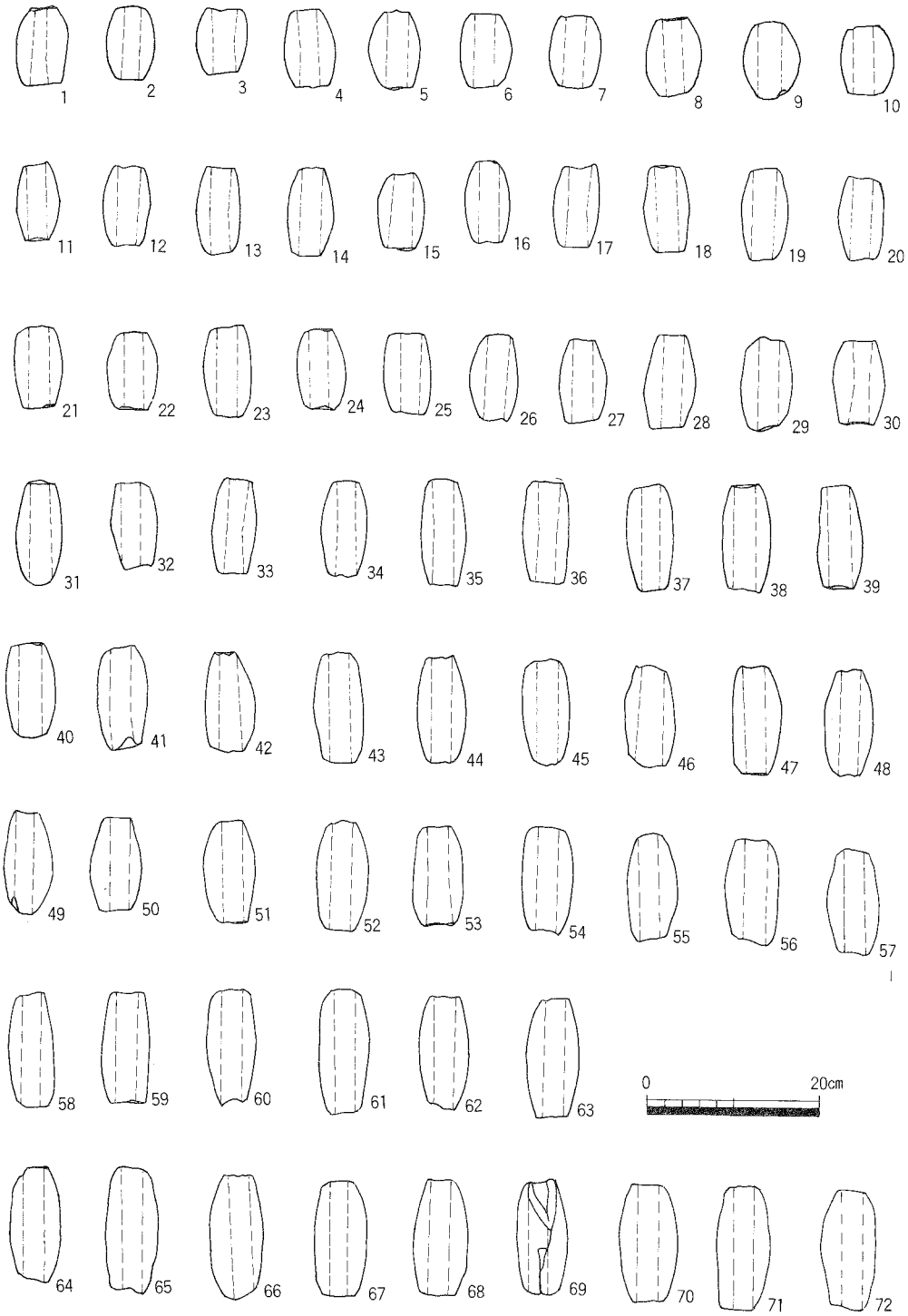
ＳＰ16（第181図）

土師質土器皿（７、13、15、16、23、24）

（７）、（15）は底部のやや肥厚したところから斜め上方に立上がる口縁部をもつものである。口縁部は一度横ナデして端部に稜を持つものである。(13) はやや内湾気味に立



第181図　柱穴出土遺物２



第182図　柱穴出土遺物３

上がる口縁部をもつもので口縁端部を押しナデしている。（16）は大皿である。指圧えで成形された底部から斜め上方に立上がる口縁部をもつものである。口縁部を一度横ナデしたのち口縁端部押しナデしている。（23）は底部から斜め上方に丸く立上がる口縁部を持つもので、口縁部を一度横ナデし端部を丸く収めている。（24）は斜め上方に真っすぐに立上がる口縁部を持つもので端部を鋭く収めるものである。

ＳＰ17（第181図）

土師質土器皿（12、17、18）

（12）は斜め上方に立上がる口縁部をもつものである。口縁部を一度横ナデし口縁端部に稜を持つものである。（17）、（18）は内湾気味に立上がる口縁部を持つもので口縁部を一度横ナデしている。

ＳＰ18（第181図）

土師質土器皿（19、25）

やや尖底の底部から内湾気味に立上がる口縁部を持つものである。口縁部を一度横ナデして端部を鋭く収めている。底部の中央から口縁部に向かって成形時の一枚粘土の粘土帯を継いだ不連続な継目が両者ともに認められる。

黒色化土師質土器椀（40）

椀の底部である。ハの字に開く高台をヘラ押さえにより貼付けた痕が体部に認められる

ＳＰ19（第181図）

土師質土器皿（14）

平坦な底部から短く内湾するように立上がる口縁部を持ち、端部を内側に屈曲させるものである。口縁部を一度横ナデし端部に稜を持つものである。

ＳＰ20（第181図）

土師質土器皿（26）

尖底の底部から斜め上方に立上がる体部から口縁部が屈曲するように立上がるものである。口縁部を一度横ナデしている。

ＳＰ21（第181図）

土師質土器皿（８）

丸みを帯びた底部から内湾気味に立上がる体部から屈曲するように口縁部が外反するものである。口縁部を一度強く横ナデし、端部に稜をもつものである。底部中央から口縁端部にかけて一枚粘土をまいて成形した粘土帯の不連続な継ぎ目痕が認められる。

ＳＰ22（第181図）

土師質土器皿（27）

尖底の底部から斜め上方に立上がる口縁部をもつもので、口縁部を一度横ナデして端部を屈曲させている。

ＳＰ23（第181図）

土師質土器皿（９）

平坦な底部から外反するように立上がる口縁部を持つものである。口縁部を強い横ナデをして端部に稜をもつものである。

ＳＰ24（第181図）

土師質土器皿（20、21）

（20）はやや尖底の底部から斜め上方に真っすぐに立上がる口縁部を持つもので、口縁端部を鋭く収めている。（21）はやや丸みを帯びた底部から屈曲するように短く口縁部が立上がるもので端部を鋭くおちめている。口縁部を一度横ナデしている。

黒色化土師質土器椀（35）

内湾気味に立上がる体部から肥厚するように口縁部にいたるものである。口縁部は強い横ナデにより外反している。高台はハの字に開くものである。

ＳＰ25（第181図）

土師質土器皿（28）

指頭圧えで成形された底部から口縁端部を短く屈曲させるように上方につまみ上げるものである 。口縁端部を一度横ナデしている。

ＳＰ26（第181図）

土師質土器皿（10）

やや丸みを帯びた底部から外方に開くように立上がる口縁部をもつものである。口縁部を一度強い横ナデをして端部に稜をもつものである。

ＳＰ27（第181図）

瓦器椀（36）

斜め上方に立上がる口縁部を持つもので端部を鋭く収める。器壁は薄い。体部内外面には横方向のヘラミガキを施している。

ＳＰ28（第181図）

土師質土器皿（11）

平坦な底部から器高低く斜め上方に立上がる口縁部を持つものである。底部近くまでを一度横ナデしている。

ＳＰ29（第181図）

土師質土器皿（22、29）

（22）はやや浮き底の底部から斜め上方に立上がる口縁を持つものである。底部近くまでを一度横ナデしている。（29）はやや浮き底の底部から器高低く口縁部が立上がるもので口縁端部を一度横ナデして面を持つものである。

ＳＰ30（第181図）

土師質土器皿（30、32）

椀曲する底部から斜め上方に立上がる口縁部を持つものである。口縁端部を一度横ナデしている。（30）の内面には波形のナデが認められる。

ＳＰ31（第181図）

瓦器椀（37）

斜め上方に屈曲しながら立上がる口縁部である。端部は外反する。内外面ともに横方向のヘラミガキを施している。

ＳＰ32（第181図）

土師質土器皿（31）

尖底の底部から斜め上方に立上がる口縁部をもつもので、口縁端部は一度強い横ナデされて屈曲している。

ＳＰ33（第181図）

黒色化土師質土器椀（33）

小型の椀で底部から屈曲して外反する口縁部を持つものである。口縁端部に沈線を持つものである。

ＳＰ34（第181図）

瓦器椀（38）

斜め上方に立上がる口縁部を持つものである。端部内面に沈線を持ち、内外面ヘラミガキしている。

ＳＰ35（第181図）

黒色化土師質土器椀（34）

広い底部から斜め上方に体部が立上がり、ヘラミガキと横ナデによって屈曲するように立

上がる口縁部をもつものである。口縁端部は丸く収め内面に沈線を持っている。高台は台形を呈しハの字を呈している。体部には高台をヘラによって貼付けたときの痕が認められる。内面はハケ目調整の後花弁状のら旋ミガキを施している。

ＳＰ36（第181図）

瓦器椀（39）

斜め上方に立上がる口縁部を持つものである。体部にはヘラミガキの痕が認められる。

ＳＰ37（第181図）

瓦質土器火舎（41）

斜め上方に肥厚しながら端部を内面につまみだすように立上がらせる口縁部を持つものである。体部は指頭圧えで成形し口縁部を横ナデしている。

ＳＰ38（第181図）

瓦質土器火舎（42）

肥厚しながらまっすぐに立上がる口縁部から端部を丸みをもたせ内側につまみ出すものである。

ＳＰ39（第181図）

山茶碗系こね鉢（43）

斜め上方に立上がる体部から口縁部が屈曲するように外反するものである。端部は肥厚して丸い。

東播系中世須恵器こね鉢（45）

斜め上方に立上がる口縁部をもつもので端部は押しナデされ玉縁状を呈するものである

ＳＰ40（第181図）

瓦質土器鍋（44）

真っすぐに立上がる口縁部を持つもので端部に面を持つものである。頸部にはやや下方の鍔を貼付けている。

ＳＰ41（第182図）

土製品土錘

柱穴より一括で出土した土錘である。形状は円筒形から、ビヤ樽形、算盤玉形までのものがある。大きさとしては長さ約４㎝～７㎝、幅2.5㎝～3.5㎝のもので種々さまざまな大きさのものが認められた。大きさにより、網の部位が違うものと考えられるが、これが一網分のものであるかどうかは難しいところである。

Ⅲ小　結

ここで第９調査区の調査で得られた成果を簡単にまとめる。この地区は中世期の横江遺跡の中心部をなすものと考えられるものが検出された。まず、遺構としては四方を囲む溝跡と区画があり、敷地としては方形で（ある時期にそれをさらに２つに割っている。）他の地区のよりも２倍ほどの敷地面積を持っている。この区画は特に土壇状に土を盛上げており、その上に建物等がの遺構形成されていた。土壇の上には千を越える柱穴跡と井戸、多数の土壙が認められた。遺構の数としても他の地区からはかんがえられないほどの密度である。また、区画溝の１個所より橋の痕跡と考えられる遺構も検出されている。これらの特異制は遺物からも伺え、量は他の地区の数倍もの土器が出土しており出土したものも様々な器種が認められた。他の地区に認められないものとしてはまず多量の青白磁があり、なかでも特殊な器種として仏事にはかかすことのできない白磁の香炉、白磁の仏花瓶、青白磁の合子等が認められており、県下では例のない梅瓶の破片が４、５体分出土している。また、他にも東播系中世須恵器こね鉢や山茶碗系こね鉢などの多量も多く、瀬戸三筋壺や信楽・常滑・渥美等の大型製品もこの地区では多量に認められている。石鍋もこの地区からだけ出土している。

これらのことからこの区画はこの集落において中心的な位置を占め集団の中心的な役割も果たしていたと考えられ、有力な人々の住まいであったことが考えられる。

（木戸）

第10節　第10調査区

第７調査区と第９調査区の間約420㎡を対象とした。遺構は古墳時代の溝と土擴、中世の掘立柱建物と区画溝などがある。

Ⅰ、古墳時代の遺構と遺物

遺　構

溝（ＳＤ－１）

調査区西側で検出した南北溝である。最大幅1.9m、深さ40cmを測り、断面形は緩いＵ字形を呈する。埋土は黒灰色粘質土の単層である。遺物は土師器の甕、高杯、器台（第185図）が出土した。年代は布留式併行期とみられる。

土擴（ＳＫ－１）

調査区仮設電柱が設置したため全掘は行なわなかった。現状では長径2.7mを測る楕円形を呈する。深さは80cm程で湧水点に達している。遺物は埋土中から７Ｃ初頭とみられる須恵器杯身片が出土した。

遺　物

ＳＤ－１（第　図１～４）

１・２は受口状口縁甕である。口縁部の顎の稜は弱く、端部はわずかに外方へつまみ出されている。３は高杯である。林底部と口縁部の境の稜は甘く、脚部はハ字に開く。脚柱部内面にしぼり目がみられる。４は円錘形に開く器台の脚である。円孔は４孔を穿つ。

Ⅱ、中世の遺構と遺物

遺　構

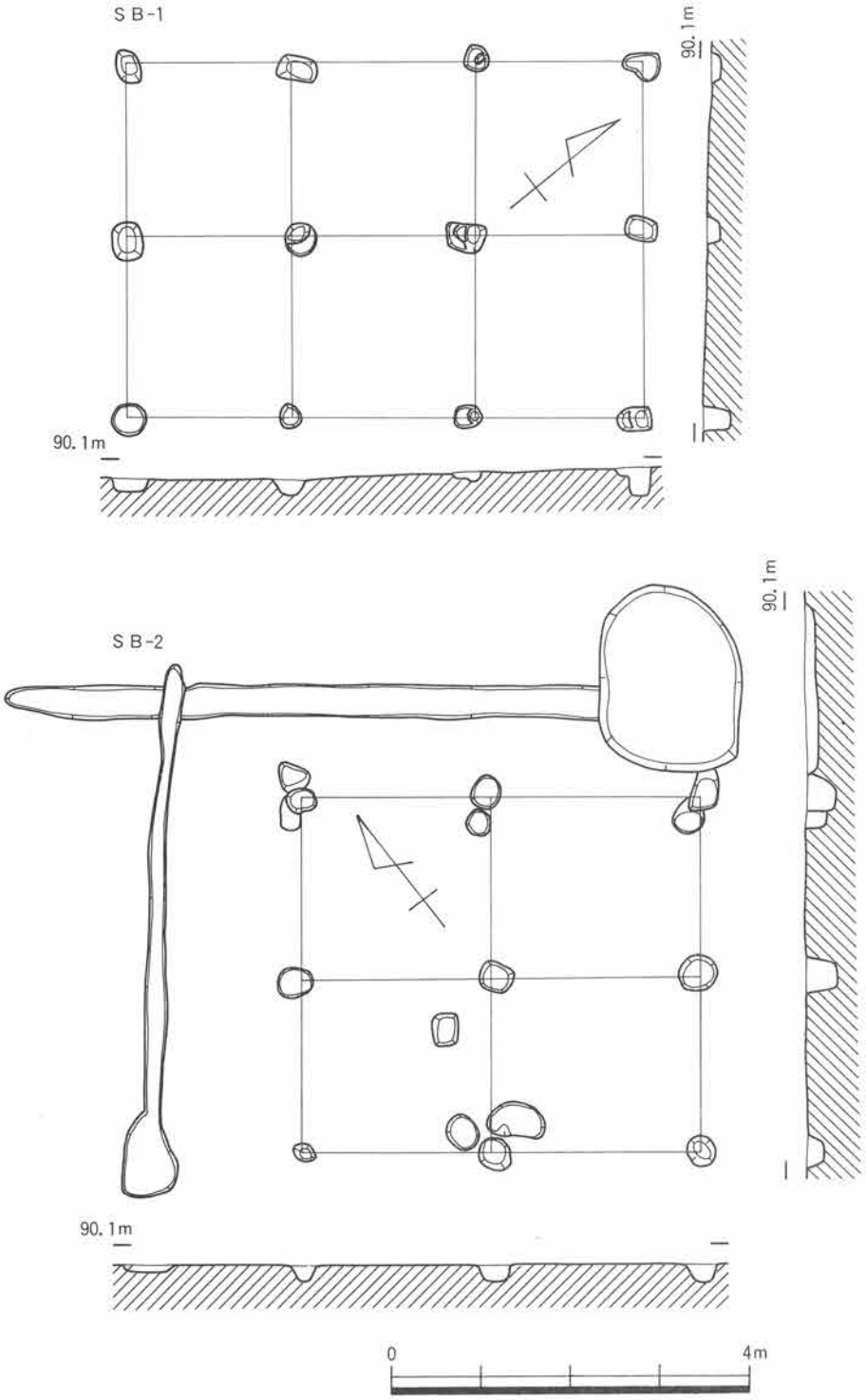
掘立柱建物（ＳＢ－１・２）

ＳＢ－１（第183図）

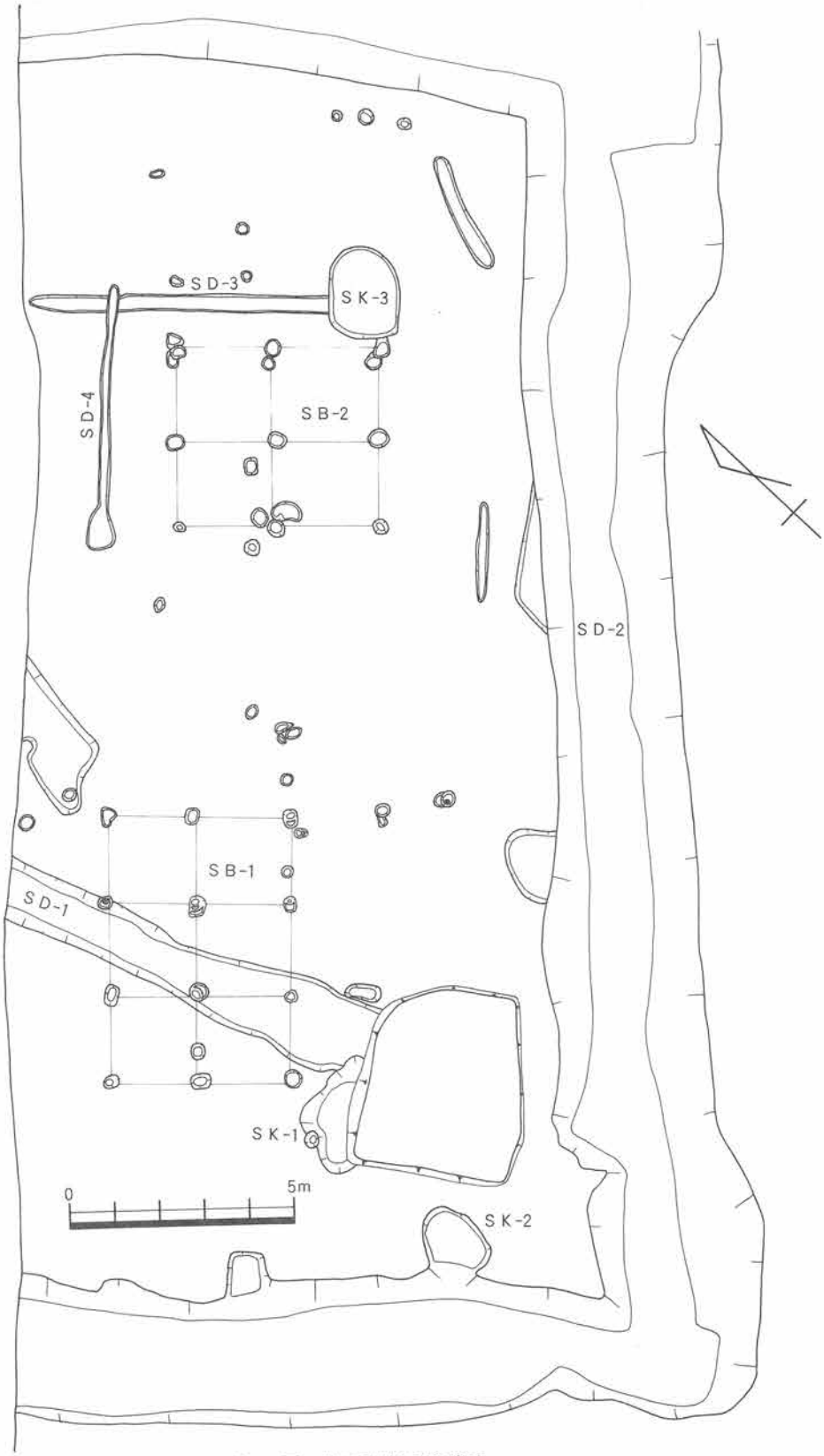
調査区西側で検出した３間×２間の総柱建物である。主軸方位はＮ－39°－Ｅを示し、柱間距離は桁行1.9m、梁行2.1mを測る。柱穴掘方は形状・規模にばらつきがみられるが、柱穴は直径20cm程度の円形である。柱穴埋土はおおむね灰褐色土の単一層である。

ＳＢ－２（第183図）

ＳＢ－１の北東約６ｍの位置で検出した。２間×２間の総柱建物である。主軸方位はＮ－38°－Ｅを示し、柱間距離は2.1mを測る。柱穴には切り合いがみられることから数度の建てかえが想定できる。柱穴埋土はおおむね灰色土の単一層である。



第183図　掘立柱建物平面図



第184図　第10調査区平面図

溝（ＳＤ－２～４）

ＳＤ－２

調査区の南側で検出した区画溝である。第７調査区ＳＤ－１の延長部にあたり、調査区南端で東西方向の区画溝に合流する。溝幅は３～４ｍ、深さは0.5ｍを測り、断面はＵ字形を呈する。埋土は３層がほぼレンズ状に堆積する。土師器と黒色土器。陶器の破片が出土したが、量は少なかった。

ＳＤ－３

ＳＢ－２の北東に隣接した、幅30cm、深さ４cmを測る小溝である。埋土は灰色土の単一層で、遺物は土師器片が少量出土している。ＳＢ－１に付随する雨落ち溝の性格を有するものと考えられる。

ＳＤ－４

ＳＢ－１の北西に隣して検出した小溝である。幅20cm、深さ２～３cmを測る。埋土は淡灰色土の単一層である。ＳＤ－３と同様ＳＢ－１の雨落ち溝と考えられ。

ＳＫ－２

土擴（ＳＫ－２・３）

調査区北西で検出した楕円形の土擴で、一部を区画溝に切られている。長径1.7ｍ、深さ10cmを測る。断面は皿状を呈し、底面は平坦である。埋土は淡灰色の単一層で、土師質焙烙と砥石が出土した。

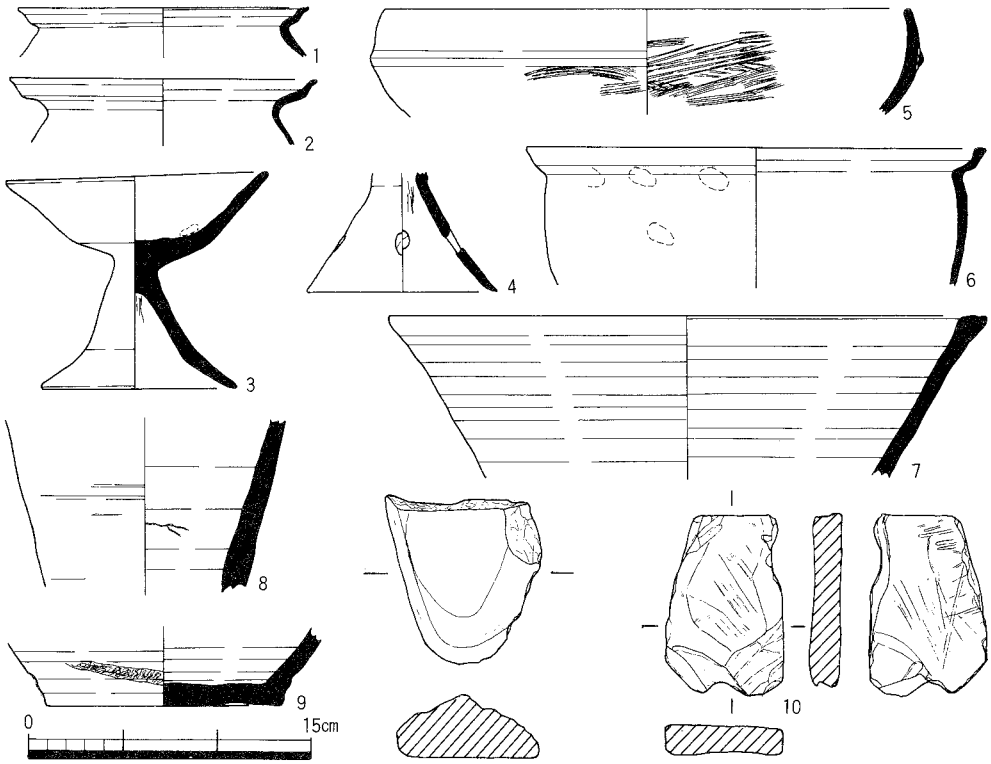
ＳＫ－３

調査区北東で検出した楕円形の土擴である。ＳＢ－２東コーナーの柱穴とＳＤ－３を切る。長径２ｍ、短径1.5ｍ、深さ20cmを測る。底面は鍋底状を呈する。淡灰褐色土の単一層である。

遺　物

ＳＤ－２（第185図６～10）

６は土師質鍋である。内弯する体部から口縁部は屈曲して受口状に立ち上がる。頸部と体部外面に指頭圧痕が残る。７～９は陶器である。７はこね鉢で、口縁部は直線的にのび端部は肥厚し方形状を呈す。端部に沈線状の凹みを有す。色調は口縁部外面のみ淡灰青色で他は赤茶色である。胎土は黄橙色を呈し、長石を多量に含む。８は瀬戸灰釉の壺の体部と考えられる。胎土は灰白色を呈し、外面に淡緑灰色の釉が薄くかかる。９はこね鉢の底部と考えられる。内面は平滑で使用瀕度は高い。外面に縄目痕が残る。色調は淡橙茶色を



第185図　第10調査区出土遺物

呈し、胎土は長石を多量に含む。７・９は信楽産と考えられる。10は砥石である。使用痕は二面が認められる。上端に刃物状工具による切断痕が残る。色調は灰白色を呈す軟質な石である。

ＳＫ－２（第185図５・11）

５は土師質の焙烙である。内弯する体部から口縁部は内傾して立ち上がる。鍔は断面三角形状の小さなものを貼りつける。口縁部外面ナデ、体部外面ヘラ削り、鍔直下と内面は横方向のハケ目を施す。11は砥石で自然石を用いている。使用面は一面が観察できる。

小　結

本調査区は比較的小面積ではあったが、区画溝で囲まれた屋敷の一部を検出するなど、かなりの成果をおさめることができた。屋敷は南北26ｍ、東西13ｍ以上の規模で２棟の建物が整然と配置されていた。屋敷はさらに西にのびることが確認されており、次年度の調査成果と合わせれば、この屋敷内の様子がより明らかになると考える。

第Ⅴ章　横江遺跡の今後のために

最後にあたり横江遺跡の今後のために、この調査によって得られた成果を時代ごとにまとめ遺跡を理解するための一助として結びとしたい。

縄文時代晩期

今回の調査において一番古い遺物はこの時代のものである。第５・８調査区の旧河道と呼んでいる現在の海道川と重複するように走る溝から、長原式の縄文晩期の深鉢と石斧が出土している。第６調査区の旧河道からも石斧が出土している。これらは河跡から検出されていることを考えると上流に存在する集落より流れついたものと推察される。現在縄文時代の多くの遺跡は現在湖岸べりを中心に発見されているが今後さらに調査がすすむにつれて内陸部にも集落跡が発見されていくことを物語っている。

弥生時代中期

この時代のものとしては第５調査区の旧河道跡から出土した土器が１点だけである。

弥生時代後期

この時代をものとしては第５、８調査区の旧河道より出土している多数の土器が掲げられる。弥生時代後期を遡るものはすべて河跡出土の遺物であるところから上流より流れついたものと考えられる。上流ではすでに横江・大門遺跡として調査されている地点で弥生時代の集落跡が存在することが確認されており、このことから横江遺跡における弥生後期以前の集落はこの地点より東あたりに中心があると考えられる。遺跡地図上の横江遺跡の範囲は広大にくくられている。一応遺跡の範囲のなかには含まれているが、今後は時代ごとの集落の範囲をこれらの資料をもとに限定する可能性と必要があると考えられる。

弥生時代末～古墳時代初頭

今回の調査における歴史の曙はこの時代に求めることができる。第１調査区と隣合う第３調査区、第８調査区を中心に庄内から布留式古段階にいたる土器が出土した土壙と掘立柱建物群で構成される集落跡が検出されている。出土遺物の傾向としては非常に高杯と小型丸底壺の出土が多いことが上げられる。生活の場というよりも第２調査区の縦櫛が出土した大型土壙を代表とするように祭祀性の性格の強い遺構群と考えられる。中央を意識する土師器類と祭祀性が色濃く感じられる。

古墳時代前期～後期

この時代の遺構としては第８調査区に存在する土壙と掘立柱建物、第９調査区より出土している土器群がある。これらのなかには５世紀に遡りそうな須恵器も検出されており、早い時期における新たな文化の入来が認められる。また、第８調査区の土壙からは県下でも珍しい製塩土器が土壙より一括で出土している。これらは瀬戸内式のものであり、塩が水系をたどり持込まれた姿が思われる。

飛鳥時代～藤原時代

この時代のものとしては第１調査区の旧河道からは磨滅していない重弧紋の軒平瓦が１点出土している。近江は白鳳期～飛鳥期の氏寺の多い土地である。そのなかでも特に湖南地区を中心とするところは廃寺の銀座である。これらの寺は一郷一寺以上の距離間隔で認められるところであり横江遺跡の近くにおいても長束廃寺・上寺廃寺・欲賀廃寺などの存在が考えられている。しかし、これらの寺は位置的に河道より離れた下流に存在している今後、横江を中心とした上流古高あたりに一寺存在する可能性も出てきたといえる。

奈良時代～鎌倉時代前期

これらの時期の遺構としては、第５調査区に奈良時代の溝が認められ第２調査区で平安前期の柱穴と土壙墓が検出された。集落は形成されていないものと考えられる。

鎌倉時代後期～室町時代末

今回調査した調査区から検出された遺構の大部分はこの時期(13世紀後半～15世紀初頭)に形成され存続したものである。集落はこれまでの研究を凌駕するような内容をもったものであり、特筆すべき点が多数認められた。以下に遺構と遺物に分けそれらの内容に詳しく説明を加えたい。

（イ）遺　構

遺構の在り方については幾つかの特筆すべき点が認められた。

①集落が河と河に挟まれた三角洲上に形成されている点。

集落の両端は現在も流れる海道川・境川・旧河道とによって挟まれた中州上に築かれていることが調査により明らかになった。区画溝の端は全て河に落としこむ形になっていた。集落の大外を流れる川はすべて幅20ｍを越えるもので自然の濠となっている。また、その河は琵琶湖に流れこんであり、西の境をなす海道川との呼名のとおり海運としての交通の便も荷なっていたものと考えられる。西から南の境をなす境川は名のとおり律令期の郡郷制による野州郡と栗太郡との境をなすものである。北の境は現在は埋り認

められない、幅20ｍの旧河道が検出された。近年、中世集落の立地には共通性があるということで問題となっている。ここ横江遺跡の中世集落もそのような「無縁・無住の地」である中州・川原・浜等のうちの中州状にあたるものと考えられる。

②堀と道によって区切られた区画を持つ集落である点。

河により囲まれた集落の内部は基本的に全て幅４ｍの溝で区切られていて、短辺30ｍ×長辺50ｍの長方形の敷地を形成している。敷地は横方向と縦方向の交互の組合せにより成立っている。敷地の内は３棟から４棟の掘立柱建物と数基の井戸によって構成されていた。区画と区画の間には道は存在しない。隣接する敷地への往来には第９調査区に認められた橋跡に代表されるように板橋が考えられるが、現在も近江に多数認められるような船による往来が想定させられるところである。このような中世期における集落形態は近年の発掘調査で増加する傾向にあり、少なくとも西日本では同じような時期に不偏的に発生し形成されているものと考えられる。その意義を今後問っていかなければならない。

③これらの集落は計画をもってつくられており、都市計画集落である点。

集落は土器の時期より13世紀後半に一気に造られ、15世紀初頭には廃絶されたことが調査の結果より判明した。そこには前時代からの発展性や次の次第への存続性は認められない。ひとつの区画は掘に挟まれた土地を単位とし、第９調査区の一際大きな区画で土壇を持った遺構の区画を中心に据え核となし、それを中心に基準として、区画を割りこみ敷地と集落を形成している。堀と敷地は河までを有効に利用して区画割りしていくという計画性が認められる。また、区画割りをする上で蛇行した河川に接する区画については長方形の敷地を確保する為に蛇行弯曲した部分を埋立て遺構を形成しているところが認められた。これらのことは、ある特定の集団と共通意識による再開発や開拓が新たな土地に対して行われた結果のものと考えられる。

（ロ）遺　物（第186～188図）

供膳形態の内、椀は黒色化土師質土器を14世紀いっぱい使用している。皿は土師質土器で京都系の搬入品と模倣品、在地系のもので構成されている。他に白磁の碗・皿青磁の碗・杯・皿も多数認められた。煮沸形態は在地の土師質土器釜と瓦質土器三足釜、釜鍔付き鍋、受口鍋、滑石製石鍋で構成されていた。調理形態としては煎りものとして近江独特の焙烙の初源期のものが認められた。こねるものとしては東播系中世須恵器こね鉢が全般に認められた。高台付き山茶碗系こね鉢も東播系のものと同等の量が認められた

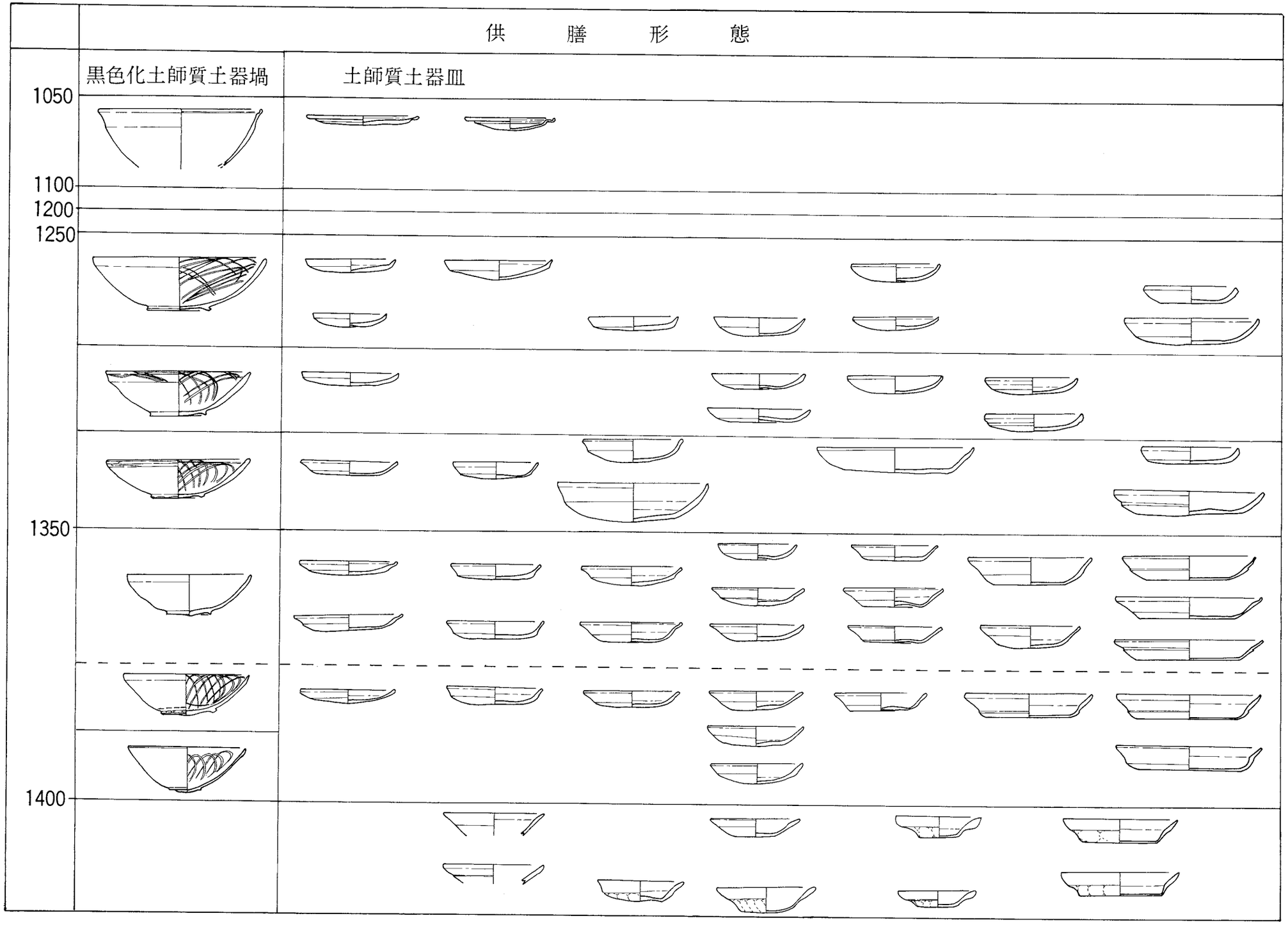
また、すでに信楽のこね鉢も若干であるが出現している。他に常滑の鉢をまねたものか土師質土器の片口鉢も認められる。数点であるが瀬戸のおろし皿も認められる。貯蔵形態としては瀬戸の平瓶、三筋壺、常滑の壺・甕、渥美の壺、調度形態としては、瀬戸の天目碗、瓦質土器の三足平盤火舎、菊花八稜火鉢、瀬戸の香炉、瓦質土器の香炉、白磁の香炉、青白磁の合子・梅瓶、硯、白磁の水滴、瀬戸、白磁の仏花瓶等が認められた。これらの多くはいわゆる棚飾りものである。集落の中心となった土壇を持つ区画の特異性が考えられるところである。これらの遺物は、おおよそ鎌倉末から室町時代の土器組成を理解できるものであった。

(ハ) まとめ

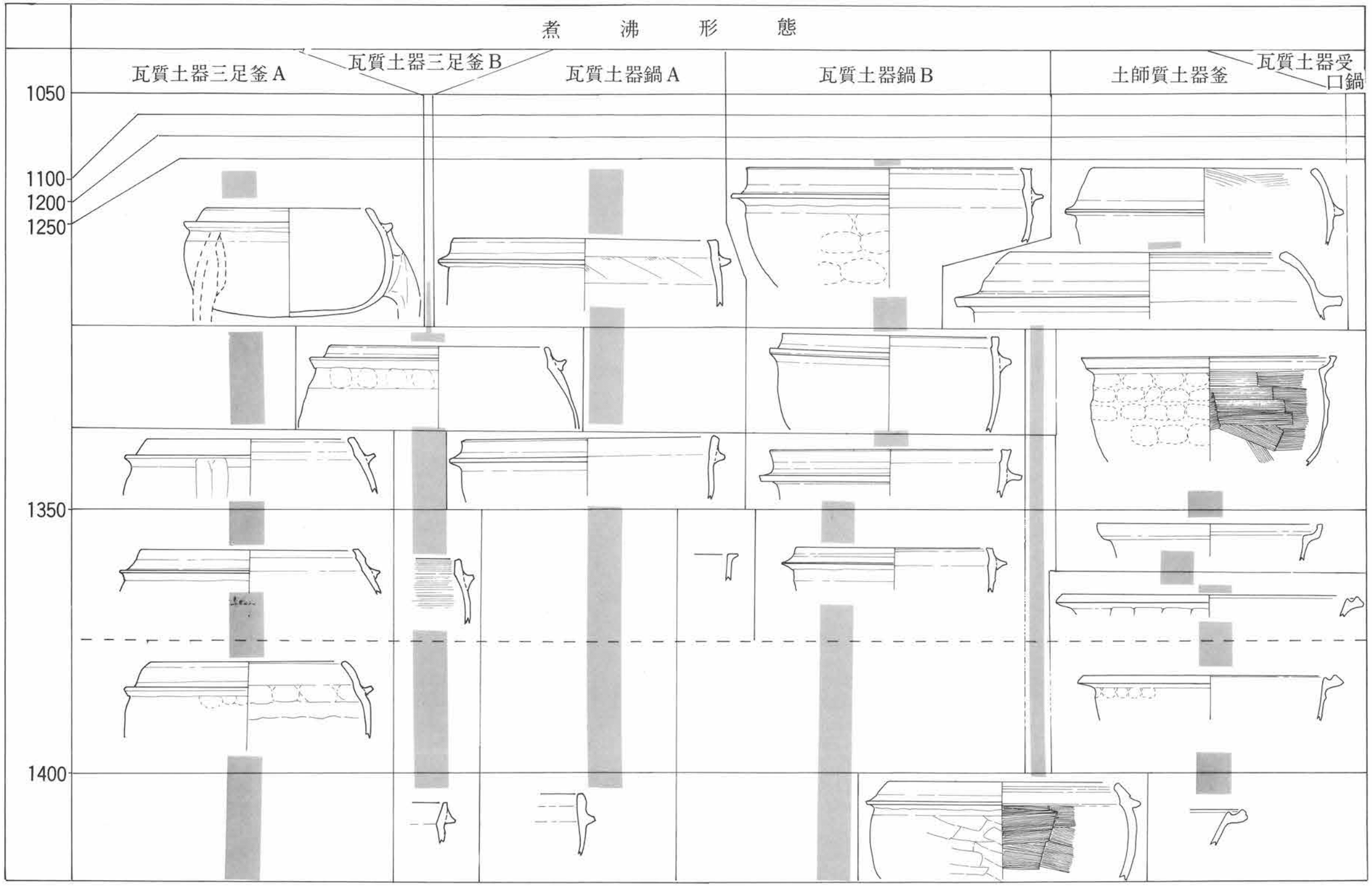
これらのことから横江遺跡は特定時期に形成された「集落」と呼ぶにふさわしい集落であるといえ、農業を共通項とした村落はもとよりもある共通の意識（宗教・武力）と目的（自治・防御）のもとに生活した人々の集住地、環濠都市的な集落としてとらえることができるものといえる。また、これらの型の集落のおおくが15世紀を境に廃絶していることがそれを示唆している。さらに、集落の立地や集落内の長方形の区画割りは後の時代の寺内町・城下町・城下町的都市に顕著に認められる町割りの形態であり、すでにここにその祖形と萌芽が認められるものである。

近江には早くから浄土真宗がはいりこんだ地である。横江遺跡の周辺においてもまだ寺化していない在地有力者を毛坊主とした集団の惣道場が点々と点在している。さらにそれらは南北朝の動乱と連如の時代を経て、一向一揆とともに金森城の寺内町を形成していく、そしてそれらは信長の登場とともに駆逐され、楽市楽座とともに城下町に再編されていくわけである。横江遺跡はこういう歴史のながれの直ぐそばで成立し衰亡していった集落のひとつである。今後これらの研究が中世以降の集落研究で農業生産だけを判断基準にしてきたことの限界を示唆していくとともに、近世の夜明を明らかにしていくのではないであろうか。

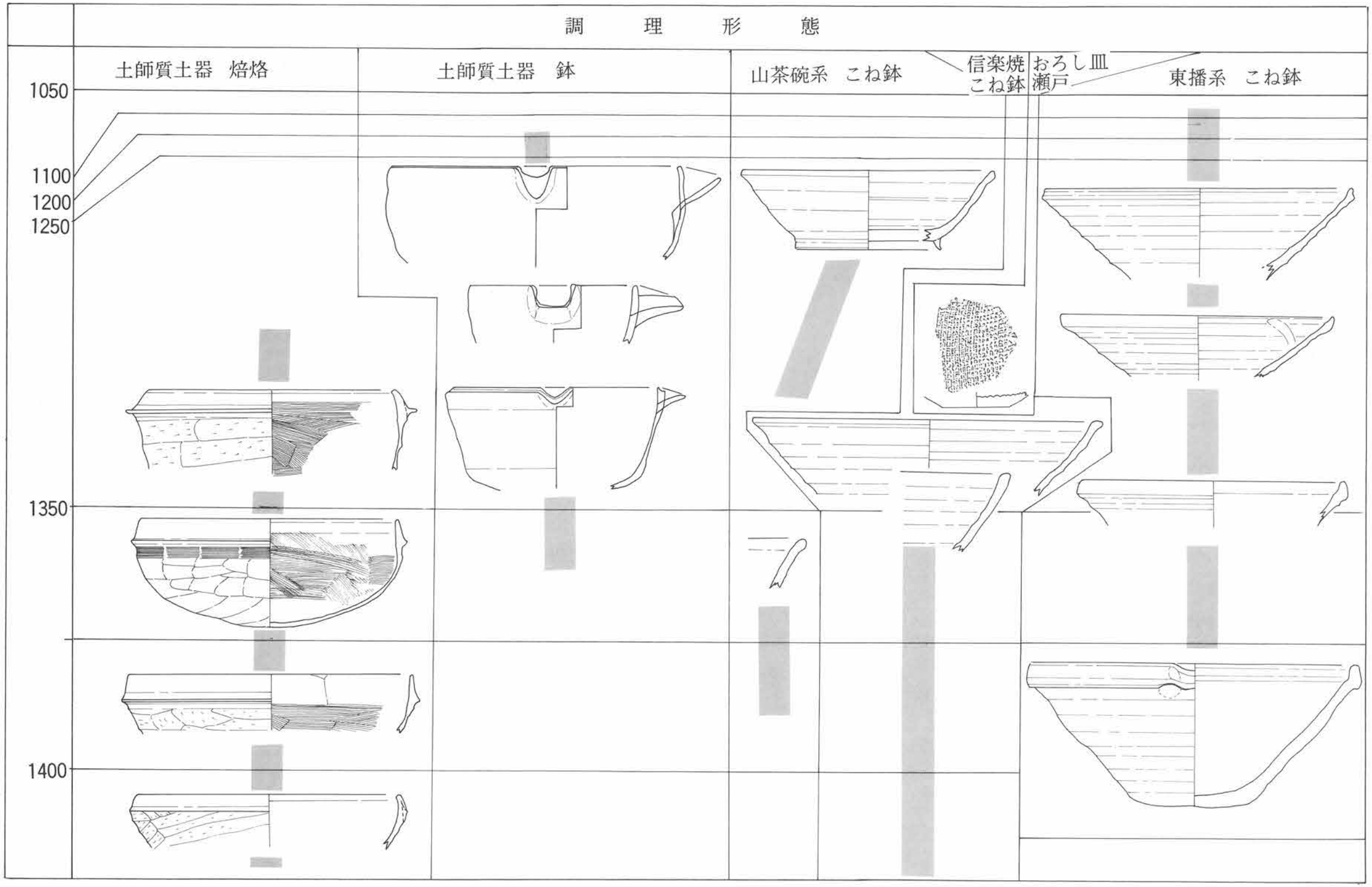
以上が、今回発掘調査を実施した結果によってあきらかにした一部である。発掘調査・整理報告は一つの集落遺跡の半分にしかおよんでいない。しかし今後、引き続き残りの半分についても発掘調査・整理報告が実施される予定である。それらの全てを含んで、横江遺跡が中世集落研究の一角を荷なう資料となっていくことを願って「横江遺跡の今後の為に」の結びとしたい。



第186図　出土土器　編年案(1)



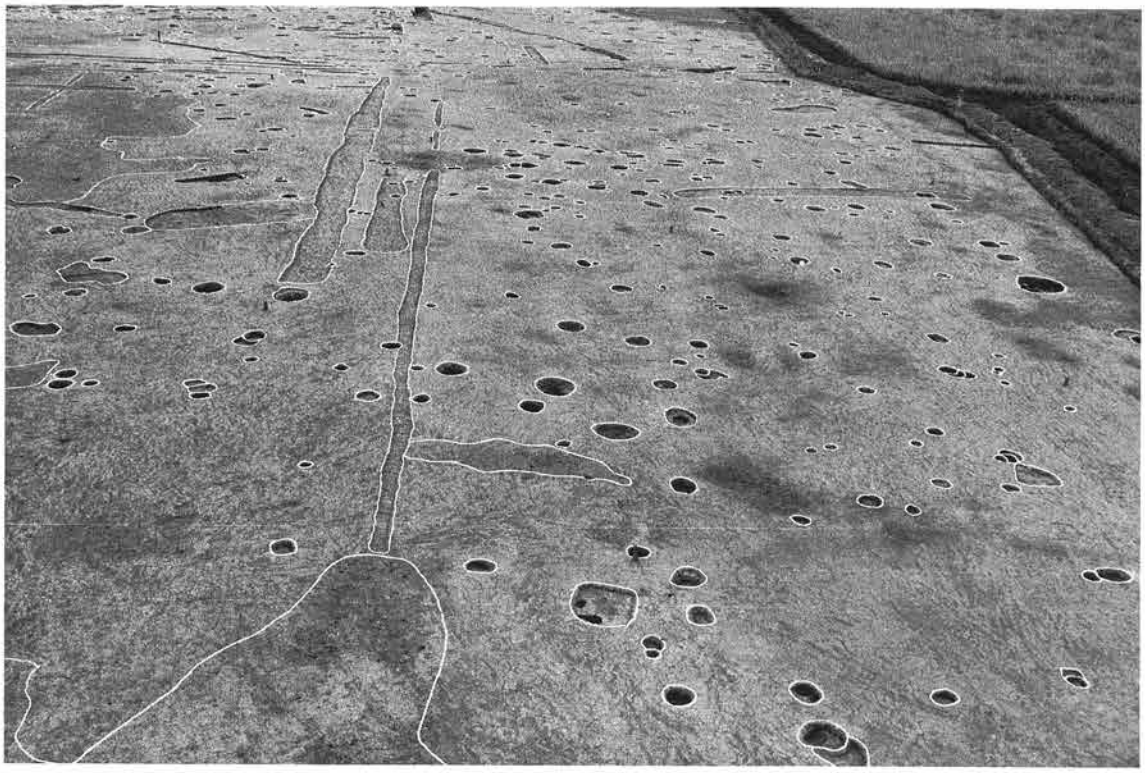
第187図　出土土器　編年案(2)



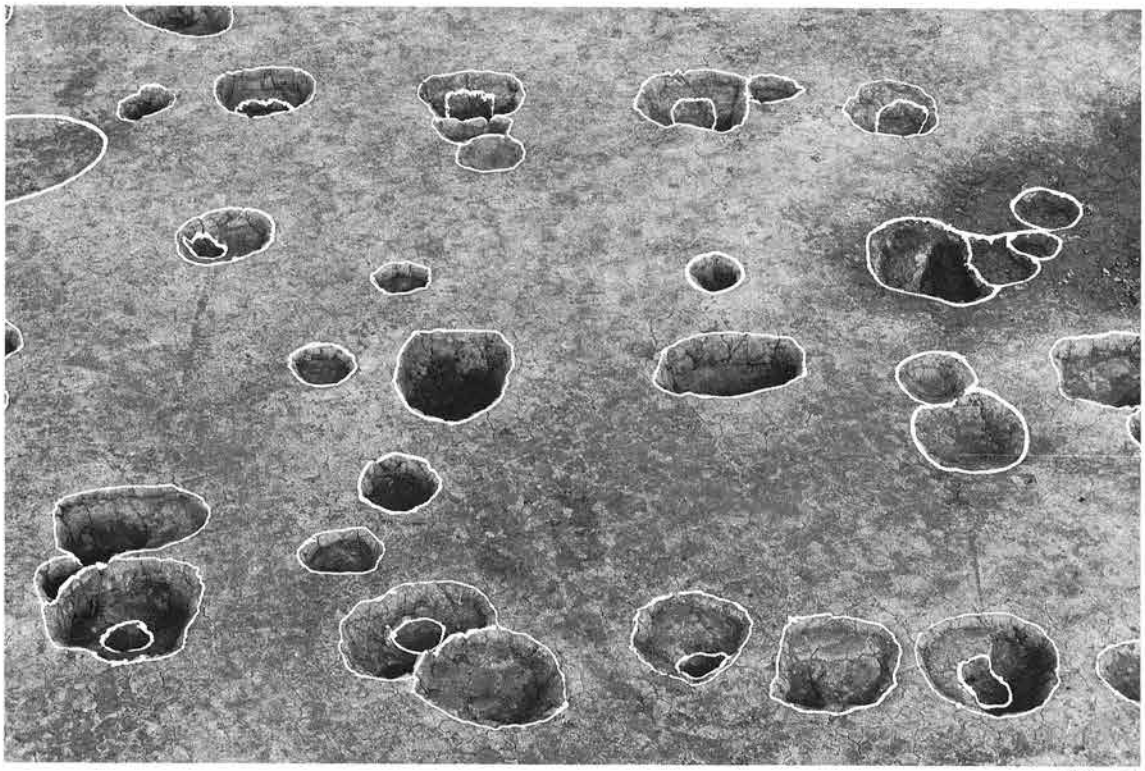
第188図　出土土器　編年案(3)

図　　版

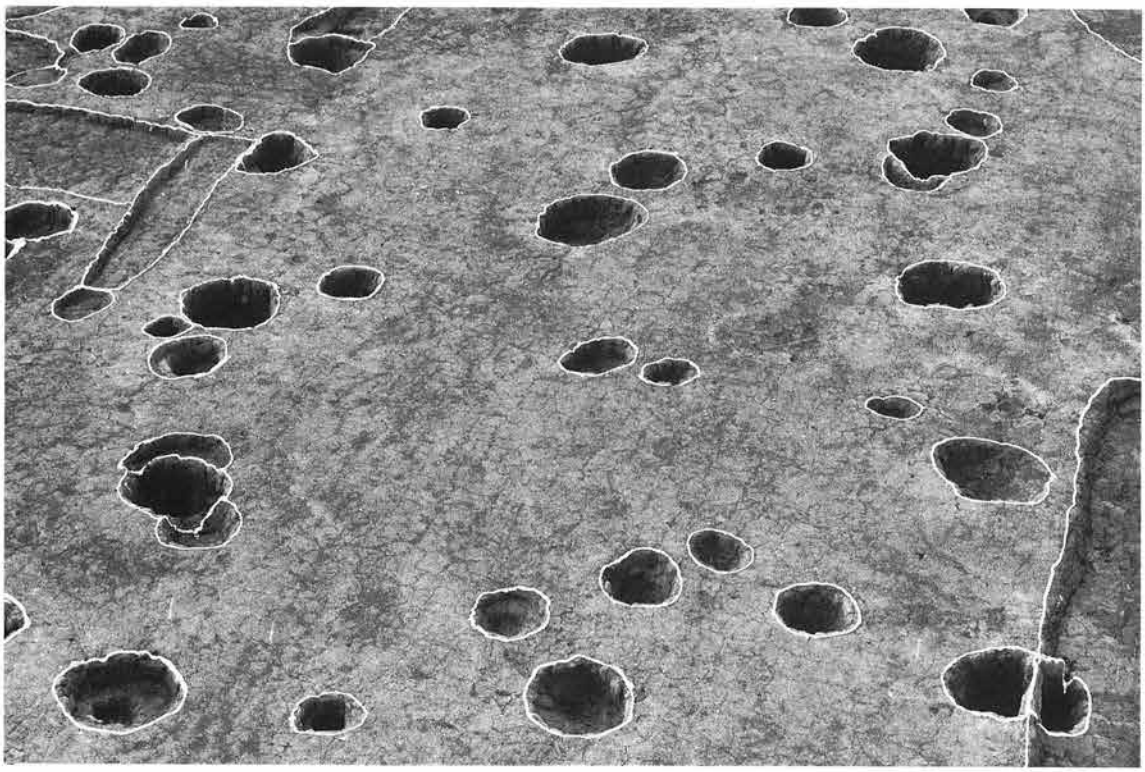
図版一　第一・第二調査区全景



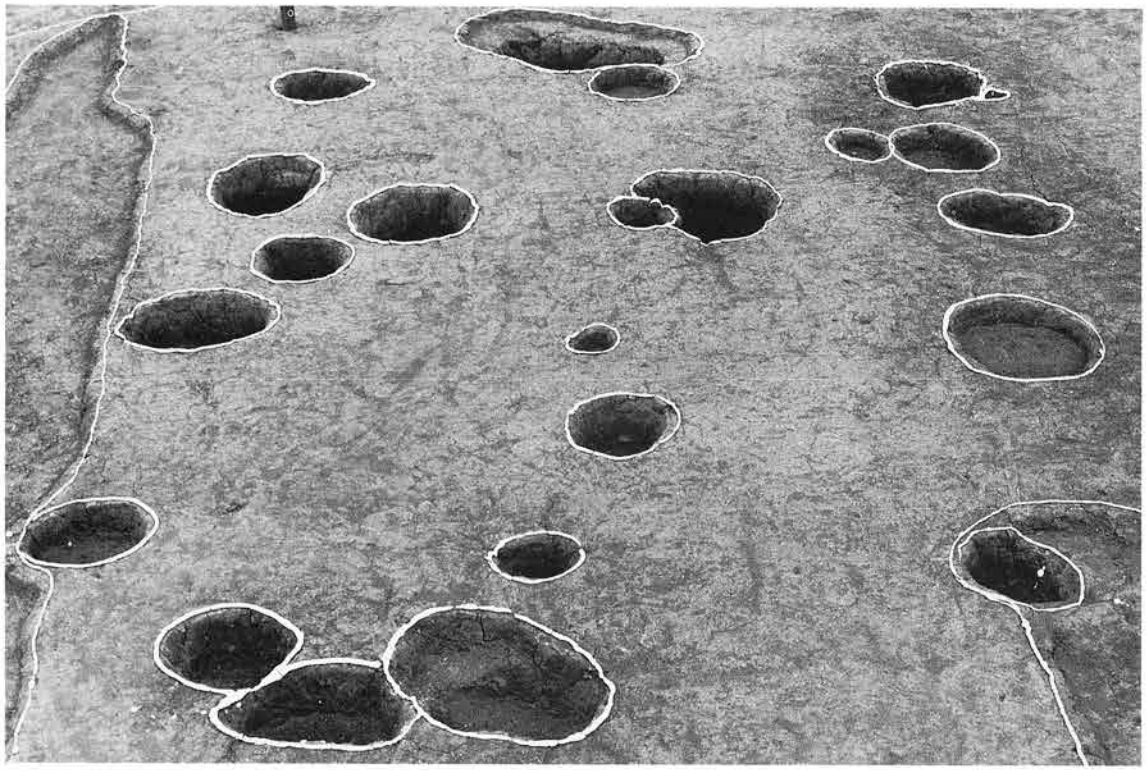
第一調査区西側全景



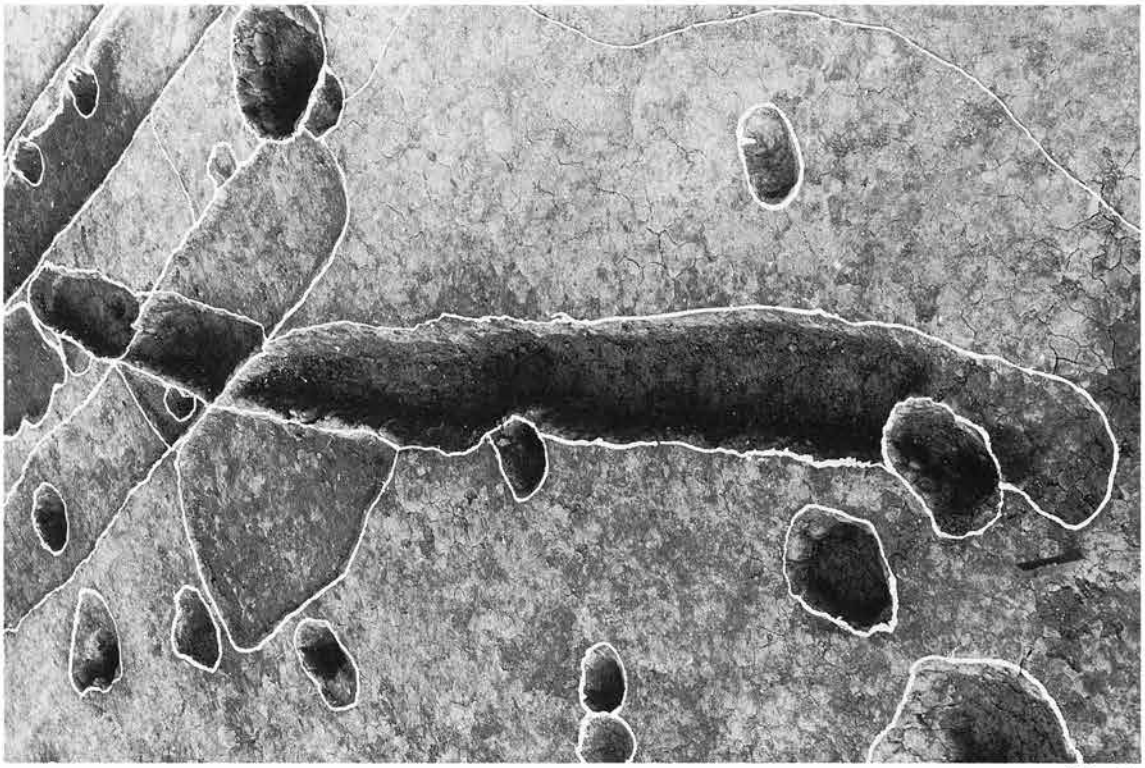
SB−1



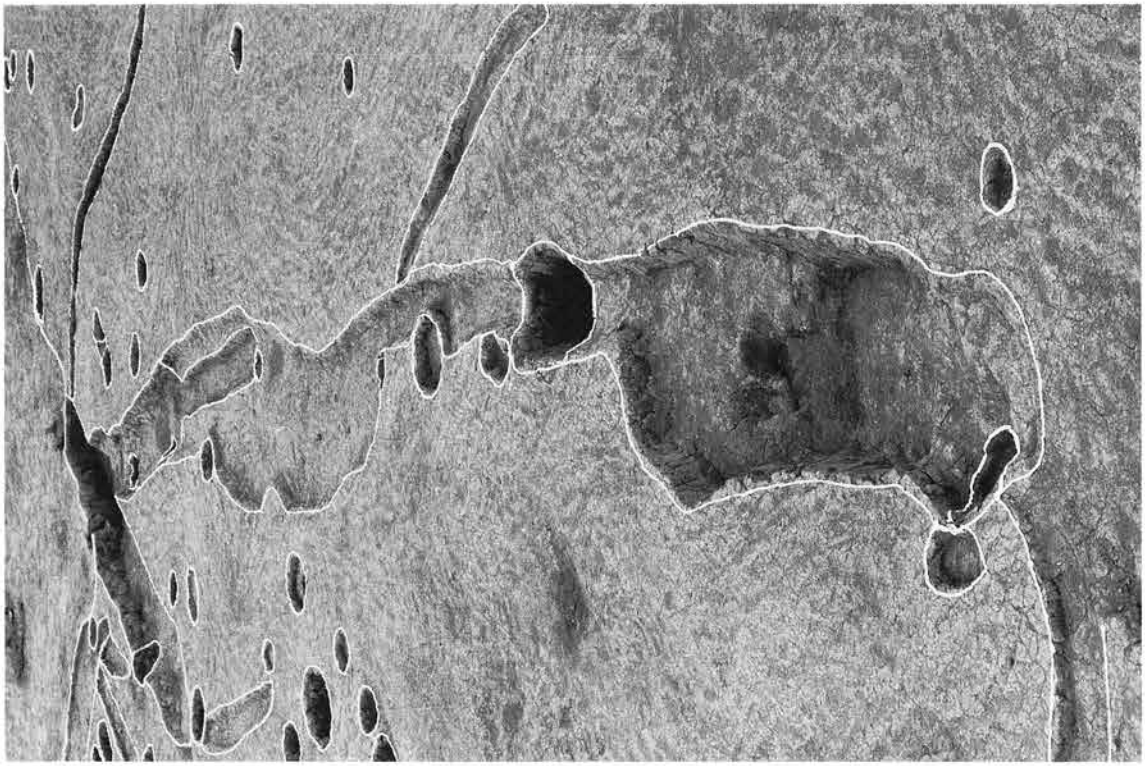
SB－2



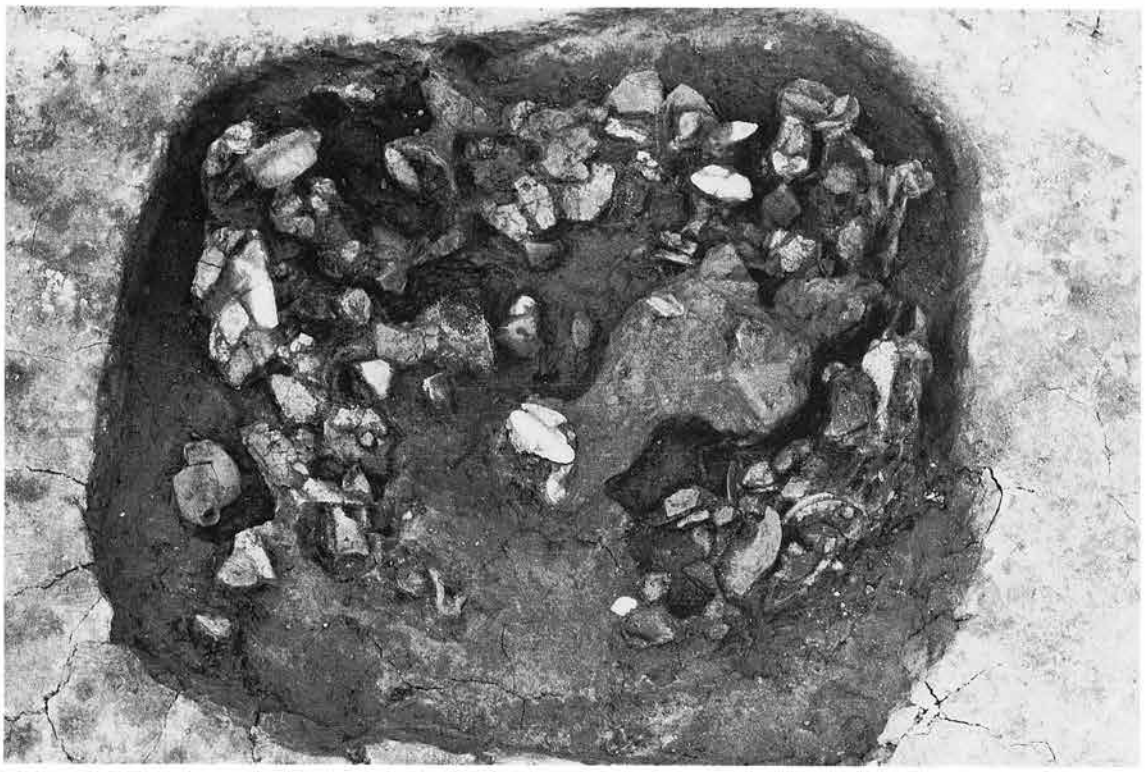
SB－25



SD−1

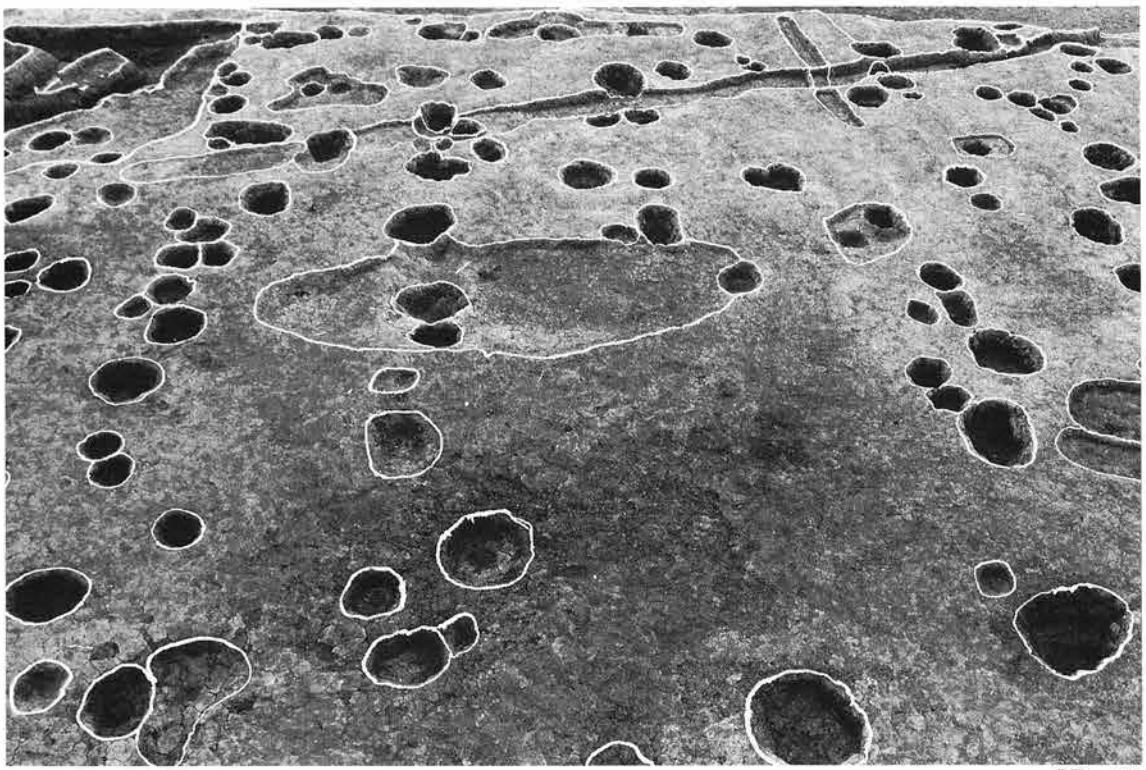


SD−2

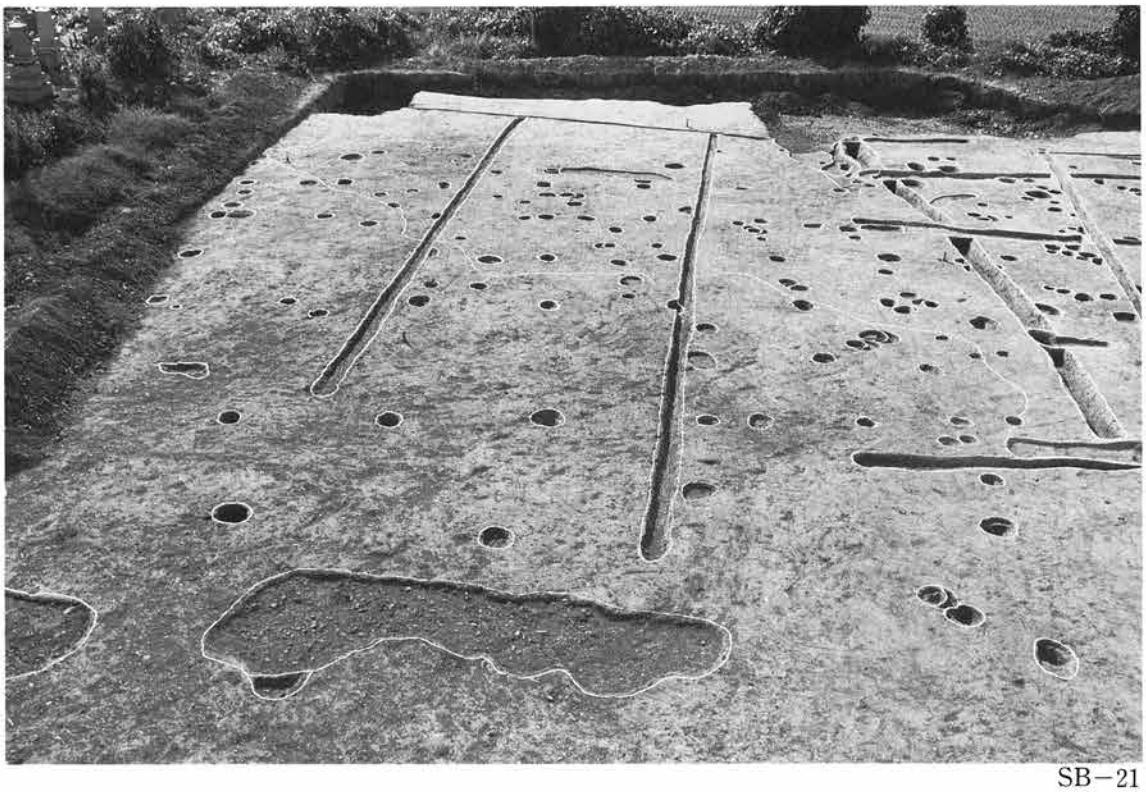


SK－1 土器出土状況

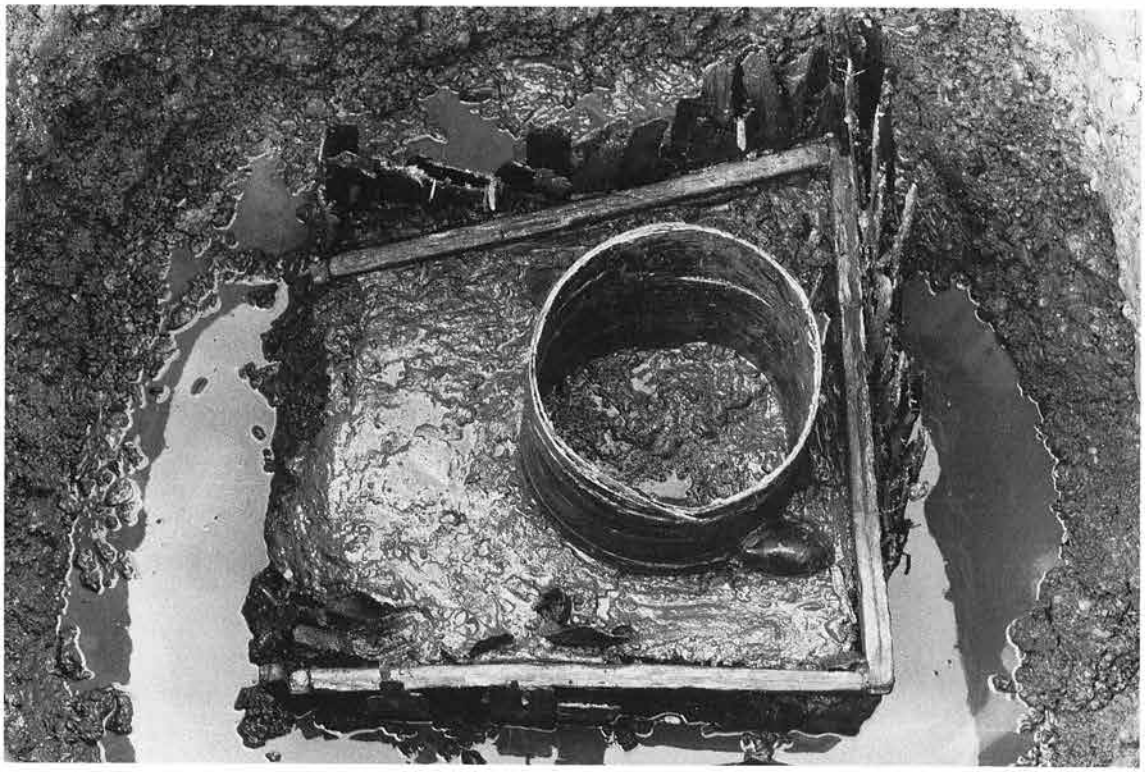
SK－2 土器出土状況



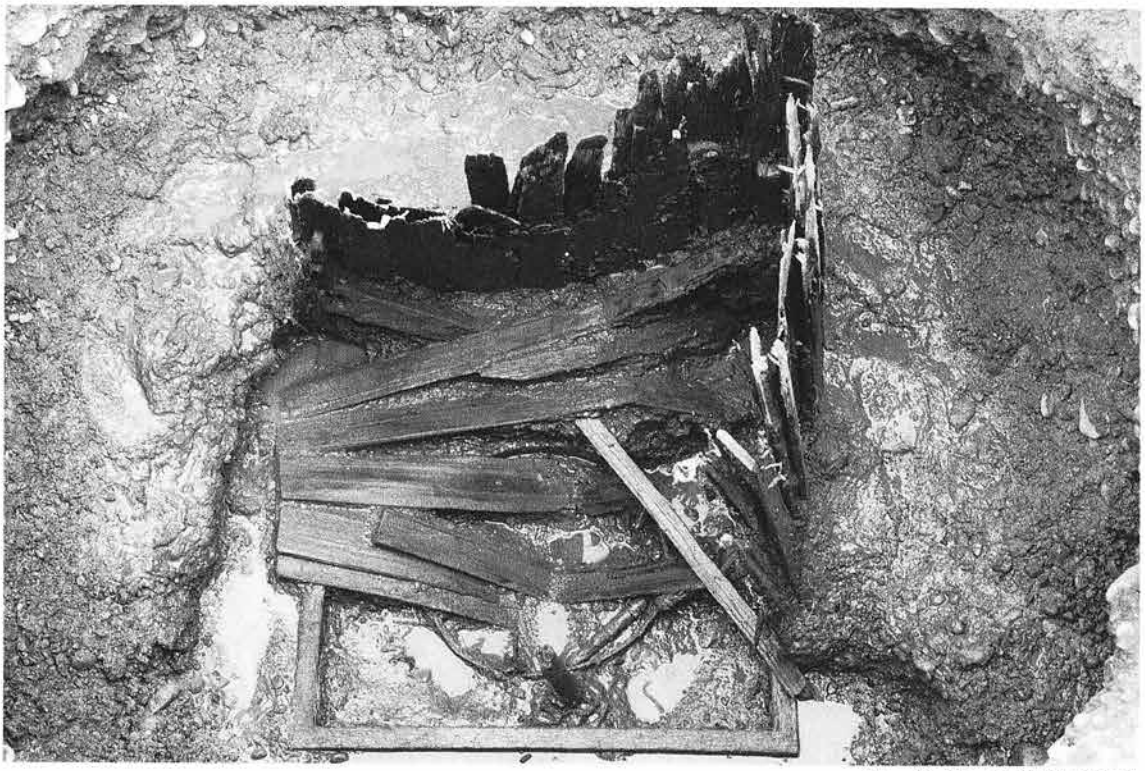
SB－19



SB－21



SE－2 第二曲物出土状況



SE－2 第一曲物出土状況

SE−2 第一曲物内遺物出土状況

SE−2 埋井の竹出土状況

4

20

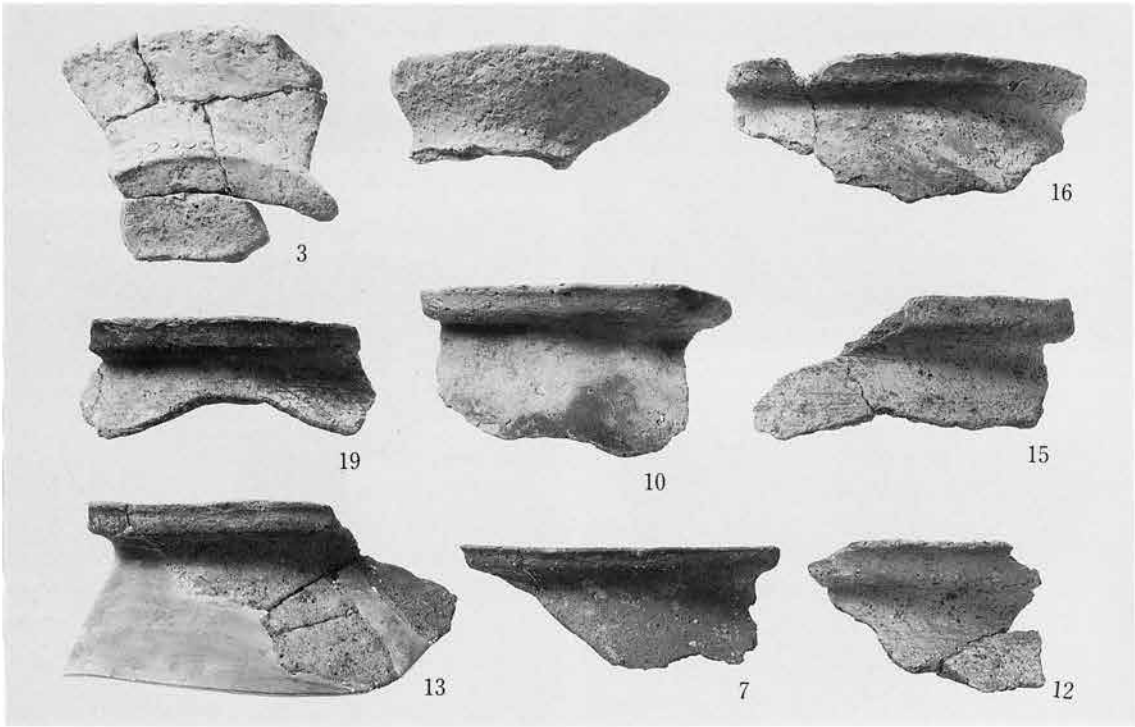
2

21

1

22

図版一〇　出土遺物（第九図）



3

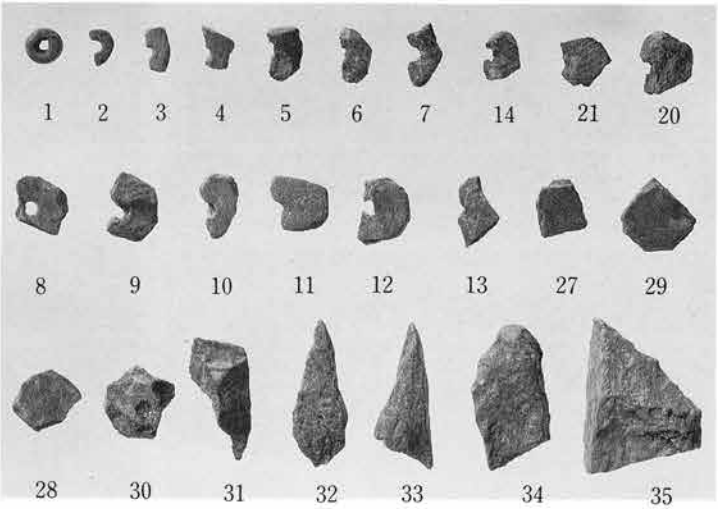
6

11

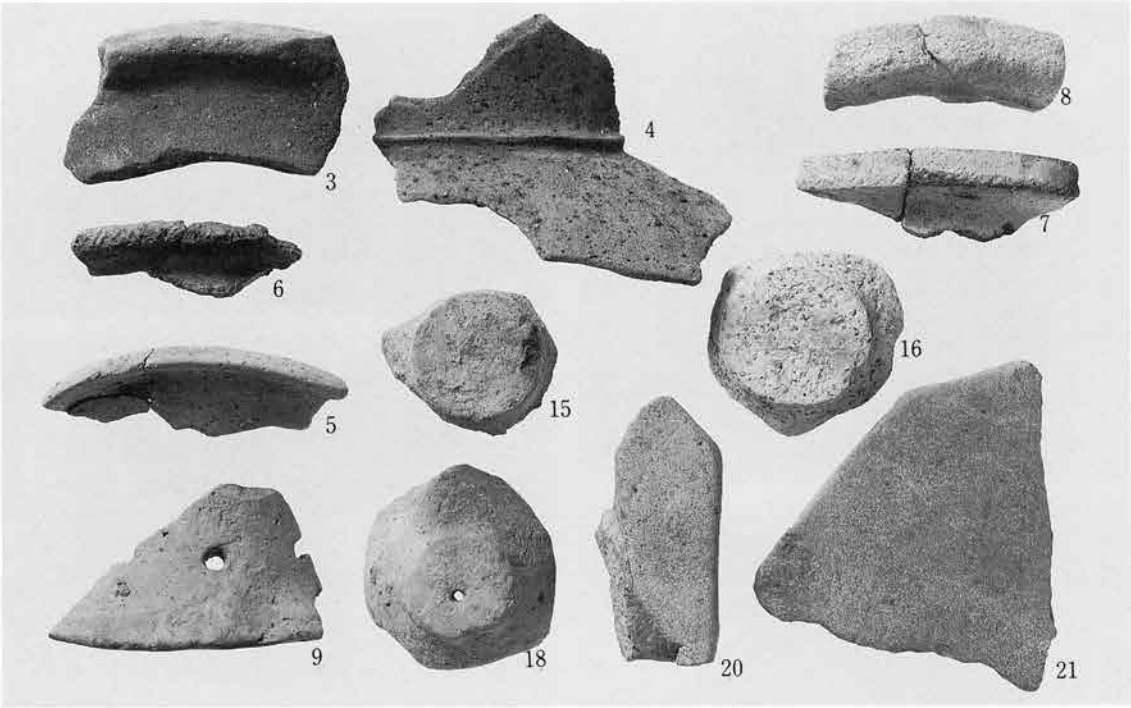
5

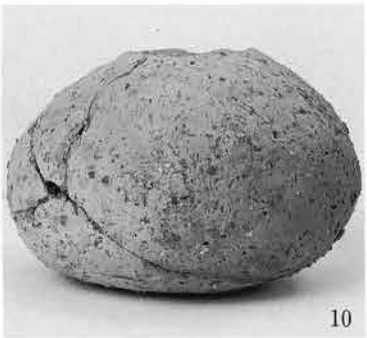
22

4



図版一二　出土遺物（第一二図）

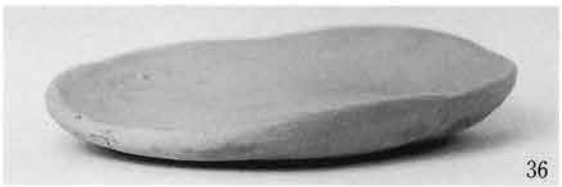




23

32

15


36

16

25

37

28

30

19

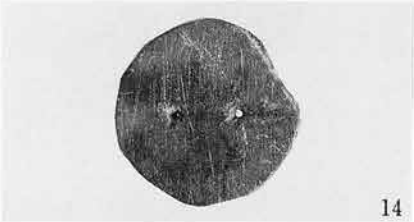
18

20

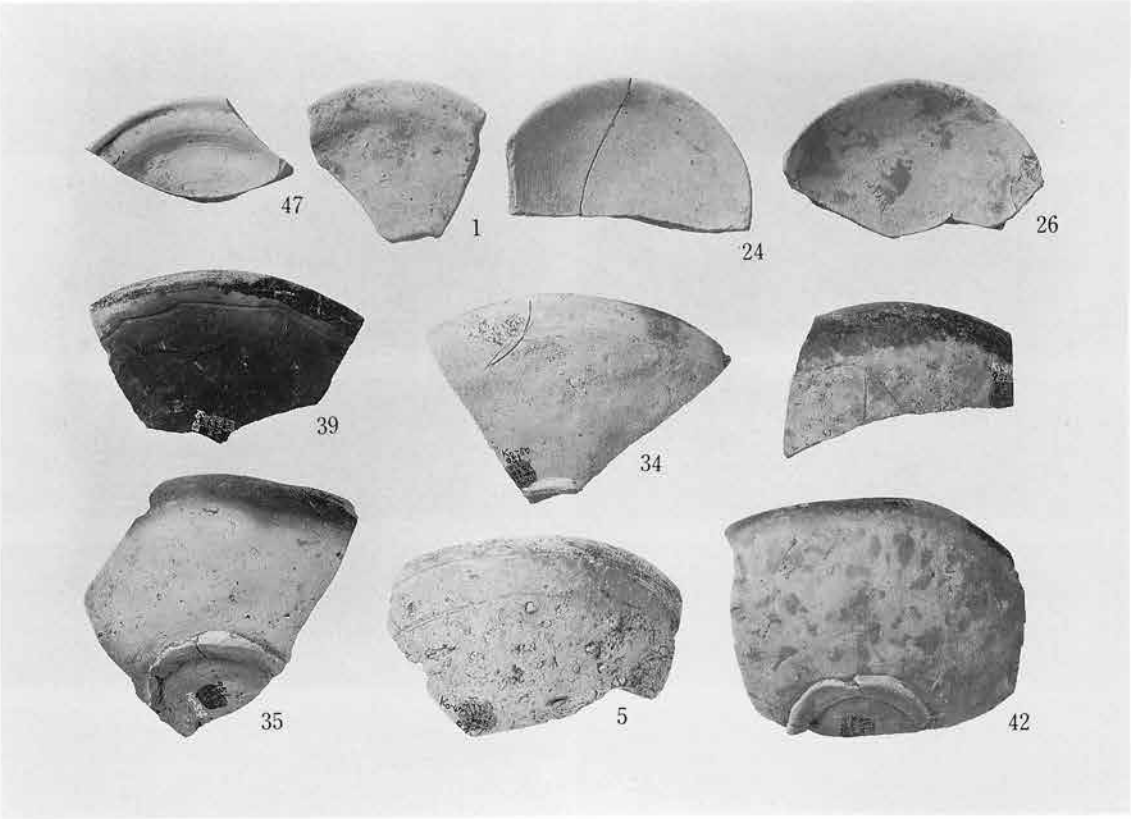
43

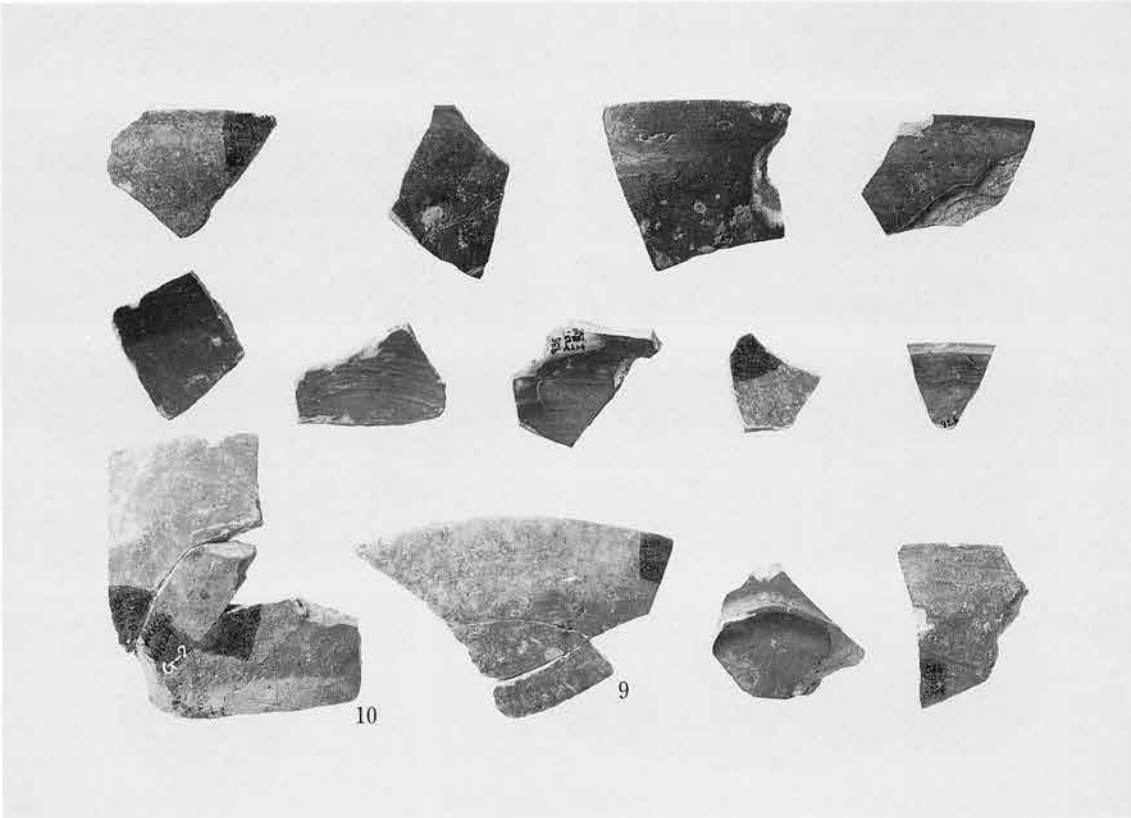
41

13

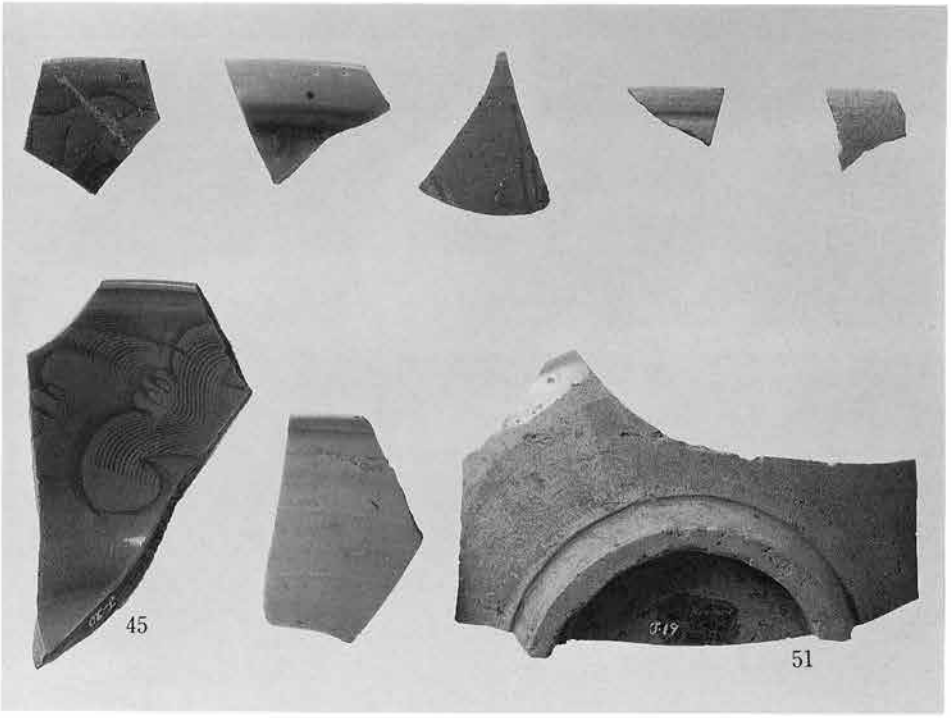

14

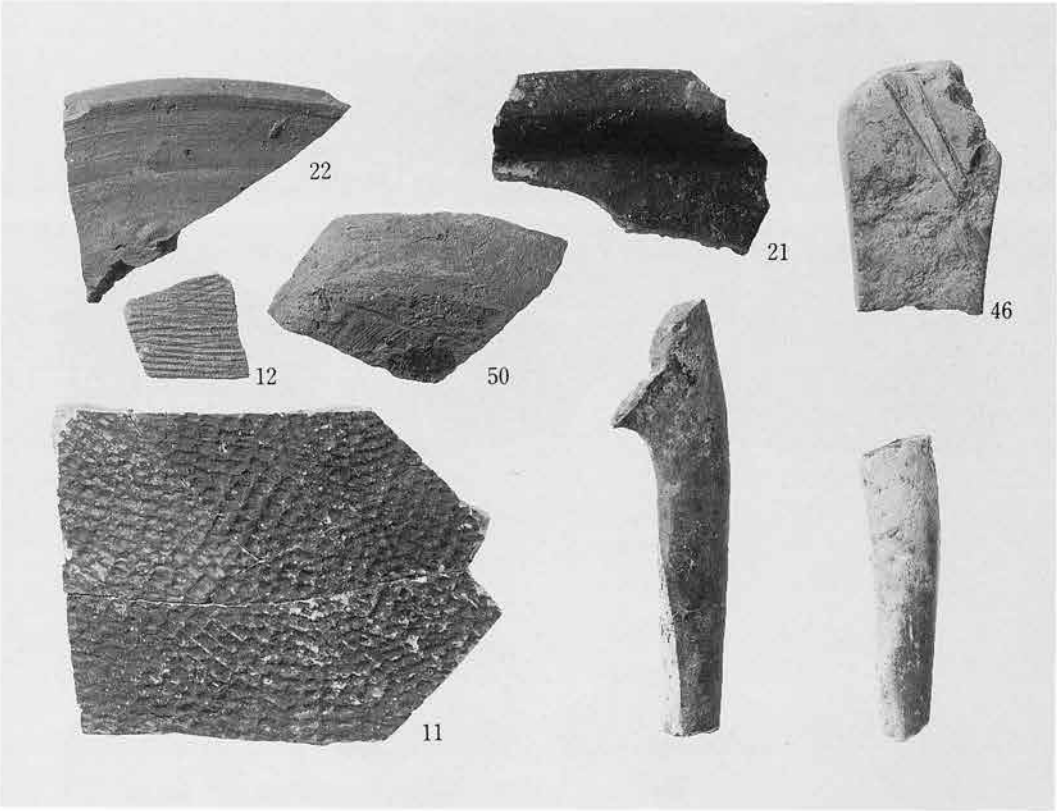
図版一四　出土遺物（第一八・一九図）



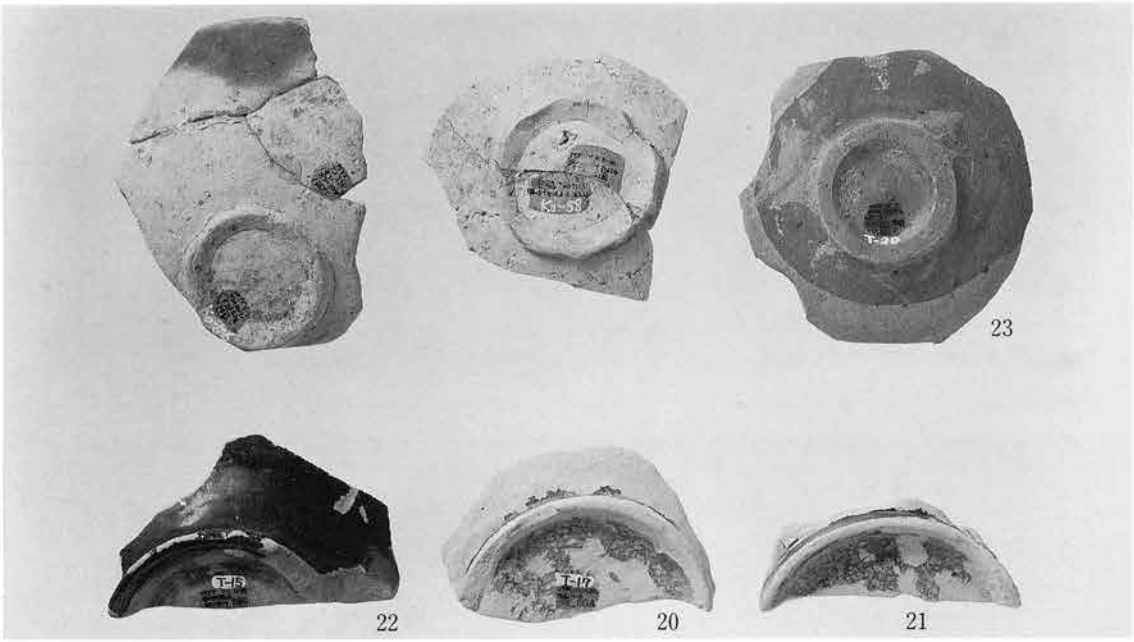


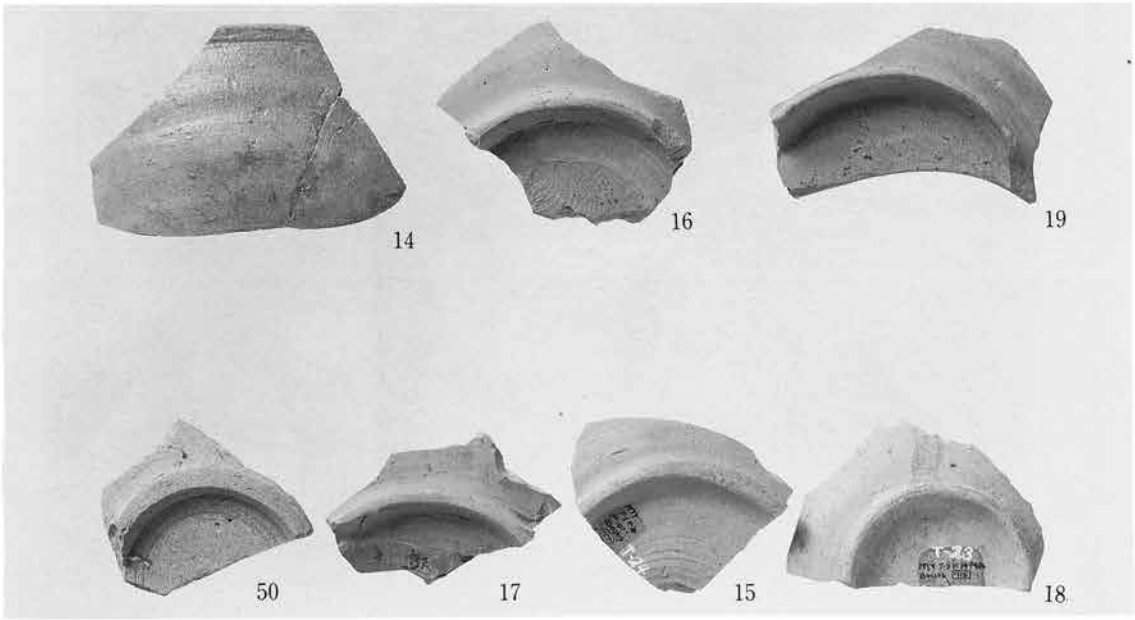
図版一五　出土遺物（第一八・一九図）





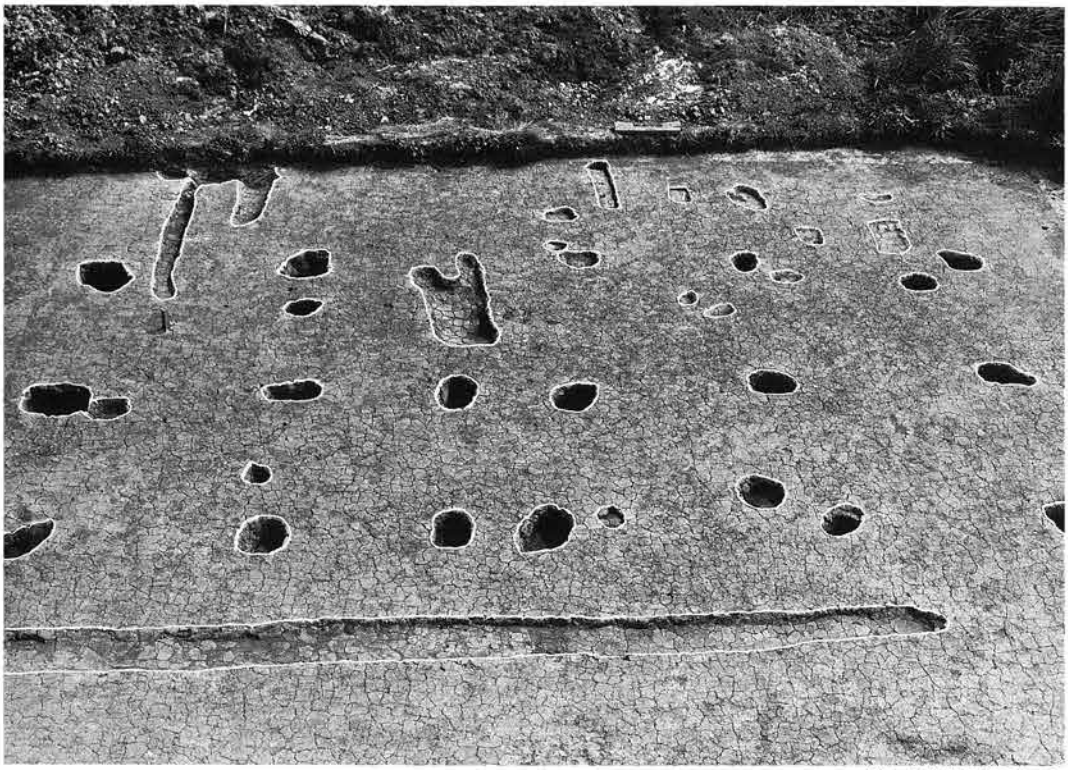
図版一六　出土遺物（第一九・二〇図）





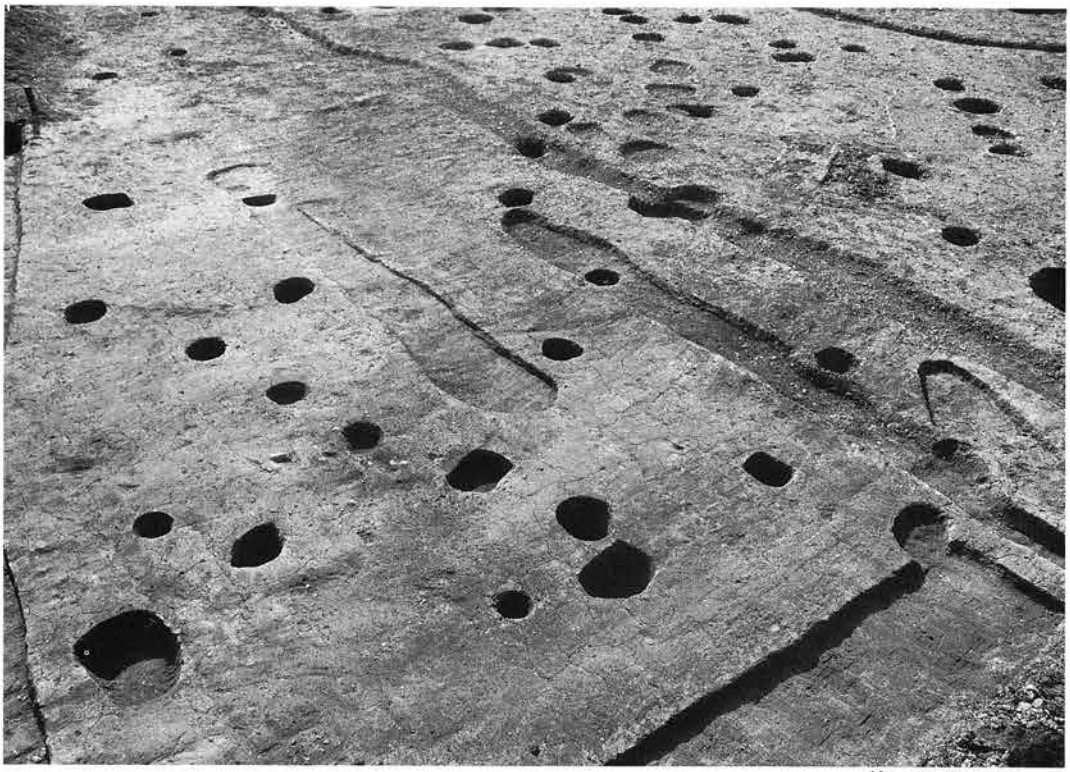
第二調査区（北より）

第二調査区建物跡

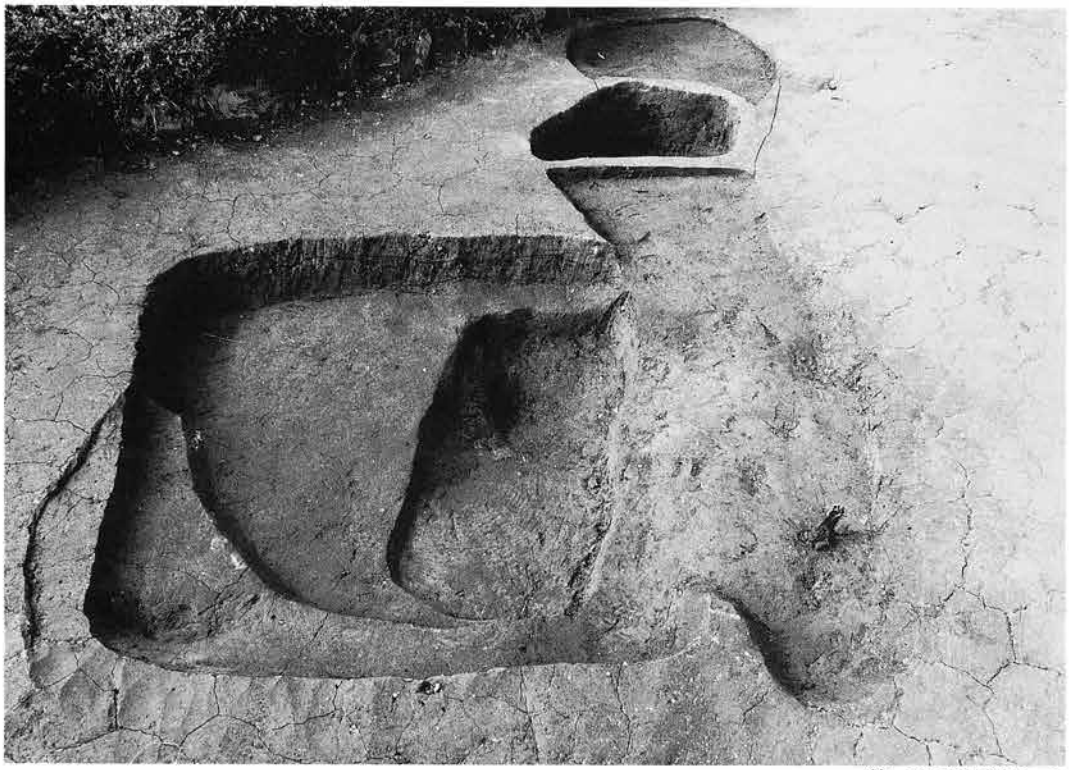


第二調査区SB－1

第二調査区ＳＢ—2・3



第二調査区SB－5



第二調査区SK－2

SK－1 検出状況

SK－1 完掘状況

竪櫛出土状況

木製品出土状況

図版二二　出土遺物（第二二・二三図）

23

3

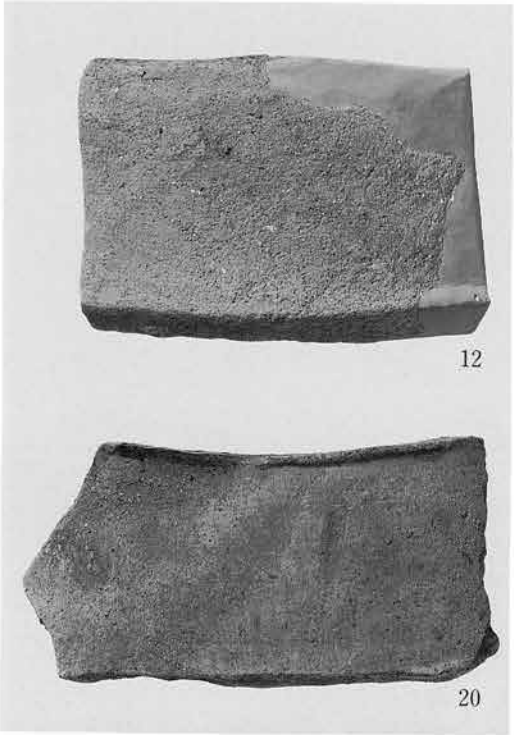
25

7

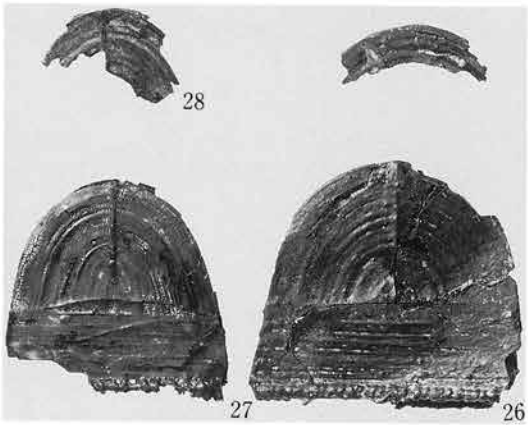
21

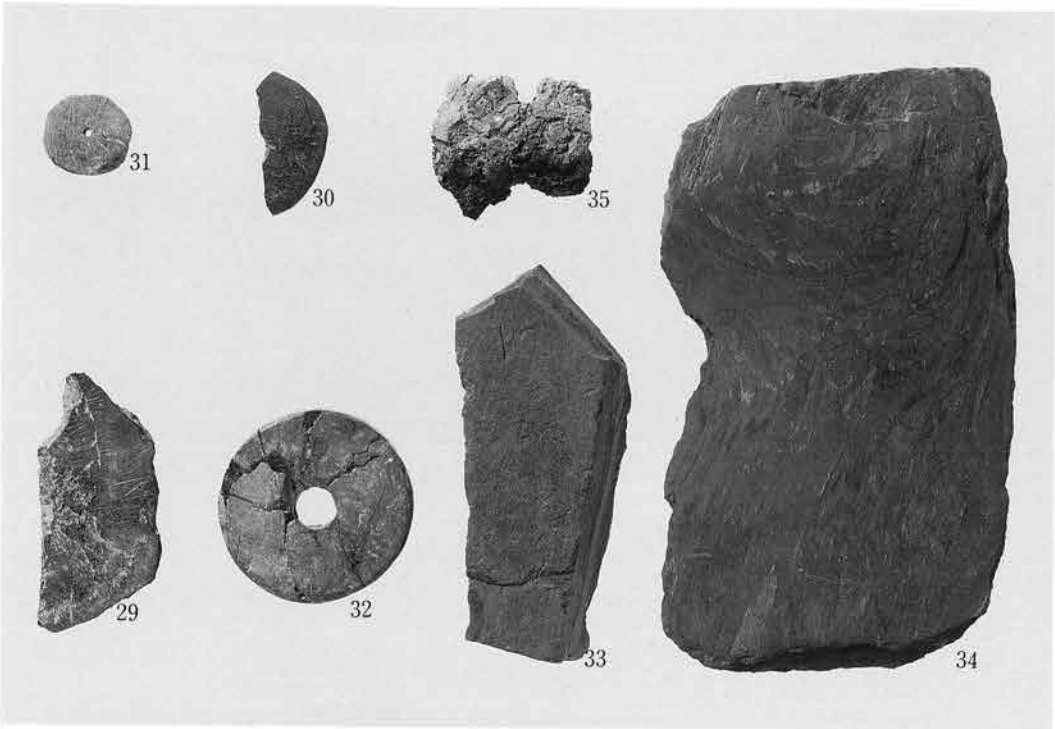
24

17

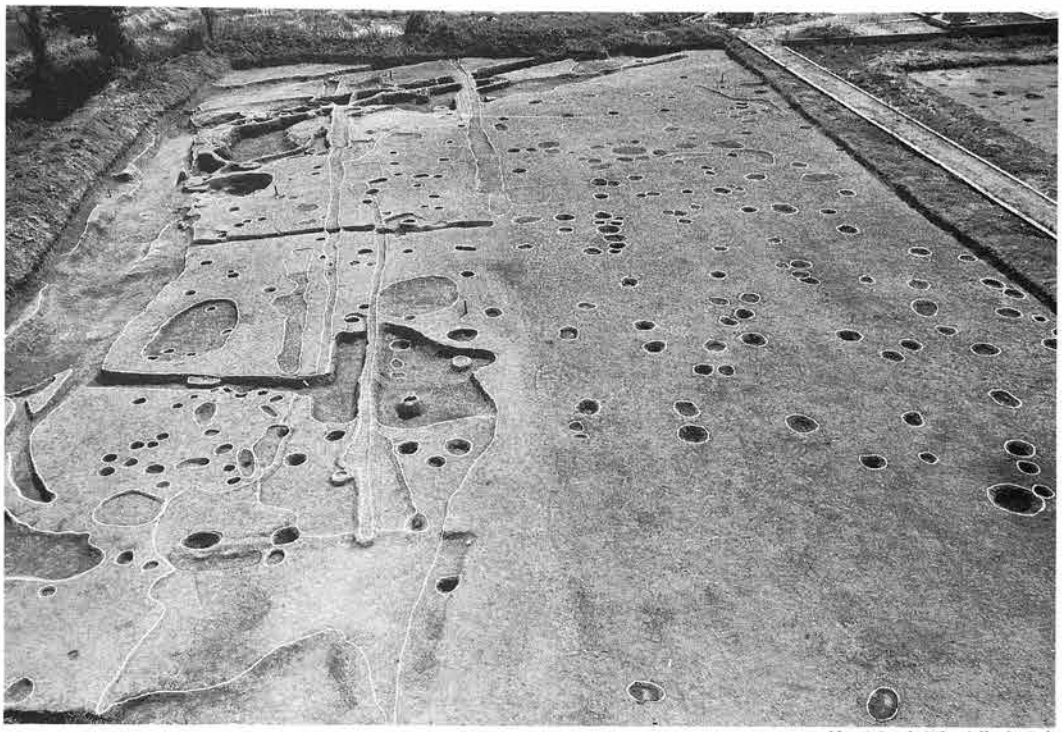

12
20

16


28
27
26

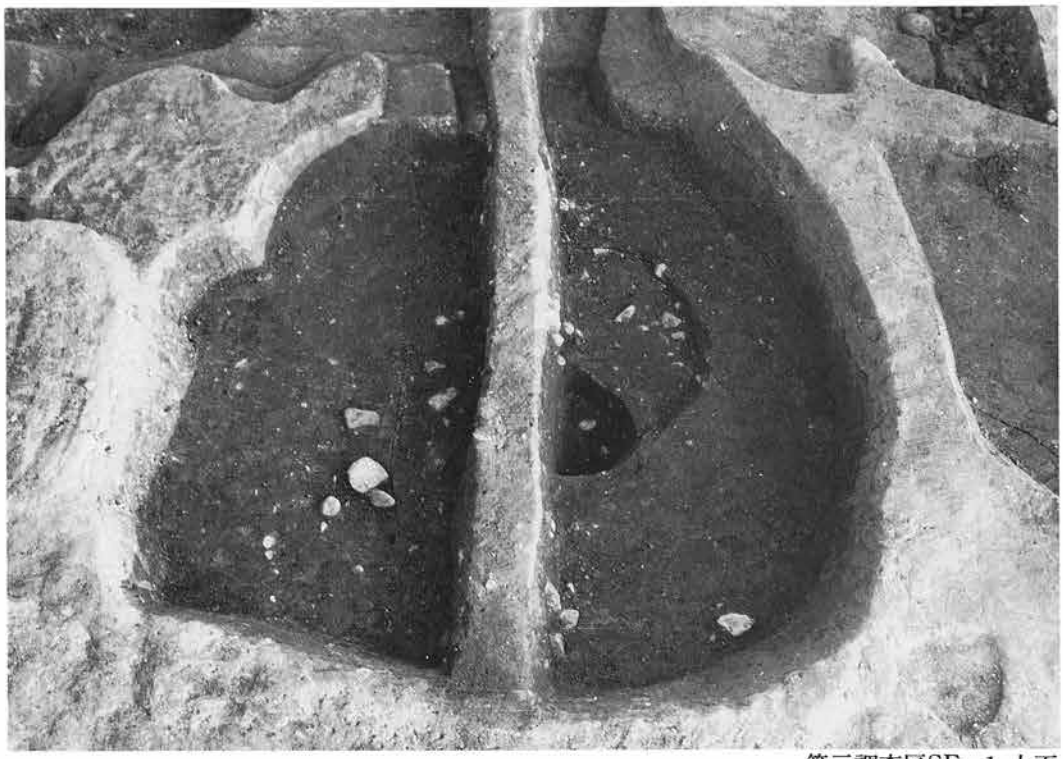

31
30
35
29
32
33
34

図版二四　第三調査区全景



第三調査区（北より）

第三調査区SD－2　（西より）



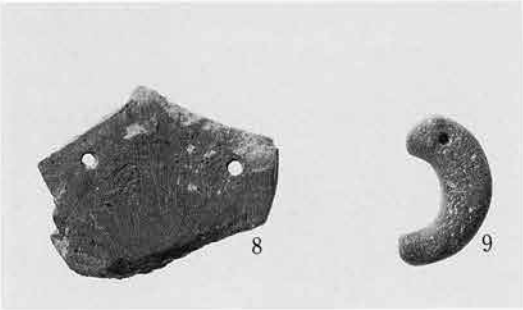
第三調査区SE－1　上面

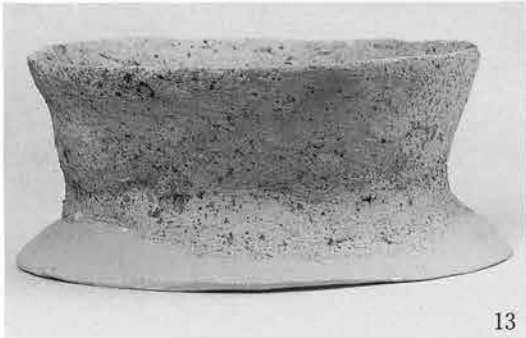
第三調査区SE－1　下駄出土状況

第三調査区SE－1

第三調査区SE－1 曲物

図版二八　出土遺物（第三二・三三図）





24

21

20

26

28

31

図版三〇　出土遺物（第三五図）

32

41

33

43

34

38

46

39

52

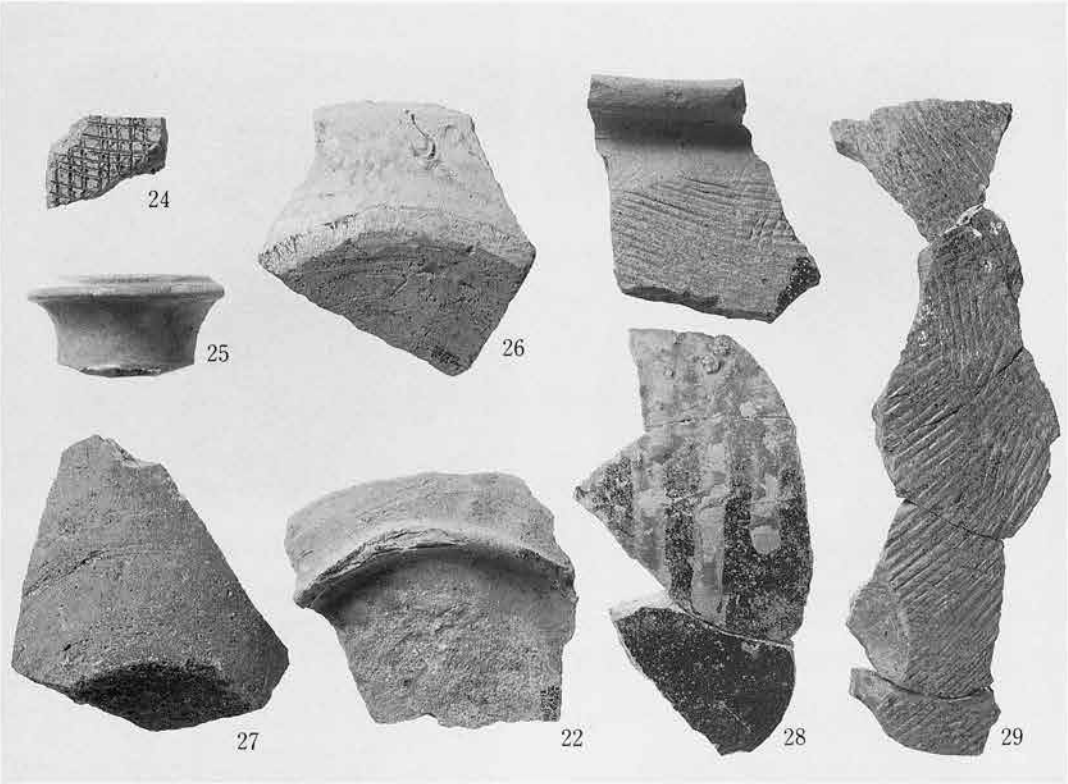
54

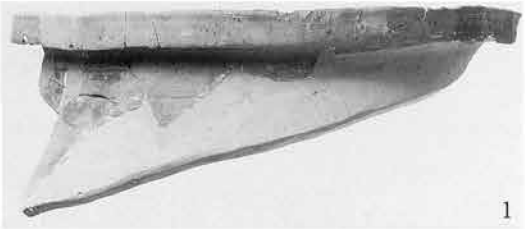
53

48

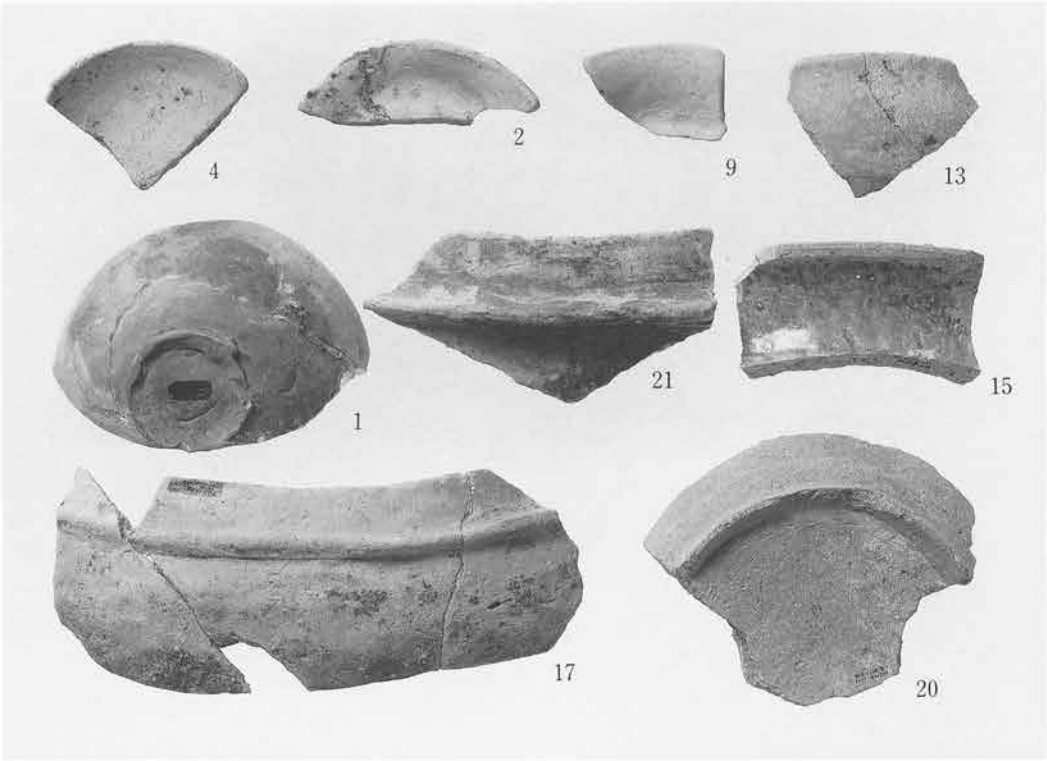
50

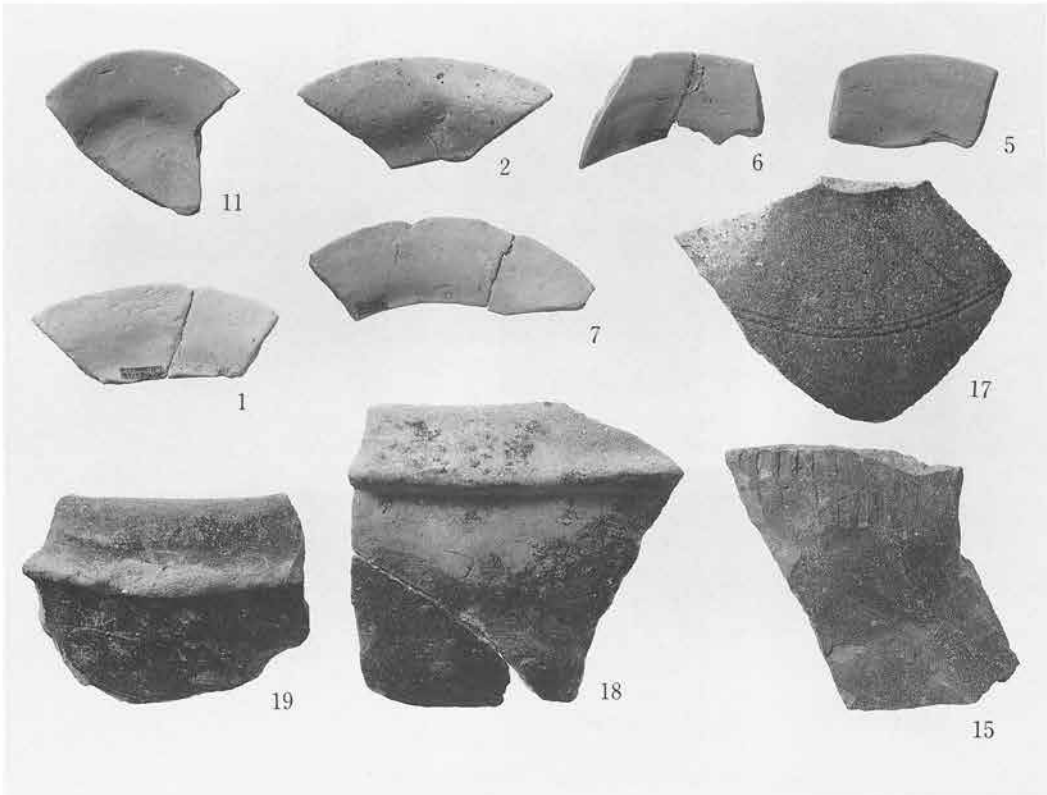
図版三二　出土遺物（第三九・四〇・四一図）



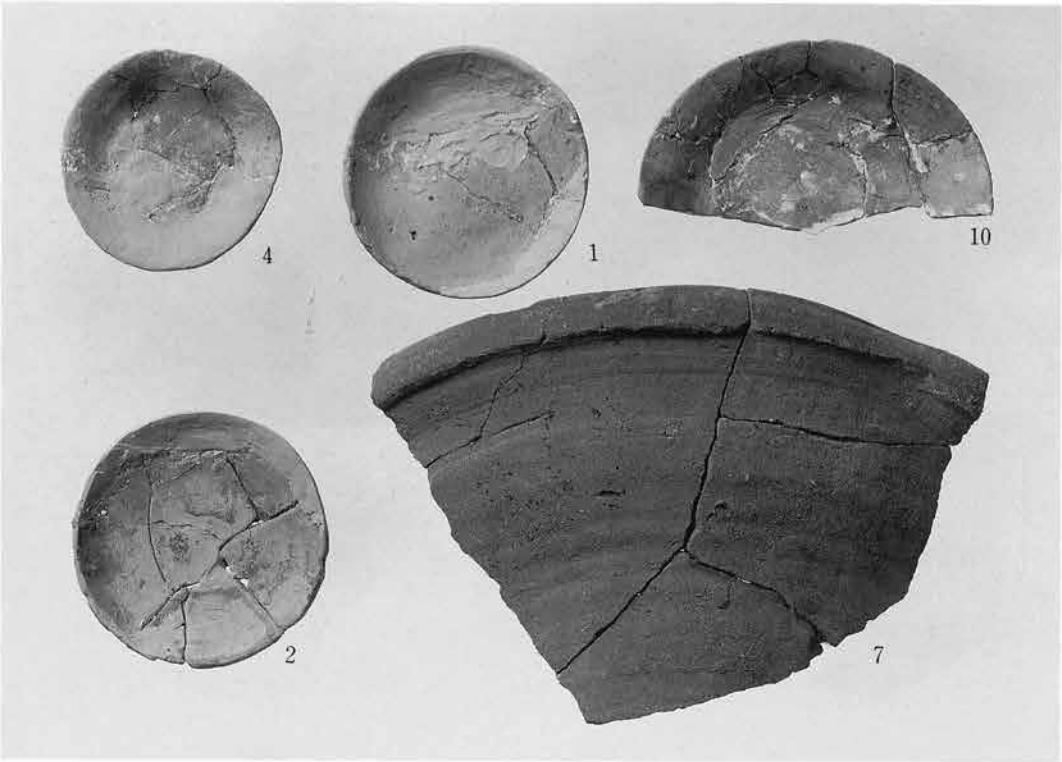


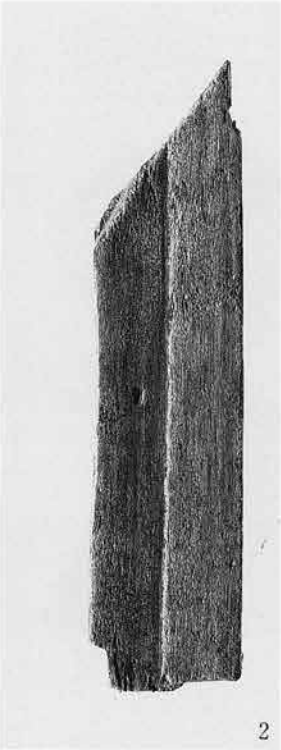
図版三三　出土遺物（第四一・四二図）

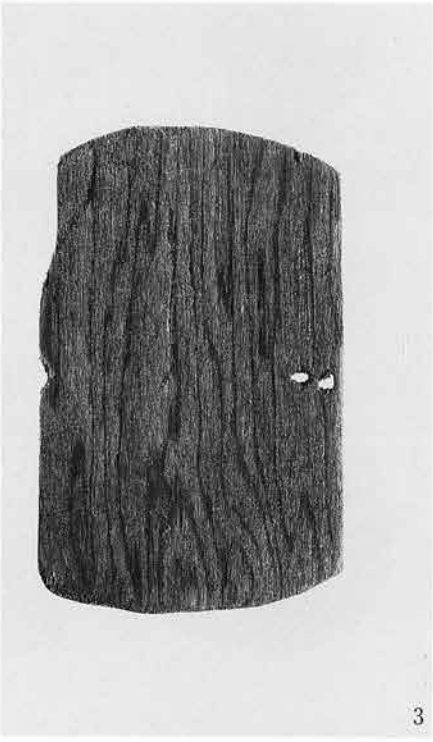




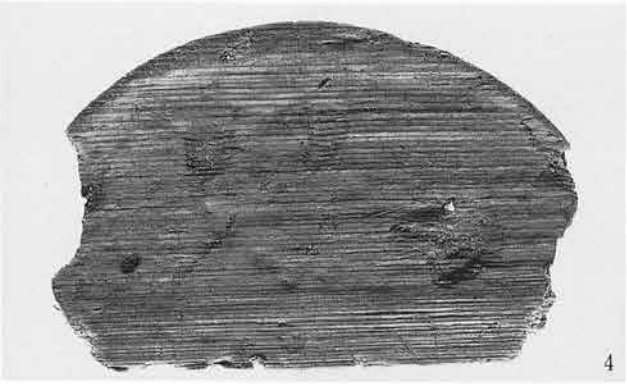
図版三四　出土遺物（第四四・四五図）





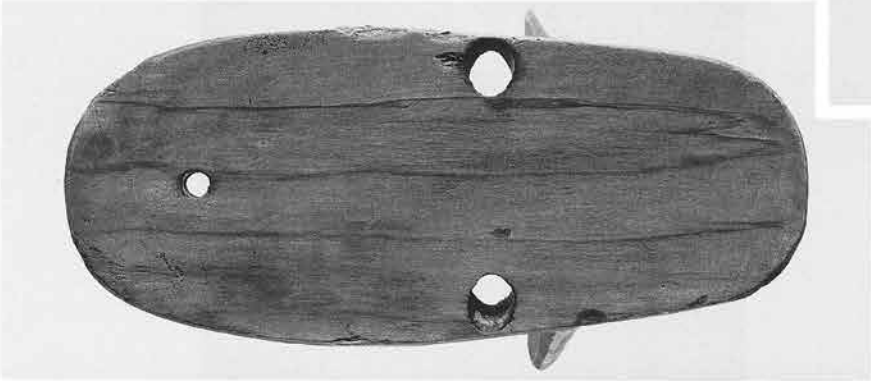


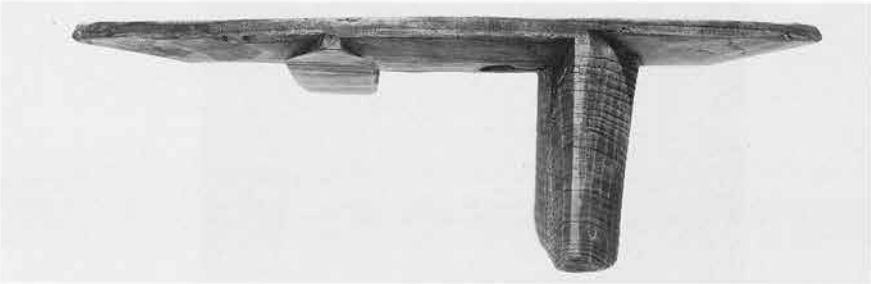
図版三五　出土遺物（第四三図）

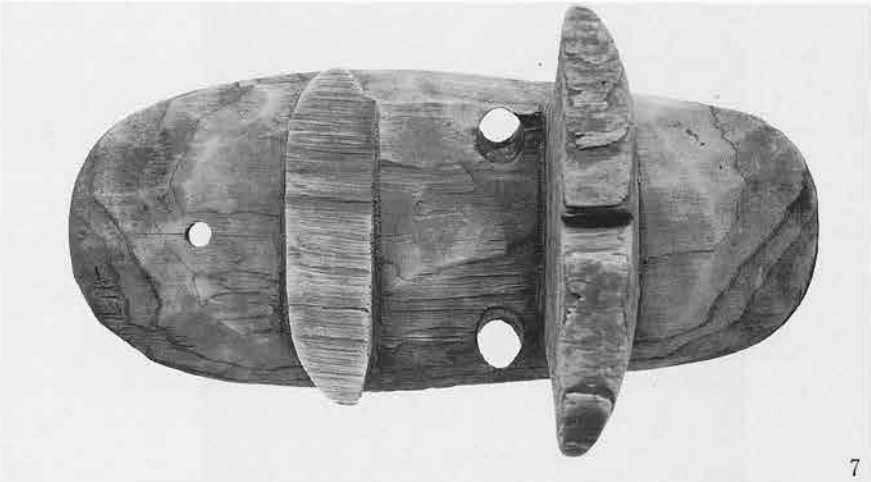

4

6

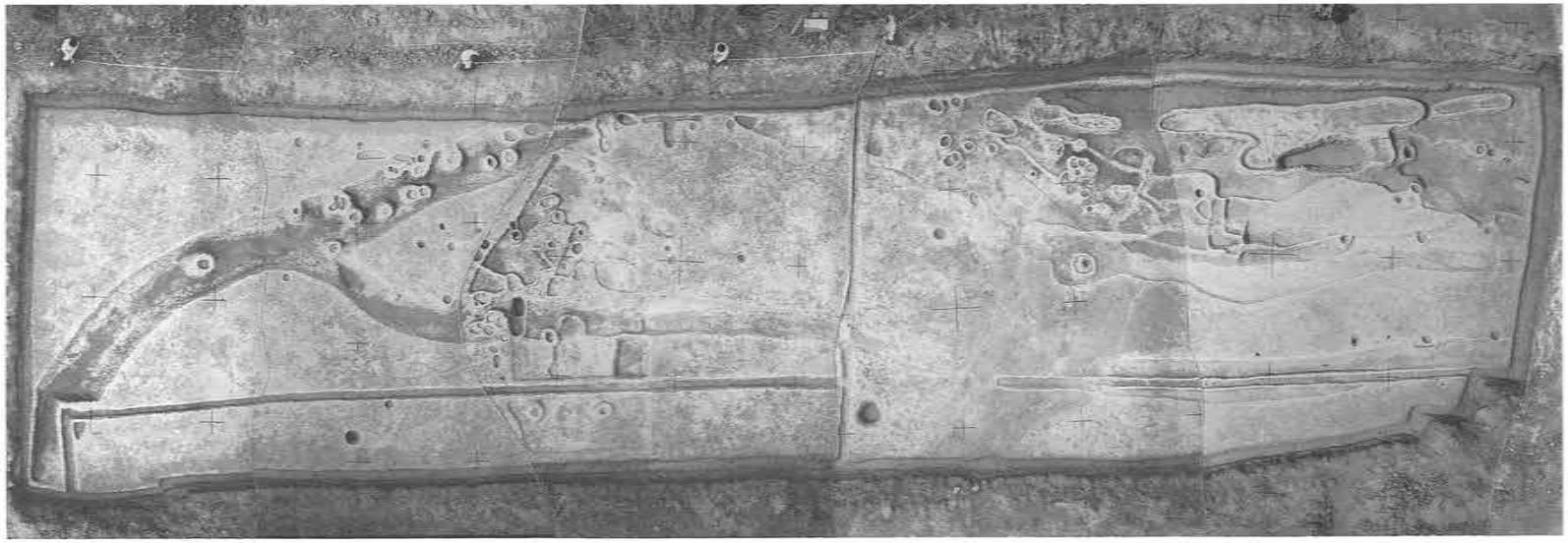
5

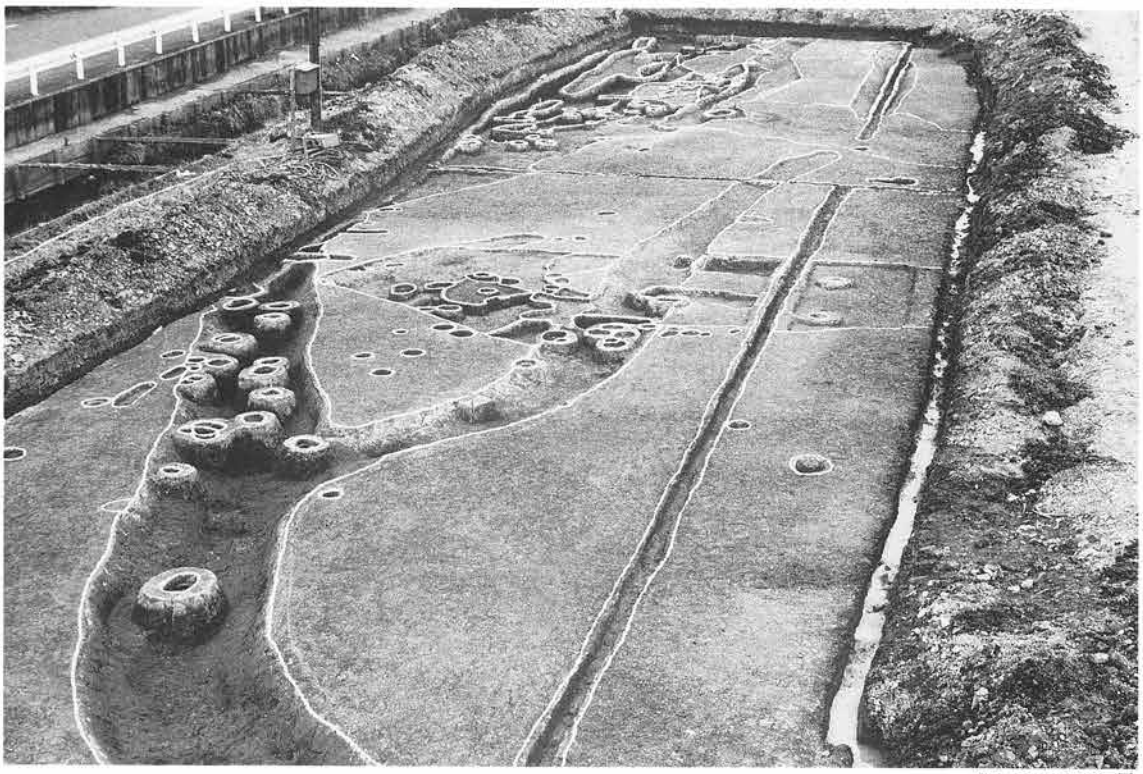




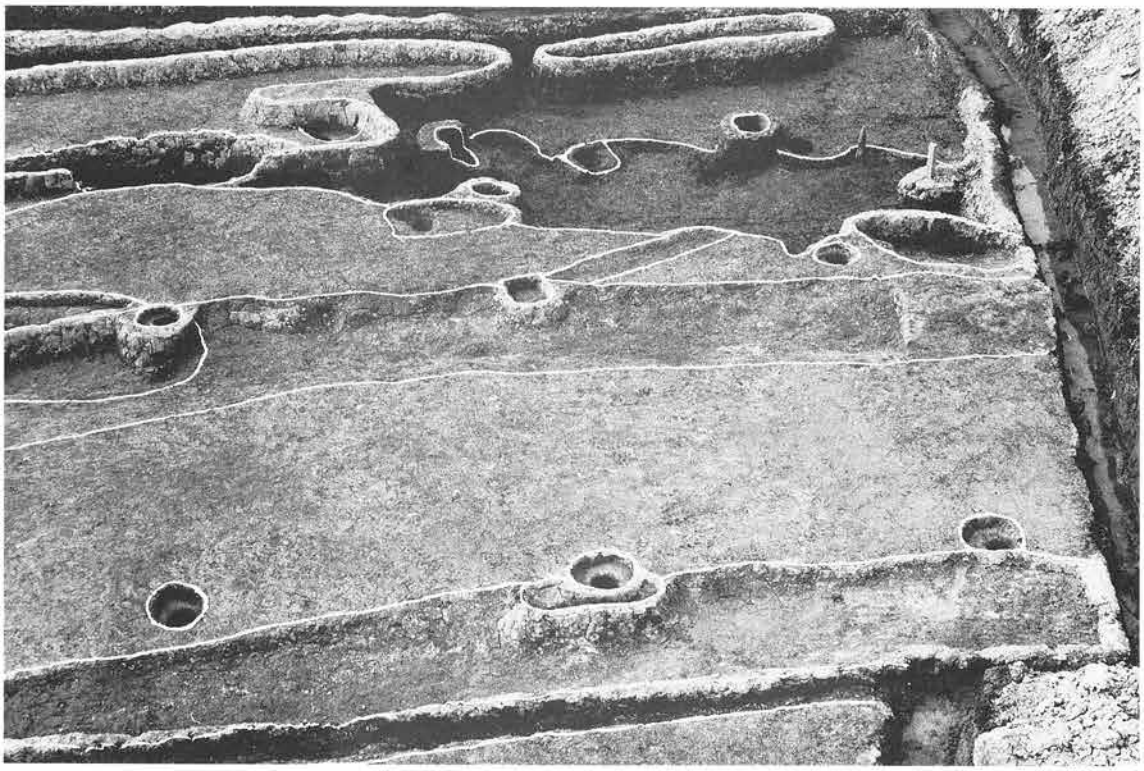

7

図版三六　第四調査区全景

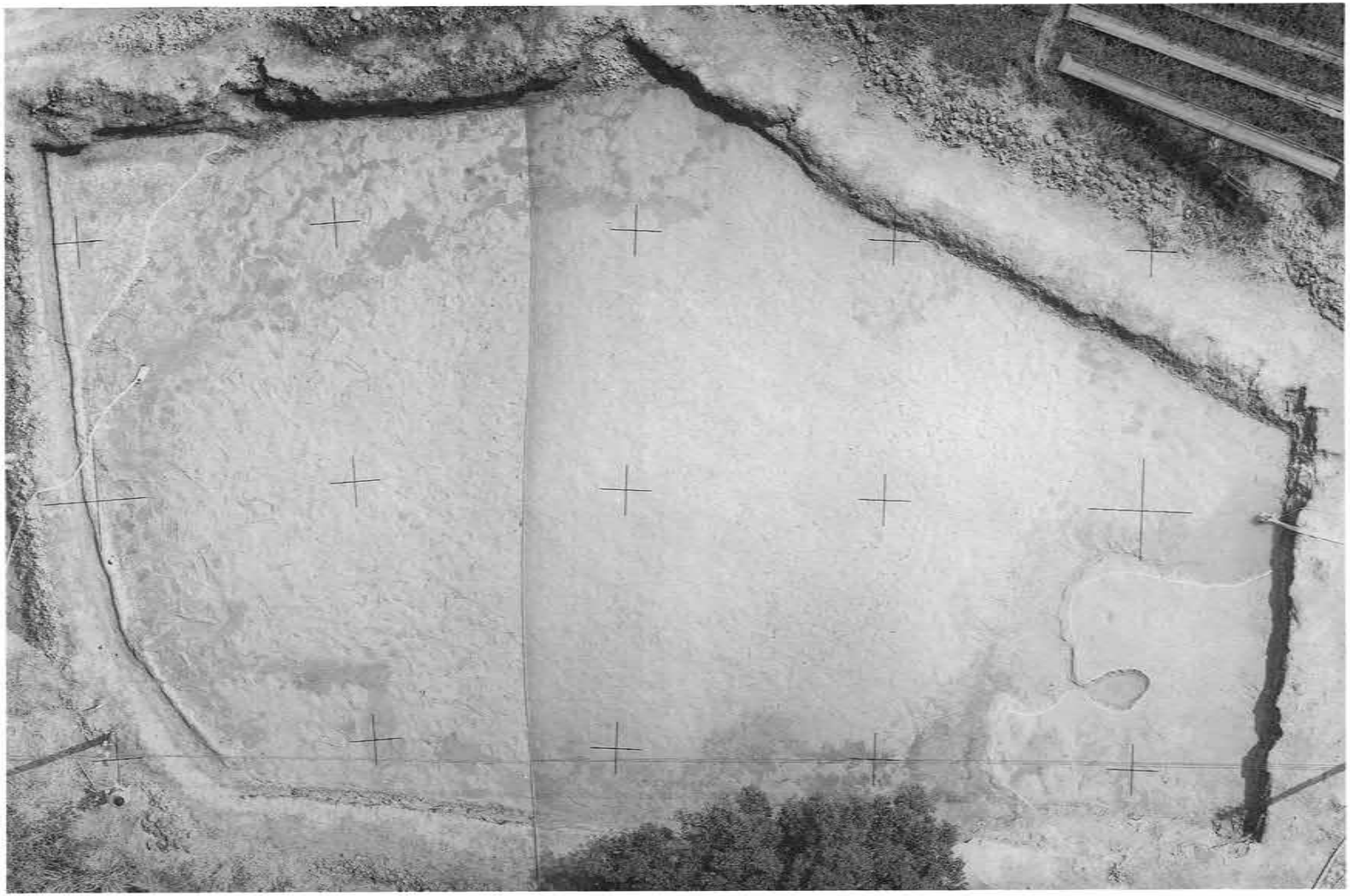




第四調査区全景

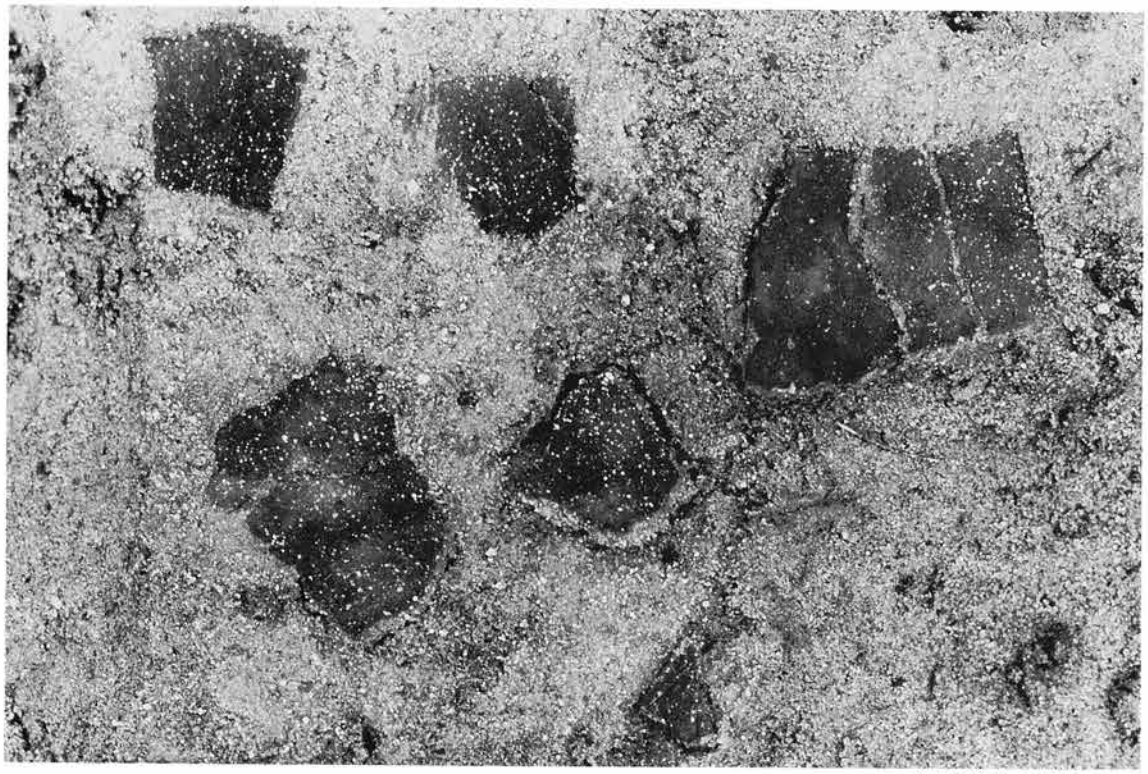


SB－1

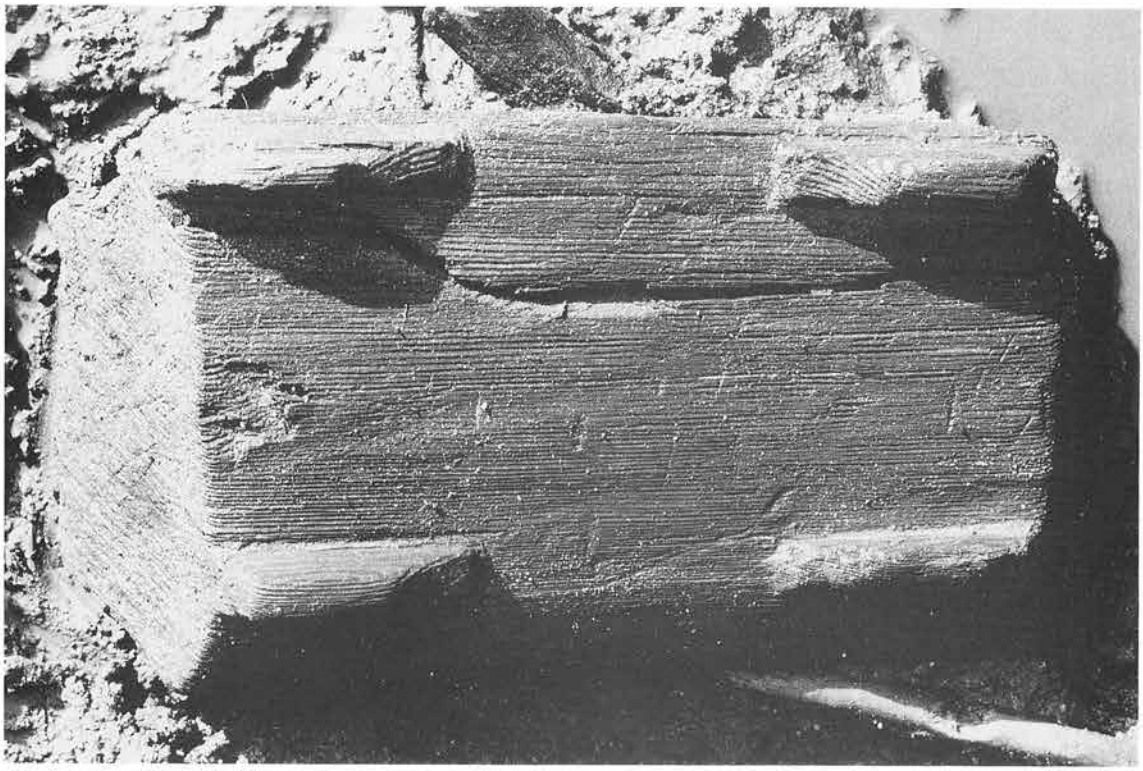


図版三八　第五調査区全景

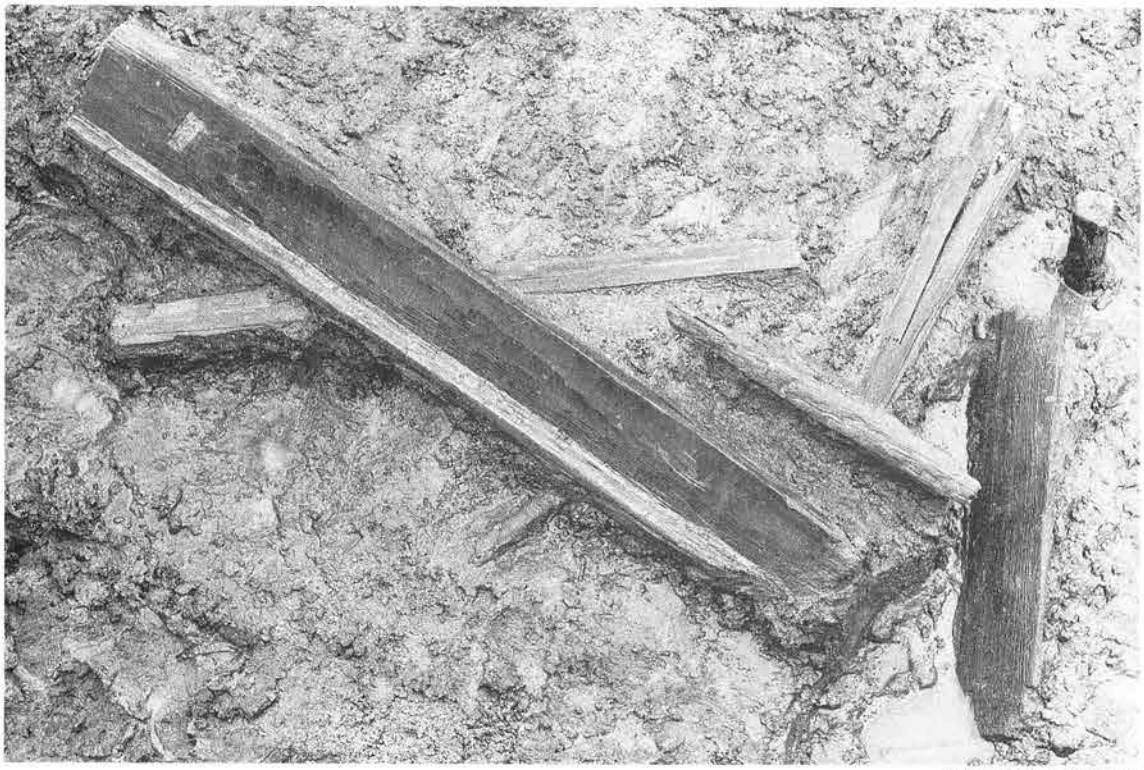
旧河道出土土器



旧河道出土縄文土器



旧河道出土木製品



旧河道出土木製品

4

3

8

10

5

36

32

33

図版四二　出土遺物（第五二・五三図）

3

5

8

27

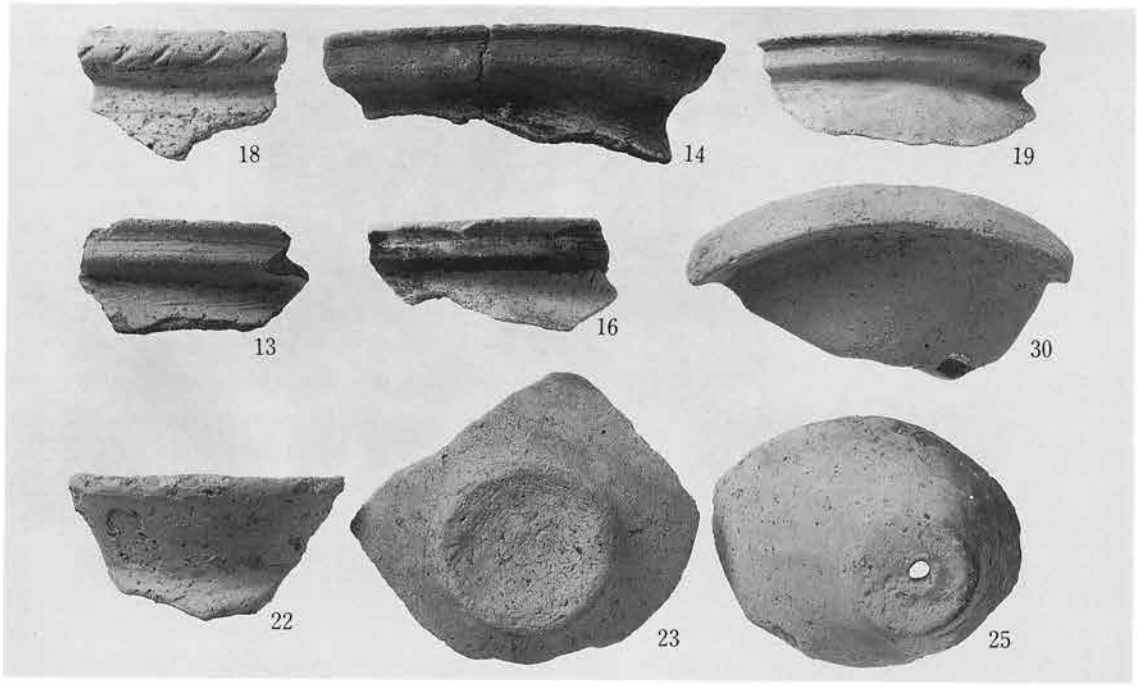
2

21

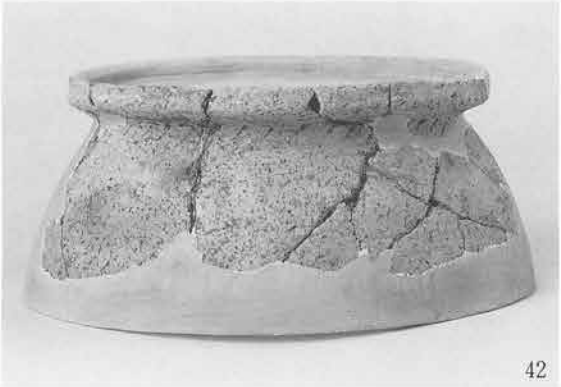
51

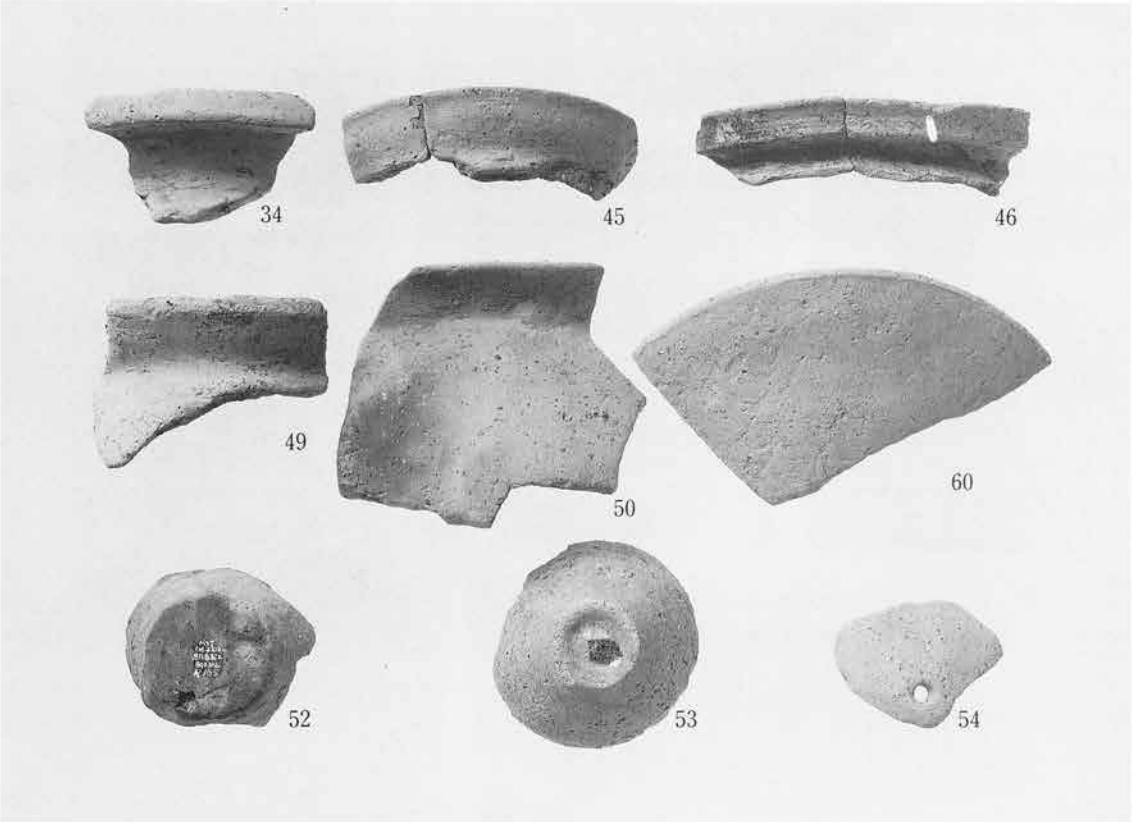
26

図版四三　出土遺物（第五二・五五・五六図）



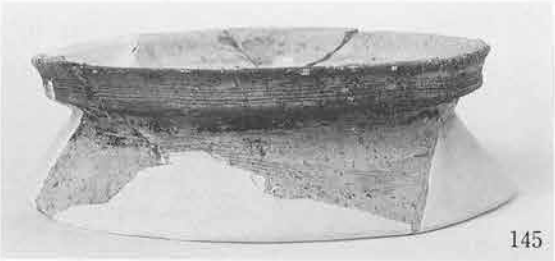
図版四四　出土遺物（第五三・一一七図）

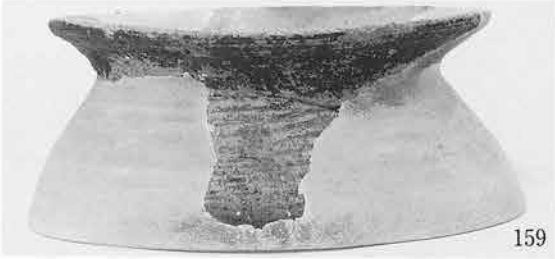




118

117

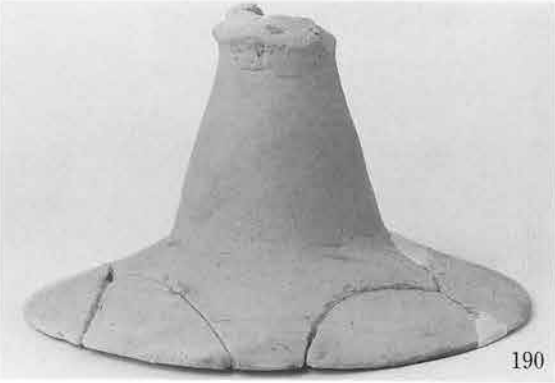

145


159

161

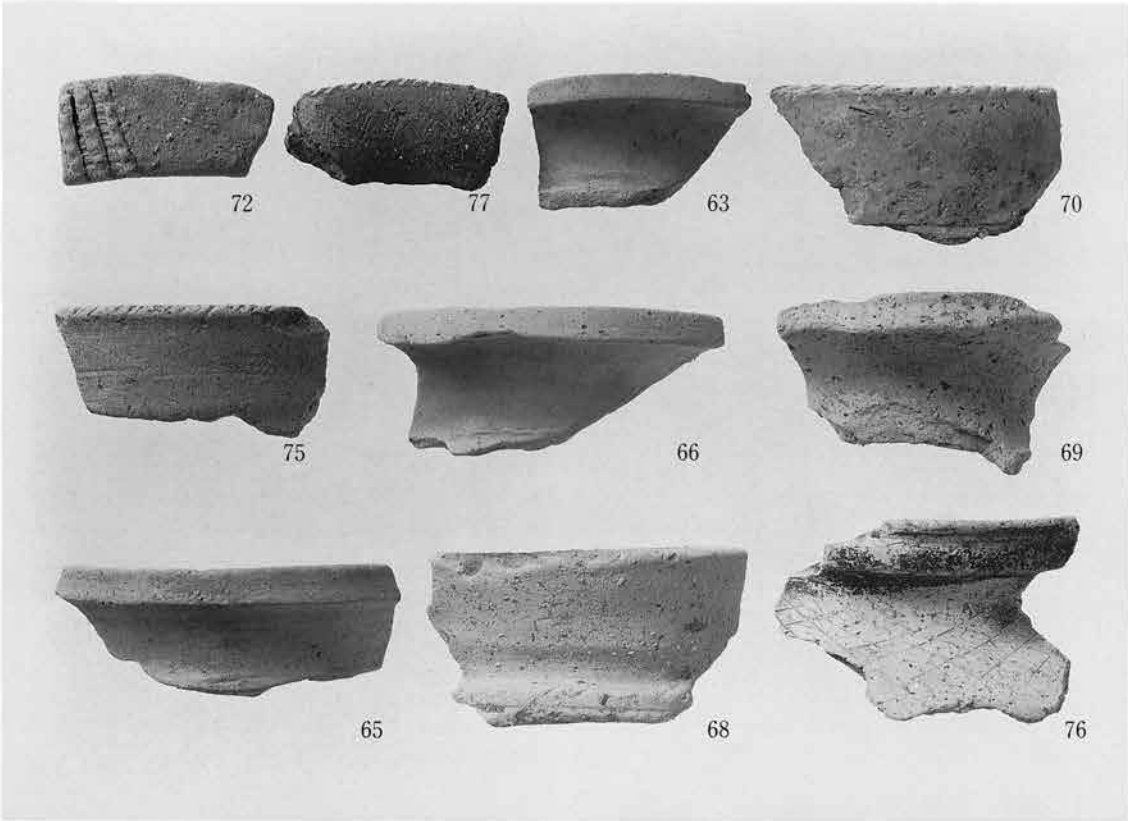
180

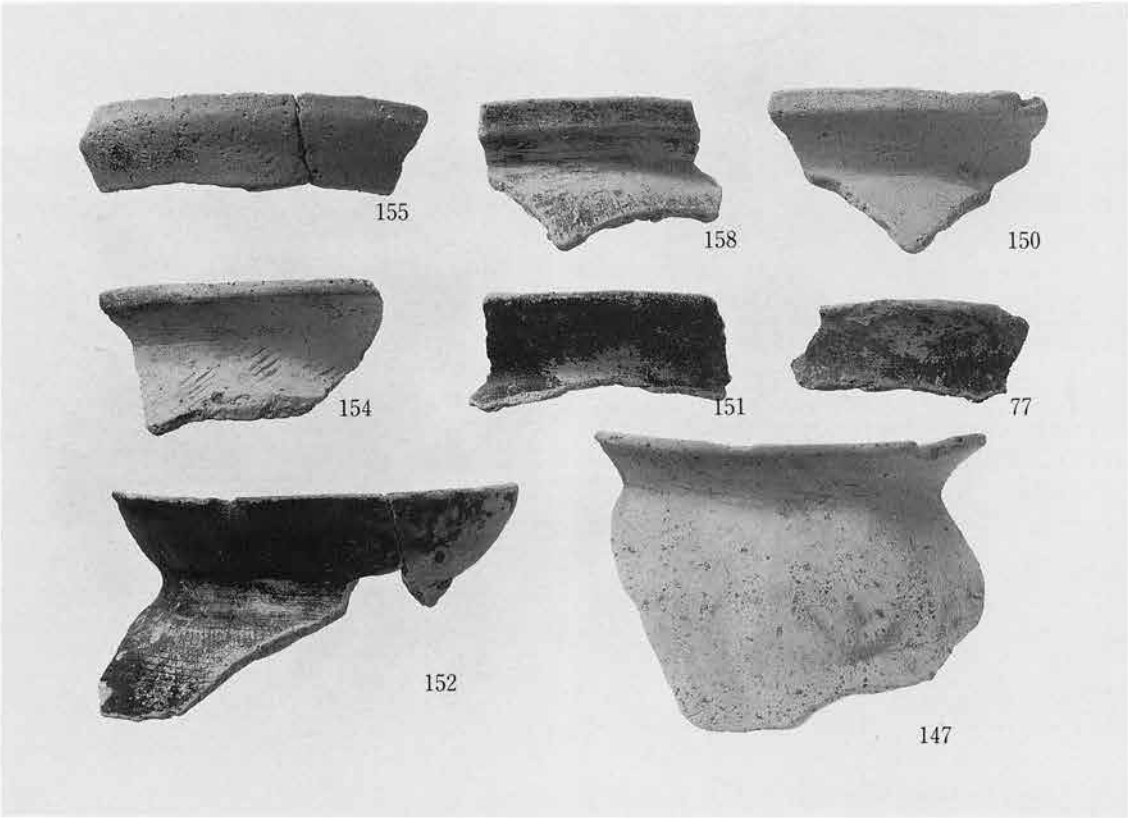
193


190

205

図版四六　出土遺物（第五五・五七図）



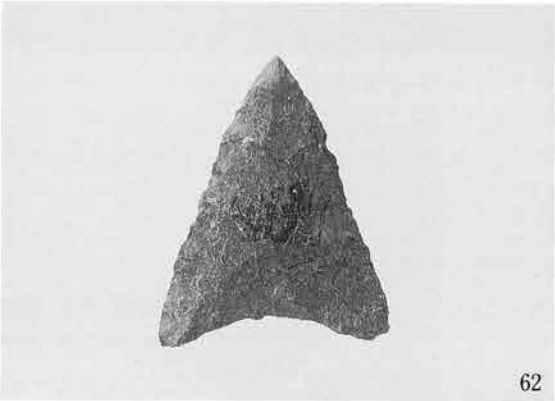


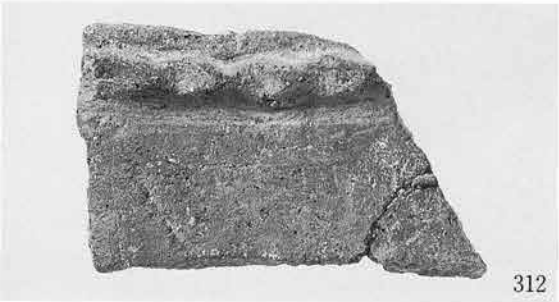
図版四七　出土遺物（第五四・五八・五九・八一図）

206

208

61

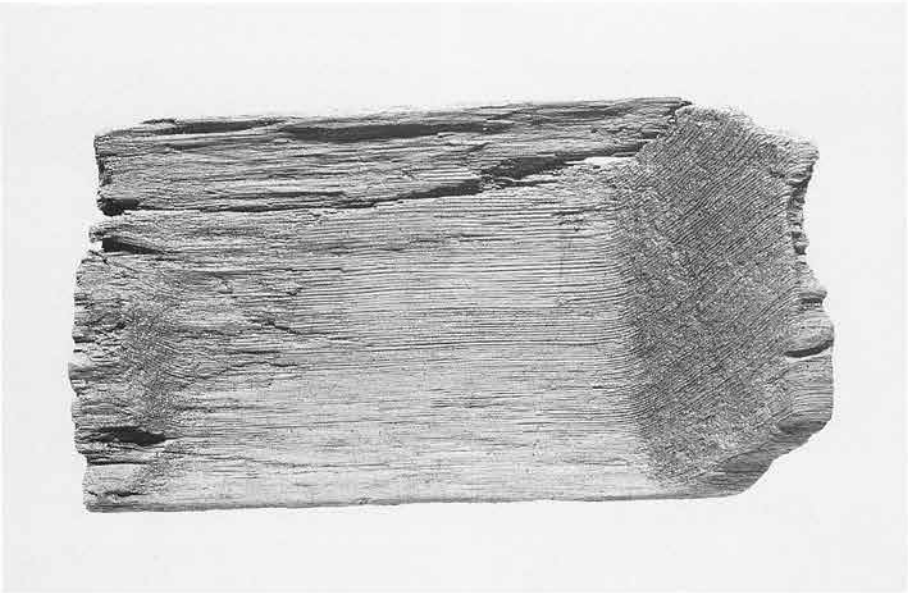

62

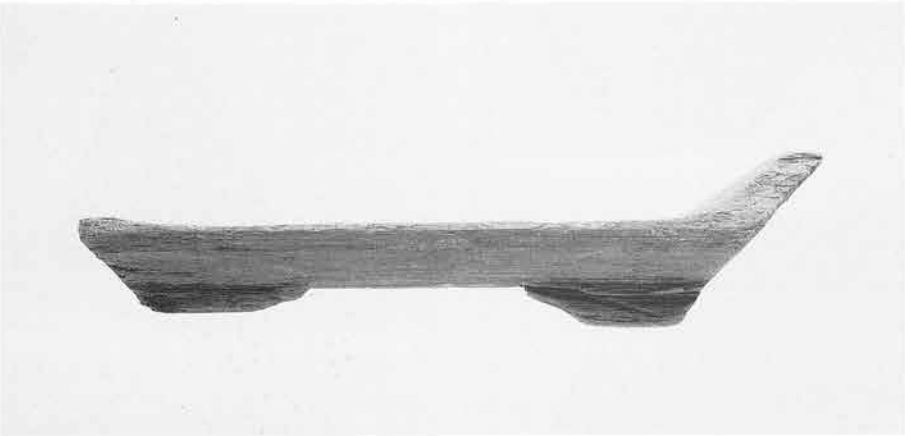

312

311

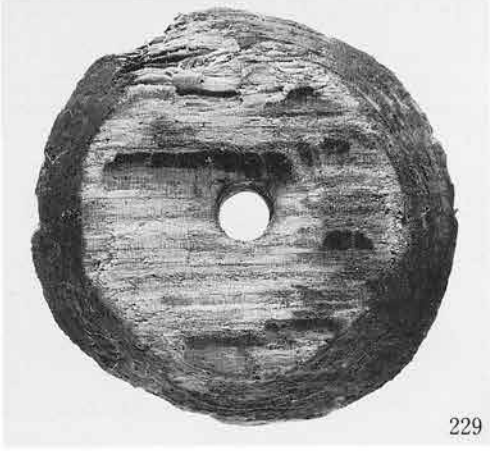
313

図版四八　出土遺物（第六〇図）

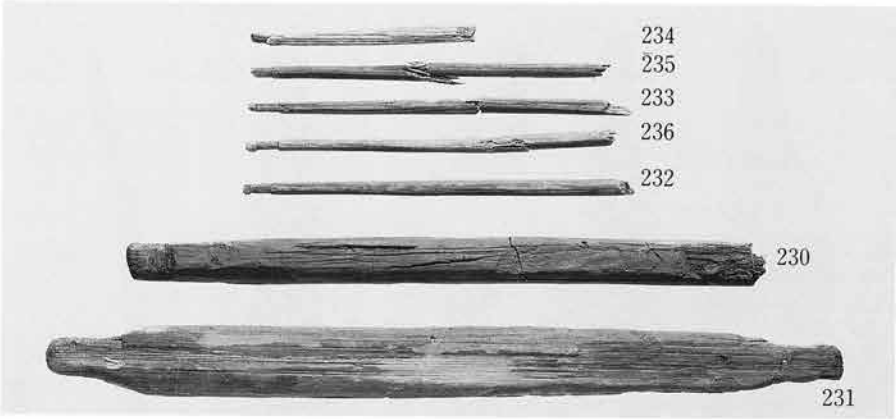


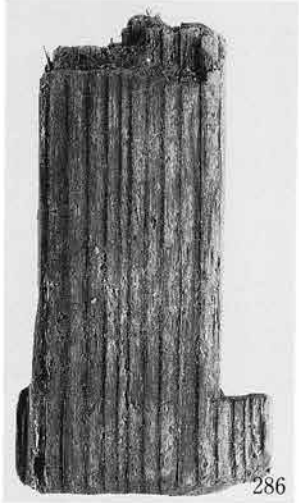


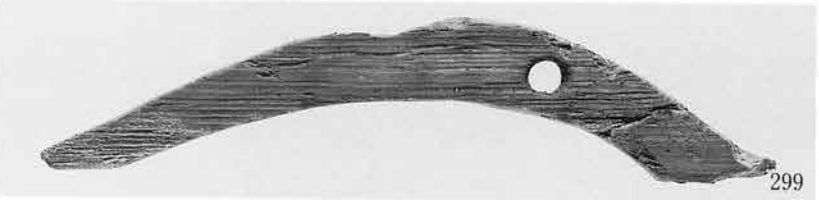
図版四九　出土遺物（第六一・六二・六三・六四図）

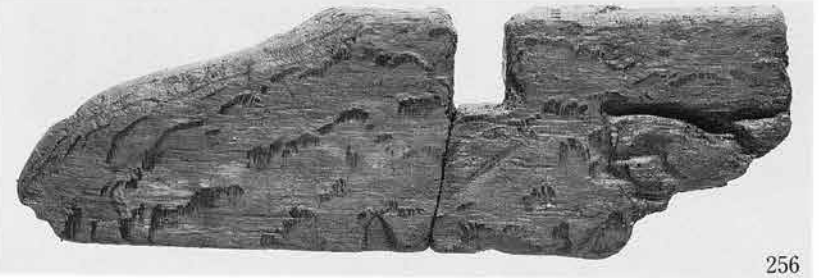


図版五〇　出土遺物（第六四・六九・七一・七八・七九図）

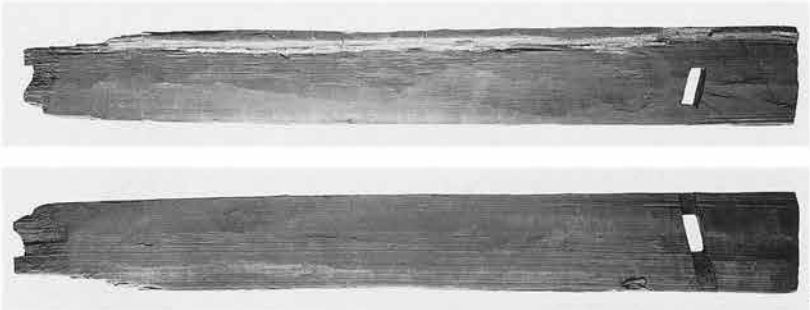




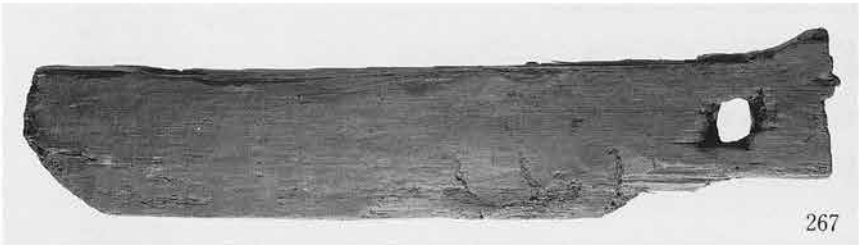




図版五一　出土遺物（第六七・六八・六九・七三・七六・七七図）



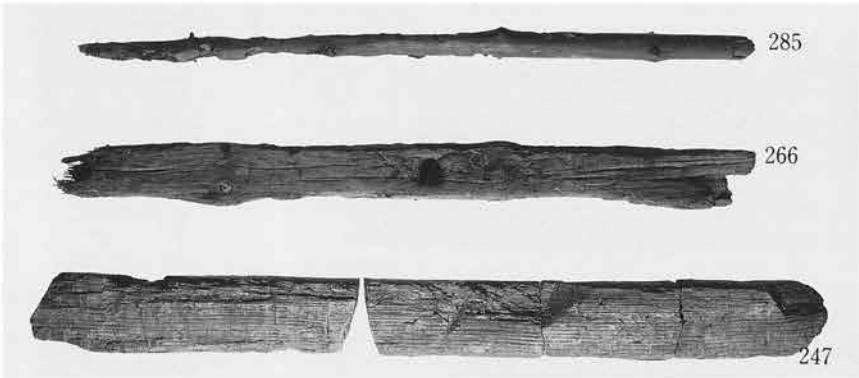
224



267

251

248

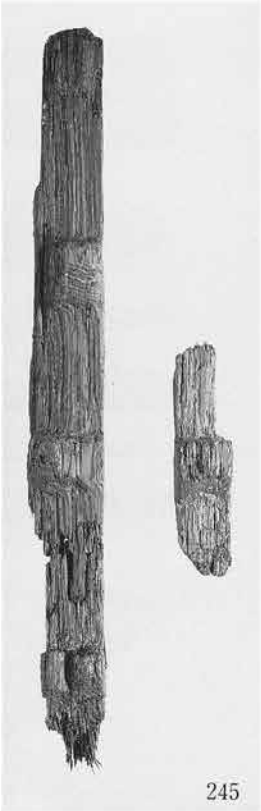


285

266

247

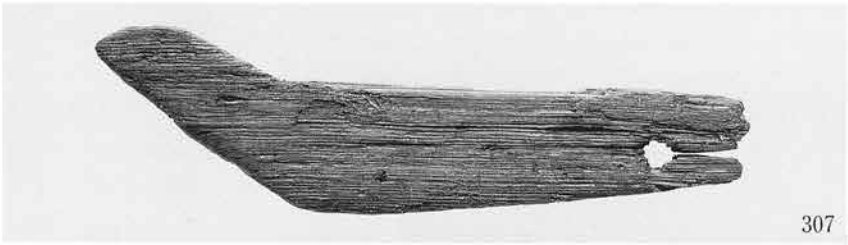
268

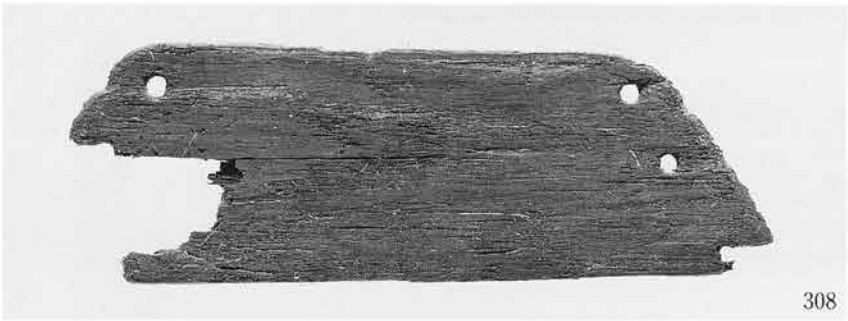


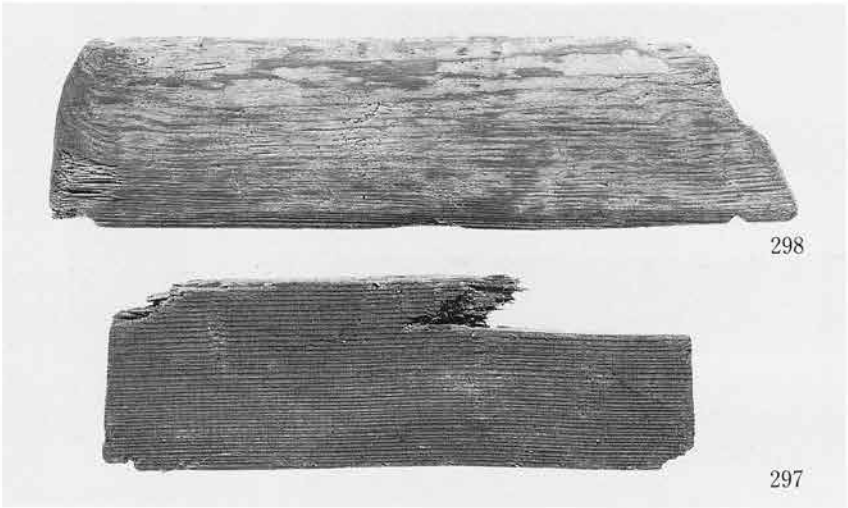
245

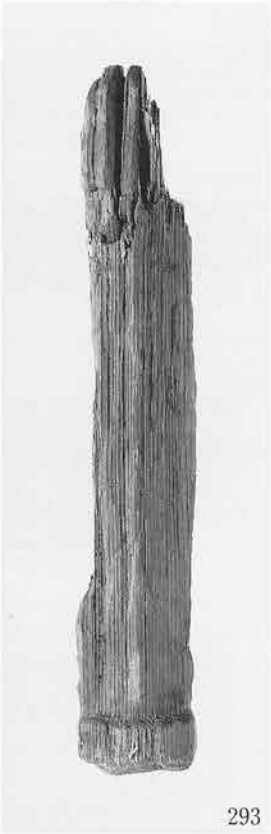
277

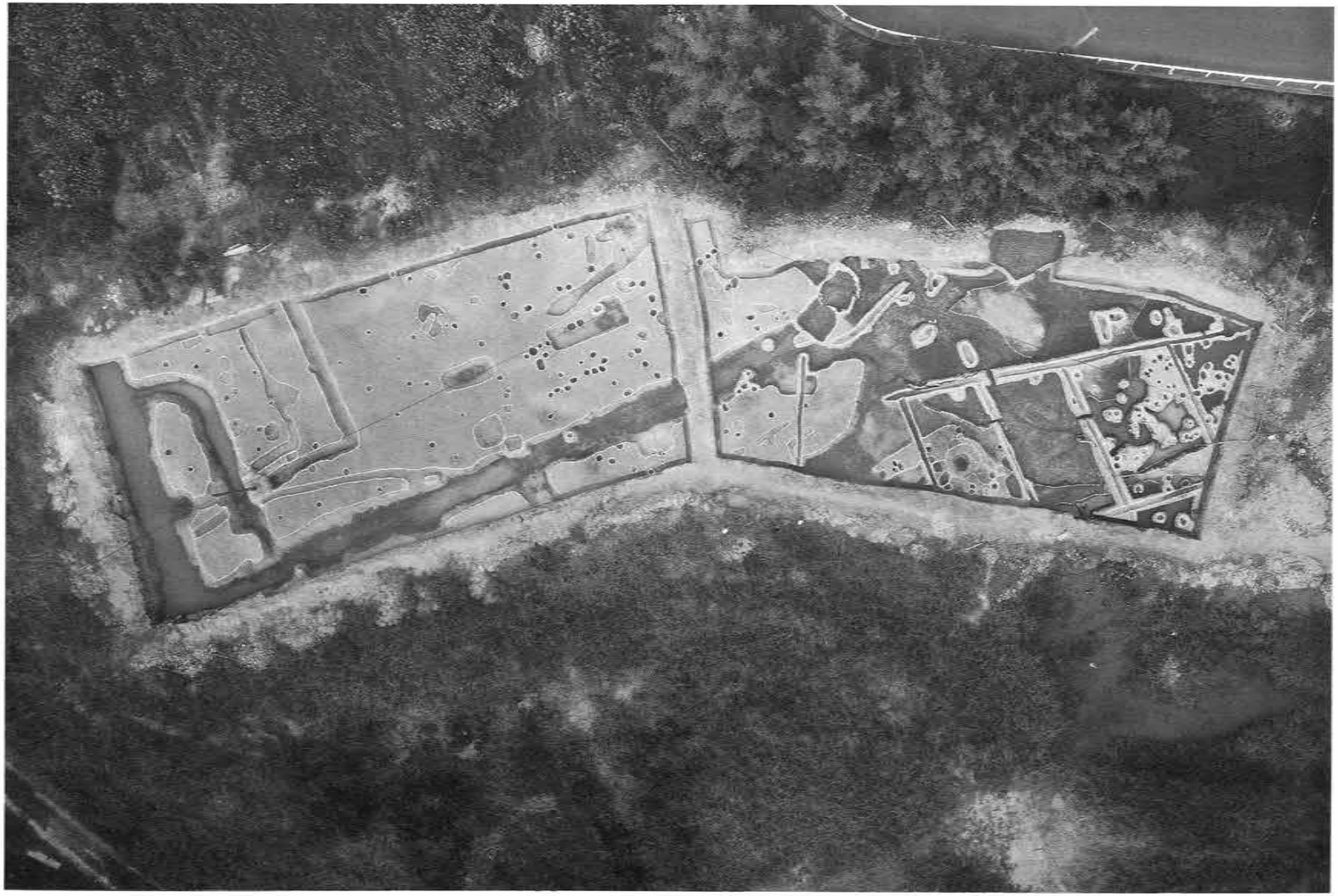
図版五二　出土遺物（第七一・七八・七九・八〇図）



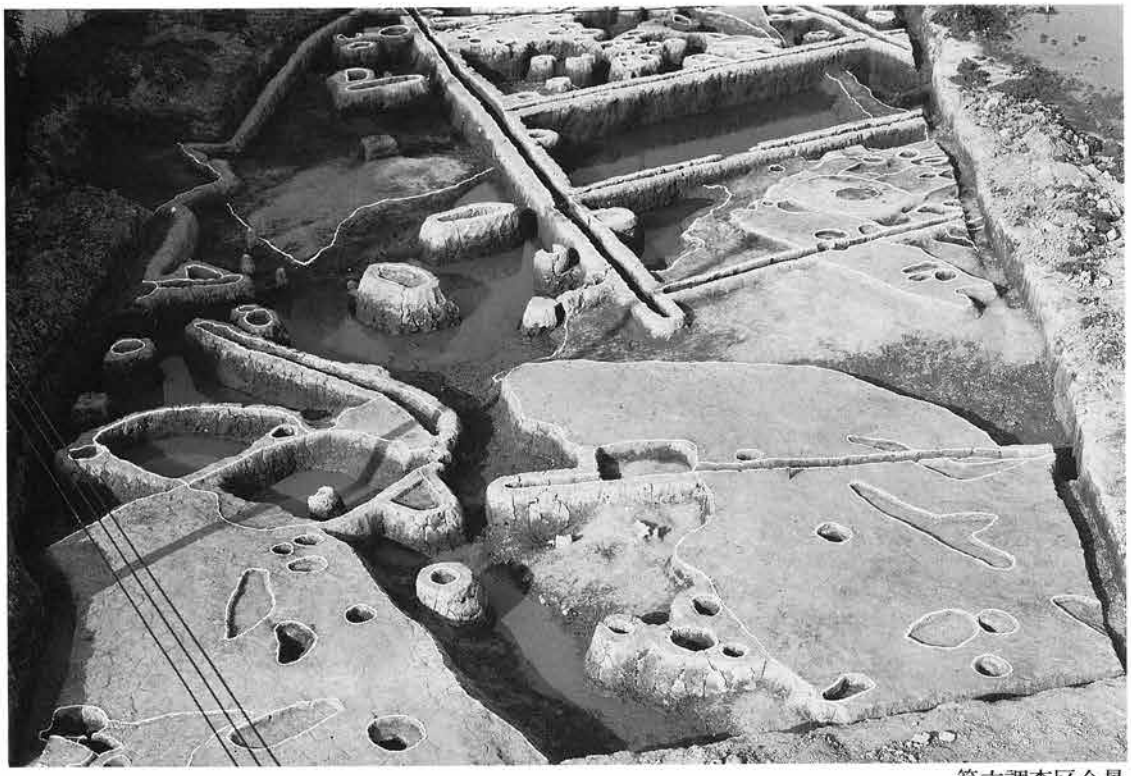




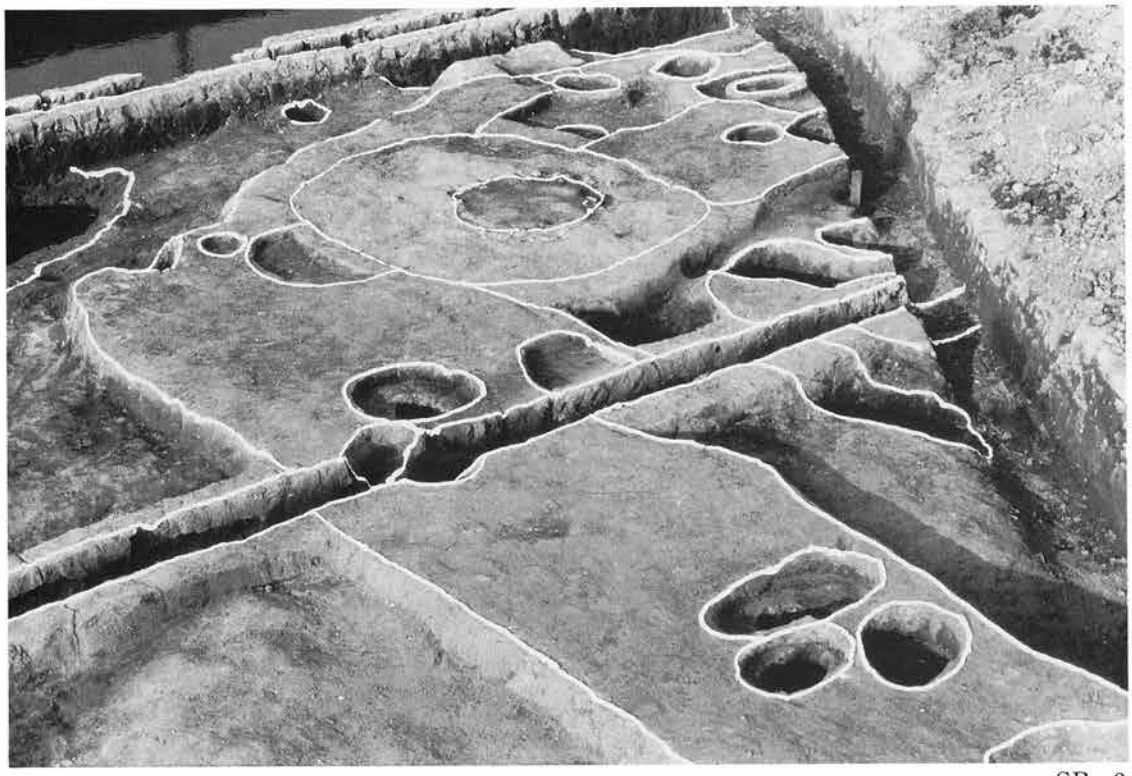




図版五三　第六・第七調査区全景



第六調査区全景



SB－2

SE－1 検出状況

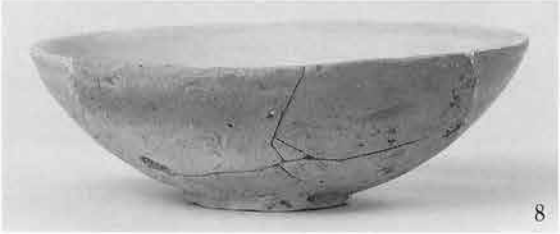
SE－1 遺物出土状況

SK－2 瓦器ミニチュア羽釜出土状況

SB－1 P－2 硯出土状況

図版五七　出土遺物（第八七・八八・八九・九一図）

2


8

11

17

7

11

30

14

16

19

16

13

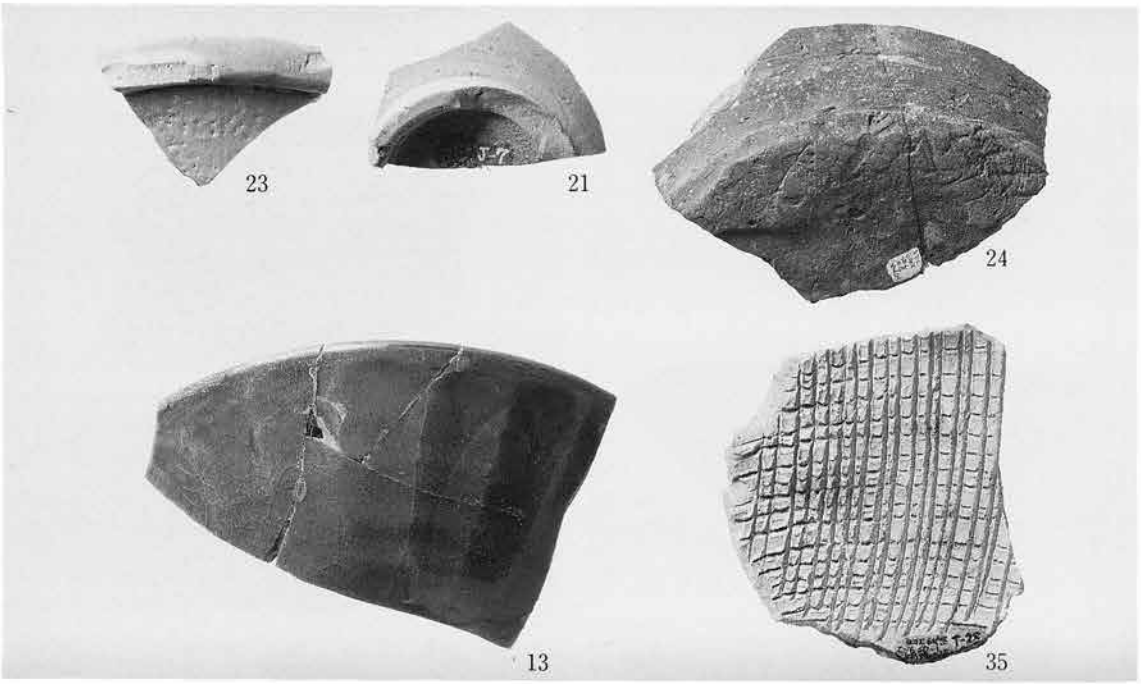
図版五八　出土遺物（第八七・八八・八九・九〇・九一図）

17

2

15

3


23

21

24

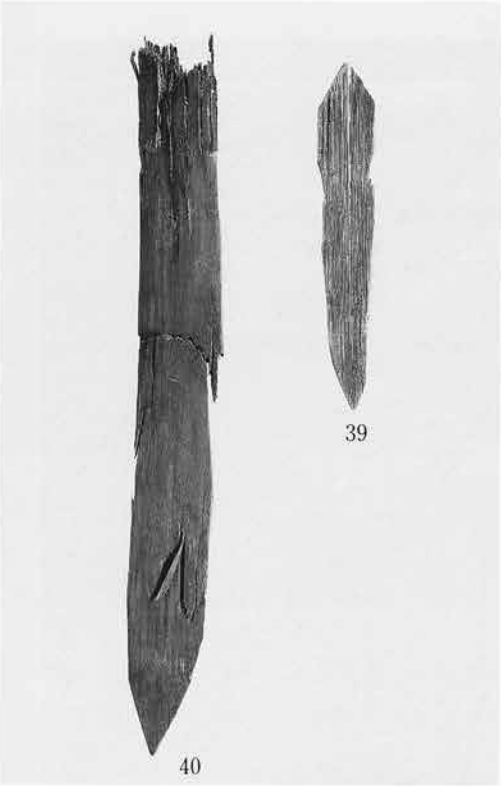
13

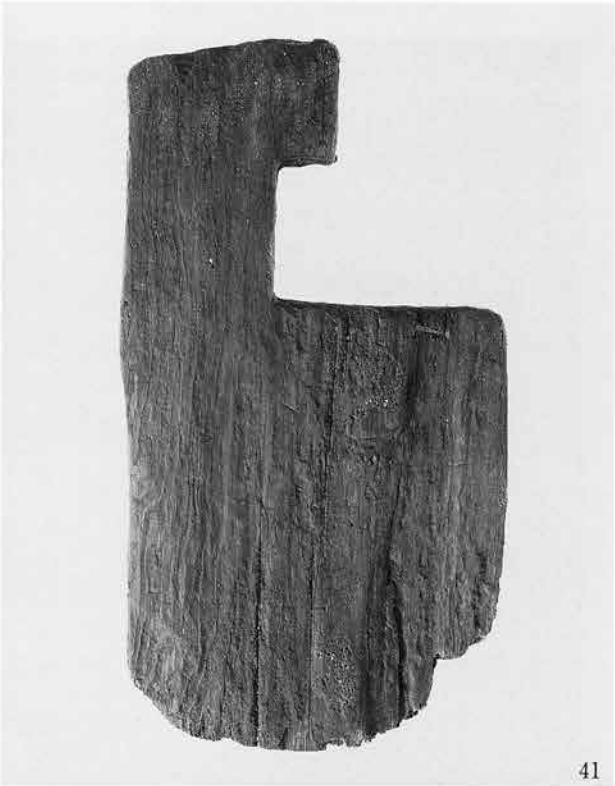
35

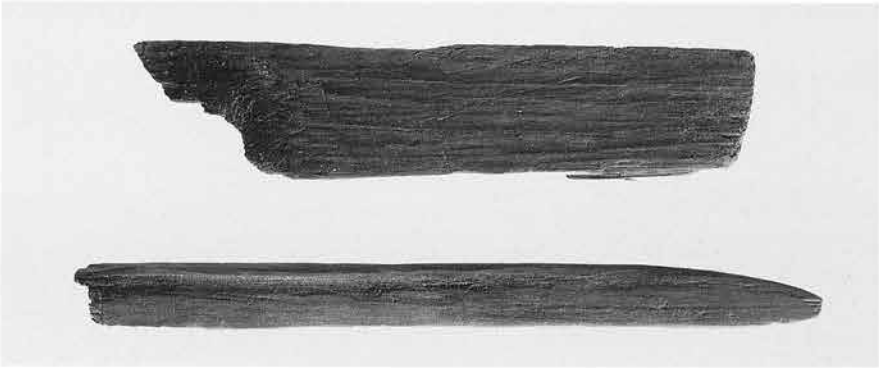
9

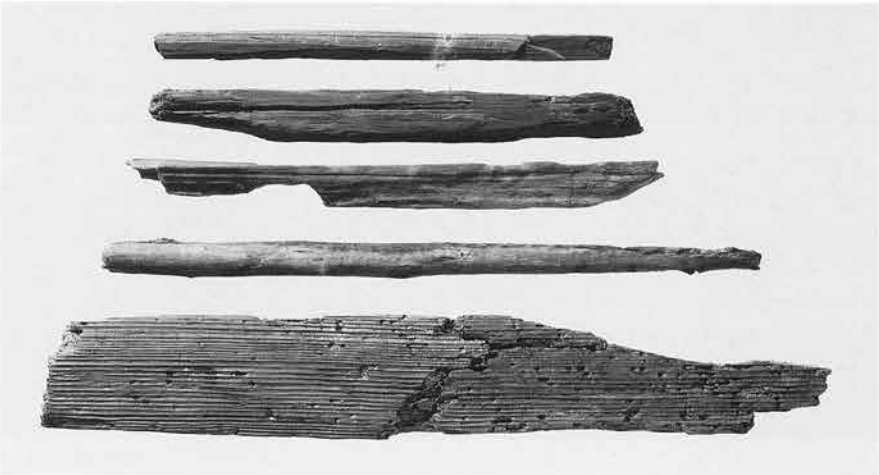
14

図版五九　出土遺物（第八九図）



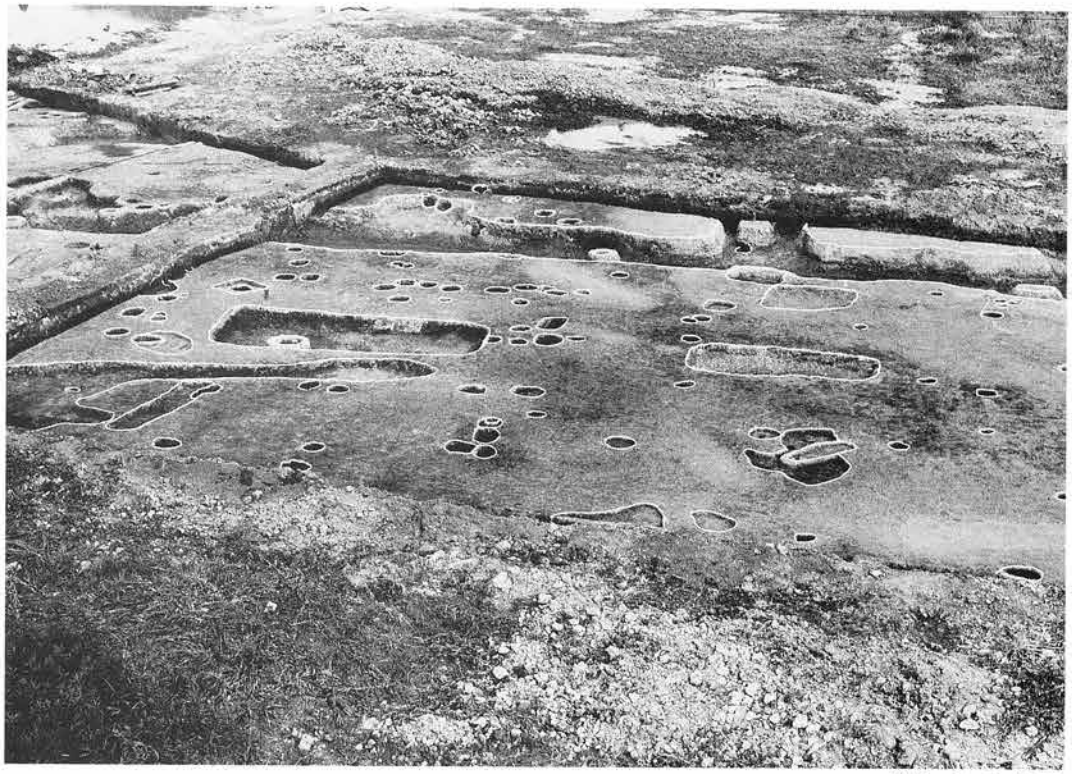






第七調査区（南より）

第七調査区（西より）



SB−1・2 全景

SB−1 全景

SB－6 全景

SB－2 全景

白磁水滴出土状況

常滑甕出土状況

図版六四　出土遺物（第一〇〇・一〇一図）

61

57

66

63

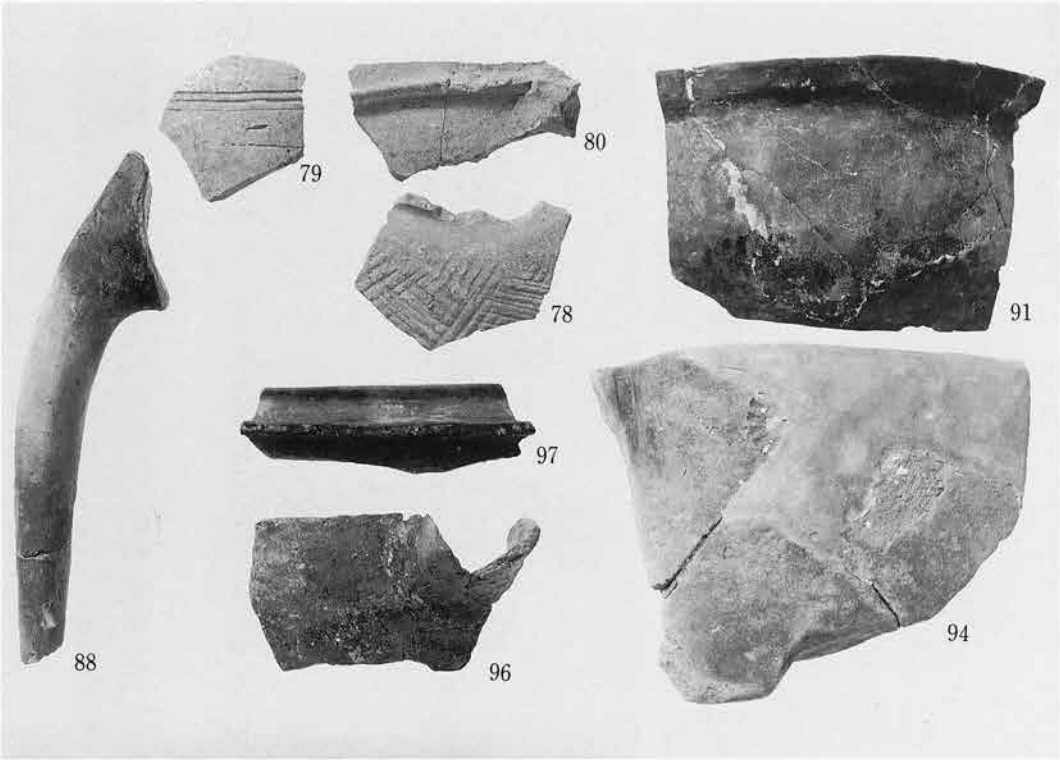
73

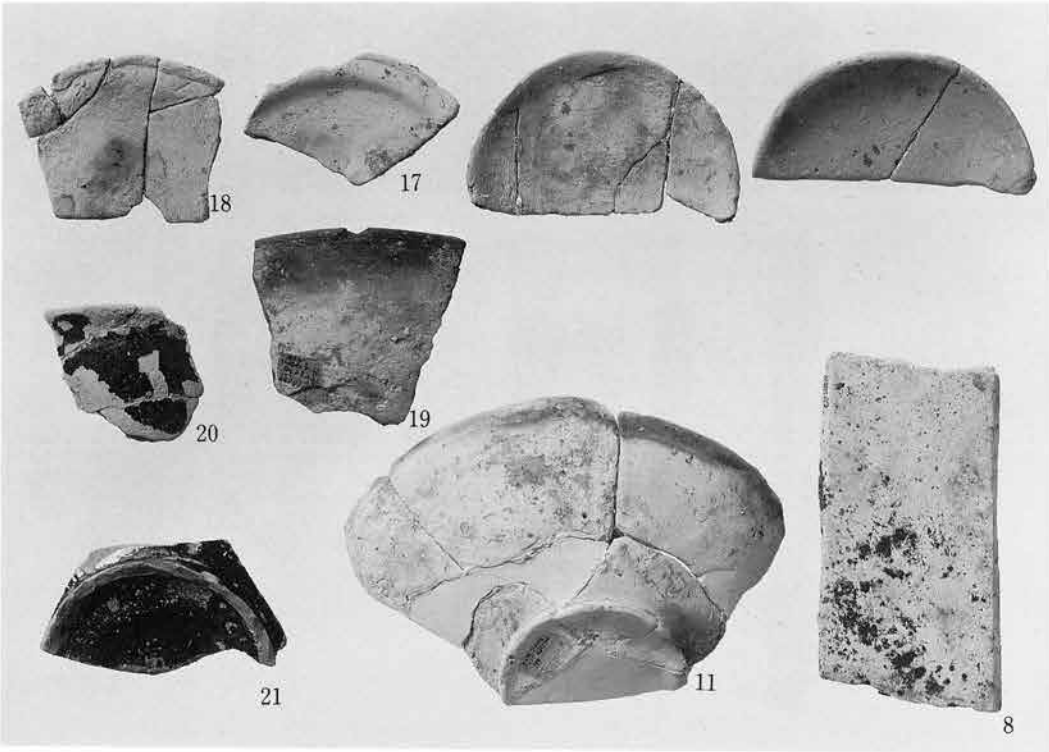
102

98

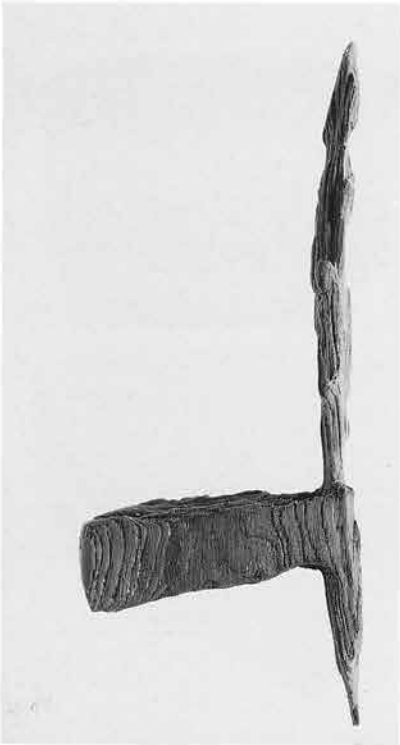
101

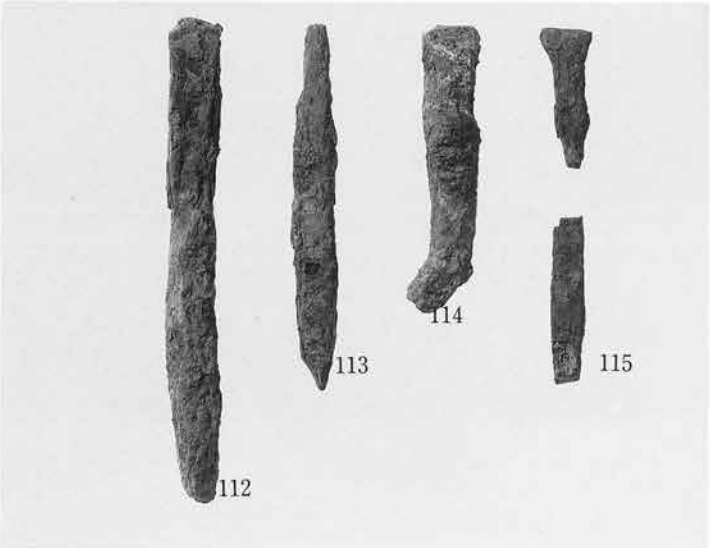
図版六五　出土遺物（第九九・一〇五図）

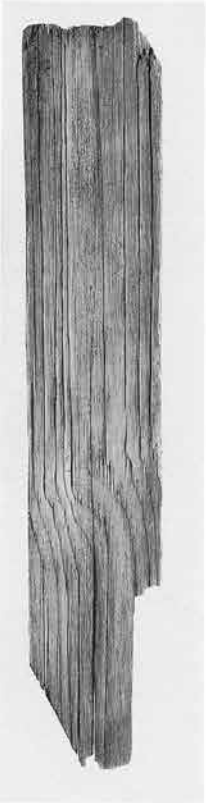




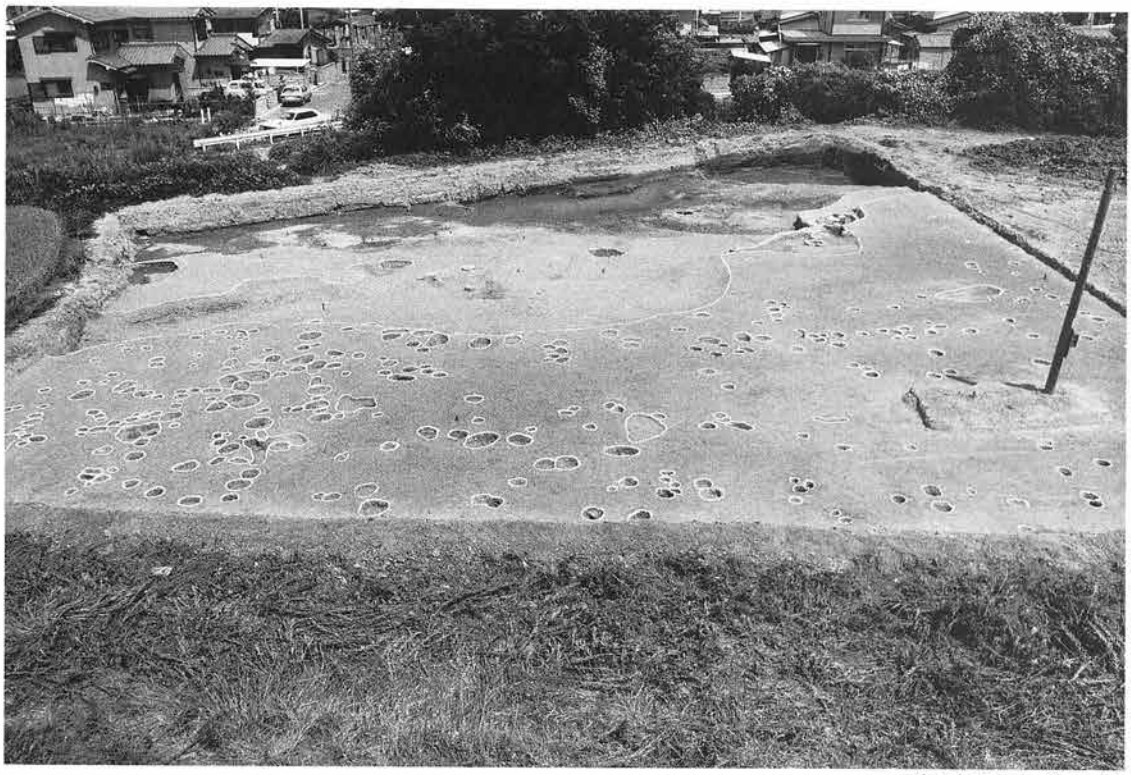
図版六六　出土遺物（第一〇二・一〇四図）





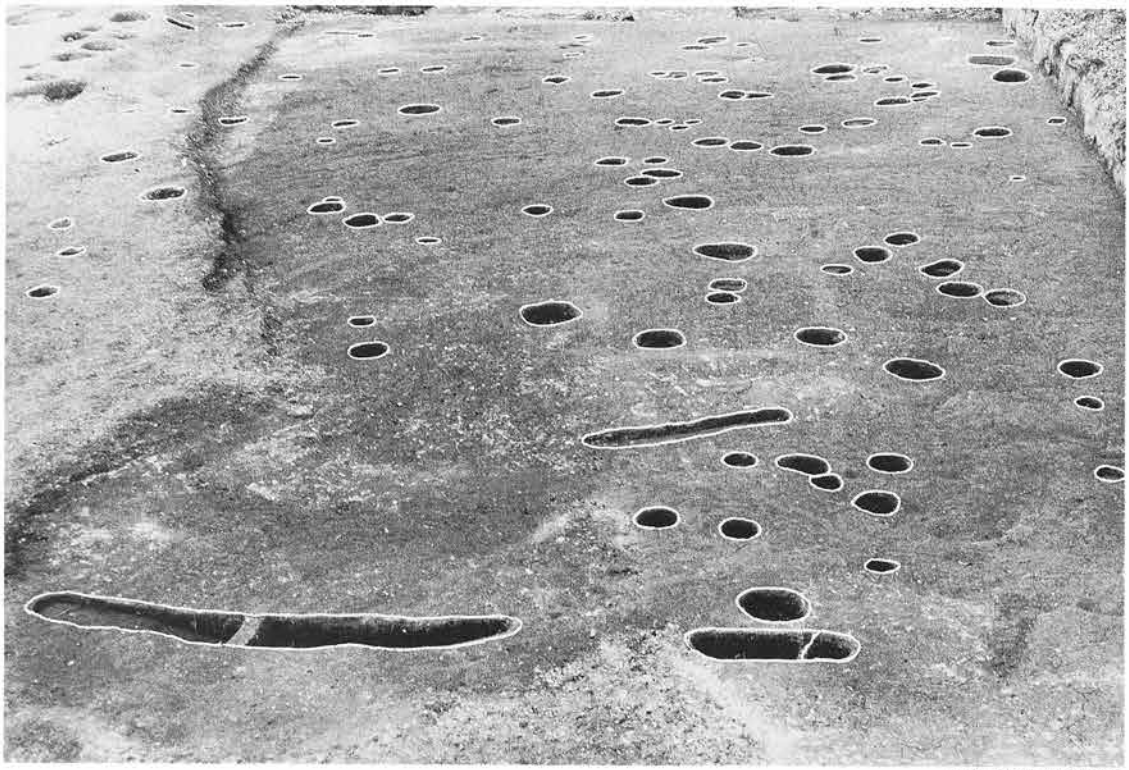


図版六七　第八調査区全景

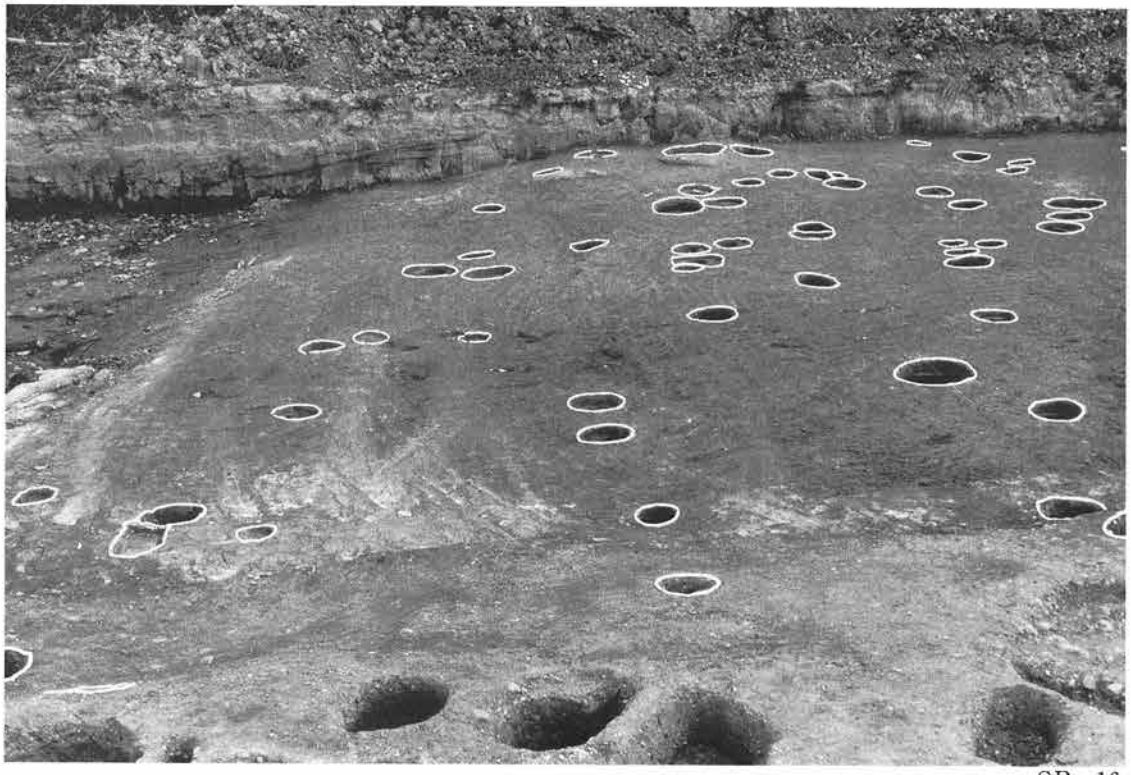


第八調査区西側全景

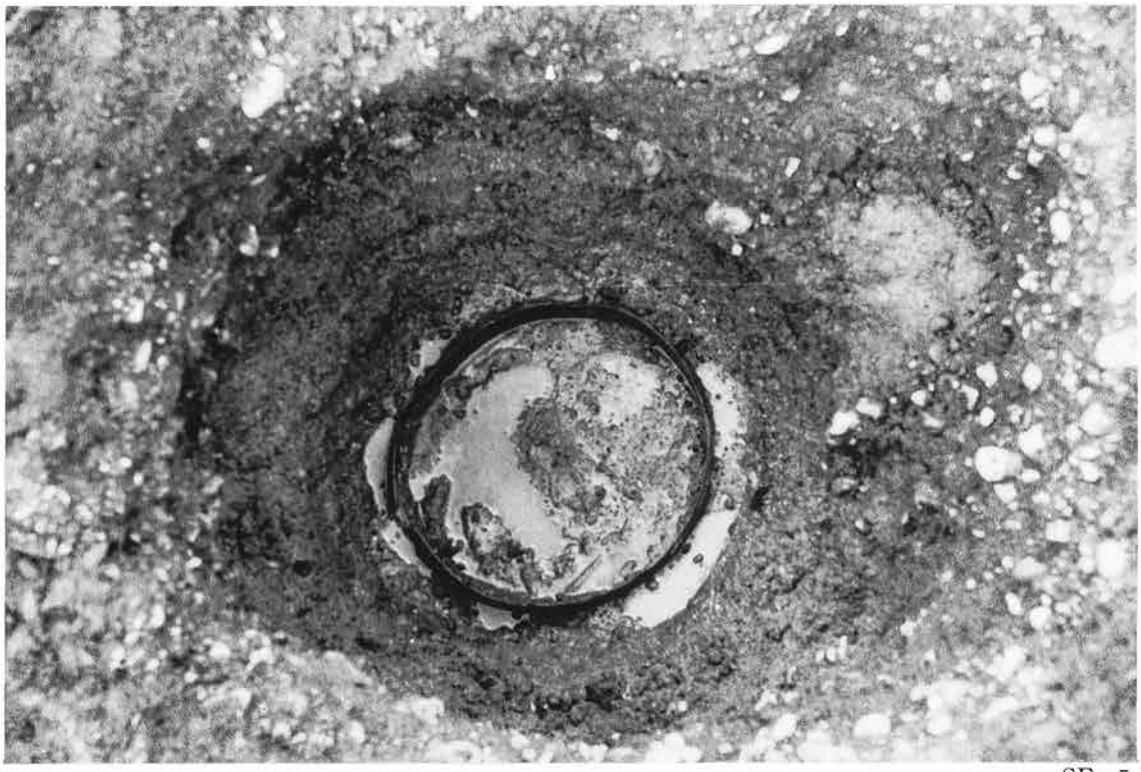
旧河道



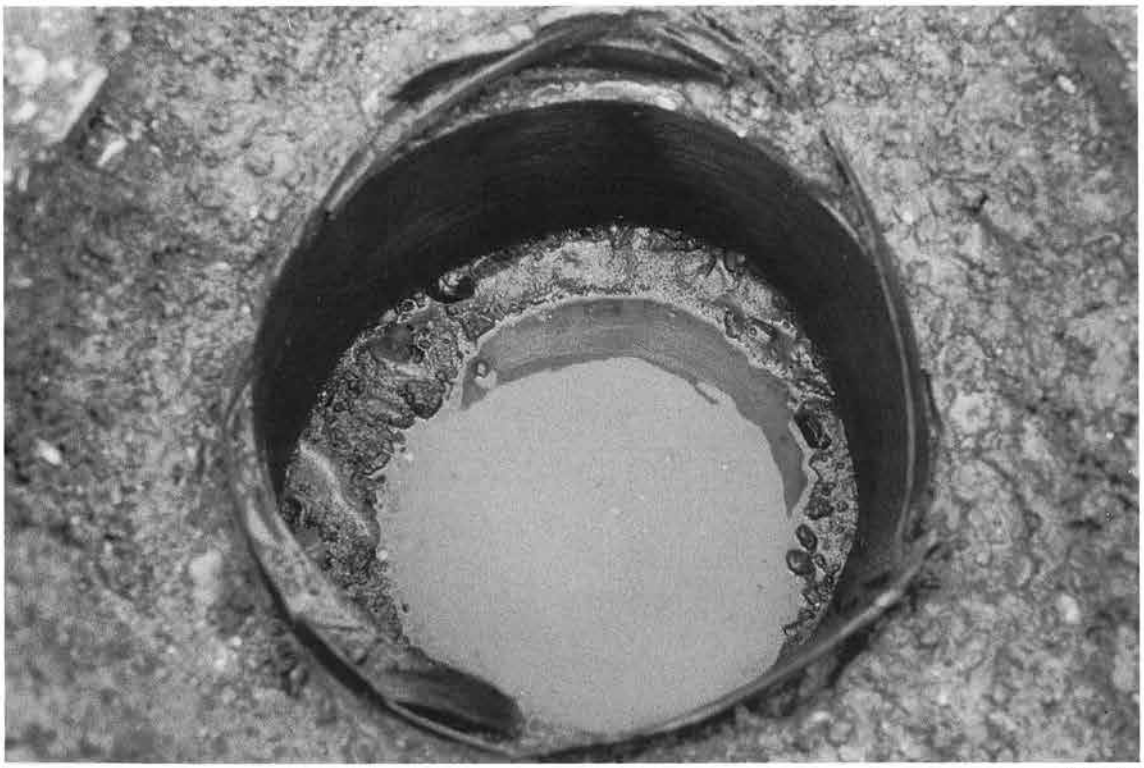
旧河道上建物群



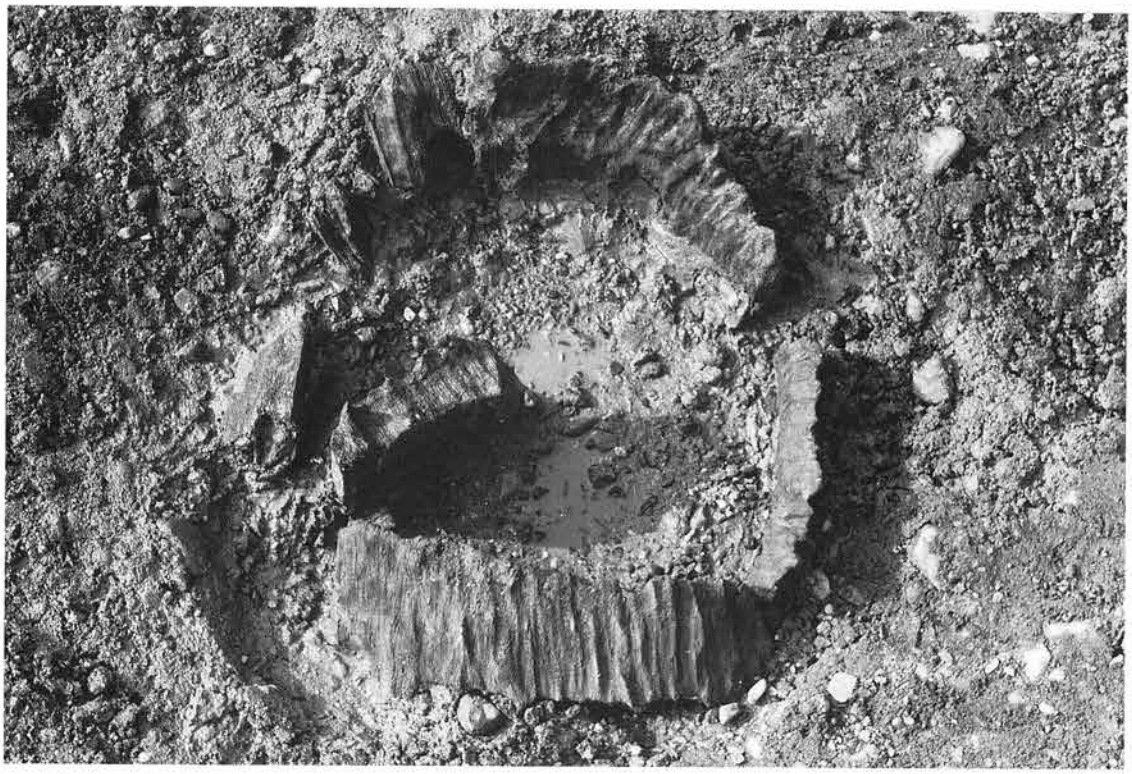
SB－16



SE－5

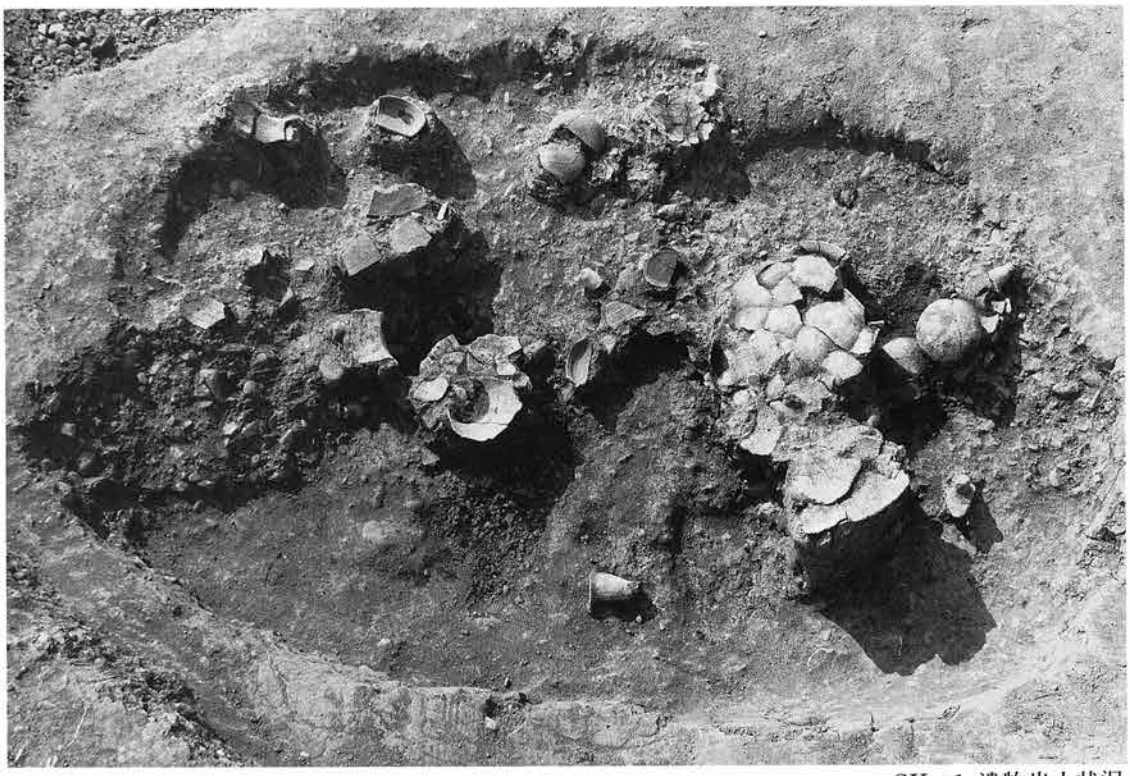


SE－6

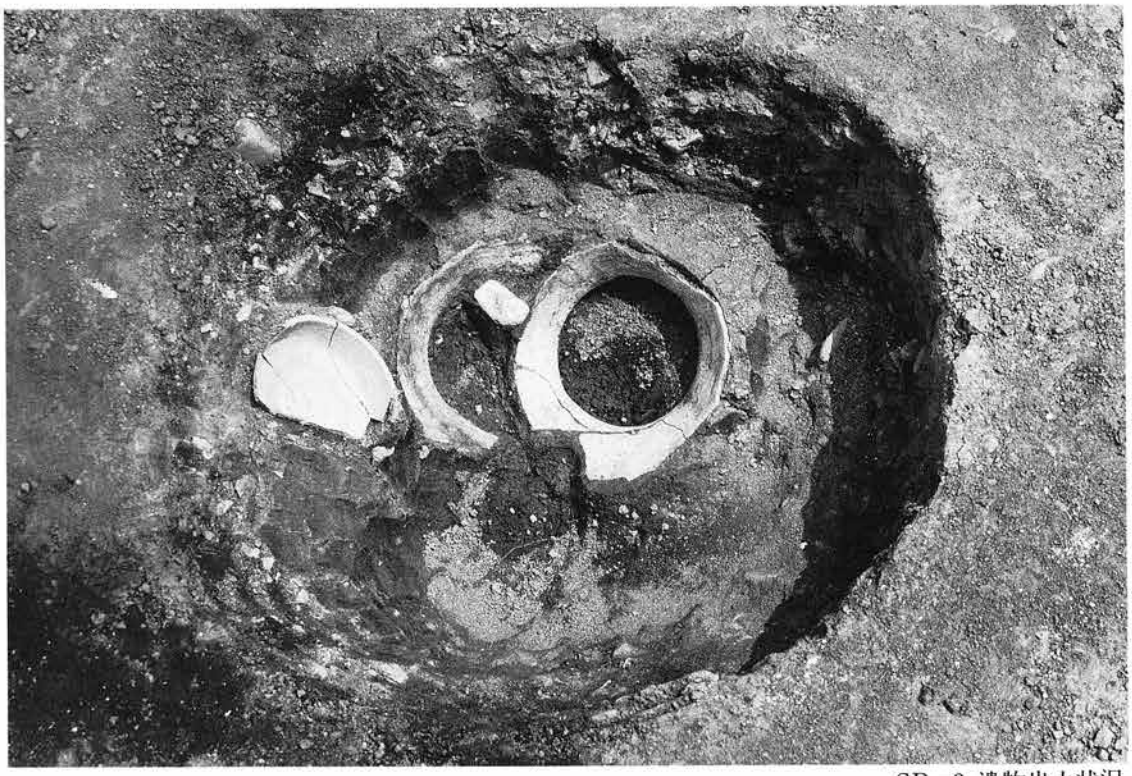


SE−2

SE−1



SK－1 遺物出土状況

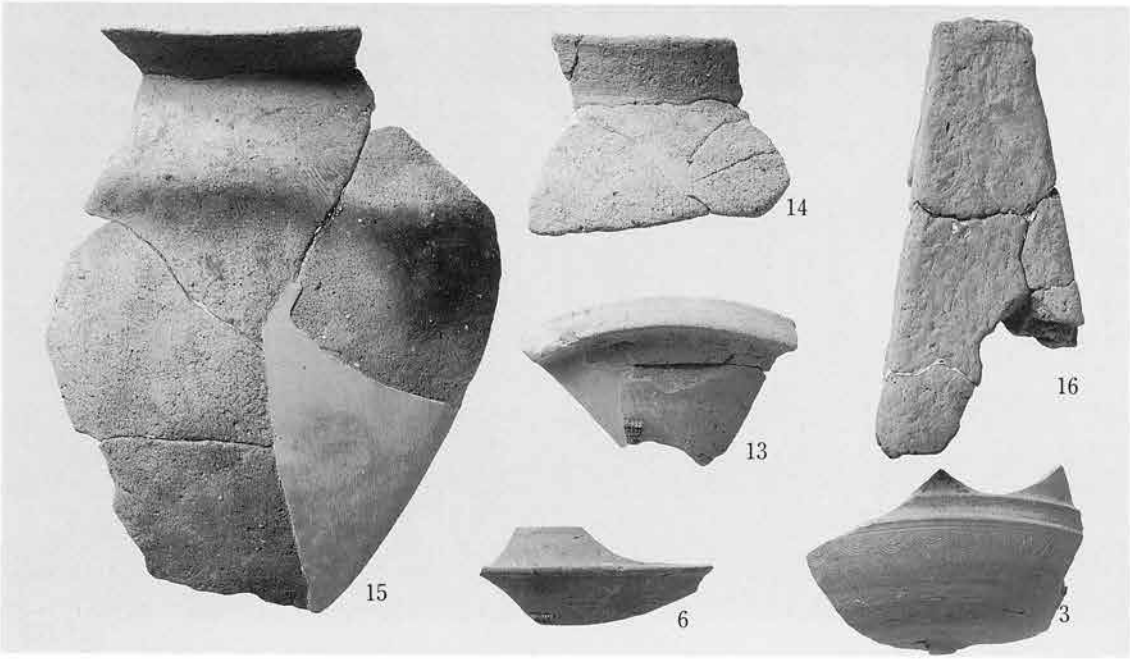


SP－3 遺物出土状況

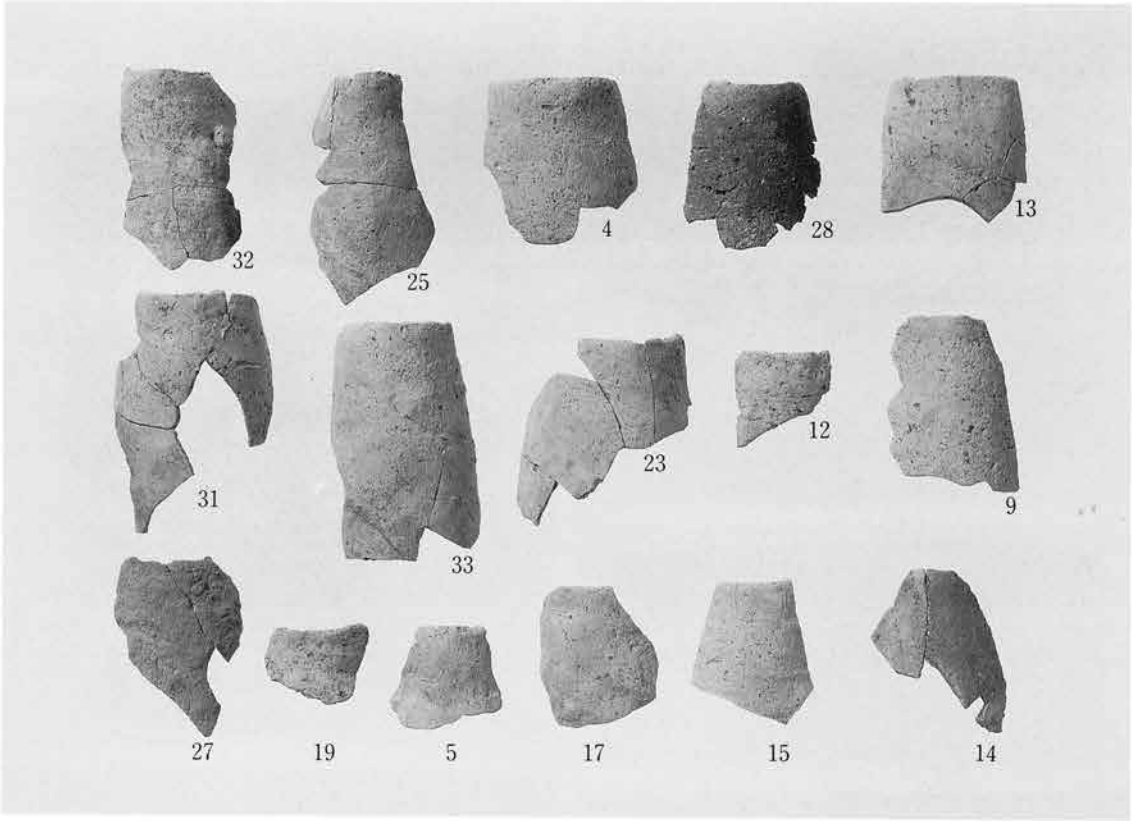
出土状況

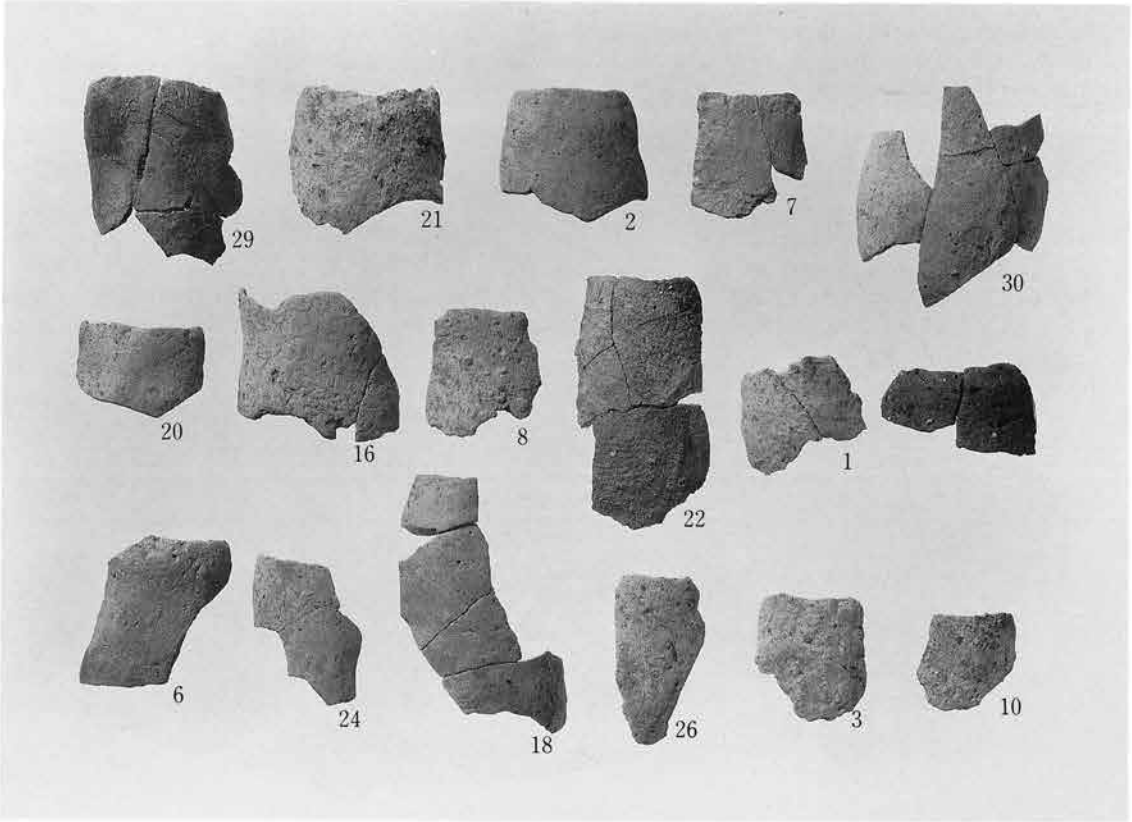
出土状況

図版七四　出土遺物（第一一〇・一一二図）

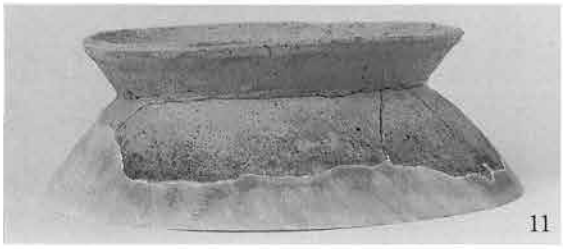


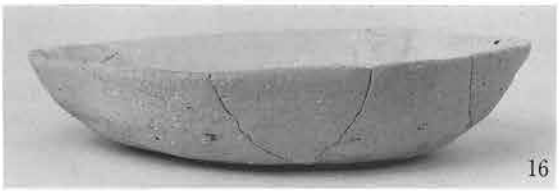
図版七五　出土遺物（第一一一図）

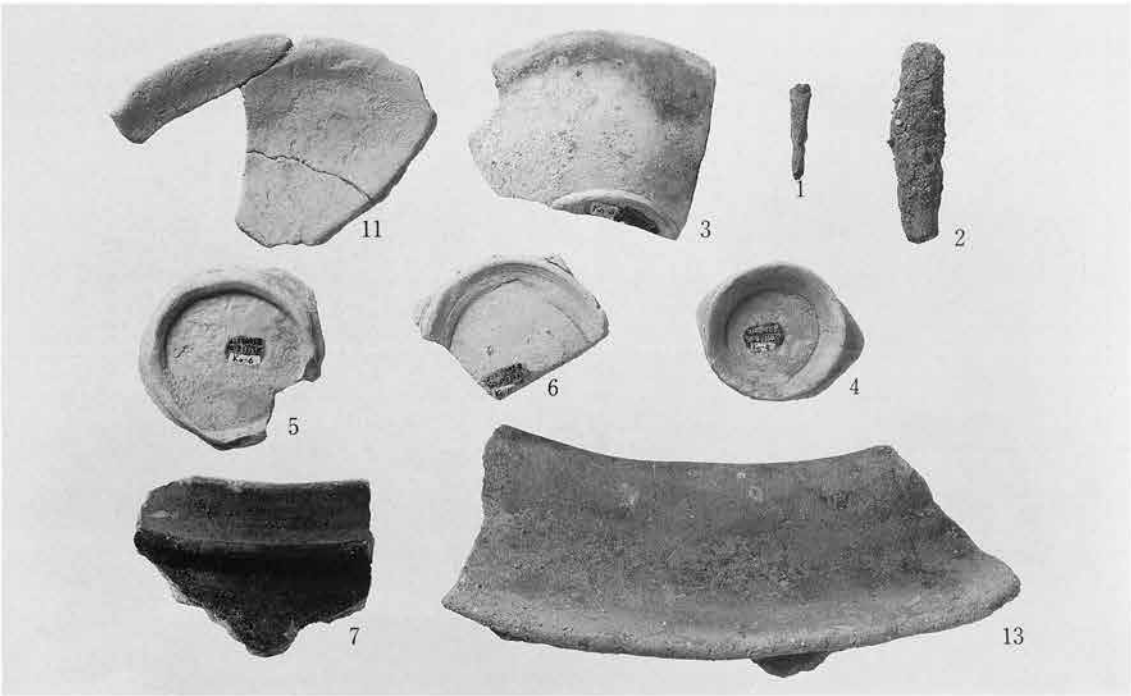




図版七六　出土遺物（第一一二・一一五図）



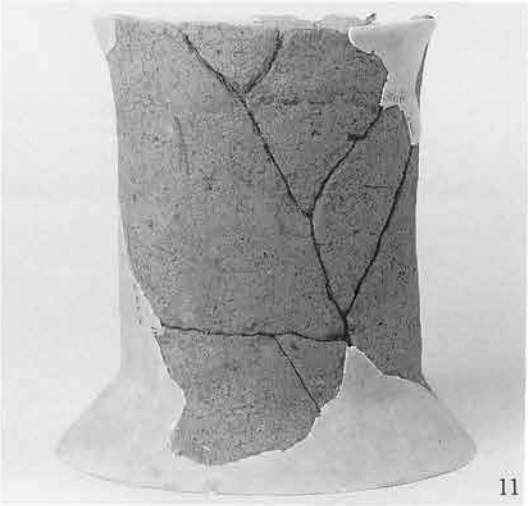




10

2

5


11

23

13

15

図版七八　出土遺物（第一一七・一一八・一一九図）

32

39

57

25

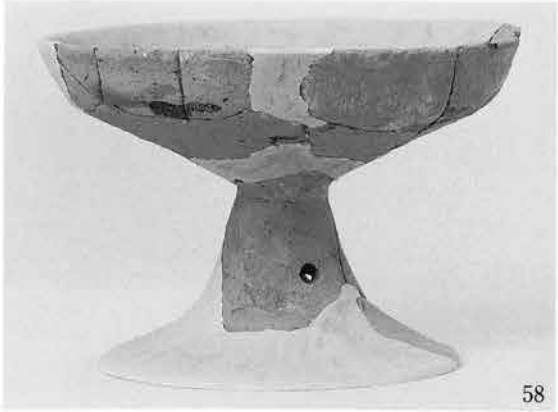
52

67

82

図版七九　出土遺物（第一一八・一一九・一二〇・一二五図）

66


58

59

60

242

92

111

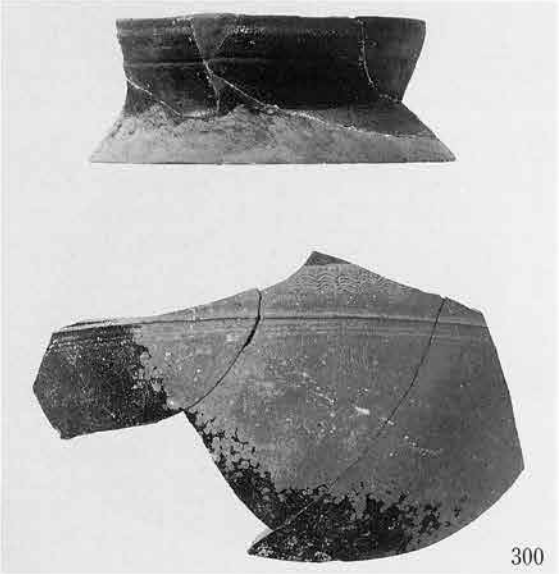
図版八〇　出土遺物（第一二〇・一二一・一二六・一二七図）

137

138

139

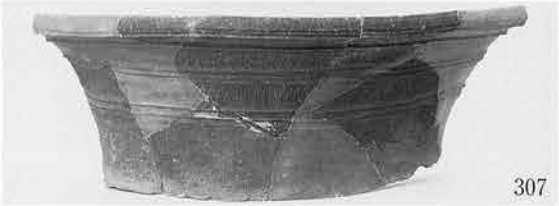
298


300

102

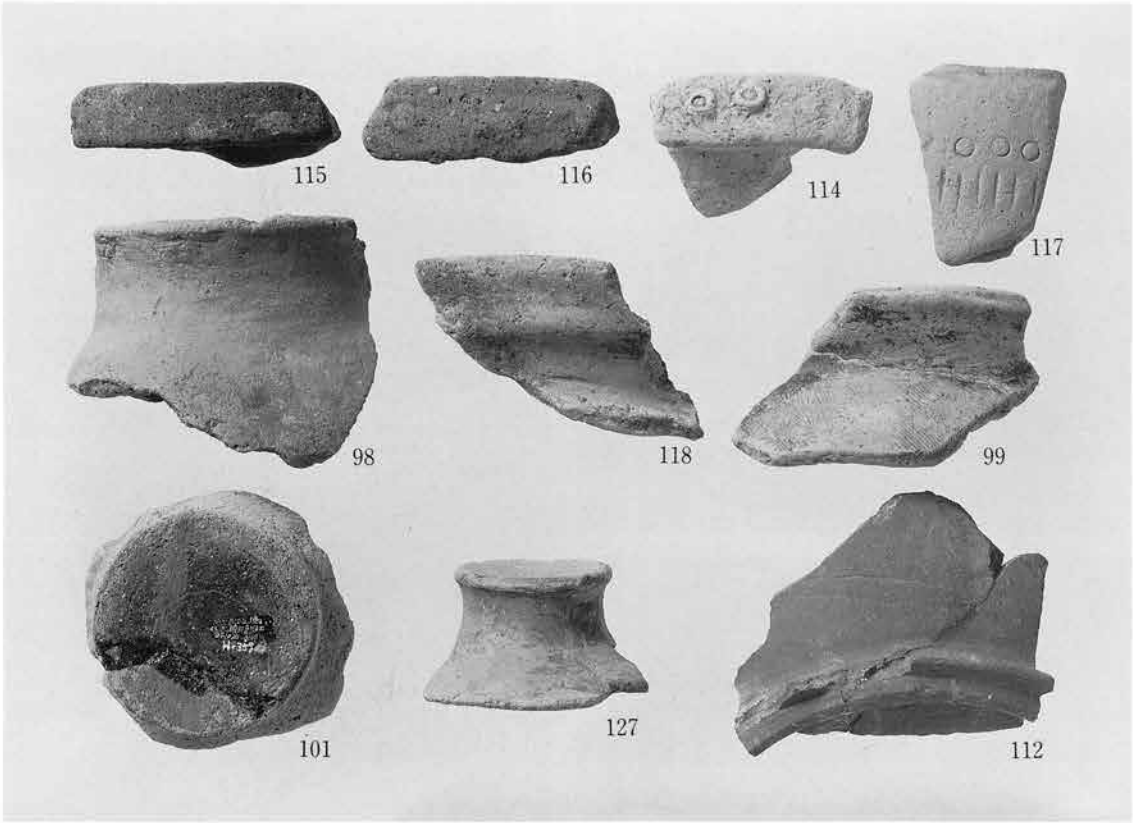
110

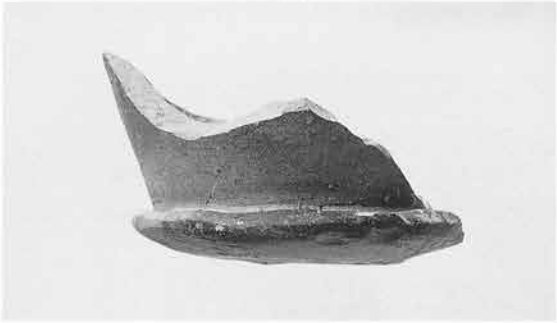
113


307

301

図版八一　出土遺物（第一二〇・一二一図）





図版八二　出土遺物（第一二二・一二三・一二四図）

145

184

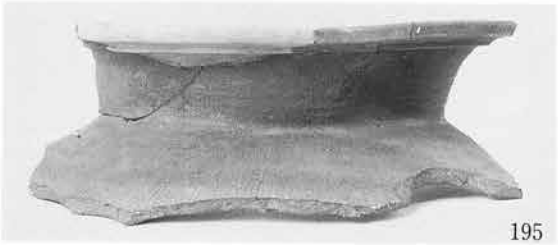
233

187

188

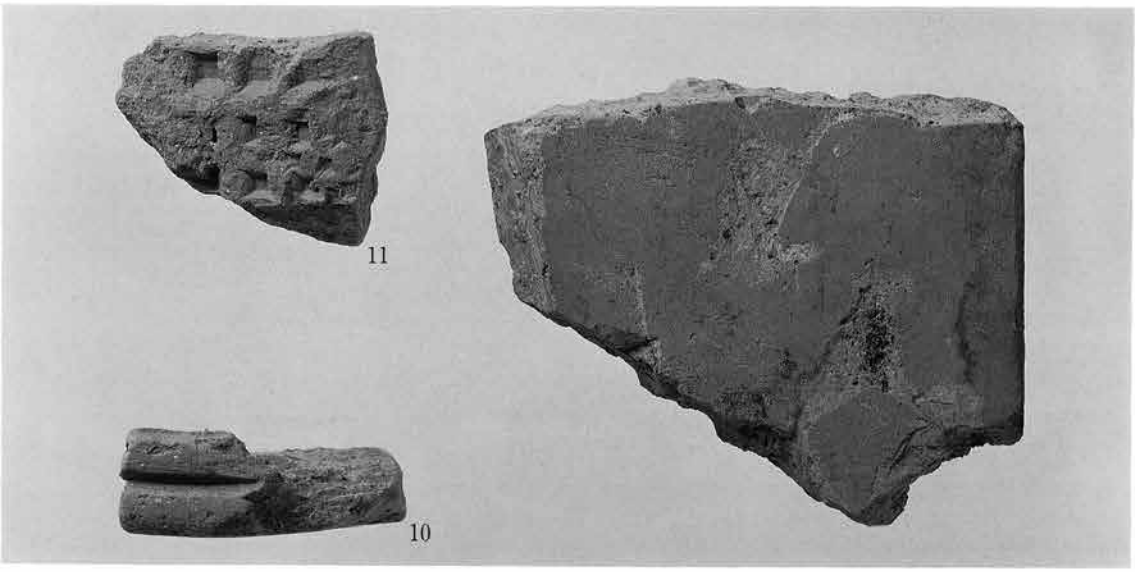
200

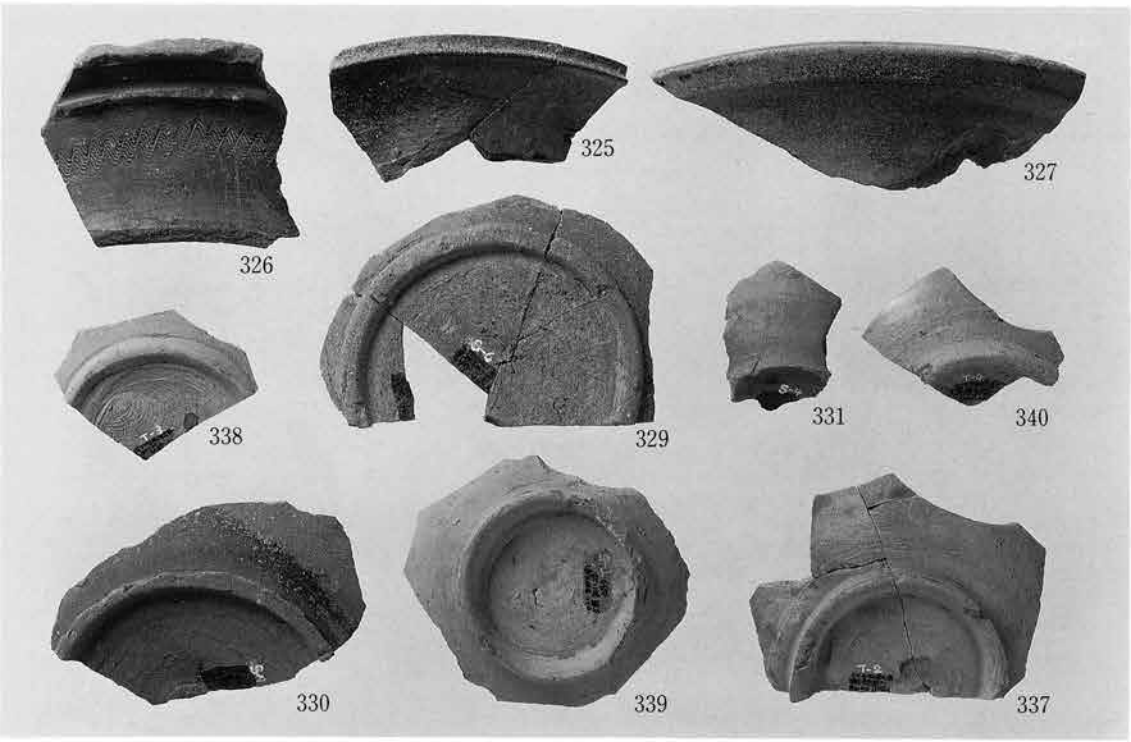
209


195

336

341


11
10


326
325
327
338
329
331
340
330
339
337

図版八四　出土遺物（第一二九・一三〇図）

2

4

5

3

8

9

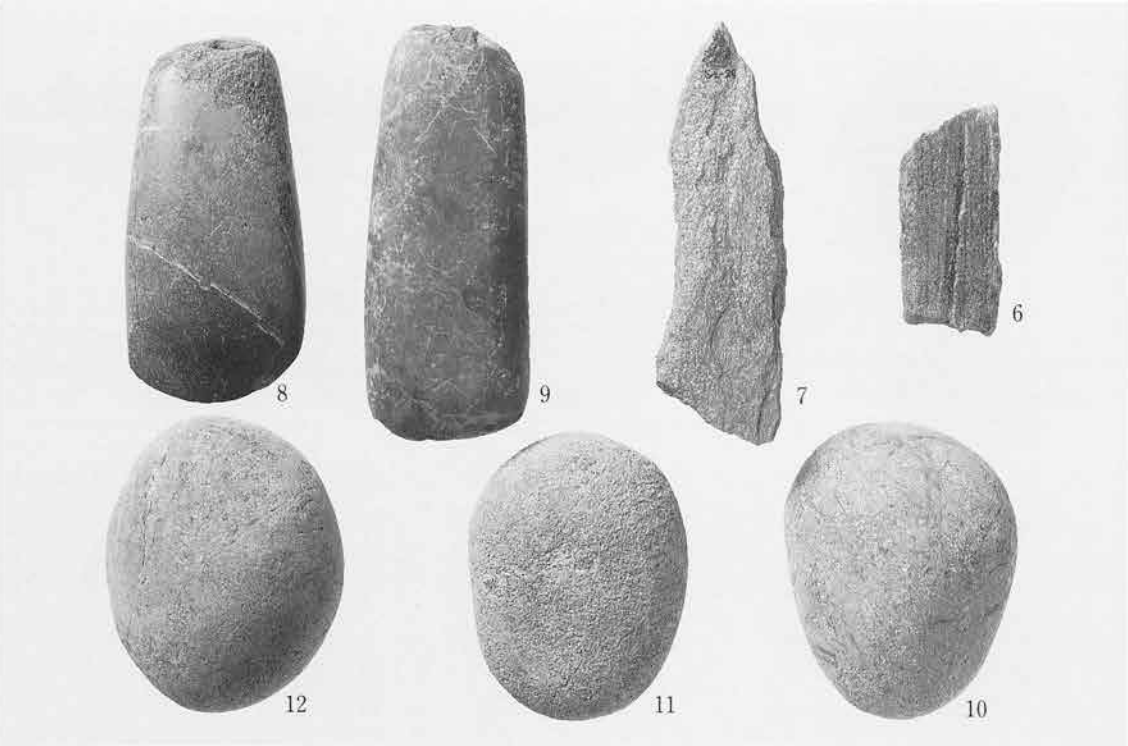
3

1

1

2

14

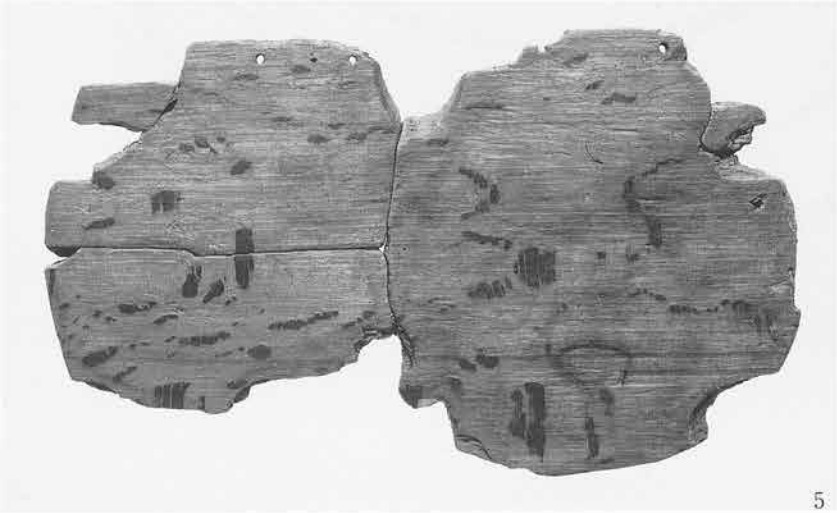


図版八五　出土遺物（第一三一・一三二・一三三図）

2

1

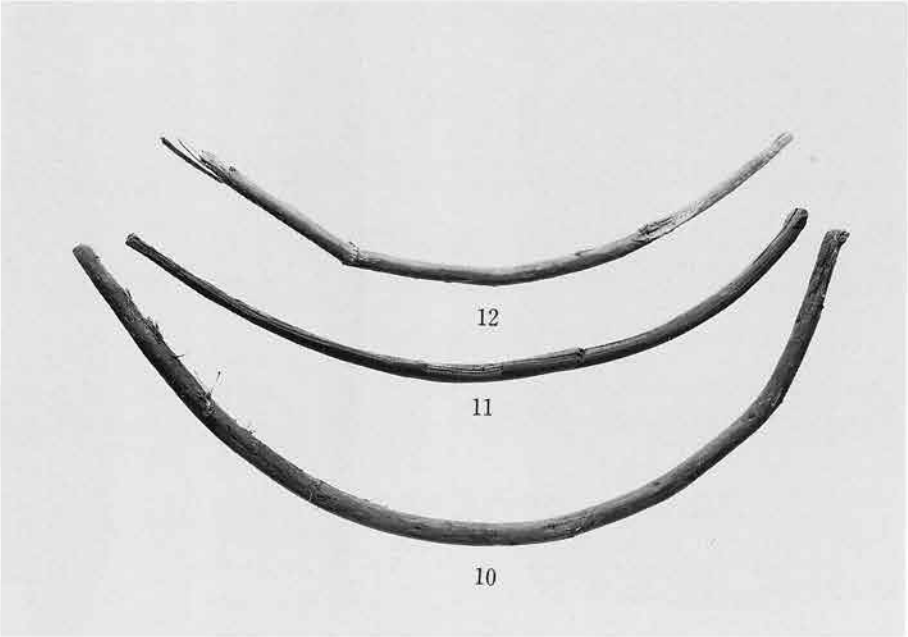
7

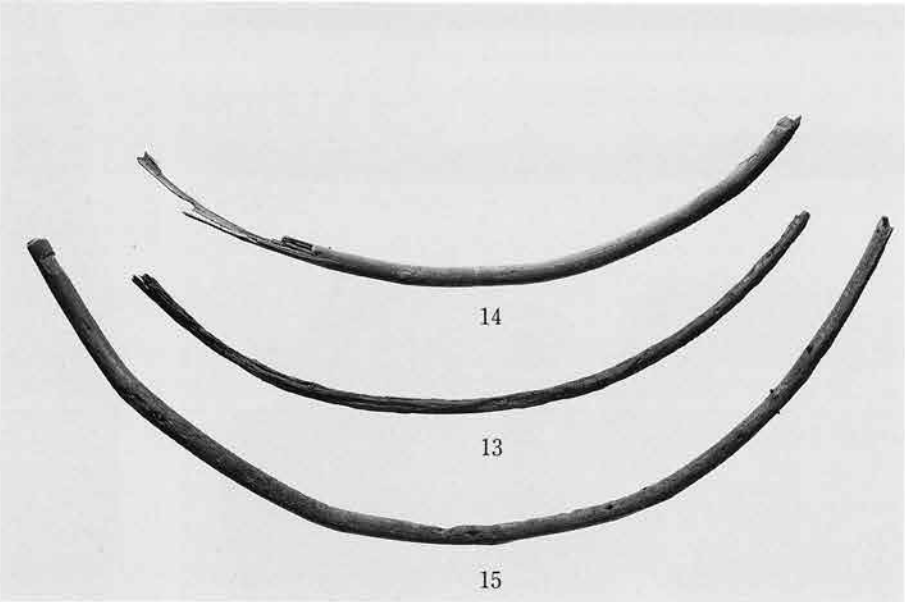


5

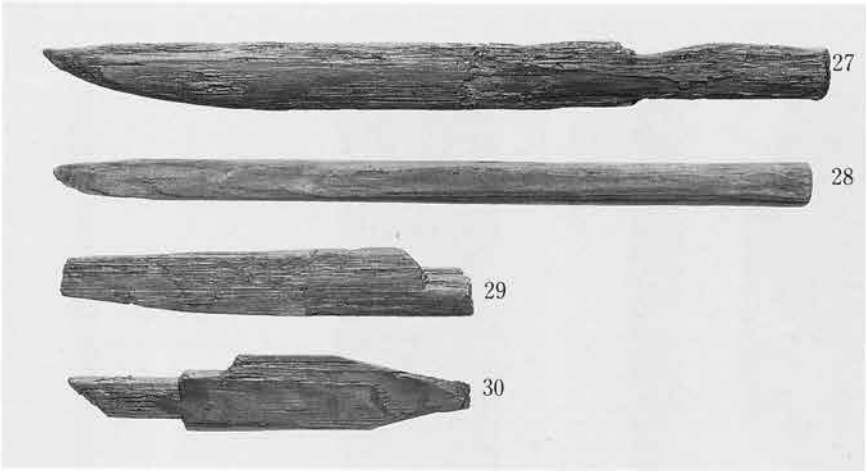
3

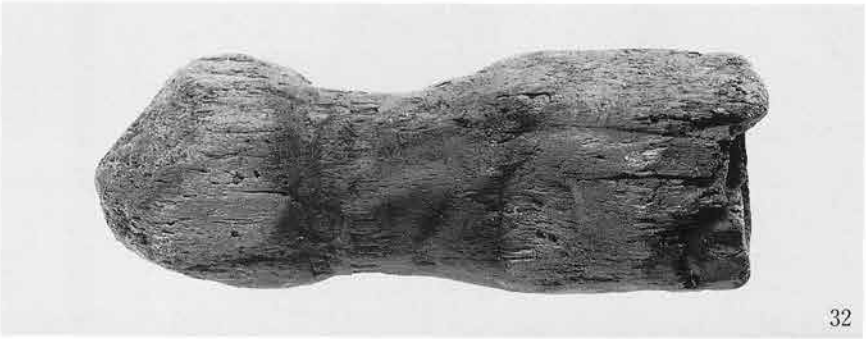
図版八六　出土遺物（第一三四・一三五図）

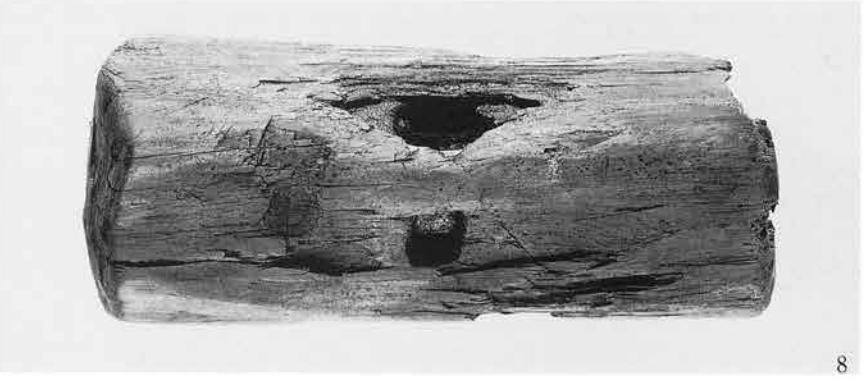




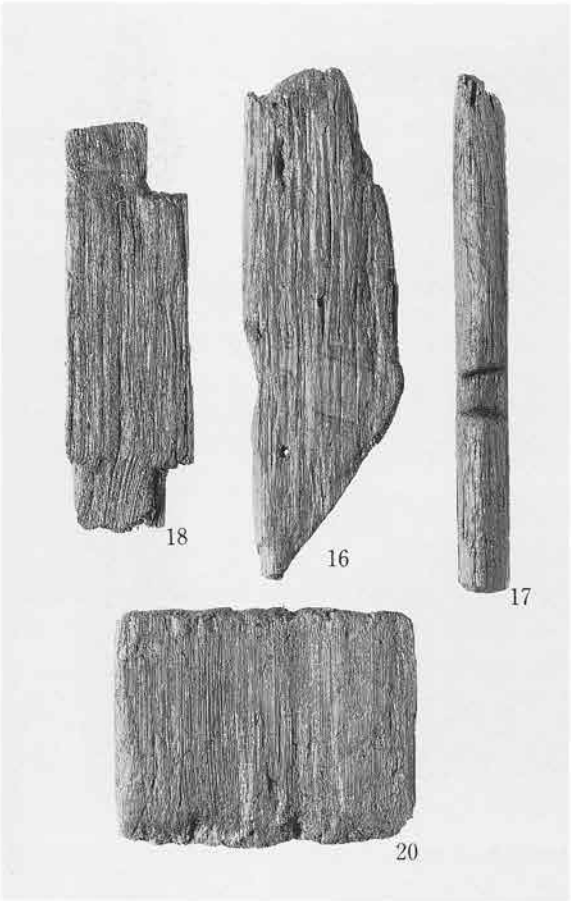
図版八七　出土遺物（第一三二・一三三・一三九図）

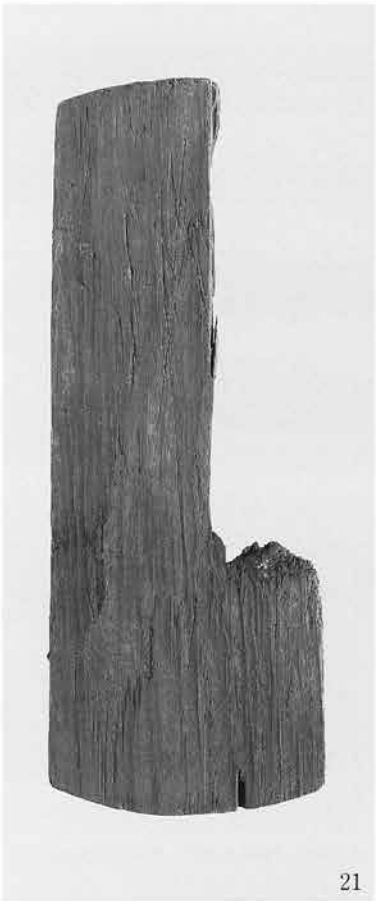


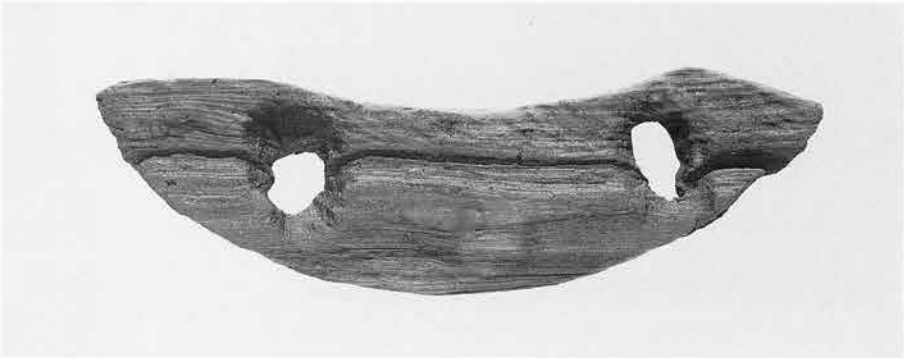




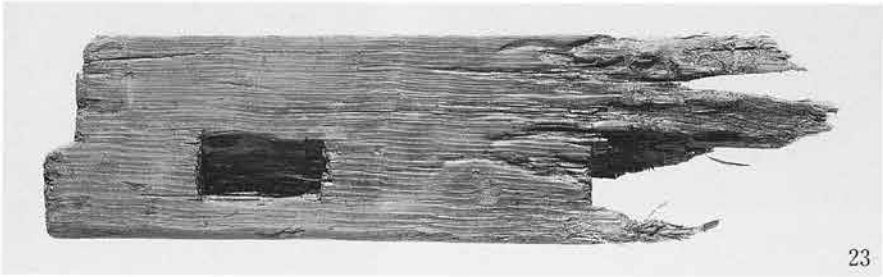
図版八八　出土遺物（第一三六図）

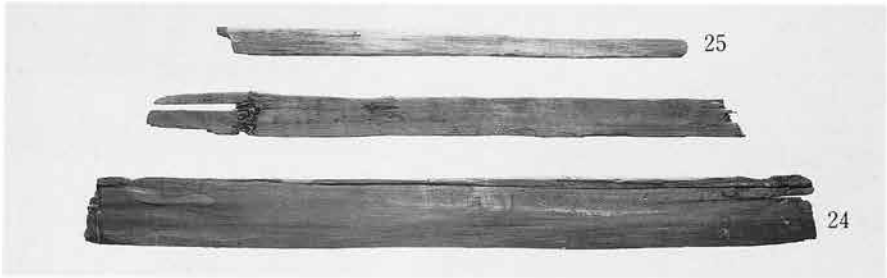


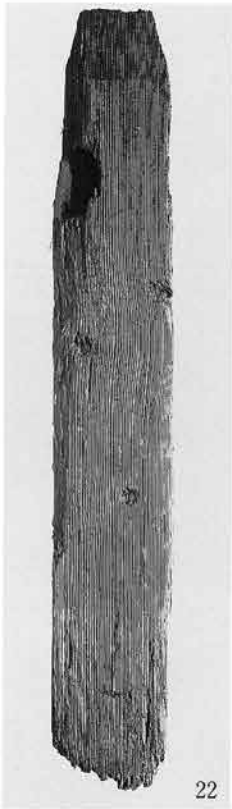


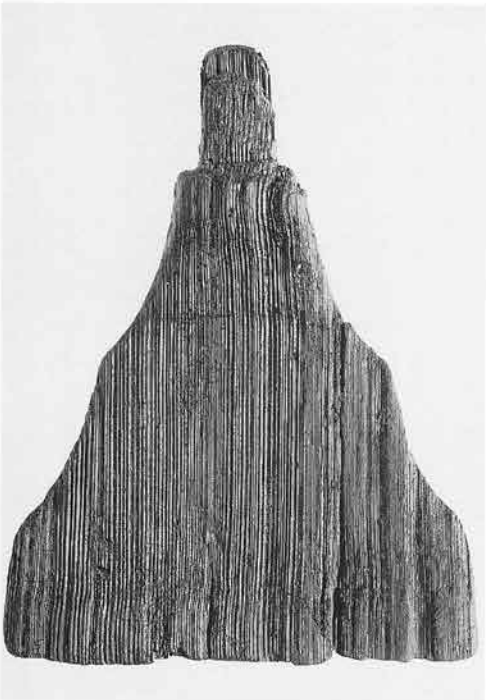


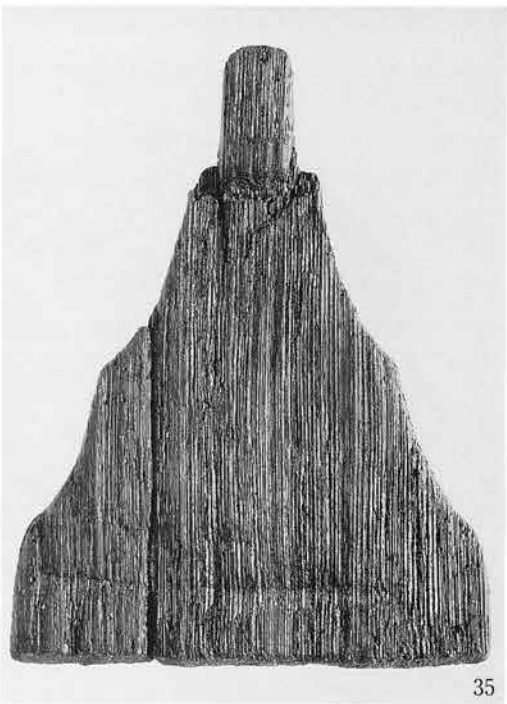
図版八九　出土遺物（第一三七・一三八・一四〇図）



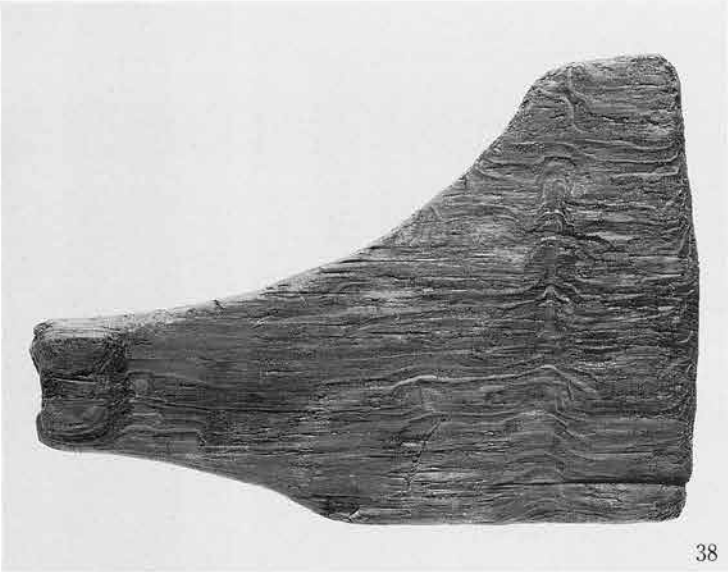




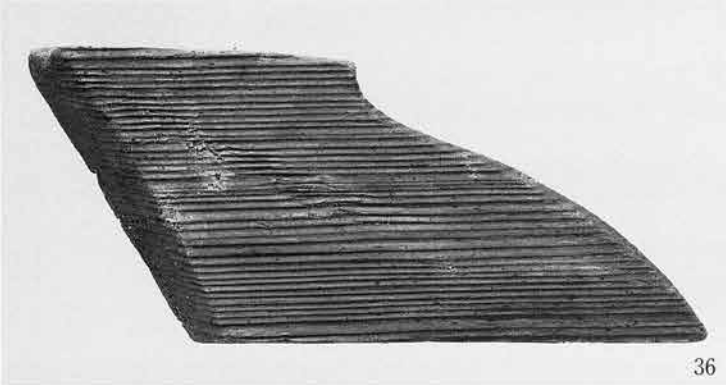




図版九〇　出土遺物（第一三九・一四〇図）


38

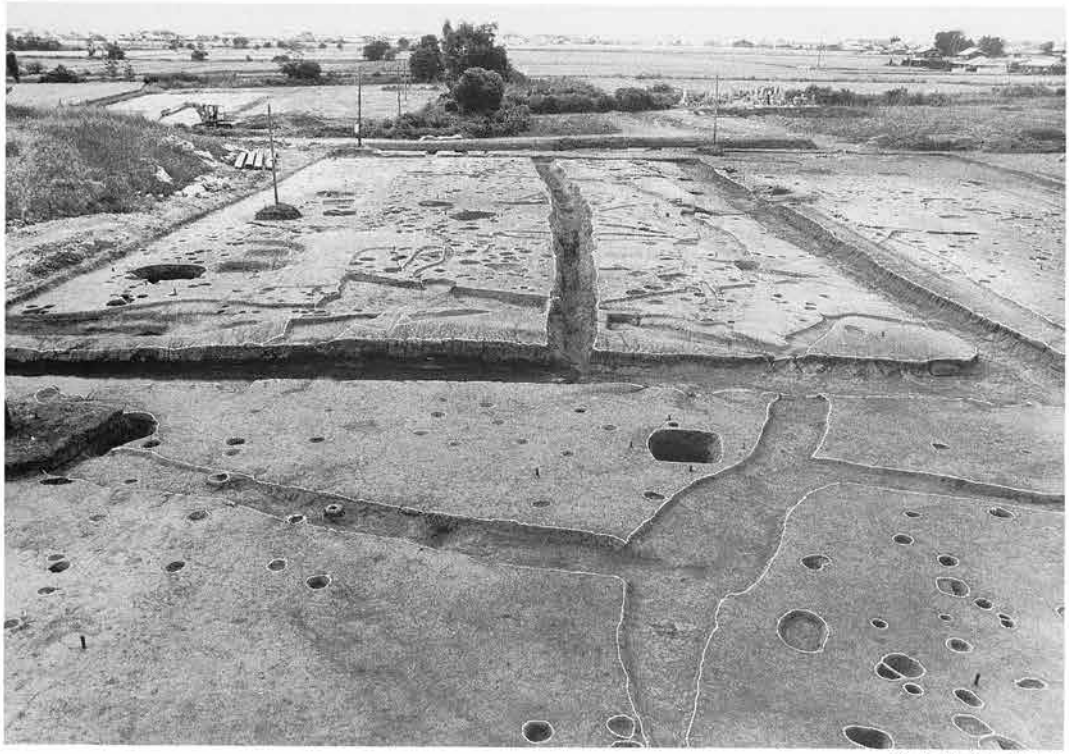
37


36

31

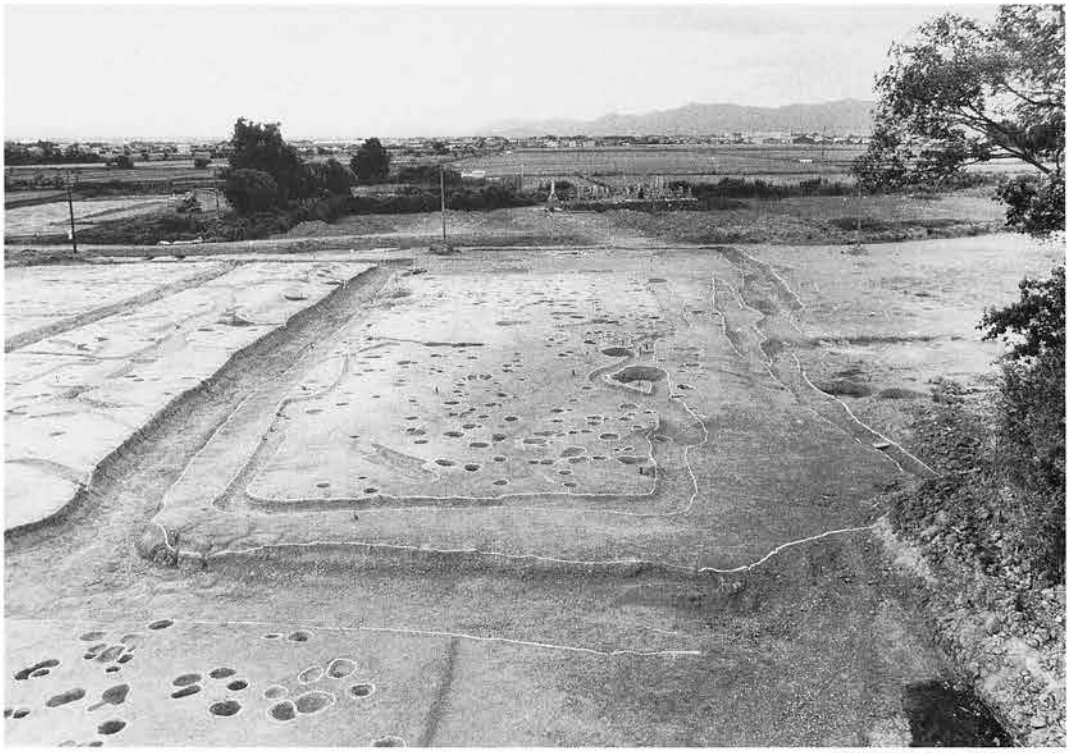
図版九一　第九調査区全景

第九調査区全景



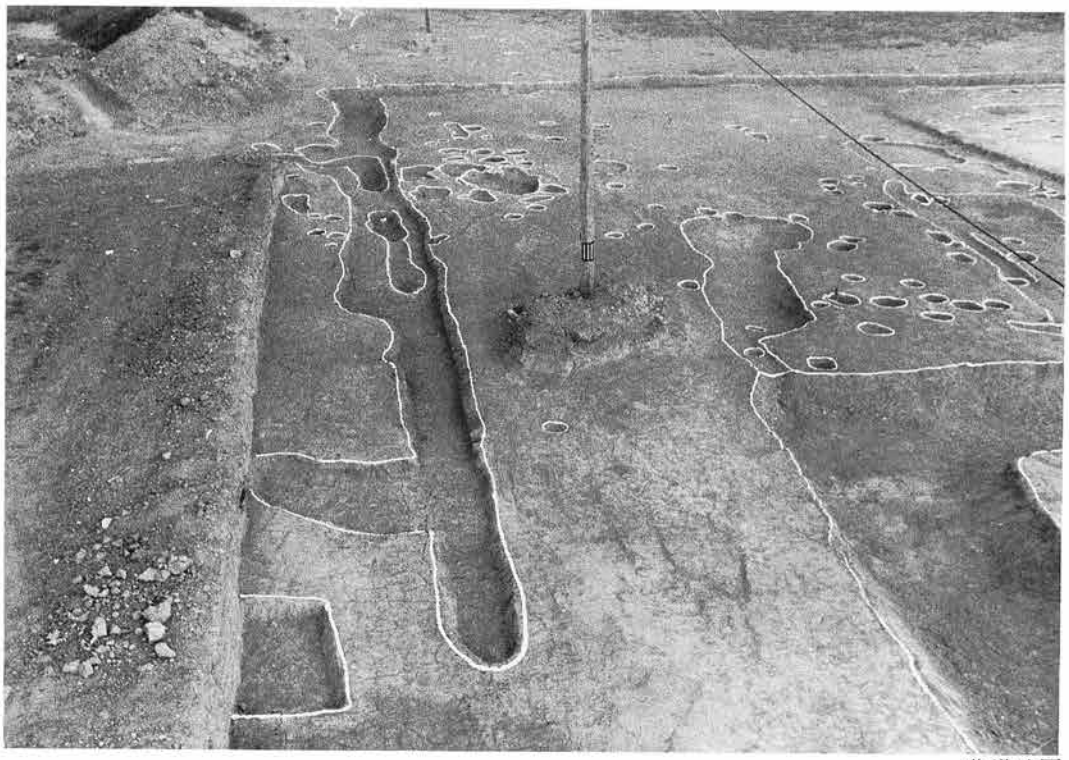
第九調査区全景

第九調査区（南より）



第九調査区（北より）

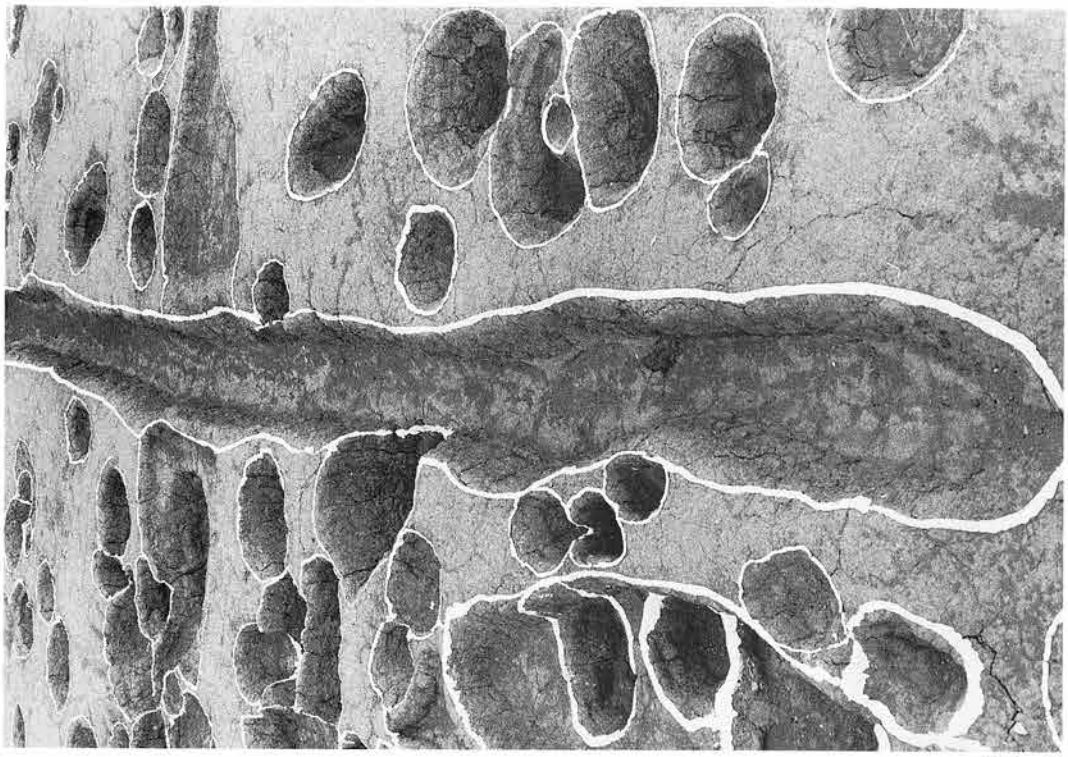
墓道地区



墓道地区

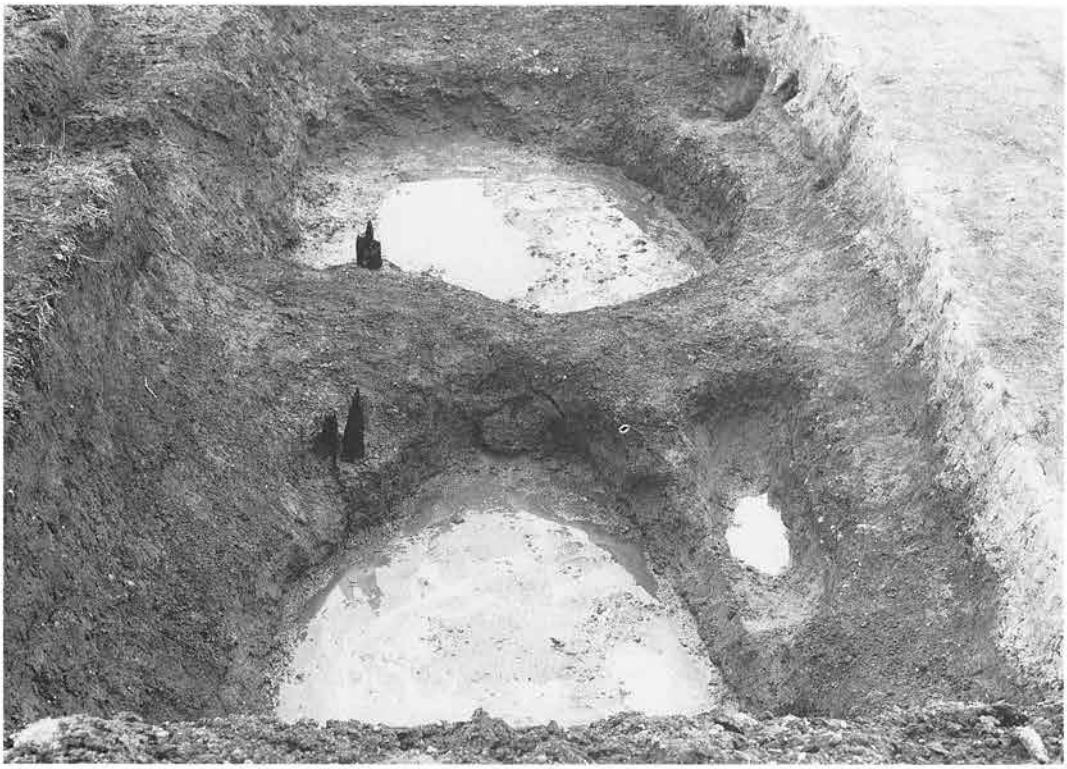
P−1

SK−24,25

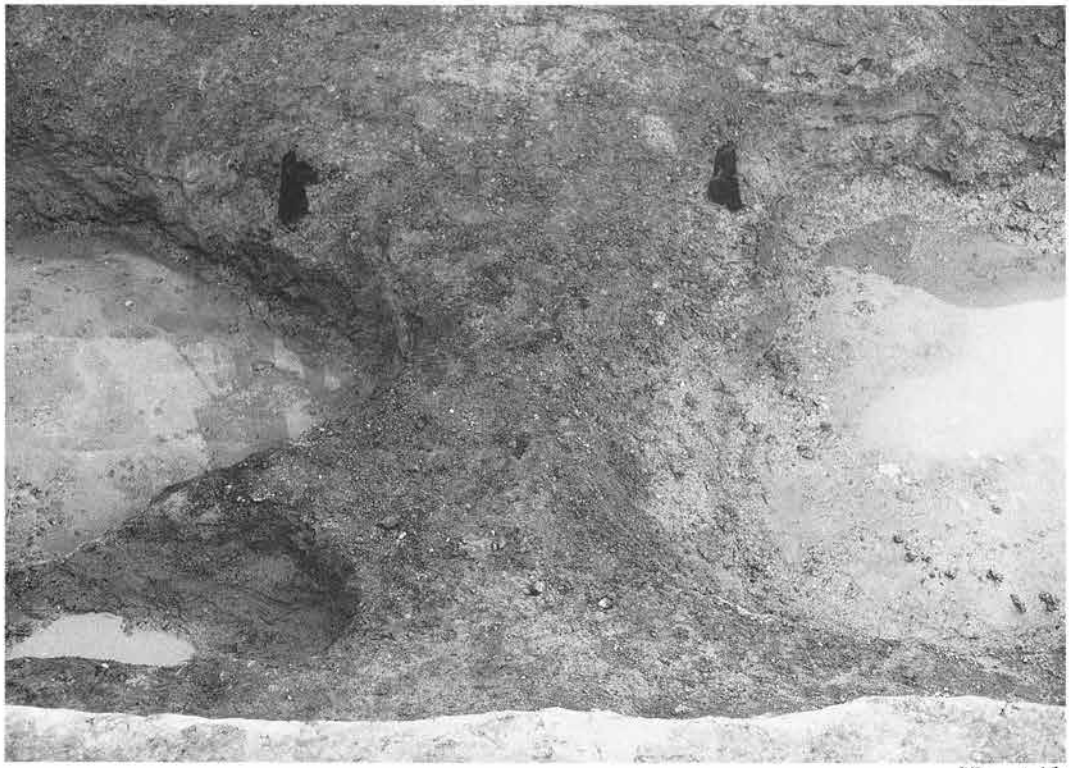


SD－5

SD－16



SD－4 橋

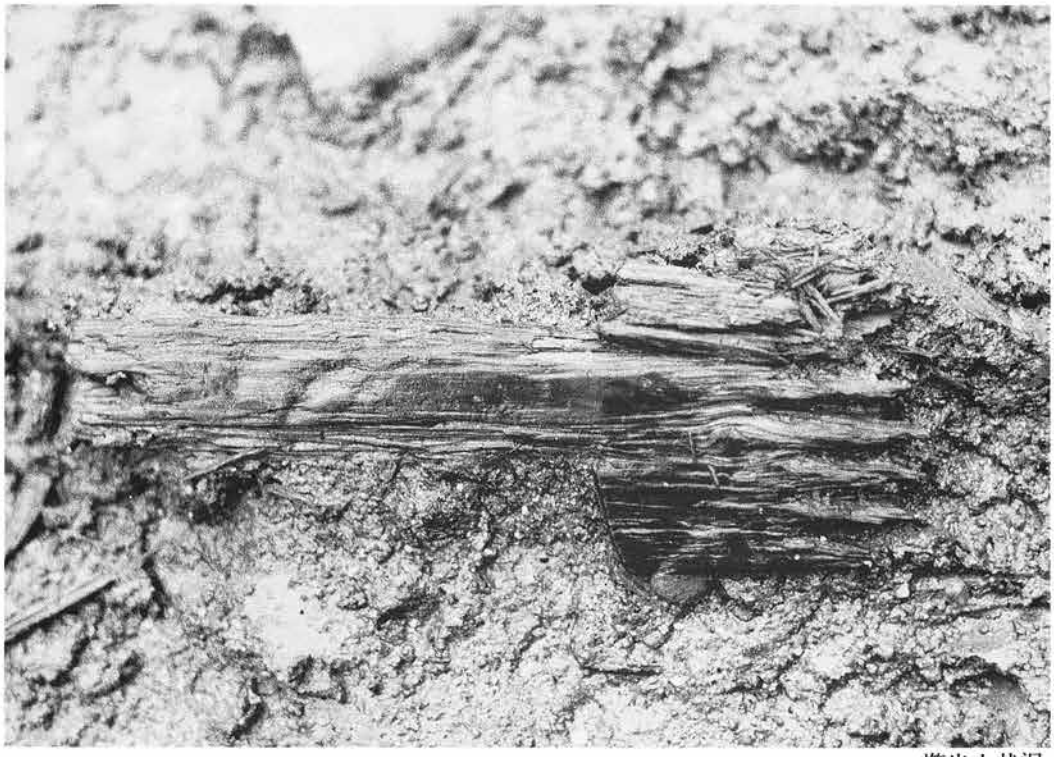


SD－4 橋

P－41

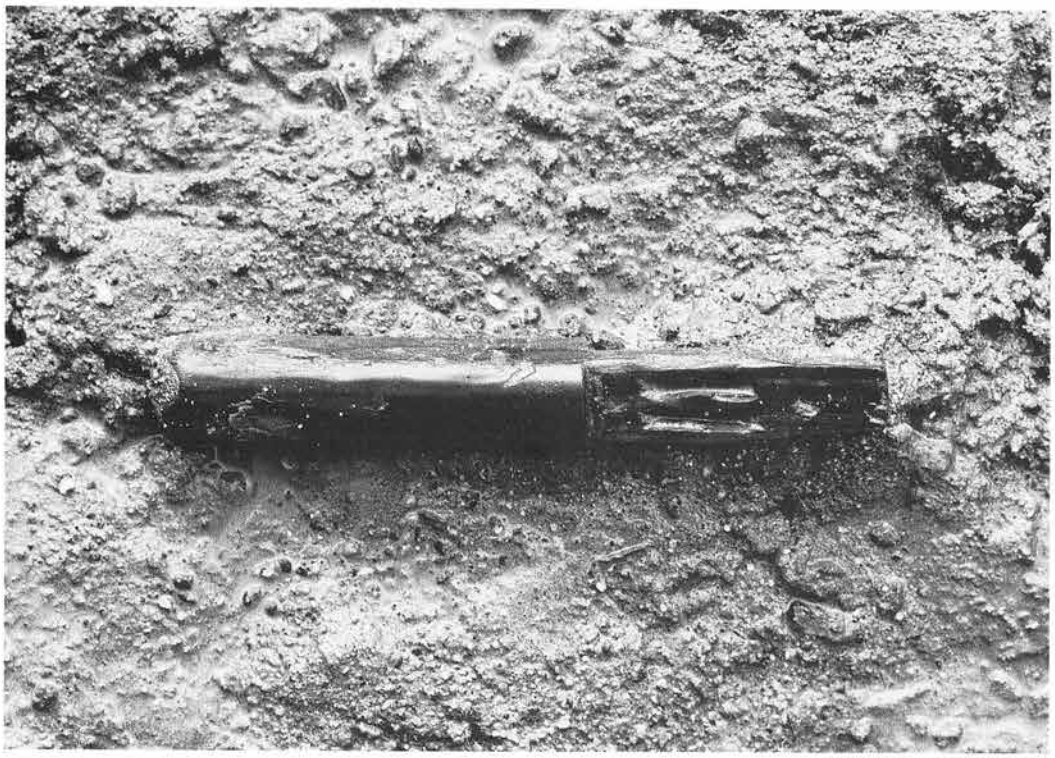
P－41

釜出土状況



櫛出土状況

棒状木製品出土状況



棒状木製品出土状況

SE−7

SE－10

SE－9

SE－13

SE－2

SE－10

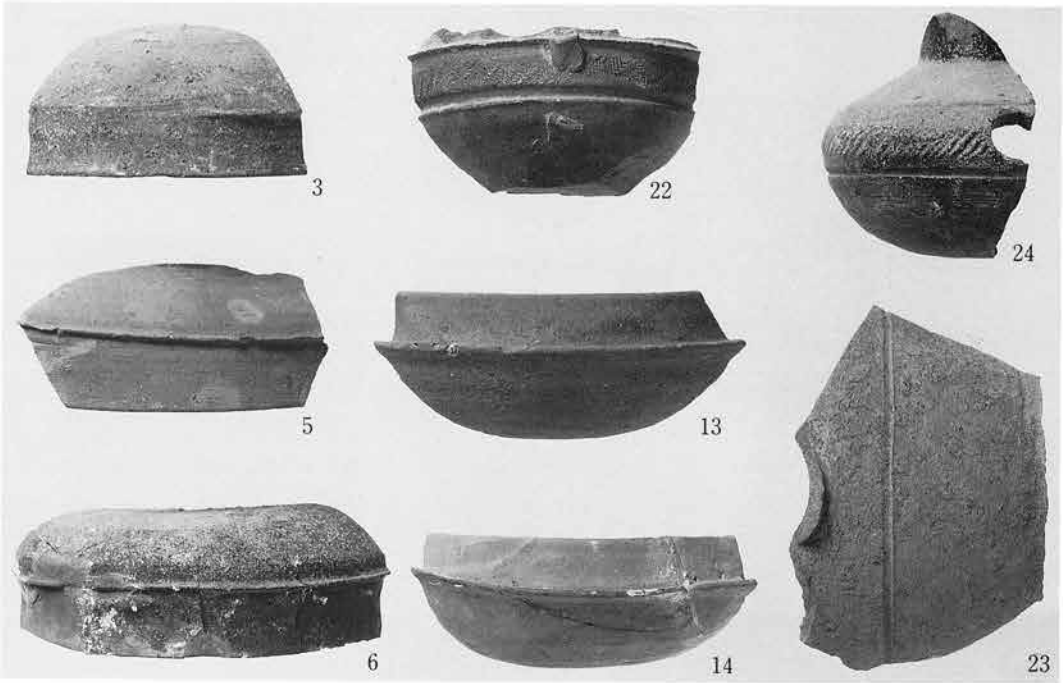
SE－11

8

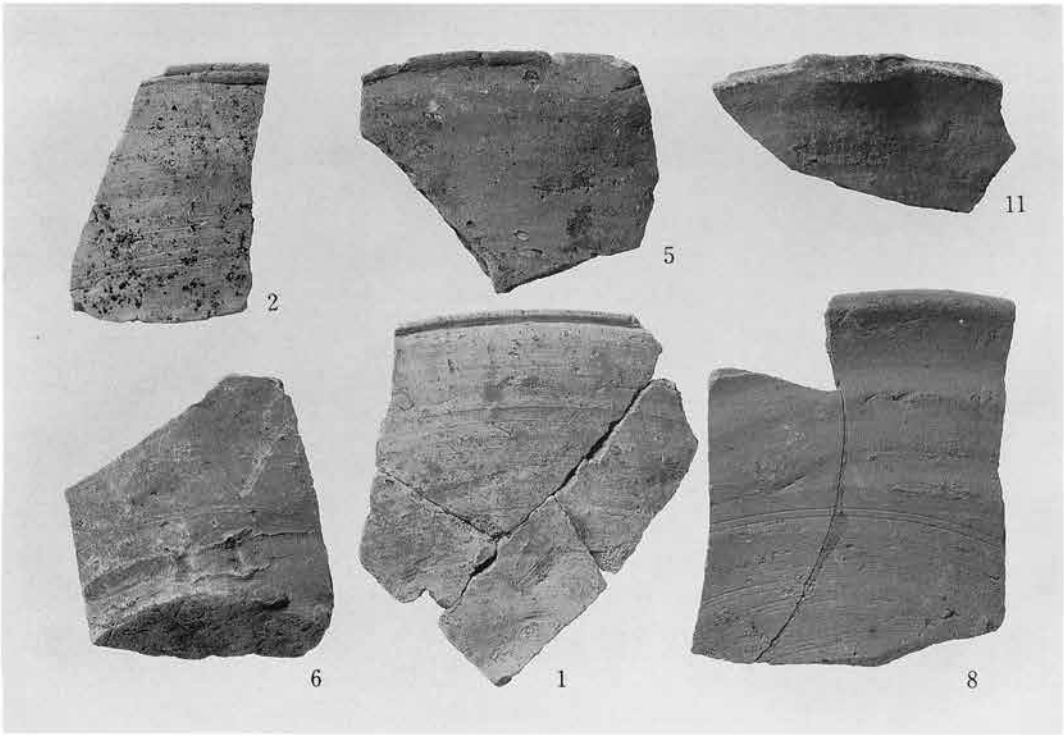
4

25

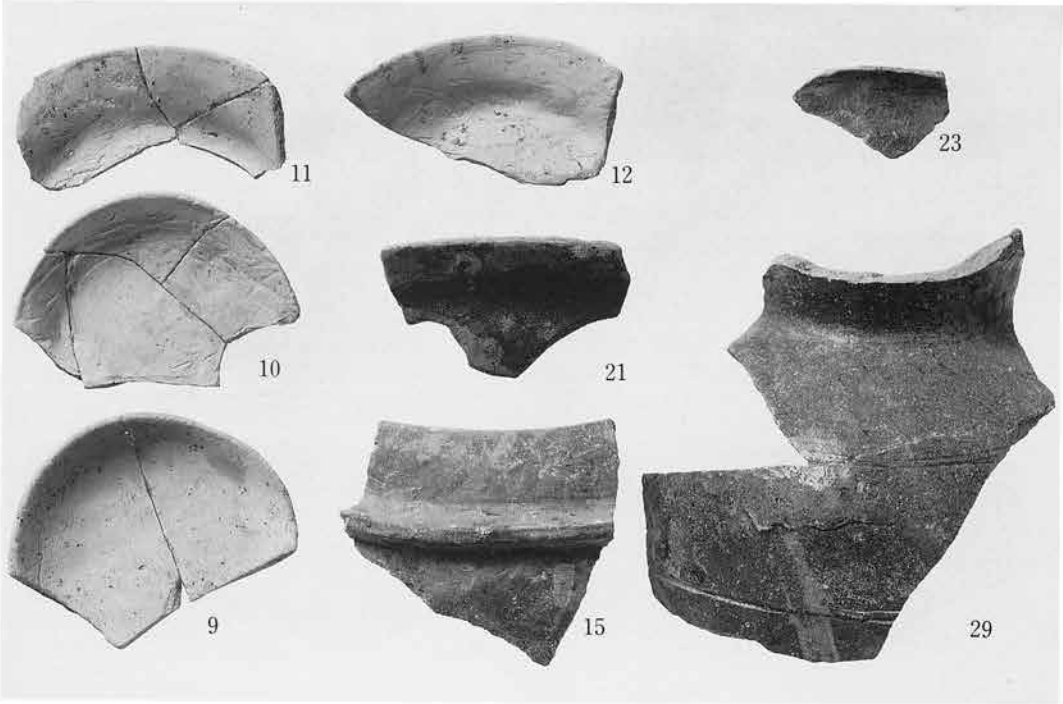
27



図版一〇六　出土遺物（第一五二・一五三図）



図版一〇七　出土遺物（第一八〇図）



図版一〇八　出土遺物（第一八一図）

16

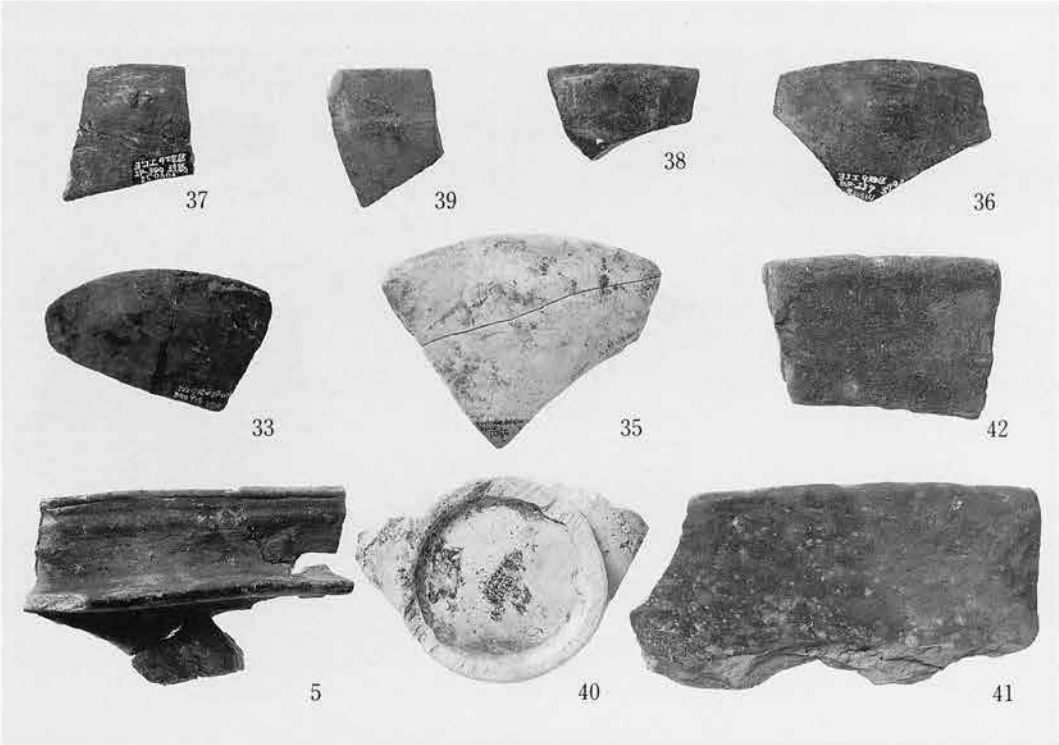
32

8

6

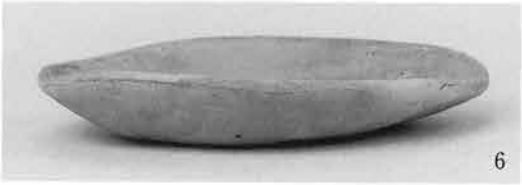
21

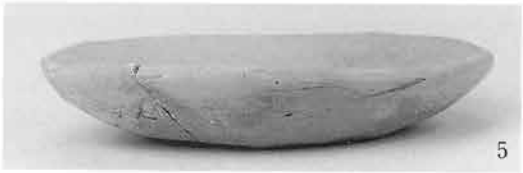
34



図版一〇九　出土遺物（第一五四図）

3


6


5

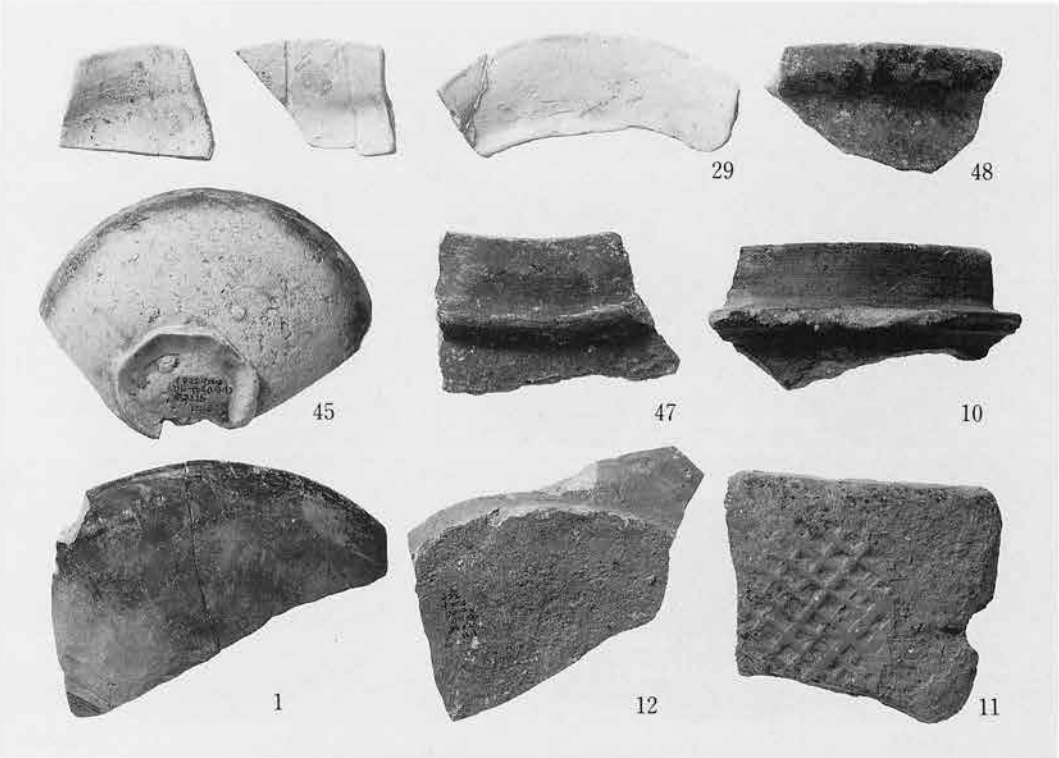
4

37

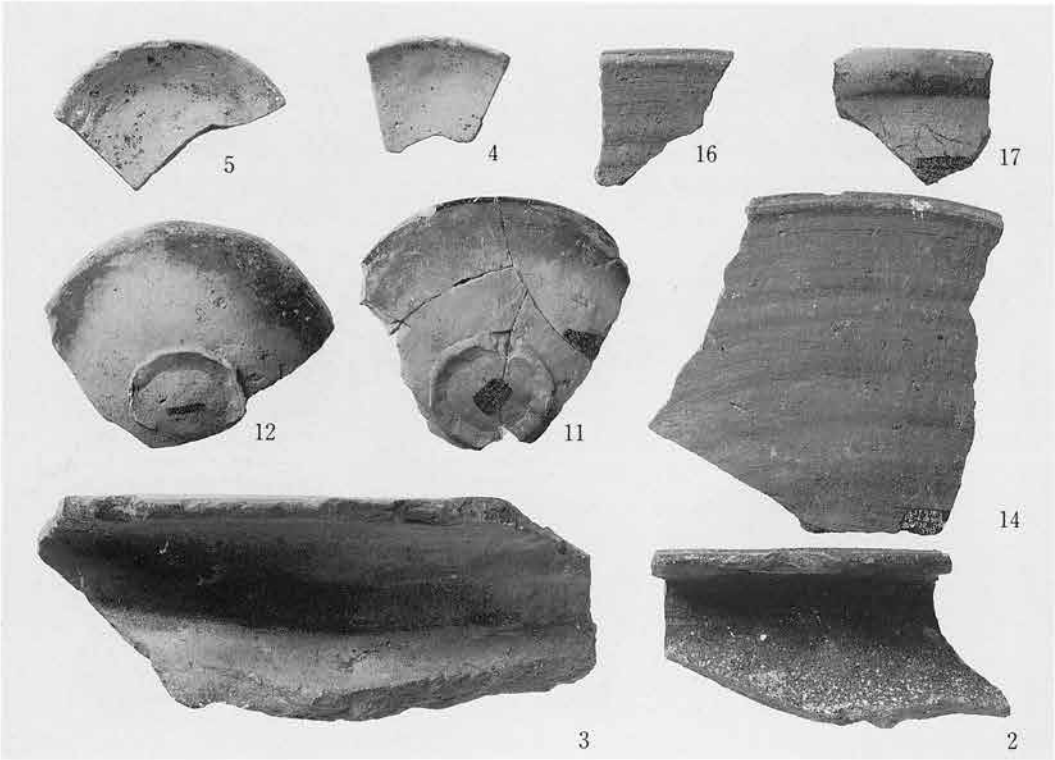
23

41

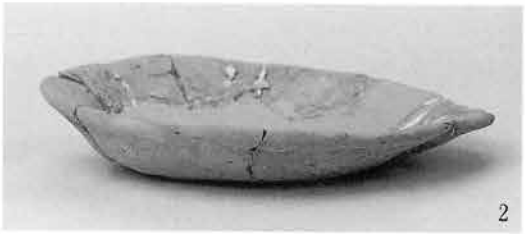
36



図版一一〇　出土遺物（第一五五・一五六図）



1


2

15

10

20

19

5

16

11

18

40

7

47

51

48

図版一一二　出土遺物（第一五八・一五九図）

29

18

17

25

23

11

16

41

27

10

9

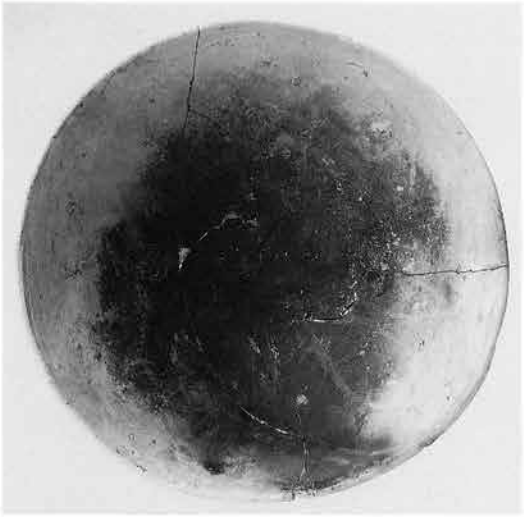
4

18

16

24

12



6

14

8

7

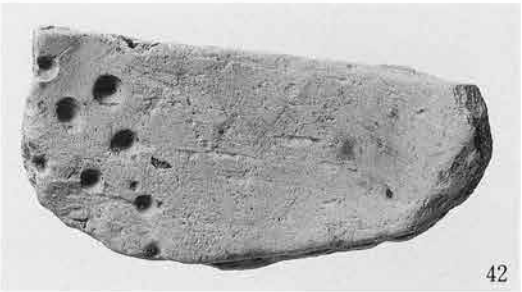
図版一一四　出土遺物（第一五九・一六〇図）

図版一一五　出土遺物（第一六〇・一六一図）

34

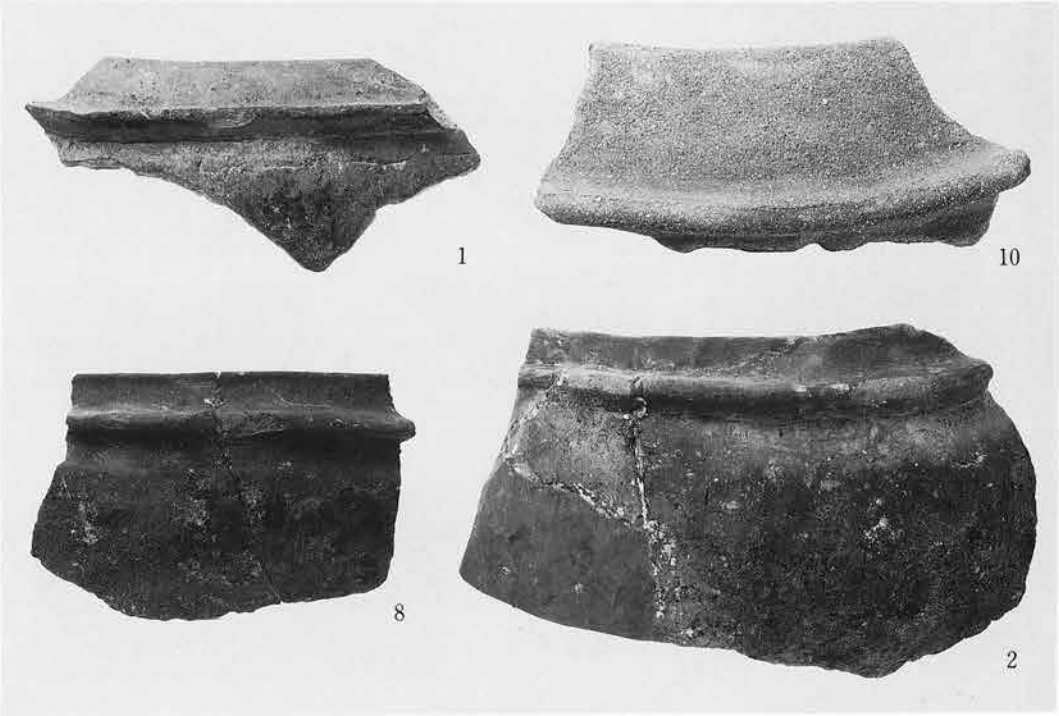
31

41

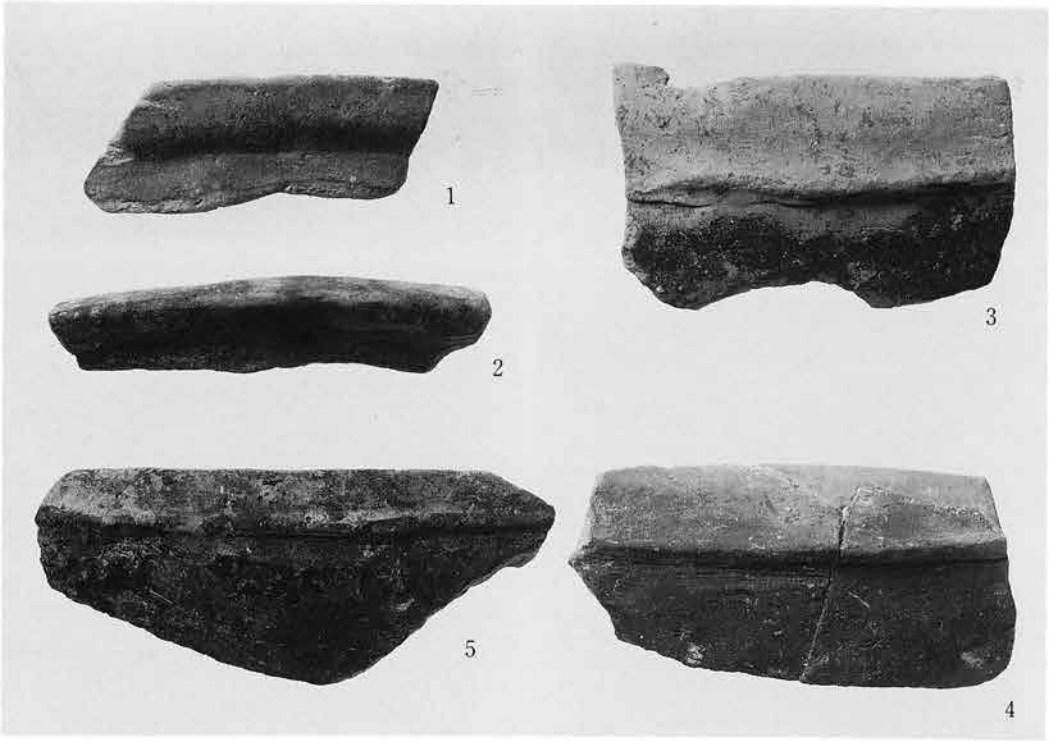

42

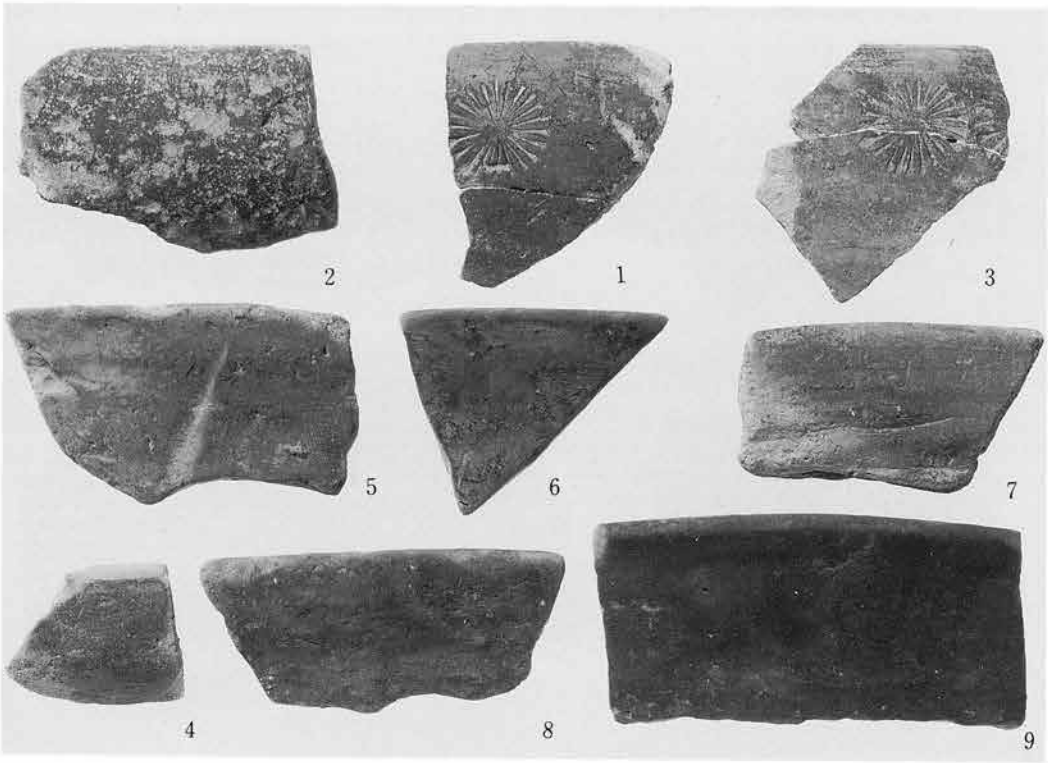
6

9

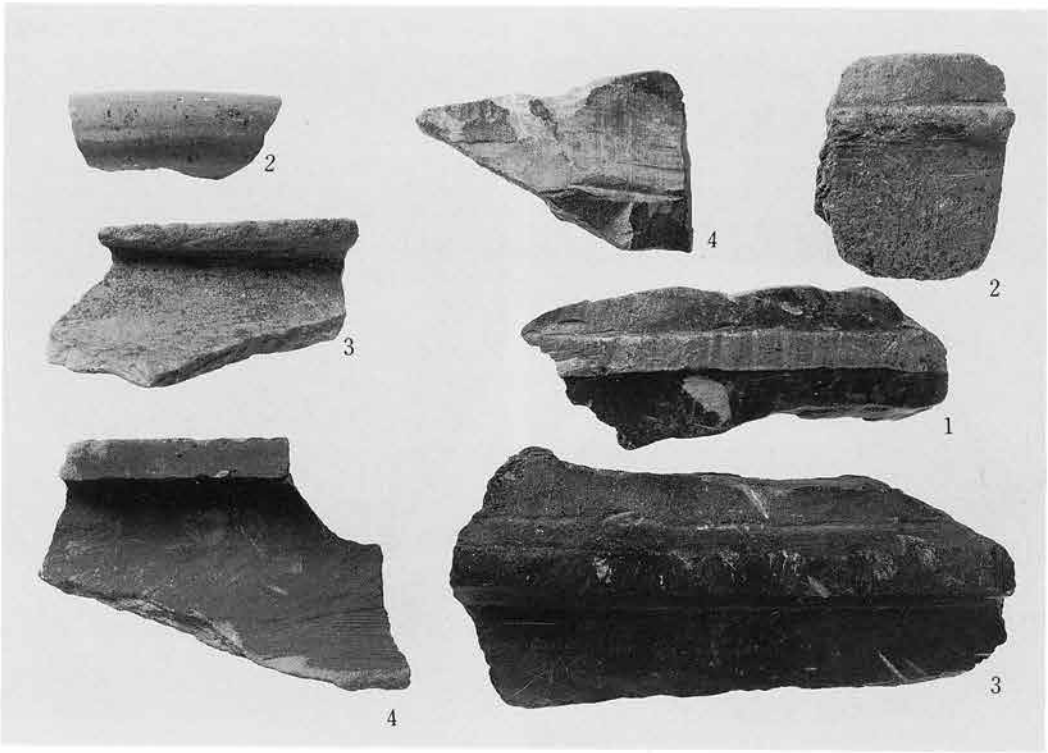

1
10
8
2

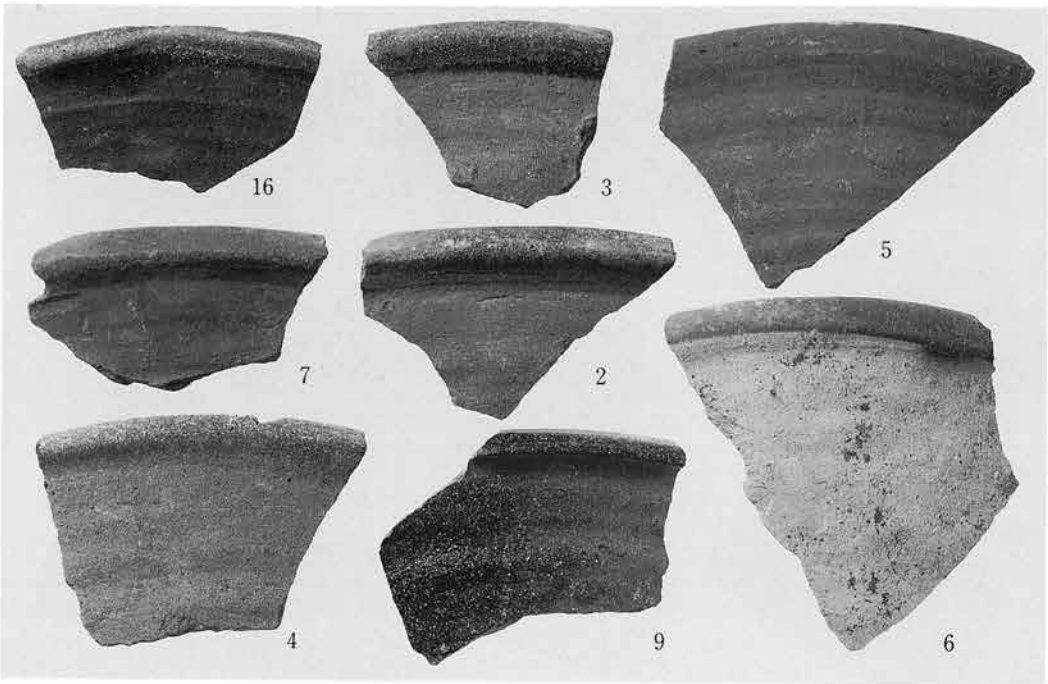
図版一一六　出土遺物（第一六二・一六三図）



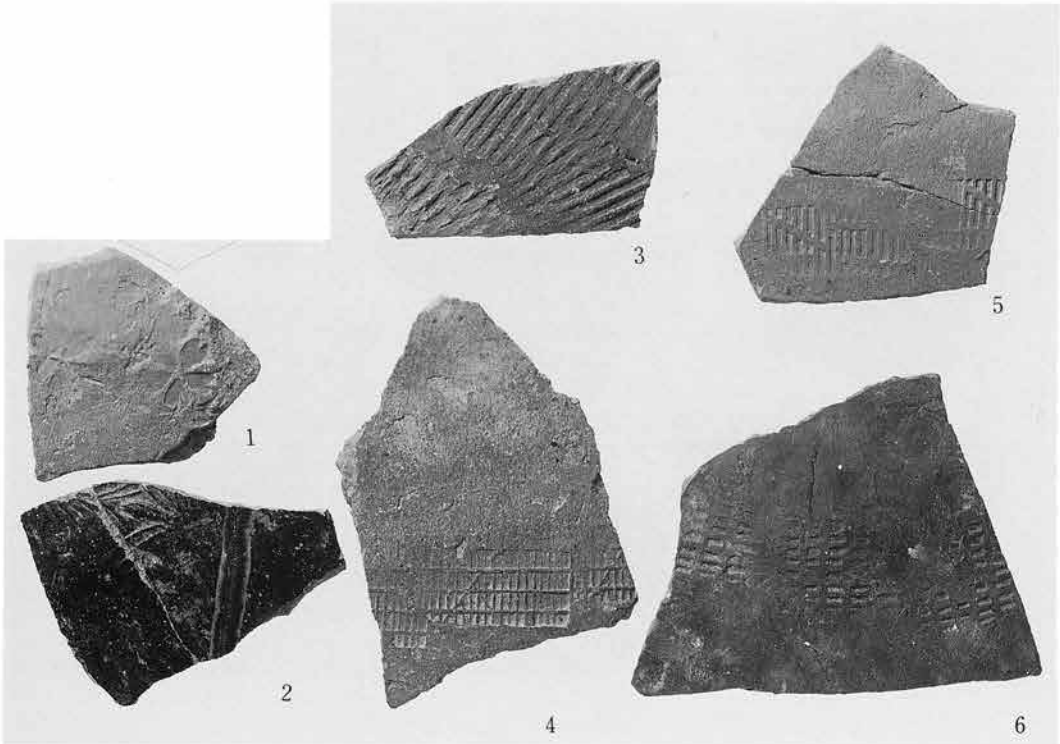


図版一一七　出土遺物（第一六四・一六五・一七三図）

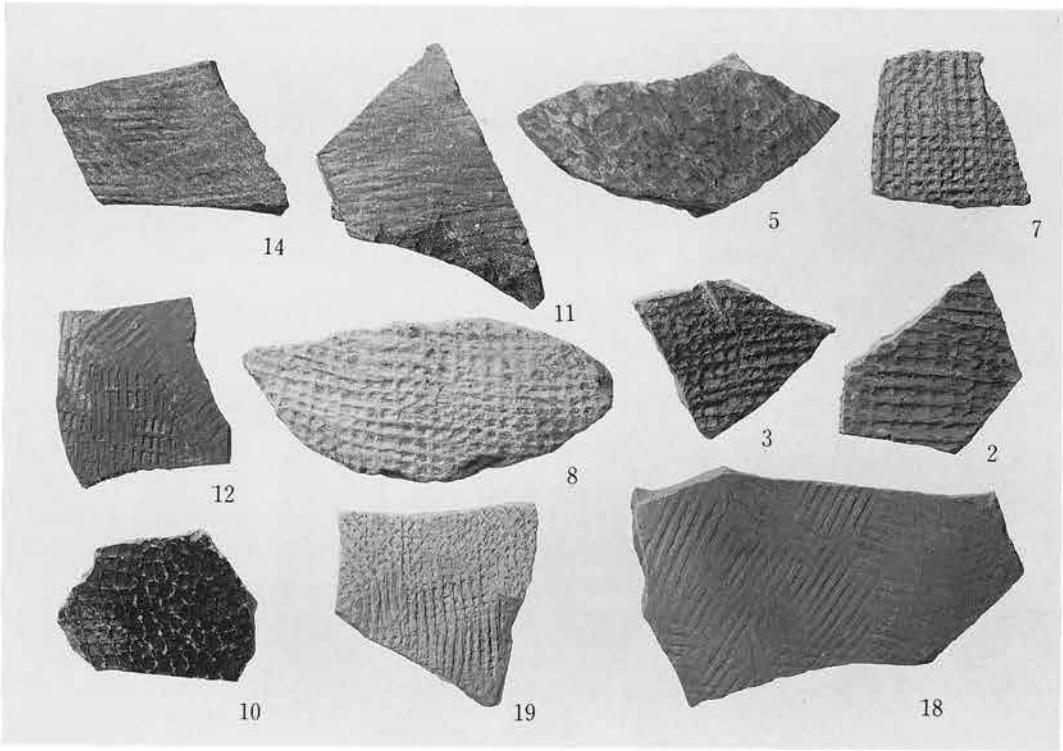


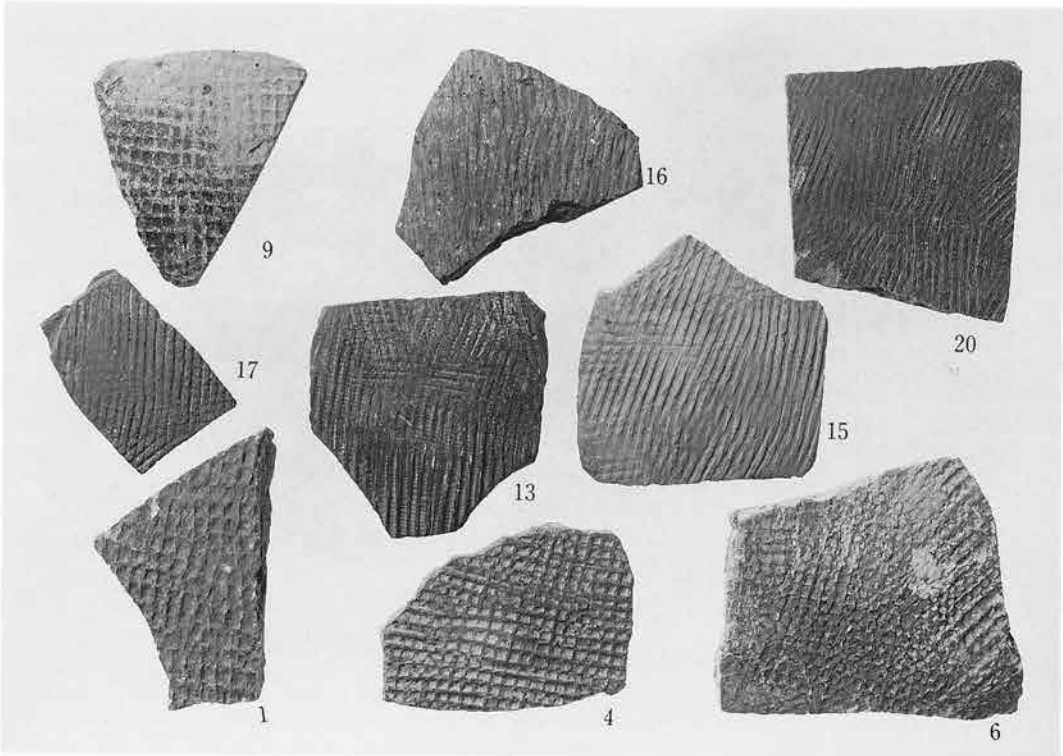


図版一一八　出土遺物（第一六四・一六八・一六九・一七〇図）

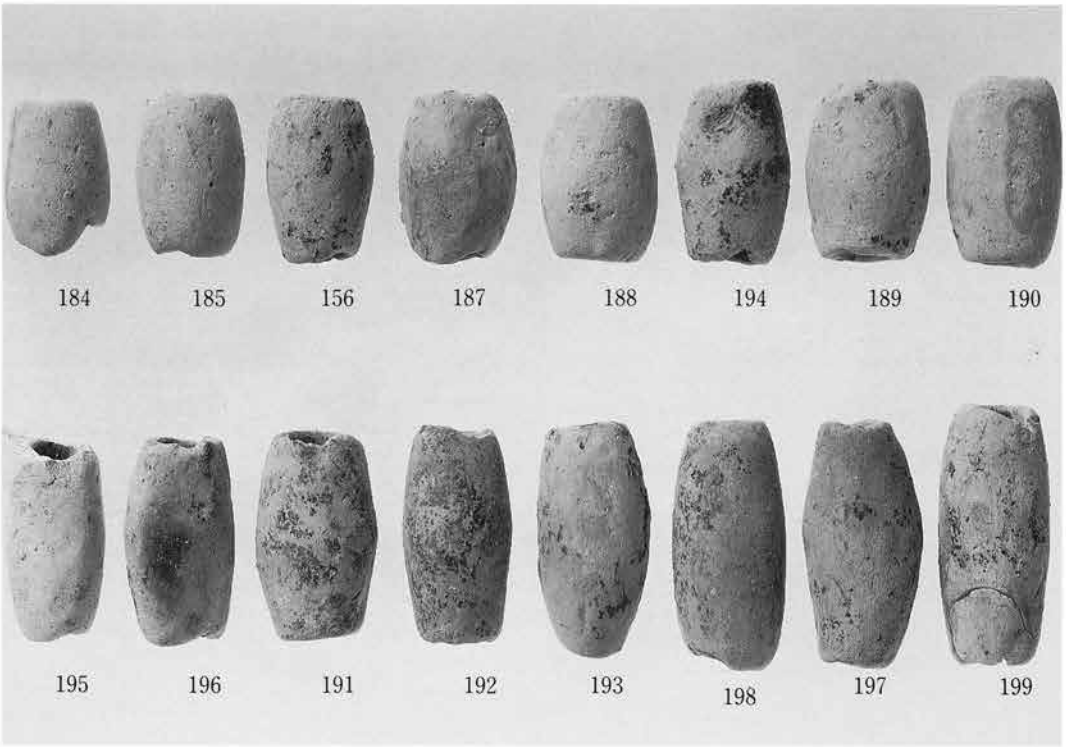


図版一一九　出土遺物（第一六六図）





図版一二〇　出土遺物（第一八二・一八三・一八四図）



図版一二一　出土遺物（第一七二・一七四図）

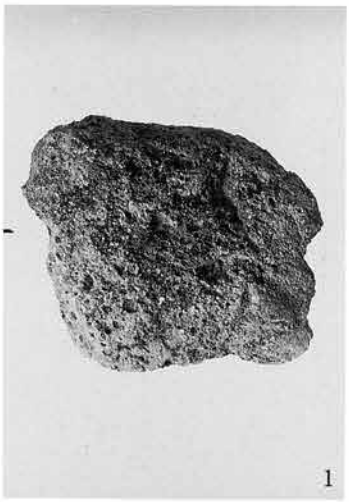
1

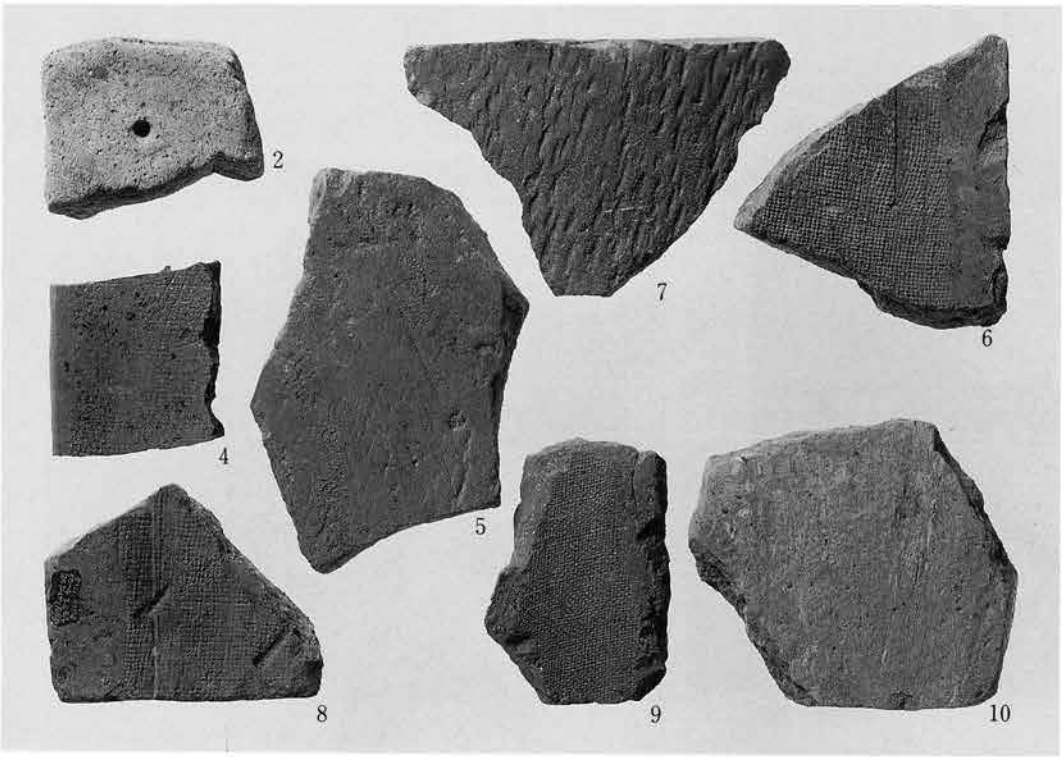
2

3

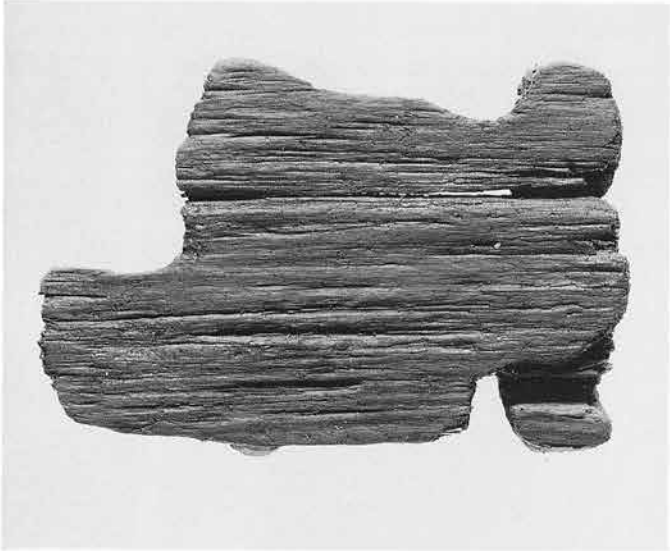
4

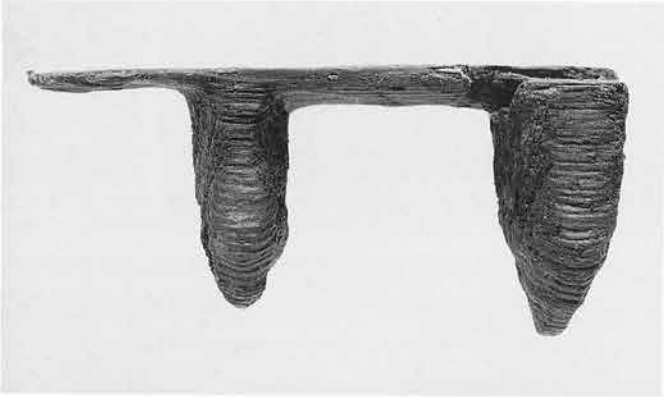
3


1

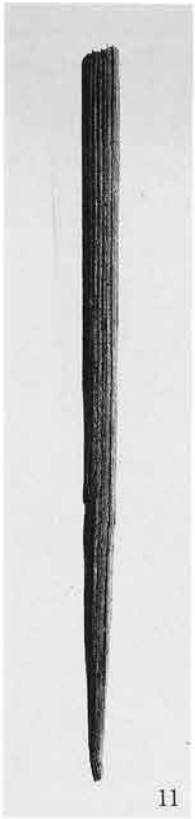


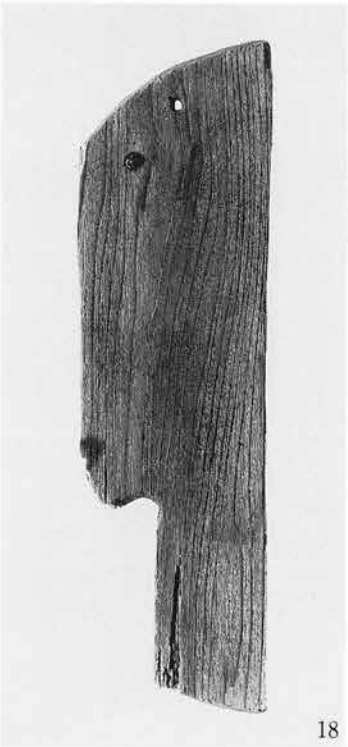
図版一二二　出土遺物（第一七五・一七六図）

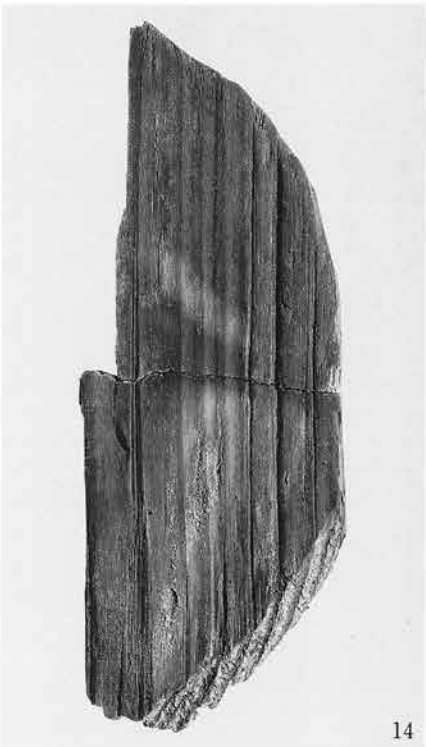


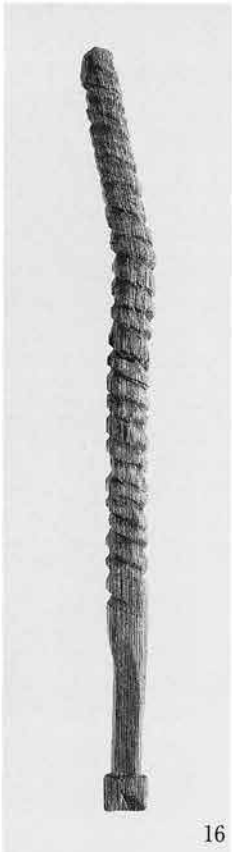


図版一二三　出土遺物（第一七六図）

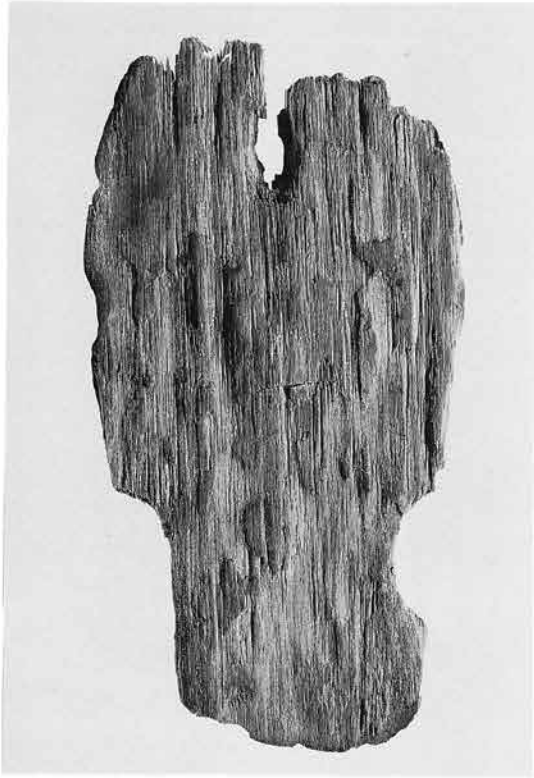




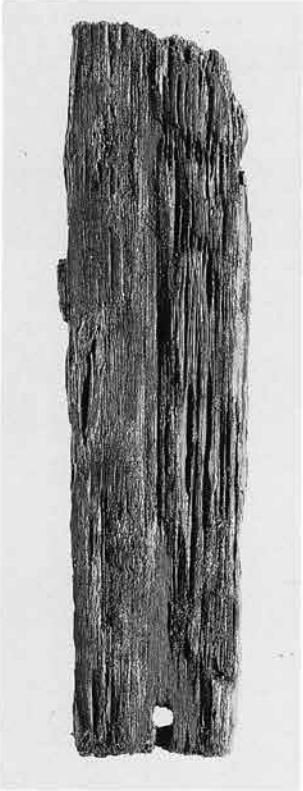


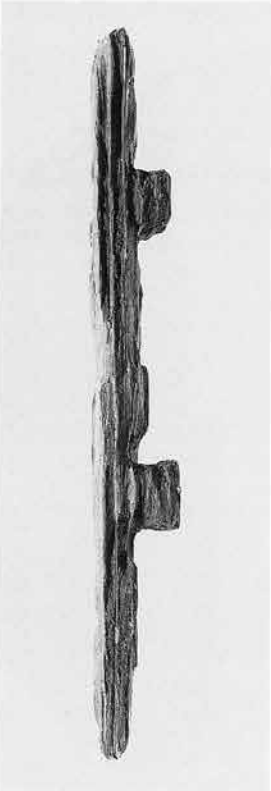


図版一二四　出土遺物（第一七五図）



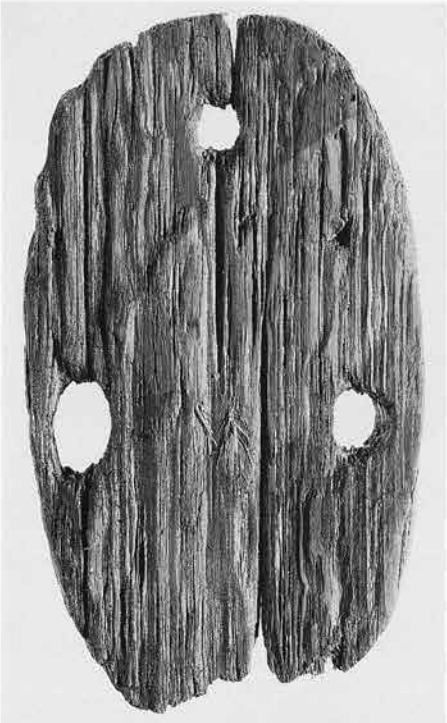
1

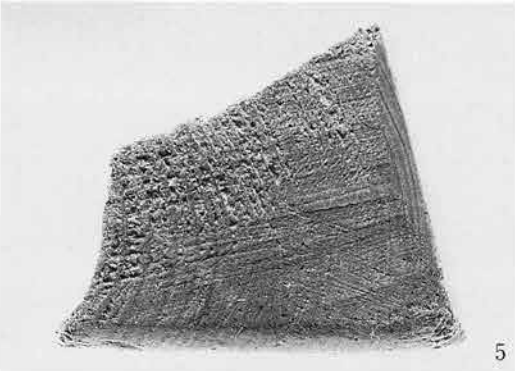


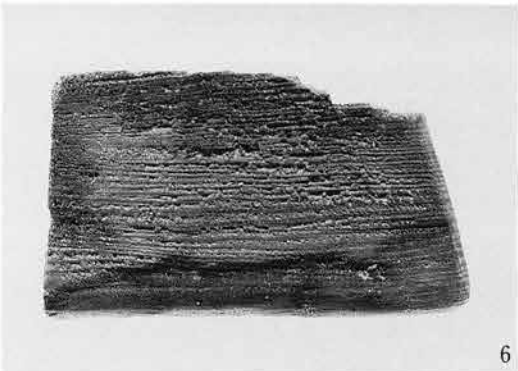


2

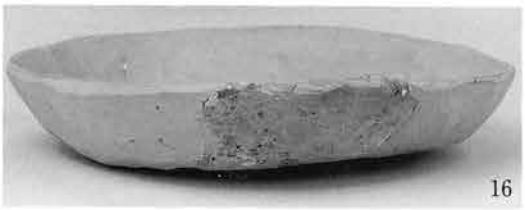
図版一二五　出土遺物（第一七五・一七六図）







図版一二六　出土遺物（第一七七・一七八図）



30

74

26

18

37

38

13

14

10

昭和62年３月

横江遺跡発掘調査報告書Ⅰ

編集発行　滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目１－１
電話 0775-24-1121（内線2536）
（財）滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町１７３２－２
電話 0775-48-9780・１

印刷製本　㈱図書印刷 同朋舎
京都市下京区中堂寺鍵田町2
Tel(075)361-9121